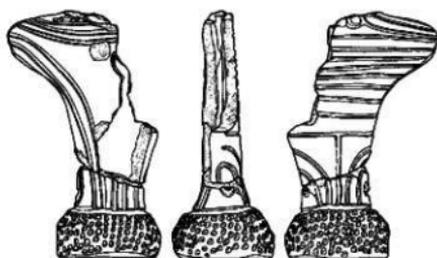


阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 3

高木・北ノ脇遺跡

[第2分冊]



2003年3月

福島県教育委員会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局福島工事事務所

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 3

たかぎ きたのわき
高木・北ノ脇遺跡
[第2分冊]

目 次

第1編 高木遺跡

第2章 遺構と遺物	1		
第8節 遺構外出土遺物	1		
層序と分布(1)	土器(4)	土製品(145)	石器・石製品(162)

第2編 北ノ脇遺跡

第1章 調査経過	183		
第1節 調査経過	183		
第2節 調査方法	184		
第3節 概 要	186		
第4節 基本土層	186		
第2章 遺構と遺物	189		
第1節 土 坑	189		
2号土坑(189)			
第2節 遺構外出土遺物	190		
層序と分布(190)	土器(191)	土製品(198)	石器・石製品(198)

第3編 ま と め

第1章 縄文時代の遺物について	201
第1節 土 器	201
第2節 土 製 品	222
第2章 縄文時代の遺構	226
第1節 住 居 跡	226
第2節 その他の遺構	238
第3節 集落の変遷	240
付 編 高木遺跡出土炭化材・動物遺存体・炭化種子樹種の同定	485

挿図目次

第1編 高木遺跡

[挿 図]

図424 グリッド別石器出土点数	2	図477 遺構外出土遺物	(52)	61
図425 グリッド別石器出土点数	3	図478 遺構外出土遺物	(53)	62
図426 遺構外出土遺物 (1)	5	図479 遺構外出土遺物	(54)	63
図427 遺構外出土遺物 (2)	7	図480 遺構外出土遺物	(55)	64
図428 遺構外出土遺物 (3)	8	図481 遺構外出土遺物	(56)	65
図429 遺構外出土遺物 (4)	9	図482 遺構外出土遺物	(57)	66
図430 遺構外出土遺物 (5)	10	図483 遺構外出土遺物	(58)	67
図431 遺構外出土遺物 (6)	11	図484 遺構外出土遺物	(59)	69
図432 遺構外出土遺物 (7)	12	図485 遺構外出土遺物	(60)	70
図433 遺構外出土遺物 (8)	13	図486 遺構外出土遺物	(61)	71
図434 遺構外出土遺物 (9)	14	図487 遺構外出土遺物	(62)	72
図435 遺構外出土遺物 (10)	15	図488 遺構外出土遺物	(63)	73
図436 遺構外出土遺物 (11)	16	図489 遺構外出土遺物	(64)	74
図437 遺構外出土遺物 (12)	18	図490 遺構外出土遺物	(65)	75
図438 遺構外出土遺物 (13)	19	図491 遺構外出土遺物	(66)	76
図439 遺構外出土遺物 (14)	20	図492 遺構外出土遺物	(67)	77
図440 遺構外出土遺物 (15)	21	図493 遺構外出土遺物	(68)	79
図441 遺構外出土遺物 (16)	22	図494 遺構外出土遺物	(69)	80
図442 遺構外出土遺物 (17)	23	図495 遺構外出土遺物	(70)	81
図443 遺構外出土遺物 (18)	24	図496 遺構外出土遺物	(71)	82
図444 遺構外出土遺物 (19)	25	図497 遺構外出土遺物	(72)	83
図445 遺構外出土遺物 (20)	26	図498 遺構外出土遺物	(73)	84
図446 遺構外出土遺物 (21)	27	図499 遺構外出土遺物	(74)	85
図447 遺構外出土遺物 (22)	28	図500 遺構外出土遺物	(75)	87
図448 遺構外出土遺物 (23)	29	図501 遺構外出土遺物	(76)	88
図449 遺構外出土遺物 (24)	30	図502 遺構外出土遺物	(77)	89
図450 遺構外出土遺物 (25)	31	図503 遺構外出土遺物	(78)	90
図451 遺構外出土遺物 (26)	32	図504 遺構外出土遺物	(79)	91
図452 遺構外出土遺物 (27)	33	図505 遺構外出土遺物	(80)	92
図453 遺構外出土遺物 (28)	34	図506 遺構外出土遺物	(81)	93
図454 遺構外出土遺物 (29)	35	図507 遺構外出土遺物	(82)	94
図455 遺構外出土遺物 (30)	36	図508 遺構外出土遺物	(83)	95
図456 遺構外出土遺物 (31)	38	図509 遺構外出土遺物	(84)	96
図457 遺構外出土遺物 (32)	41	図510 遺構外出土遺物	(85)	96
図458 遺構外出土遺物 (33)	42	図511 遺構外出土遺物	(86)	99
図459 遺構外出土遺物 (34)	43	図512 遺構外出土遺物	(87)	100
図460 遺構外出土遺物 (35)	44	図513 遺構外出土遺物	(88)	101
図461 遺構外出土遺物 (36)	45	図514 遺構外出土遺物	(89)	102
図462 遺構外出土遺物 (37)	46	図515 遺構外出土遺物	(90)	104
図463 遺構外出土遺物 (38)	47	図516 遺構外出土遺物	(91)	105
図464 遺構外出土遺物 (39)	48	図517 遺構外出土遺物	(92)	106
図465 遺構外出土遺物 (40)	49	図518 遺構外出土遺物	(93)	107
図466 遺構外出土遺物 (41)	50	図519 遺構外出土遺物	(94)	108
図467 遺構外出土遺物 (42)	51	図520 遺構外出土遺物	(95)	109
図468 遺構外出土遺物 (43)	52	図521 遺構外出土遺物	(96)	110
図469 遺構外出土遺物 (44)	53	図522 遺構外出土遺物	(97)	112
図470 遺構外出土遺物 (45)	54	図523 遺構外出土遺物	(98)	113
図471 遺構外出土遺物 (46)	55	図524 遺構外出土遺物	(99)	114
図472 遺構外出土遺物 (47)	56	図525 遺構外出土遺物	(100)	115
図473 遺構外出土遺物 (48)	57	図526 遺構外出土遺物	(101)	116
図474 遺構外出土遺物 (49)	58	図527 遺構外出土遺物	(102)	117
図475 遺構外出土遺物 (50)	59	図528 遺構外出土遺物	(103)	118
図476 遺構外出土遺物 (51)	60	図529 遺構外出土遺物	(104)	119

図530	遺構外出土遺物 (105)	120	図556	遺構外出土遺物 (131)	149
図531	遺構外出土遺物 (106)	121	図557	遺構外出土遺物 (132)	150
図532	遺構外出土遺物 (107)	122	図558	遺構外出土遺物 (133)	152
図533	遺構外出土遺物 (108)	123	図559	遺構外出土遺物 (134)	154
図534	遺構外出土遺物 (109)	124	図560	遺構外出土遺物 (135)	155
図535	遺構外出土遺物 (110)	125	図561	遺構外出土遺物 (136)	156
図536	遺構外出土遺物 (111)	127	図562	遺構外出土遺物 (137)	157
図537	遺構外出土遺物 (112)	128	図563	遺構外出土遺物 (138)	158
図538	遺構外出土遺物 (113)	129	図564	遺構外出土遺物 (139)	159
図539	遺構外出土遺物 (114)	130	図565	遺構外出土遺物 (140)	160
図540	遺構外出土遺物 (115)	131	図566	遺構外出土遺物 (141)	161
図541	遺構外出土遺物 (116)	132	図567	遺構外出土遺物 (142)	163
図542	遺構外出土遺物 (117)	133	図568	遺構外出土遺物 (143)	165
図543	遺構外出土遺物 (118)	134	図569	遺構外出土遺物 (144)	166
図544	遺構外出土遺物 (119)	135	図570	遺構外出土遺物 (145)	167
図545	遺構外出土遺物 (120)	136	図571	遺構外出土遺物 (146)	169
図546	遺構外出土遺物 (121)	137	図572	遺構外出土遺物 (147)	170
図547	遺構外出土遺物 (122)	139	図573	遺構外出土遺物 (148)	171
図548	遺構外出土遺物 (123)	140	図574	遺構外出土遺物 (149)	172
図549	遺構外出土遺物 (124)	141	図575	遺構外出土遺物 (150)	173
図550	遺構外出土遺物 (125)	142	図576	遺構外出土遺物 (151)	175
図551	遺構外出土遺物 (126)	143	図577	遺構外出土遺物 (152)	176
図552	遺構外出土遺物 (127)	144	図578	遺構外出土遺物 (153)	177
図553	遺構外出土遺物 (128)	145	図579	遺構外出土遺物 (154)	178
図554	遺構外出土遺物 (129)	147	図580	遺構外出土遺物 (155)	179
図555	遺構外出土遺物 (130)	148			

第2編 北ノ脇遺跡

		[挿 図]			
図1	北ノ脇遺跡4区グリッド配図	185	図6	遺構外出土遺物 (2)	194
図2	北ノ脇遺跡4区遺構配図・基本土層概念図	187	図7	遺構外出土遺物 (3)	195
図3	2号土坑	189	図8	遺構外出土遺物 (4)	196
図4	グリッド別遺物出土点図	190	図9	遺構外出土遺物 (5)	197
図5	遺構外出土遺物 (1)	195	図10	遺構外出土遺物 (6)	198

第3編 まとめ

		[挿 図]			
図1	土器集成 (1)	202	図10	周辺地域の土器 (4)	221
図2	土器集成 (2)	206	図11	土器集成	223
図3	土器集成 (3)	208	図12	住居跡分考図 (1)	227
図4	土器集成 (4)	211	図13	住居跡分考図 (2)	228
図5	土器集成 (5)	214	図14	住居跡分考図 (3)	230
図6	土器集成 (6)	217	図15	住居跡集成 (1)	232
図7	周辺地域の土器 (1)	218	図16	住居跡集成 (2)	234
図8	周辺地域の土器 (2)	219	図17	伊集成 (1)	236
図9	周辺地域の土器 (3)	220	図18	伊集成 (2)	237

写真目次

第1編 高木遺跡					
1	高木遺跡調査区遺景 (北西より)	245	9	67号住居跡 (東より)	249
2	高木遺跡調査区近景 (北西より)	245	10	116号住居跡 (南より)	249
3	遺物包含層検出状況 (東より)	246	11	115号住居跡 (南より)	250
4	調査区北側遺構群 (南より)	246	12	115号住居跡細部	250
5	調査区中央遺構群 (東より)	247	13	117号住居跡 (南東より)	251
6	調査区南側遺構群 (西より)	247	14	117号住居跡細部	251
7	基本土層N20-84-86グリッド (南より)	248	15	132号住居跡 (東より)	252
8	基本土層N22-24グリッド (北より)	248	16	133号住居跡 (西より)	252

17	150号住居跡 (西より).....	253	75	221号住居跡 (西より).....	282
18	163号住居跡 (南東より).....	253	76	222号住居跡 (南東より).....	282
19	150号住居跡 (南より).....	254	77	223号住居跡 (南より).....	283
20	152号住居跡細部.....	254	78	227号住居跡 (東より).....	283
21	168号住居跡 (南より).....	255	79	224号住居跡 (南東より).....	284
22	172号住居跡 (西より).....	255	80	224号住居跡細部.....	284
23	171号住居跡 (西より).....	256	81	225号住居跡 (南より).....	285
24	171号住居跡細部.....	256	82	225号住居跡細部.....	285
25	175号住居跡 (南東より).....	257	83	226号住居跡 (北東より).....	286
26	175号住居跡細部.....	257	84	226号住居跡細部.....	286
27	176号住居跡 (南東より).....	258	85	228号住居跡 (南より).....	287
28	176号住居跡細部.....	258	86	228号住居跡細部.....	287
29	177号住居跡 (南より).....	259	87	229号住居跡 (北東より).....	288
30	177号住居跡細部.....	259	88	231号住居跡 (南東より).....	288
31	179号住居跡 (南より).....	260	89	230号住居跡 (北東より).....	289
32	179号住居跡細部.....	260	90	230号住居跡細部.....	289
33	182号住居跡 (南より).....	261	91	232号住居跡 (北西より).....	290
34	182号住居跡細部.....	261	92	232号住居跡細部.....	290
35	183号住居跡 (南西より).....	262	93	233号住居跡 (東より).....	291
36	183号住居跡細部.....	262	94	233号住居跡細部.....	291
37	184号住居跡 (南より).....	263	95	234号住居跡 (南より).....	292
38	184号住居跡細部.....	263	96	234号住居跡細部.....	292
39	186号住居跡 (西より).....	264	97	233号住居跡 (南より).....	293
40	186号住居跡細部.....	264	98	237号住居跡 (南より).....	293
41	189号住居跡 (西より).....	265	99	236号住居跡 (南より).....	294
42	189号住居跡細部.....	265	100	236号住居跡細部.....	294
43	190号住居跡 (東より).....	266	101	238号住居跡 (南より).....	295
44	190号住居跡細部.....	266	102	239号住居跡 (西より).....	295
45	197号住居跡 (南西より).....	267	103	240号住居跡 (南より).....	296
46	197号住居跡細部.....	267	104	242号住居跡 (南より).....	296
47	198号住居跡 (南より).....	268	105	241 a 号住居跡 (東より).....	297
48	198号住居跡細部.....	268	106	241 a 号住居跡細部.....	297
49	201号住居跡 (南東より).....	269	107	241 b 号住居跡 (北より).....	298
50	201号住居跡細部.....	269	108	241 b 号住居跡細部.....	298
51	202号住居跡 (東より).....	270	109	243号住居跡 (南西より).....	299
52	204号住居跡 (南より).....	270	110	243号住居跡細部.....	299
53	203号住居跡 (南より).....	271	111	244号住居跡 (南より).....	300
54	203号住居跡細部.....	271	112	244号住居跡細部.....	300
55	205号住居跡 (南より).....	272	113	245号住居跡 (西より).....	301
56	206号住居跡 (南西より).....	272	114	245号住居跡細部.....	301
57	207号住居跡 (南より).....	273	115	246号住居跡 (南より).....	302
58	209号住居跡 (南西より).....	273	116	246号住居跡細部.....	302
59	208号住居跡 (南より).....	274	117	247号住居跡 (北より).....	303
60	208号住居跡細部.....	274	118	247号住居跡細部.....	303
61	210号住居跡 (南より).....	275	119	248号住居跡 (西より).....	304
62	210号住居跡細部.....	275	120	250号住居跡 (東より).....	304
63	211号住居跡 (南より).....	276	121	249号住居跡 (南西より).....	305
64	212号住居跡 (南西より).....	276	122	249号住居跡細部.....	305
65	213号住居跡 (南より).....	277	123	251号住居跡 (北東より).....	306
66	213号住居跡細部.....	277	124	251号住居跡細部.....	306
67	215号住居跡 (東より).....	278	125	252号住居跡 (西より).....	307
68	218号住居跡 (東より).....	278	126	253号住居跡 (東より).....	307
69	216号住居跡 (南西より).....	279	127	254号住居跡 (北より).....	308
70	216号住居跡細部.....	279	128	254号住居跡細部.....	308
71	217号住居跡 (南東より).....	280	129	255号住居跡 (北より).....	309
72	217号住居跡細部.....	280	130	256・257・263号住居跡 (西より).....	309
73	219号住居跡 (南より).....	281	131	258号住居跡 (南西より).....	310
74	220号住居跡 (南より).....	281	132	259号住居跡 (南東より).....	310

133	260号住居跡(東より).....	311	191	68~75号土坑.....	342
134	260号住居跡細部.....	311	192	76・77・79・81~85号土坑.....	343
135	261号住居跡(南より).....	312	193	86~93号土坑.....	344
136	262号住居跡(南より).....	312	194	94・96~102号土坑.....	345
137	264号住居跡(南より).....	313	195	103~110号土坑.....	346
138	268号住居跡(西より).....	313	196	111~118号土坑.....	347
139	265号住居跡(南より).....	314	197	119~121・123~127号土坑.....	348
140	265号住居跡細部.....	314	198	128~133・135・136号土坑.....	349
141	266号住居跡(南より).....	315	199	134・138・139号土坑.....	350
142	266号住居跡細部.....	315	200	140・142~144・147~150号土坑.....	351
143	267号住居跡(南より).....	316	201	151~158号土坑.....	352
144	271号住居跡(南西より).....	316	202	159~161・164~168号土坑.....	353
145	269号住居跡(南東より).....	317	203	169~176号土坑.....	354
146	269号住居跡細部.....	317	204	177~184号土坑.....	355
147	270号住居跡(南西より).....	318	205	185・187~189・191~193・195号土坑.....	356
148	270号住居跡細部.....	318	206	190・196・197号土坑.....	357
149	272号住居跡(東より).....	319	207	199~206号土坑.....	358
150	273号住居跡(南西より).....	319	208	207~214号土坑.....	359
151	274号住居跡(南より).....	320	209	215~222号土坑.....	360
152	274号住居跡細部.....	320	210	223~227・229~231号土坑.....	361
153	275号住居跡(南より).....	321	211	232~234・237・239~242号土坑.....	362
154	276号住居跡(東より).....	321	212	243~246・248・250~252号土坑.....	363
155	277号住居跡(南より).....	322	213	254~261号土坑.....	364
156	277号住居跡細部.....	322	214	262・263・265・267~269・272・273号土坑.....	365
157	278号住居跡(東より).....	323	215	274~281号土坑.....	366
158	278号住居跡細部.....	323	216	282~289号土坑.....	367
159	279号住居跡(南より).....	324	217	290・293号土坑、屋外掘土遺構.....	368
160	279号住居跡細部.....	324	218	1~8号配石遺構.....	369
161	280号住居跡(南より).....	325	219	9~11号配石遺構.....	370
162	280号住居跡細部.....	325	220	12・14~20号配石遺構.....	371
163	281号住居跡(南東より).....	326	221	21~23号配石遺構.....	372
164	281号住居跡細部.....	326	222	24~26号配石遺構.....	373
165	282号住居跡(南より).....	327	223	27~29号配石遺構.....	374
166	285号住居跡(西より).....	327	224	30~34号配石遺構.....	375
167	283号住居跡(東より).....	328	225	35~42号配石遺構.....	376
168	283号住居跡細部.....	328	226	43~51号配石遺構.....	377
169	284号住居跡(南より).....	329	227	47~56号配石遺構.....	378
170	284号住居跡細部.....	329	228	57~59・61・63・64・66・67号配石遺構.....	379
171	286号住居跡(南より).....	330	229	60号配石遺構(西より).....	380
172	286号住居跡細部.....	330	230	60号配石遺構細部.....	380
173	287号住居跡(南より).....	331	231	65号配石遺構(東より).....	381
174	287号住居跡細部.....	331	232	65号配石遺構細部.....	381
175	288号住居跡(北東より).....	332	233	68号配石遺構(南より).....	382
176	288号住居跡細部.....	332	234	68号配石遺構細部.....	382
177	289号住居跡(南西より).....	333	235	1~9号土器埋設遺構.....	383
178	289号住居跡細部.....	333	236	10~17号土器埋設遺構.....	384
179	290号住居跡(東より).....	334	237	18~25号土器埋設遺構.....	385
180	290号住居跡細部.....	334	238	26~34号土器埋設遺構.....	386
181	291号住居跡(南西より).....	335	239	35~42号土器埋設遺構.....	387
182	291号住居跡細部.....	335	240	43~49号土器埋設遺構.....	388
183	292号住居跡(北より).....	336	241	50~57号土器埋設遺構.....	389
184	294号住居跡(西より).....	336	242	58~65号土器埋設遺構.....	390
185	293号住居跡(南西より).....	337	243	66~73号土器埋設遺構.....	391
186	293号住居跡細部.....	337	244	74~81号土器埋設遺構.....	392
187	10・11・20・25・27・28・33・35号土坑.....	338	245	82~89号土器埋設遺構.....	393
188	37~40・42・44~46号土坑.....	339	246	土器埋設遺構、その他.....	394
189	47~53・59号土坑.....	340	247	住居跡出土遺物.....	395
190	60~67号土坑.....	341	248	住居跡出土土器.....	396

249	佐居跡出土遺物	397	300	埋設土器 (4)	440
250	佐居跡川土器	398	301	埋設土器 (5)	441
251	佐居跡川土器	399	302	埋設土器 (6)	442
252	佐居跡出土土器	400	303	埋設土器 (7)	443
253	佐居跡出土土器	401	304	埋設土器 (8)	444
254	佐居跡出土土器	402	305	埋設土器 (9)	445
255	佐居跡出土遺物	403	306	埋設土器 (10)	446
256	佐居跡出土土器	404	307	埋設土器 (11)	447
257	佐居跡出土土器	405	308	埋設土器 (12)・出土遺物	448
258	佐居跡川土器	406	309	石器集中出土地点出土遺物	449
259	佐居跡川土器	407	310	石器集中出土地点出土石器	449
260	佐居跡出土土器	408	311	遺構外出土器 (1)	450
261	佐居跡出土土器	409	312	遺構外出土器 (2)	450
262	佐居跡出土土器	410	313	遺構外出土器 (3)	451
263	佐居跡出土土器	411	314	遺構外出土器 (4)	452
264	佐居跡出土土器	412	315	遺構外出土器 (5)	453
265	佐居跡出土土器	413	316	遺構外出土器 (6)	453
266	佐居跡出土土器	414	317	遺構外出土器 (7)	454
267	佐居跡出土土器	415	318	遺構外出土器 (8)	455
268	佐居跡出土土器	416	319	遺構外出土器 (9)	456
269	佐居跡出土土器	417	320	遺構外出土器 (10)	457
270	佐居跡出土土器	418	321	遺構外出土器 (11)	458
271	佐居跡出土土器	419	322	遺構外出土器 (12)	459
272	佐居跡出土遺物	420	323	遺構外出土器 (13)	460
273	佐居跡出土土器	421	324	遺構外出土器 (14)	461
274	佐居跡川土器	422	325	遺構外出土器 (15)	462
275	佐居跡川土器 (1)	422	326	遺構外出土器 (16)	463
276	佐居跡川土器 (2)	423	327	遺構外出土器 (17)	464
277	佐居跡川土器 (3)	423	328	遺構外出土器 (18)	464
278	佐居跡川土器 (4)	424	329	遺構外出土器 (19)	465
279	佐居跡川土器 (5)	425	330	遺構外出土器 (20)	466
280	佐居跡川土器 (6)	426	331	遺構外出土器 (21)	466
281	土坑出土土器 (1)	427	332	遺構外出土器製品 (1)	467
282	土坑出土土器 (2)	428	333	遺構外出土器製品 (2)	468
283	土坑出土土器 (3)	429	334	遺構外出土器製品 (3)	469
284	土坑出土土器 (4)	430	335	遺構外出土器製品 (4)	469
285	土坑出土土器 (5)	430	336	遺構外出土器製品 (5)	470
286	土坑出土遺物	431	337	遺構外出土器製品 (6)	470
287	土坑出土土器	431	338	遺構外出土器製品 (7)	471
288	土坑出土土器	432	339	遺構外出土器製品 (8)	471
289	土坑出土土器	432	340	遺構外出土器 (1)	472
290	配石遺構出土土器 (1)	433	341	遺構外出土器 (2)	472
291	配石遺構出土土器 (2)	433	342	遺構外出土器 (3)	473
292	配石遺構出土土器 (3)	434	343	遺構外出土器 (4)	473
293	配石遺構出土土器 (4)	435	344	遺構外出土器 (5)	474
294	配石遺構出土土器 (5)	435	345	遺構外出土器 (6)	474
295	配石遺構出土遺物	436	346	遺構外出土器 (7)	475
296	配石遺構出土土器	436	347	遺構外出土器 (8)	475
297	埋設土器 (1)	437	348	遺構外出土器 (9)	476
298	埋設土器 (2)	438	349	遺構外出土器 (10)	476
299	埋設土器 (3)	439			

第2編 北ノ脇遺跡

1	北ノ脇遺跡全冢 (西より)	479	5	遺構外出土器 (3)	481
2	調査区全冢、2号土坑	479	6	遺構外出土器 (4)	481
3	遺構外出土器 (1)	480	7	遺構外出土器製品	482
4	遺構外出土器 (2)	480	8	遺構外出土器	482

第2章 遺構と遺物

第8節 遺構外出土遺物

本調査区における遺物包含層としては、L V 1～L V 3までの3層が確認されている。遺物は、土器・土製品・石器・石製品などが出土している。時期的には、縄文時代前期末葉～後期前葉・後期後葉～晩期、弥生時代と各時期にわたって出土しているが、特に縄文時代中期後葉～後期前葉の遺物が主体を占める。

層序と分布 (図424・425)

遺物包含層と基本層序の関係については、「第1章 第4節」で述べた通りである。本調査区では、基本的にL V 1～L V 3が遺物包含層に該当する。これらの遺物包含層は、調査区全体に形成されている。しかしながら、自然堤防微高地にあたる調査区中央から南側にかけては、遺構の密度が高く、重複して遺構が掘り込まれていたため、土層に乱れが生じ、調査区内の包含層については必ずしも、層位的なまとまりのある出土状態ではなかった。また、地形的要因や洪水に起因する砂層が複雑に堆積している場所もあり、基本土層の堆積状況の変化に対応できなかった地点もあった。

本調査区内で包含層の残りが良かった地点は、調査区中央北側の後背湿地に落ち込む緩斜面部である。この地点は、遺構密度が稀薄なため、層位の乱れも少なく、比較的良好に包含層が遺存している。また、縄文土器がほぼ時期ごとに層位的なまとまりをもって出土している。特にL V 1とL V 2で遺物包含層の密度が高く、主にL V 1に縄文時代後期初葉～前葉、L V 2には縄文時代中期後葉～末葉の遺物を含む。

次に、各層位から出土する遺物と検出遺構面から、縄文時代～弥生時代にかけての堆積時期を概観する。L IIIは古墳時代、奈良・平安時代の遺構検出面である。基本的には、無遺物層であるが、縄文時代晩期、弥生時代の遺物を極少量含んでいる。遺構の検出状況などから、少なくとも古墳時代には堆積していたものと思われる。L IVは5層に大別した。本層も基本的には無遺物層である。本調査区では、L V 1上面で土坑3基が構築されているのが確認できた。出土遺物が無いため時期は特定できなかった。形成時期については、北ノ脇5区(本宮町教育委員会調査)で縄文時代晩期の住居跡が本層で検出されていることと、後述するL V 1との関係などから、縄文時代後期前葉～晩期にかけて形成されたものと考えている。

L V 1・L V 2は、それぞれ2層に大別した。この内、L V 1については、L V 1 bが遺物包含層にあたり、縄文時代前期末葉～後期前葉までの遺物を含む。特に本層には、後期初葉～前葉の遺物が多量に含まれている。今回の調査では、後期初葉～前葉の遺構が本層を掘り込んで構築されているのが確認された。本層の形成時期については、出土遺物や遺構の検出状況などから、縄文時代

第1編 高木遺跡

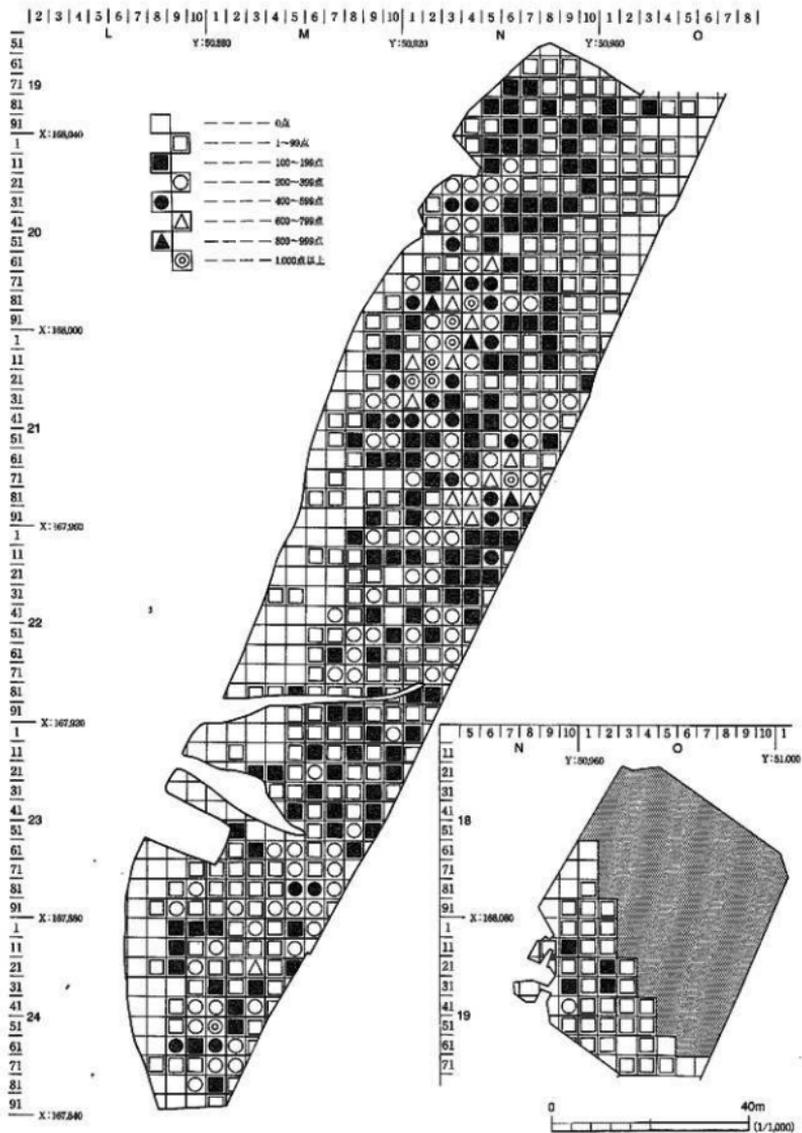


図424 グリッド別土器出土点数

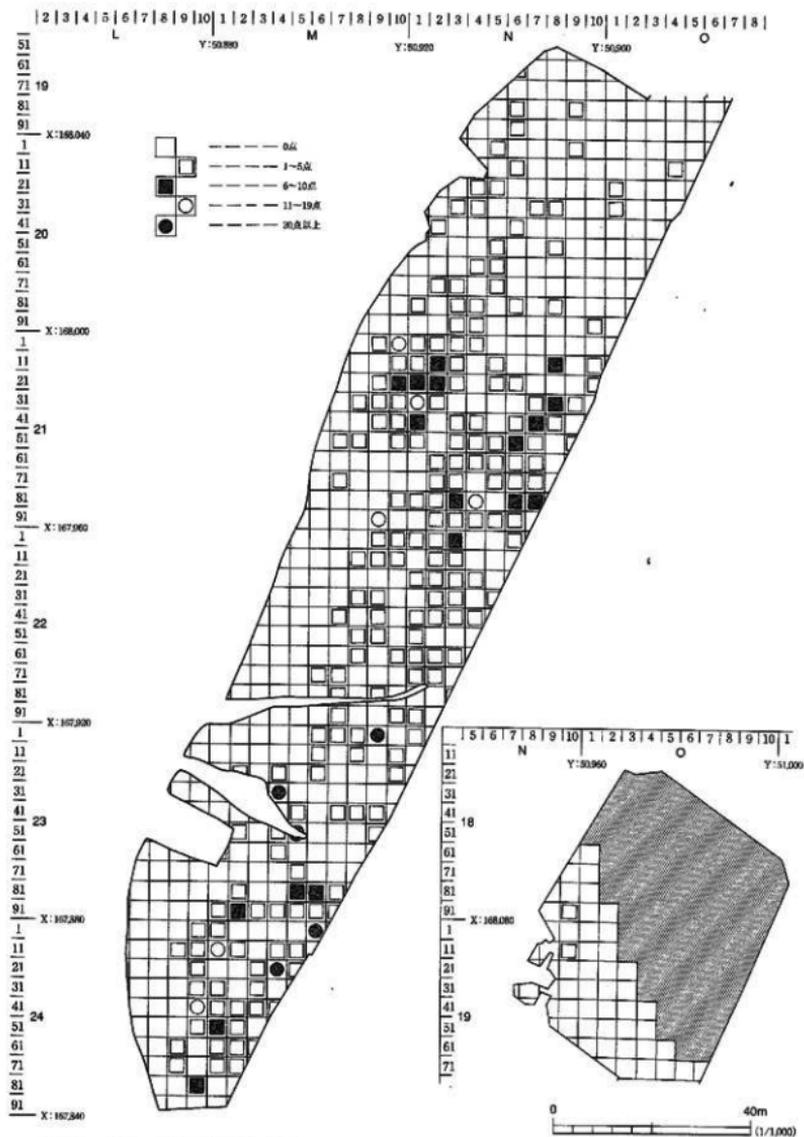


図425 グリッド別石器出土点数

後期初頭には既に堆積が開始されていたものと考えている。

L V 2 では、L V 2 a が遺物包含層にあたり、本調査区の主体となる縄文時代中期後葉～末葉の遺物を多量に含む。また、僅かながら、縄文時代前期末葉の遺物を含む。形成時期については、L V 2 a が基本土層観察用のベルトで、縄文時代中期末葉の住居跡を覆って堆積していることが確認されたことと、中期末葉～後期初頭の遺構がL V 2 a～bで検出されていることから、本層については、少なくとも中期末葉には形成が開始されたものと考えられる。

L V 3 には、少量の縄文時代中期前葉～末葉の遺物を含む。包含された遺物の多くは、中期後葉に位置付けられる。また、本層上面で、縄文時代中期後葉～末葉の遺構の多くが検出されている。本層の形成時期については、遺構検出状況や包含される遺物などから、縄文時代中期前葉～後葉にかけて形成され、中期末葉には堆積が終了したものと考えている。

包含された遺物の平面分布状況を見ると、ほぼ調査区の全域から遺物は出土しており、遺物の出土量は遺構の分布域に概ね比例している。このため、遺構が稀薄になる調査区北端部では、遺物の包含密度も少ない。また、調査区西端は、阿武隈川に落ち込む急崖地形にあたるため、遺物はほとんど出土しなかった。

遺物包含層の密度が高い地点は、調査区中央北側のN20-84・93、N21-3・12・21・22グリッド、調査区中央のN21-76・86グリッド、調査区南端のM24-23・51グリッドで、比較的まとまって遺物が出土している。地形的には、いずれも自然堤防微高地から、後背湿地に落ち込む緩斜面部にあたる。これらの場所は、遺構の分布が比較的稀薄になるが、緩斜面部上方の自然堤防微高地には、縄文時代中期後葉～後期前葉にかけての住居跡が数多く構築されている。また、包含される遺物も同時期の遺物が主体を占めることから、これらの遺物包含の密度が高い場所は、自然堤防微高地に立地する住居跡から、下方の斜面部に廃棄されたものと考えられ、本調査区に営まれた集落の捨場として使われていたものと考えている。(大河原)

土 器 (図426～553, 写真311～331)

遺物包含層から出土した土器は、破片数にすると約95,000点である。出土遺物の内容を見ると、縄文時代中期後葉～後期前葉のものが大半を占める。また、出土量は極めて少ないが、縄文時代前期末葉～中期前葉、縄文時代晩期、弥生時代の土器が出土している。土器の記載にあたっては、「序章 第5節」の分類に従って説明する。

I群土器 (図426, 写真311)

図426-1～11は、I群とした土器である。出土量は極めて少ない。いずれも破片資料のため、全ての器形が分かる資料は認められないが、口縁部は直線的に立ち上がるもの(1・3)、内湾するもの(2)、緩やかに外反するもの(4・7～10)が認められる。また、口縁部には波状を呈しているものと、平口縁のものが認められる。口縁部が直線的ないし内湾気味に立ち上がるものは、口縁下端の狭い範囲に鋸歯状や三角形の印刻が施されるもの(1・2)、ヘラ状工具による圧痕で口

縁部が小波状を呈しているものが認められる。これらの土器の胎土には、細かな砂粒が少量含まれる。色調は明黄褐色やよい黄褐色を呈し、焼成はいずれも良好で堅緻である。

口縁部が緩やかに外反するものには、同一個体4～6や8・9のように口縁部から胴部にかけて、横位に文様帯を区画し、区画した文様帯内に連続する三角文を配すものと、10のように地文の縄文のみが施されるものが認められる。これらの資料についてももう少し、詳しく観察する。

同一個体4～6は、口縁部が波状を呈し、口縁部下端に隆帯が巡る。隆帯上には、半裁竹管状工具の凸面を用いた刺突文が施される。胴部は、同じ工具の凹面を使った押し引き文と細長い粘土紐によって横位に文様帯が区画され、文様帯内には粘土紐で三角文が配される。粘土紐上にも同じ工具を用い、押し引き状の連続刺突文が施される。地文には、単節縄文が用いられているが、部分的に結節回転文が施される。

同一個体8・9は、半裁竹管状工具の凹面を使った押し引き文と平行沈線によって横位に文様帯を区画し、文様帯内には平行沈線で三角文が配されている。また、11の胴部資料を見ると、幅の狭い平行沈線間に、三角形の印刻が施される。8・9については、横位の区画文に粘土紐が用いられな

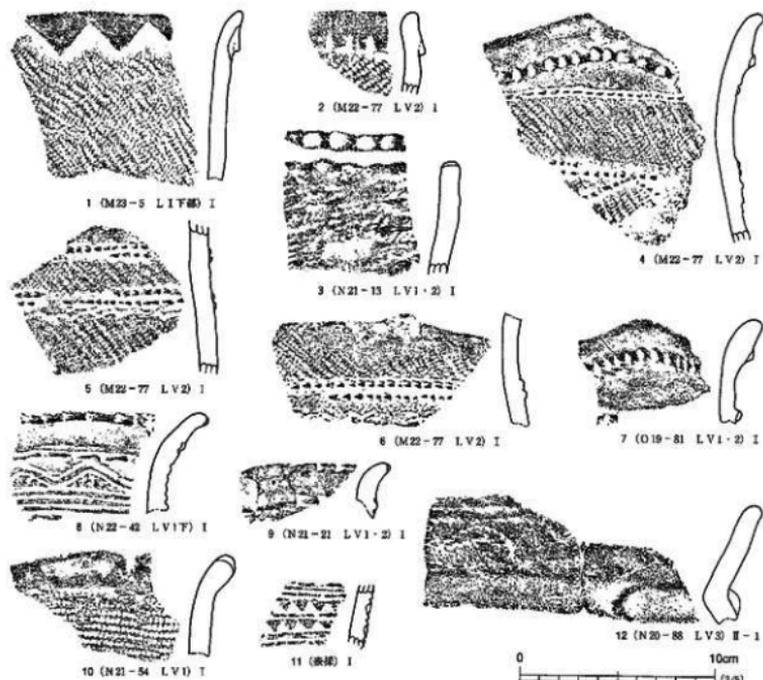


図426 遺構外出土遺物(1)

い点と区画文の幅が狭小化する点で4～6と異なる。これらの土器の胎土には、砂粒が含まれる。色調は褐色系が多く、焼成は良好である。Ⅰ群土器については、器形や文様の特徴などから1～3が大木5式土器新段階、4～11が大木6式土器に比定されるものと考えている。

Ⅱ群土器 (図426～492, 写真311～319)

Ⅱ群1類土器 (図426-12, 写真311)

図426-12は、Ⅱ群1類土器としたものである。出土量は極めて少ない。破片資料のため全体の器形と文様を知ることはできないが、器形的には口縁部が「く」の字状に外反する深鉢形土器となる。口縁部は、縄文原体が横位に圧痕され、頸部には指頭で横に押し潰したような粘土紐が付されている。土器の胎土は多量の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、色調は黄褐色を呈している。土器については、施された文様や器形的特徴などから大木7b式土器に比定されるものと考えている。

Ⅱ群2類土器 (図427～455, 写真312～316)

図427～455は、Ⅱ群2類土器と分類したものである。器形的には、深鉢形土器と浅鉢形土器に大別できる。他の器形も出土しているが数は少ない。Ⅱ群2類土器については、概ね大木9式土器、加曾利EⅢ式土器の範囲に収まるものと考えている。遺物の報告にあたっては、器形や施文される文様の特徴などからa～i種に区分した。

a種 器形がキャリパー状を呈すもので、口縁部と胴部に個別の文様を配し、口縁部の主文様に幅の広い凹線状の沈線と陸線で浮刻的な渦巻文と楕円文を配すものである。施文された渦巻文の大半は、両端が一重に渦を巻く文様で、渦巻文内には縄文や刺突文が充填される。(図427～430)

また、胴部文様には、縦長の「Π」形の区画文と蕨手状の凹線、渦巻文を組み合わせたものが多用されるが、図429-1～3のように陸沈線で渦巻文を描くものも認められる。この内、図427、図428-1・2は、口縁部の渦巻文が「S」字状に施される。渦巻文は、幅の広い凹線状の沈線で横位ないし斜位に施されるものが多い。渦巻は文様の両端に描かれ、一方の渦巻文内に縄文ないし刺突文が充填される。また、図427-1のように、渦巻は文様の片方のみで、もう一方は、楕円文を囲むように配されているものも認められる。図427-7は、口縁端部が「く」の字状に内接し、鈎状を呈している。内面には、赤彩が認められる。

図428-3～11、図429～430は、渦巻文の両端が対称的に渦巻く、いわゆる双頭渦巻文が配されたものである。この内、図428-3～6は幅の広い凹線状の沈線で、図428-7～10(同一個体)は、陸線で縦位に渦巻文が施される。図428-7～10は、口縁部の文様帯と胴部文様帯を円形刺突文で区画している。図429-4～12は陸線、図430-1～3は、稜沈線で横位に双頭渦巻文が配されるもので、陸線で施された渦巻文の多くは、器面から庇状に突き出ている。図430-4～10は、口縁直下に無文帯や縄文帯を有し、凹線ないし沈線で双頭渦巻文が施される。この内、図430-7～9は、渦巻文間を縫うように沈線や凹線が施される。特に9は、渦巻文を組み合わせて、顔面のような文様を描き出す。

b種 胴部が球体状に膨らみ、緩やかに外反しながら、口縁部が立ち上がる器形で、胴部の主文

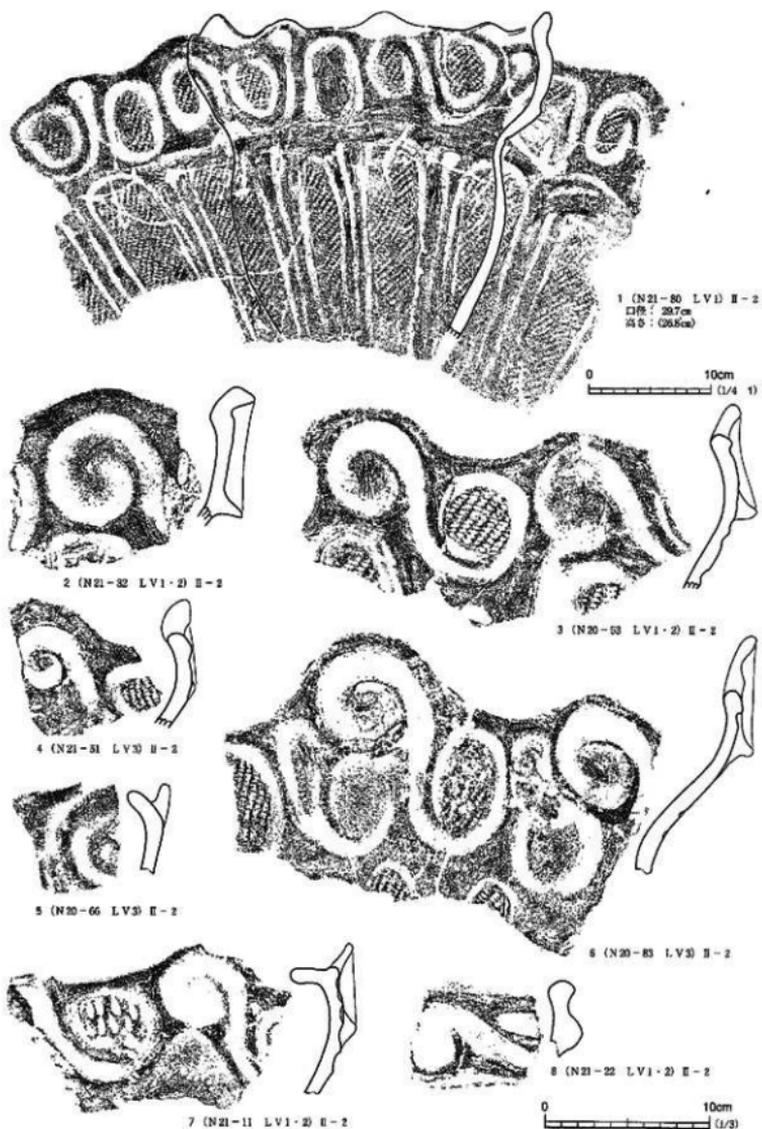


図427 遺構外出土遺物 (2)

第1編 高木遺跡

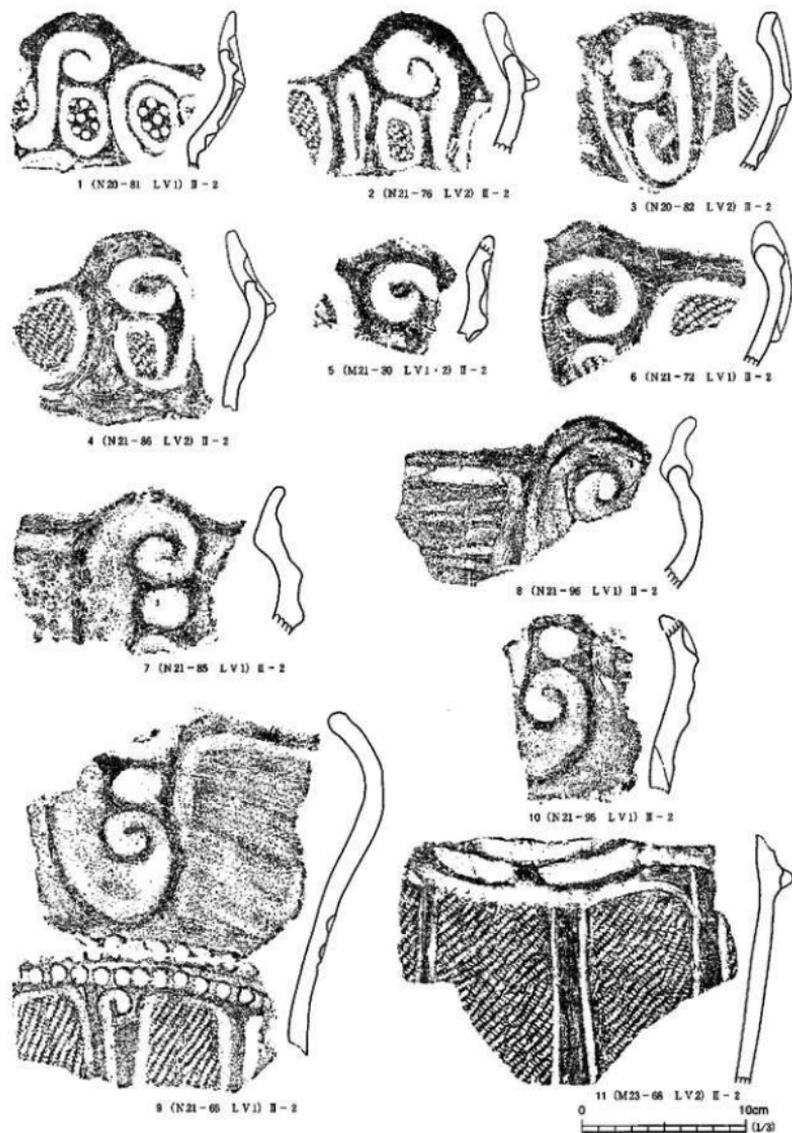


図428 遺構外出土遺物 (3)

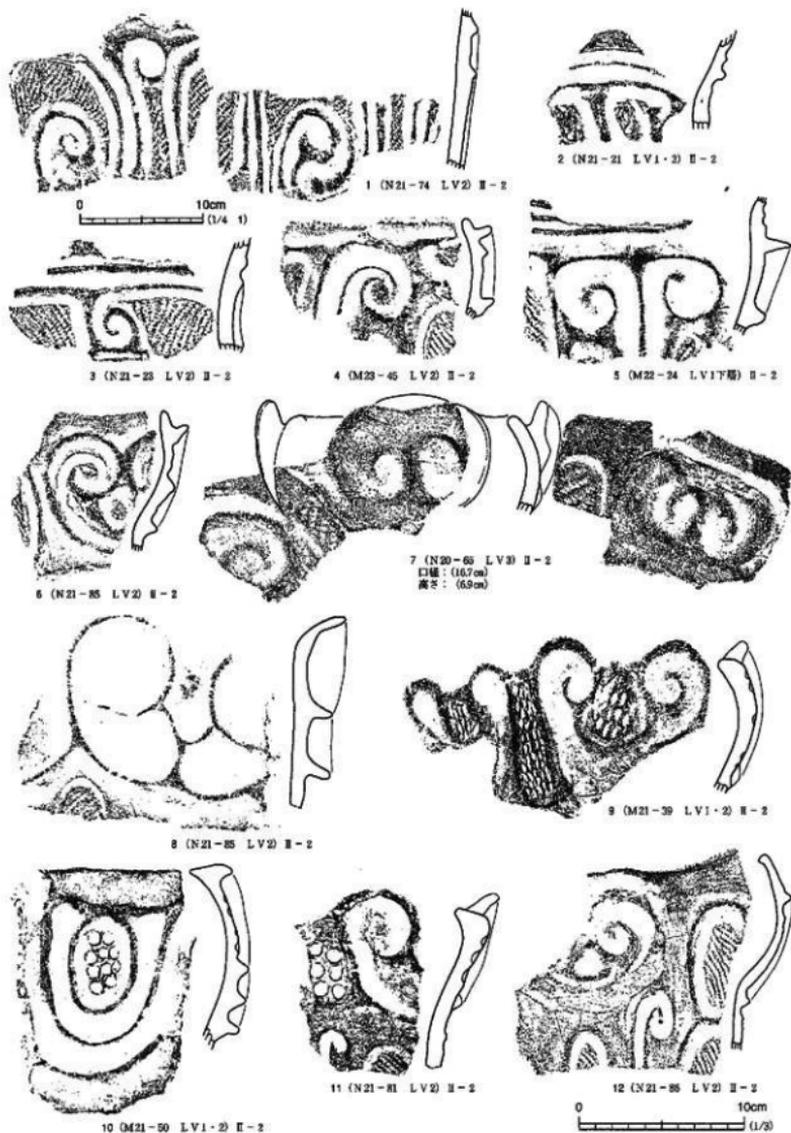


図429 遺構外出土遺物 (4)

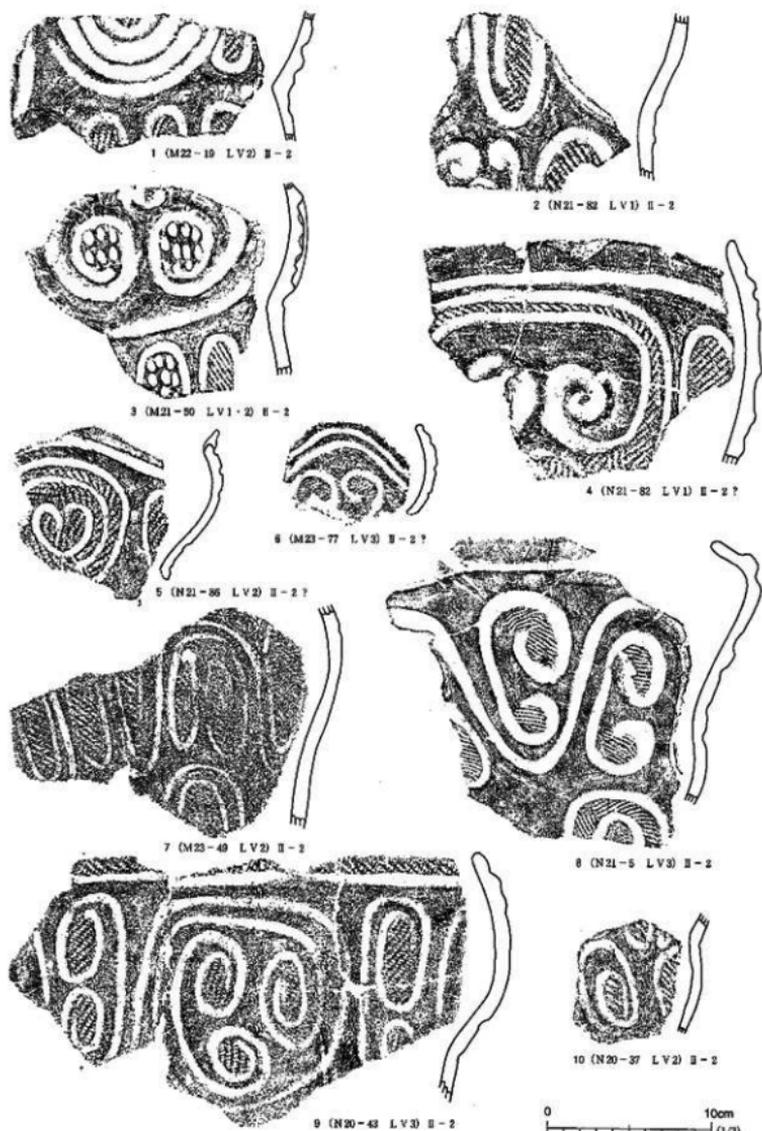


図430 遺構外出土遺物 (5)

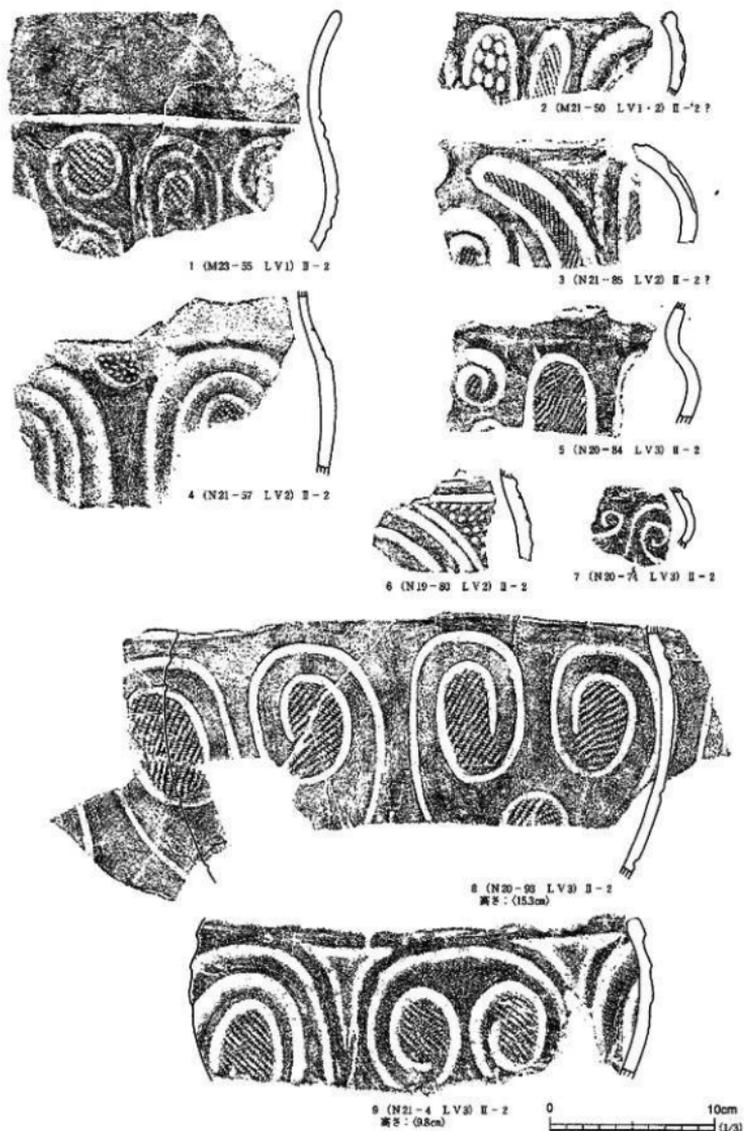


図431 遺構外出土遺物 (6)

様に幅の広い凹線状の沈線や稜沈線で、渦巻文が配されるものである。(図431・432)

器形を詳しく見ると、図431-1・2・9のように、胴部中央付近に膨らみを持ち、球体状を呈すものと、図432-1のように胴部上半に膨らみを持つものが認められる。口縁部と胴部は、凹線で区画されることが多く、口縁部は無文部となる。胴部文様は、図431-1・9のような渦巻文とその他の文様を交互に組み合わせたものや、図431-8の渦巻文の組み合わせで顔面を描くもの、図432-1の多種の渦巻文を交互に配し、これらの渦巻文間に凹線が巡らされるものなどがある。

また、図431-3・4・6・9のように文様間の隙間に、三角形や三日月状の区画文を配し、区画文内に刺突文が充填されるものも認められる。

c種 器形がキャリパー状を呈すもので、口縁部と胴部に個別の文様を配し、口縁部の主文様に幅の広い凹線状の沈線や隆線で楕円文が配される。楕円文は、小型の楕円文を起点とした両側に横長の楕円文を配すものが多く、楕円文内には縄文や刺突文が施される。また、胴部には懸垂文や蕨手文が配され、幅の広い懸垂文間には縄文が施される。(図433)

図433-1・2・8は、渦巻文を起点とした両側に横長の楕円文が施される。特に8は渦巻文が崩れはじめ、渦巻文よりむしろ楕円文に近い。

本種については、施文された文様の特徴などから、関東地方の影響を受けたものと考えられる。

d種 主に凹線や沈線で、楕円文と「 \cap 」文が施された土器である。(図434~437)

器形的には、図434-1~3・5~9、図435-1~8、図437-4~10のキャリパー状を呈すもの、図435-9・11の口縁部が直線的に立ち上がるもの、図435-10・12、図436、図437-1~3の胴部が膨らみ、緩やかに外反しながら口縁部が立ち上がる深鉢形土器と図434-4の浅鉢形土器が認められる。

施文される文様を見ると、口縁部から胴部にかけて、一連の楕円文を配し、楕円文内に縄文を施

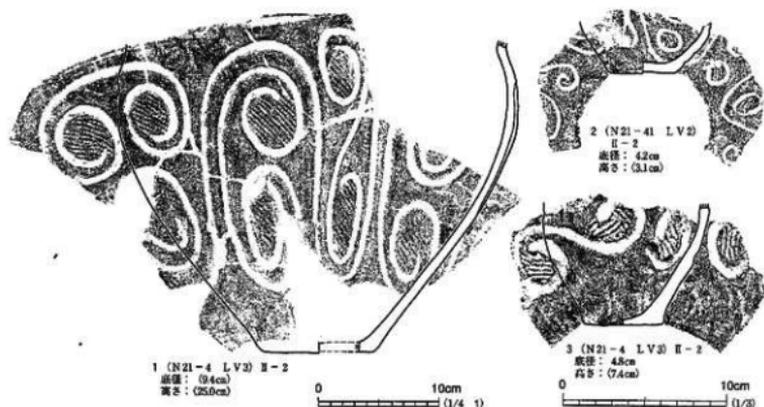


図432 遺構外出土遺物(7)

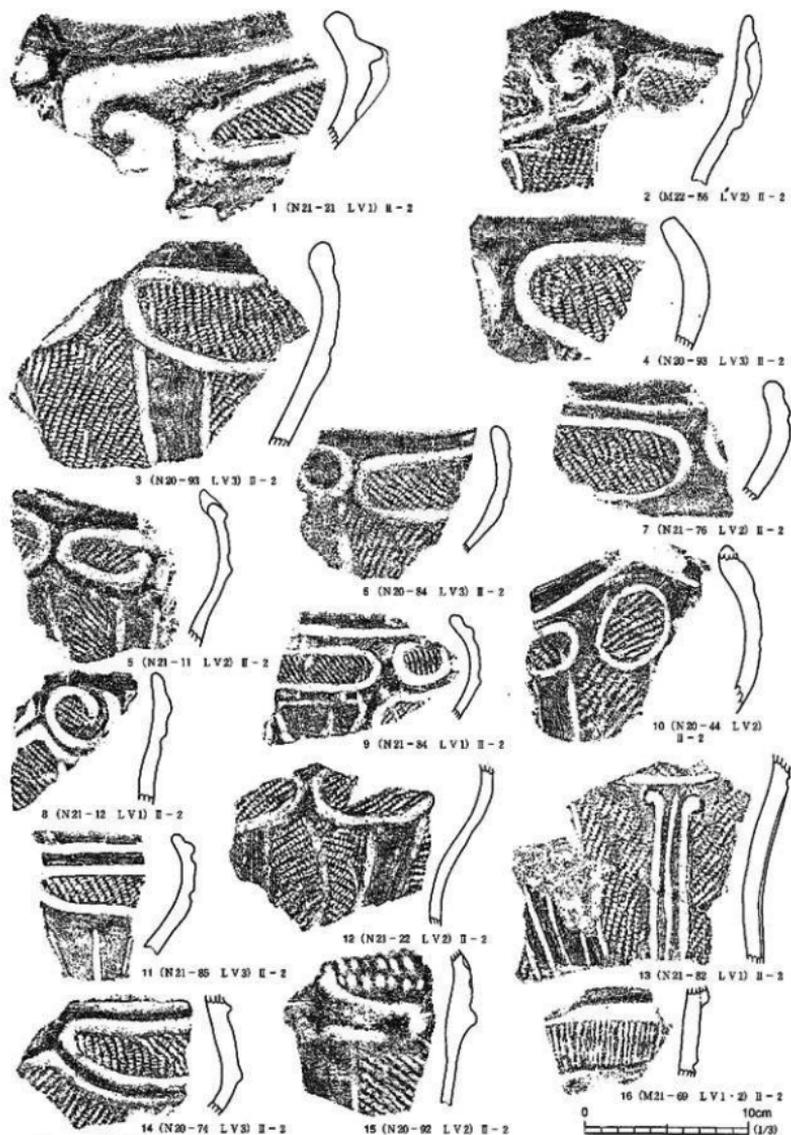


図433 遺構外出土遺物 (8)

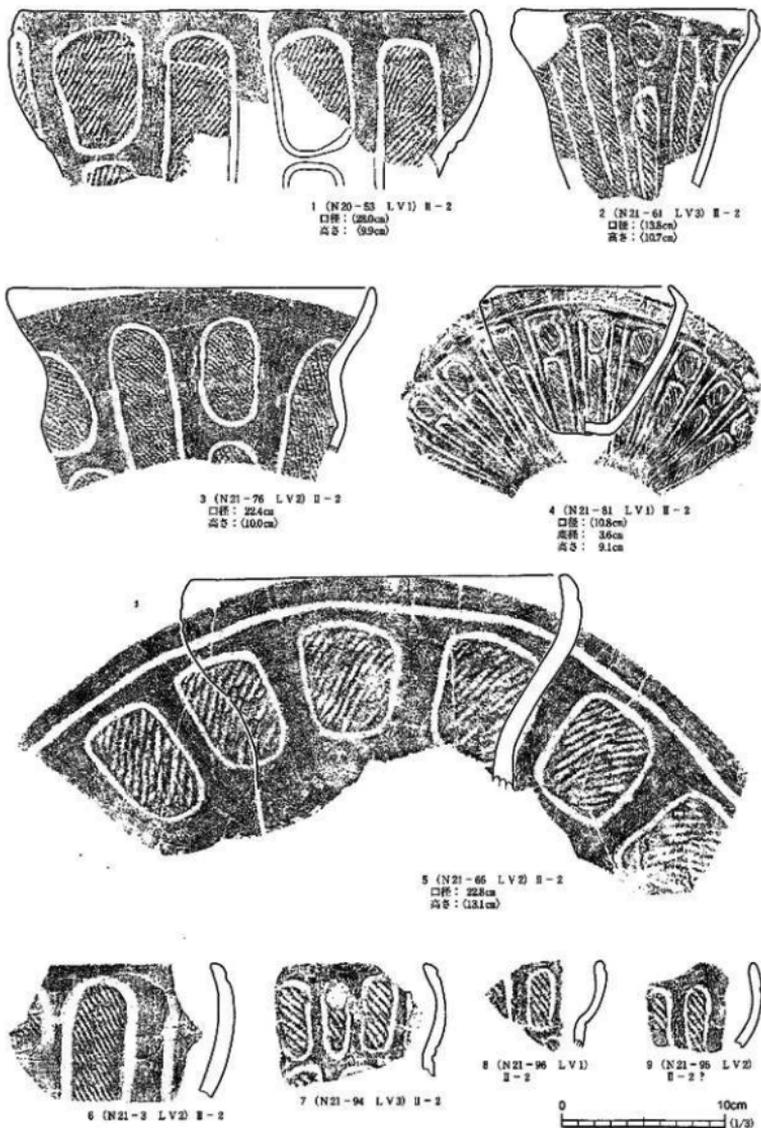


図434 遺構外出土遺物 (9)

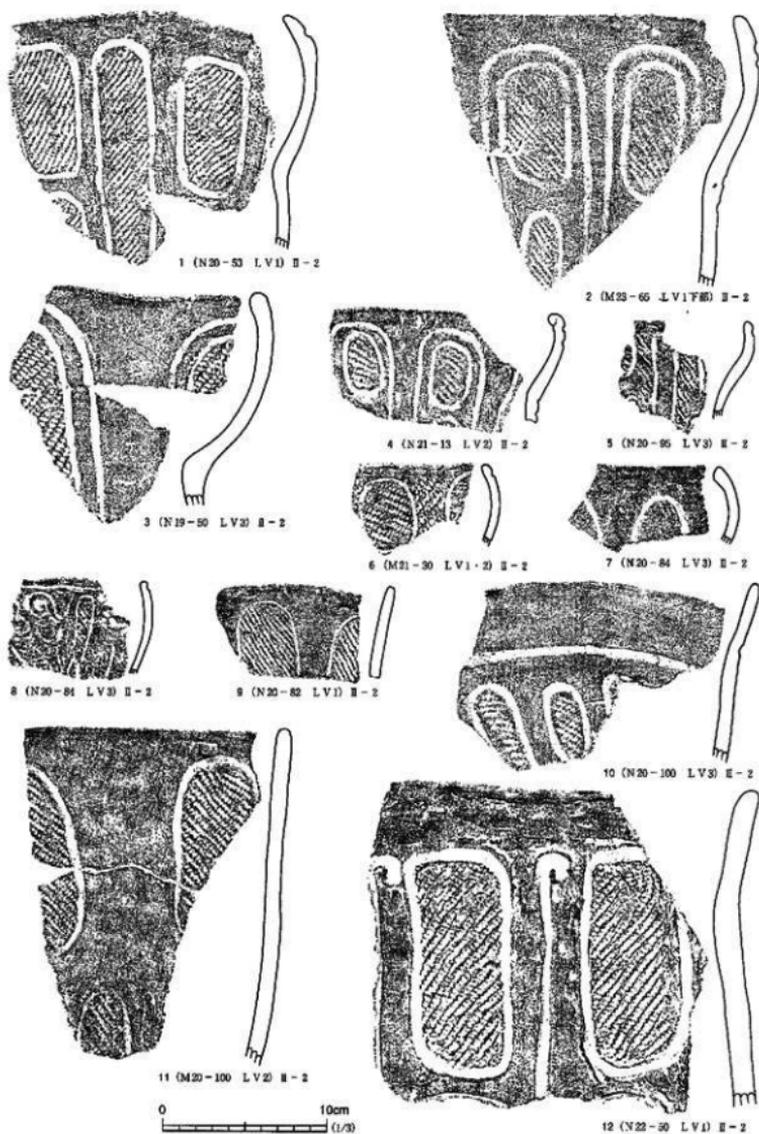


図435 遺構外出土遺物 (10)

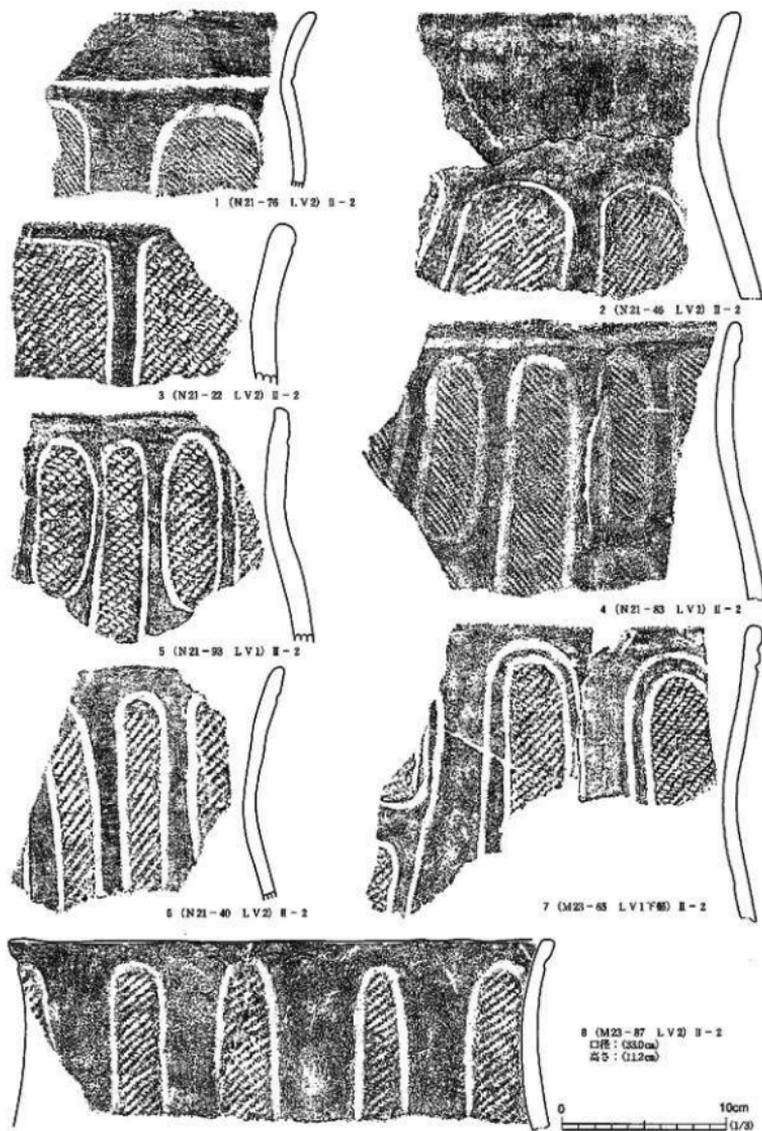


図436 遺構外出土遺物 (11)

すものが多い。中には、図437-10・11のように、区画文内を磨消し、無文部にするものも認められる。これらの文様には、図434-2のような楕円文と「 Ω 」文を組み合わせた文様と「 Ω 」文を交互に配すもの、図434-4、図435-2、図436-7の楕円文と「 Ω 」文を組み合わせた文様を「 Ω 」文で囲むものなどが認められる。また、図436-8、図437のように縦長の楕円文が配されるものが認められるが、いずれも破片資料のため全体のモチーフは不明である。

この他、図434-5や図435-12のように、胴部上半に楕円文を配し、胴部下半には個別の文様が施されるものも認められる。これらの土器については、本種に伴う胴部片の資料（図445-2・3・5-10、図447）を見ると、胴部下半の文様帯に「 Ω 」文が配されるものが多い。

●種 主に、「 Ω 」文を主文様としたものである。（図438、図445-4）

器形的には、図438に掲載した底部から口縁部まで、ほぼ直線的に外傾しながら立ち上がるものと、図445-4の胴部上半に膨らみを持ち、緩やかに外反しながら口縁部に立ち上がるものがある。口縁端部の立ち上がりは、図438-1・2の直線的に外傾しながら立ち上がるものと、図438-3-5の緩やかに内湾するものが認められる。1は、コップ形を呈した小型の深鉢形土器である。幅の広い凹線状の沈線で文様が施される。2は、細めの沈線で8単位の文様が施され、この内の2単位については、文様上部を沈線で連結している。3・5は、口縁部直下に巡らした沈線に懸垂文と炭手文の上端を連結させ、「 Ω 」状の文様を描いている。図445-4は、口縁部と胴部の括れに凹線を巡らせ、口縁部の無文部と胴部文様帯を区画している。

本種あるいは、後述する「種に伴う胴部～底部片について、図448-449に掲載した。施文された文様の多くは、凹線状の沈線で描かれるが、中には図448-5・6のように隆沈線で描かれているものもある。凹線で区画された文様帯内には斜行縄文が施されるが、図448-11・12の樹齒状工具で朱線文が施文されるもの、図449-12のような刺突文が施されるものがある。図448-10は、部分的に磨消されているため判断し難いが、附加縄文が施文されているものと思われる。また、図448-3・4のように胴部下半で凹線の施文を止め、胴部下端に縄文帯を有すものと、図449のように胴部下端まで凹線を施し、胴部下端が無文部となるものが認められる。図449-13は、円孔を有した器台である。

f種 「H」字状の文様が施された土器である。（図439）

器形的には、キャリパー状を呈すもの、口縁部に向かい直線的に立ち上がるもの、球体状を呈したものが認められる。文様は、口縁部から胴部にかけて配される。1を見ると、楕円文が崩れ、その一部が連結して「H」字状を呈しているのが窺える。4は、浅鉢形土器である。内外面ともに丁寧にミガキが施されている。深鉢形土器と比べて丁寧に作られ、外面の一部には赤彩が認められる。

g種 ステッキ文と「 Ω 」文が施された土器を本種とした。（図440-444）

器形的には、胴部に最大径を有す、大型の深鉢形土器が多い。本種の代表的な資料としては、図440-1が挙げられる。文様構成を見ると、ステッキ文と「 Ω 」文を組み合わせたものを1つの文様単位として配している。文様間が開く部分には、楕円文と「 Ω 」文を施す。また、図440-4の

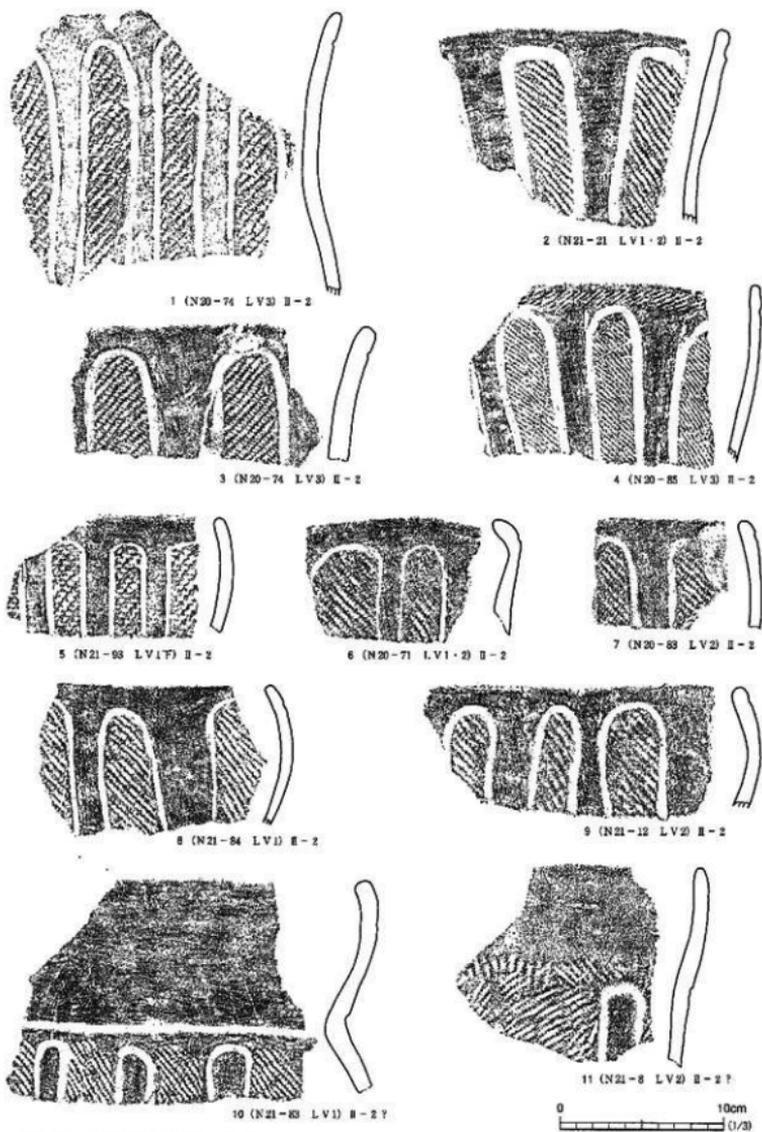


図437 遺構外出土遺物 (12)

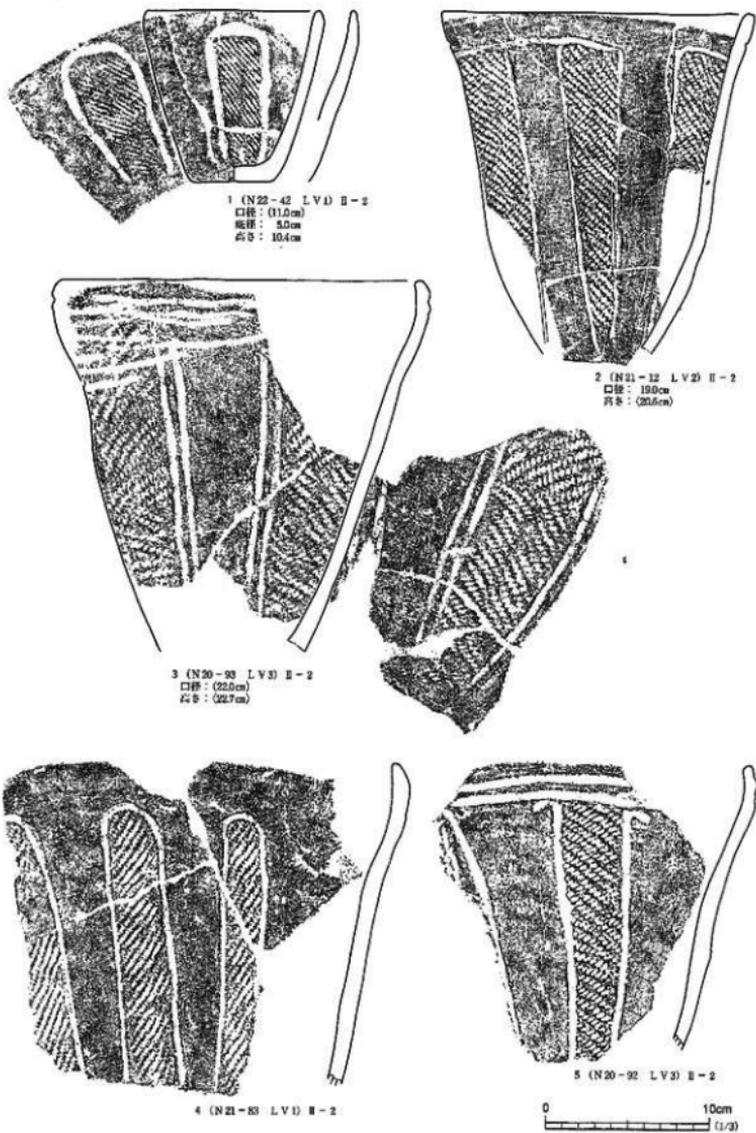


図438 遺構外出土遺物 (13)

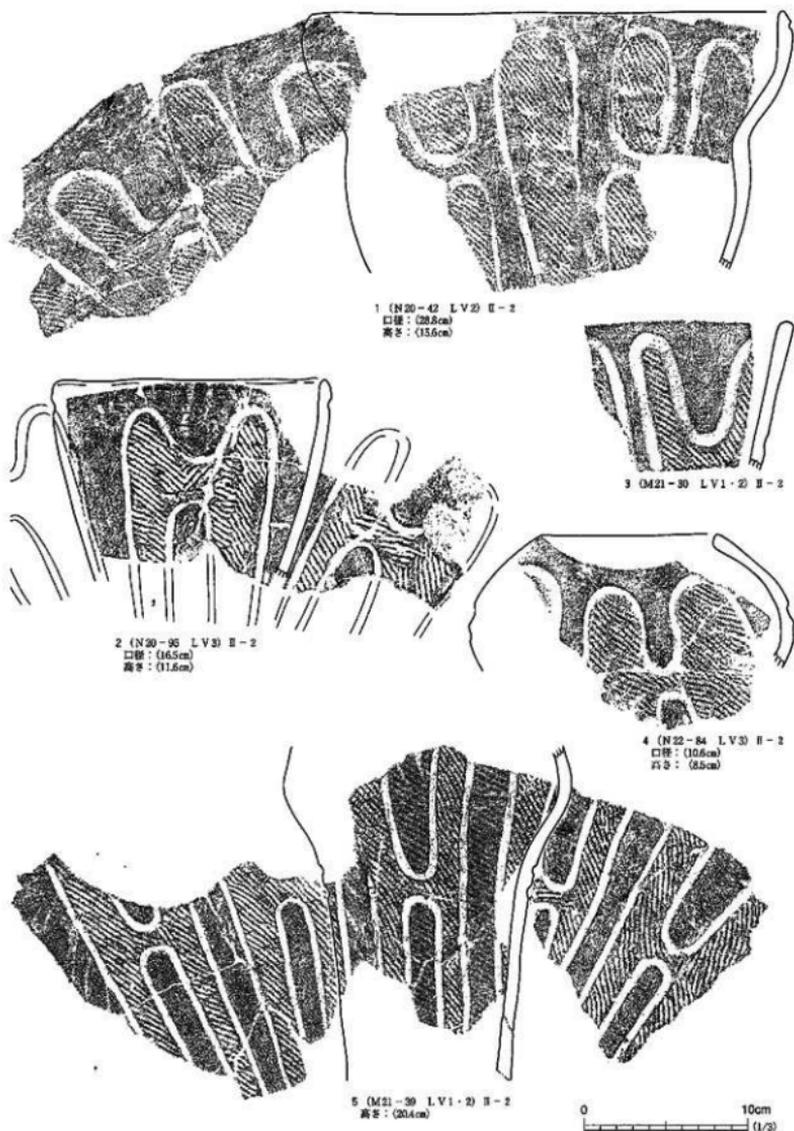


図439 遺構外出土遺物 (14)

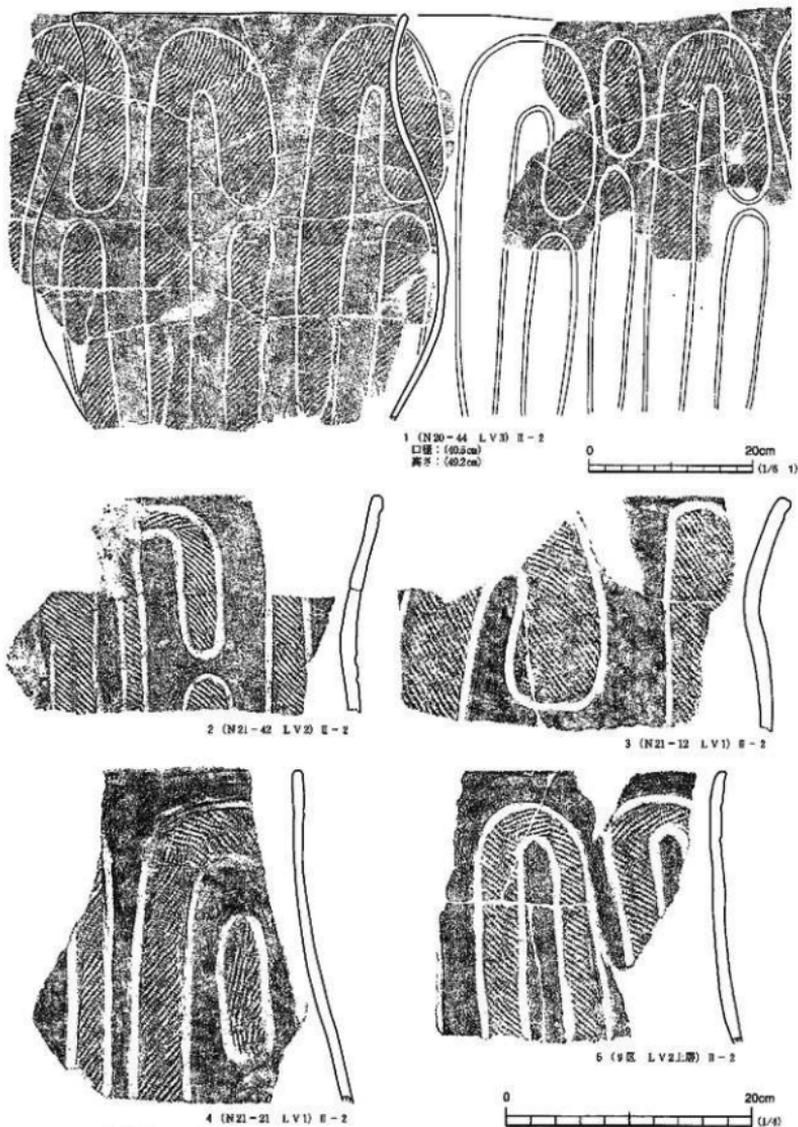


図440 遺構外出土遺物 (15)

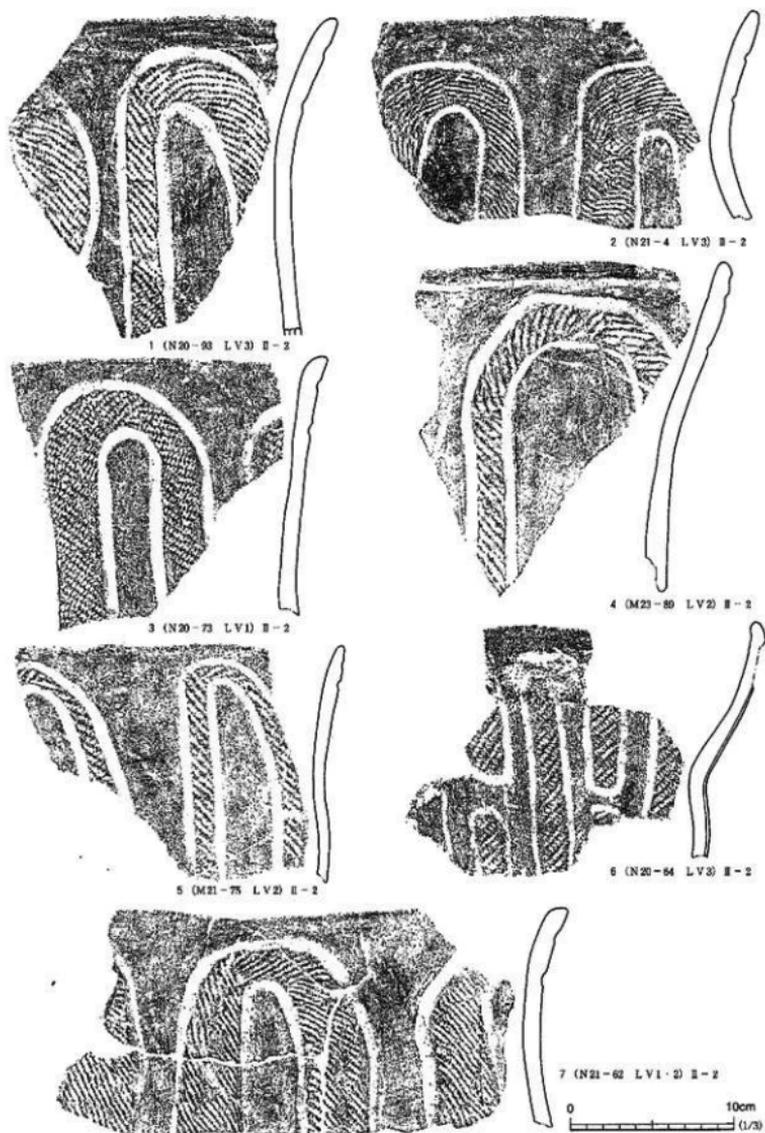


図441 遺構外出土遺物 (16)

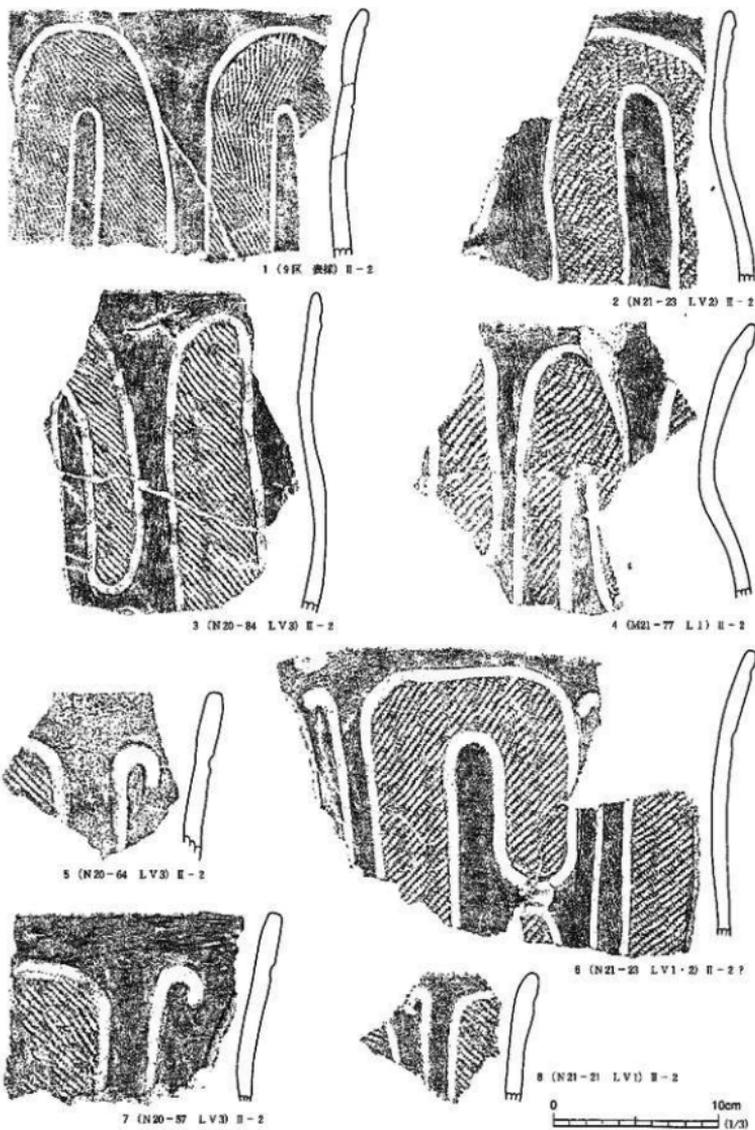


図442 遺構外出土遺物 (17)

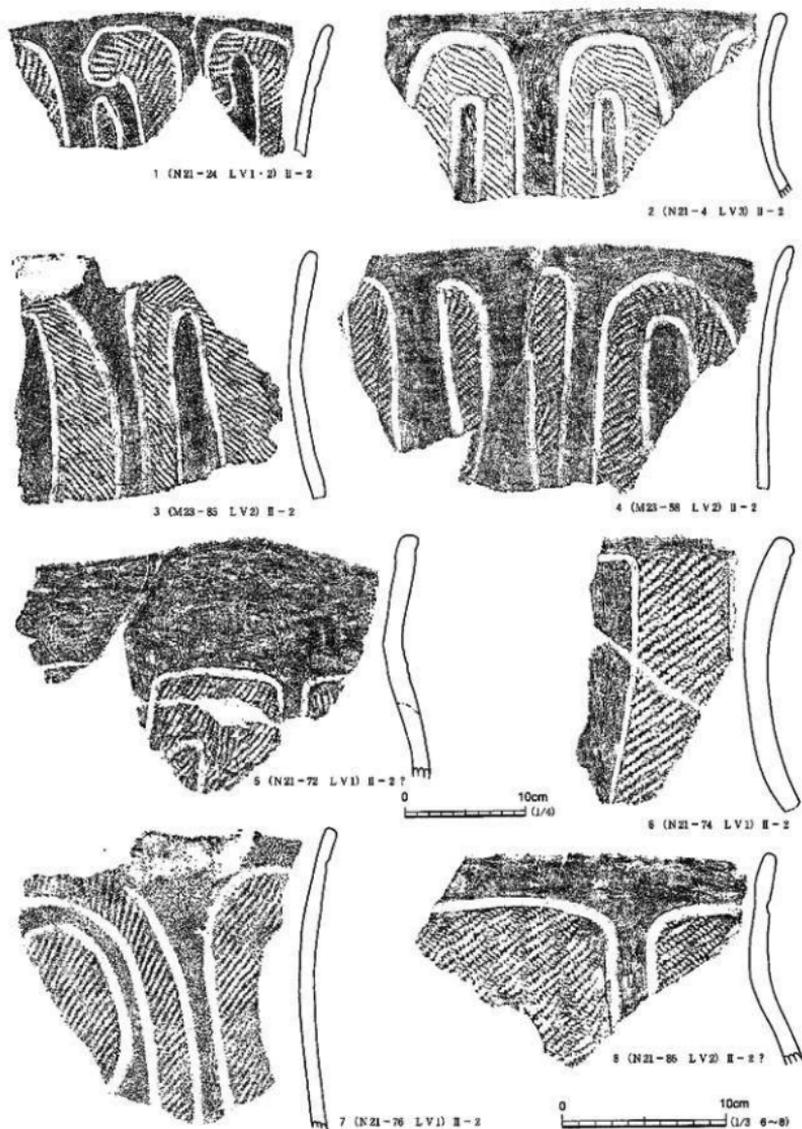


図443 遺構外出土遺物 (18)

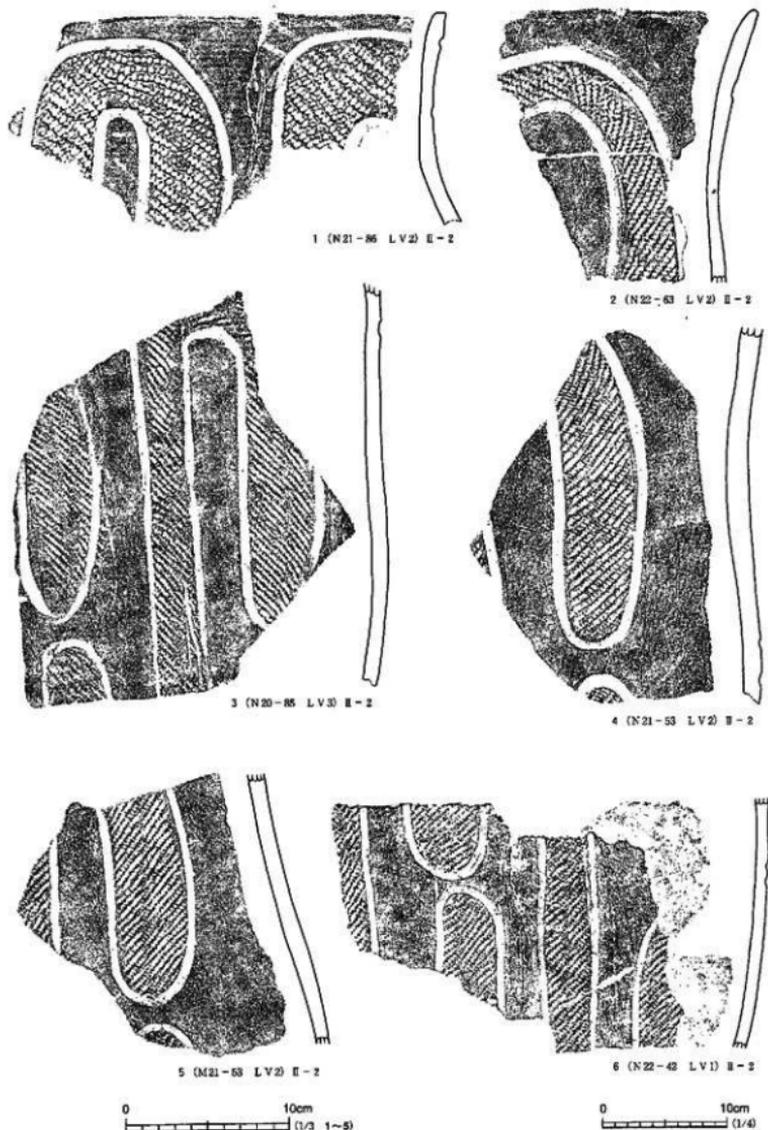


图444 遺構外出土遺物 (19)

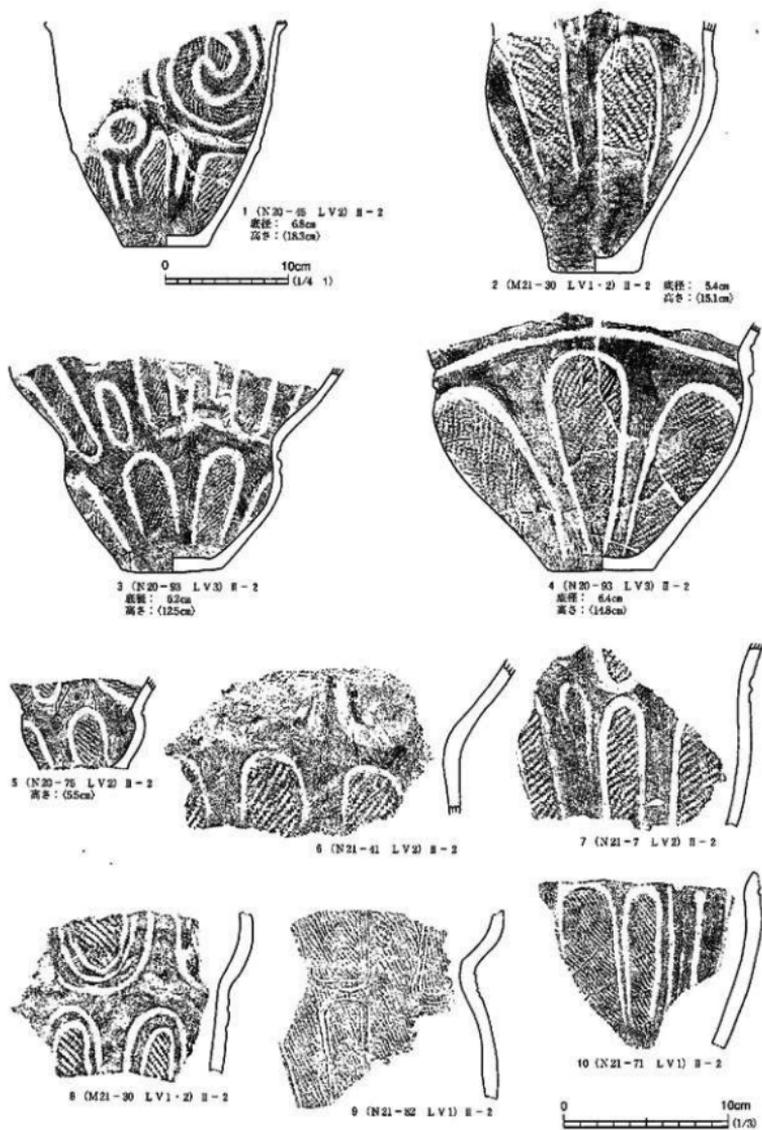


図445 遺構外出土遺物 (20)

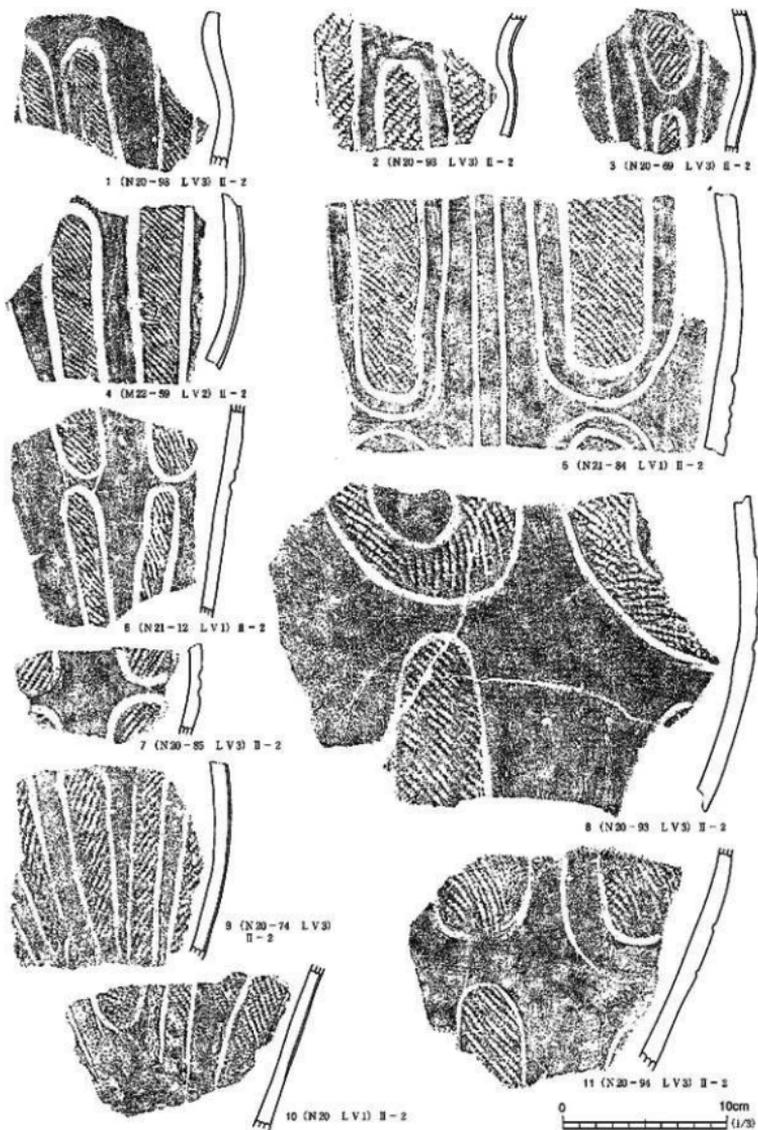


図446 遺構外出土遺物 (21)

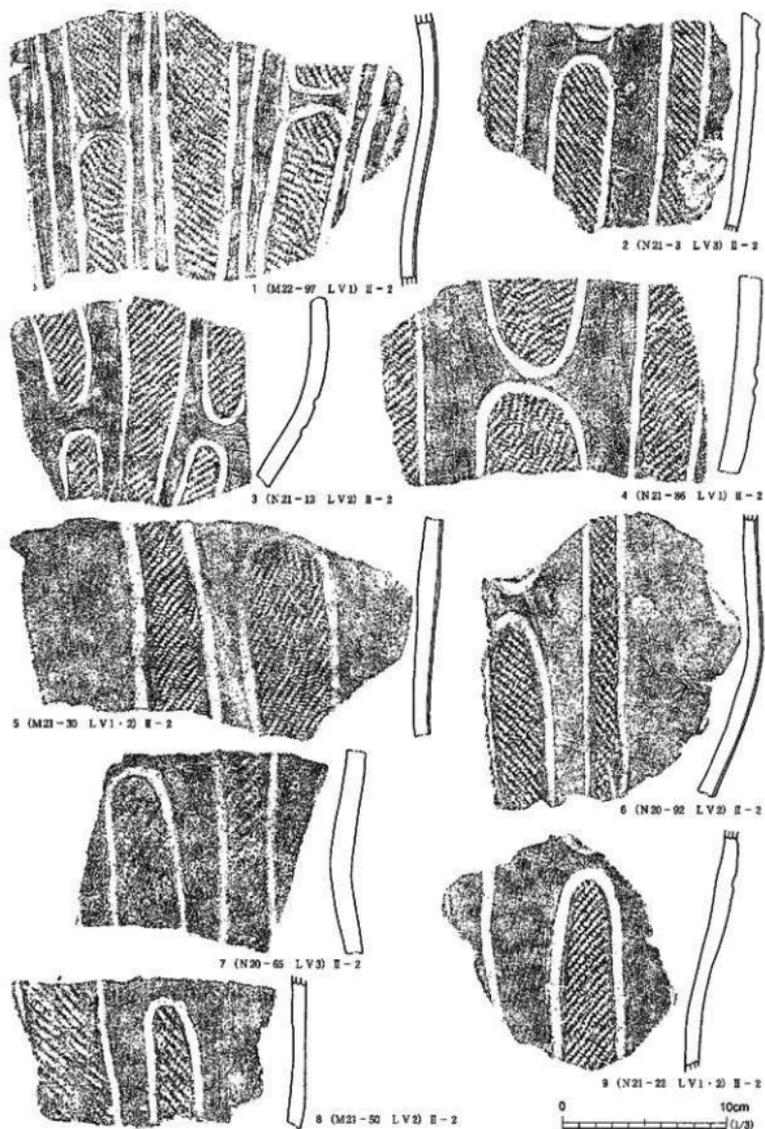


図447 遺構外出土遺物 (22)

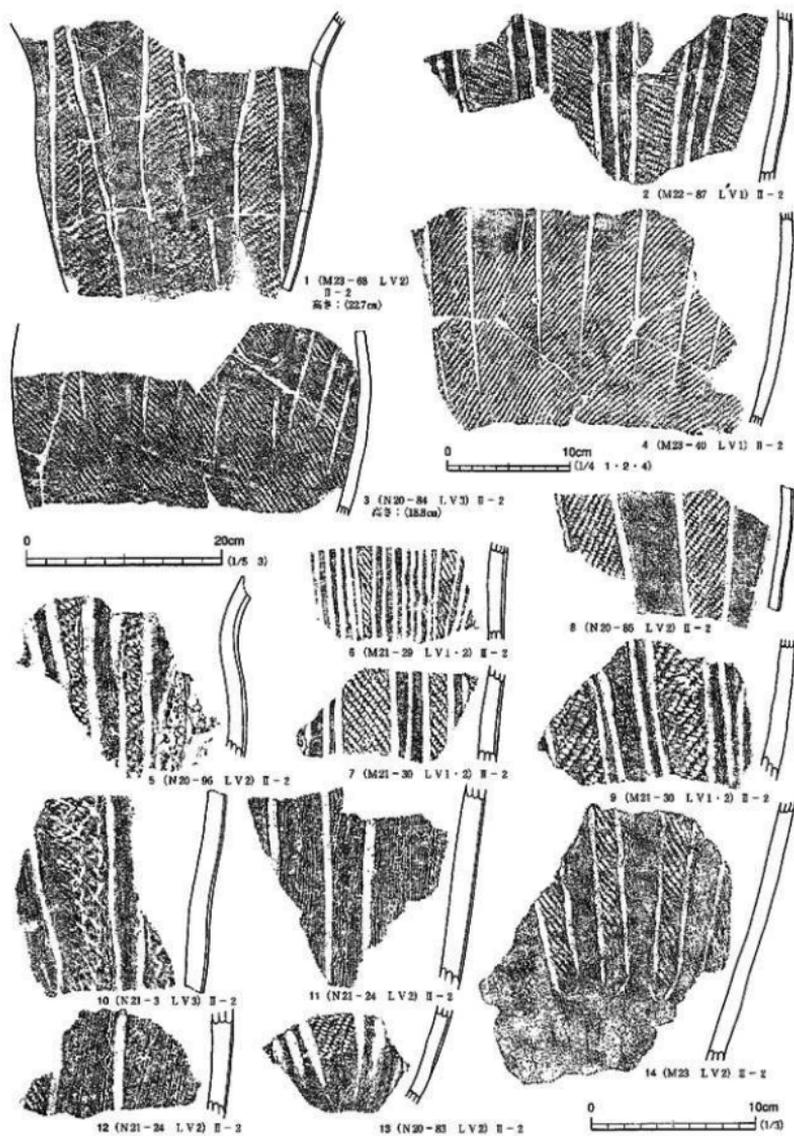


図448 遺構外出土遺物 (23)

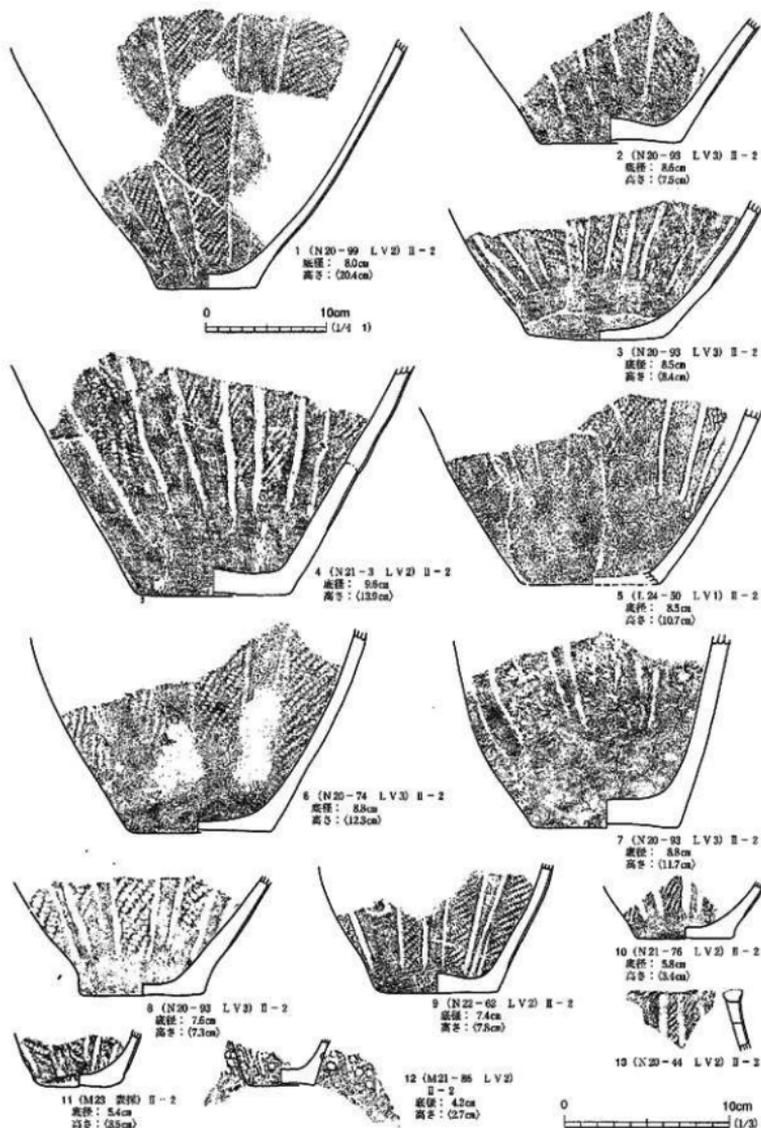


図449 遺構外出土遺物 (24)

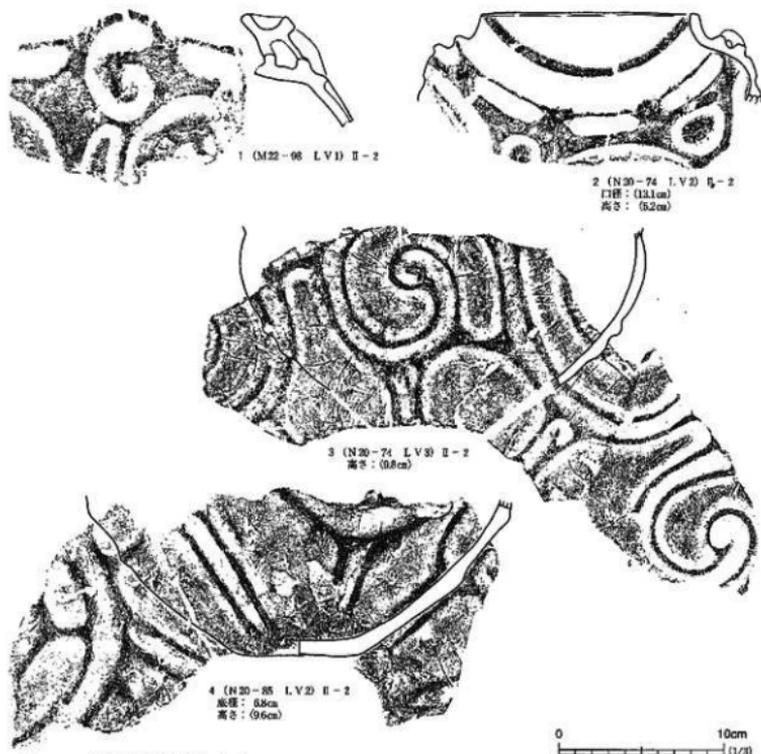


図450 遺構外出土遺物 (25)

ような、ステッキ文と楕円文を組み合わせたものや、図442-6～8の文様間に蕨手状の沈線を垂下させるものも認められる。ステッキ文は、文様上端が丸みを帯びるものや方形を呈すもの、ステッキの柄の部分が下方に長く延びるものと短いものなど、幾つかバリエーションが認められる。また、本種に伴う胴部片の資料については図447に掲載した。

h種 主に、陸線や凹線で文様が施された浅鉢形土器を本種とした。(図450)

1・2は、体部がソロバン玉状を呈した器形なると思われる。いずれも、口縁部が鋤状を呈し、口縁部と体部の括れに紐掛け状の中空突起が付される。1の突起には、縦位の双頭渦巻文が配されている。3・4は陸線で文様が描かれる。3は体部上半に渦巻文、下半には蕨手文が描かれ、4の体部下半には、「冂」文が施されている。これらの土器には、いずれも赤彩が施されている。また、4の外側は炭化物が付着し、黒く煤けている。

i種 主に、渦巻文が配された浅鉢形土器を本種とした。(図451～455)

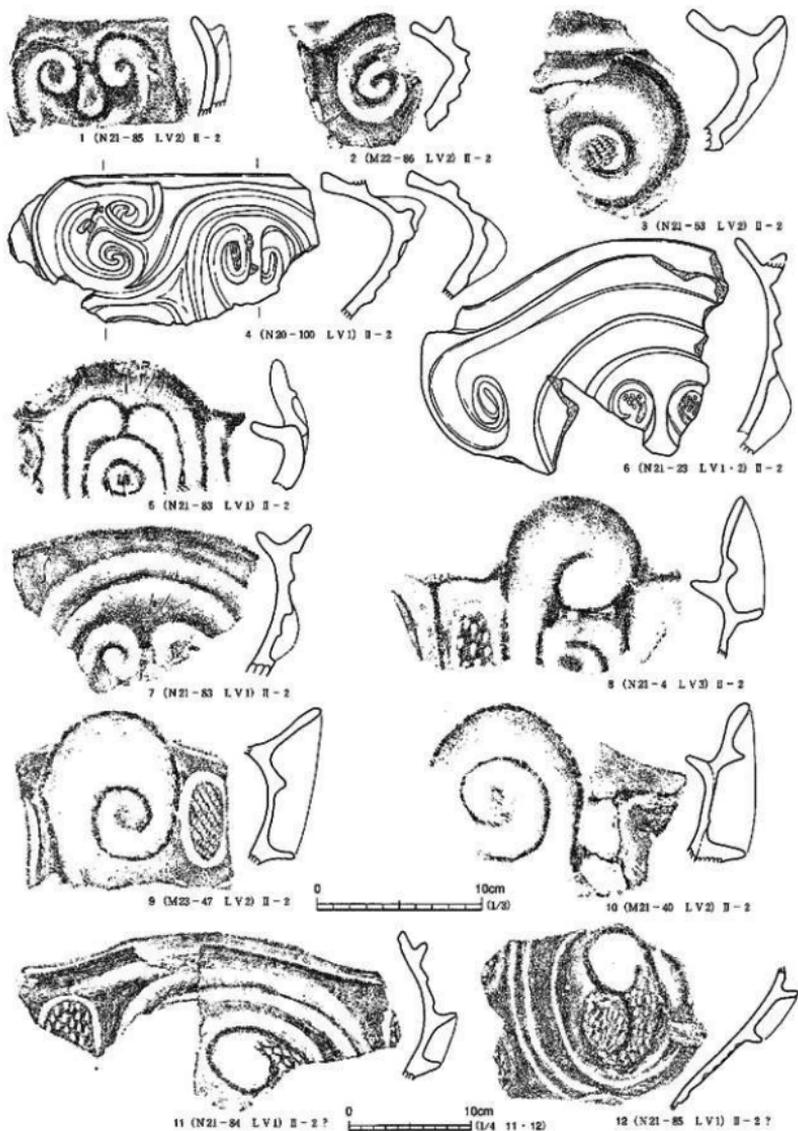


圖451 遺構外出土遺物 (26)

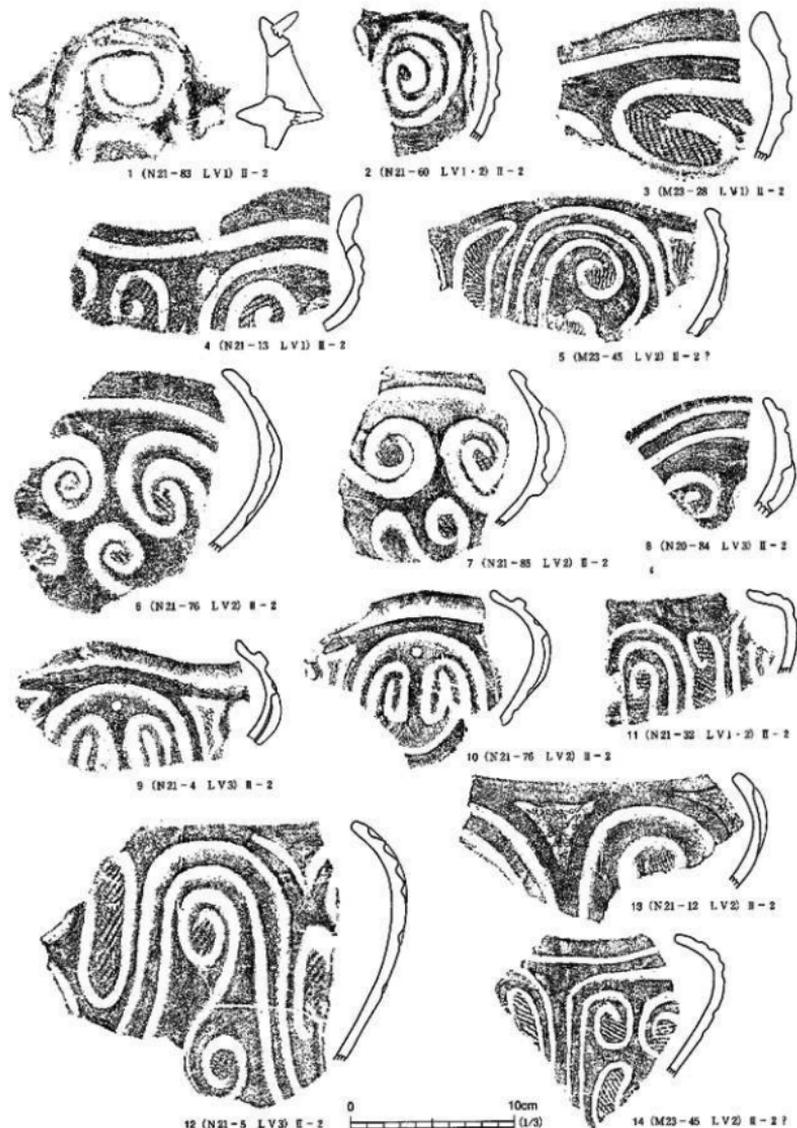


図452 遺構外出土遺物 (27)

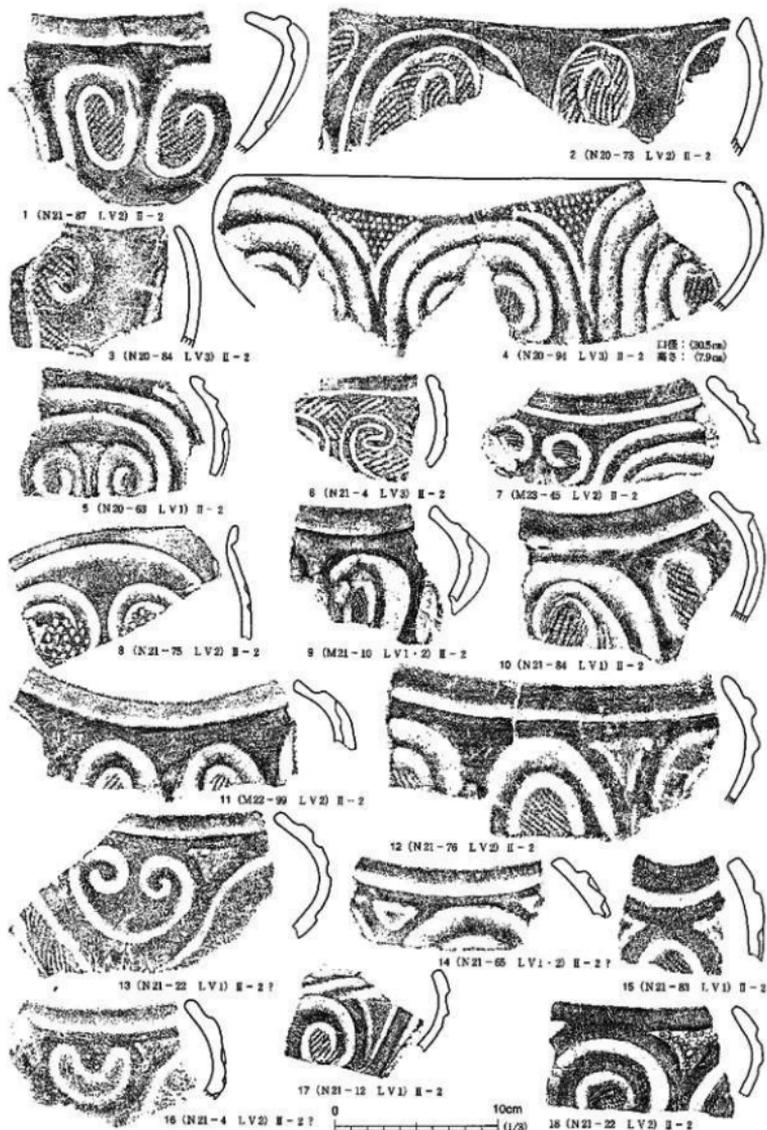


図453 遺構外出土遺物 (28)

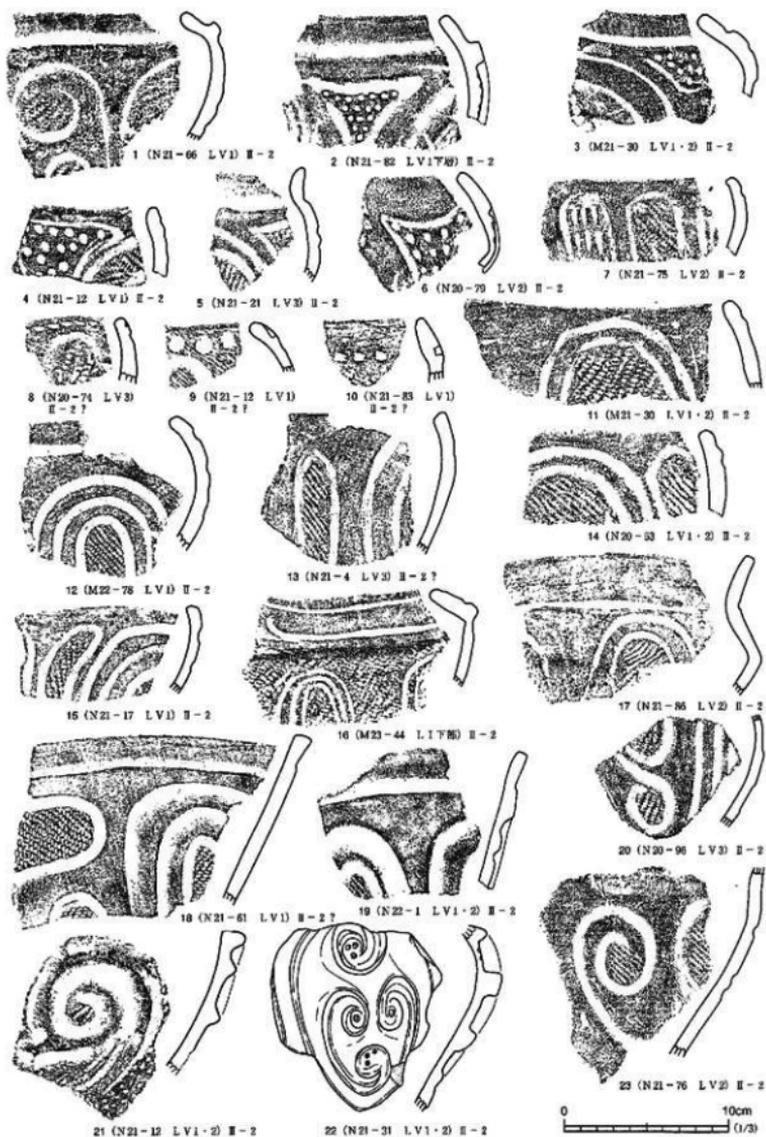


図454 遺構外出土遺物 (29)

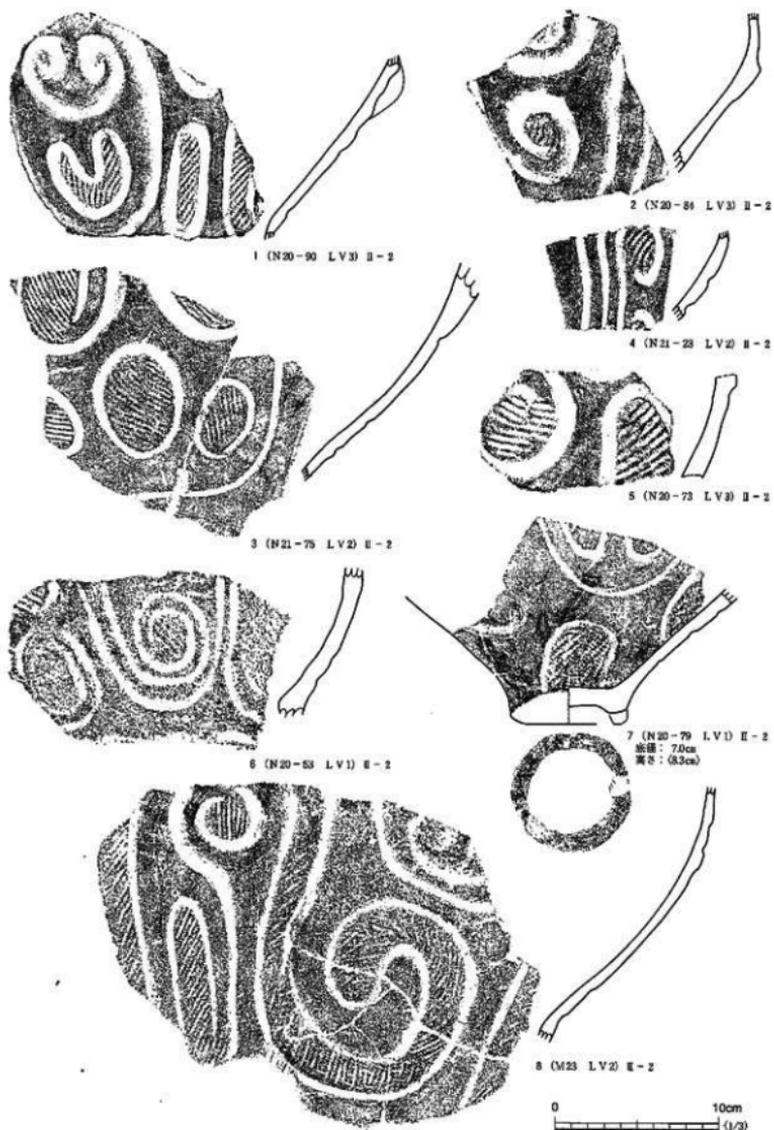


図455 遺構外出土遺物 (30)

器形的には、図451～453、図454-1～16の口縁部が内湾するものと、図454-17の外反するもの、同図18・19の直線的に外傾しながら立ち上がるものがある。これらの土器の口縁部を見ると、図451-5・8～10のような「く」の字状に内折して鋸状を呈しているもの、図451-3・4のように口縁部の境に段を有するもの、図451-1・11、図453-2～7のような口縁部と体部に明瞭な境がないものなどが認められる。

渦巻文は、図451-4・6、図453-4のように、主文様として施されるもの、図451-8～10の口縁部に庇状に付されるもの、図451-1、図452-6・7・14のようにモチーフの異なる渦巻文や楕円文を組み合わせ、顔面状の文様を描くものなどが認められる。図451、図452-1、図454-21・22は、陸縁で渦巻文が描かれた土器である。陸縁は、器面から庇状に突き出し、立体的な装飾となるものが多い。図452-1は、口縁部に中空突起が付く。また、図451-8の内外面、9の外面には炭化物が付着し黒く煤けている。図452-2・7～10・13、図453-1・3～12・17・18は稜沈線で渦巻文、図454-2・3・18・19は、稜沈線で文様が描かれる。渦巻文の多くは、両端の渦巻に挟まれた部分が鼻状に高まる。図452-3～5・14、図453-2・13・15・16、図454-1・20・23は沈線で渦巻文、図454-3～17は、沈線で文様が描かれた土器である。施された沈線は、幅広く凹線状のものが多い。

図455には、体部から底部にかけての資料を掲載した。同図1は、双頭渦巻文と「U」字状のアルファベット文が施され、それらの文様を楕円文で区画している。また、8は、「S」字状のアルファベット文や炭手文、「N」文が施されている。7の底部は高台状を呈し、高台の2か所に棒状工具で刺突が施される。

以上が、Ⅱ群2類土器としたものである。土器に施された凹線の多くは、文様施文後、ミガキやナデが施され、平滑に仕上げられたものが多い。土器の焼成は良好で、色調はぶい黄褐色～暗褐色を呈し、土器の胎土には砂粒や金雲母が認められる。また、浅鉢形土器については、内外面とも比較的丁寧に磨かれ、器面に赤彩が認められたものもあった。これらの土器の胎土に含まれる砂粒は、他の土器に比べ非常に細かく、焼成も良好で硬質である。このため、これらの浅鉢形土器は、明らかに他の土器と区別して作られたものと思われる。

Ⅱ群3類土器 (図456～485, 写真317～319)

図456～485は、Ⅱ群3類土器と分類したものである。器形的には、深鉢形土器と浅鉢形土器、特殊器形などが認められる。Ⅱ群3類土器については、大木10式土器、加曾利EⅣ式土器の範疇に属す土器と考えている。本類の報告にあたっては、器形や施文される文様の特徴などから、a～p種に区分した。

a種 胴部上半～下半にかけてアルファベット文を施すもの。(図456)

器形は、1の胴部下半に膨らみを持ち、胴部上半から口縁部に向かい直立気味に立ち上がり、口縁端部が緩やかに外反するもの、2～4の胴部下半が膨らみ、胴部中央から上半にかけて緩やかに括れ、外反しながら口縁部に立ち上がるもの、5の胴部が膨らみ、口縁部が直立気味に立ち上がる

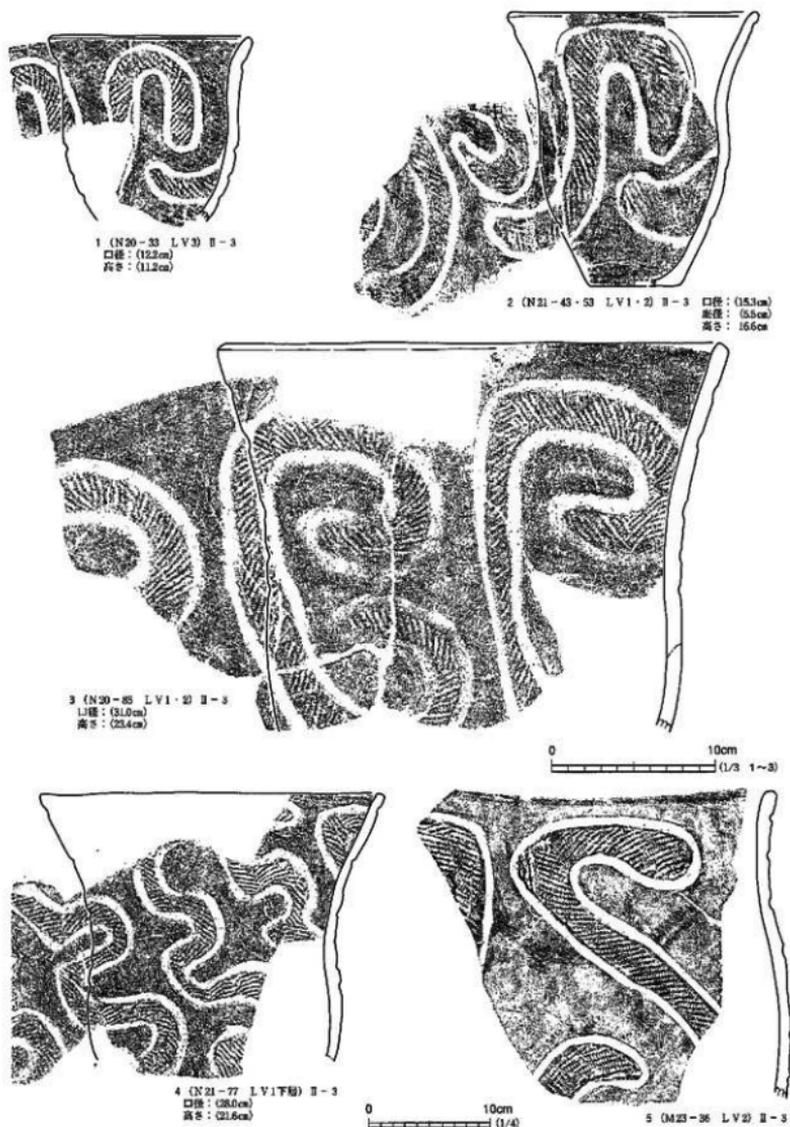


図456 遺構外出土遺物 (31)

ものが認められる。文様は、凹線で施されているが、3・4の凹線は稜沈線に近い。

b種 アルファベット文や楕円文を胴部上半と下半に個別に施すもの。(図457-1・3, 図466-4~6・9, 図467・470~474)

器形は、図457-1・3, 図467-1・2, 図472・473の胴部中央~上半に括れを有し、口縁部が内湾するものと、図466-5・6・9, 図467-3~7, 図470-1・2・4・13~15, 図471-1~7の口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がるものが認められる。土器に施された文様は、凹線や稜沈線で描かれるものが多いが、図473-5・7のように隆線が施されるものも認められる。文様帯内には、縄文が施される場合が多いが、中には刺突文が充填されているものや文様帯内を磨消して無文部とするものもある。では、本種の文様構成について、もう少し詳しく概観してみる。

土器に施された文様は、胴部上半と下半に個別のアルファベット文を施すもの(図457-1)や胴部上半にアルファベット文、下半に楕円文が配されるもの(図457-3)が認められる。口縁部に施された文様を見ると、アルファベット文を主文様とし、文様間が間延びする部分に楕円文や渦巻文を施すもの(図466-4, 図467-1), アルファベット文と楕円文を交互に配すもの(図472-8・10・11・14~16)がある。また、図473-8のように文様間の隙間に刺突文を施すものや図473-9のように楕円文を配すものなども認められる。図473-8・10の楕円文の末端は、瘤状を呈している。口縁部の文様帯をもう少し詳しく見ると、口縁部直下に無文帯を有するもの(図457-1, 図471-5, 図472-9~18)と、縄文帯を有するもの(図473)などがある。また、図474, 図476-2~14, 図477-1・2には、本種の胴部~底部と考えられる破片資料を掲載した。

c種 胴部が膨らみ、緩やかに外反しながら口縁部に立ち上がる器形を本種とした。(図457-4, 図465)

器形を詳しく見ると、図457-4, 図465-2の胴部中央が膨らみ球体状を呈すものと、図465-1・3~6・8の、胴部上半に膨らみを持つものが認められる。口縁部と胴部は、凹線で区画されることが多く、口縁部は無文部となる。

文様は、凹線や稜沈線、沈線が施されるものが多いが、図465-4のように隆線が施されるものもある。文様帯内は、縄文を施すものと文様帯内を磨消し、無文部となるものも認められる。胴部に施された文様は、図457-4, 図465-1・2のアルファベット文状に描かれたものや、図465-4・7・8のように、方形ないし三角形の区画文を施すものなどがある。また、文様間の隙間には、図465-1~3のように三角形の区画文内に刺突文を施すものや、図465-5・6の区画文を持たず、文様間の隙間に刺突文を施しているものも認められる。

d種 胴部上半にアルファベット文を配し、胴部下半に縄文施文部を有するもの。(図457-2・5, 図476-1)

器形的には、体部あるいは胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が「く」の字状に屈折する図457-2の浅鉢形土器と図457-5の深鉢形土器、図476-1のような胴部下半に膨らみを持ち、胴部上半に括れを持つ深鉢形土器が認められる。図457-2・5の資料を見ると、口縁部に無文帯を有し

ている。胴部上半に施される文様は、稜沈線状の凹線で描かれる。図457-2は、横位に展開する「S」字状のアルファベット文、図457-5は、「e」字状のアルファベット文を縦位に施す。また、図476-1は、「C」字状のアルファベット文を上下2段に配している。

●種 胴部上半にアルファベット文を配し、胴部下半の縄文施文部の上端を凹線で区画するもの。(図457-6、図458-1・2、図477-3~9、図478)

器形的には、図457-6の体部が大きく外傾しながら立ち上がり、口縁部が大きく内湾する浅鉢形土器や、図458-1の胴部下半から口縁部まで緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる深鉢形土器、図458-2のような胴部下半に膨らみを持ち、胴部下半から中央にかけて緩やかに括れて口縁部に立ち上がる深鉢形土器などが認められる。

文様は、凹線や稜沈線で描かれる。土器に施された文様を見てみると、図457-6のような異なるアルファベット文を組み合わせ、1つの文様としたものを配し、その文様間に楕円文やアルファベット文を施すもの、図458-1のように「U」字状のアルファベット文を配し、文様間に蕨手文が崩れ「S」字状を呈した懸垂文が施されるものなどが認められる。図458-2などは、「S」字と「C」字状のアルファベット文を交互に配している。図477-3~9、図478に掲載した胴部~底部の資料を見ると、「C」・「e」字状の大型のアルファベット文が多用される。

また、図466-1~3の胴部上半に横位に展開する大型のアルファベット文を有する資料や、図468・469・475の胴部上半から下半にかけて、大型のアルファベット文を縦位に配した資料についても、遺構内から出土した完形資料などから、本種あるいはd種に伴うものと考えている。

f種 凹線ないし隆沈線で文様が描かれたもの(図466-7・8・10・11)

図466-7・8は凹線、同図10は隆沈線、同図11は稜沈線が施される。7の口縁部直下には波頭文、10・11は口縁直下に無文帯を有す。10の胴部には方形の区画文が施され、区画文内には縄文が施される。

g種 隆線ないし隆沈線が施された土器である。(図458-6、図462・463)

深鉢形土器の器形には、図458-6の胴部中央から上半に膨らみを持ち、やや外傾しながら直線的に口縁部へ立ち上がるものと、図462、図463-1・2のような胴部上半で大きく括れ、口縁部が内湾するものがある。浅鉢形土器は、図463-3~6のような体部が球体状を呈したものが多い。

施された文様は、図458-6、図463-2~6の1本隆線で施文するものと、図462、図463-1のような2本隆線で文様を描くものがある。隆線の両側は、ナデが施されるものが多いが、図463-3・6のナデは、沈線状を呈している。また、隆線の断面形は、三角形になるものが多い。文様のモチーフは、図458-6、図462-1・2の渦巻文を描くものや図463-6のような蕨手状の文様を施すものが認められる。また、隆線で区画された縄文部は「e」字状、三日月状、方形状を呈している。図462に掲載した、2本隆線で文様を描き、口縁部が内湾する深鉢形土器は、関東地方に類例が認められる。

h種 隆線区画による縄文帯によって文様が施された土器。(図458-5、図479・480)

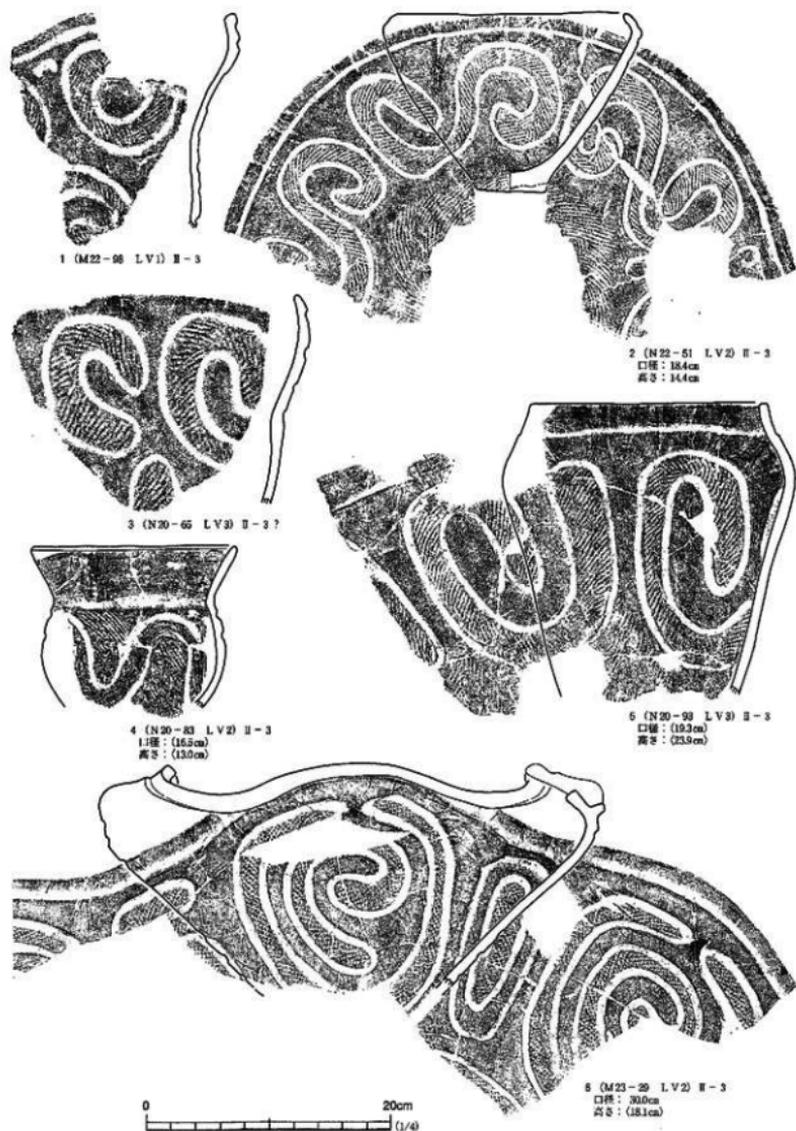


図457 遺構外出土遺物 (32)

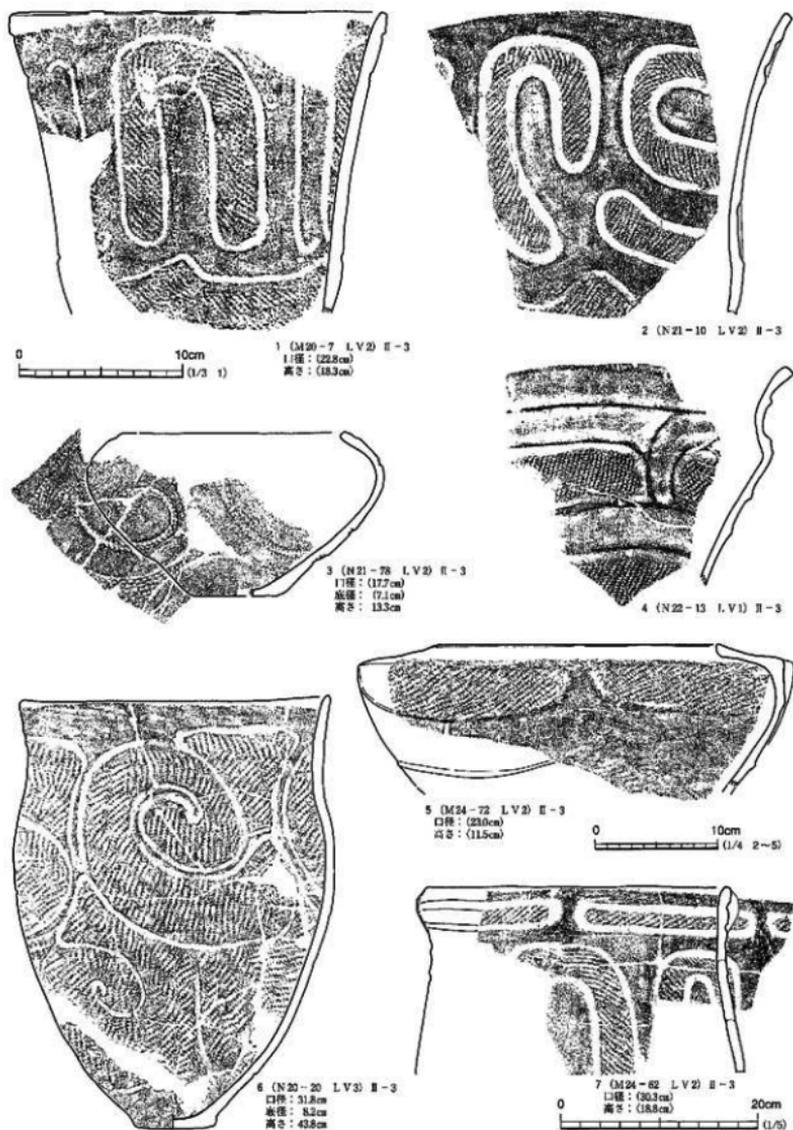


図458 遺構外出土遺物 (33)

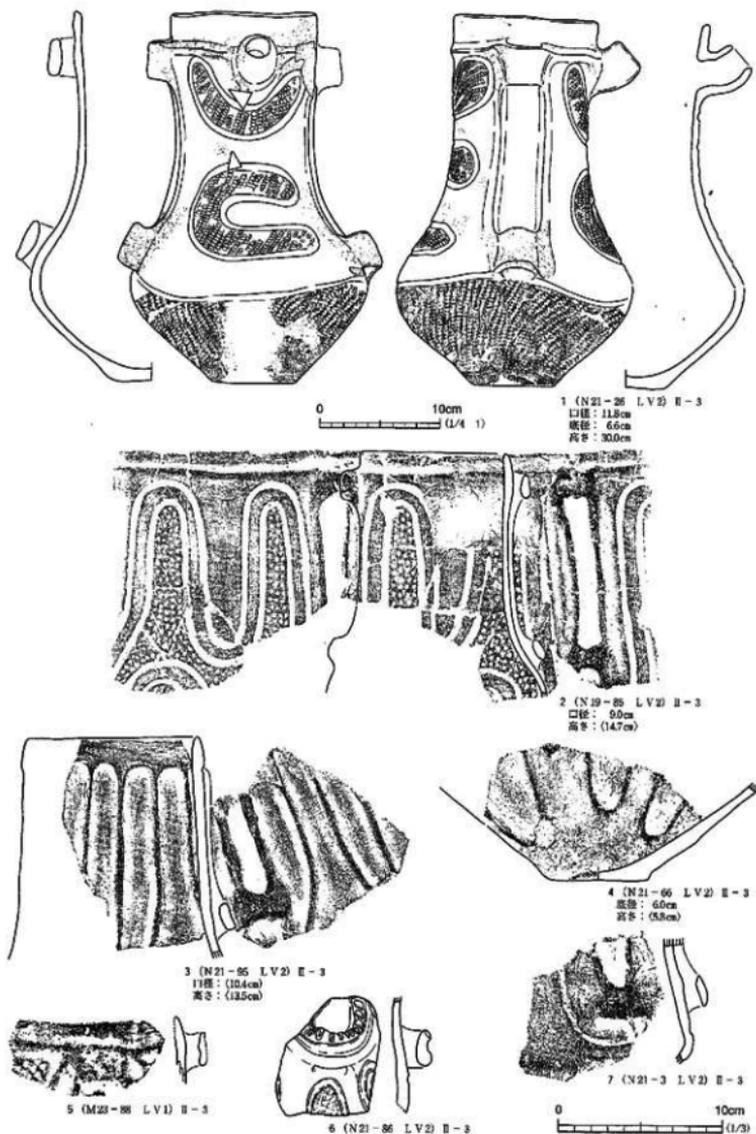


図459 遺構外出土遺物 (34)

第1期 高木遺跡

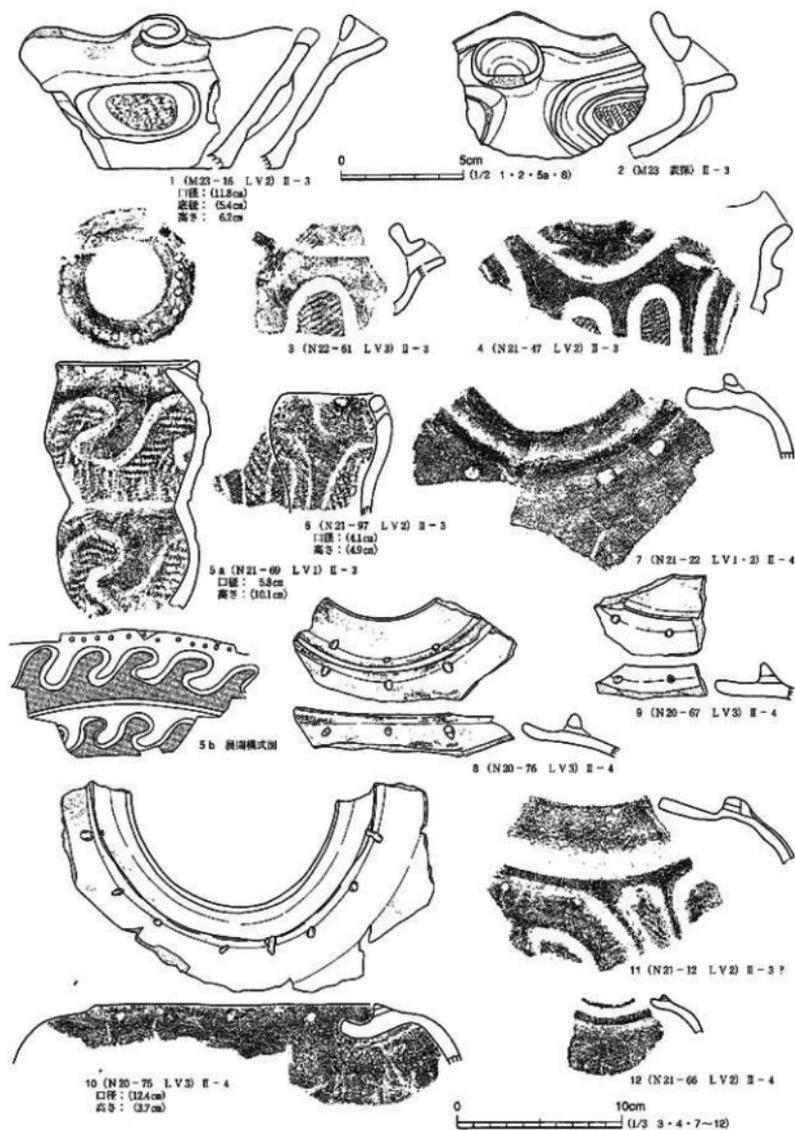


図460 遺構外出土遺物 (35)

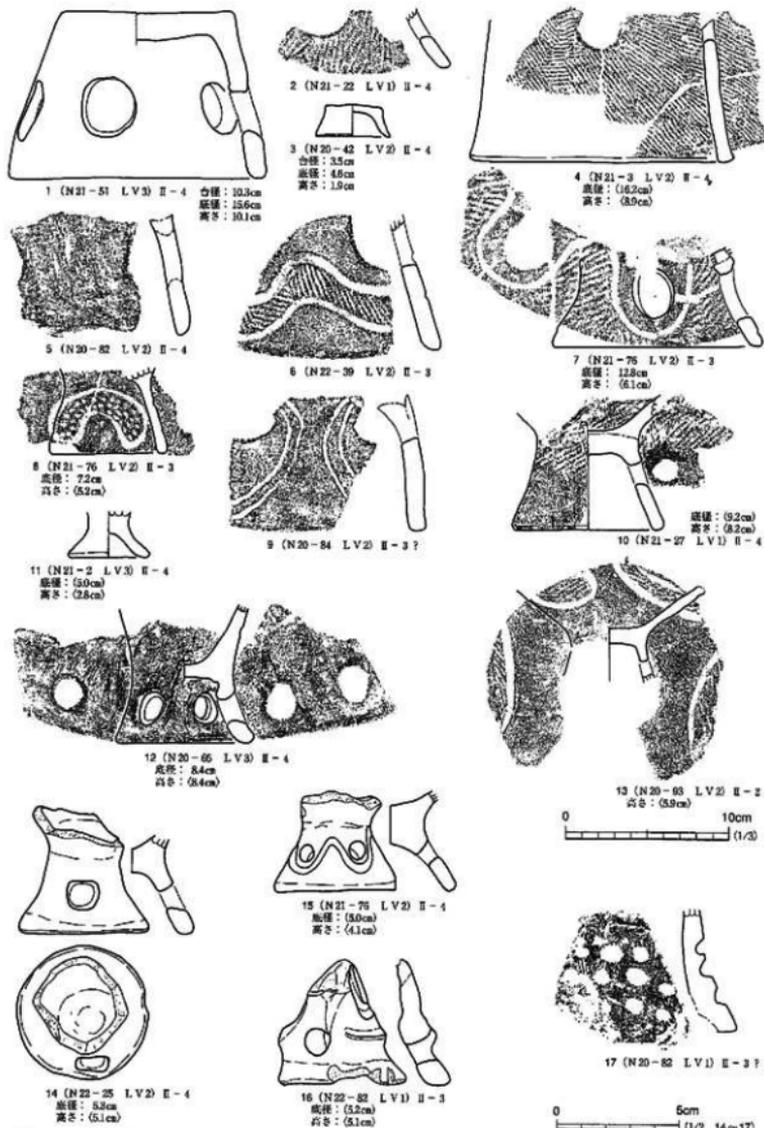


図461 遺構外出土遺物 (36)

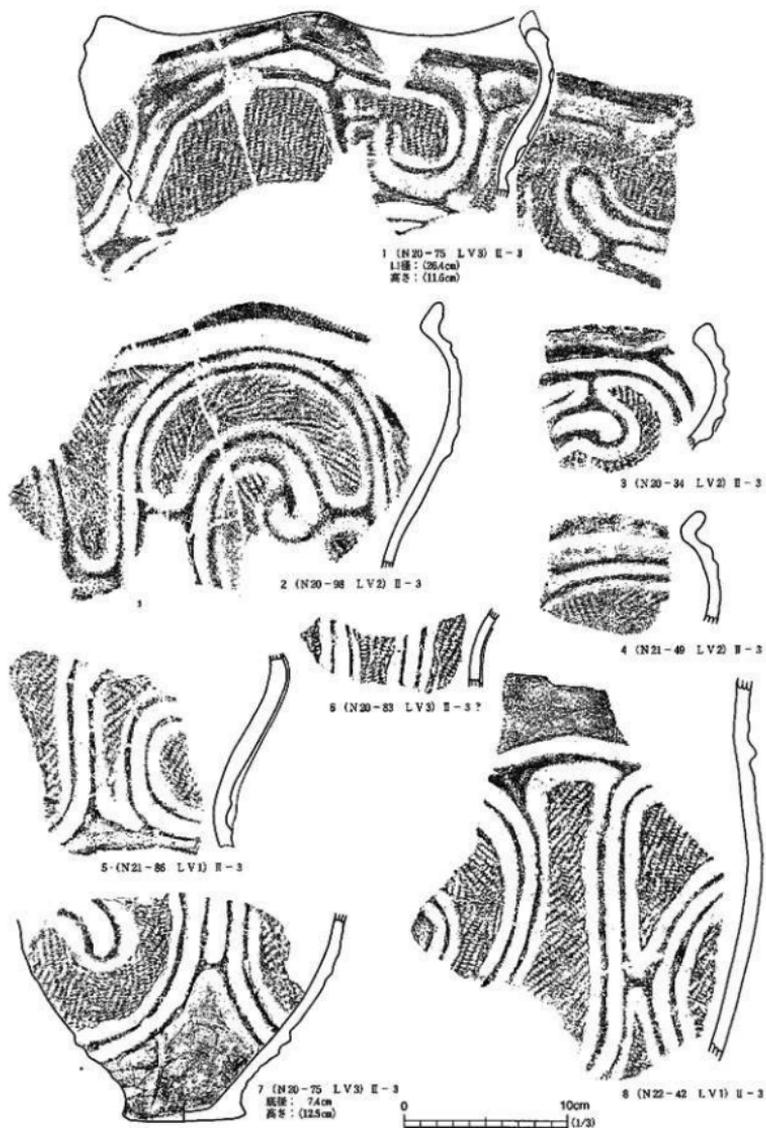


図462 遺構外出土遺物 (37)

器形には、図479-1・3のような、胴部上半が括れ、口縁部に向かい外傾しながら立ち上がり、口縁端部が内折するもの、図479-2・4・6・10の口縁部が外傾気味に立ち上がるもの、図479-5・8・9・11の口縁部が内傾気味に立ち上がる深鉢形土器と、図458-5のような、体部が直線的に外傾し、口縁部が大きく内折する浅鉢形土器などが認められる。

隆線による区画文は、縄文施文後に施され、その後隆線の両側を沈線風になり、隆線に再調整を施すものが多い。中には、図479-5の隆線施文後に縄文を施すものや、図479-4のような隆線施文後に縄文を施し、その後、部分的に隆線をなぞるものも認められる。これらの手法は、後述するi・j種に施された隆線区画と基本的に同じである。施された文様については、いずれも破片資料のため、全てのモチーフを知ることはできないが、「C」字や「U」字状のアルファベット文が配されるものが多い。また、図479-2・10、図480-5のように区画文内や文様間の隙間に刺突文を施すものも認められる。図479-9、図480-6の外面には、赤彩が認められる。図480-7は、突起が付された浅鉢形土器である。図458-5の浅鉢形土器は、体部上半に楕円状の区画文を配し、隆線による波状線で体部下半の縄文部を区画する。

i種 隆線区画による無文帯によって、文様が施された土器である。(図481)

器形的には、口縁部が緩やかに外反して立ち上がる深鉢形土器と、体部が球体状を呈す浅鉢形土

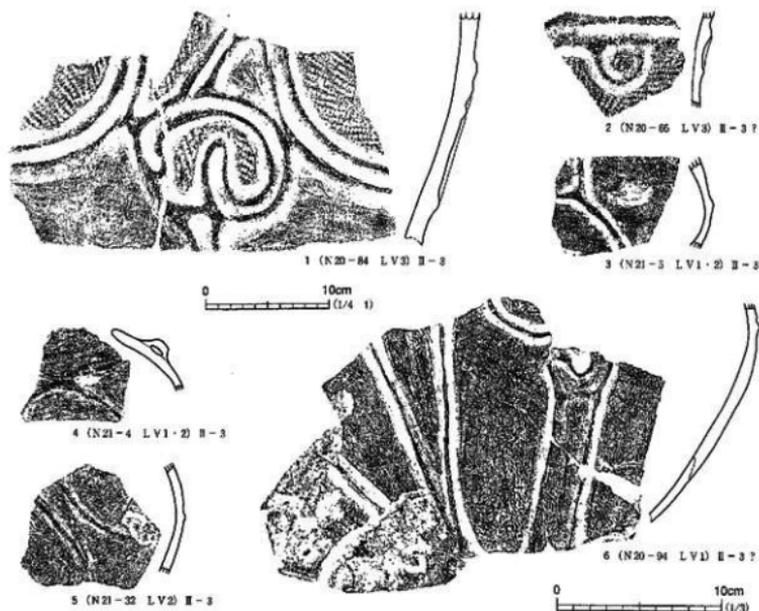


図463 遺構外出土遺物 (38)

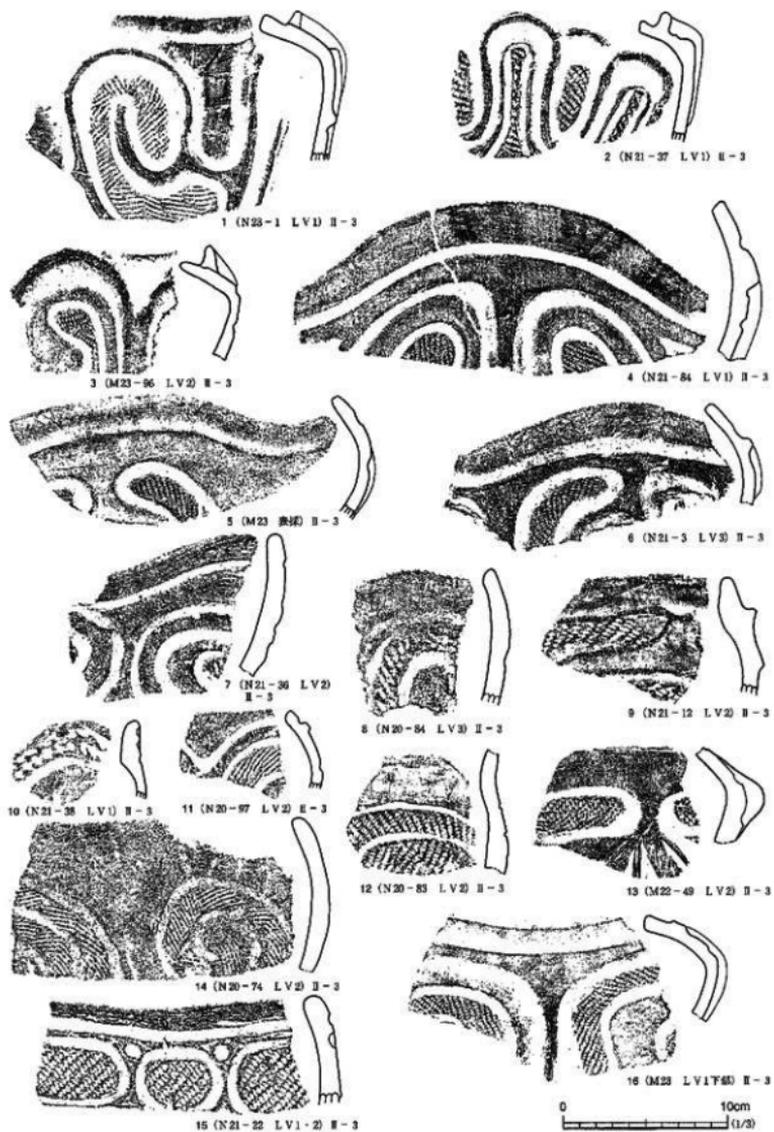


圖464 遺構外出土遺物 (39)

器が認められる。施された文様は、いずれも破片資料で、出土量も少ないため、詳細を知ることができないが、図481-4・10のような渦巻状のものや図481-8の「C」字状を呈するものなどが認められる。図481-9は竹管状の工具を用い、隆線に沿って円形刺突文が施される。図481-5などは、一見h種の文様構成に見て取れるが、施された文様を見ると、縄文帯よりむしろ、無文帯の文様幅を意識して文様を施しているのが窺える。

j種 隆線区画による無文帯に切り合いが認められるもの。(図458-4, 図482)

器形を見ると、深鉢形土器には、図482-6のような口縁部が緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がるものと、図482-10のような胴部下半が大きく膨らむものが認められる。鉢形土器には、図458-4の胴部上半が膨らみ、口縁部が外反気味に立ち上がるものと、図482-2のような胴部がソロバン玉状を呈し、大きく括れて口縁部に向かうものが認められる。浅鉢形土器は、図458-4の胴部上半が膨らみ、括れながら口縁部に立ち上がるものと、図482-1のような口縁部が緩やかに外反して立ち上がるものと、図482-3~5のような口縁部が内湾するものがある。

施される文様の多くは、無文帯が横に入り組み、無文帯同士が切り合う文様構成にある。無文帯に囲まれた縄文帯は、楕円形や円形を呈している。図482-1は、口縁部波状部に無文帯の切り合

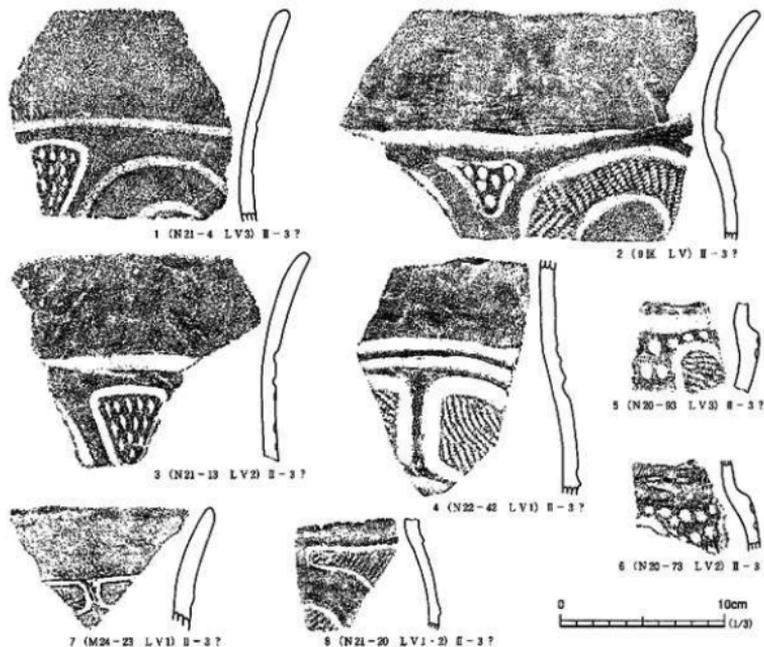


図465 遺構外出土遺物 (40)

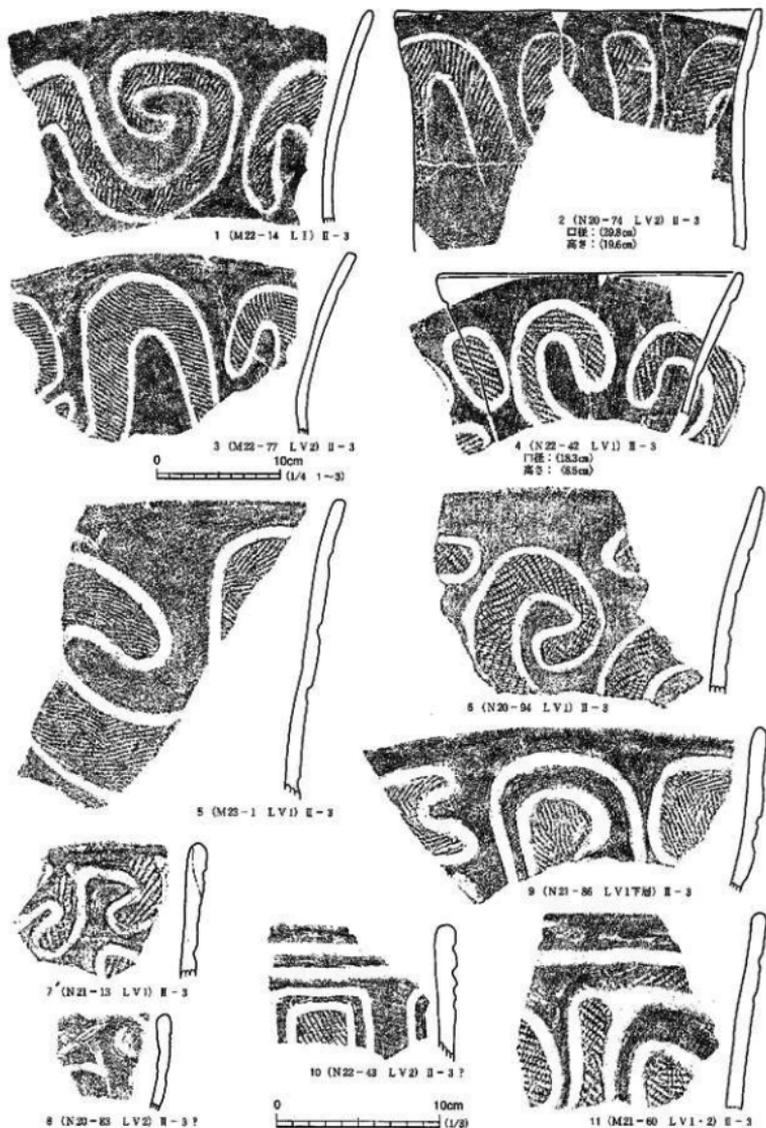


図466 遺構外出土遺物 (41)

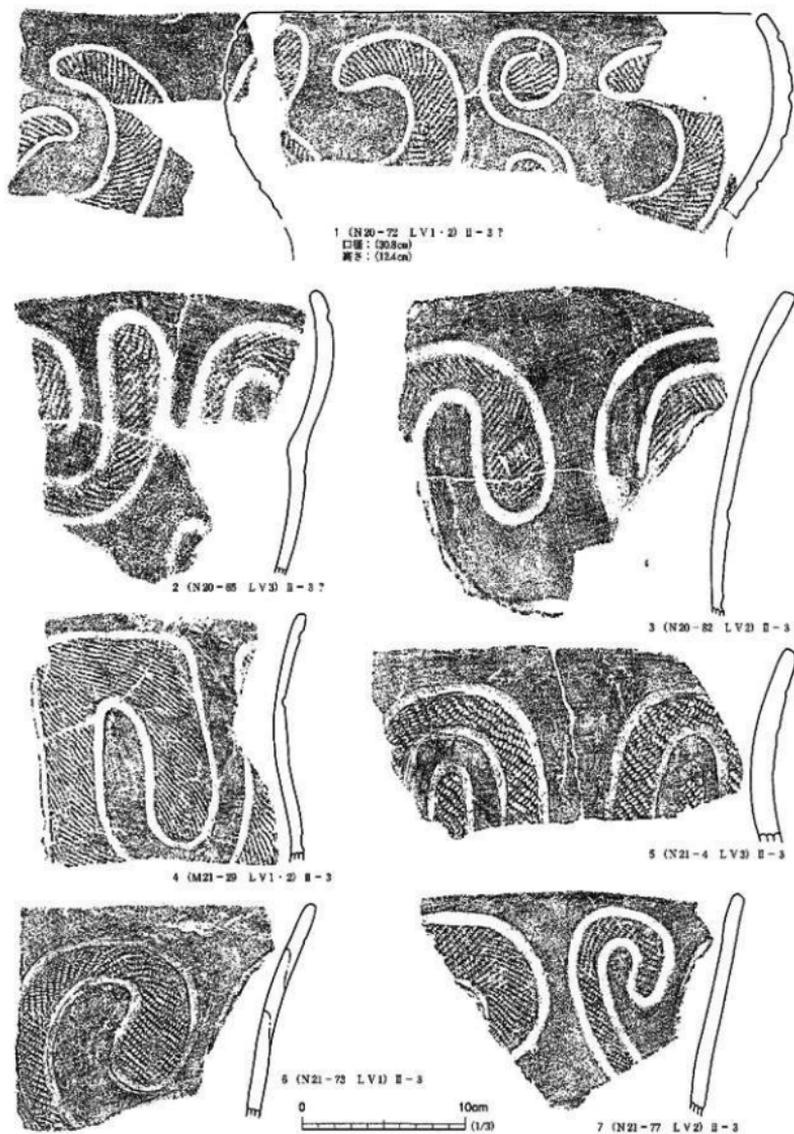


圖467 遺構外出土遺物 (42)

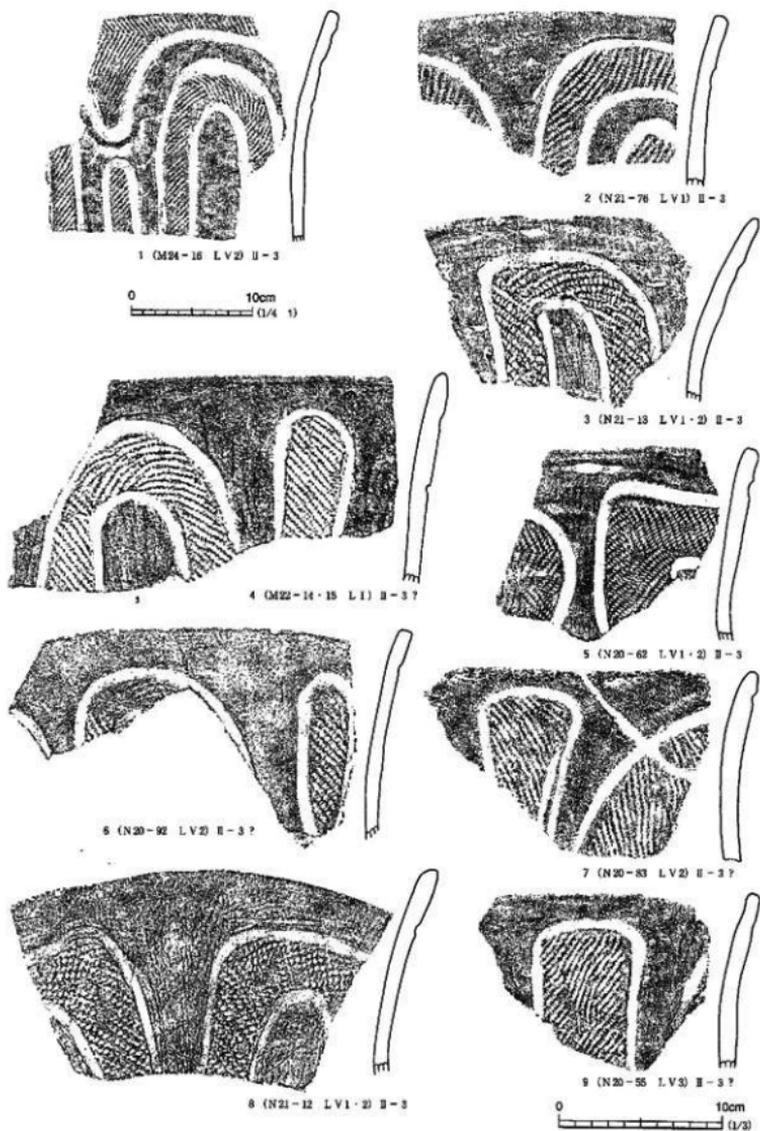


圖468 遺構外出土遺物 (43)

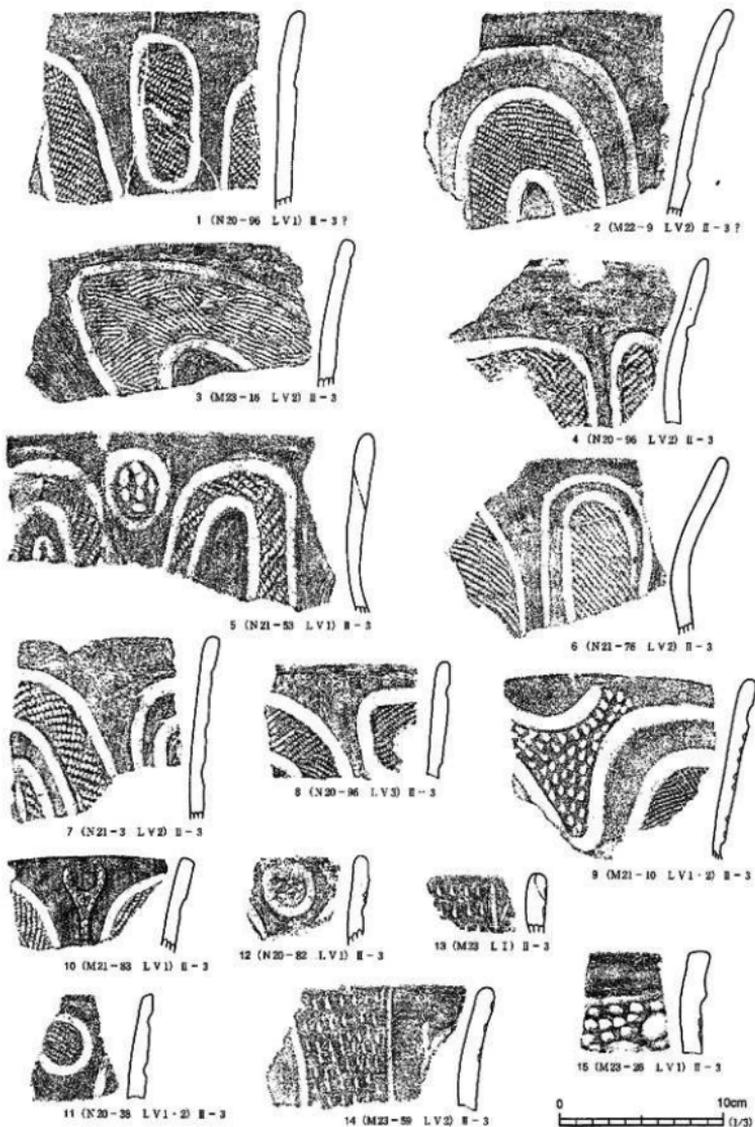


図469 遺構外出土遺物 (44)

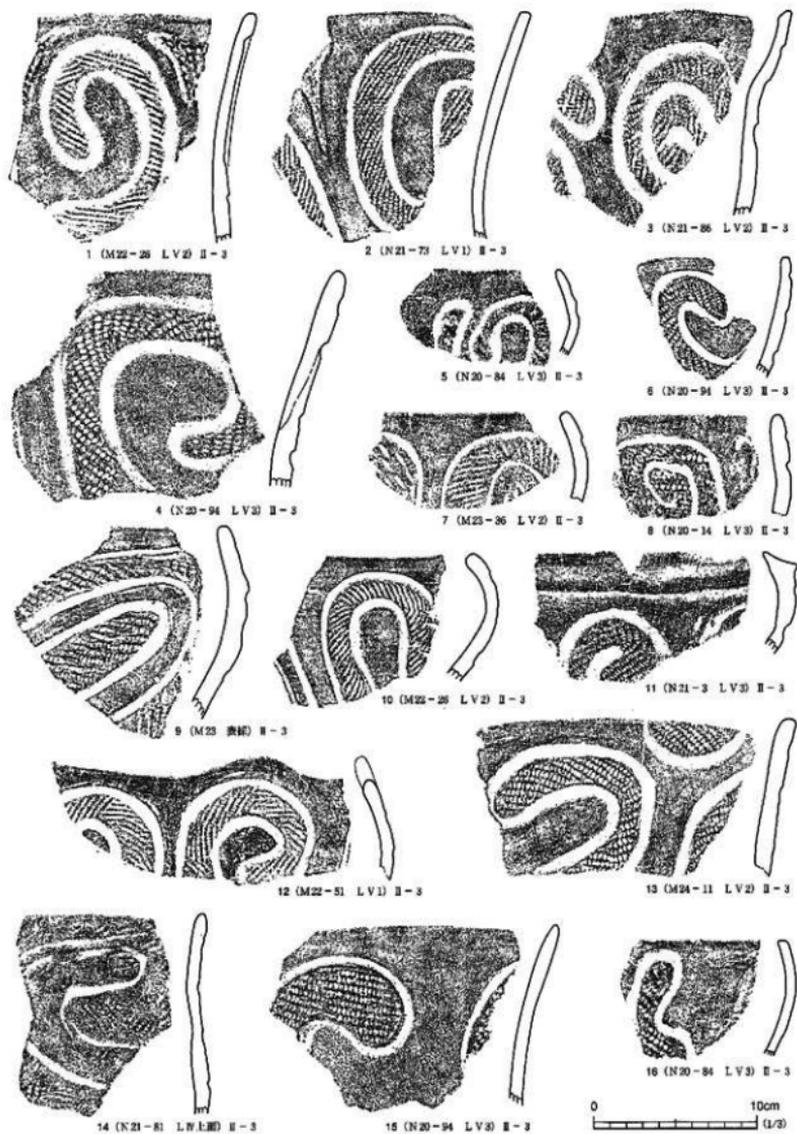


図470 遺構外出土遺物 (45)

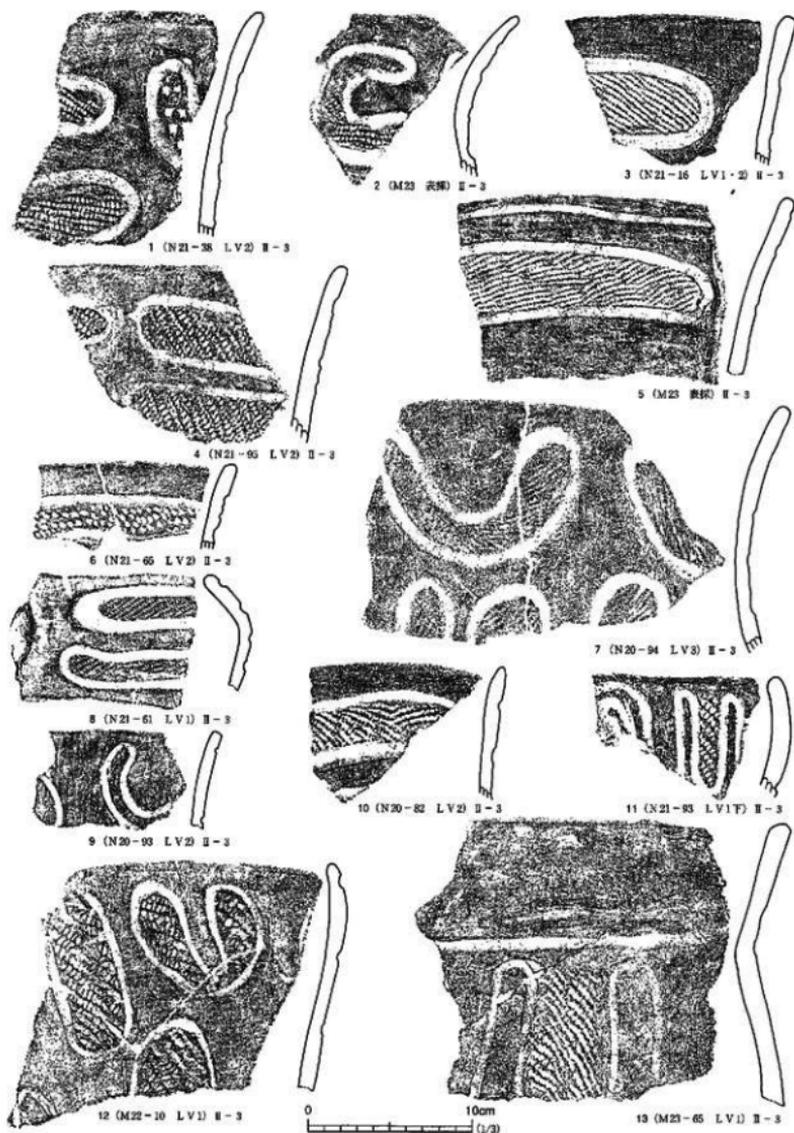


図471 遺構外出土遺物 (46)

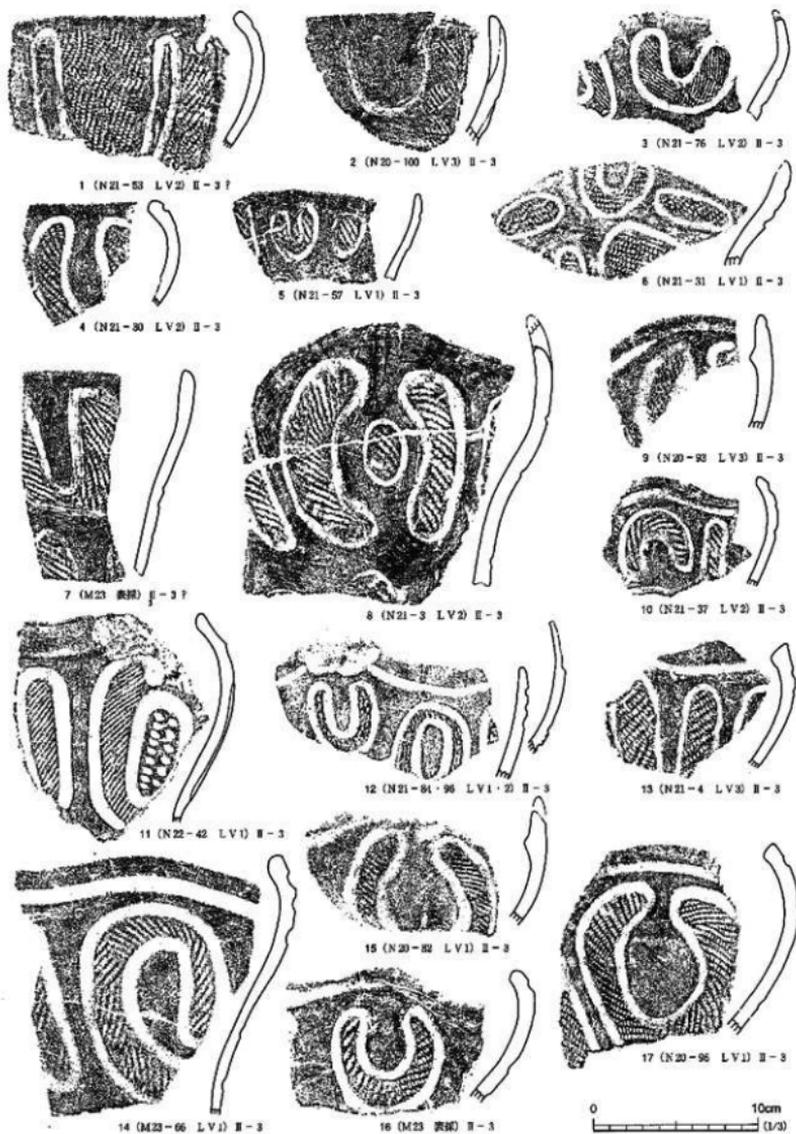


図472 遺構外出土遺物 (47)

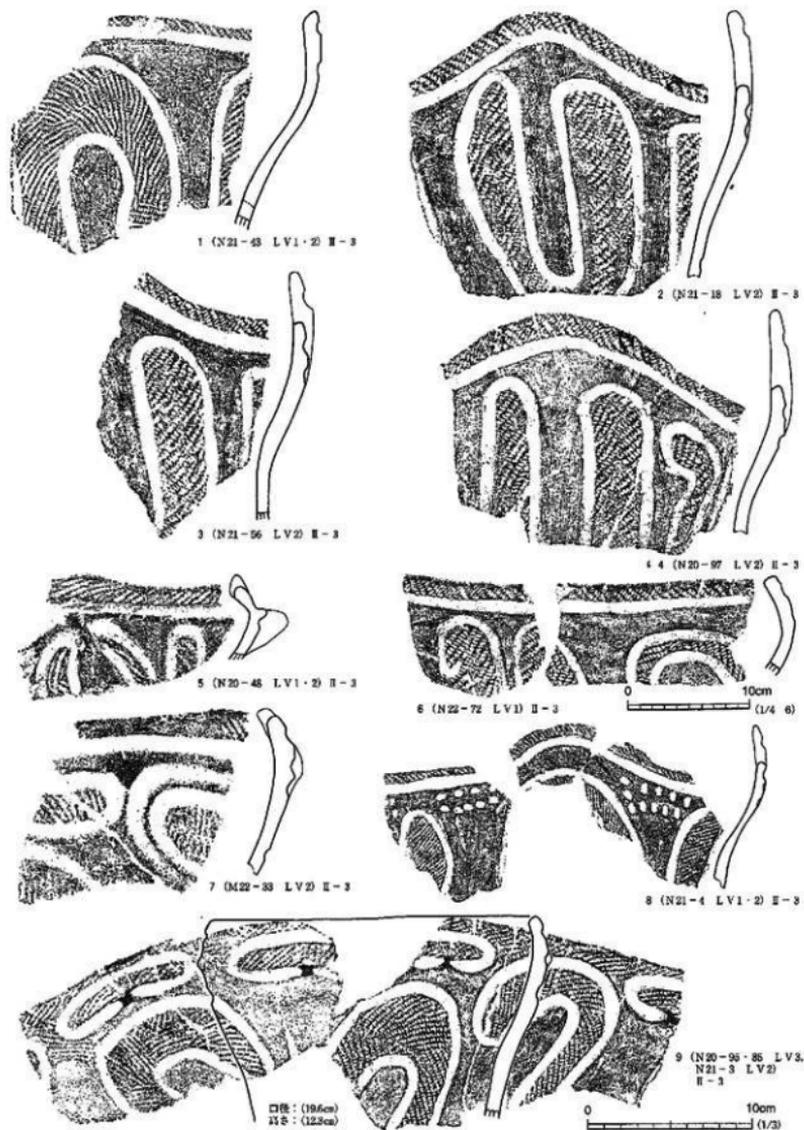


図473 遺構外出土遺物 (48)

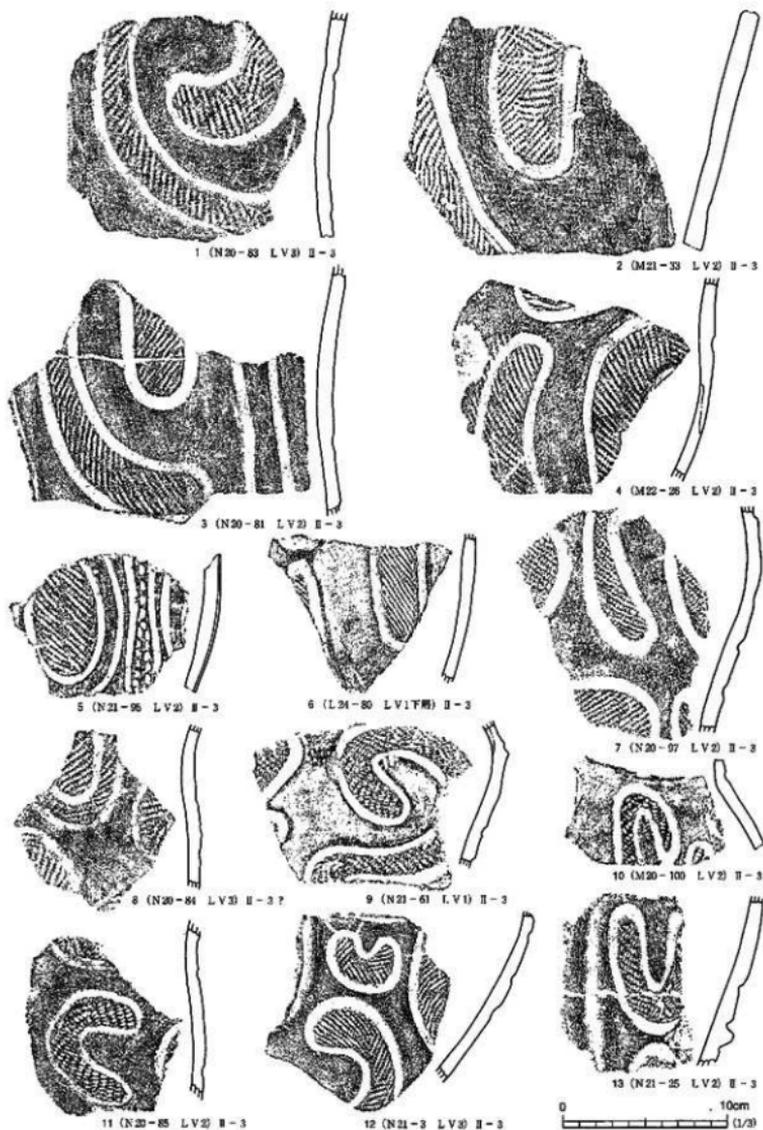


図474 遺構外出土遺物 (49)

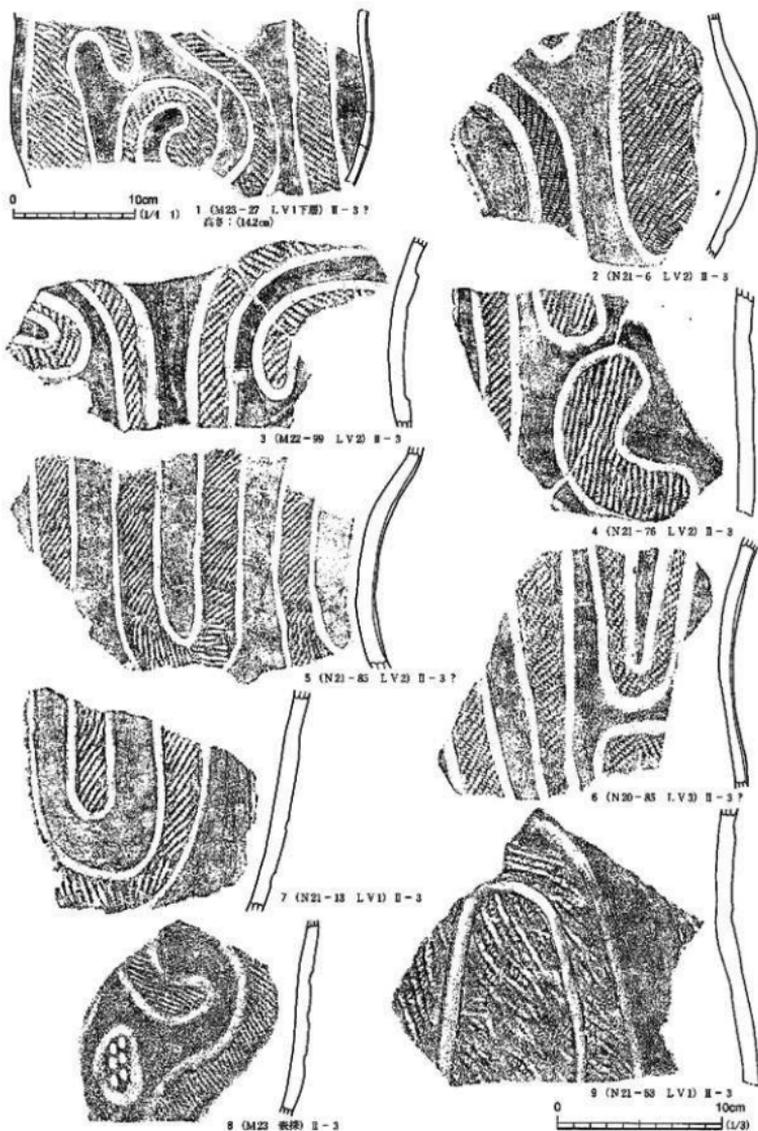


図475 遺構外出土遺物 (50)

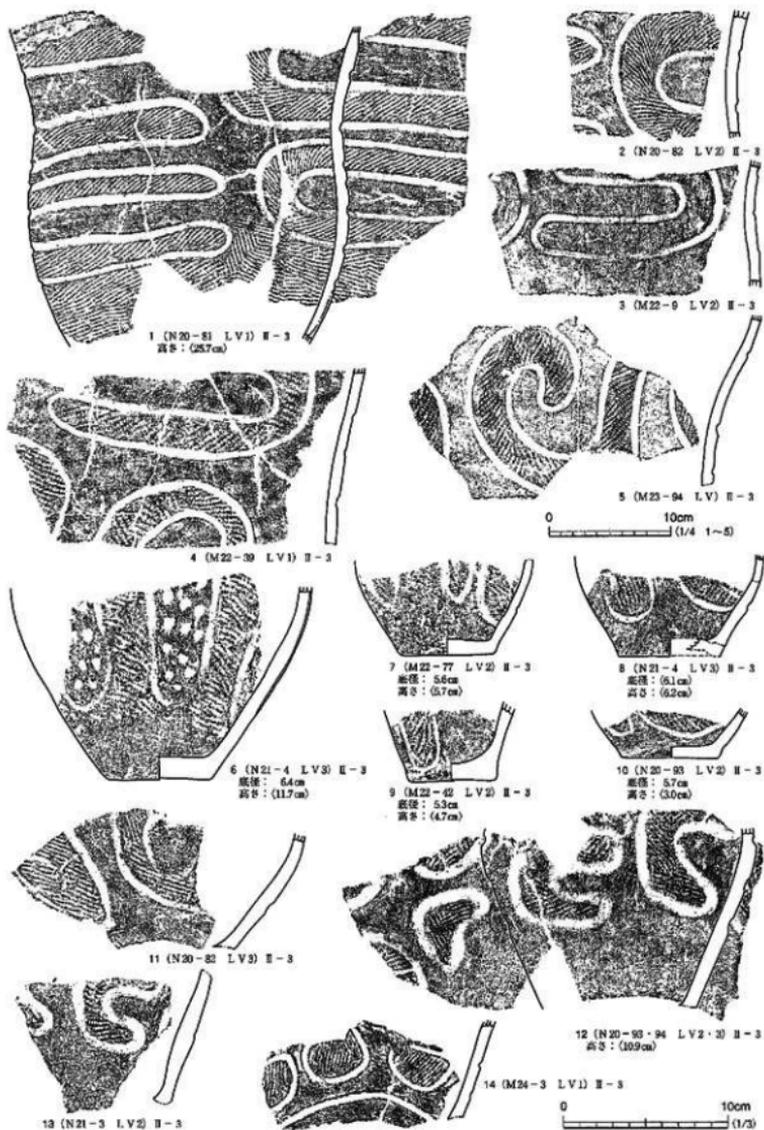


图476 遺構外出土遺物 (51)

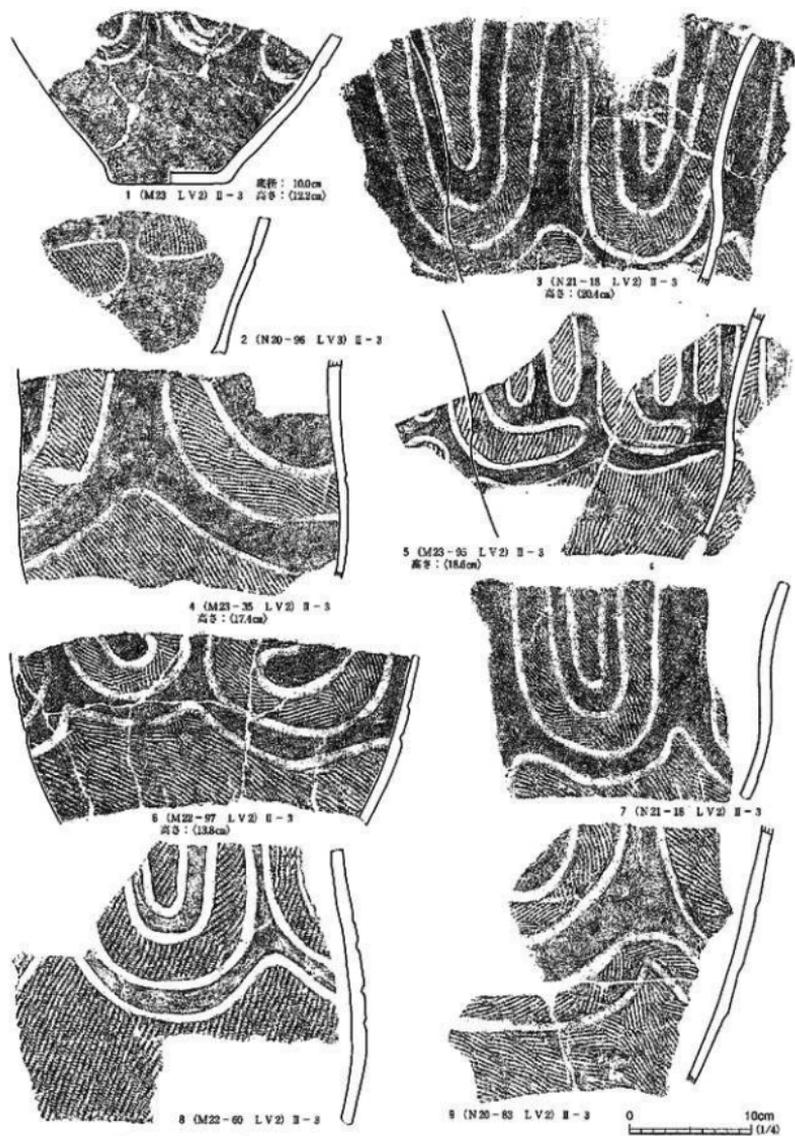


図477 遺構外出土遺物 (52)

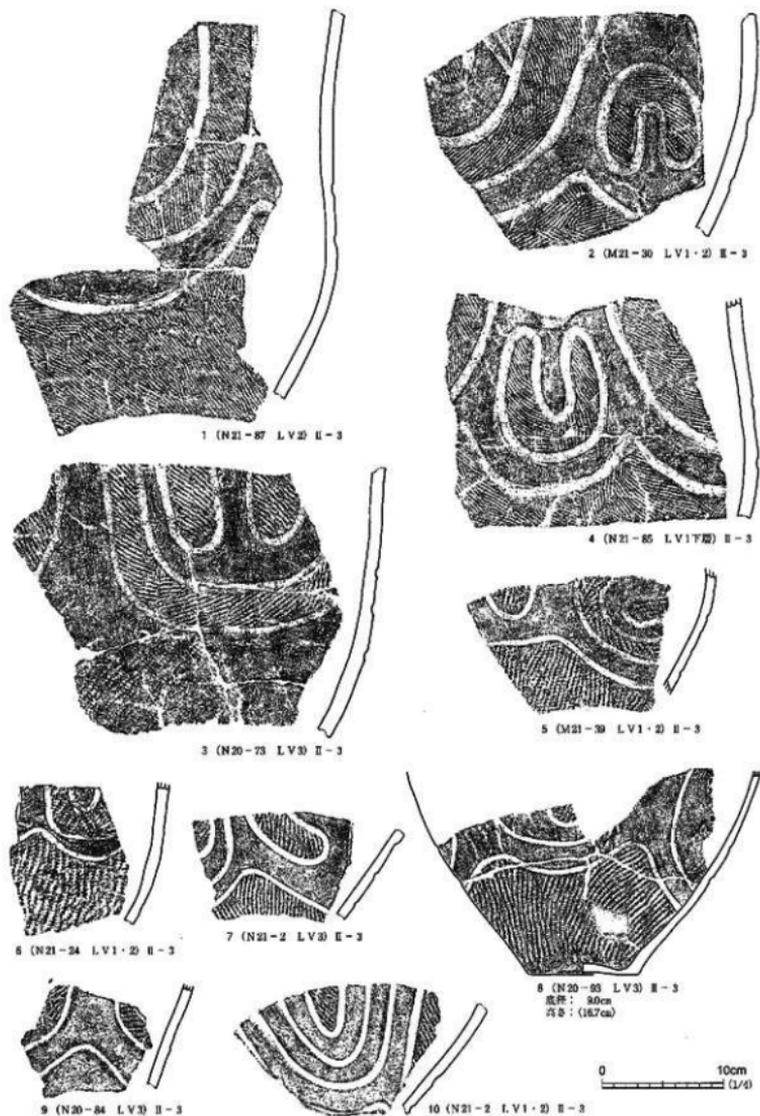


図478 遺構外出土遺物 (53)

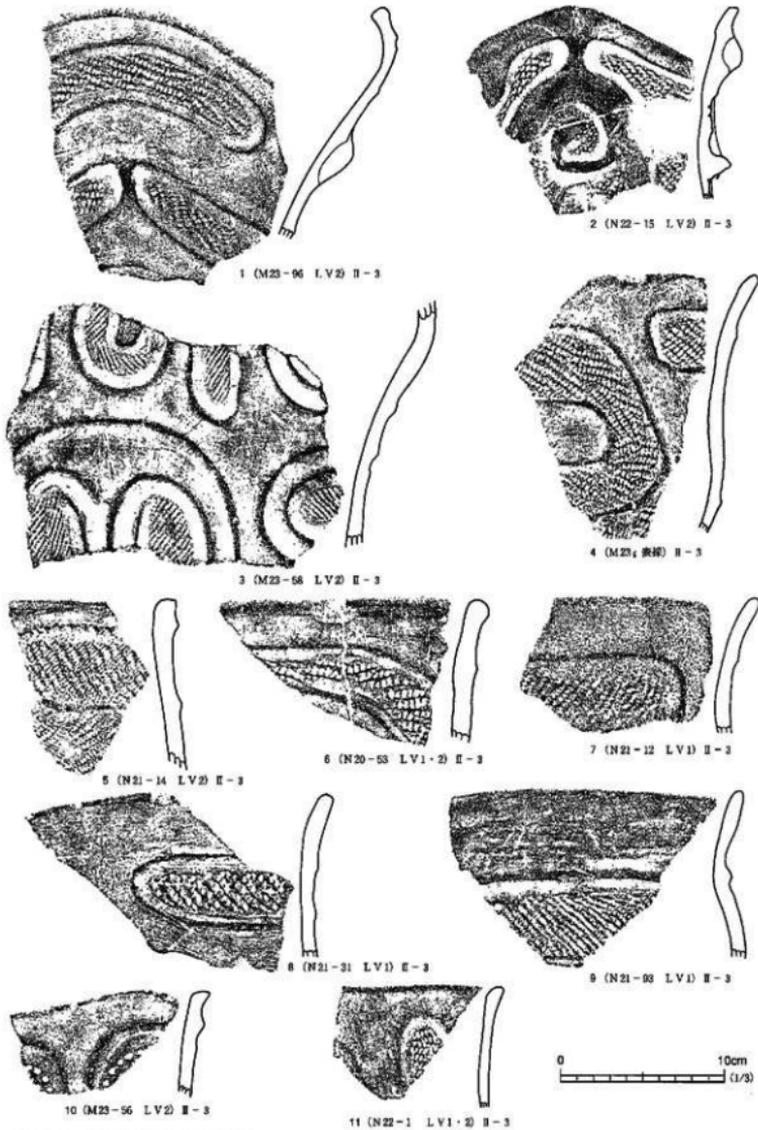


図479 遺構外出土遺物 (54)

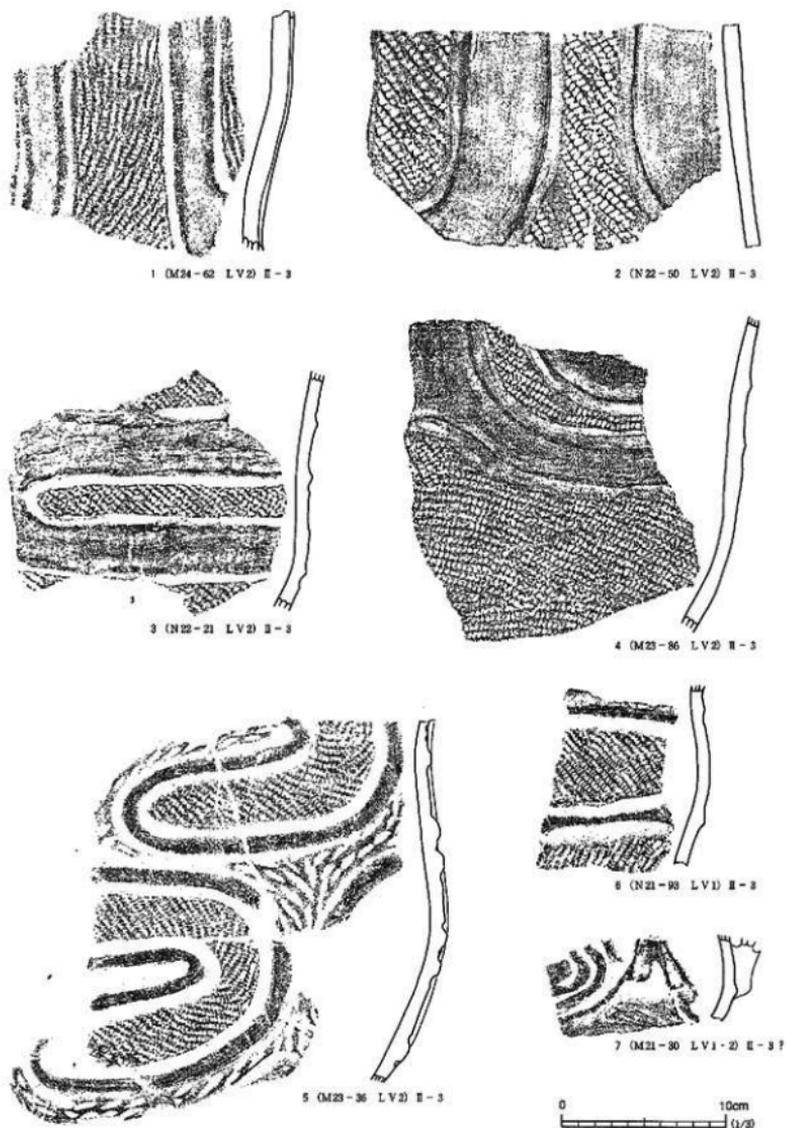


図480 遺構外出土遺物 (55)

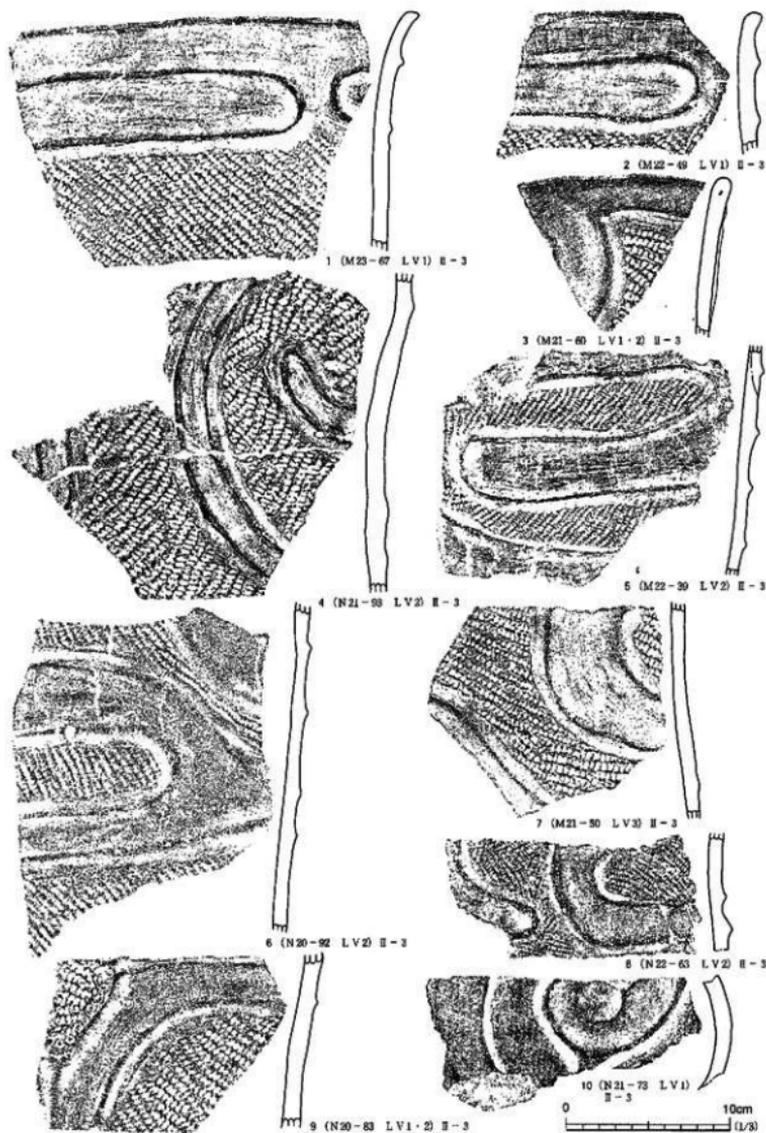


図481 遺構外出土遺物 (56)

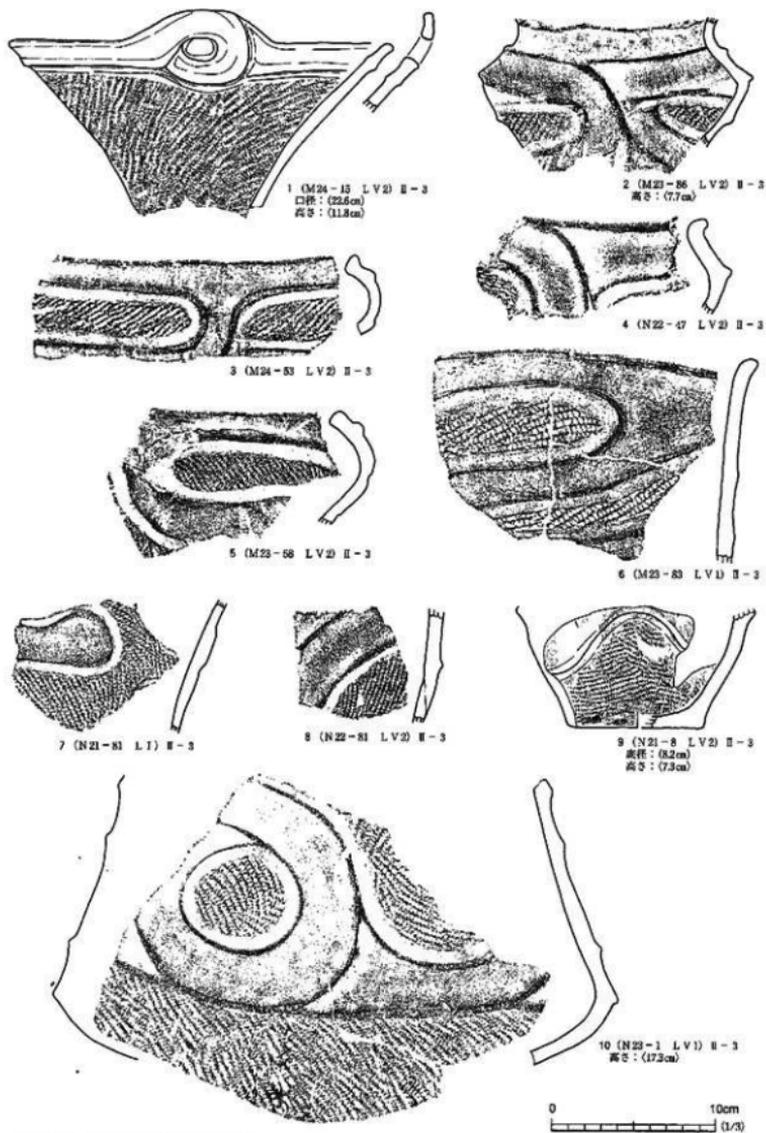


図482 遺構外出土遺物 (57)

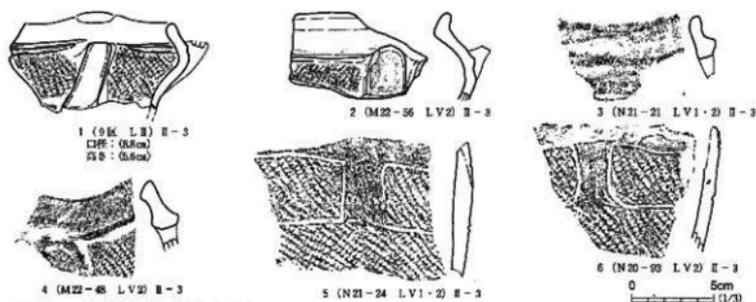


図483 遺構外出土遺物 (58)

いを持ち、無文帯囲まれた内部は中空となる。また、8～10の外面には、赤彩が施されている。

k種 隆線区画による無文帯が卓越し、無文帯の先端が、突起状や舌状を呈するもの。(図483-1～4)

本種の隆線区画による無文帯は、i・j種の無文帯に比べ、無文帯が器面から凸状に突出する傾向にある。j種に掲載した図482-7の無文帯の文様末端には、その共俣が見受けられる。

掲載した遺物は、いずれも口縁部が内湾する小型の深鉢形土器になると思われる。図483-1は、無文帯が口縁部に橋状に取り付くものと思われ、図483-2・4は無文帯が口縁部に向かい舌状に張り出している。1の口縁部の橋状把手は、2・4の舌状の張り出しが発達し、把手に変化したものかも知れない。また、2の無文部には、赤彩が施されている。

l種 沈線が施された土器である。(図483-5・6)

本種は、同一個体と思われる破片資料2点のみの出土であるが、これまで述べてきた沈線手法とは異なるため、細分し報告することとした。これまで述べてきた沈線は、沈線幅が比較的広く、文様施文後にミガキやナデを施し、平滑に仕上げられているが、本種はその痕跡が認められない。破片資料のため、本種の器形や文様構成を知ることはできないが、図483-5・6を見ると方形を基調とした文様が描かれている。

m種 口縁部周辺にコブの付いた連接楕円文を施すものである。(図458-7、図484)

器形には、図458-7、図484-1・6・11の、胴部中央が大きく膨らみ、緩やかに括れながら口縁部が直立気味に立ち上がるものと、図484-10のような、胴部がほぼ直立気味に立ち上がり、口縁部が内傾気味に立ち上がる深鉢形土器が認められる。

楕円文は、図458-7、図484-1・2・5の凹線、6の稜沈線、3・4・7の沈線、8～10の隆線区画による無文帯で描かれたものがある。4の沈線は、l種に用いられたものに近い。また、7は、半裁竹管状の工具を用い沈線が施文されている。施された文様を見ると、いずれも口縁部上端に縄文帯ないし無文帯を有している。図458-7は、胴部にアルファベット文が配されている。図484-1は、楕円文下端に波状線を施し、胴部の地文部を区画している。8～10は、コブに代わっ

て橋状突起が付されている。また、7の口縁内部の下端には、鐔状の隆帯が巡る。

n種 口縁部が内湾する器形で、主に口縁部の無文部と胴部文様を隆線ないし沈線で区画し、胴部に楕円文や三角文などを施すもの。(図485)

1・3は、口縁部の無文部と胴部文様を刺突文、2は沈線、4～6は隆線で区画する。1は、一旦沈線で区画した後、竹管状の工具で刺突文を施す。3は、押し引き状に刺突文が加えられる。3・4は、連続する波状線で、三角文や楕円文を交互に描いているが、2は楕円文、三角文を明瞭に区分し、それらを交互に配している。また、5・6は隆線区画による大柄の楕円文と三角文が施される。これらの土器は、関東地方の影響を受けた土器と思われる。

o種 主に、隆沈線、稜沈線、隆線が施された、浅鉢形土器の破片資料を一括した。(図458-3、図464)

破片資料のため、全ての器形や文様を知ることはできないが、口縁部が内湾し、アルファベット文や楕円文などが施されるものが多い。中には、図458-3のように隆沈線施文後、沈線内に刺突文を充填するものなども認められる。

p種 注口土器や有孔鐔付土器などの特殊器形を一括した。(図459～461) この内、注口土器については、図459、図460-1～4に掲載した。図459に掲載した注口土器は、いずれも1のような胴部下半に膨らみを持ち、胴部中央から口縁部まで、直線的に立ち上がる器形になる。これらの注口土器には、胴部上半と下半に紐掛け状の中空突起が付されている。

施された文様についてもう少し、詳しく見てみる。図459-1は、胴部下半の縄文施文部上端を波状線で区画し、胴部上半に浅めの凹線でアルファベット文を配している。中空突起や口縁部周辺には、赤彩が認められる。図459-2は、平行する凹線で、胴部上半と下半にそれぞれ波状線を描き、上下に施された波状線に挟まれた部分に刺突文が充填される。図459-3～5は、隆線区画による無文帯によって文様が施される。また、5の口縁部には、赤彩が施される。

図460-1～4の注口土器は、浅鉢形土器になると思われる。器形的には、1の口縁部が直線的に立ち上がるものと、2～4の口縁部が内湾するものが認められる。1は、稜沈線で楕円状に区画した文様帯内に縄文が施される。文様間には隆線が施され、凸帯状に器面から突出している。また、口縁部周辺には、赤彩が認められる。

図460-5～12には、有孔鐔付土器を掲載した。器形的には、5・6の胴部中央が括れた、瓢箪形を呈したものと、7～12の体部が球体状を呈すものが認められる。この内、8・9については、同一個体と思われる。文様は、施文されるものと、無文のものが認められる。施文された文様を見ると、5のように波頭状の縄文部を上下に配すものや、6のアルファベット文を施すものが認められる。また、8～11には、赤彩が施される。

図461は、器台や台付土器を一括した。図461-1～9は、器台としたものである。器台は、体部に円孔を有すものが多い。体部は、無文となるもの(1・3・5)、縄文が施されるもの(2・4)、沈線が施されるもの(6～9)が認められる。

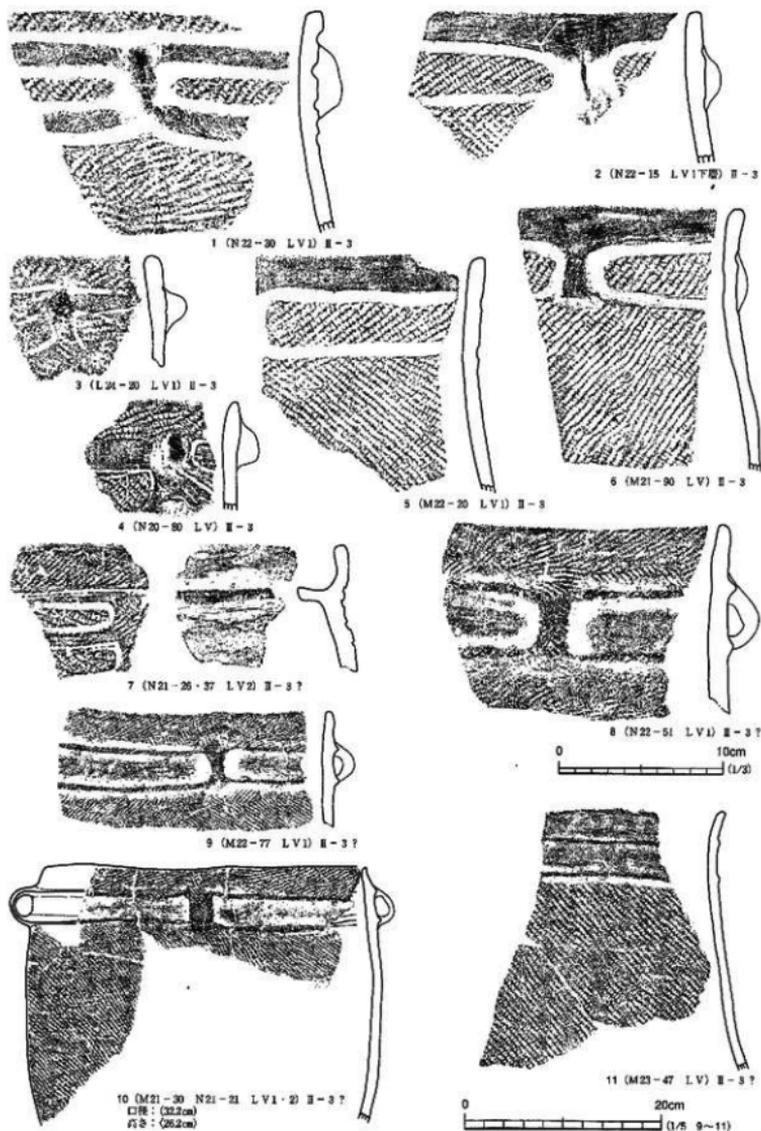


図484 遺構外出土遺物 (59)

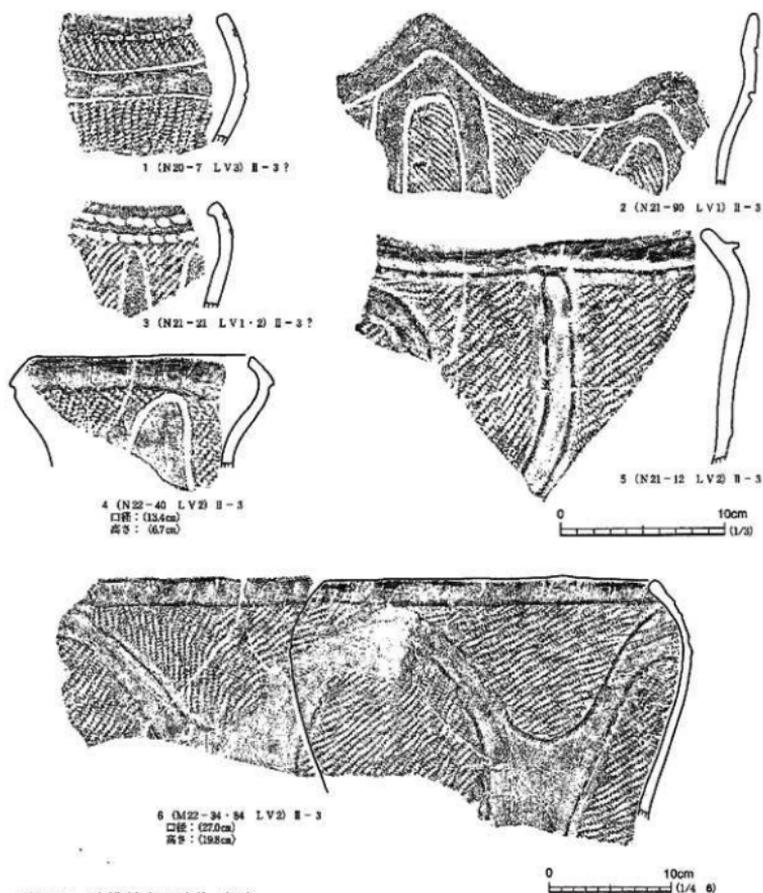


図485 遺構外出土遺物 (60)

図461-10~17は、台付土器としたものである。いずれも脚部の破片資料で、全体の器形を知ることばできないが、体部には10・13のような鉢形を呈すものと、12のコップ状を呈すものなどが認められる。脚部には、円孔が施されたものが多く、15のように沈線で波状線を描くものや、16の稜線を施すもの、17のような刺突文が施されたものなどが認められる。

以上が、Ⅱ群3類土器としたものである。施文された文様の手法を見ると、幅の広い凹線（再調整有り）や隆線に縁取られた縄文帯（アルファベット文など）で文様を描くもの、隆線に縁取られた無文帯で文様を描くもの、隆線に縁取られた無文帯に切り合いを持つもの、幅の細い沈線（無調整）

で文様を描くものに大別できる。これらの、手法の変化や年代的なことについては、遺構内出土の土器を含め、第3編で述べることとする。

本類の土器の焼成は、比較的良好である。色調は褐色系のものが多く、土器の胎土には砂粒や金雲母が認められる。

Ⅱ群4類土器 (図486~492, 写真319)

図486~492は、Ⅱ群4類土器と分類したものである。本類については、概ね大木9・10式土器に伴う、粗製土器と考えている。遺物の報告にあたっては、施文される文様の特徴などから、a~e種に区分した。

a種 縄文のみが施されたものを本種とした。(図487-1・5, 図488-1~6・9, 図489-10・12・13, 図490-2)

器形には、図487-1の、胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの、図487-5の底部から口縁部まで、緩やかに外傾しながら、直線的に立ち上がるもの、図488に掲載した口

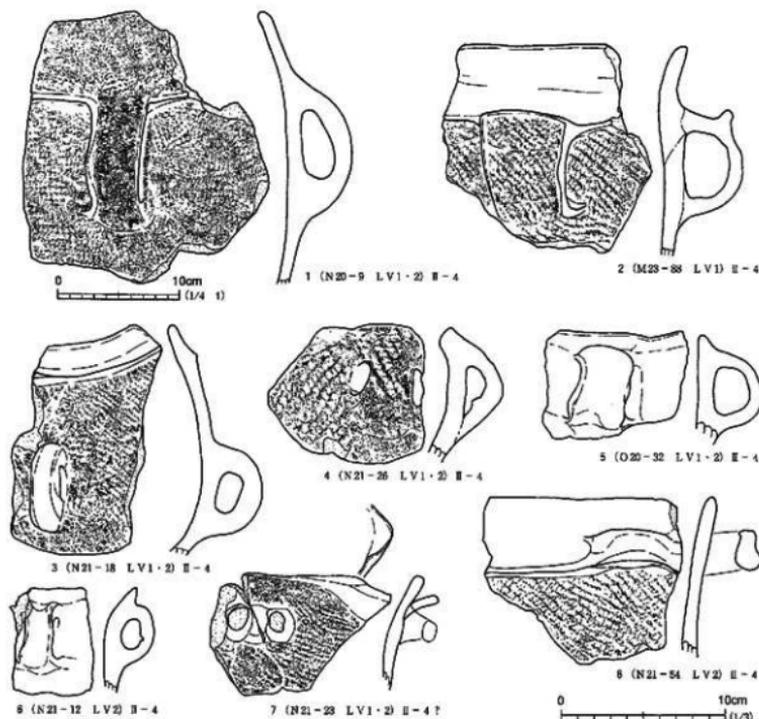


図486 遺構外出土遺物 (61)

第1編 高木遺跡

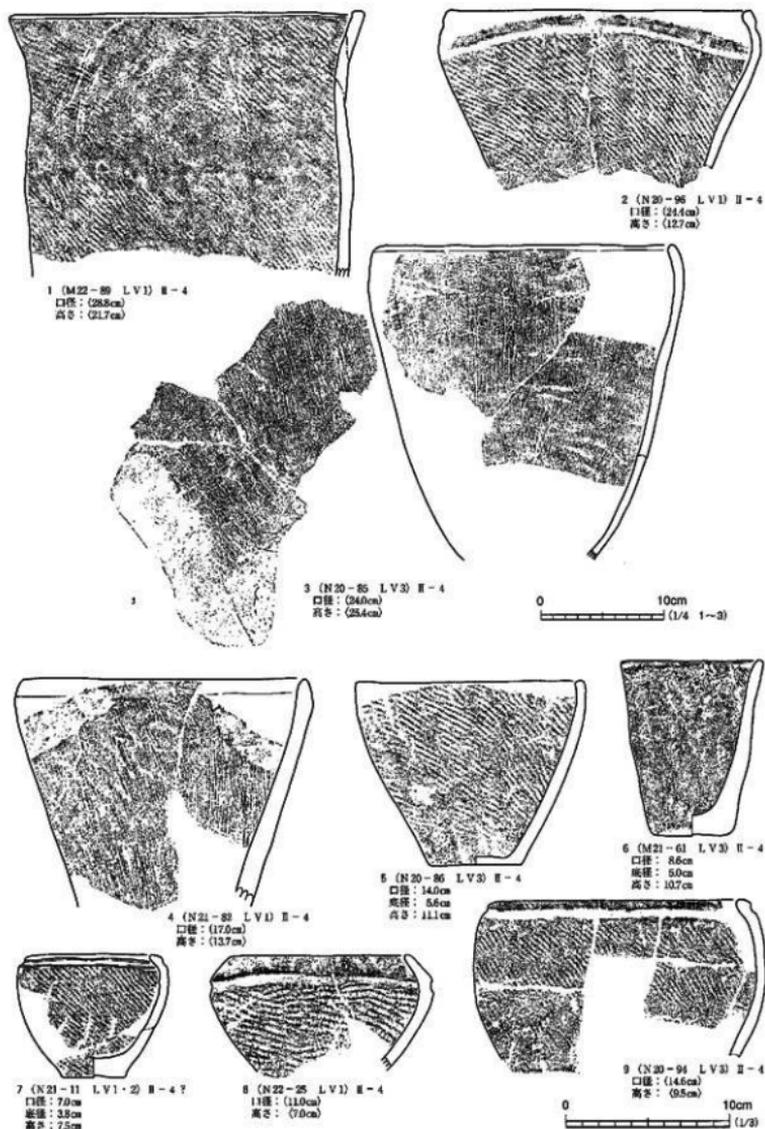


図487 遺構外出土遺物 (62)

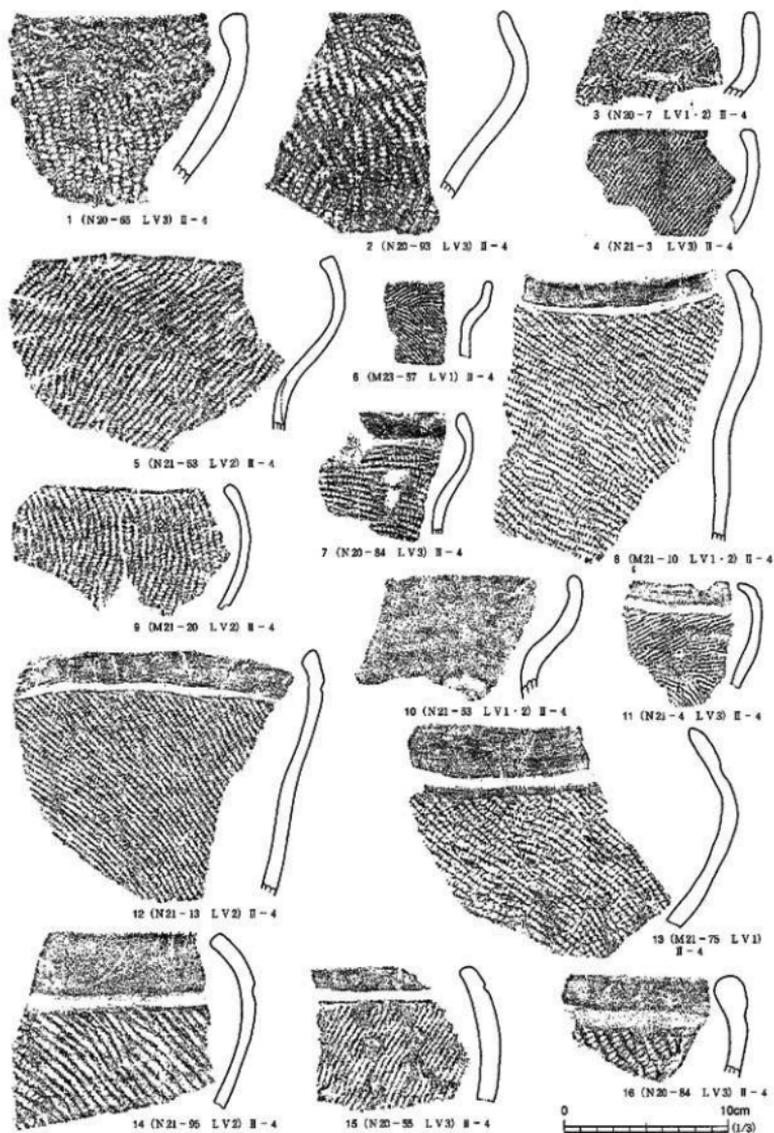


図488 遺構外出土遺物 (63)

第1編 高木遺跡

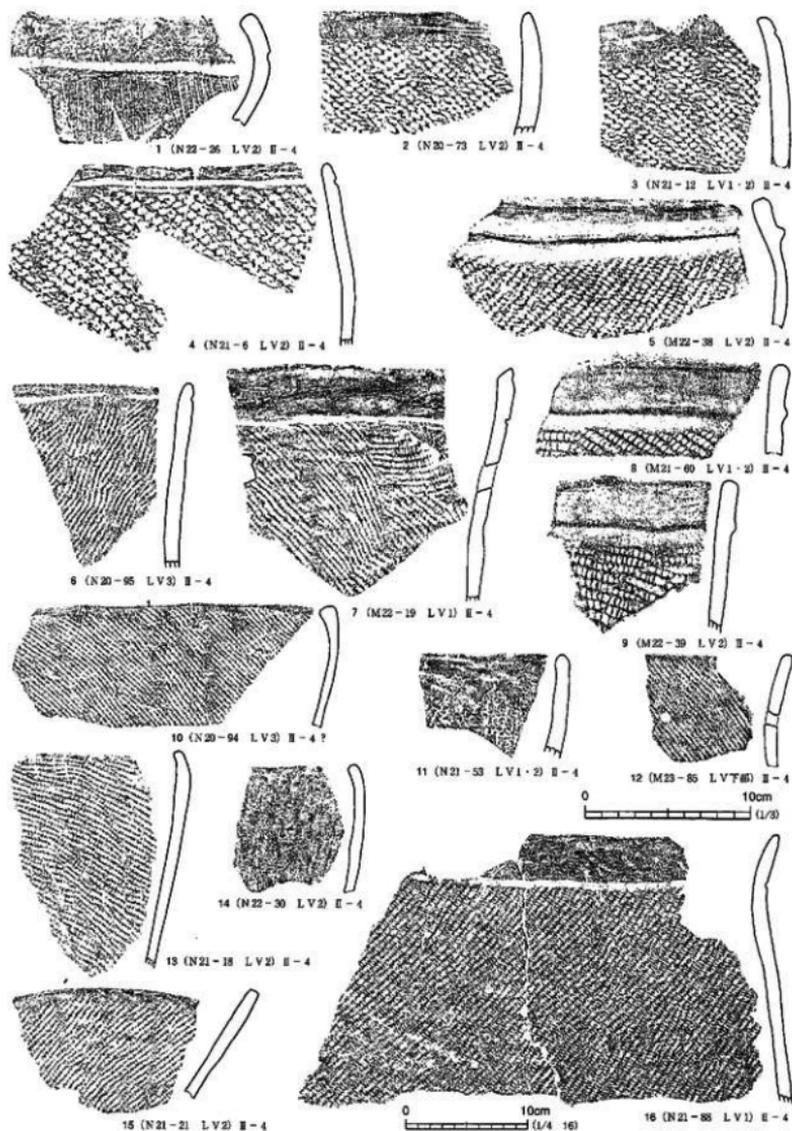


图489 遺構外出土遺物 (64)

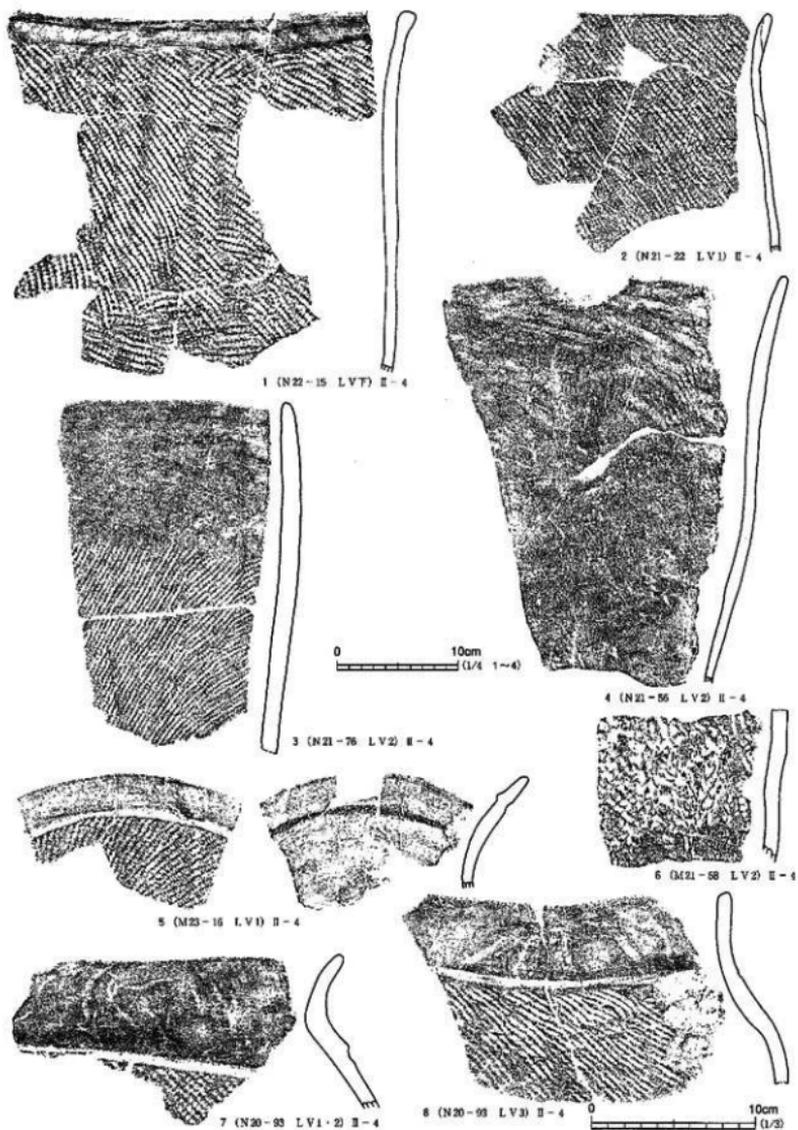


図490 遺構外出土遺物 (65)

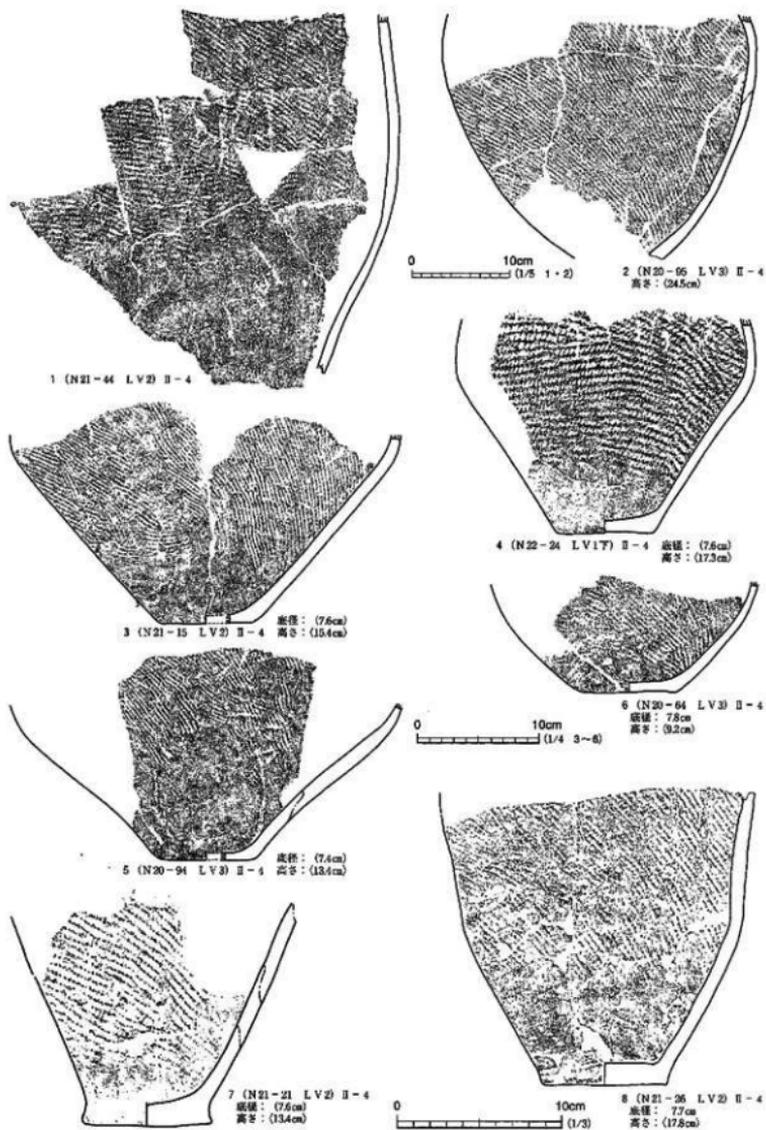


圖491 遺構外出土遺物 (66)

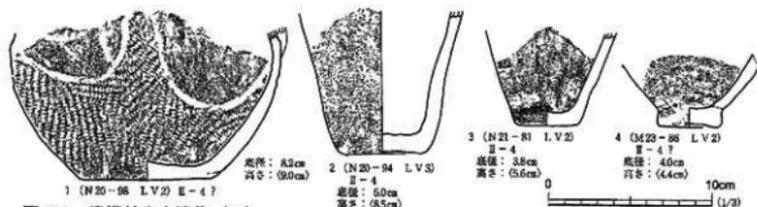


図492 遺構外出土遺物 (67)

縁部が内湾するものなどが認められる。地文には、斜行縄文が施されるが、1・2のように縄文の施文方向を部分的に変えるものも認められる。

b種 口縁直下に無文部を有し、胴部に地文が施されるもの。(図487-2~4・7~9, 図488-7・8・10~16, 図489-1~9・11・15・16, 図490-1・3~5・7・8)

口縁部の無文部は、図487-2・7~9, 図488-7・8・11~16のような沈線によって区画されるもの、図489-5・8・9の隆線で区画されるもの、図487-3・4のように、沈線と隆線などの区画を持たないものなどがある。器形は、深鉢形土器と浅鉢形土器が認められる。胴部の地文には、縄文や櫛歯状工具による条線文などが認められる。器形的には、a種と比べ変わりはないが、図487-7・8のような小型の浅鉢形土器や、図490-7・8のような口縁部が「く」の字状に屈曲するものも認められる。

c種 地文を持たない土器を本種とした。(図487-6)

出土量は少ない。図487-6は、コップ状を呈した鉢形土器である。外面は縦方向、内面には斜めなし横方向にミガキの痕跡が認められる。

d種 底部の破片を本種とした。(図491・492)

器形的には、いずれも深鉢形土器の底部片と思われる。図491には、縄文が施された資料を掲載した。また、図492-1は、沈線で区画した文様帯内を磨消して、無文部とするものである。無文部には、隆帯が付される。Ⅱ群4類として分類したが、Ⅱ群3類に伴う資料と思われる。図492-2~4は、地文を持たない土器である。2の内面には、タール状の付着物が認められ、4の底面は高台状を呈している。

e種 両耳壺や片口を本種とした。(図486)

両耳壺に付される把手は、橋状を呈したものが多く、中には、2のような把手の一端が張り出すものも認められる。把手は、1・2のように口縁部の無文部と胴部の地文部を区画する隆線から付されるものと、4~6のように口縁直下に付されるもの、3の胴部に付されるものも認められる。7は片口、8は深鉢形土器あるいは、注口土器になるものと思われる。いずれも、口縁部直下には紐掛け用のためか、横位に橋状突起が付されている。また、7の片口部は嘴状を呈している。

以上が、Ⅱ群4類土器としたものである。本類の土器の焼成は比較的良好で、色調にはぶい黄褐色や黒褐色系を呈している。土器の胎土には、砂粒や金雲母が多量に含まれているものが多い。

Ⅲ群土器 (図493~553, 写真320~331)

Ⅲ群Ⅰ類土器 (図493~546, 写真320~331)

図493~546は、Ⅲ群Ⅰ類土器と分類したものである。器形的には、深鉢形土器が大半を占め、浅鉢形土器や鉢形土器、注口土器の出土数は少ない。本遺跡から出土したⅢ群Ⅰ類土器については、加曾利EⅤ式土器、称名寺式土器中~新段階、網取Ⅰ~Ⅱ式土器、堀之内Ⅰ式土器、三十稲場式土器、南三十稲場式土器などに比定されるものと考えている。本類の報告にあたっては、器形や施文される文様の特徴などから、a~Ⅰ種に区分した。

a種 主に、口縁部の無文帯を隆線ないし沈線で区画し、胴部上半に隆線や沈線で、三日月状の区画文などを配すもの。(図493~498)

器形的には、口縁部が内湾するもの、直線的に外傾しながら立ち上がるもの、やや内傾気味に立ち上がるものなどが認められる。また、口縁部を区画する隆線に沿って、円形刺突文が施されるものもある。口縁部の大半は、波状口縁を呈し、波頂部には加飾が施される場合が多い。口縁部の加飾には、橋状突起や(図493-4・5)、「ノ」の字状ないし「J」字状隆帯が、口縁波頂部を巻き込むように付されるもの(図493-6~8)、口縁波頂部を巻き込むように付された「ノ」の字状隆帯が、個別に付された「J」字状隆帯と繋がり「S」字状を呈すもの(図494-1~3)、「S」字状・「8」の字状・「C」字状などの隆帯が付されるもの(図494-4~13)、「S」字状・「8」の字状隆帯の上端が上方に迫り上がるもの(図495-2・4)、「S」字状・「8」の字状隆帯の上端が完全に上面に迫り上がり、下端と完全に分離してしまうもの(図495-10~13)などが認められる。

次に、本種に施された文様を中心に概観してみる。図493~495、図496-1・4、図497-12・13に掲載した資料は、口縁部の無文帯を隆線で区画するものである。これらの資料の胴部文様は、隆線で区画されているものが多い。施された文様を見ると、図493-1、図496-1・2の三角文や楕円文を配し、それ以外の縄文部を磨消して、「H」字状の無文部を作るものが認められる。図496-1は沈線で、文様を区画している。口縁部の波頂部には、対になる突起を有し、別の部分には、コブ状の突起が付されている。図496-4は、口縁部に大小の突起を有す。この内、大きな突起部は、中空状を呈し、突起上面が漏斗状を呈している。図493-2・3・5・7~13、図494-6・10・11、図495-5・9・10は、口縁部の無文帯を区画する隆線直下に、横長の三日月状の区画文が配されたものである。

図494-10や図495-5・10は、括れ部に沈線や隆線を配し、胴部下半の文様部を区画している。図493-9~13に施された隆線を観察すると、断面形が三角形~台形を呈しており、隆線よりむしろ隆帯に近いものと思われる。また、隆線を縁取るように沈線が施されている。その他、図495-1・2の区画文を持たないものや、同一個体図495-6・7のような隆線に縁取られた縄文帯で文様を描くものなども認められる。これらの土器は、括れを有し、口縁部が内湾する器形が多い。

図496-2・3・5~11、図497-1~11は、口縁部の無文帯を沈線で区画するものである。口縁部下端や胴部に施された文様は、先述した隆線区画するものと大きな相違はない。器形的に見ると、

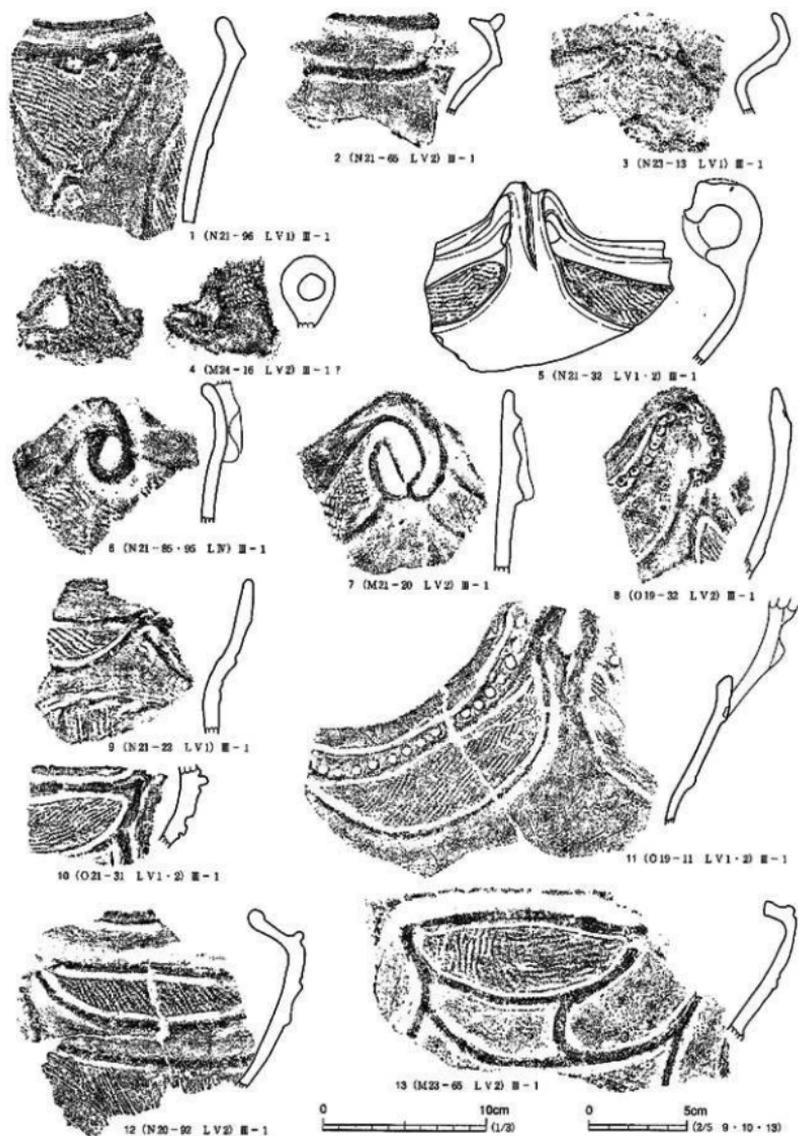


図493 遺構外出土遺物 (68)

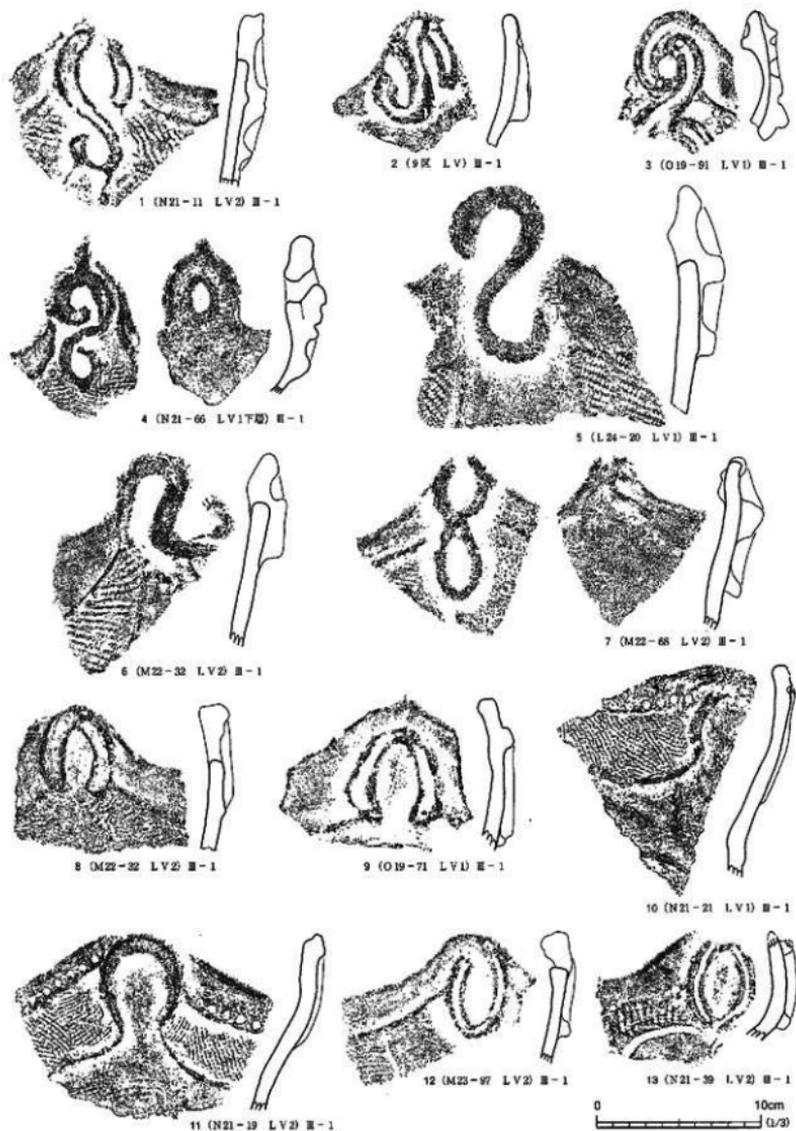


図494 遺構外出土遺物 (69)

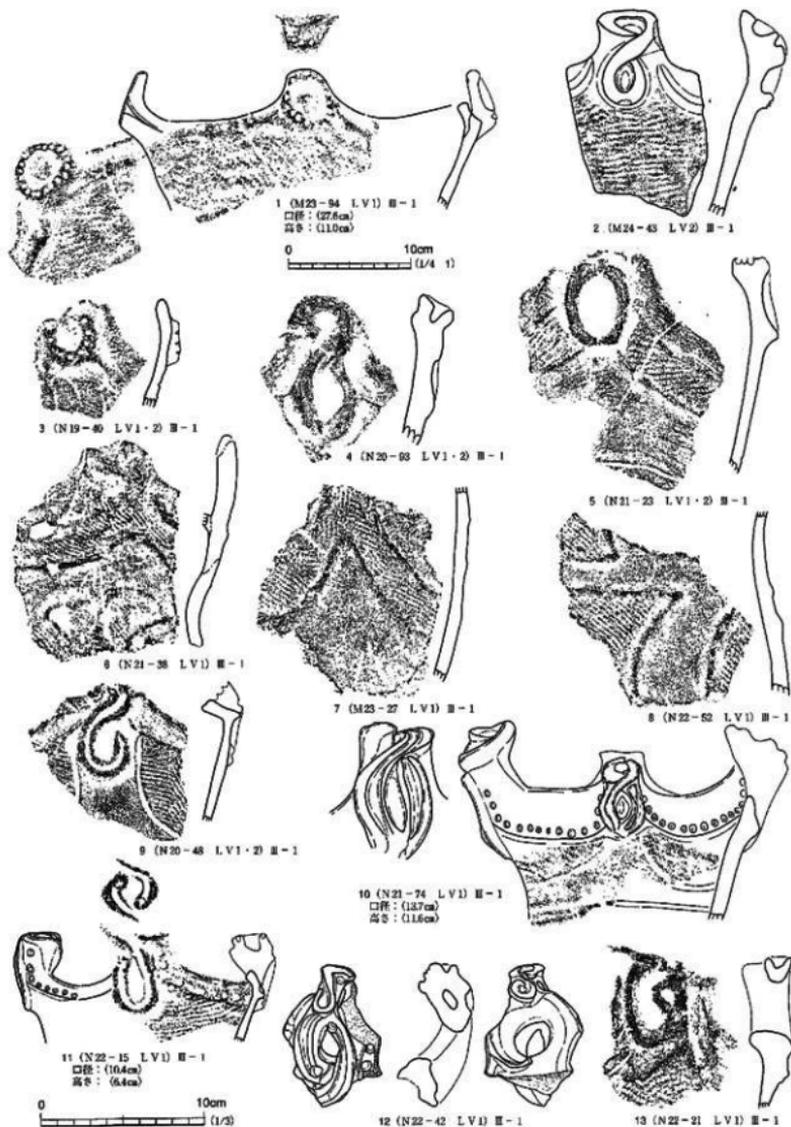


図495 遺構外出土遺物 (70)

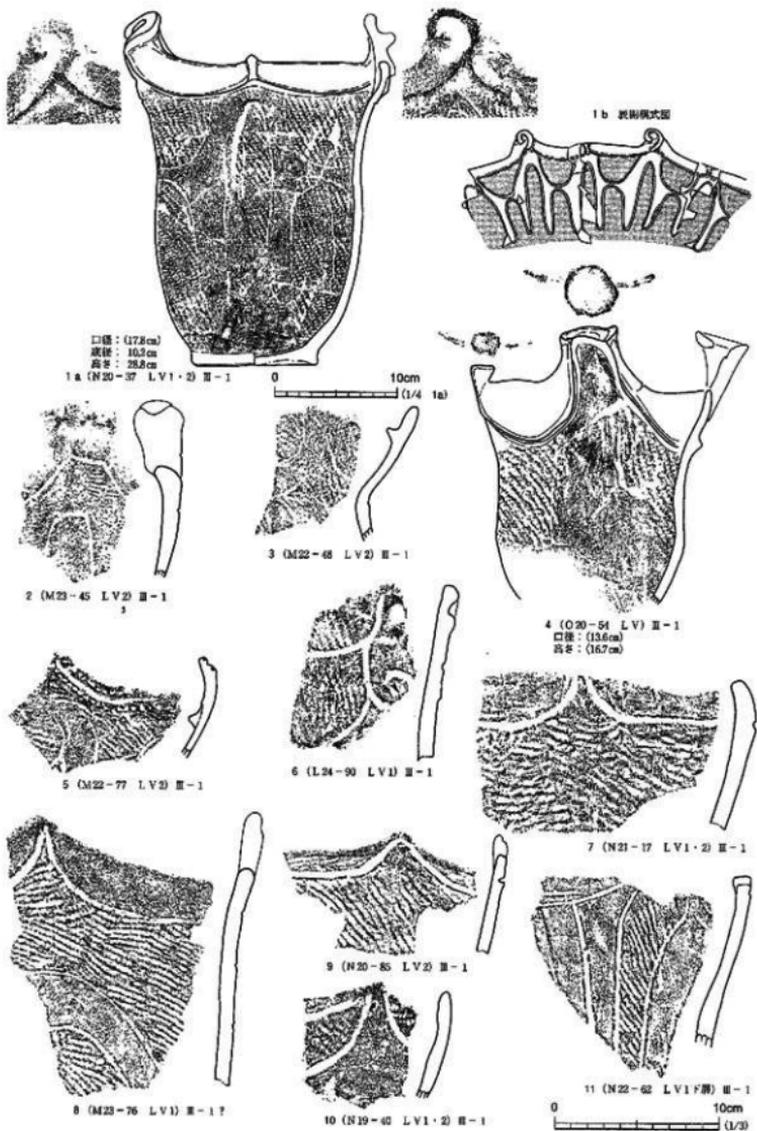


図496 遺構外出土遺物 (71)

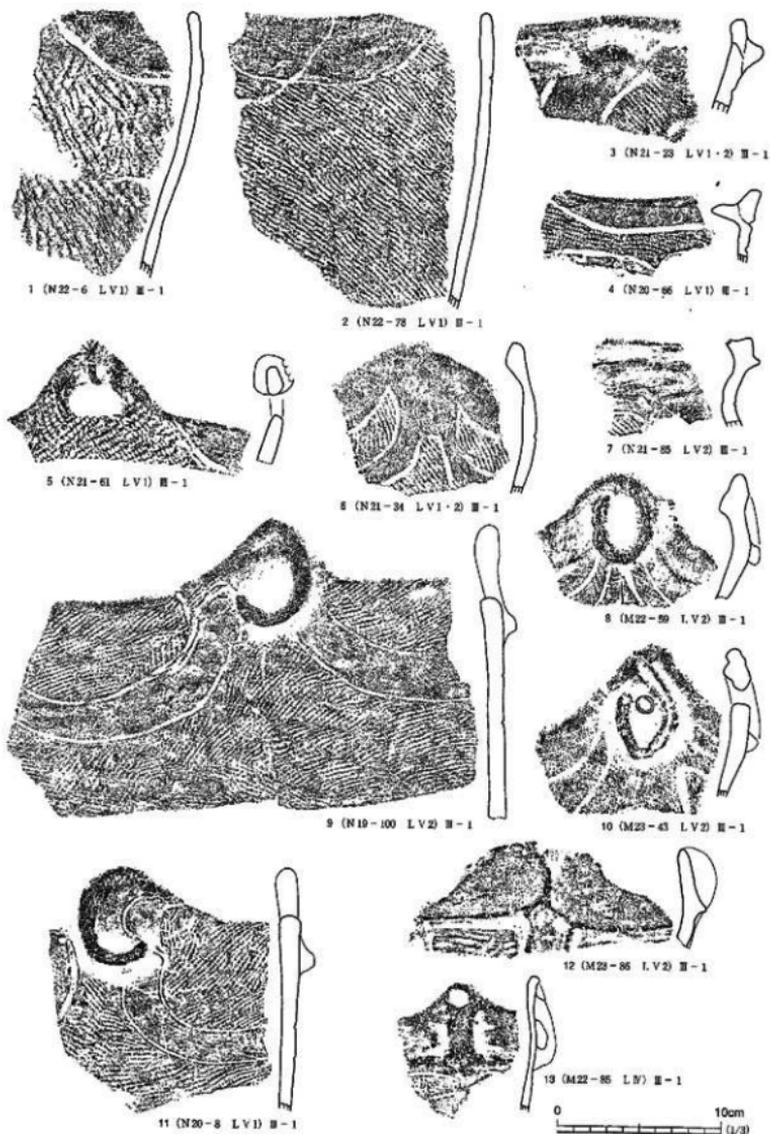


圖497 遺構外出土遺物 (72)

口縁部が直線的に外傾するもの、やや内傾気味になるものが多く、口縁部を隆線で区画するものに多く認められた、括れを有し口縁部が内湾するものは少ない。特に、図497-9・11などの資料は、器形的に見るとⅡ群3類m種に分類した土器の承譜上にあると思われ、後述するb~f種に見られる大型の深鉢形土器に繋がる資料と思われる。

図498には、本種と思われる口縁部突起を掲載した。1~3は、突起の末端に盲孔を加え、昆虫の眼のような装飾を施す。4~6は、中空の筒状突起である。突起上面には、盲孔や沈溝が施される。本種の土器には、関東地方の影響を受けたものが多い。

b種 主に、口縁部の無文部と胴部文様を隆線で区画するものである。(図499~502)

器形的には、胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに内傾しながら立ち上がるものと、口縁部が直立気味に立ち上がるもの、口縁部が「く」の字状に外反するものなどが認められる。胴部文様は、地文のみで文様が施されるものは少ない。

図499, 図501-1~6は、隆線が波頂部を巻き込んで「入」字状・「人」字状に垂下するものである。図500-5~8などは、隆線が口縁部に迫り上がり、「人」字状を呈しているが、図500-9などは、隆線が口縁部まで迫り上がらず、途中から「I」字状の隆帯を貼り付け、同じ「人」字状

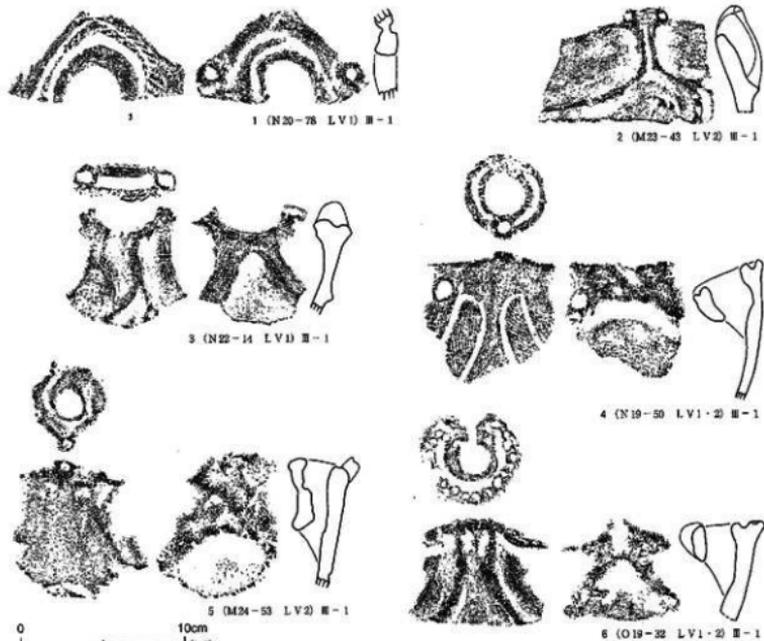


図498 遺構外出上遺物 (73)

を簡略化して表現している。図500-9に認められる口縁部隆帯の簡略化は、後述するC種の口縁部に付された隆帯の表現に繋がるものと思われる。図500-1・2、図501-7・11は、隆線が口縁部に向かい迫り上がり、「ハ」の字状を呈するものである。図500-2は、口縁部の隆線間に「O」字状の隆帯が付される。図501-7・12は、「ハ」の字状の上端が繋がり、「Q」字状を呈す。図501-8~10・12は、隆線がほとんど迫り上がらず、「Q」字状の隆帯が付されたものである。これらの「Q」字状隆帯は、図501-7・11に比べ、表面が偏平になるものが多い。

図502は、口縁部の無文部と胴部文様を区画する隆線上に、突起が付されたものである。突起は、舌状に張り出すものが多い。また、5のように突起状に盲孔を施すものや、同一個体9・10のように、両端から摘み上げられたようなものも認められる。7の胴部には、沈線が施される。

c種 主に、口縁部の無文部と胴部文様を隆帯で区画するもので、口縁部に「I」字状・「ノ」の字状の隆帯が付されるもの。(図503~509)

本種にあたる資料で、ある程度器形が判断できるものを、図503・509に掲載した。器形的に見ると、深鉢形土器では、図503-1の胴部下半から上半にかけて緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや内傾するもの、図503-2・3のような、胴部下半から胴部中央にかけて緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部が直立気味になるもの、図503-5のような、胴部中央に膨らみを持ち、口縁部に向かい内傾するもの、図503-6の胴部下半から口縁部にかけて直線的に外傾しながら立ち上がるものなどが認められる。浅鉢形土器では、図509-7の体部が緩やかに外傾し、口縁部が内湾するものと、図509-8のようなソロバン玉状を呈するものが認められる。また、口縁部は緩やかな波状口縁を呈するものが多い。

次に口縁部に付された隆帯と胴部の文様について、概観する。口縁部の隆帯は、「I」字状、「ノ」の字状、「I」字状の隆帯を斜めに組み合わせ、三角形状に付されるものなどがある。特に、「I」字状に付される隆帯は、口縁部と胴部を区画する隆帯に直行するように付される場合が多い。また、図503-1・2、図504-5・6、図505-12・13、図506-1のように、口縁部と胴部を区画する隆帯が迫り上がるものや、口縁部を巻き込むように隆帯を付すといった、前述したb種の表現を持つものも一部認められる。口縁部に付された隆帯は、図503-3・4、図505-1・7・9・10・12の刺突文が施されるもの、図504-3・4・7~9、図508-1・2・4のような両端に盲孔を有し、中央に沈溝が施されるもの、図508-3・5の両端に盲孔を持つものなどがある。この内、両端に盲孔が施されるものについては、図504-3・8・9のように「I」字状隆帯の両端を整形して円形状にするものと、図504-7のように「I」字状隆帯の両端に円形浮文を貼り付けて、隆帯両端を円形状にするものが認められる。また、口縁部と胴部を区画する隆帯については、断面が台形状を呈するものが多く、隆帯上に刺突やキザミが施されているものもある。

次に、胴部に施された文様について述べる。本種に属す資料については、胴部に文様を有すものは少なく、大半は縄文や櫛歯状工具による条線文が施されている。中には、図509-1~5のように、胴部の地文に刺突文が施された資料も認められる。これらの土器は、本種にあっては特異であ

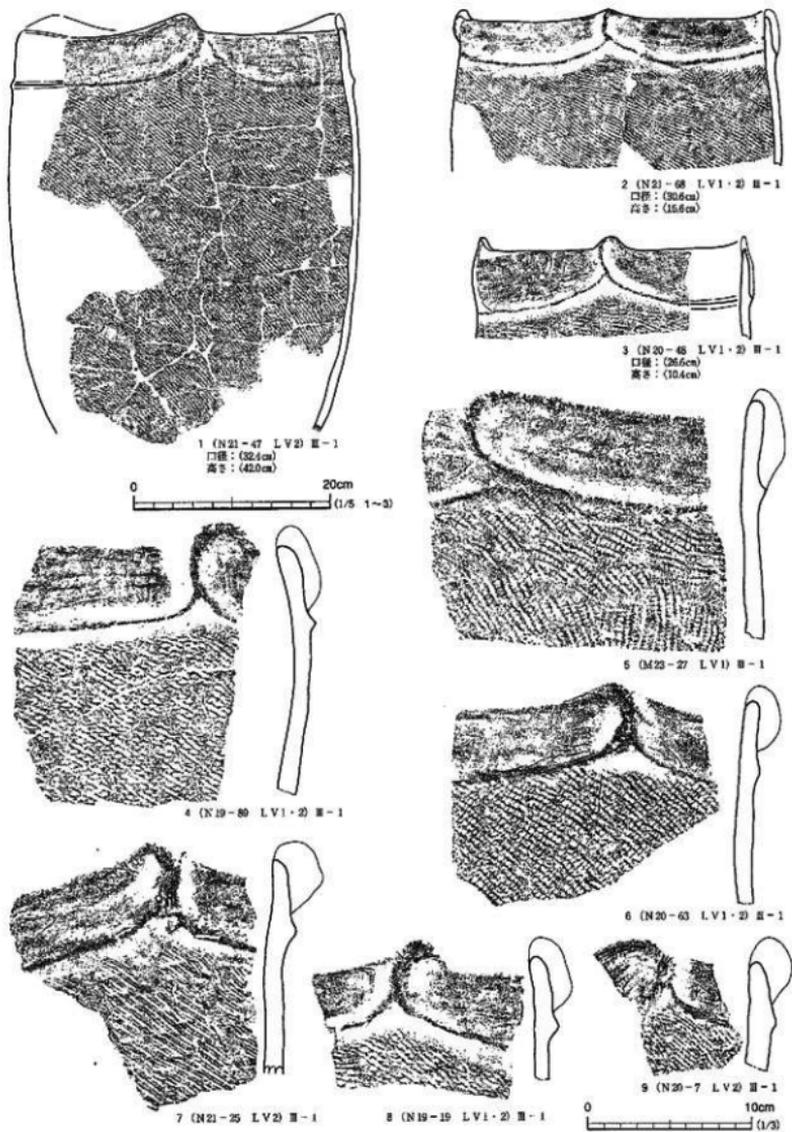


図499 遺構外出土遺物 (74)

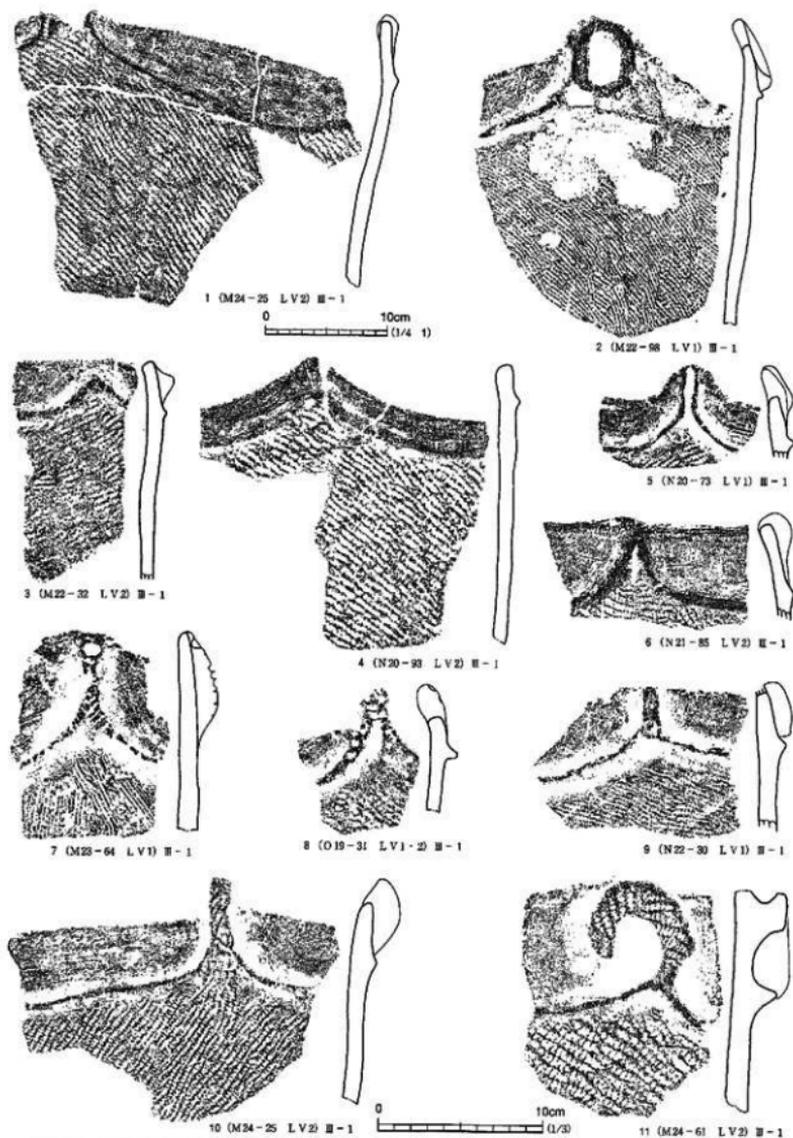


図500 遺構外出土遺物 (75)

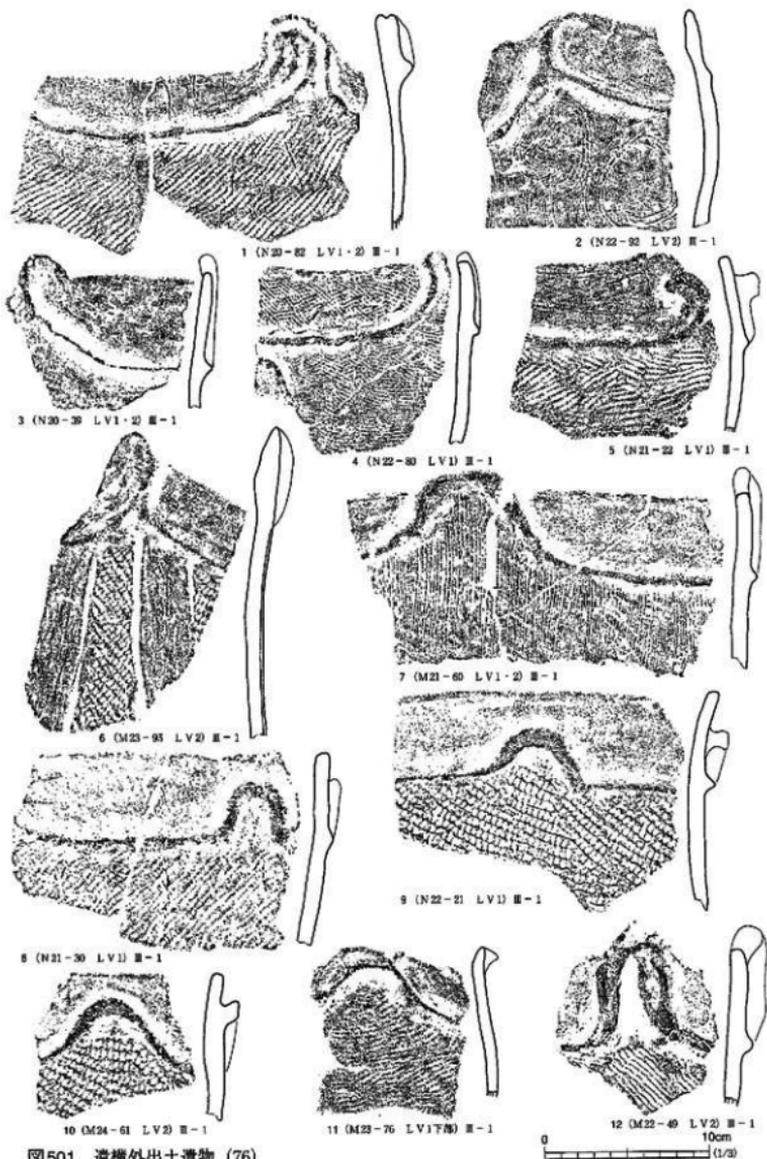


図501 遺構外出土遺物 (76)

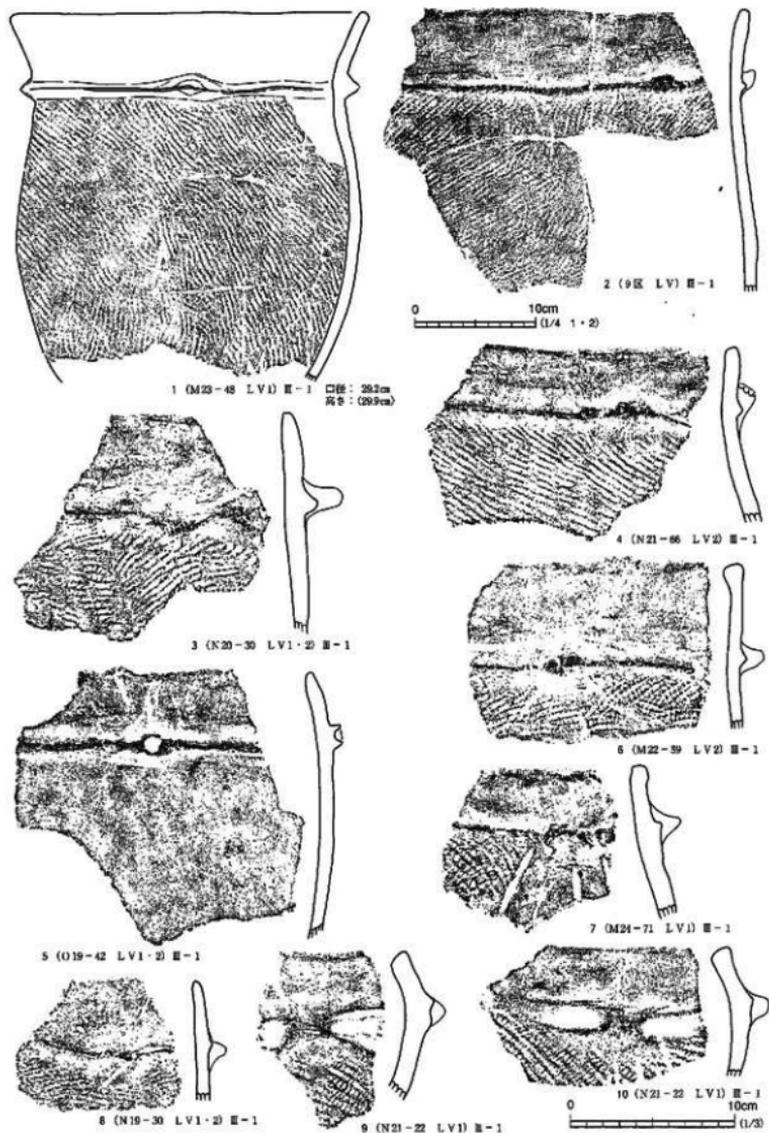


図502 遺構外出土遺物 (77)

第1編 高木遺跡

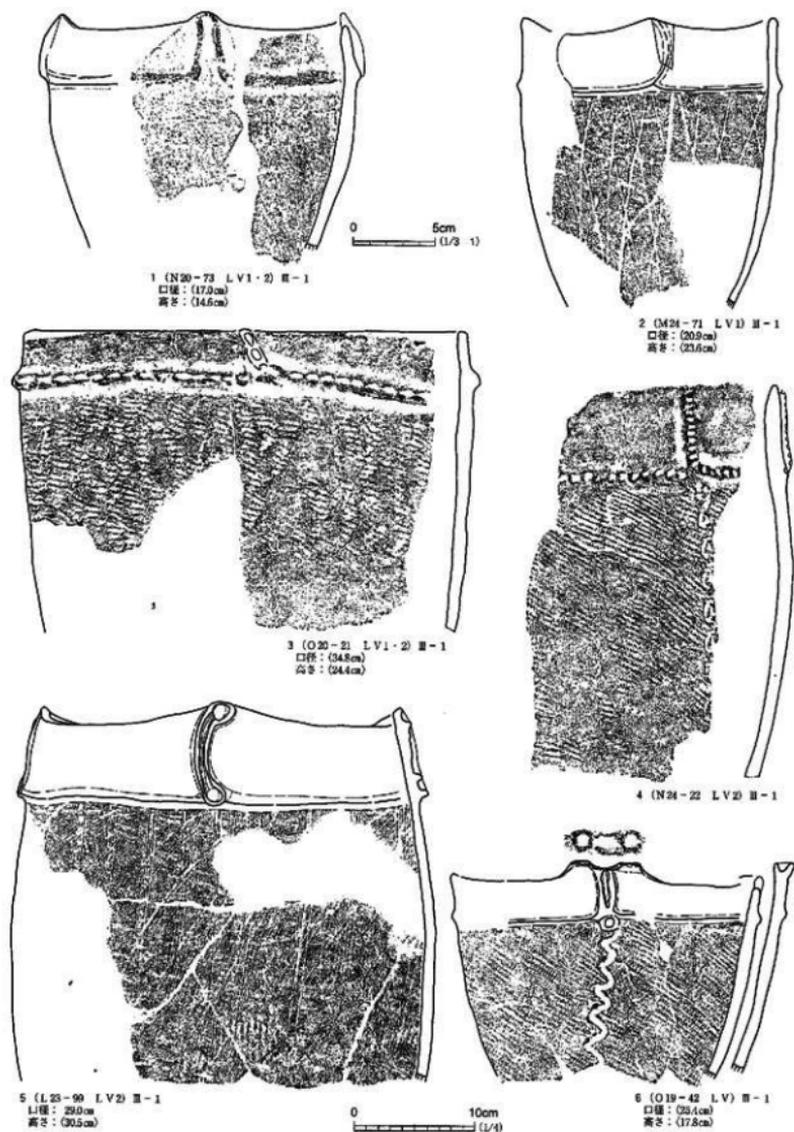


圖503 遺構外出土遺物 (78)

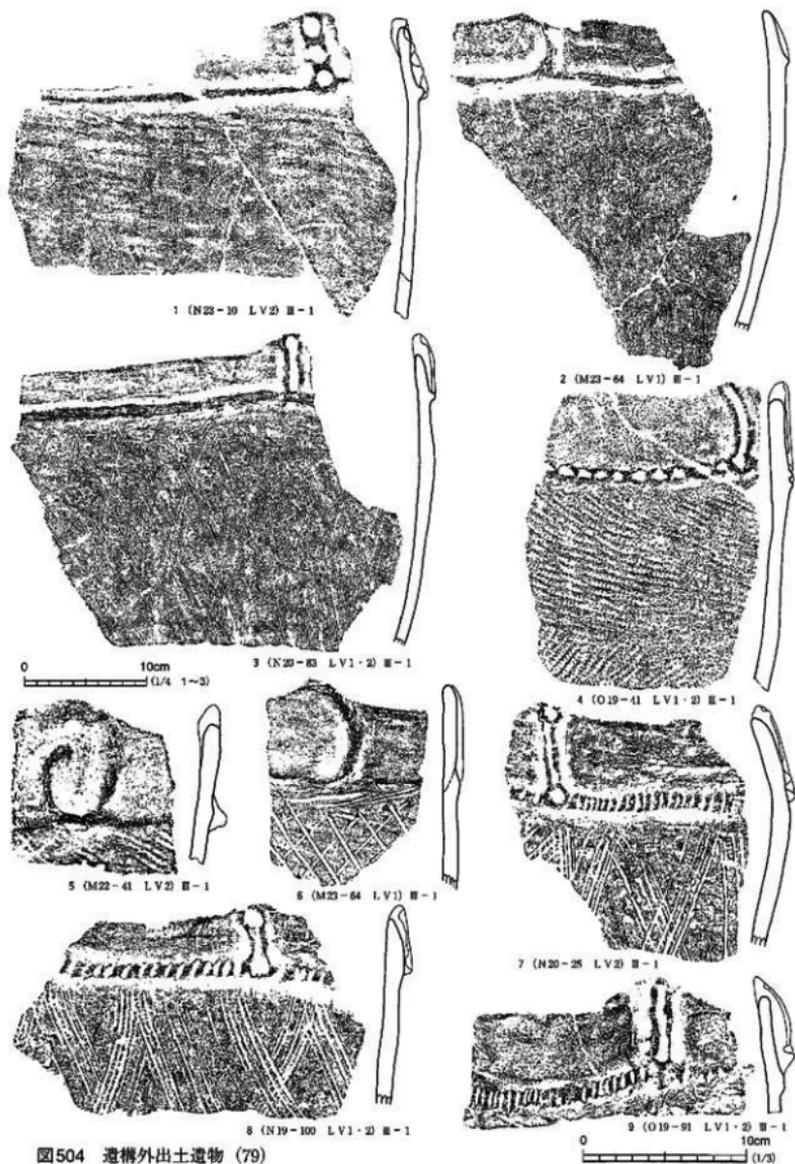


图504 遺構外出土遺物 (79)

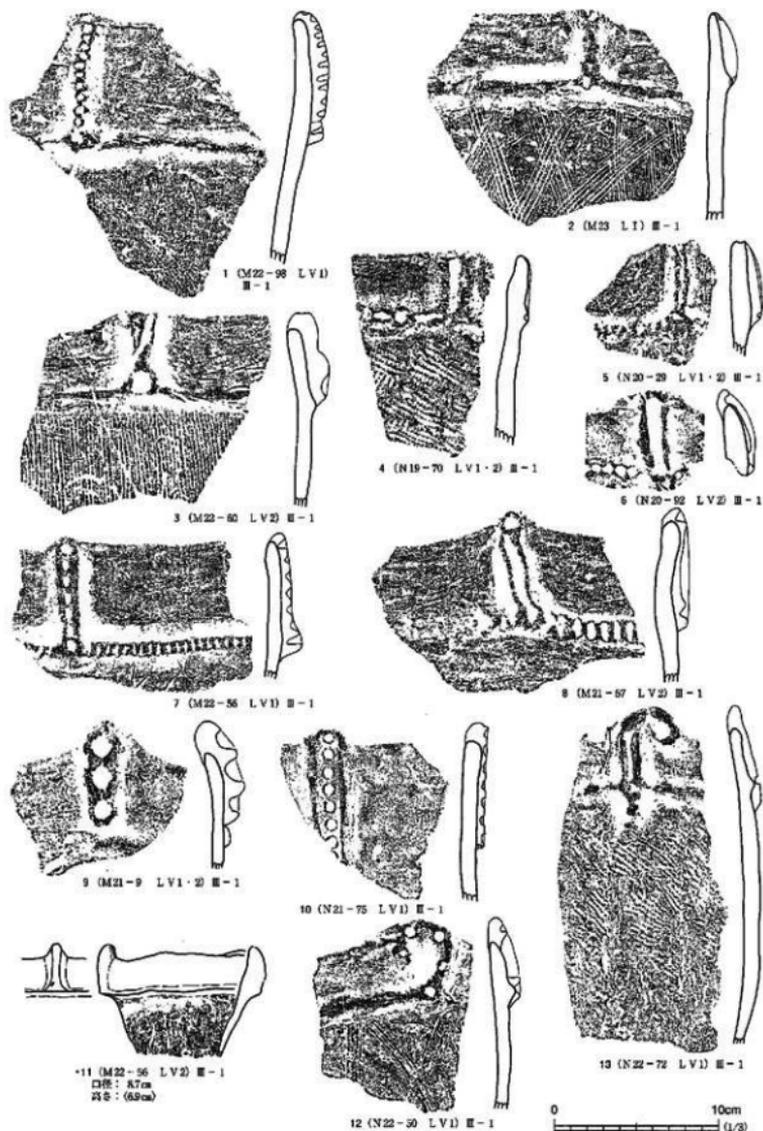


図505 遺構外出土遺物 (80)

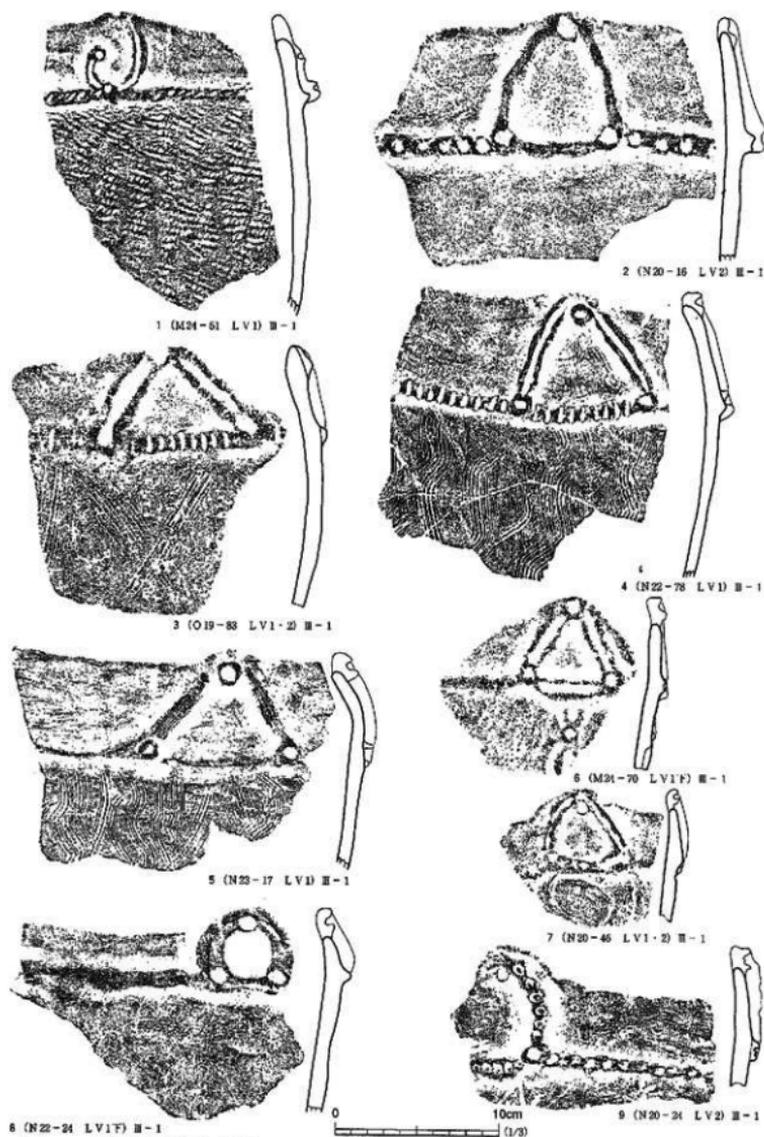


図506 遺構外出土遺物 (81)

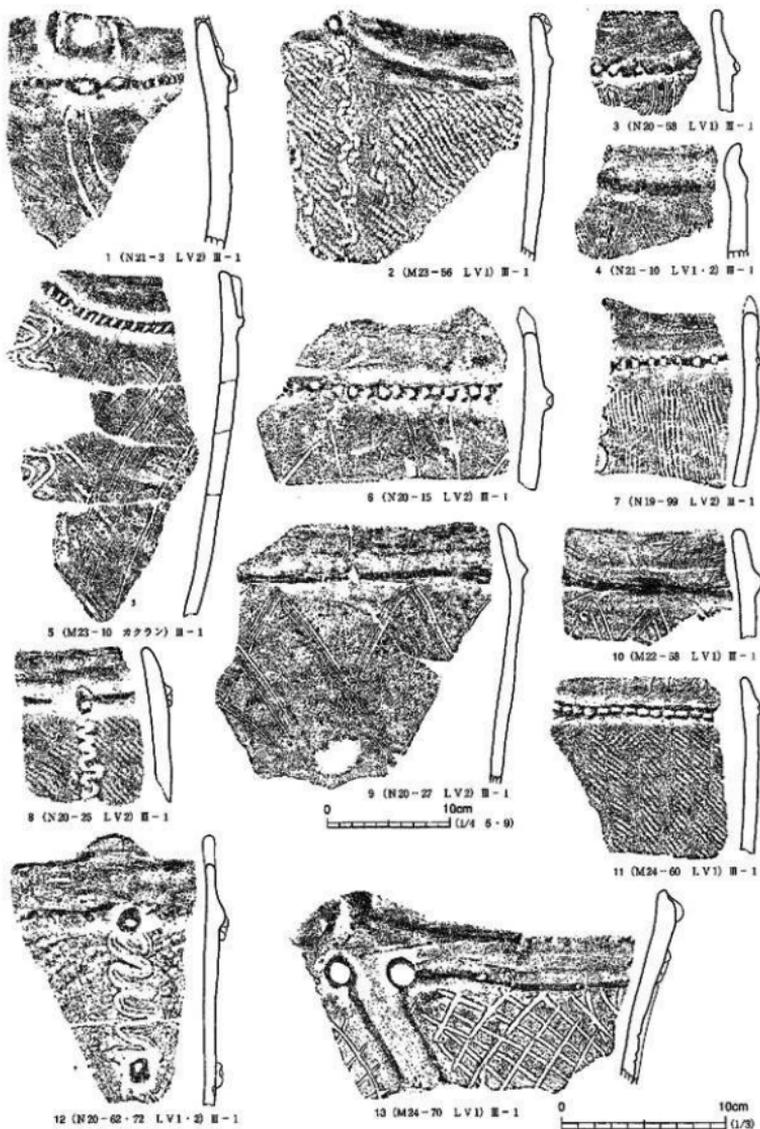


図507 遺構外出土遺物 (82)

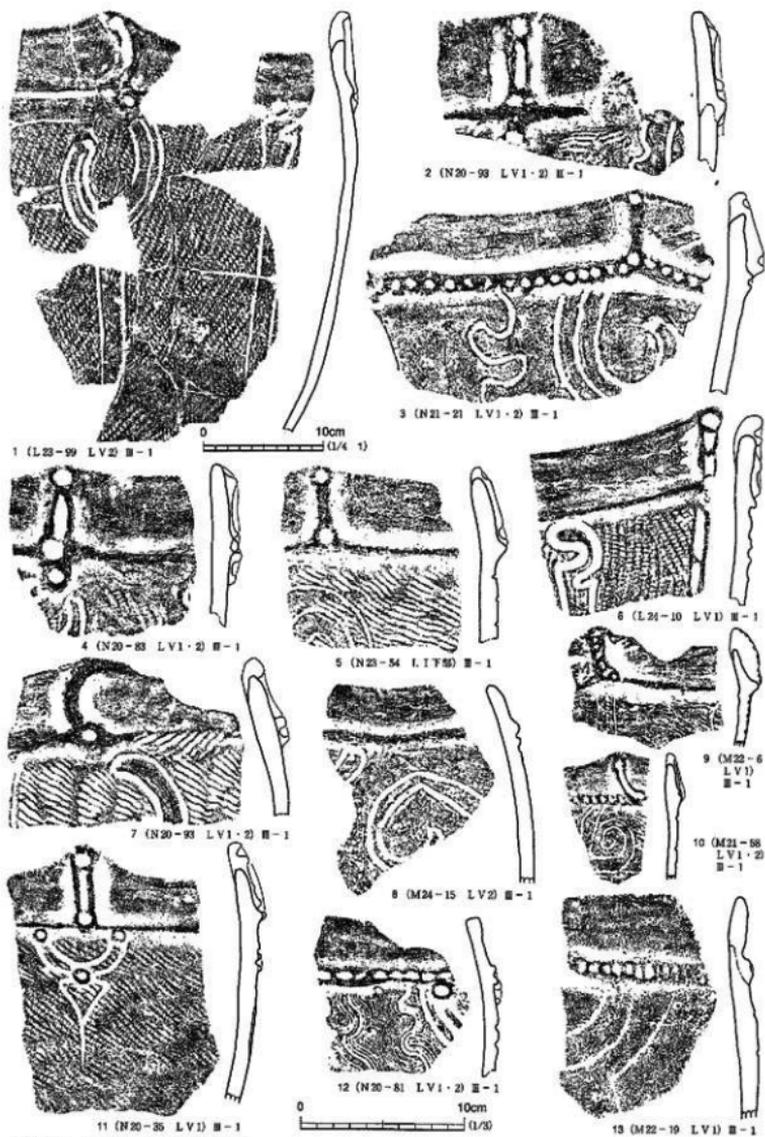


図508 遺構外出土遺物 (83)

り、後述するi種の影響を受けたものと思われる。図509-1は、胴部に垂下隆帯が付される。文様を持つ土器について見ると、まず、図503-6の蛇行沈線が施されるもの、図503-4、図507-2のような結節節脈文が施されるものがある。図507-12は、円形浮文を配し、半截竹管状の工具で蛇行沈線が施される。

この他、胴部に施された文様のモチーフがある程度判断できる資料を図508に掲載した。胴部文様は、1・3の「J」字状ないし、釣針状の文様下端に剣先状の沈線を垂下させるもの、6の蕨手文が施されるもの、9の沈線間内に刺突文が施されるもの、8・10の渦巻状の文様を描くもの、11の三日月状の文様下端に剣先文が付されるものなどが認められる。施された文様は、沈線で描かれ、文様帯内を磨消して、無文部とするものが多い。また、11のような、文様の起点などに円形浮文を付しているものもある。胴部文様を持つ土器の中には、図507-13のように、隆帯で胴部文様を区

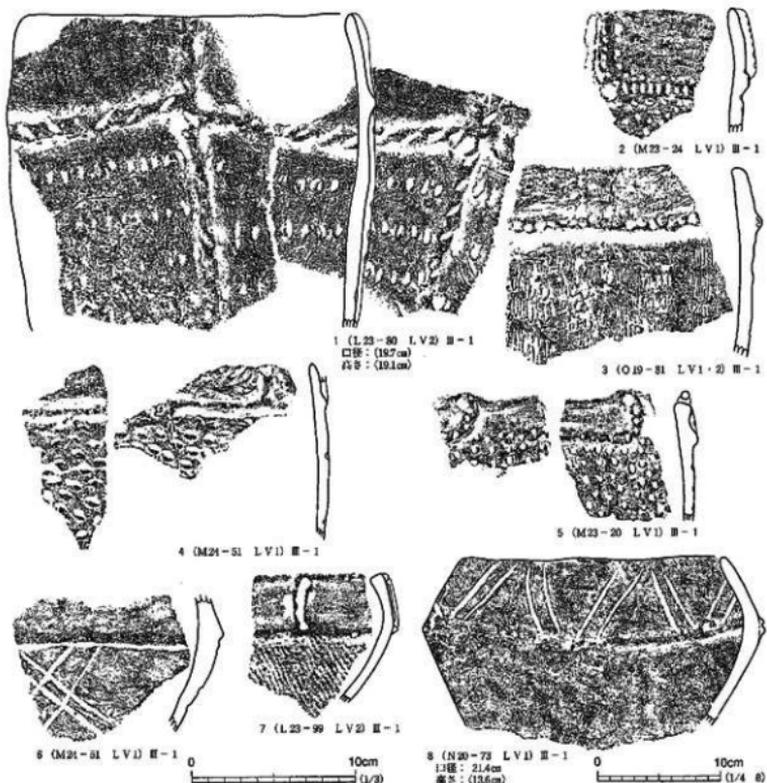


図509 遺構外出土遺物 (84)

画するものも認められる。口縁波頂部には、小振りの「C」字状隆帯が付される。本種の土器と比較して、口縁端部が肥大し、内屈する特徴がある。また、図509-8のような、口縁部に文様帯を持つものも認められる。8は、二本一對の沈線を斜めに施し、三角形の文様を描く。口縁部と体部を区画する隆帯と沈線の接点には、円形浮文が付されている。

d種 主に、口縁部の無文部と胴部文様を隆帯で区画するもので、隆帯に沿って沈線が施されるもの。(図510-512, 図513-1・2)

本種にあたる資料で、ある程度器形が分かるものを図510, 図511-1に示した。深鉢形土器では、図510-1の胴部上半に膨らみを持ち、緩やかに内傾しながら口縁部に立ち上がり、口縁端部が外反するもの、図510-2・3のような胴部下半から上半まで緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部が内折するもの、図510-4のような胴部中央に膨らみを持ち、口縁部が緩やかに内傾しながら立ち上がるもの、図511-1のような胴部下半から、口縁部まで緩やかに外傾しながら、直線的に立ち上がるものが認められる。また、図512-11の体部が外反し、口縁部が内折する浅鉢形土器や、図512-12の口縁部が「く」の字状に外反する鉢形土器などもある。

口縁部の形態は、波状を呈するものが多い。口縁部と胴部を区画する隆帯の断面形は、台形状を呈し、隆帯の両脇ないし一方を沈線で縁取っている。

口縁部の隆帯は、c種に施されたものと基本的には変わらないが、図511-10や図512-5のように隆帯を弧括状に付しているものも認められる。本種に施された隆帯を観察すると、c種に比べ、扁平で薄い。胴部に施される文様は、図510-1の蕨手文が施されたもの、図510-2の蛇行沈線と「J」字状の文様下端に剣先文が付されたものが交互に配されるもの、図510-3の蕨手文と楕円形状の文様を交互に配するもの、図510-4、図512-10の隆帯に沿って施された沈線が胴部に垂下し、胴部の器面を縦位に分割するものなどが認められる。図510-3は、楕円形状の文様を囲む沈線が横位に展開し、蕨手文に連結するものと思われる。施された蕨手文は「R」字状を呈している。他に、胴部文様が横位に展開するものは、図513-1・2が認められる。また、別文様と蛇行沈線や蕨手文が交互に配される資料としては、図511-3・4・6がある。図510-3の「R」字状を呈した蕨手文や図510-2に見られる剣先文については、後述するg種図520-4の「R」字状、図520-2・4、図528-3の剣先状の文様に、関連するものと思われる。

また、図512-6・9・13・14のように、口縁部に文様帯を持つものも認められる。これらの土器の器形は、浅鉢形土器ないし鉢形土器になるものと思われる。図512-6・9は、沈線で方形の文様が施される。図512-13・14は、二本一對の沈線を斜めに施す。沈線の両端には、円形浮文が付されている。

e種 口縁部の無文部と胴部文様を沈線で区画するもの。(図513-3~8, 図514~518)

器形や文様のモチーフが分かる資料を、図513-3~8, 図514に掲載した。深鉢形土器の器形には、図513-3, 図514-3のバケツ状を呈するもの、図513-4の胴部中央に膨らみを持ち、緩やかに内傾しながら口縁部が立ち上がるもの、図513-5の胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が

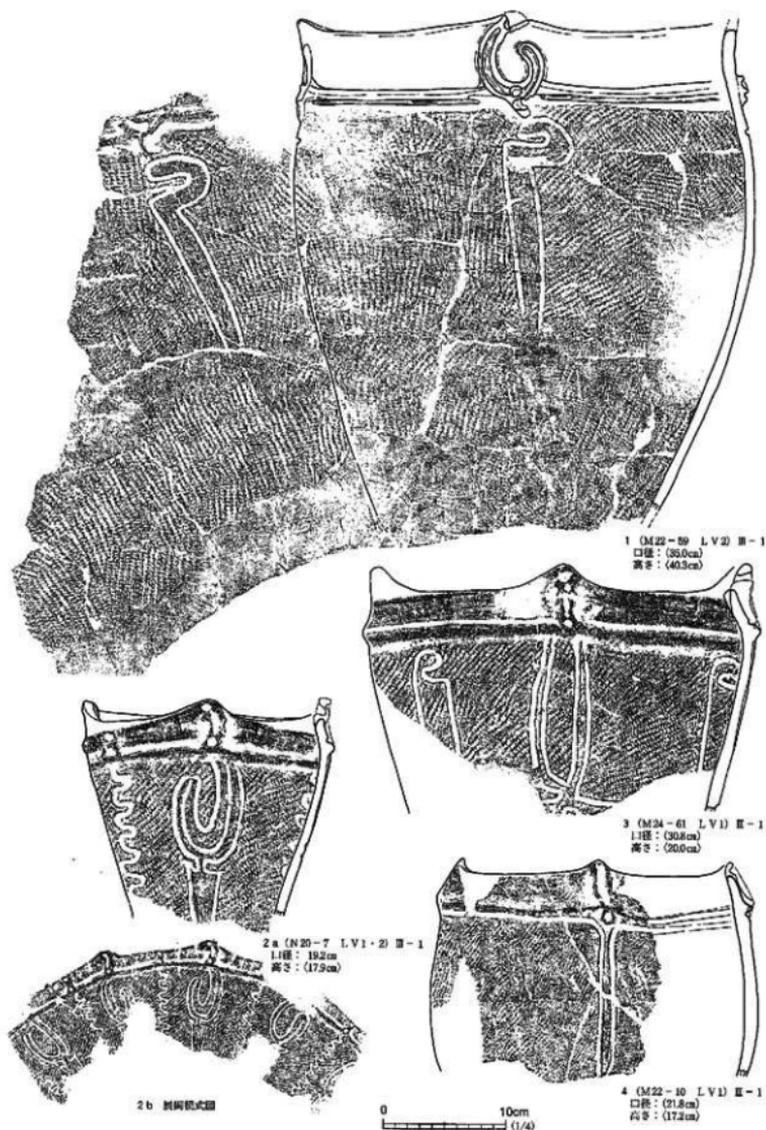


図510 遺構外出土遺物 (85)

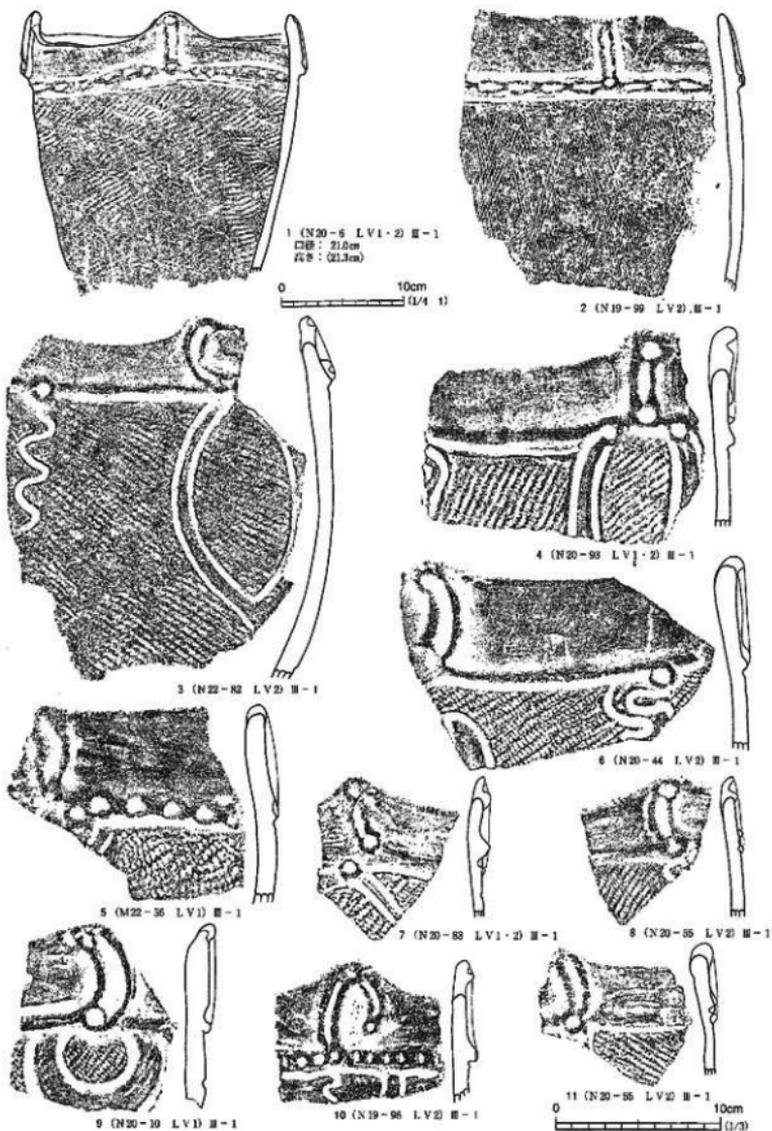


図511 遺構外出土遺物 (86)

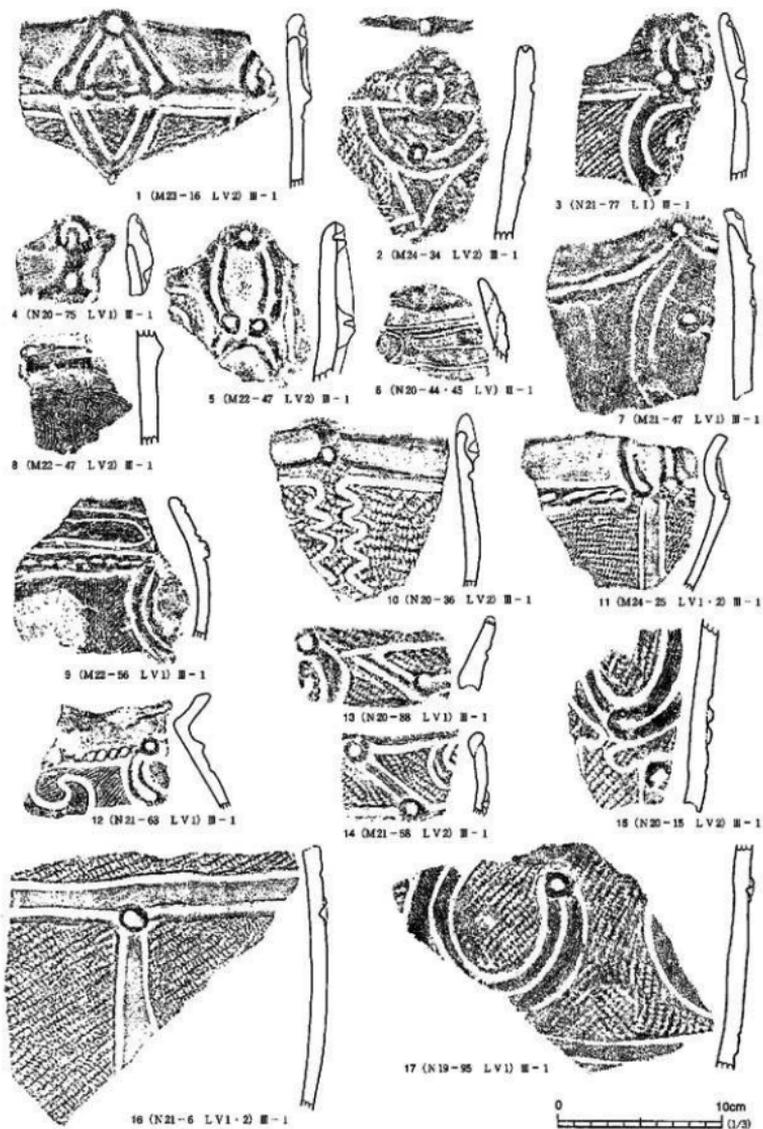


図512 遺構外出土遺物 (87)

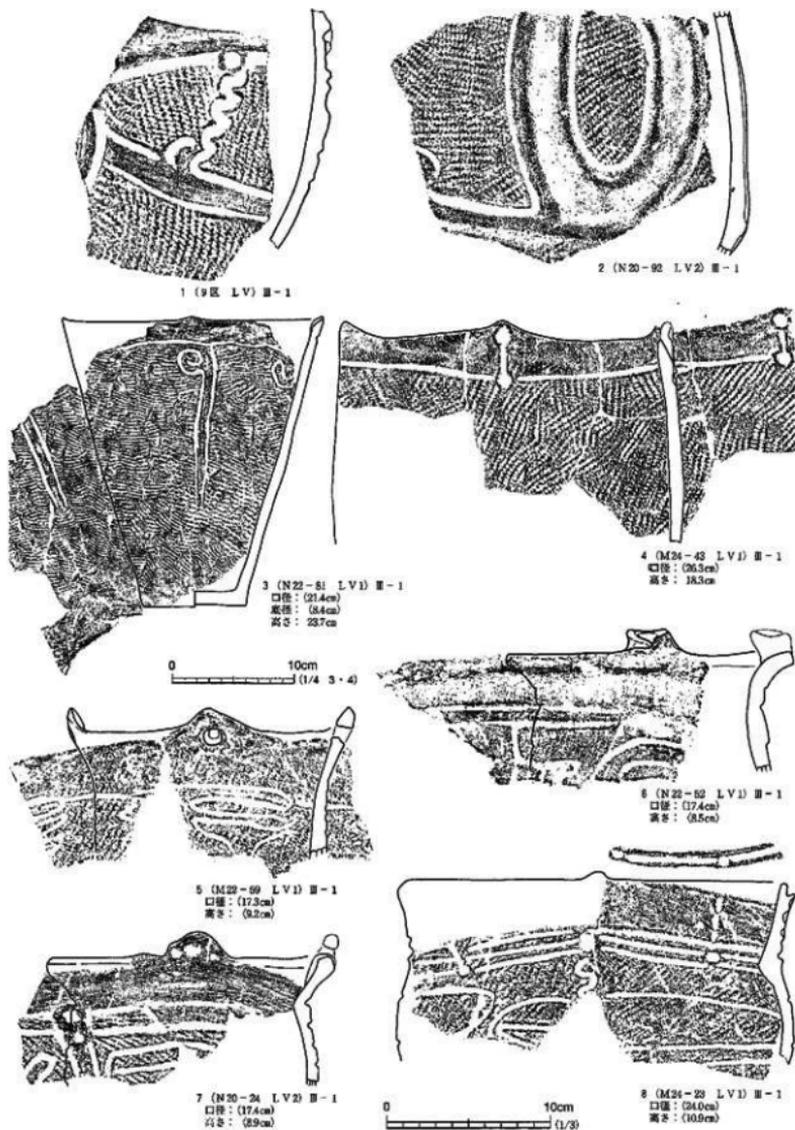


図513 遺構外出土遺物 (88)

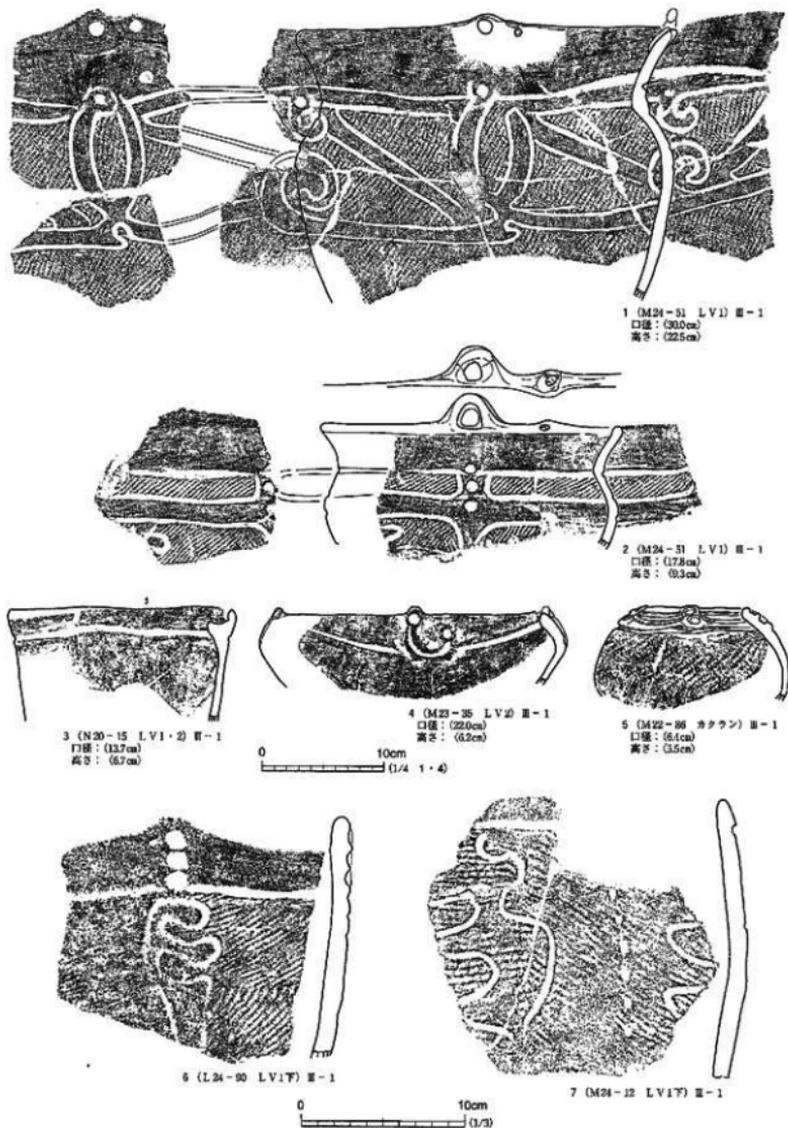


図514 遺構外出土遺物 (89)

「く」の字状に外反するもの、図513-6~8、図514-1・2の胴部に膨らみを持ち、口縁部が「く」の字状に外反するものなどが認められる。浅鉢形土器では、図514-4の体部が緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部が内湾するもの、図514-5の体部が球体状を呈しているものなどが認められる。本種においては、c・d種では、あまり認められなかったバケツ状を呈したものの口縁部が「く」の字状に外反する器形が多く認められる。

口縁部は、緩やかな波状口縁を呈すものと平口縁のものが認められる。波頂部には、円孔が施されるものが多いが、中には、図513-6や図515-1のように突起を有するものも認められる。口縁部は、基本的には無文部となるが、図513-4の沈線の両端に盲孔を持つもの、図514-4の「J」字状の隆帯両端に円形浮文を持つもの、図514-5、図517-6・8・11・12・15のような円形浮文を付すもの、図514-6の盲孔を施すものなどが認められる。口縁部に付された隆帯は、偏平なものが多い。また、図513-4や図514-6に施された沈線や盲孔周辺は、文様施工時にはみ出した粘土が盛り上がった状態になるものが多く、c・d種に多用された隆帯の表現を簡略化したものと思われる。図515-6などは、肥大した口縁端部に沈線と盲孔が施されている。図514-3の口縁部内面は、鐔状を呈している。

胴部文様を見ると、図513-3・5、図514-6・7、図515、図516-1~4・6、図517-5・6・9、図518-6・10・11の蕨手文や蛇行沈線とその他の沈線文が縦位に施されるもの、図513-6~8、図514-1・2、図517-10・12~14、図518-1~4・7・8の横位に文様を展開するもの、図513-4の地文のみが施されるものに大別できる。特に、文様を横位に展開するものは、口縁部が「く」の字状に外反する器形に多く見られる。また、図514-7や図515-2・4、図516-4・6や図517-15などは、列点状の刺突文や沈線、隆帯を垂下させ、器面を縦位に区画している。

施された文様について、もう少し詳しく概観する。蕨手文が施された土器では、図514-6、図515-1の蕨手文頭部のモチーフが崩れ、蛇行沈線状を呈したものや、図513-3の蕨手文頭部が渦巻状を呈しているもの、図513-5の蛇行沈線の幅が大きいものなどが認められる。また、図515-10のような、「U」字状の文様下端に剣先状の沈線を垂下させるものも認められるが、d種に示した資料に比べ、剣先状の文様部分との接点に明確な括れを持たず、上方の文様と剣先状の文様が分化しない傾向にある。

文様を横位に展開するものは、図513-7・8、図514-2の円形浮文や盲孔を起点に、横位に沈線を施し、方形の区画を持つものや、図514-1、図517-12・13の蕨手文や蛇行沈線、「J」字状文を起点に、沈線を斜めや横位に施すものなどがある。図514-1などは、「J」字文下端から、沈線を横位に展開させ、「J」字文同士を繋いでいる。「J」字文を繋ぐ沈線は、文様間の中間で渦巻状を呈し、「J」字文と渦巻文を沈線で斜位に結んでいる。また、図517-13・14には、波頭状の沈線が横位に施されている。

f種 多条沈線で文様が描かれたもの。(図519)

器形的には、口縁部が直立気味になるものと、やや内傾気味に立ち上がる深鉢形土器が認められ

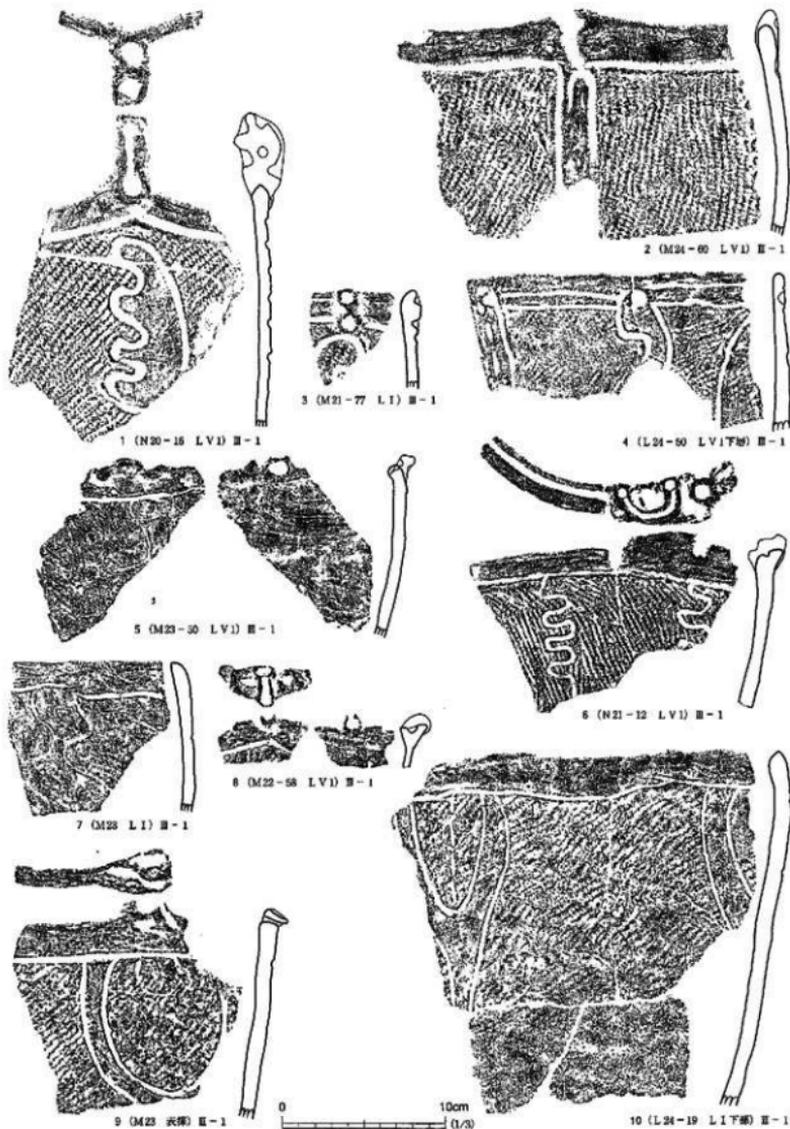


图515 遺構外出土遺物 (90)

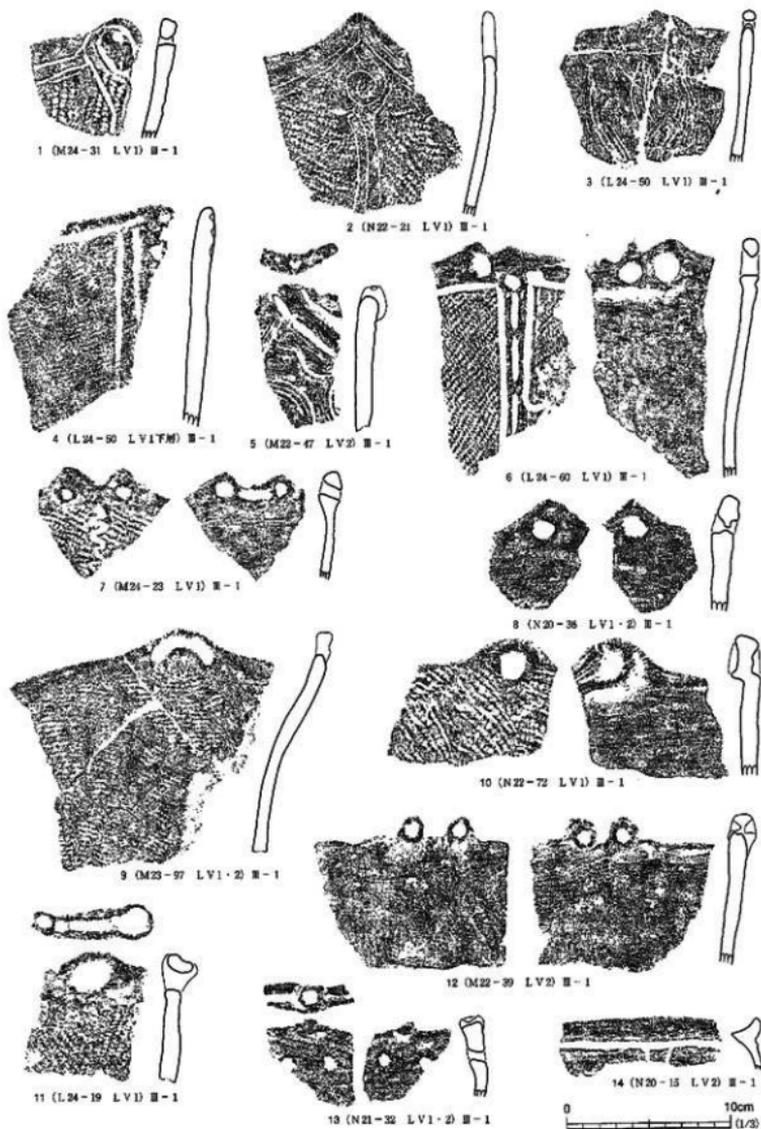


図516 遺構外出土遺物 (91)

第1編 高木遺跡

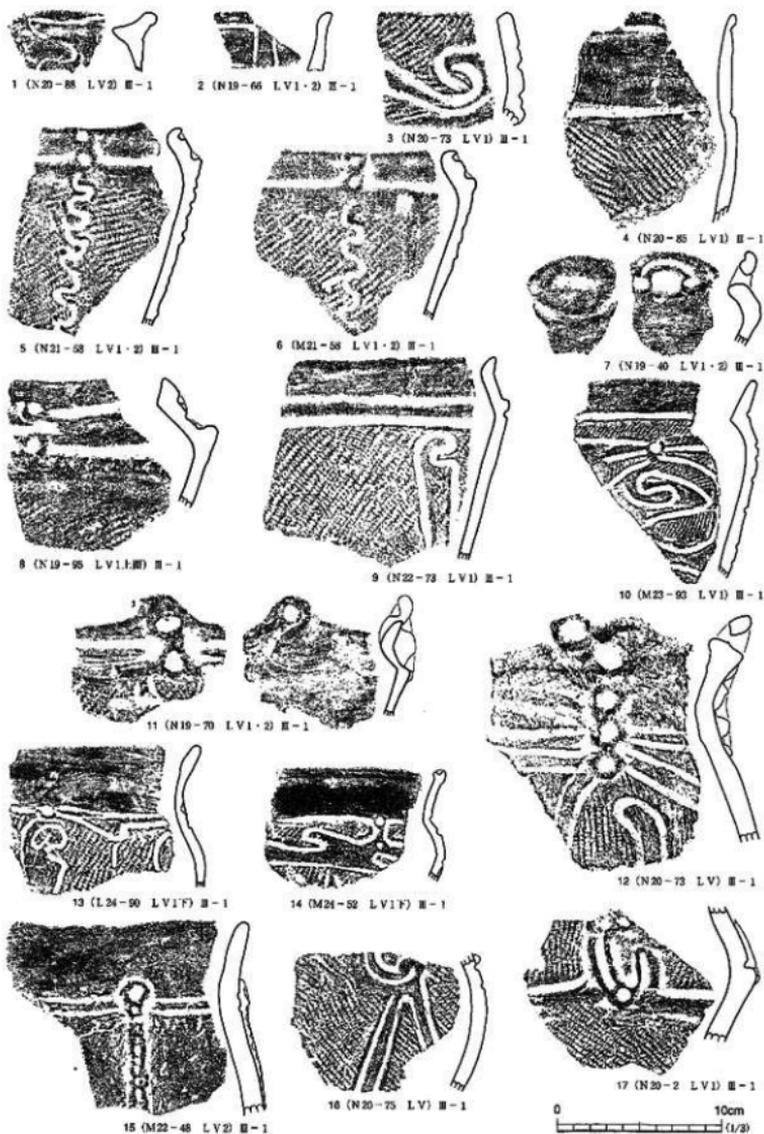


图517 遺構外出土遺物 (92)

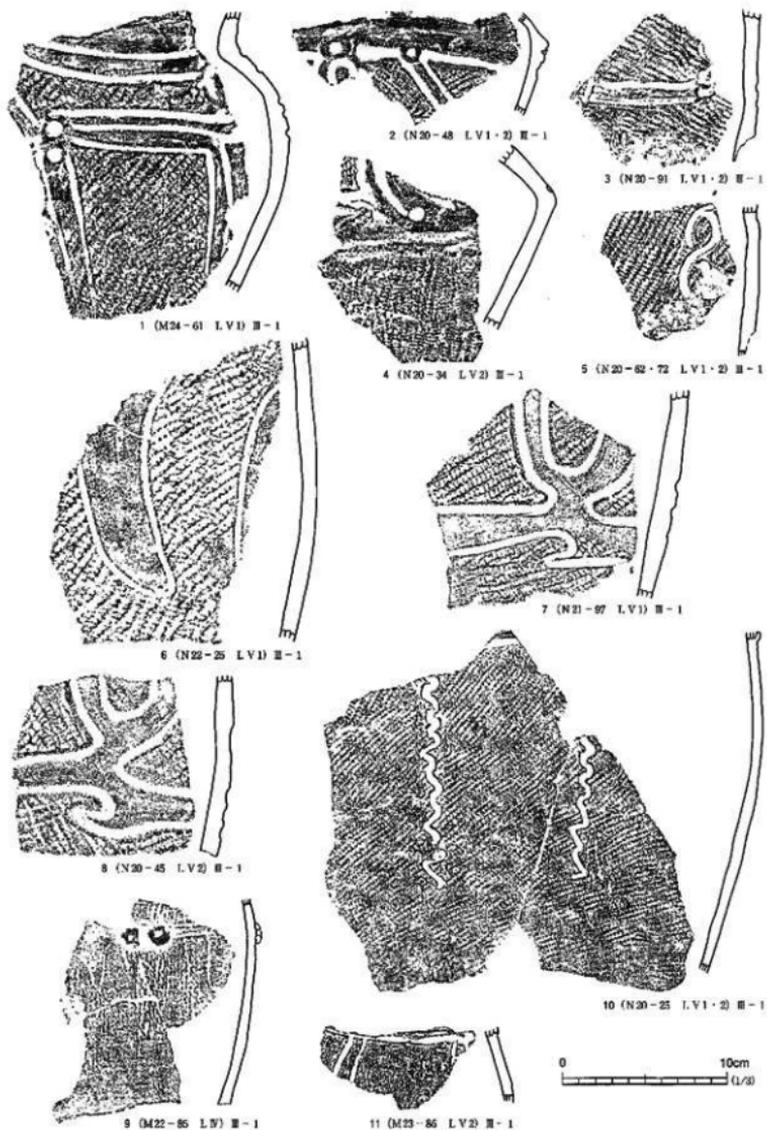


図518 遺構外出土遺物 (93)

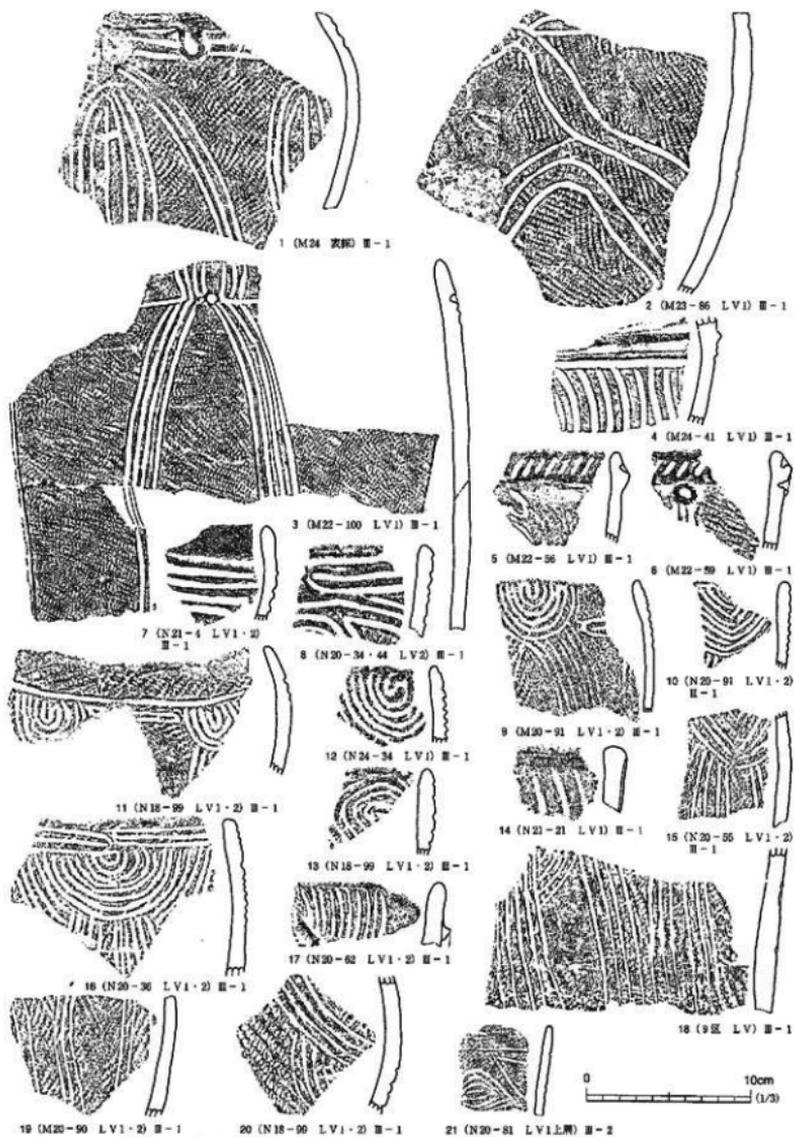


圖519 遺構外出土遺物 (94)

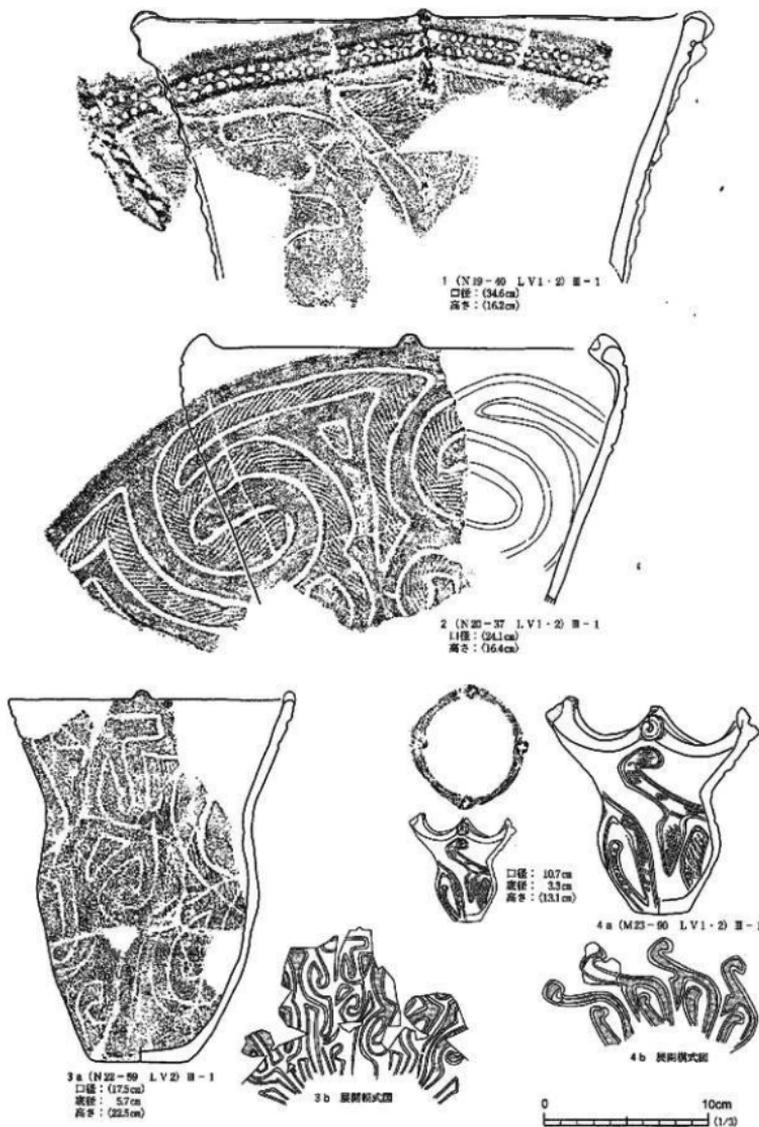


图520 遺構外出土遺物 (95)

る。中には、図519-1のように胴部上半に括れを持つ器形も認められる。文様は、1の多条沈線で楕円文を描き、それを囲むように多条沈線を施すもの、同図3の盲孔を起点に口縁部の無文部と胴部に多条沈線を施すもの、同図9~17のように、口縁直下ないし口縁下端に重弧状の多条沈線を施し、それを起点として胴部に多条沈線を垂下させるものなどが認められる。1~3は、9~17に比べ、施された多条沈線の数は少ない。9~17に見られる重弧状の多条沈線は、3の口縁無文部に施された縦位の多条沈線が、積極的に表現され、生じたものなのかもしれない。また、同図7・8・16のように、口縁部に文様帯を持つものも認められる。同図5・6の口縁端部には、ヤザミ状の刺突文が施される。いずれも、地文の縄文施文後に沈線を施している。

g種 主に、沈線区画による縄文帯で、文様を描くもの。(図520~528)

図520・521に、ある程度器形や文様のモチーフが分かる資料を掲載した。深鉢形土器には、図

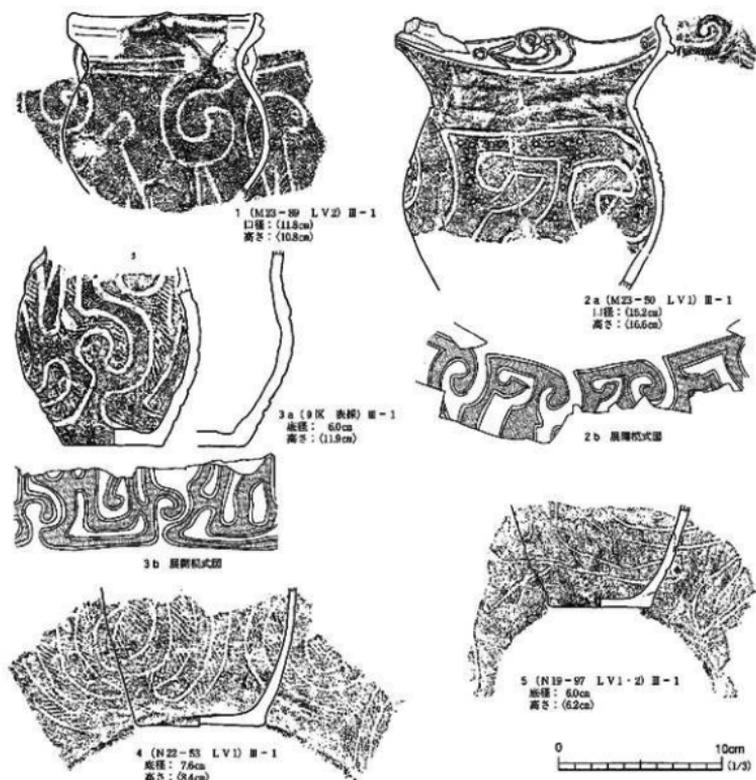


図521 遺構外出土遺物 (96)

520に示したような胴部下半に膨らみを持ち、胴部中央あるいは上半で括れ、口縁部に向かい緩やかに外傾するものと、図521-1・2に示した胴部が球体状に膨らみ、胴部上半で括れ、口縁部が「く」の字状に外反しながら立ち上がるものなどが認められる。口縁部は、図520-1~3の山形状突起を有すものと、図520-4のような波状を呈し、波頂部の1つに大型の突起を有すもの、図521-2のような緩やかな山形状を呈すものなどが認められる。また、図520-1、図522-2、図523-1・4、図525-1のように、口縁下端に隆線（隆線上方には、刺突文を有す。）を施し、口縁部の無文帯と胴部の文様帯を区画するものや、図520-4、図521-1・2のように、口縁端部が肥大して、内折するものも認められる。

土器に施された文様には、図522~524のような、キザミを持つ隆帯を胴部に垂下させ、器面を分割するものも認められるが、文様のモチーフは基本的には、図525~528に示した隆帯が付されない土器とはほぼ同じ文様が施文される。文様については、破片資料が多く、全体を知り得るものは少ないが、図522-6、図525-2・3のような口縁部に沿って帯状に配された縄文帯から、「J」字状の文様を胴部に配すもの、図520-2のように、無文部で「J」字文を描き、縄文帯の末端に剣先状の文様が描かれるもの、図520-3の無文部で「J」字状の文様を描くが、モチーフが全体的に崩れ、「R」字状を呈した文様が胴部下半に認められるもの、図520-4の剣先状の文様が付された「R」字状の縄文帯が斜めに垂下し、胴部下半に小型の「R」字状の文様が配されるものなどが認められる。その他、図528-1・2の胴部資料を見ると「J」字文の末端に、三日月状の隆帯を貼り付け、文様の末端部分を強調するものなどが認められる。本種の多くは、沈線区画による縄文帯で文様を描く場合が多いが、図521-2や図527-5のように、縄文の代わりに刺突文を施すものや図527-3・4のような無文となるものもある。

施された文様について、もう少し詳しく概観してみる。本種には、口縁部に突起を有すものや、肥大した口縁端部に文様が施文されるものが認められる。突起には、図522-1・2、図526-7のような半捻転状のもの、図526-8・9・12の捻転状を呈すもの、図522-8~10、図523-1・4~6・9のような筒状突起になるもの、図523-7、図524-7~9、図527-3・4の円孔を持つもの、図526-10・11のような漏斗状を呈すもの、図524-11の立体的なもの、図527-2の突起内面に沈線と盲孔を持つものなどが認められる。筒状突起を呈すものの中には、突起正面に「J」字ないし「O」字状の隆帯が付されるものが多い。これは、a種で前述したように、「S」字状・「8」の字状隆帯の上端が完全に上面に迫り上がることで筒状の突起を呈し、下端の隆帯と完全に分離してしまうことによる口縁部隆帯の名残であろう。筒状突起上面には、両端に盲孔を有す沈線が、括弧状に施されるものが多い。

肥大した口縁端部に文様をもつ資料としては、図521-1・2、図524-11、図527-1などがあつる。文様は、口縁部の突起周辺に配される傾向にあり、盲孔状の円形浮文を起点に、口縁に沿って沈線が施される場合が多い。

本種については、関東地方の影響を受けたものと思われる。

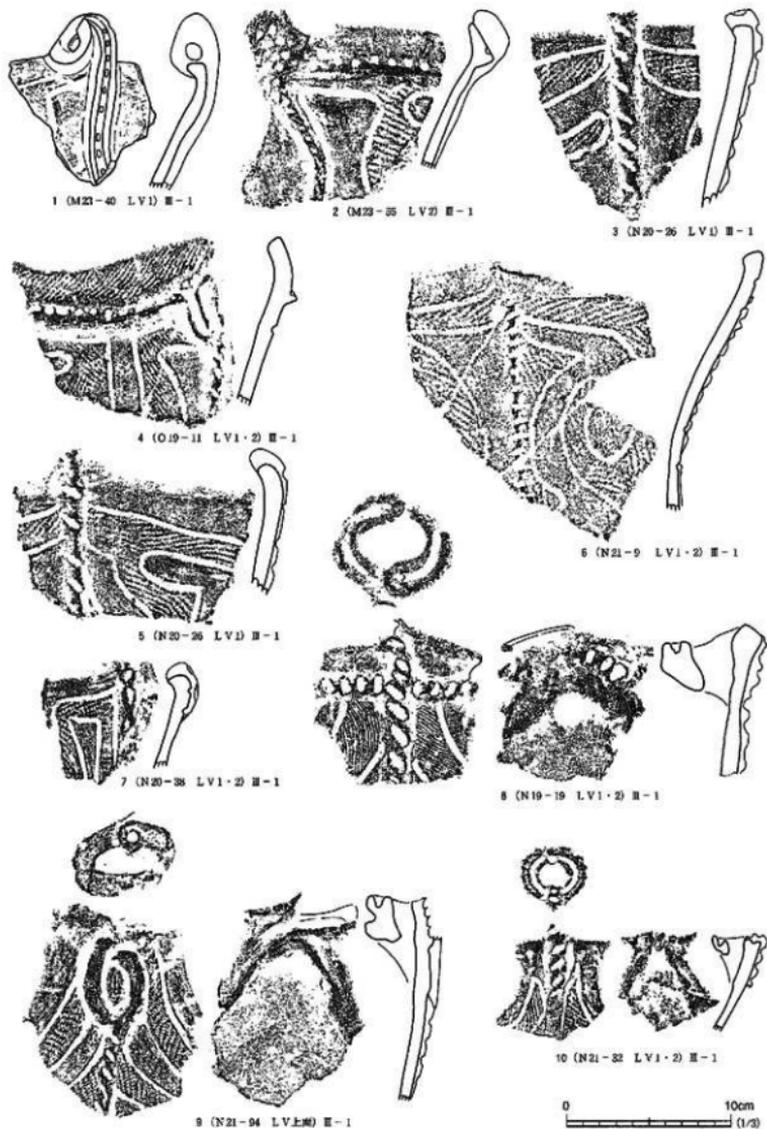


図522 遺構外出土遺物 (97)

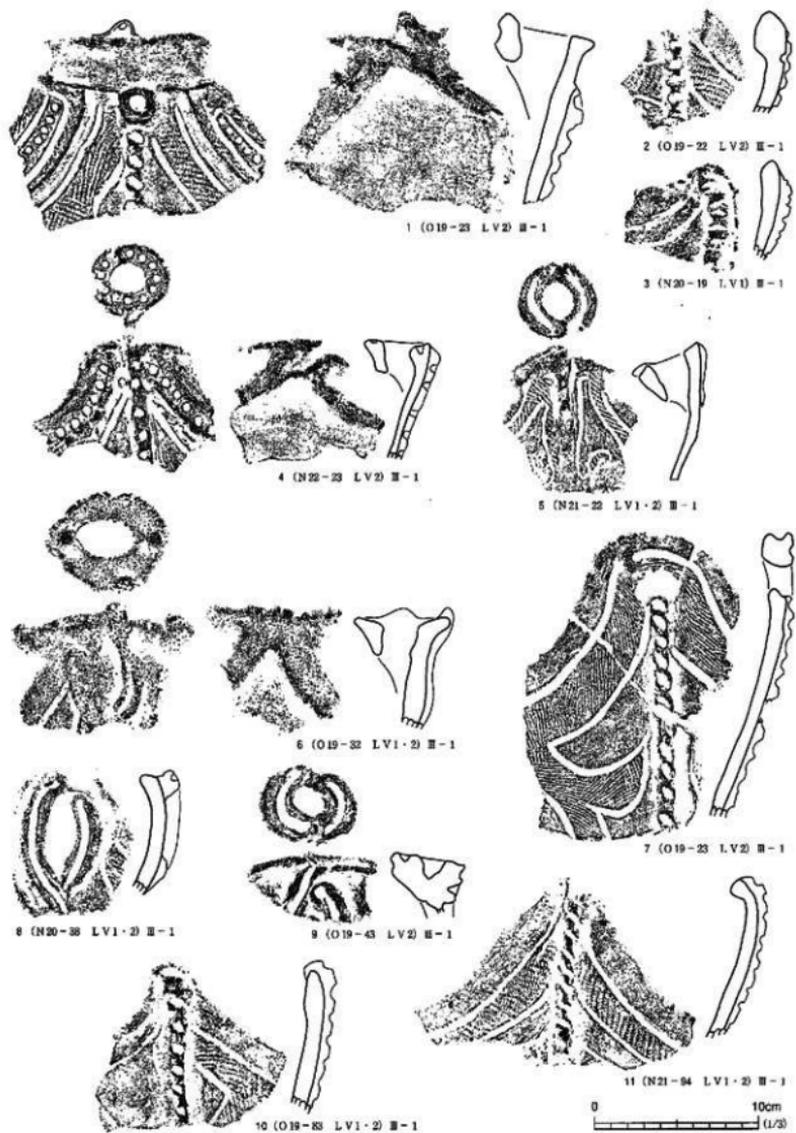


图523 遺構外出土遺物 (98)

第1編 高木遺跡

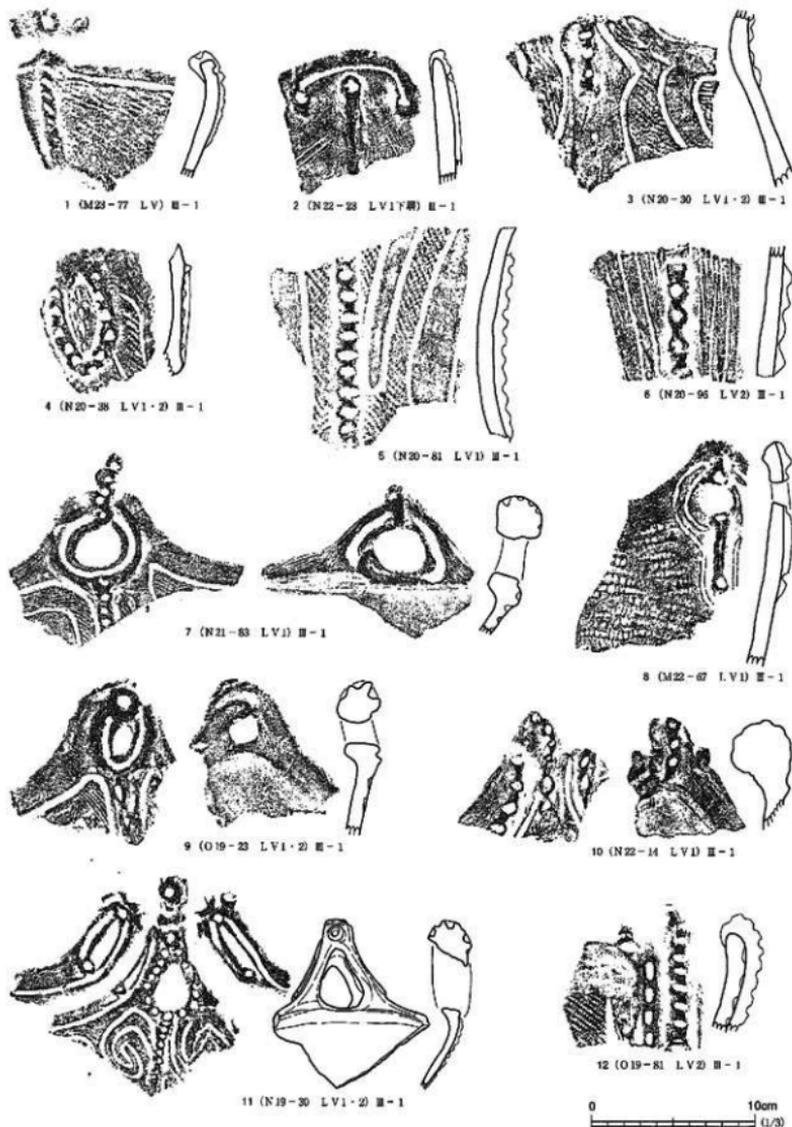


图524 遺構外出土遺物 (99)

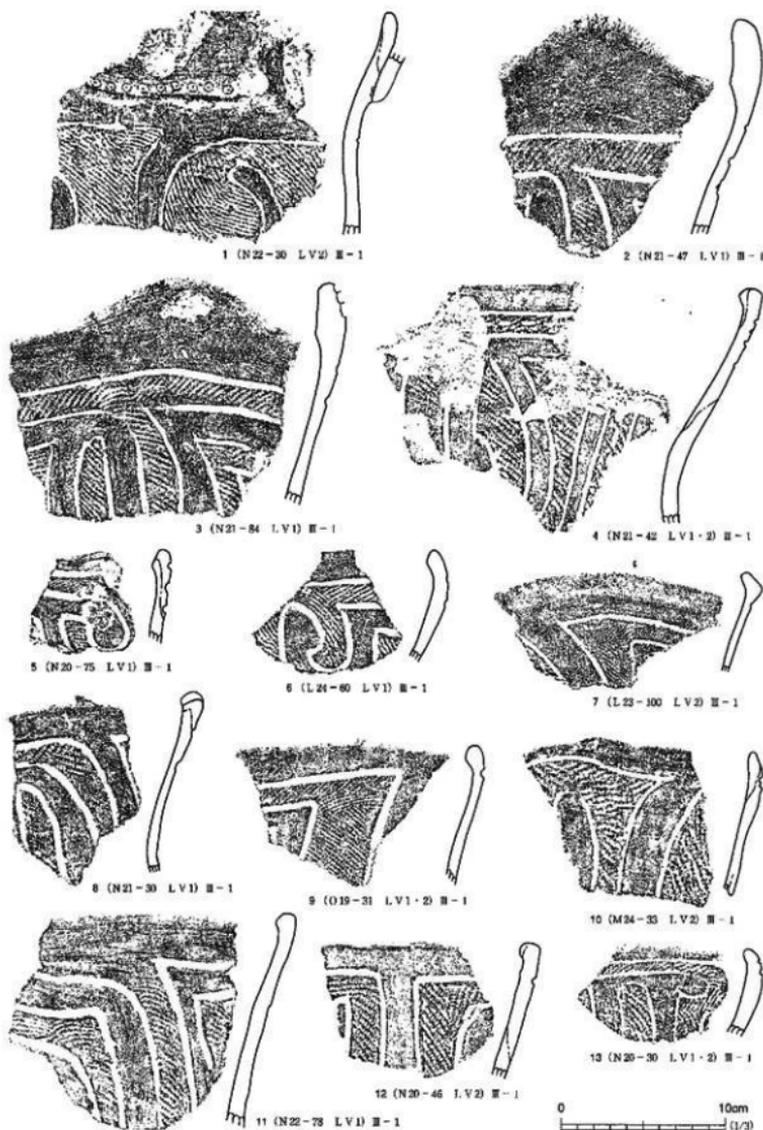


図525 遺構外出土遺物 (100)



図26 遺構外出土遺物 (101)

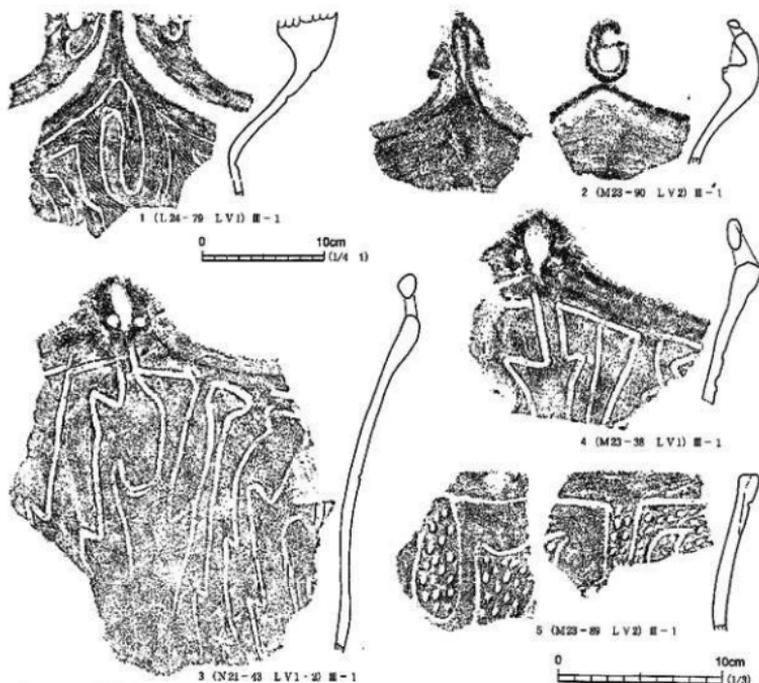


図527 遺構外出土遺物 (102)

h種 主に頸部が「く」の字状に括れる器形で、口縁端部が内屈するもの。(図529～532)

破片資料が多く、全ての器形を知ることはできないが、図529-1～3の口頸部が長いもの、図530-531、図532-1～9の口頸部までが短いものなどが認められる。また、口頸部が短いものには、図530-1の胴部が球体状を呈するものと、図531-2のような胴部がソロバン玉状に膨らむものがある。これらの器形は、g種の図521-1・2や図520-4の系譜上にあるものと考えられる。図529-4などは、バケツ状を呈した深鉢形土器になるものと思われる。その他、図532-13・14のような、浅鉢形土器も認められる。口縁部は、いずれも波状を呈するものと思われ、波頂部には加飾が施されるものが多い。

口縁部突起について見てみると、突起中央が円孔を呈しているものが多い。突起中央の円孔や突起上面や内面には、両端に盲孔を持つ、「C」字状の沈線や弧状沈線などが施されている。突起の中には、図532-12のような大型のものも認められる。図530-5・6、図531-11などは、円孔や盲孔、円形浮文などで、鳥類ないし虫類のような表現がなされている。また、突起周辺の口縁端部には、両端に盲孔ないし円形浮文を持つ沈線が、口縁に沿って施されるものも認められる。これは、

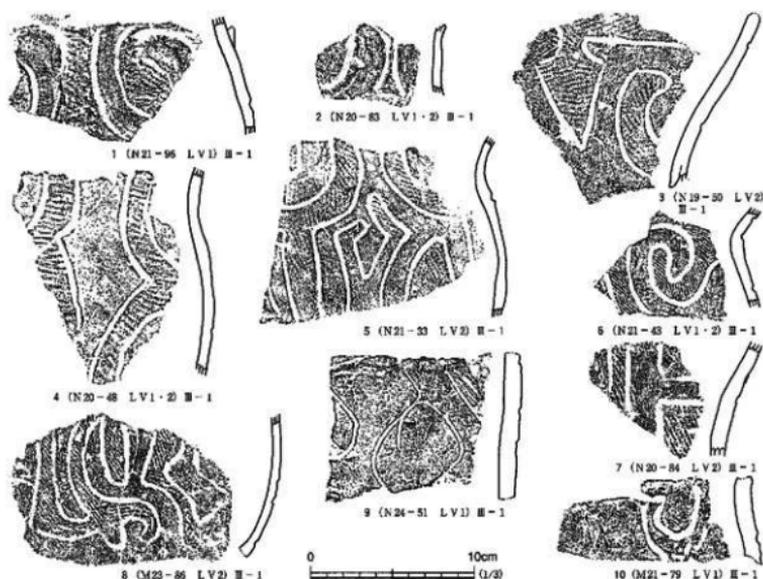


図528 遺構外出土遺物 (103)

g種にも認められたが、g種に施された文様の多くは、突起周辺に限られているのに対し、本種は口縁部を全周するものが多い。

次に、本種の文様について概観して見る。本種には、図530-1~3・5・6、図531-3のような、口縁部を無文とし、胴部に文様を有するものと、図530-4、図531-1・2・4・7のような口縁部に縄文部を残し、胴部に文様帯を持つもの、図529-1~5、図531-8・13、図532-1・4の口縁波頂部から胴部にかけて、沈線や隆帯を垂下させるもの、図531-9~12、図532-6~10の口縁部に文様帯を持つものなどが認められる。口縁部の無文部ないし地文部と、胴部文様帯は、沈線で区画されることが多い。胴部に施された文様は、図530-1の「J」字文の末端に円形浮文を配し、文様下端を沈線で横位に繋ぐものや、図531-2の盲孔が加えられた橋状突起を起点に、「ハ」の字状に沈線が施されるものが認められる。口縁部に施された文様には、図529-3~5のように、沈線を斜めに配し、三角形の文様を描くものや、図531-9・10の円形浮文間を沈線で繋ぐもの、図532-6・7・9・10の、沈線で区画した縄文帯や無文帯を横位に展開させるものなどがある。図532-13の浅鉢形土器などは、巖手文が崩れたような蛇行沈線を垂下させ、蛇行沈線を起点に、横位に沈線が施される。底部は、高台状を呈している。

i種 刺突文や多条沈線が施されたもの。(図533~535)

器形的には、図533-1~5・12に示した、口縁部が「く」の字状に外反し、胴部が球体状を呈

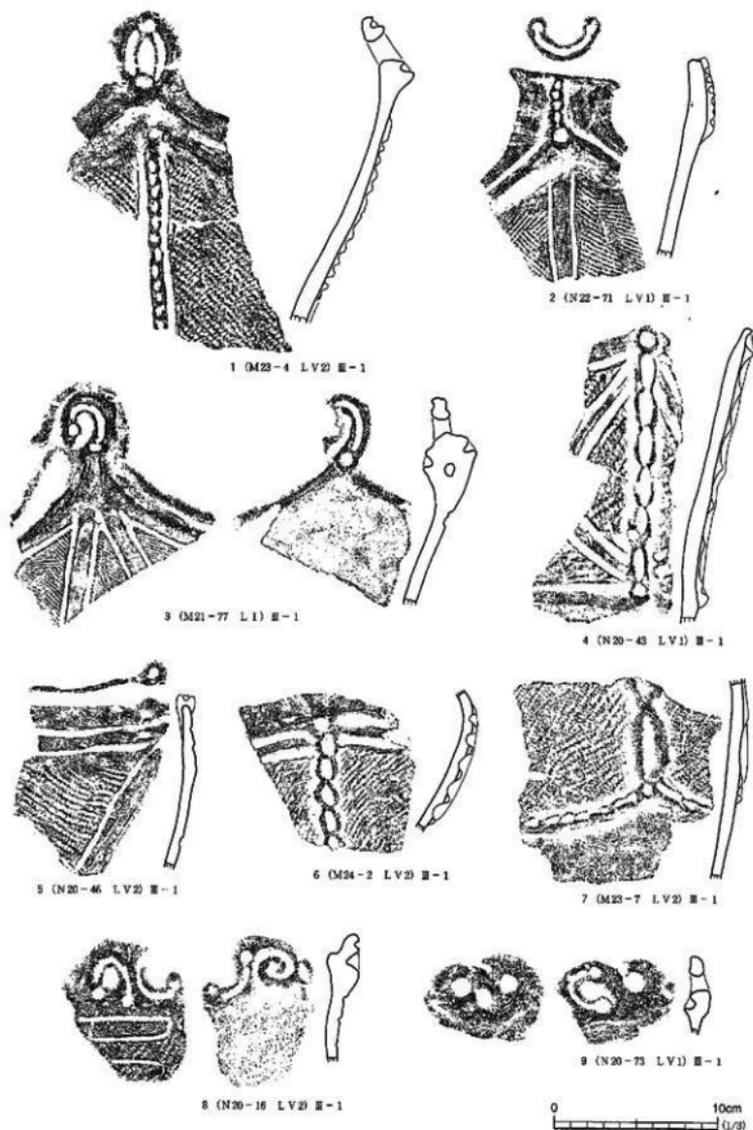


图529 遺構外出土遺物 (104)

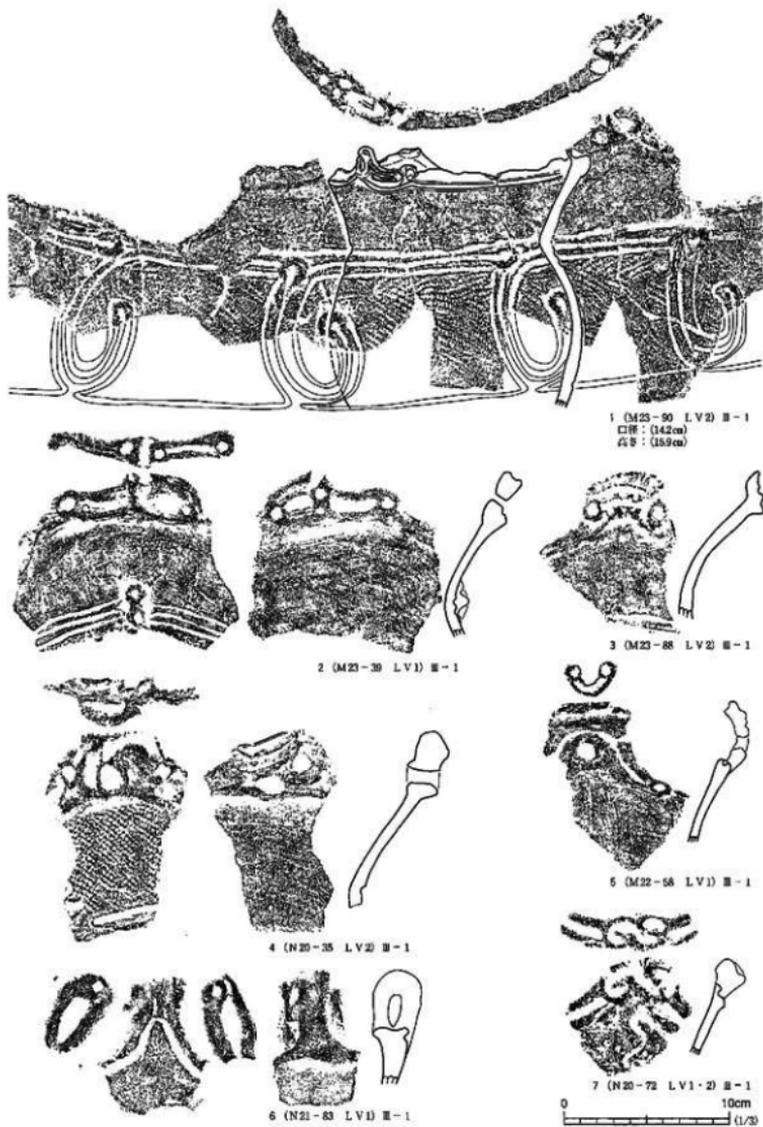


圖530 遺構外出土遺物 (105)

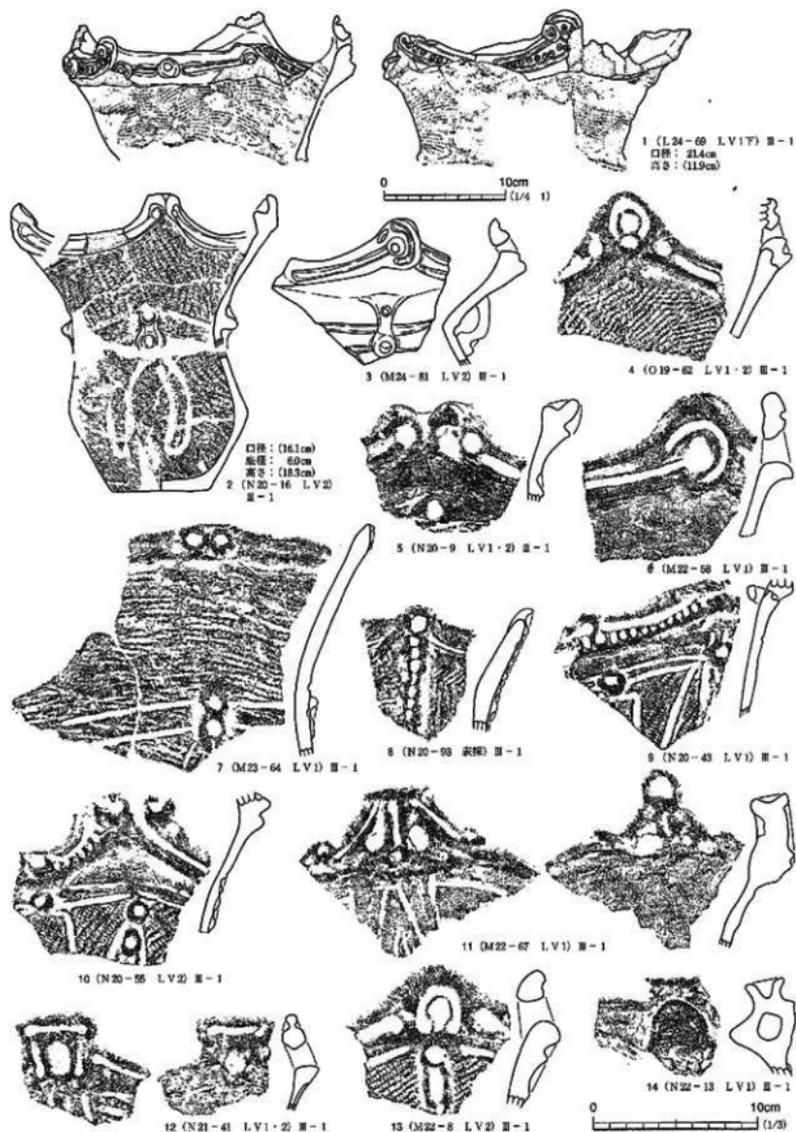


図531 遺構外出土遺物 (106)

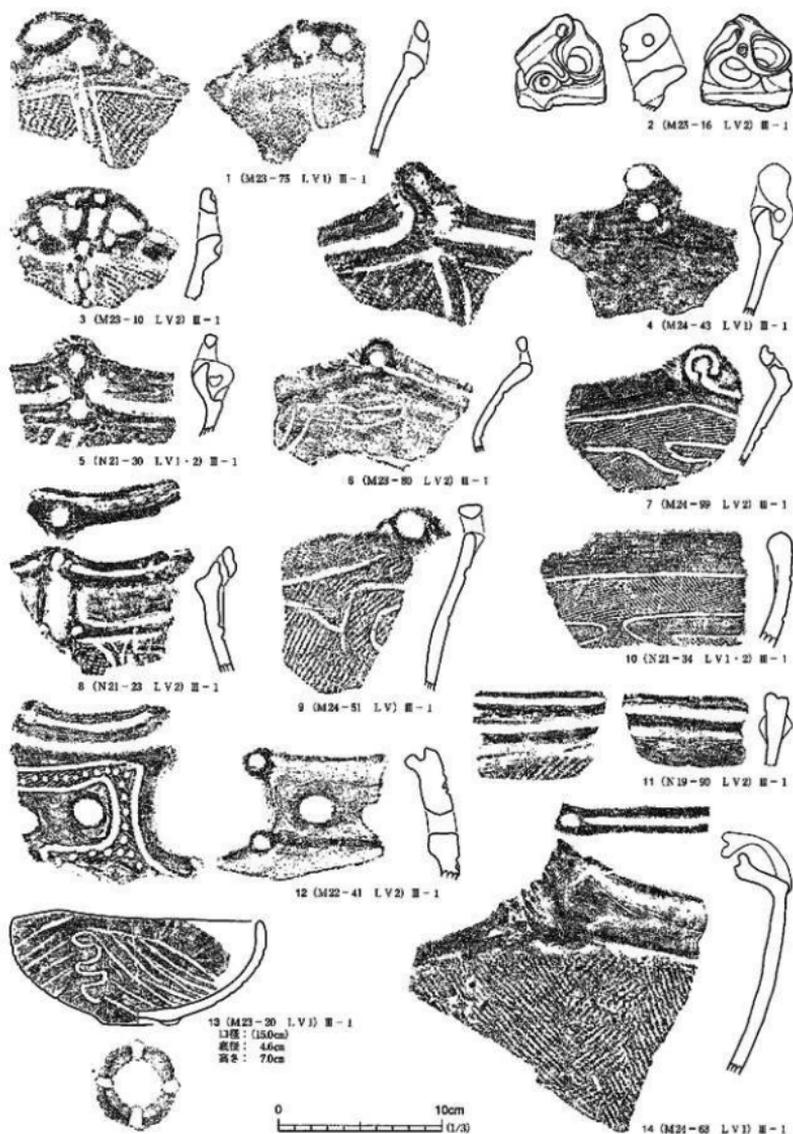


圖532 遺構外出土遺物 (107)

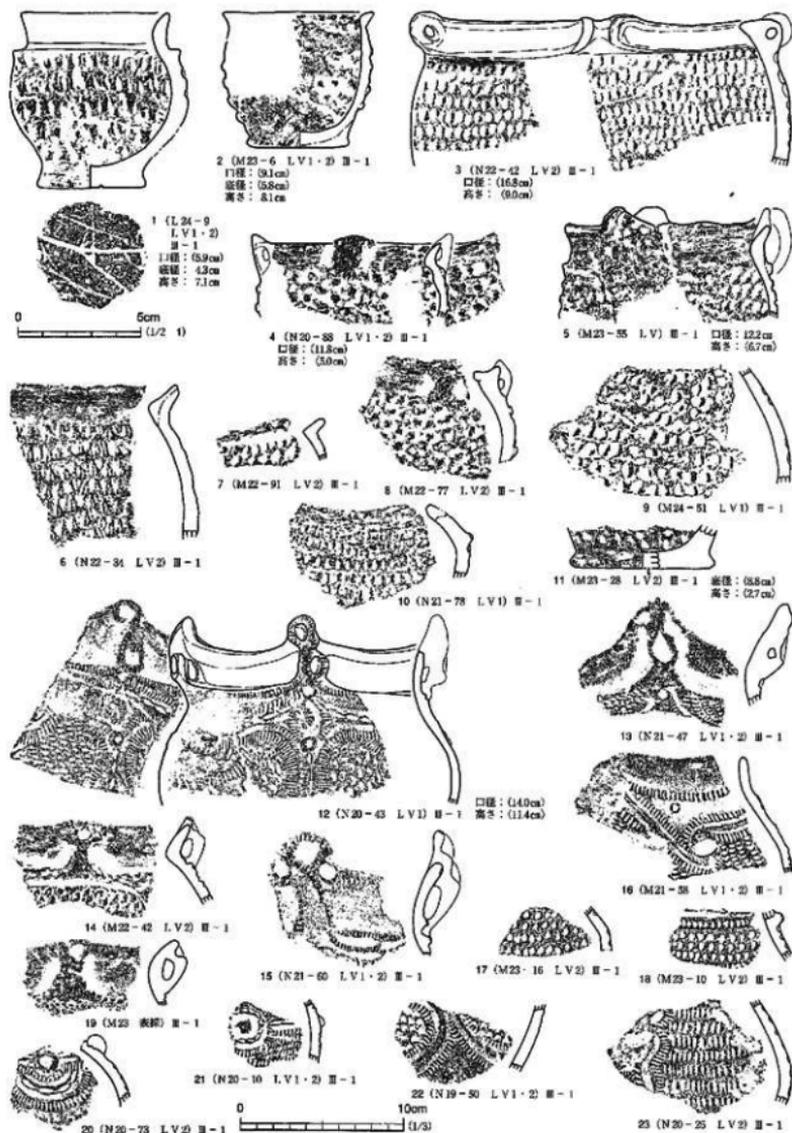


図533 遺構外出土遺物 (108)

第1編 高木遺跡

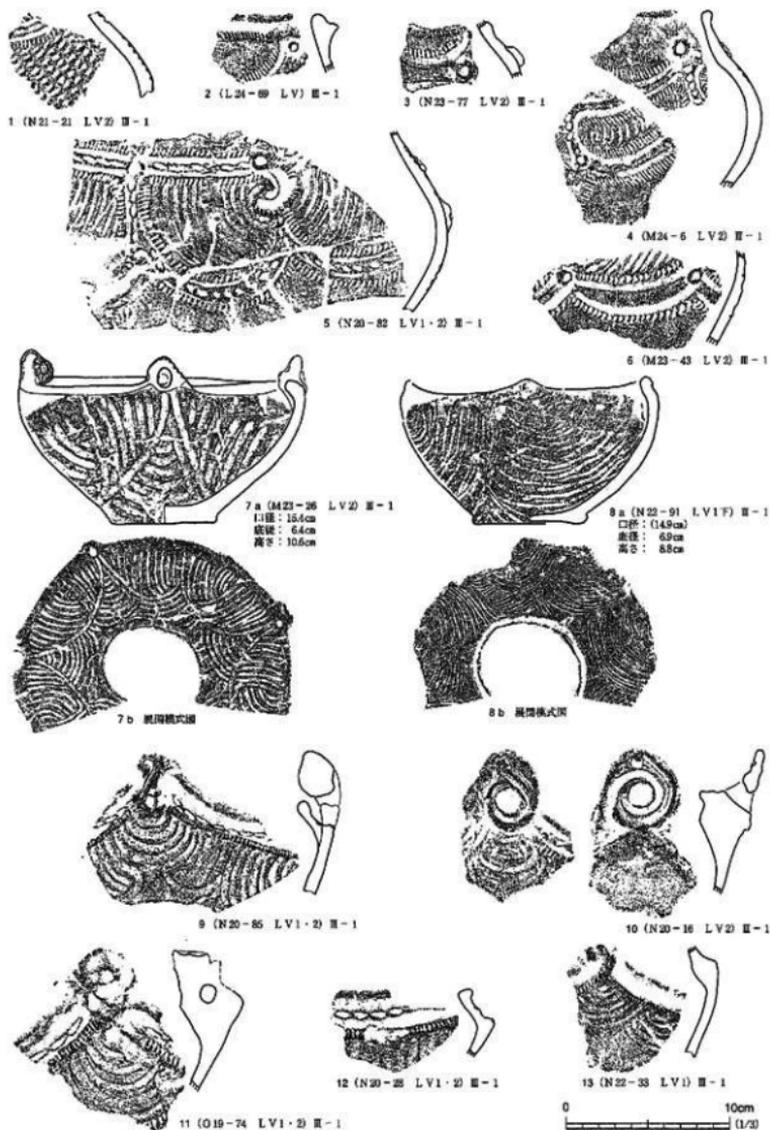


图534 遺構外出土遺物 (109)

す深鉢形土器と、図534-7・8のような、体部が緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部が「く」の字状に内折する浅鉢形土器などが認められる。深鉢形土器は、口縁部が無文帯となり、口縁部の無文帯に橋状把手が付されるものが多い。

胴部に施された文様を見ると、次の4つに大別できる。1つは、図533-1~11のように、刺突文の脇にコブ状の突起が付されるものである。この内、図533-2・4・8は刺突は施されず、胴部全体にコブ状の突起が付されている。口縁部に付された橋状把手は、偏平なものが多い。図533-1・2は、一部口縁部が欠損するため、把手が付されていたかどうかは不明である。

2つ目は、図533-12~23、図534-1~6の、キャタピラ状の刺突文で区画された文様帯内に、刺突文が施されるものである。胴部には、刺突文の他に、円形浮文なども施される。また、図534-4~6は、刺突文に代わり、多条沈線が施されている。口縁部に付された把手は、「8」の字状

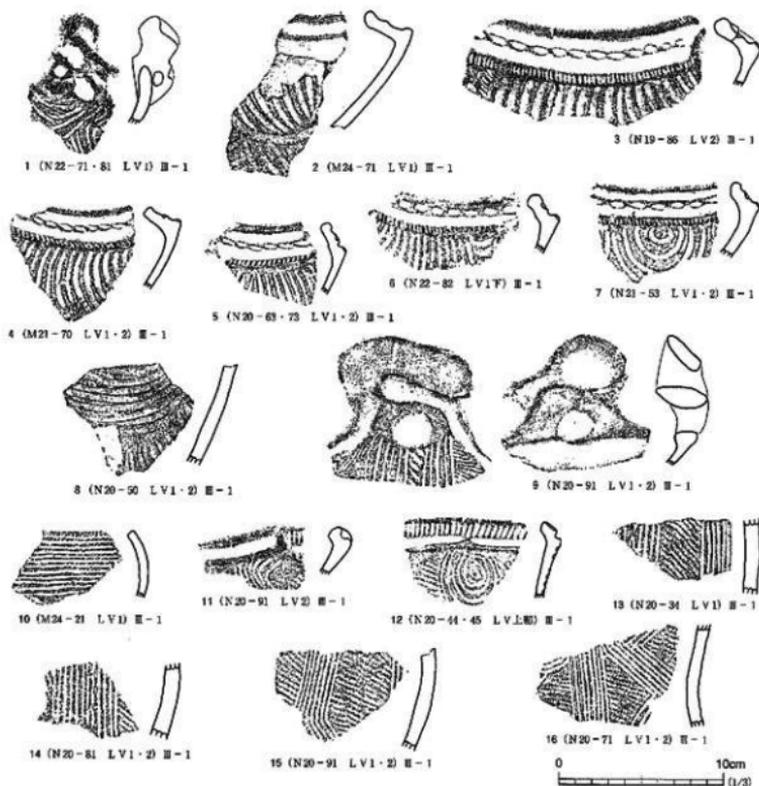


図535 遺構外出土遺物 (110)

に捺られたものが多い。

3つ目は、図534-7~13、図535-1~8の、幅広で浅めの多条沈線が施されたものである。器形的には、いずれも浅鉢形土器になるものと思われる。図534-7の文様を見ると、口縁部突起を起点として、沈線で半円状に区画した文様帯内に、多条沈線を縦位に配し、体部下端には、重弧状に多条沈線を施している。体部を沈線で区画する表現は、先に述べたキャタピラ状の刺突文で胴部文様を区画するものを簡略化したものであろうか。図534-9~13、図535-1~8は、口縁部突起下端に重弧状の多条沈線が描かれる。口縁部突起は、図534-7のように、内外面に盲孔を持つもの、図534-9、図535-1の「8」の字状に捺られたもの、図534-10の円孔を持つものがある。また、「く」の字状に内折した口縁端部に列点状の刺突文、口縁部下端にはキザミが付されるものが多い。

4つ目は、図535-9~16の細線化した多条沈線で文様が描くものである。いずれも破片資料のため、全ての器形を知ることはできないが、資料の多くは、口縁部が緩やかに立ち上がり、口縁端部が内折する深鉢形土器になるものと思われる。口縁部には、平口縁になるものと、図535-9のような突起を持つものが認められる。文様は、図535-9のような口縁突起の円孔を起点に、細線状の多条沈線を垂下させるもの、図535-11・12のように口縁部に縦位のキザミを施し、口縁下端に重弧状の多条沈線を描くものが認められる。また、図535-15・16を見ると、幾何学的な文様が胴部には施されるようである。本種は、北陸地域の影響を受けた土器と思われる。

」種 両耳壺を本種とした。(図536~539)

器形的には、図536-1のような、胴部に膨らみを持ち、緩やかに内傾しながら口縁部に向かうものと、図536-3のような胴部が膨らみ、緩やかに括れながら、口縁部が立ち上がるものがある。口縁部は平口縁を呈し、口縁下端に施した隆線や隆帯で口縁部の無文部と胴部の地文部を区画している。把手は、口縁部と胴部を区画する、隆線や隆帯から橋状に施され、把手上方は舌状に張り出したものが多い。また、把手の上下端を隆線で結び、円形あるいは楕円形に区画し、区画内を磨消し無文部としている。把手に加飾を施すものは少なく、図537-5の把手中央を部分的に磨消し無文部としたものや、図538-6・7の把手中央に沈溝を施すもの、図538-2、図539-1の盲孔を有すものなどが認められる。

胴部には、地文の縄文や渦糸文、櫛歯状工具による条線文が施されるものが大半を占めるが、図538-2・3のように沈線を斜めに施すもの、図538-4、図539-1・3・4の円形浮文を起点に、横位に文様を展開させるものなども認められる。本種については、器形や胴部に施された文様などから、前述したa~d種に伴うものと考えている。

k種 壺形土器や注口土器を本種とした。(図540~544)

図540には、壺形土器を掲載した。いずれも破片資料のため、全ての器形を知ることはできないが、口縁部が「く」の字状に外反する器形と思われる。また、図540-1・2・4の口縁部内面は、蓋受けのためか、隆帯が橋状に施されている。口縁部には、橋状の把手が付される。図540-1・

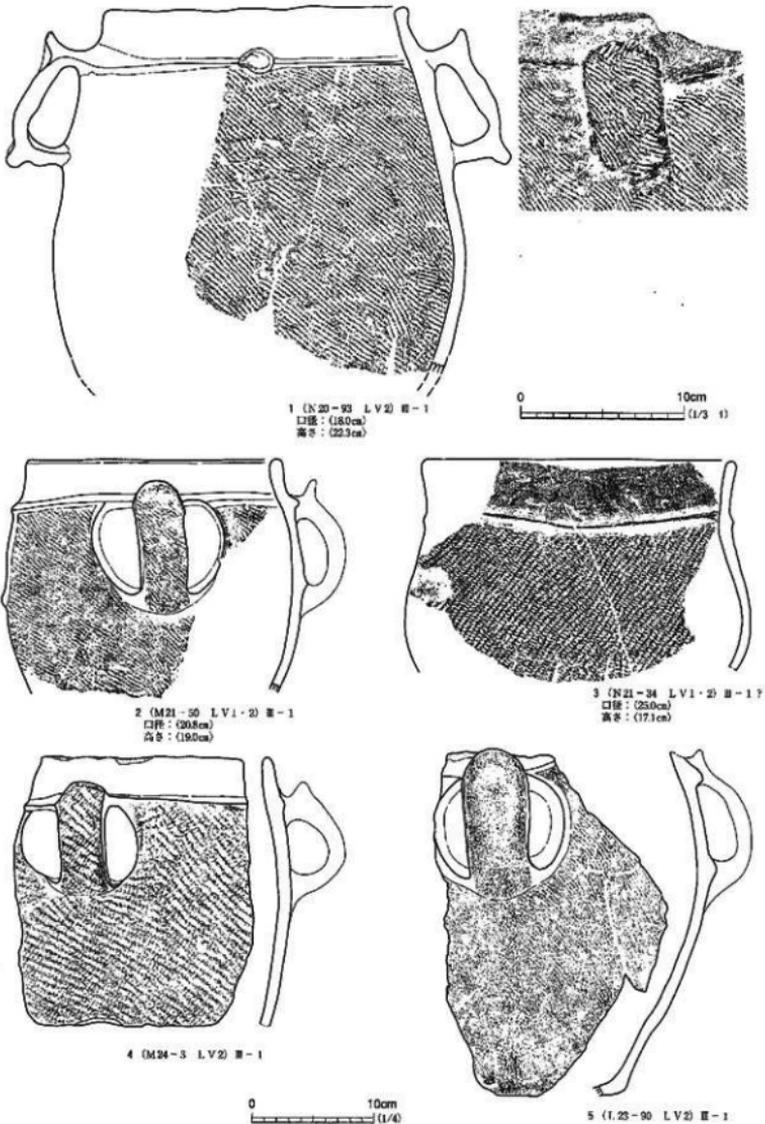


図536 遺構外出土遺物 (111)

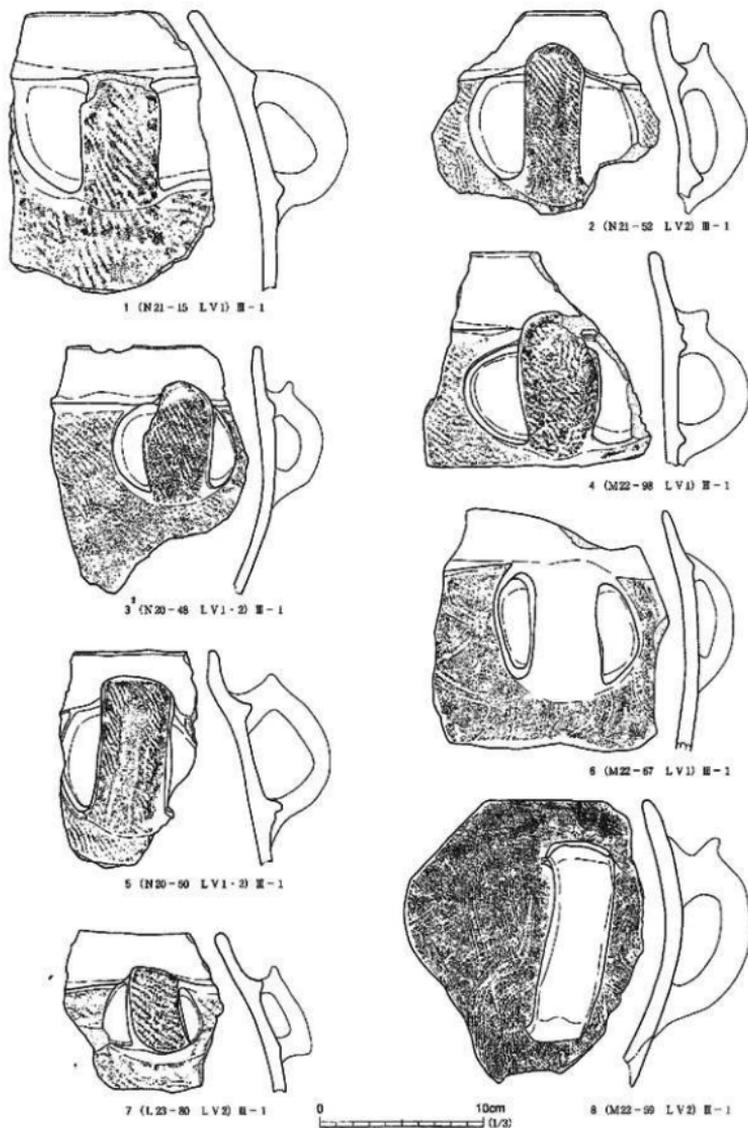


图537 遺構外出土遺物 (112)

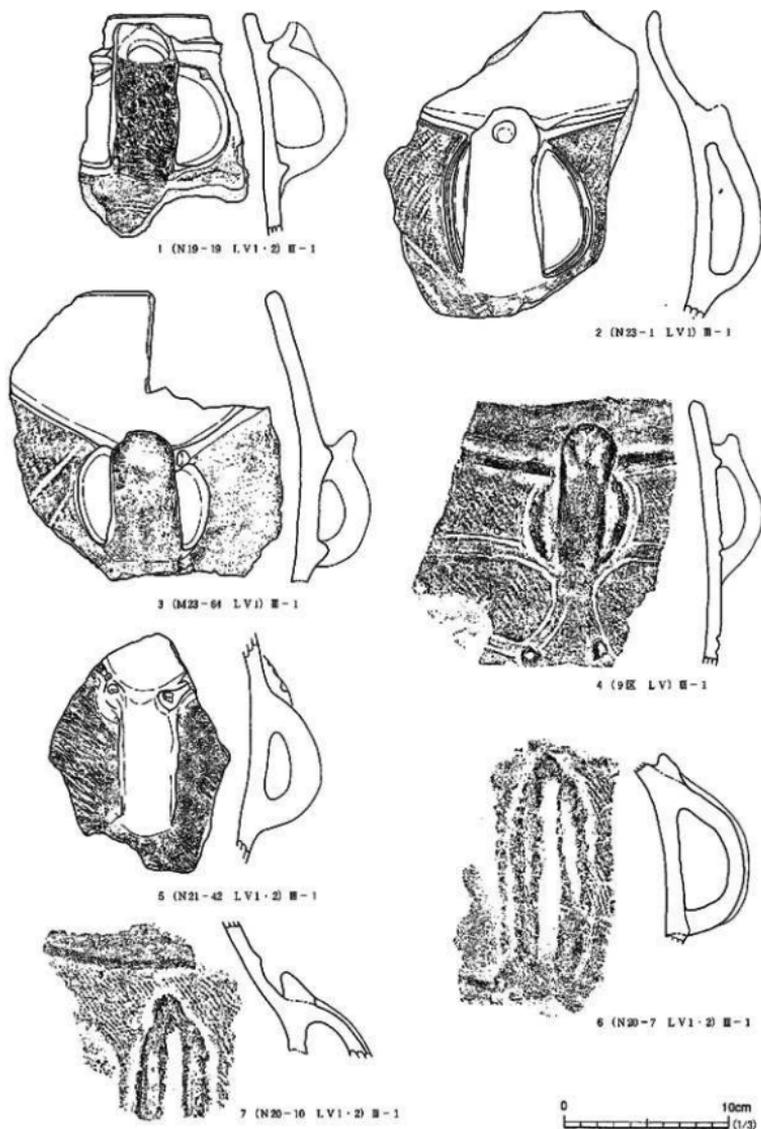


図538 遺構外出土遺物 (113)

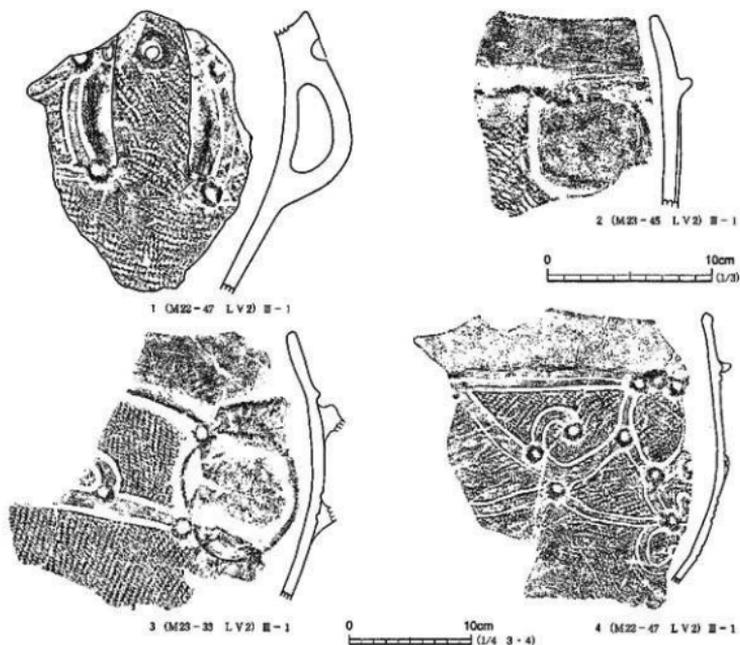


図539 遺構外出土遺物 (114)

2は捻転状，同図4～8は，「8」の字状を呈している。図540-3などは，「8」の字状の把手上端が上面に鋭り上がり，口縁突起に分化している。「8」の字状把手の多くは，両端に盲孔を持つ，弧状沈線などで加飾される。

図541～544は，注口土器としたものである。この内，図541・542には，胴部下半が膨らみ，器形が瓢箪形を呈す注口土器を示した。口縁部付近の資料が多いが，胴部は図541-1のように，下膨れ状態になるものと思われる。口縁部は，「く」の字状に内折し，緩やかな波状を呈している。波頂部には，紐掛け状の中空突起と注口が付される。注口と対にあたる波頂部には，図541-1・2のような橋状突起や，図541-2，図542-1のような「O」字状，「8」の字状突起が配されている。注口は，口縁下端ないし胴部上半から口縁波頂部に向かい，垂直～急角度で施されている。

文様は，図541の隆線で描くものと，図542-1・2のように沈線で描くものがある。この内，隆線で文様を描くものは，口縁下端を三日月状に区画するものが多い。胴部は，隆線に縁取られた無文部で，「J」字状や渦巻状の文様などが施される。図542-1・2の胴部文様は，沈線で描かれている。同図2の口縁部は平口縁を呈し，口縁直下には沈線が巡らされる。口縁部や胴部には，波状を呈した沈線が横位に施されている。口縁部には，突起が付されていた痕跡が認められる。注口は，

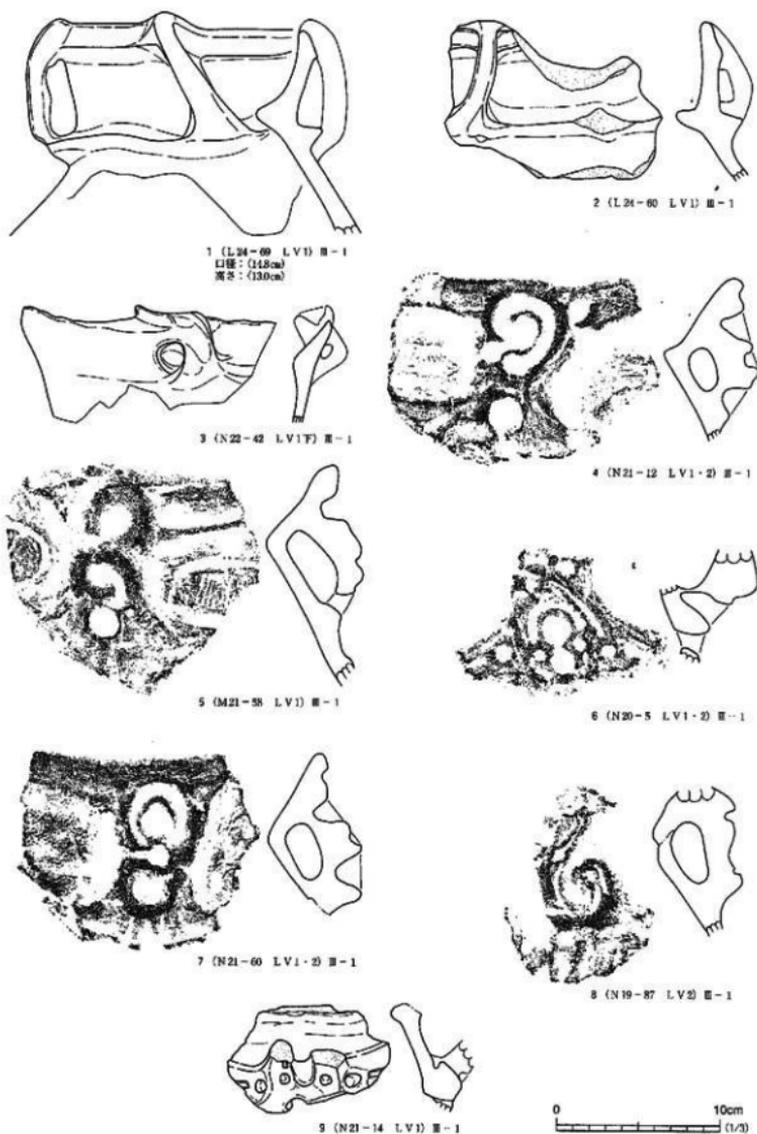


図540 遺構外出土遺物 (115)

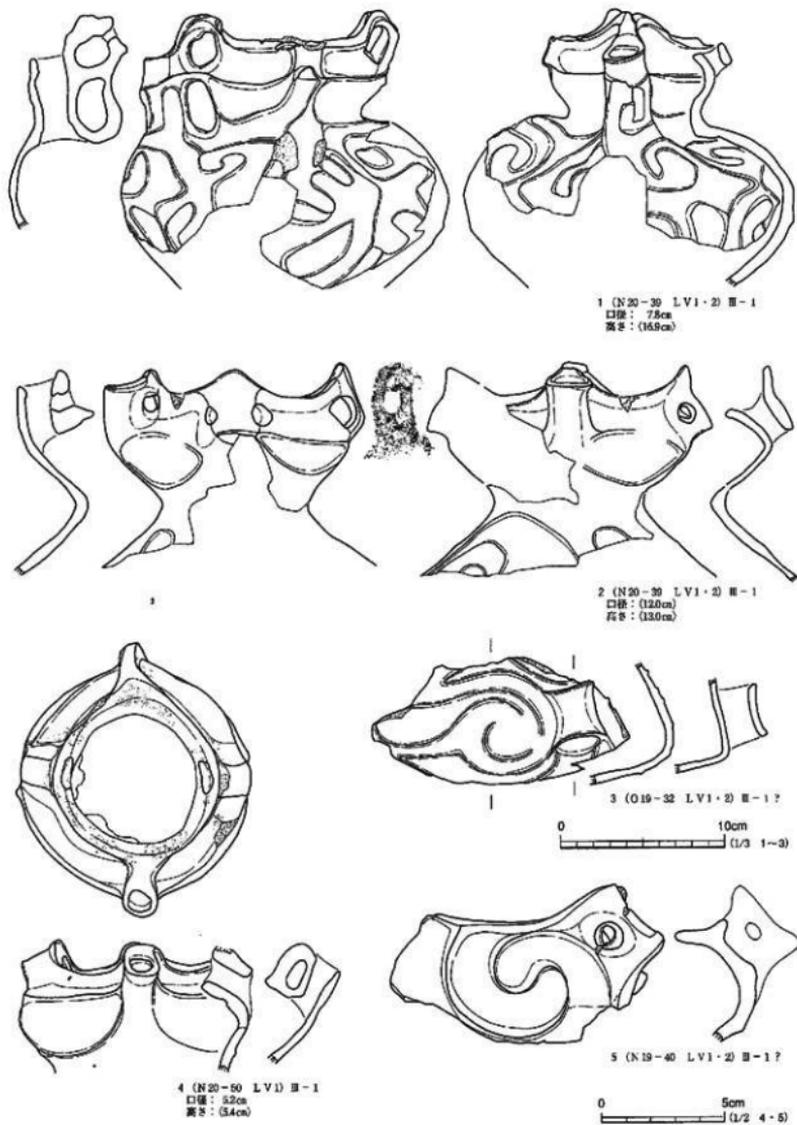


圖541 遺構外出土遺物 (116)

口縁直下に円孔を設けただけのもので、周面に粘土を貼り付け、注口周面をやや盛り上げている。また、図541-3・4、図542-1には赤彩が施される。甗形を呈す注口土器は、他の土器に比べ、器厚が非常に薄く、色調も灰白色を呈し、胎土に含まれる砂粒も非常に細かく、精練されている。これらは、主に関東地方で多く認められる。

図543には、主に注口部を掲載した。破片資料のため、全体の器形を知り得るものは少ないが、器形的には、口縁部が「く」の字状に外反するものが多い。また、図543-1・13のように、胴部が樽状を呈すものも認められる。口縁部には突起が付される。図543-1・13を見ると、口縁部には突起の他に、紐掛け用の円孔が施されている。注口は胴部上半に設けられ、口縁突起に取り付き、突起全体が橋状を呈す。注口に取り付く突起は、注口と組み合わせることにより、「8」の字状を呈すものが多い。また、突起の中には、両端に盲孔を持つ弧状沈線で、加飾されるものも認められる。胴部は、沈線で三角形ないし方形に区画した文様帯内に縄文を施すものが多い。図543-1などは、蕨手文状の沈線を横位に入り組ませ、三角形の文様を描く。区画文間は、帯状の無文帯が作られている。図543-13は、沈線区画の無文帯で文様を描く。また、図543-5は、注口の両端

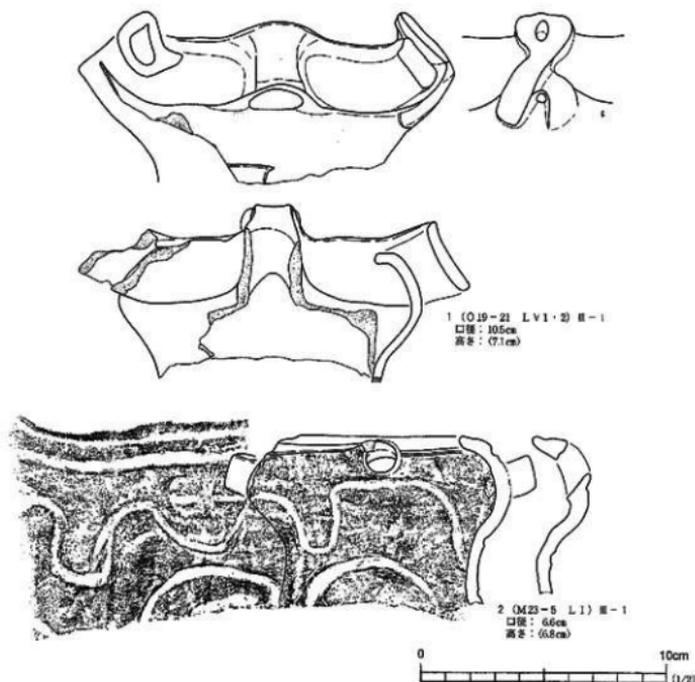


図542 遺構外出土遺物 (117)

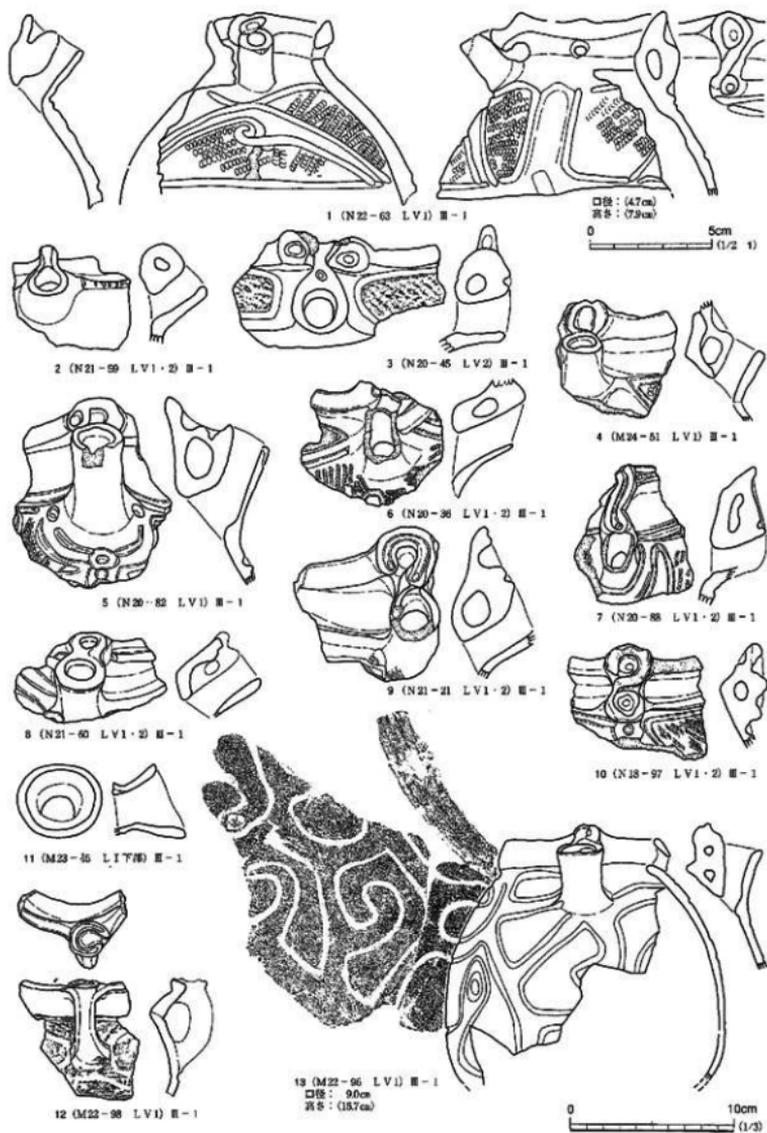


図543 遺構外出土遺物 (118)

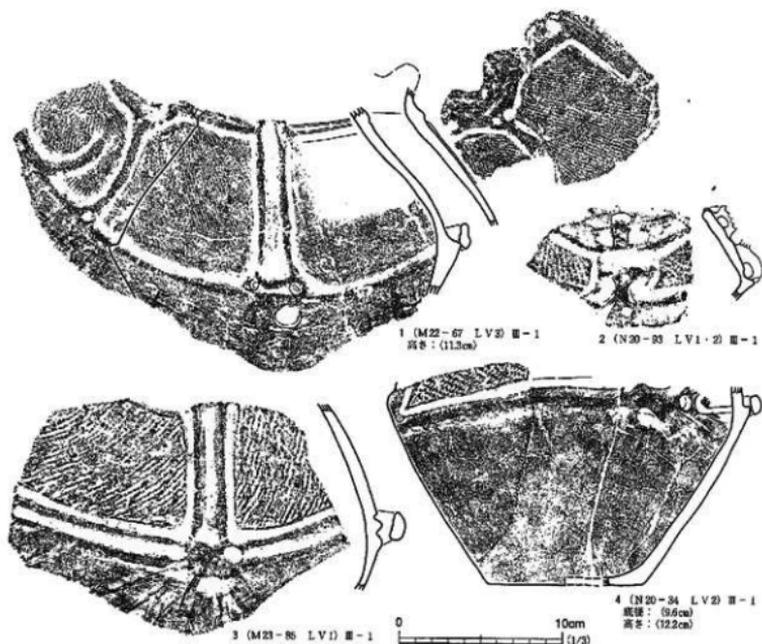


図544 遺構外出土遺物 (119)

に盲孔、下端に扁平な円形浮文を配し、その間に沈線を施す。

図544には、注口土器と思われる胴部～底部片を掲載した。器形的には、胴部下半に膨らみを持ち、胴部上半に向かい大きく内傾する土器になるものと思われる。いずれも、胴部下半に紐掛け用の突起が施されている。胴部は、沈線で縁取られた隆帯で方形に区画される。

1種 鈎手や突起の破片を本種とした。(図545・546)

この内、図545に鈎手を示した。これらについては、図545-10の資料から、バスケットの鈎手のように、深鉢形土器の口縁部に付されていたものと思われる。鈎手の表面は、連続した「8」の字状隆帯、両端に円形浮文が付された括弧状隆帯、「S」字状隆帯などで加飾される。これらの隆帯の加飾には、両端に盲孔を持つ沈線や刺突文などが施される。また、「8」の字状隆帯の中央は、円孔を呈したものが多い。

図546には、口縁部の突起を掲載した。図546-1は、番伊形土器の頭部であろうか。頭部に4つの窓状の孔を有し、窓を縁取るように連続刺突文が施される。また、頂部や窓間には盲孔が施される。大きな窓は目を彷彿させ、何らかの動物を抽象的に表現したのかもしれない。体部には、沈線で文様が描かれるが、モチーフは不明である。図546-2は、浅鉢形土器ないし鉢形土器の口縁部

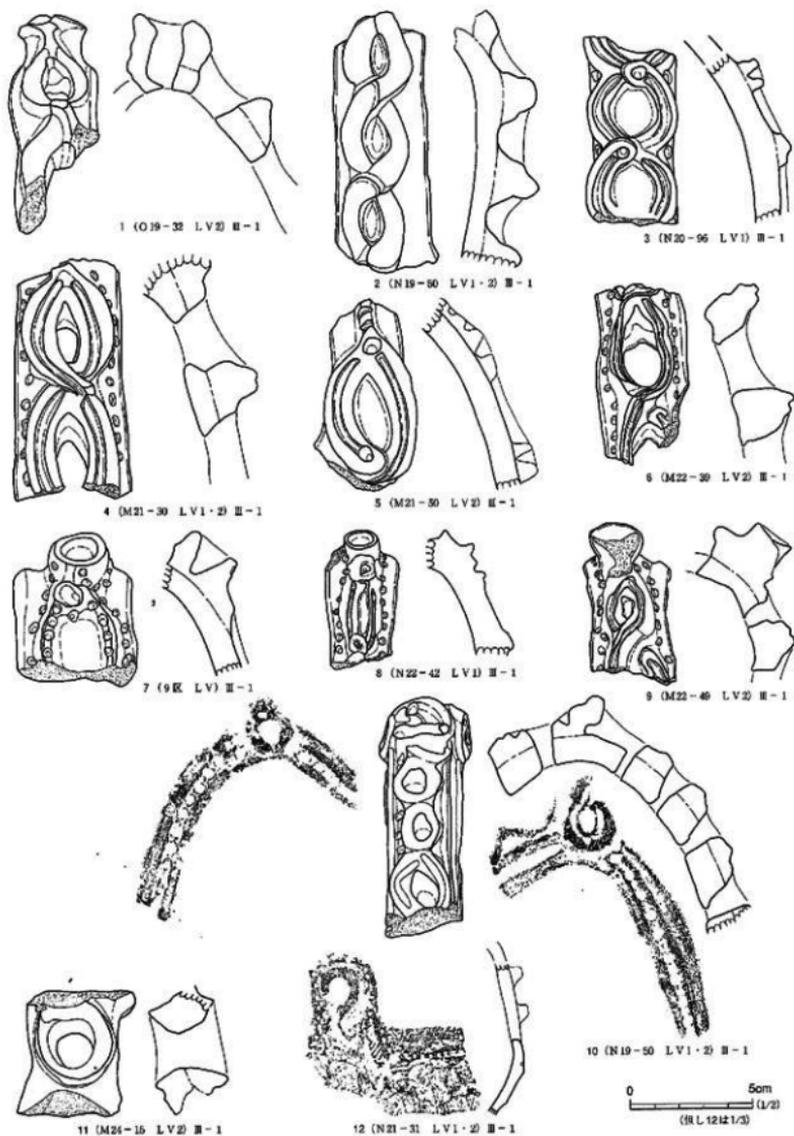


図545 遺構外出土遺物 (120)

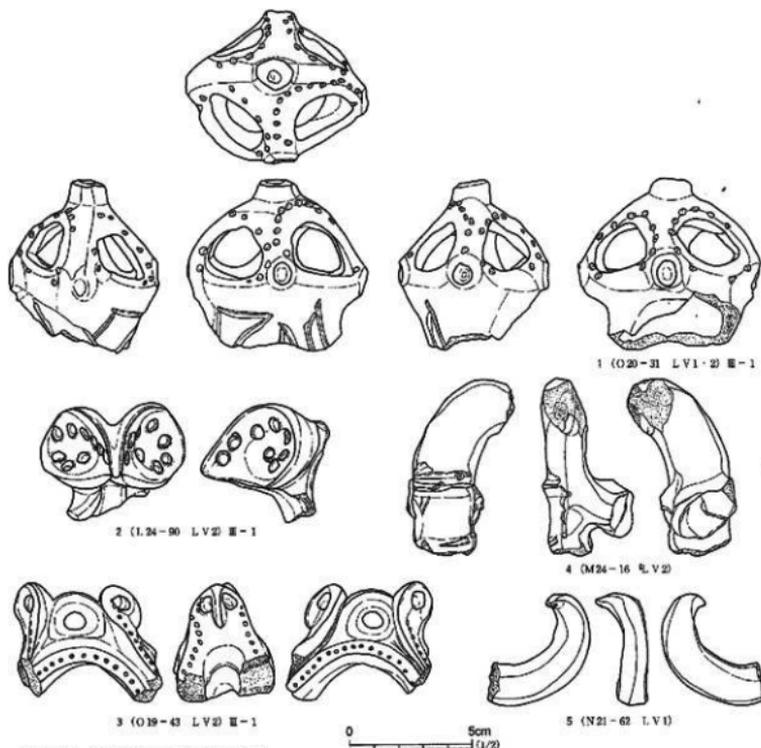


図546 遺構外出土遺物 (12)

突起と思われる。鳥をモチーフにしたのか、突起正面は嘴状に尖り出し、両目にあたる部分は大きく窪み、刺突文が施される。図546-3は、橋状突起である。突起の側面には隆帯と盲孔で、フクロウを象どったような加飾が施される。また、突起を正面から観察すると、側面に施された隆帯と盲孔がデフォルメされた目のように見て取れ、カエルなどの生き物を想像させる。図546-4・5も口縁部に付された突起と思われる。5は、突起の先端が牙状に作り出されている。

以上が、Ⅲ群1類土器としたものである。これらの土器の焼成は、比較的良好なものが多い。色調は、明褐色～褐色系統を呈し、胎土には砂粒や金雲母が含まれる。本類の詳細については、遺構内の土器も含め、第3編で述べることとする。

Ⅲ群2類土器 (図519-21)

図519-21は、Ⅲ群2類土器と分類したものである。出土数は極めて少ない。破片資料のため、全ての器形を知ることはできないが、口縁部が直線的に立ち上がる深鉢形土器になると思われる。

文様は、口縁直下に沈線を巡らせ、口縁部の無文帯と胴部文様帯を区画している。沈線直下には、沈線で三角形の文様や菱形の文様が施される。土器の焼成は良好で、色調は黒褐色を呈している。胎土には、微量の砂粒や金雲母が含まれる。本類については、土器に施された文様の特徴などから、堀之内2式に比定されるものと考えている。

Ⅲ群3類土器(図553-1)

図553-1は、Ⅲ群3類土器と分類したものである。出土数は極めて少なく、確認できたのは本資料だけである。1は、胴部が球体状を呈す注口土器である。底部は、高台状を呈している。胴部中央に沈線を巡らし、沈線下端や注口周辺に小型のコブを配している。また、注口に対応する部分には、大型のコブが付されている。焼成はやや軟質で、色調は黒褐色を呈す。本類については、施された文様の特徴などから、後期後葉～末葉のいわゆるコブ付土器に比定されるものと思われる。

Ⅲ群4類土器(図547～552, 写真329～331)

図547～552は、Ⅲ群4類土器と分類したものである。本類については、概ね後期初頭～前葉の粗製土器と考えている。また、ある程度、器形が知り得る資料について、図547, 図548-1～7に示した。器形を見ると、深鉢形土器では図547-1の口縁部が内湾して立ち上がるもの、図547-2の口縁部が緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がるもの、図549-7の胴部上半に括れを持つもの、図547-3～7のコップ形を呈したものが認められる。また、鉢形土器では、図547-8・9の口縁部が内湾するもの、図547-10・11, 図548-1～3の口縁部が緩やかに外傾しながら立ち上がるもの、図548-4の口縁部が直立気味に立ち上がるものもある。この他に、図548-5の壺形土器、図548-6・7の器台なども認められる。

本種については、施された文様の特徴などから、a～e種に分類した。

a種 縄文のみが施されたもの。(図547-3・5・6, 図548-12, 図549-4・5・7・10・12・14・15)

図547-3は、口縁部と胴部で縄文の施文方向を変えている。図549-4・5の口縁部には、突起が付される。

b種 条線文のみが施されたもの。(図551-2・3・5～7・11～17, 図552-1～10)

図551-2・3は縦位に、図551-5は口縁部と胴部で施文方向を変え、図551-7は格子目状に条線文を施す。また、図552-1～4のような、曲線的図形を描くものも認められる。

c種 口縁直下に無文部を有し、胴部に地文が施されるもの。(図547-1・2・7, 図548-1・8～11・13, 図549-1～3・6・8・9・11・13, 図551-1・4・8～10)

口縁部の無文部は、図547-2・7, 図548-8・11・13, 図549-1・8・11, 図551-1の、沈線によって区画されるもの、図549-2・3, 図551-8の隆線や陸帯で区画するもの、図547-1, 図548-1・9・10の口縁直下を磨消して、無文部とするものなどが認められる。

d種 地文を持たない土器を本種とした。(図547-4・8～11, 図548-2～7)

図547-8は、体部に6cmの孔が施される。周囲に打ち欠いた痕跡が認められることから、焼成

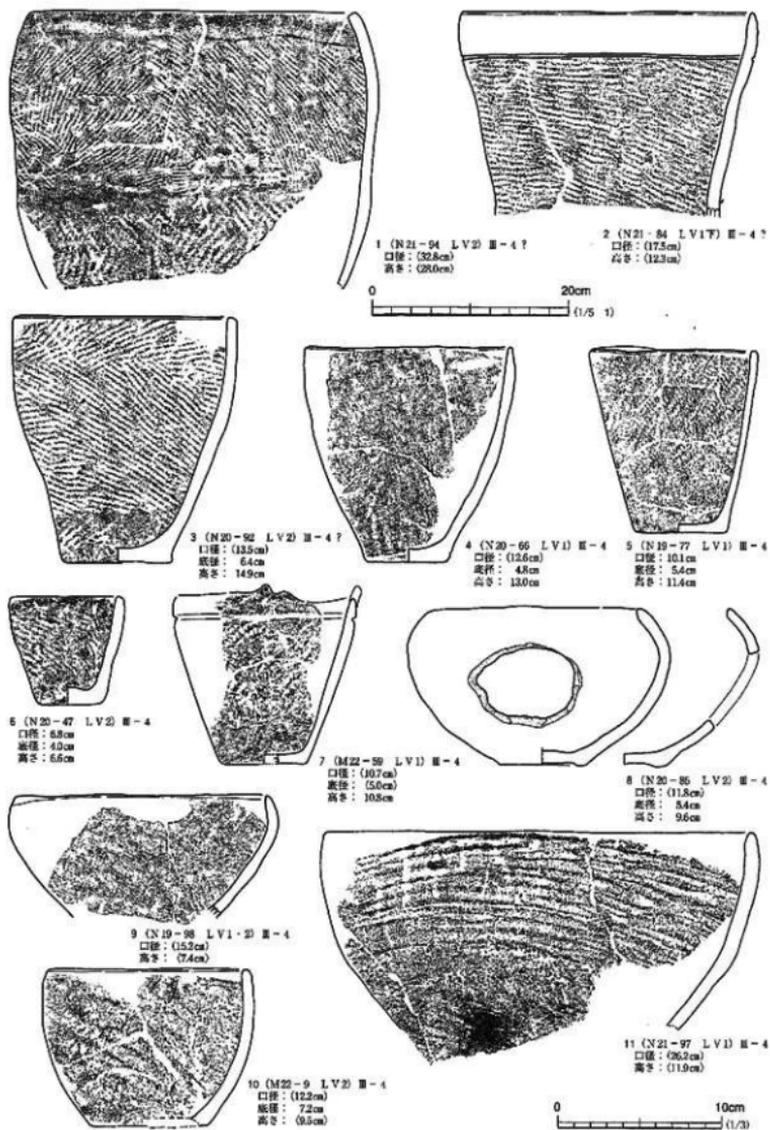


圖547 遺構外出土遺物 (122)

第1編 高木遺跡

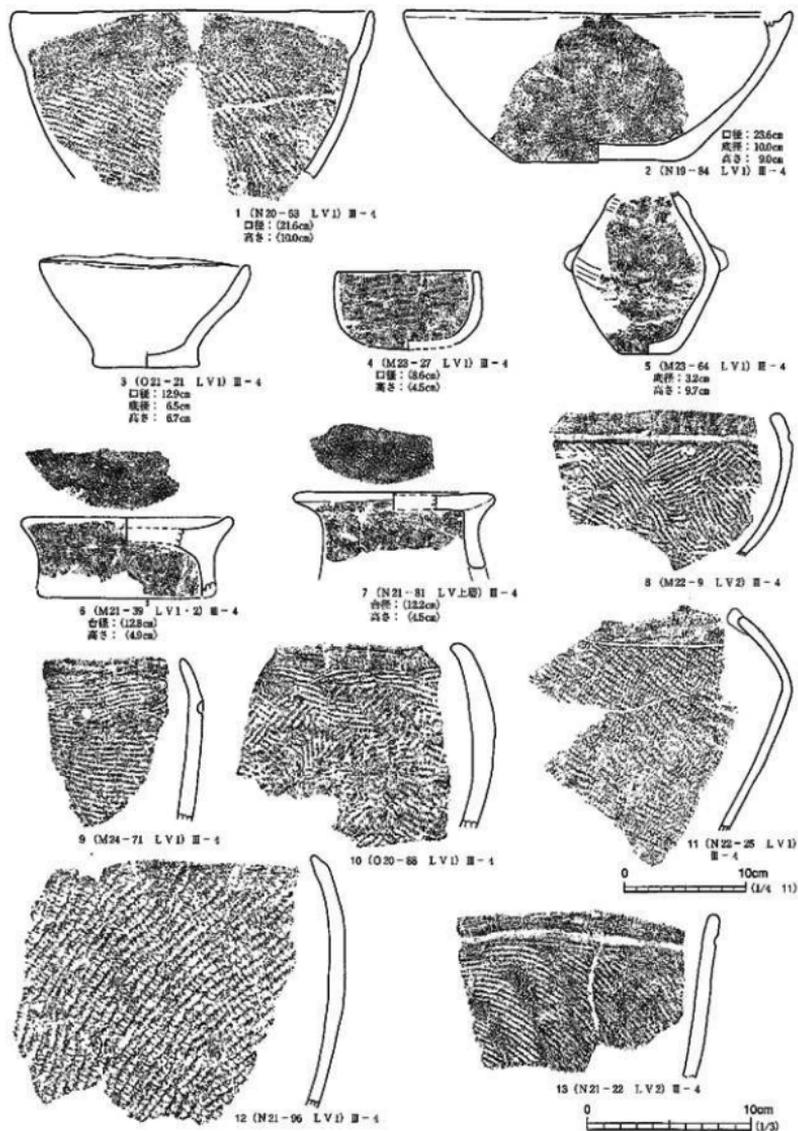


圖548 遺構外出土遺物 (123)

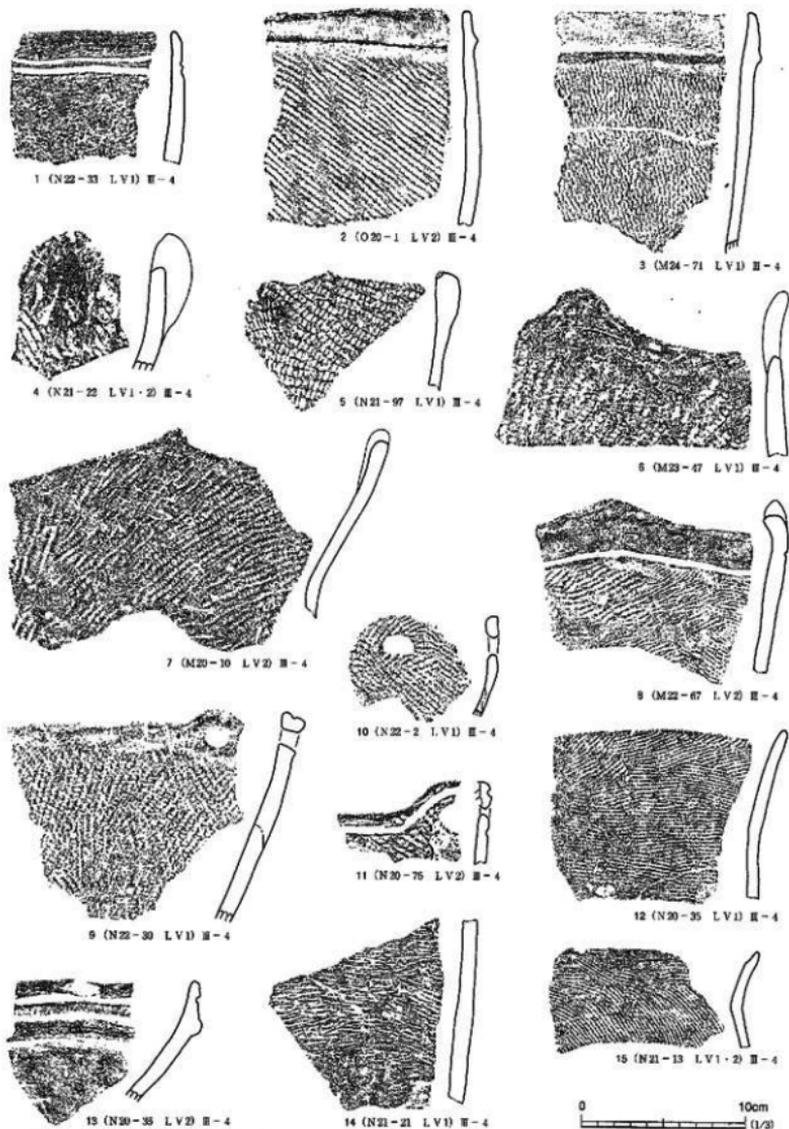


図549 遺構外出土遺物 (124)

後に設けられたものと思われる。また、図547-10・11は、器面にナデの痕跡を大きく残す。

●種 底部の破片を本種とした。(図550, 図552-11~14)

図550には、縄文が施された資料を掲載した。土器には、斜行縄文が施されるものが多いが、13のように、縄文原体の施文方向を変え、羽状に施すものもある。12の底面には木葉痕が認められ、7・8の底面外縁は外側に張り出す。図552-11~14には、条線文が施された底部片を示した。14は上げ底状を呈し、底面には胎土に含まれた砂粒が焼成時に抜け落ちたのか、小さな凹が認められる。

以上が、Ⅲ群4類土器としたものである。本類の土器の焼成は、比較的軟質なものが多い。色調は褐色や黒褐色系を呈している。

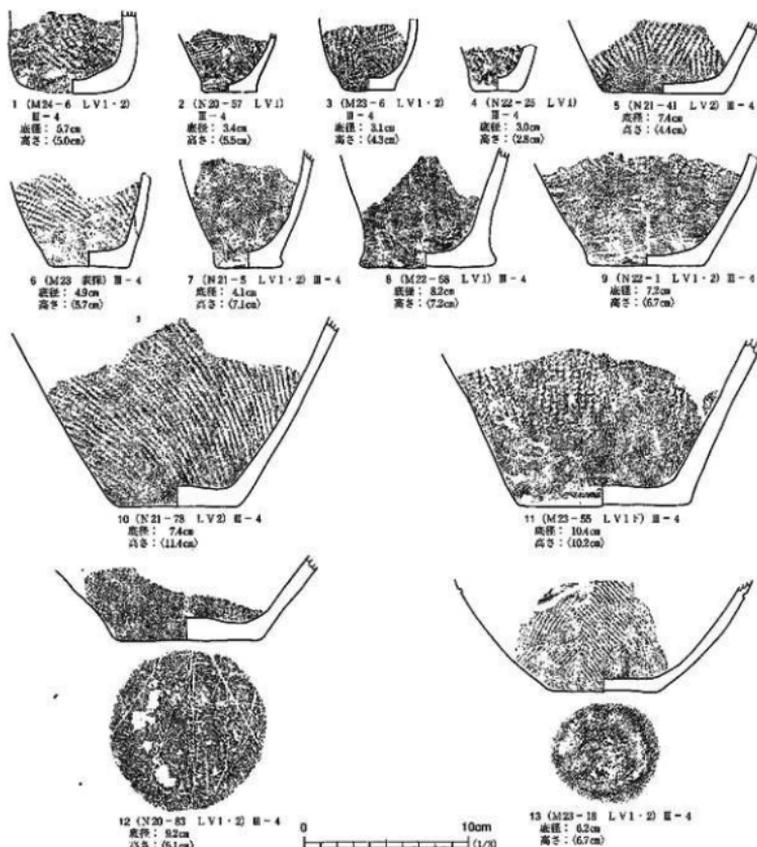


図550 遺構外出土遺物 (125)

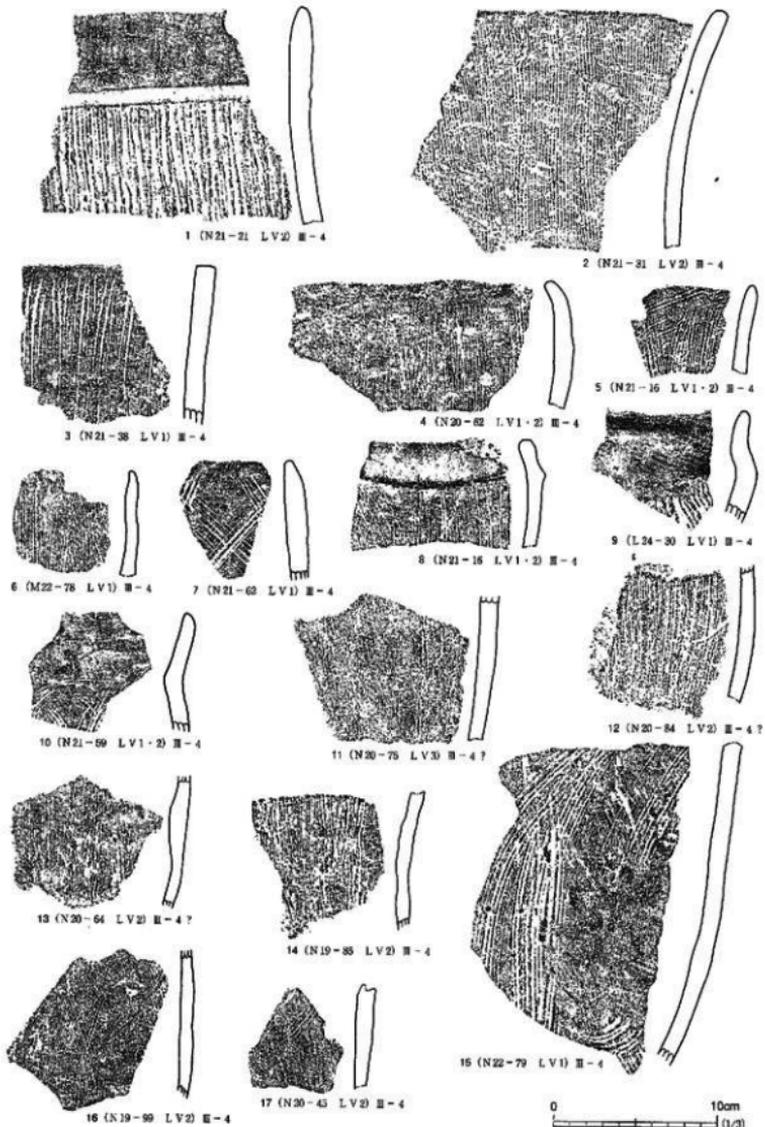


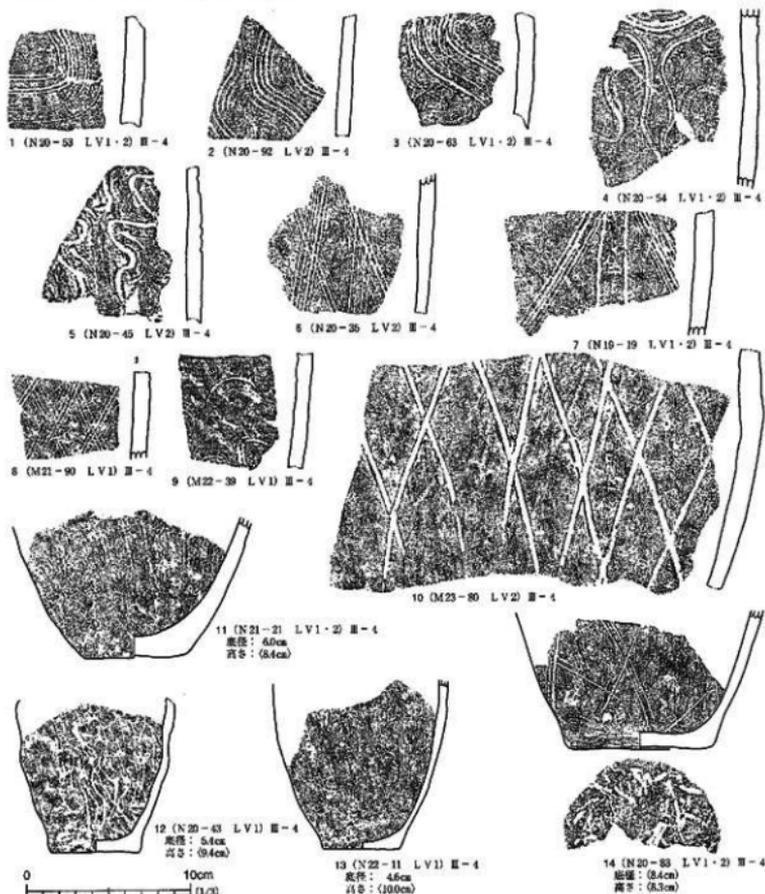
図551 遺構外出土遺物 (126)

Ⅳ群土器 (図553-2)

図553-2は、Ⅳ群土器と分類したものである。出土数は極めて少なく、調査9区で確認できたのは本資料だけである。やや上げ底気味の深鉢形土器の底部片で、地文には網目状撫糸文が施される。焼成は良好で、色調は褐色を呈している。胎土には、砂粒や金雲母が含まれる。本資料については、施文された文様の特徴などから、晩期中葉の粗製土器と考えられる。

Ⅴ群土器 (図553-3~8, 写真331)

図553-3~8は、Ⅴ群土器と分類したものである。出土数は極めて少ない。器形は、3・4・



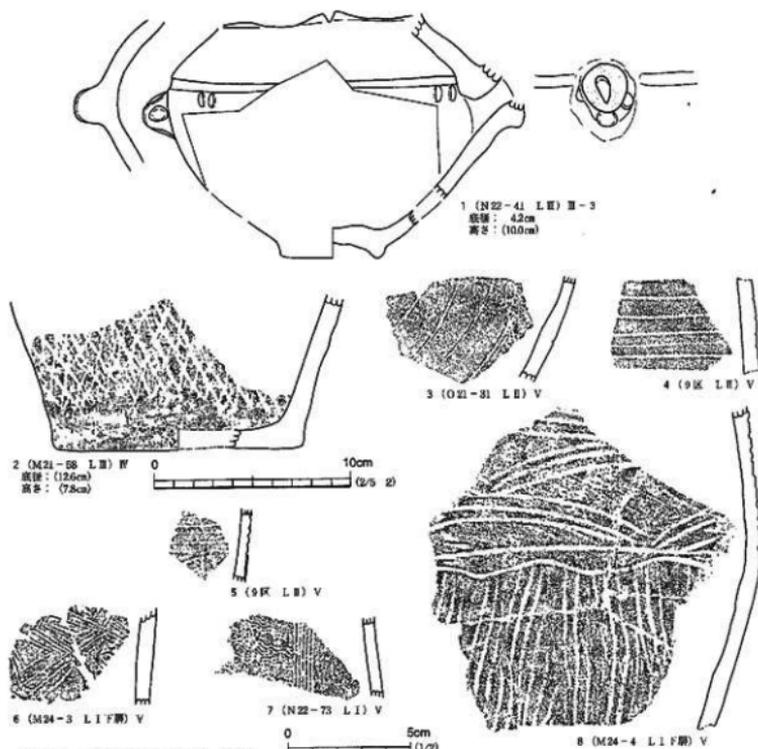


図553 遺構外出土遺物 (128)

7の壺，5・6の鉢，8の深鉢などが認められる。土器に施された文様をしてみると，3の渦巻文，4・5の横位沈線，6の重菱文，7の縦位沈線と波状文，8の胴部上半に連弧文，下半に捺糸文が施されるものが認められる。色調は，3～7がにぶい黄橙色，8が暗褐色を呈している。3～7については，焼成は良好で，内外面とも丁寧にミガキが施され，胎土にもほとんど砂粒を含まないが，8は，焼成がやや軟質で，胎土には多量の砂粒が含まれる。

本群の資料は，弥生時代中期後半～後期後半の範囲に収まるものと考えている。(大河原)

土製品 (図554～566, 写真332～339)

遺物包含層から，出土した土製品の総点数は約350点である。内訳は，蓋36点，ミニチュア土器15点，土偶13点，耳飾り14点，土鏝3点，円盤形土製品254点，その他9点である。出土した土製品の中では，円盤形土製品の出土量が突出している。

蓋 (図554~556, 写真332)

図554~556は蓋として、分類したものである。図554-1~6は、体部中央に橋状のつまみを持つ。平面形は円形を呈し、5を除いた体部は、いずれも大きく湾曲している。文様は施されていないが、3のつまみには、両端に盲孔を持つ沈線が加えられる。3の蓋は、小型の深鉢形土器に被さった状態で出土しており、実際に蓋と深鉢形土器がセットで用いられていたことが窺える。

図554-7, 図555-1~7・11は、体部の端部に紐掛け状の円孔を有すものである。平面形は、円形になるものが多いが、図555-6のように、やや方形を呈しているものも認められる。体部には、図555-5のように隆線で区画した無文部で文様を描くものや、図555-6の隆線や刺突文が施されたものなどが認められる。図555-9・10は、体部中央ないし端部に対の橋状把手を持つものである。9の体部には隆線が、10には縄文が施される。10の体部中央は、つまみ状に迫り上がり、中空となる。図555-12・13は、つまみや把手を持たない蓋である。

図556は、刺突文が施された蓋である。この内、1・2・6は、体部端部に橋状把手を持つ。遺存状態から、1の体部中央には、つまみが付されていたと思われる。4・5は、体部中央に大型のつまみを持つ。つまみは、内側に向かい、螺旋状に捻られている。蓋の平面形は、円形を呈したものが多く、中には、2・5のように挟りが入るものも認められる。体部に施された文様には、1・6の刺突文脇にコブ状の突起を持つもの、2の円形浮文や沈線を施し、円形状の刺突文が加えられるもの、4・5の立体的加飾や盲孔を持ち、爪形状の刺突文が施されるもの、7~15の体部端部の内外面に沈線を有し、沈線内や沈線に沿って刺突文を施すものなどが認められる。

蓋の焼成は良好で、堅いものが多く、色調は灰白色や褐色を呈している。また、図556-5については、焼成や色調、胎土などが他のものと比較し異なる点が多い。蓋については、施された文様の特徴などから、Ⅲ群1類に比定されるものと考えている。

ミニチュア土器 (図557, 写真333)

図557-1~15は、ミニチュア土器として分類したものである。器形的には、1・7~9の底部から口縁部まで、ほぼ直線的に外傾しながら立ち上がるもの、2の底部から口縁部に向かい緩やかに内傾気味に立ち上がるもの、3~6の体部が球形状を呈し、内湾気味に口縁部が立ち上がるもの、10の胴部中央に括れを持つものなどが認められる。また、11の口縁部がラッパ状を呈するもの、12の筒状を呈するもの、13・14のスプーン状を呈しているものもある。

施される文様は、無文あるいは地文の縄文が施されるものが多いが、1のように体部の上下を沈線で区画し、区画文内に渦巻状の文様を6単位配すものや、2のように口縁波頂部から底部にかけて、隆帯を垂下させるものなども認められる。ミニチュア土器については、施された文様の特徴などから、Ⅱ群2類~Ⅲ群1類の所産と考えている。

土 偶 (図558~560, 写真333~336)

図558・559, 図560-1~5は、土偶として分類したものである。出土した土偶は、女性を象ったものが多い。図558-1・2は、脚部が台状を呈す土偶である。いずれも、頭部を欠損している。

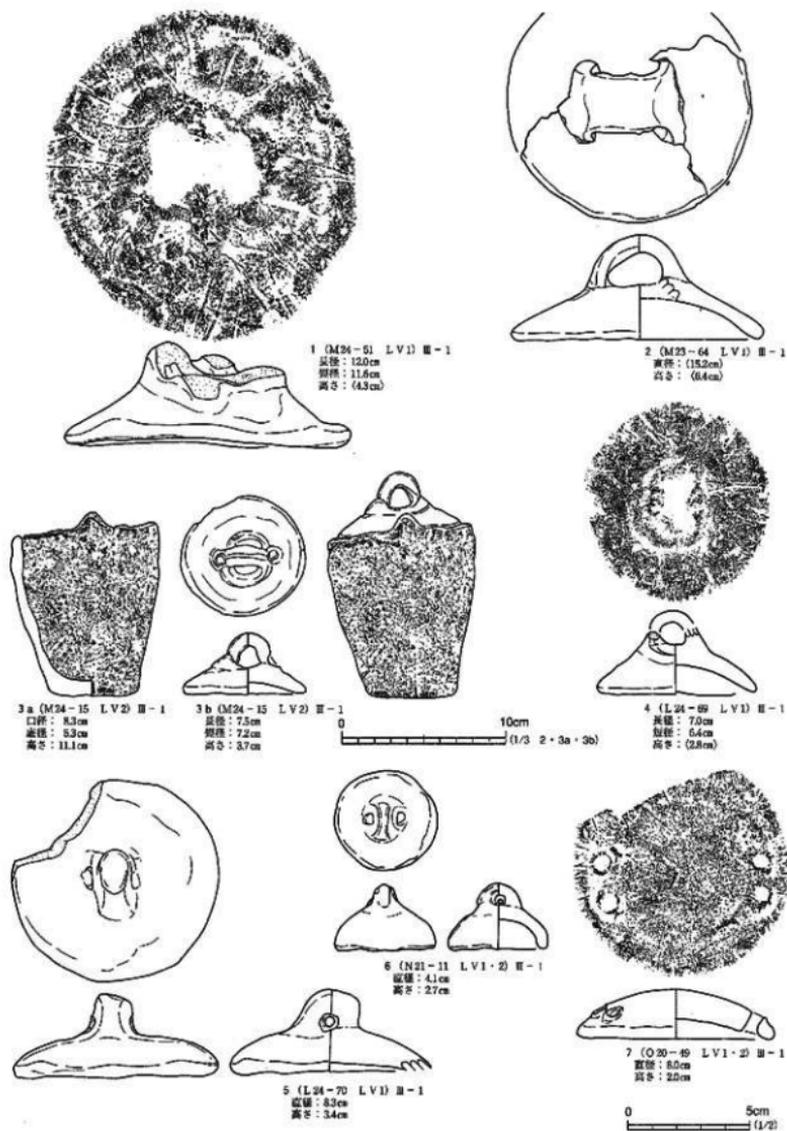


图554 遺構外出土遺物 (129)

第1編 高木遺跡

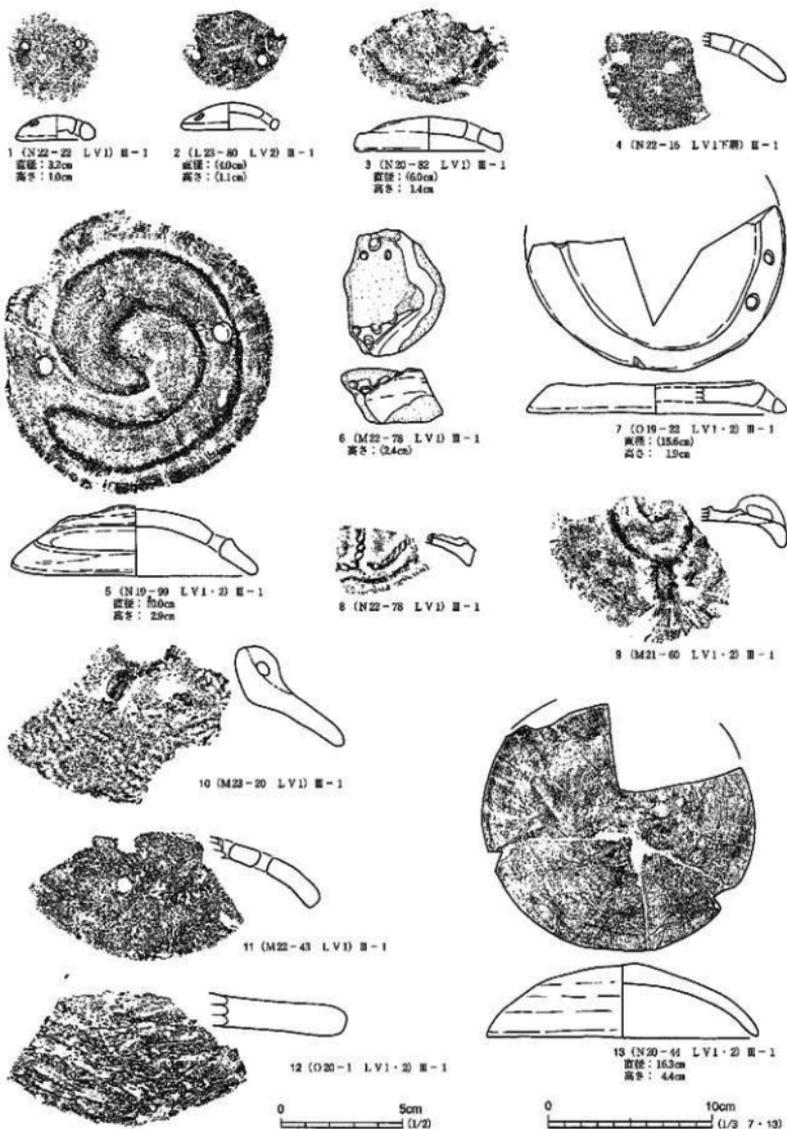


图555 遺構外出土遺物 (130)

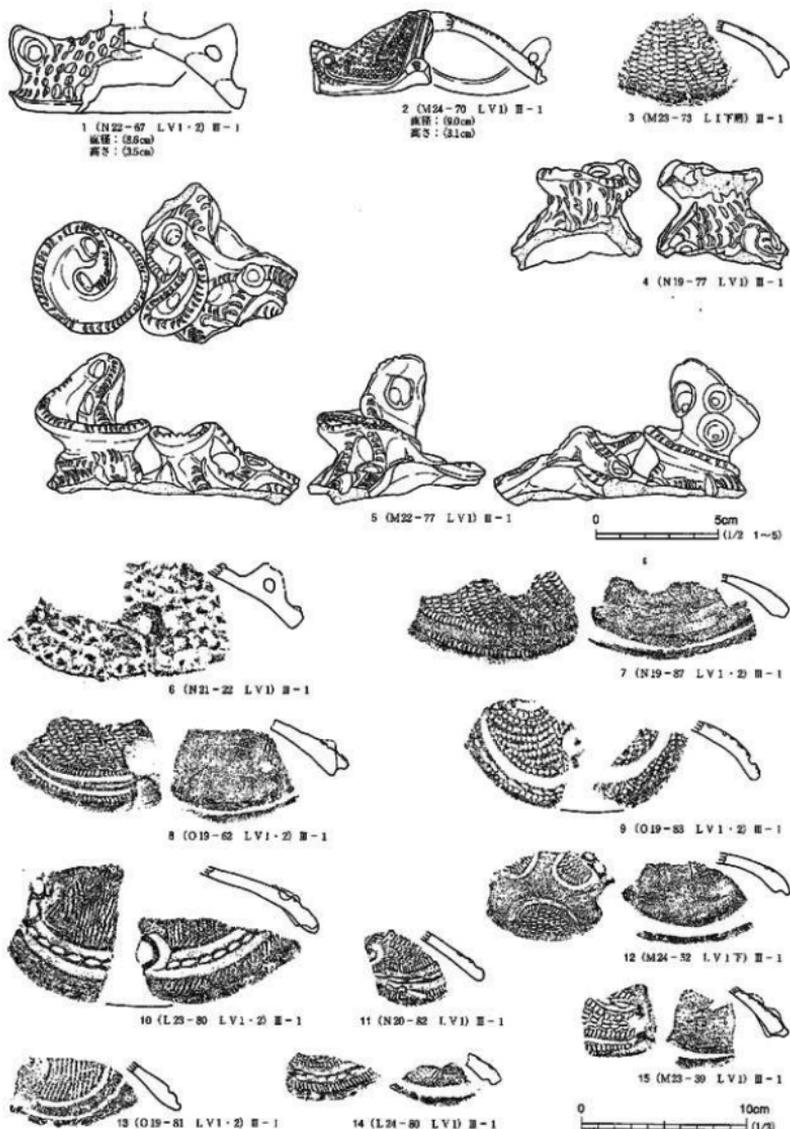


図556 遺構外出土遺物 (131)

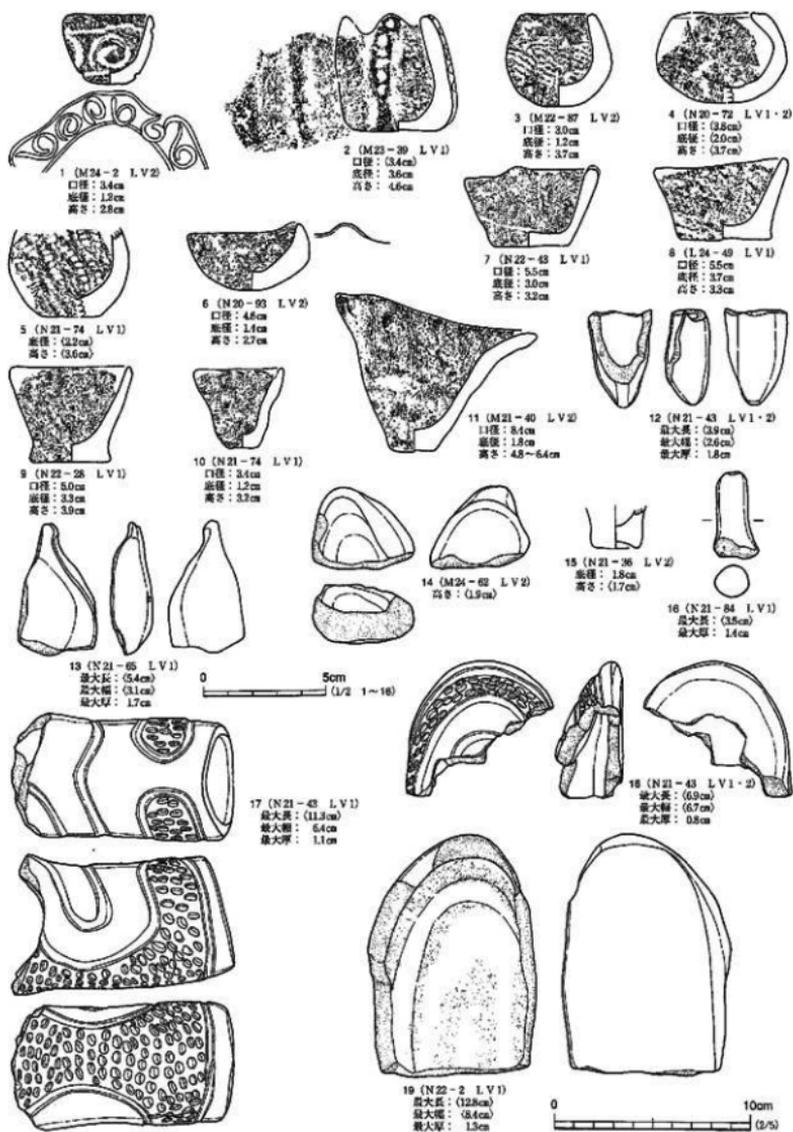


図557 遺構外出土遺物 (132)

これらの土偶は、胸部が逆三角形を呈し、腕部が横に短く突出している。胴部は楕円柱状、脚部は台状を呈している。1・2は、同じ形状を呈しているが、1は2に比べ、胴部が長く、胴部から腕部にかけて緩やかに括れを持つが、2は胴部から腕部にかけて、明確な括れを持たず、緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がっている。また、1の胴部と脚部が中空状を呈しているのに対し、2は胴部が中実、脚部は上げ底状を呈している。

これらの土偶について、もう少し詳しく概観してみる。1は、大型の中空土偶で、脚部と胴部が別々の地点から出土している。出土状況には、特異な点は認められなかった。胸部には、乳房を貼り付けた痕跡が認められることから、女性を象ったものと思われる。胸部上半から肩部にかけては、横位沈線と刺突文、腕部から胴部下端にかけては、縦位に凹線が施される。また、脚部上端に凹線を巡らせ、胴部と脚部を区画している。脚部には、刺突文が全面に施文される。脚部底面には、直径1.5cm程の円孔が認められる。この円孔は、焼成以前に施されていることや、土偶の胴部まで中空状を呈していることから、心棒のようなものを土偶内部に入れて、土偶を製作したものと思われる。脚部の内面を円孔から観察すると、粘土紐の輪積み痕を確認することができた。このため、脚部については、粘土紐を積上げて作られたものと思われる。また、背面は、胸部から胴部にかけて横位凹線、胴部下半には、縦位凹線と渦巻文が施される。

2は、円錐形の貼付文によって乳房が表されている。胸部上端は、三角形に区画され、区画文内には刺突文が充填される。両腕部には、紐掛け用のためか、孔が施されている。胴部の表面には、文様は施されていない。脚部上端には凹線が配され、胴部と脚部を区画している。脚部には、縄文が全面に施文される。背面には、大きな三角形の区画文が施され、区画文上位に渦巻文、中位には刺突文と横位凹線が交互に、下位には縄文が施されている。

図558-3、図559-1・2は、腕部および胸部の破片資料である。形態的には、図558-1・2の胸部・腕部の形態に近い。文様は両面に認められ、横位凹線や沈線、渦巻文が施されている。図559-1の背面は、背骨と肋骨を表現したのであろうか、縦位凹線に沿って横位凹線が施される。

図559-2は、乳房を表したのであろうか、「ハ」の字状に貼付文が付される。また、2の胴部下半には、円形刺突文が施される。

図559-3は、顔、腕部、胴部下半、脚部が欠損した土偶である。顔面は遺存状況から、逆三角形を呈していたものと思われる。頭部は、後方に舌状に張り出す。頭部上面は平坦に作られ、3個の孔を有している。胸部には円筒形の貼付文で乳房が付され、乳房から胴部にかけて「Y」字状隆帯が付され、隆帯上には細かな刺突文が施されている。文様は、頸部の両面に縦位沈線、胸部～胴部の両面に横位沈線が施される。背面中央には連続した円形刺突文を縦位に施し、刺突文施文後に沈線を施文している。

図559-4は、筒状を呈した土偶である。土偶下端を観察すると、接合痕が認められることから、突起として土器などに付されていたか、台座を有していた可能性がある。土偶の形状は、男性性器を象っているが、体部中央には円錐形の突起を付し、乳房を表現している。この土偶については、

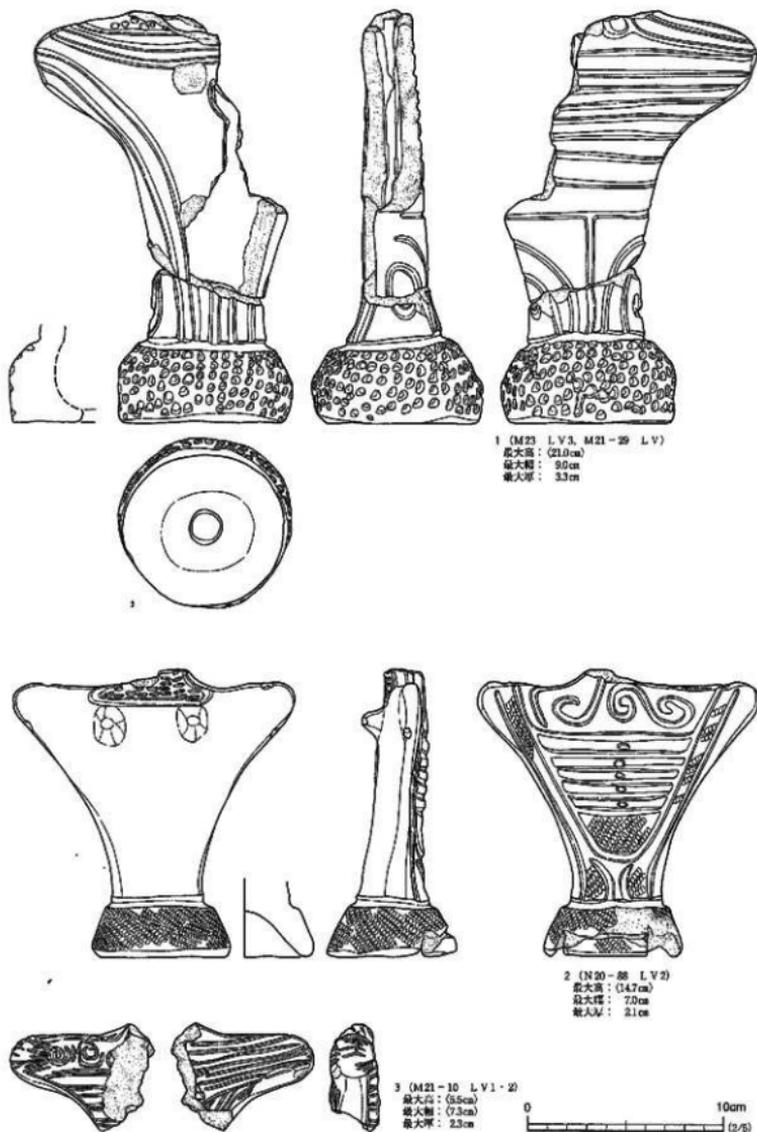


图558 遗構外出土遺物 (133)

1つで男女両性を表現した両性具と思われる。顔は、真横に施された短沈線で目を、その下端に隆帯を貼付け、鼻を表している。また、刺青だろうか、右頬には斜めに沈線が施される。口は、沈線で楕円形状に描かれる。

土偶胴部に施された文様を見てみると、顔の口に相当する部分を起点に、沈線で文様が描かれる。これらの文様を観察すると、人物がまるで万歳をしているように見て取れる。口として表現された楕円形は頭部、両脇に横位に描かれた2本の沈線は腕部、下端に施された沈線と方形区画は胴体、方形区画から、「人」字状に施された沈線は、脚部を表したものである。腕部の先端を見てみると、右手に弓を左手には矢あるいは槍を持っているように思える。胴体を表した方形区画内の刺突は心臓を表したのだろうか。

また、背面にも、正面と同じように、人物を模倣した文様が沈線で描かれている。文様を詳しく見ると、頭部は円形に描かれ、頸部は沈線で表されている。胸部と腹部については、「Y」字を縦位に連結して表現し、それらを「V」字で囲み、体部全体を描いている。脚部は、沈線で「ハ」の字状に描かれ、腕部については、2本の沈線で表現される。両手からは、弧状沈線が垂下している。左手を見ると獣を持っているようにも見える。右手からも、何かを吊り下げているように見えるが、何を象っているのか判断できない。

本土偶は、両性具として作られた他に、胴部には人体文が描かれ、狩に対する喜びや願いなどが現されている。このことは、生命に対する想いや、狩猟の成功、自然の恵みなどの願いを込めて、本土偶が製作されたものと考えられる。

図559-5は、腕部、胴部、脚部の一部を欠損するものの、ほぼ完形に近い土偶である。本土偶は、ほぼ同じ場所からまとまって、各部位ばらばらの状態で出土している。土偶の頭部は、楕円形状を呈している。顔は、三日月状の隆帯を付して眉を表し、眉の中央からは、方形状に隆帯を貼り付け、鼻を表現している。鼻の下部には、刺突で鼻孔が施される。目と口は、刺突で表される。体部の形状は方形を呈し、断面形は楕円形状を呈している。胸部とその背面には鐃状の隆帯が施されている。腕部は、接合箇所が無いため、どのような状態で付されていたのかは不明であるが、遺存状況などから、図示した状態で、胸部から真横に取り付けていたものと考えている。また、腕部先端は、拳を握った状態のように丸みを帯びている。脚部は、大きく足を開いた蟹股状を呈している。足の指先は、「V」字状に先端を刻み込み、4本作り出される。文様は、施文されていないが、顔には器面を調整した際についたと思われる、数条の擦痕が認められる。

図560-1~3・5には、土偶の胸部、腕部、脚部を掲載した。1は胸部、3は腕部、2・5は脚部である。土偶の所属時期については、形態や施された文様の特徴などから、Ⅱ群2類~Ⅲ群1類の所産と考えている。

耳飾り (図560・561, 写真337)

図560-11~15, 図561-1~9は、耳飾りとして分類したものである。大小さまざまな、大きさの耳飾りが出土している。耳飾りの平面形は環状を呈し、器体中央に括れを持つものが多いが、中

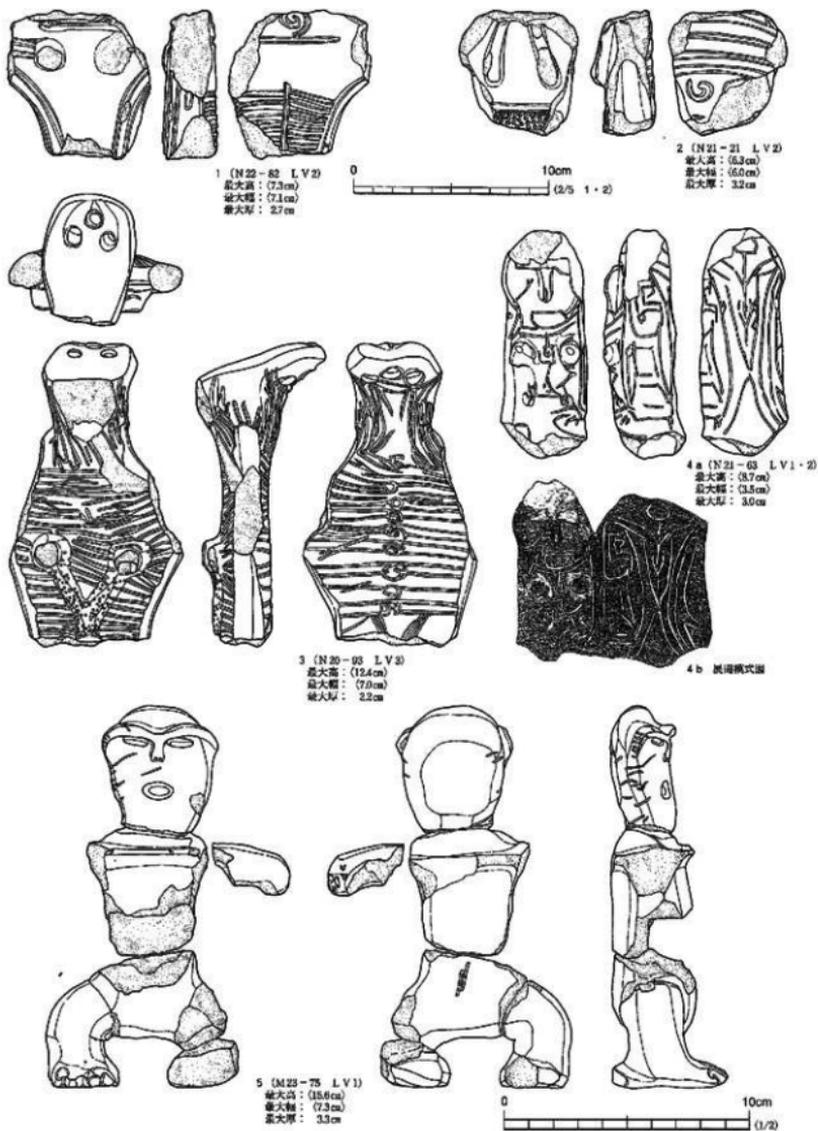


図559 遺構外出土遺物 (134)

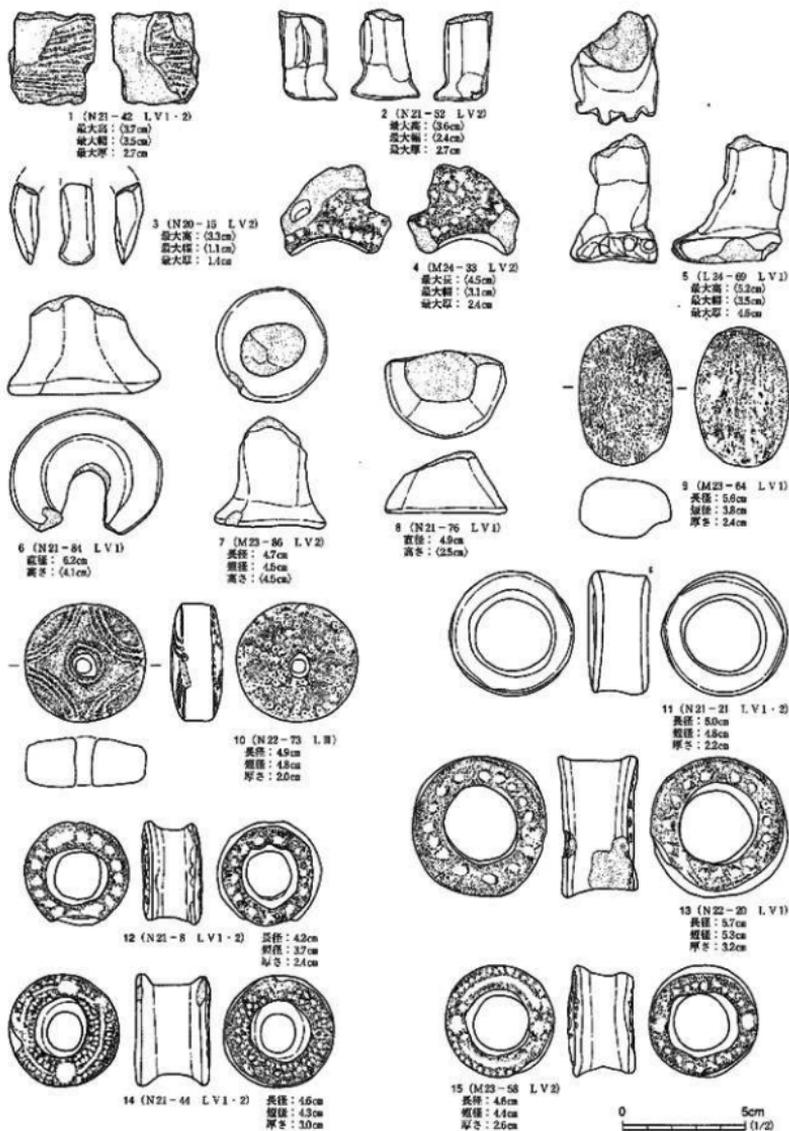


图560 遺構外出土遺物 (135)

には、図561-9のように、環状を呈すものも認められる。環状を呈した耳飾りは、両面の径がほぼ同じ大きさに作られているものが多いが、図561-2～4のように両面の径が異なるものも認められる。器体中央の袢りも、図560-11のように袢りが小さいものや、図560-14、図561-1～4の袢りが大きいものなどがある。

器体に施された文様は、無文のものも認められるが、耳飾りの多くは、両面ないし表面に文様が施される。施された文様を詳しく見てみると、図560-12・13の両面に円形刺突文が施されるもの、図560-14・15の表面に刺突文と弧状沈線、背面に刺突文が施されるもの、図561-1・2の表面に沈線で弧状に区画した区画文内に刺突文を充填するもの、図561-3・4の円形刺突文間に、沈線を施すものなどが認められる。

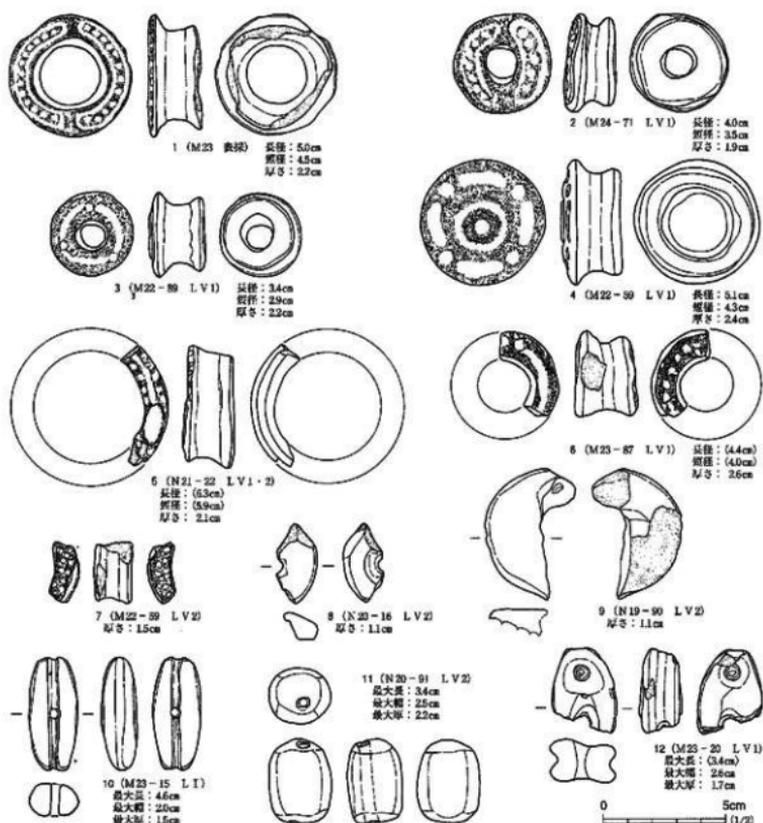


図561 遺構外出土遺物 (136)

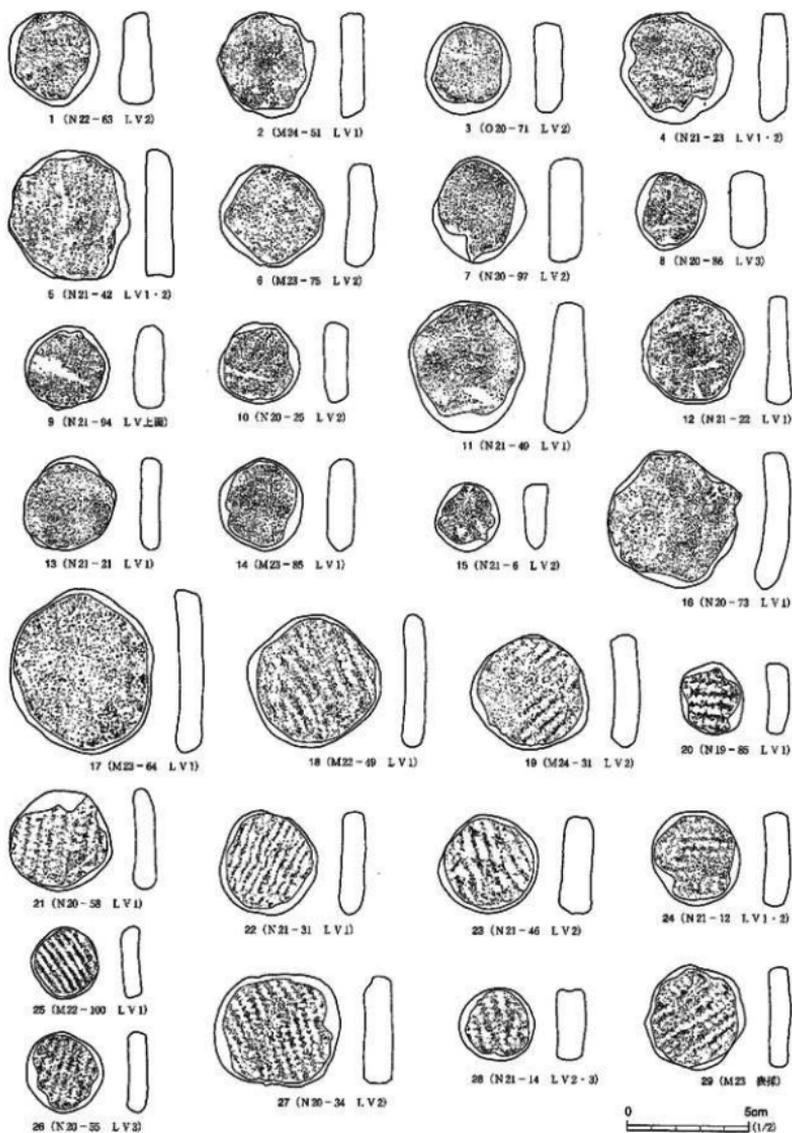


図562 遺構外出土遺物 (137)

第1編 高木遺跡

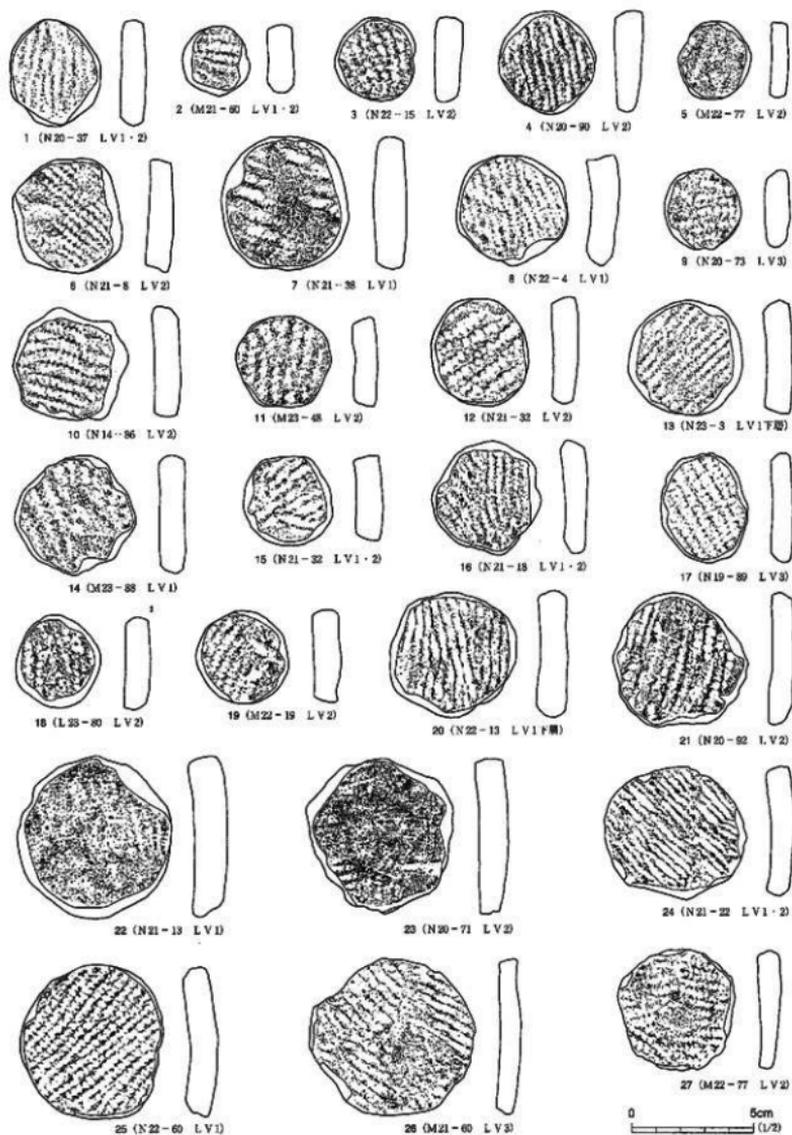


図563 遺構外出土遺物 (138)

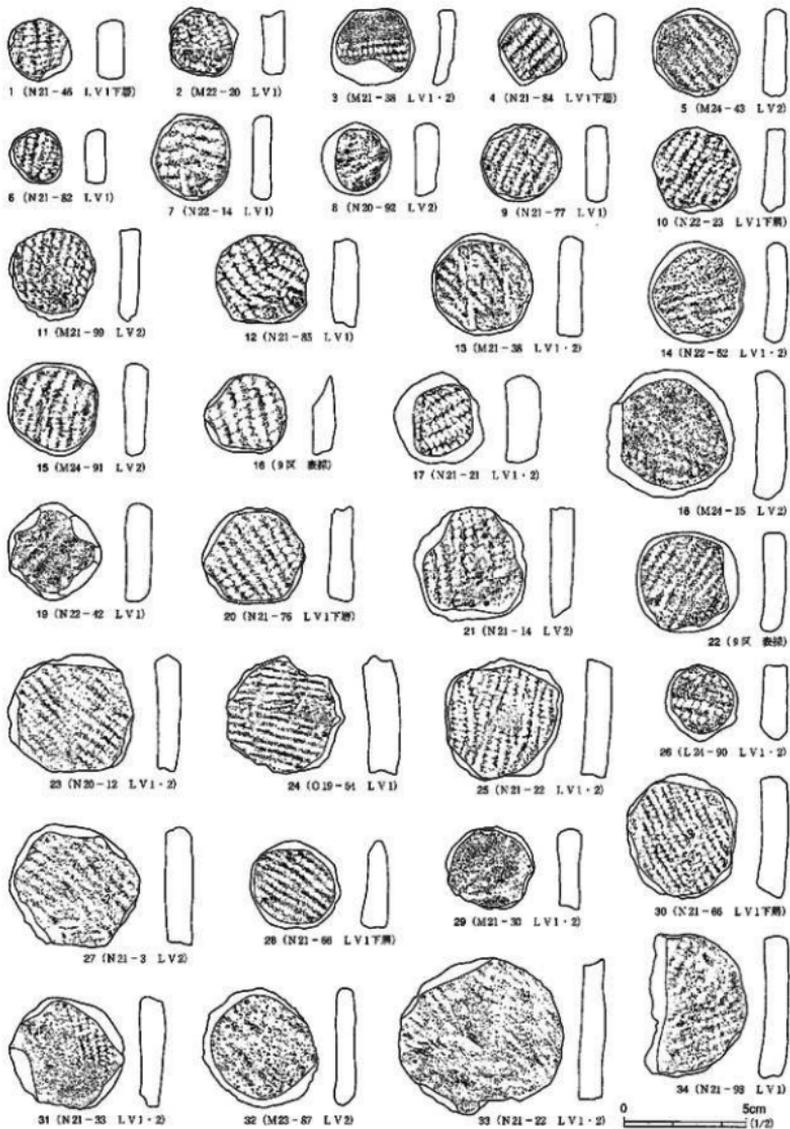


図564 遺構外出土遺物 (139)

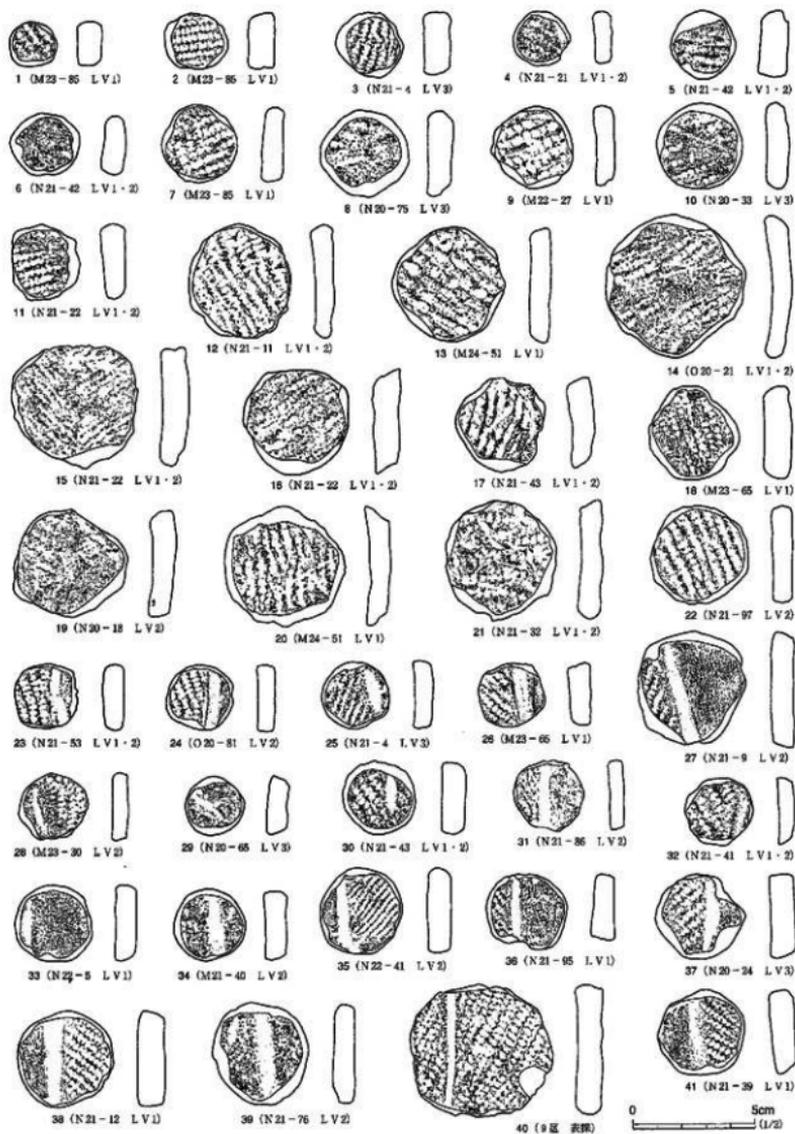


図565 遺構外出土遺物 (140)

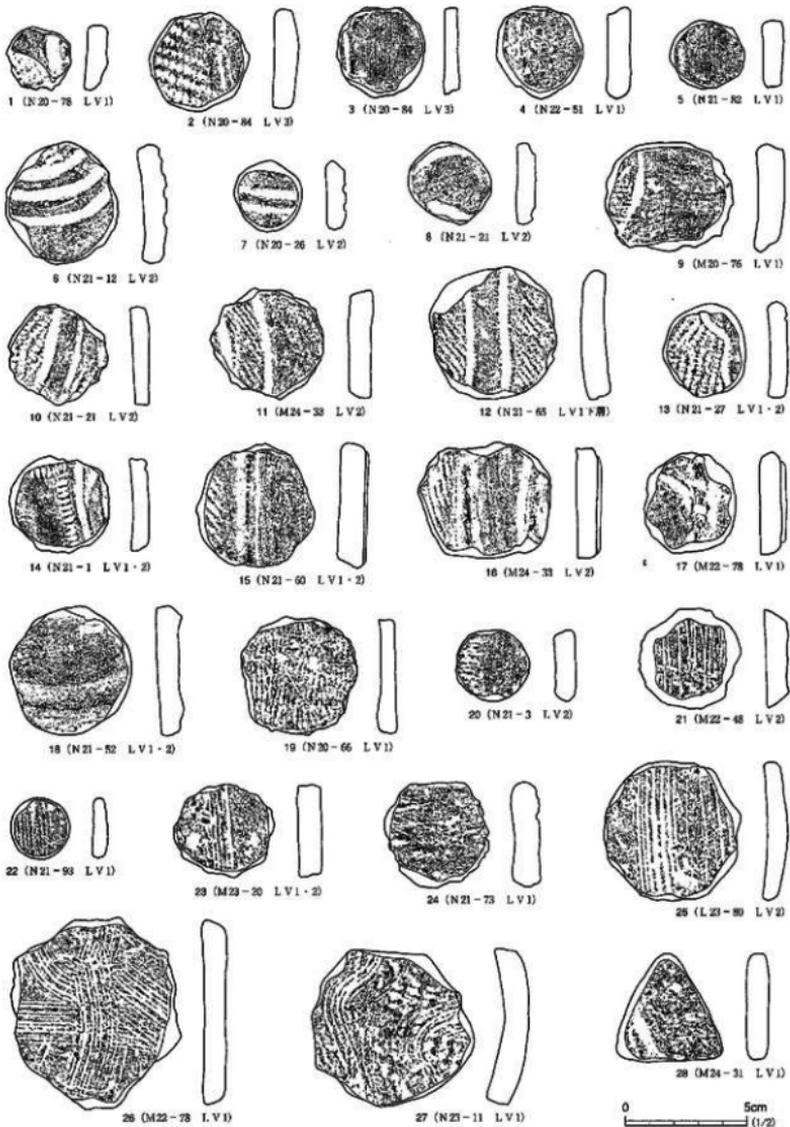


図566 遺構外出土遺物 (141)

耳飾りについては、施文される文様の特徴などから、Ⅲ群Ⅰ類の所産と考えている。

土 鍾 (図561, 写真336)

図561-10~12は、土鍾として分類したものである。10・12は、有蓋土鍾である。10は器体中央、12は両端に孔を持つ。また、12の端部には盲孔が施される。11は、管状土鍾である。

円盤形土製品 (図562~566, 写真338・339)

図562~566は円盤形土製品として、分類したものである。土製品の中で、最も出土量が多く、大小さまざまなものが出土している。円盤形土製品は、いずれも土器片を利用して作られている。資料を見ると、土器片を荒割りしたようなもの、周縁を整形し、円形に形を整えるもの、円形を整形した後、周縁を丁寧に研磨するものなどが認められる。出土した円盤形土製品は、周縁を整形し、円形に形を整えているものが多く、周縁に研磨を施すものは少ない。また、図566-28のように、平面形が三角形を呈するものなども認められる。

円盤形土製品の所属時期については、Ⅱ群2類~Ⅲ群1類の所産と考えている。

その他 (図557・560, 写真333~336)

その他の土製品として、図560-4の三脚状土製品、図560-9の土版、図560-10の有孔円盤、図557-19の赤彩が施された皿状土製品などが認められる。この他に、図557-16や17・18 (同一個体)、図560-6~8などの資料も土製品として掲載した。図557-17・18については、土器の注口あるいは口縁部突起なども考えられるが、この2つの破片資料で1つの土製品として考えた場合、形状や文様の展開などから長靴状を呈した土製品になる可能性がある。図560-6~8は、形状などから、高台付土器あるいは土偶の脚部になるものと思われる。 (大河原)

石器・石製品 (図567~580, 写真340~349)

遺物包含層から出土した石器・石製品の総点数は、約770点である。内訳は、石鏃20点、石錐4点、石匙2点、打製石斧14点、磨製石斧13点、削器30点、搔器12点、石核8点、凹石25点、敲石6点、磨石2点、石皿7点、砥石5点、石製品9点、剥片614点である。この内、剥片類と石器・石製品で著しく破損を受け、器種の特徴が不明なものについては、図示しなかった。以下、石器・石製品について、器種ごとに説明を行う。

石 鏃 (図567, 写真340)

図567-1~18は、石鏃および石鏃の未製品として分類したものである。形状は、二等辺三角形を呈し、横断面形が凸レンズ状となるものが多い。器体に施される剥離調整は、比較的薄手の素材剥片を用いているため、専ら器体を整えるための細かい連続した調整が施される。また、石質は、珪質頁岩が最も多い。

1~5は、凹基の石鏃である。5の先端部は、針状に鋭く作り出されているが、基部は他のものに比べ挟りが弱い。

6~11は、有蓋石鏃である。6~9の基部は、11の基部に比べ、明確に作り出されていない。12

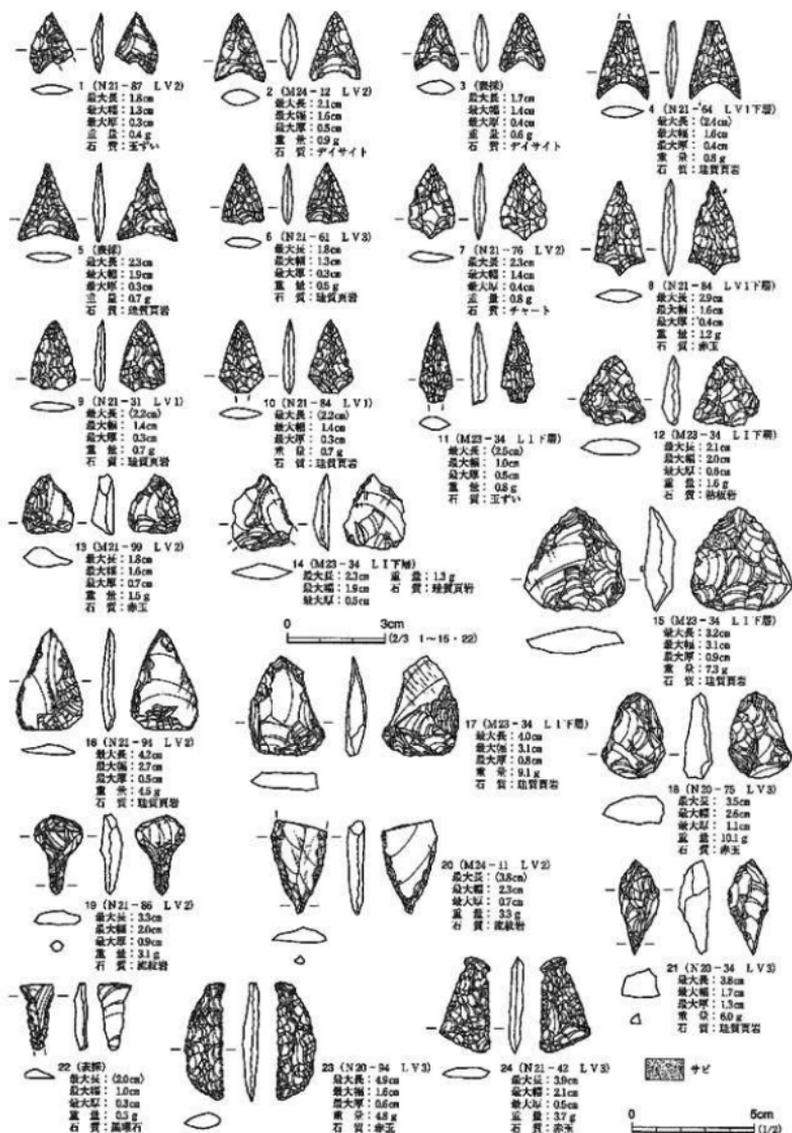


図567 遺構外出土遺物 (142)

～18は、石鏃の未製品として分類したものである。素材剥片の周縁に器体を整えるための、調整が施されているが、いずれも器体中央に素材剥片の剥離面を大きく残している。

15～17は、石鏃の未製品として分類したが、小型の打製石斧あるいは削器として製作されたものかもしれない。

石 錐 (図567, 写真340)

図567-19～22は、石錐としたものである。形状は、素材剥片の形状をそのまま残すものが多い。剥離調整は、錐部を中心として素材剥片の周縁に比較的簡単な調整が加えられている。石材には、流紋岩や珪質頁岩が用いられているが、22は黒曜石を使用している。

19は、つまみを持つ石錐である。つまみは、比較的簡単な剥離調整で作り出され、背面に素材剥片の剥離面を残すが、錐部は細かい連続した剥離調整が両面に施され、棒状に作り出されている。20～22は、素材剥片の形状をそのまま残し、錐部を中心に比較的簡単な剥離調整が施される。

石 匙 (図567, 写真340)

図567-23・24は、石匙である。形状は、いずれも縦長を呈している。これらの石匙は、両面から細かい連続した剥離調整が施され、つまみを含めて丁寧に作り出されている。石材には、赤玉が用いられる。

打製石斧 (図568・569, 写真341・342)

図568, 図569-1～7は、打製石斧として分類したものである。形状は、分銅形を呈するものが多い。剥離調整は、素材礫周縁に比較的簡単に施しているだけで、器体中央に大きく自然面を残している。刃部は、凸刃状を呈するものが多い。打製石斧に用いられた石材を見ると、輝石安山岩が多用されている。

図568, 図569-1は、分銅形を呈するものである。剥離調整は、比較的粗雑で、いずれも両面ないし片面に大きく自然面を残す。図568-1・2の刃部は、素材礫の自然面の形状を利用しているため、片面からの剥離調整のみで、刃部を作り出している。1の表面は熱を受けたためか、黒く焦けている。図569-1の刃部は、使用時の加撃のためか、大きく抉れている。図569-2～4は、短冊形を呈するものである。主な剥離調整は、刃部と基部を中心に行われており、素材礫の形状をそのまま残している。4は、刃部の作り出しは行わず、素材礫の鋭角な縁辺をそのまま刃部として利用している。刃部には、弱い使用痕が認められる。図569-5～7は、小型の打製石斧として分類した。素材剥片の底辺が凸刃状に作り出されていることから、打製石斧に含めたが、削器など別器種の可能性もある。

磨製石斧 (図569～571, 写真343・344)

図569-8, 図570, 図571-1～5は、磨製石斧として分類した。出土した磨製石斧は、刃部ないし基部を欠損するものが多い。形状は定角式で、両面および側面は比較的丁寧に研磨が施され、器面には光沢を持つものが多い。横断面形は、隅丸方形ないし凸レンズ状を呈している。石質を見ると、磨製石斧には、輝石安山岩や角閃石片岩、変輝緑岩が多いが、図571-2のような本県では

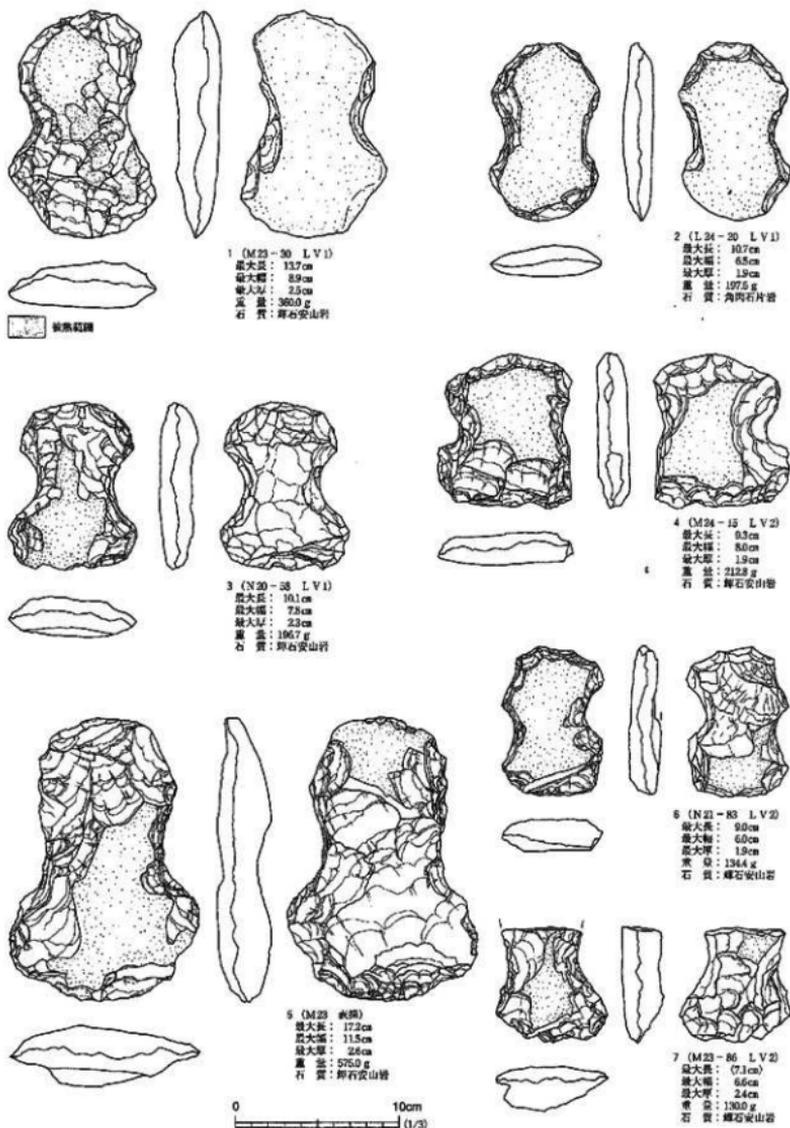


图568 遺構外出土遺物 (143)

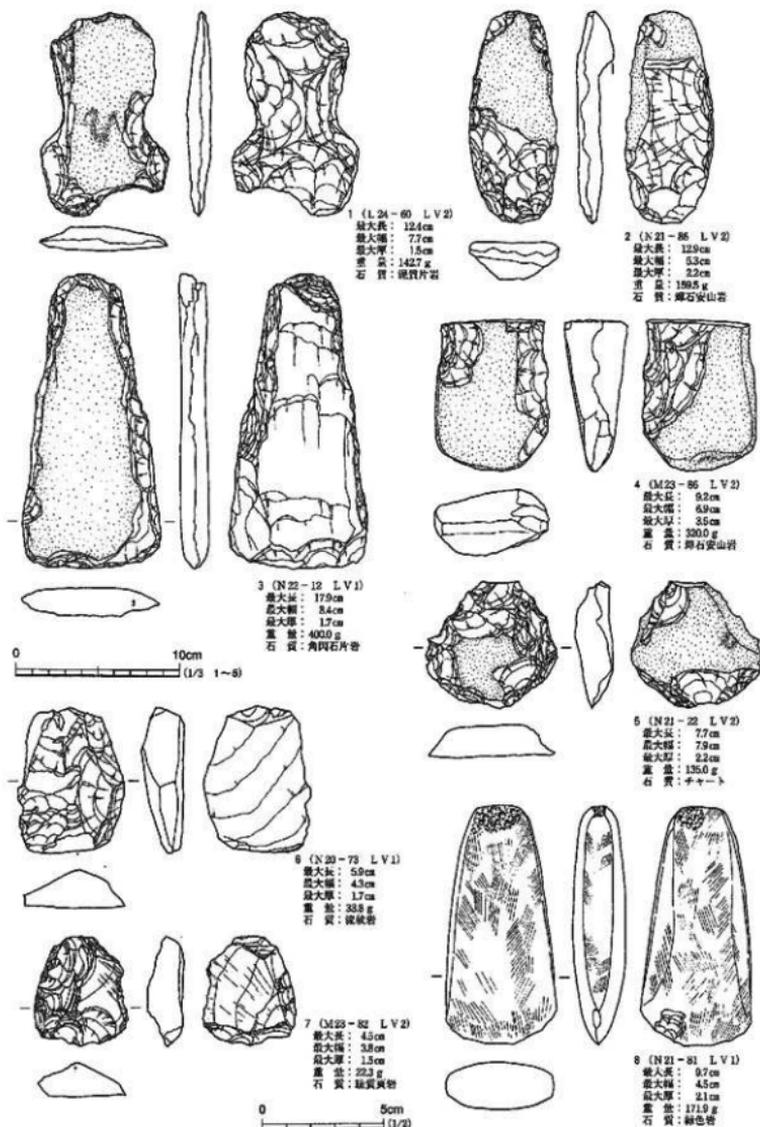


圖569 遺構外出土遺物 (144)

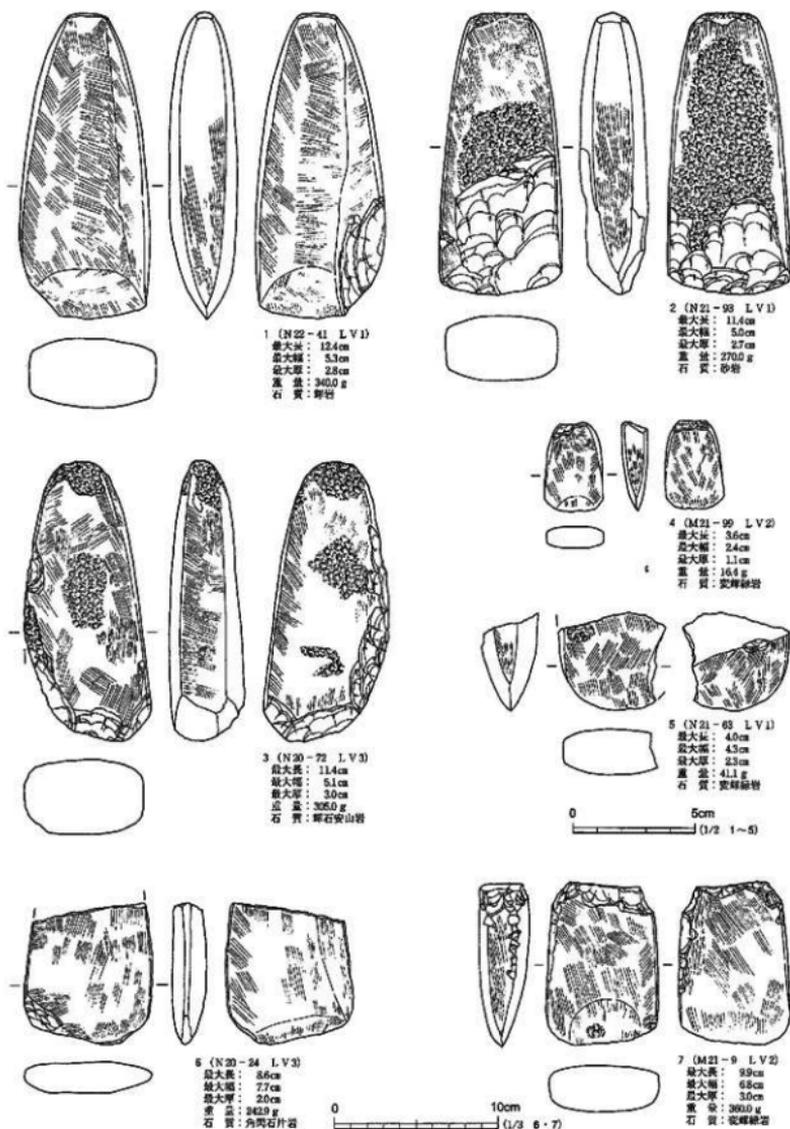


図570 遺構外出土遺物 (145)

産出しないドレライトなども用いられている。

図569-8, 図570-1~3・6, 図571-2の刃部には、使用による加撃痕が認められる。よほど強く使用したのか、あるいは長期間使用したためか、器体中央にまで加撃による剥離が及ぶものも認められる。また、器体に敲打痕を持つものも認められることから、石斧としての機能の他に、別用途でも使用されていたものと考えられる。図570-4は、小型の磨製石斧である。他の磨製石斧と比べ非常に小さいことから、非実用的なものかもしれない。

削 器 (図571~573, 写真345・346)

図571-6~10, 図572, 図573-1~8は、削器として分類したものである。素材剥片の形状を利用し、剥片周縁部に比較的簡単な剥離調整を加え、刃部を作り出しているものが多い。石質は、主に珪質頁岩や流紋岩である。

図571-7~9は、器体全面に剥離調整が施され、一縁辺に刃部が作り出されたものである。9などは、石鏃の未製品の可能性もある。図571-6・10, 図572, 図573-1~8は、主に片面に剥離調整が施され、一縁辺ないし二縁辺に刃部が作り出されたものである。図572-7, 図573-4は、側縁に作り出された刃部の他に、剥片の先端が錐先状に整形されており、石鏃としても使用された可能性もある。図573-6~8は、縦長剥片の縁辺に細かい連続した剥離調整を加え、刃部を作り出している。特に6は、両面から調整が施され、鋭角な刃部が作り出されている。

搔 器 (図573・574)

図573-9・10, 図574-1~7は、搔器として分類したものである。いずれも素材となる剥片の形状を利用し、刃部の整形を中心とした剥離調整が行われる。刃部の角度はいずれも鈍角で、直角に近い。石質は、主に珪質頁岩である。

図573-9, 図574-3・5・6は、片面ないし両面に剥離調整が施される。背面には、素材剥片の剥離面を残すものが多いが、図574-6は器体の厚みを採るためか、背面の器体中央にまで剥離調整が施される。図574-1・2・7は、縦長剥片を利用し細かい連続した剥離調整を側縁と刃部に施している。刃部は、素材剥片の緩やかにカーブする形状を利用し剥片端部に作り出される。

石 核 (図574)

図574-8~12は、石核と分類した。出土した石核は小型で、石質はいずれもチャートである。剥片剥離作業は、打面を頻繁に転移させながら行われているが、自然面や節理面を残すものが多い。9・10は、周縁部から求心的に剥離が施され、稜線が刃部状に形成される。石核の剥片剥離状況を見ると、採取される剥片の多くは、比較的小型なものと思われる。

遺構内および遺物包含層から出土した石器を見ても、チャートを素材としたものは、石鏃や削器などの小型のものが多い。

凹 石 (図575~577・579, 写真347)

図575~図577-1, 図579-3は、凹石として分類したものである。基本的には、素材礫に凹部を有すものを凹石としている。素材礫の形状は、円形ないし楕円形を呈しているものが多い。凹部

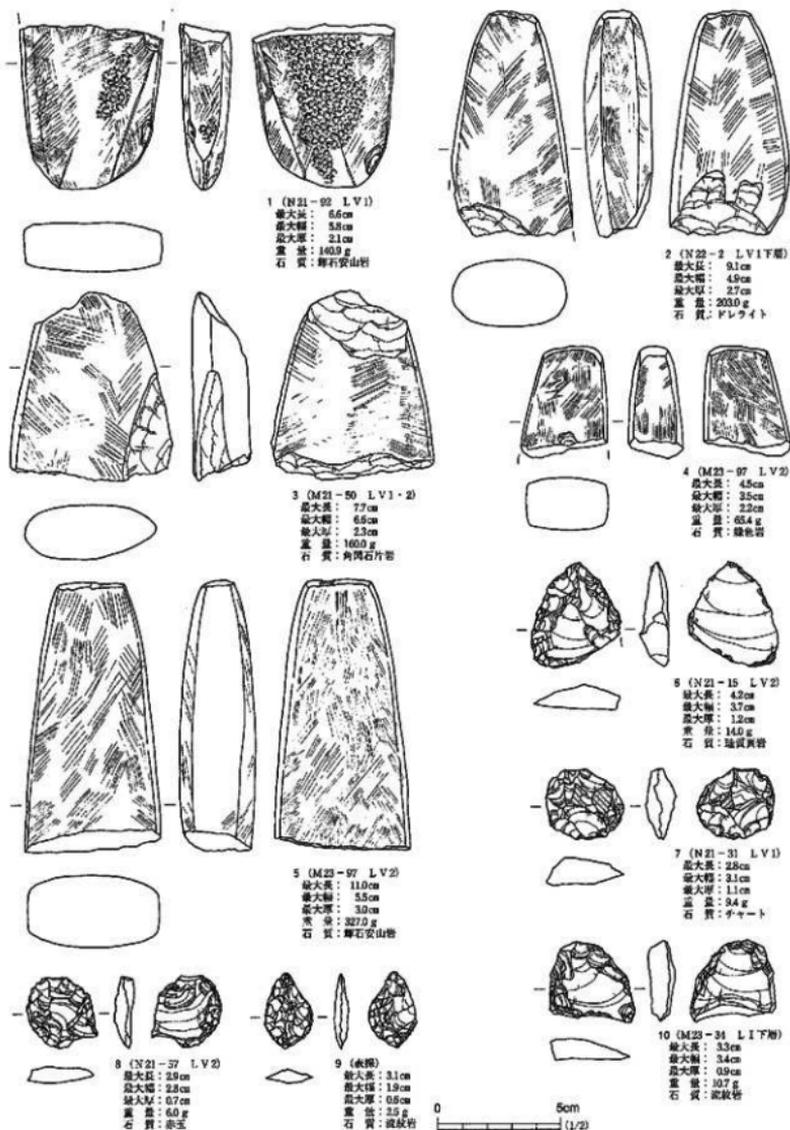


図571 遺構外出土遺物 (146)

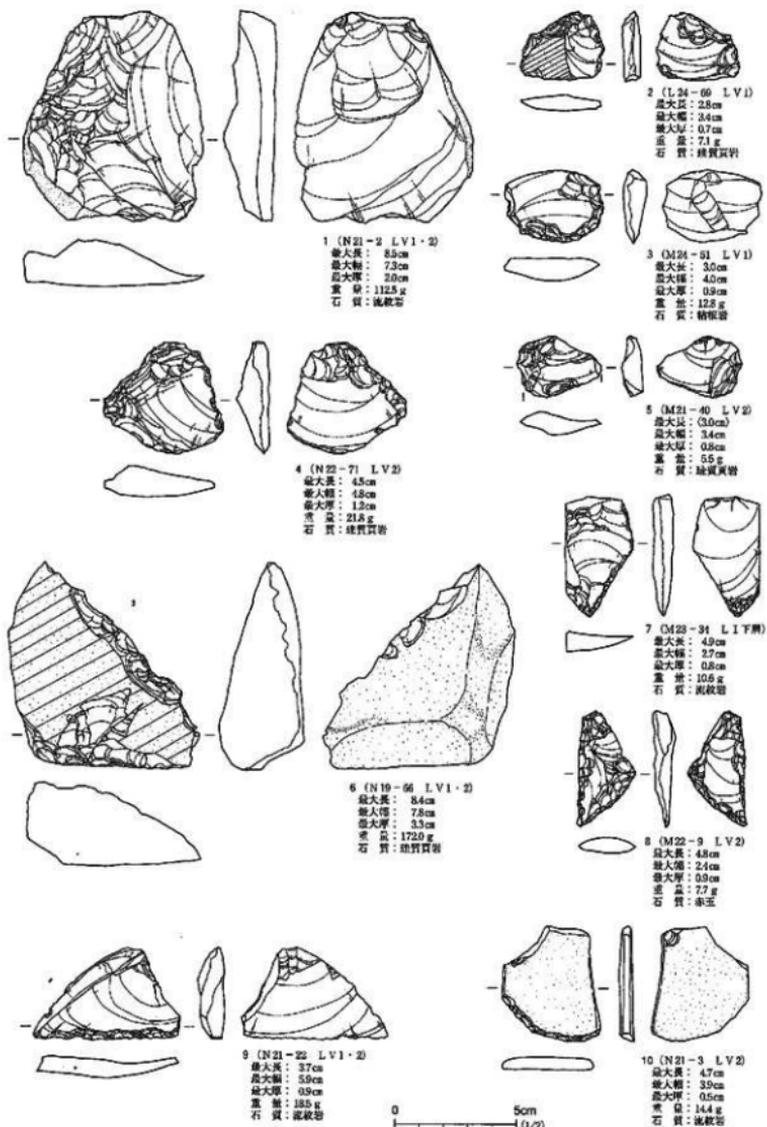


図572 遺構外出土遺物 (147)

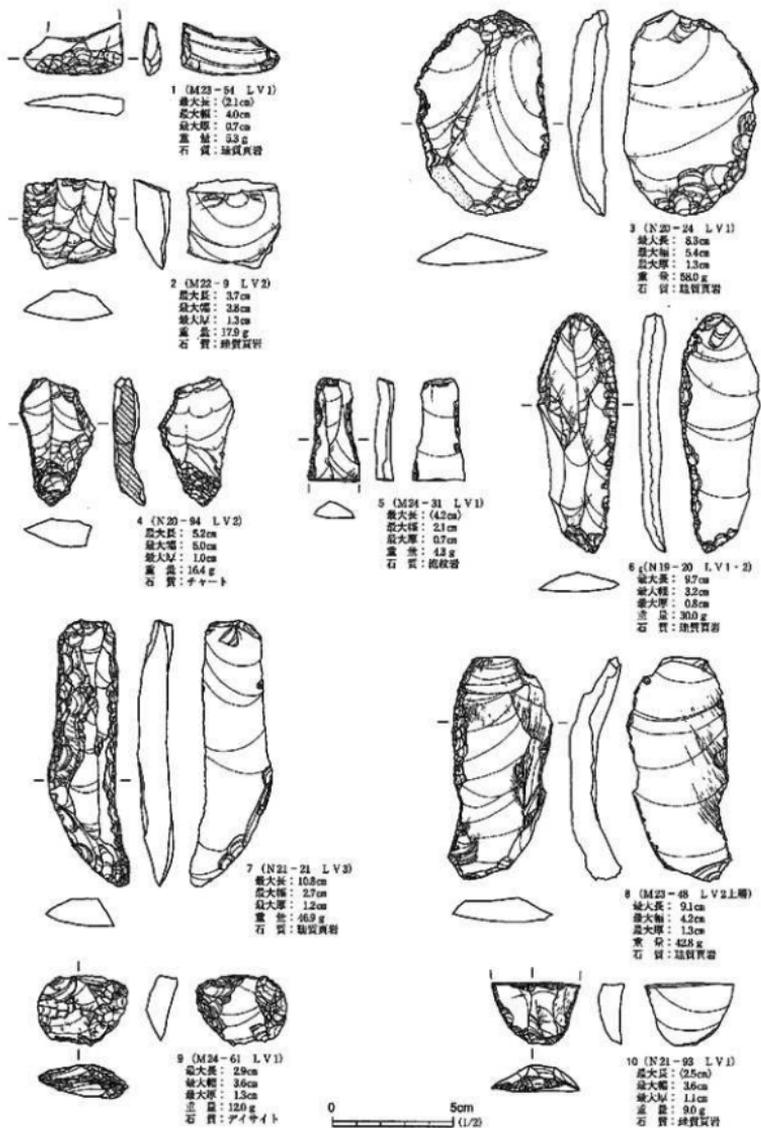


図573 遺構外出土遺物 (148)

第1編 高木遺跡

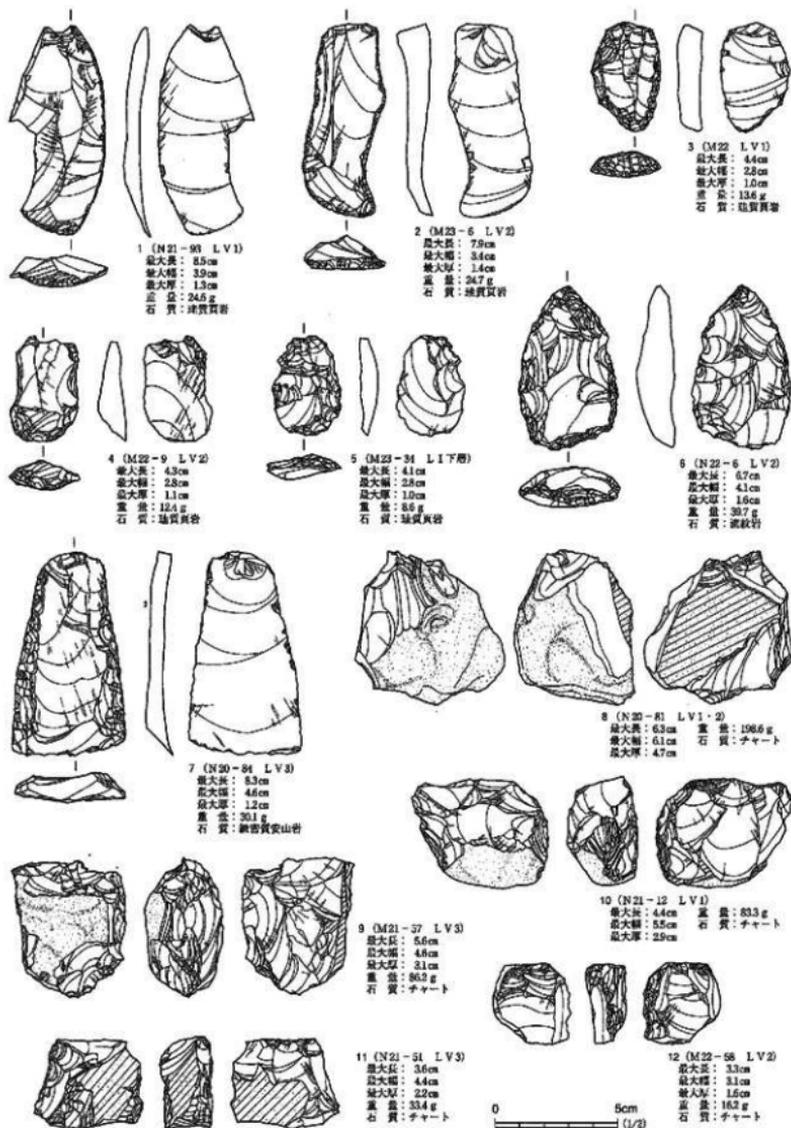


図574 遺構外出土遺物 (149)

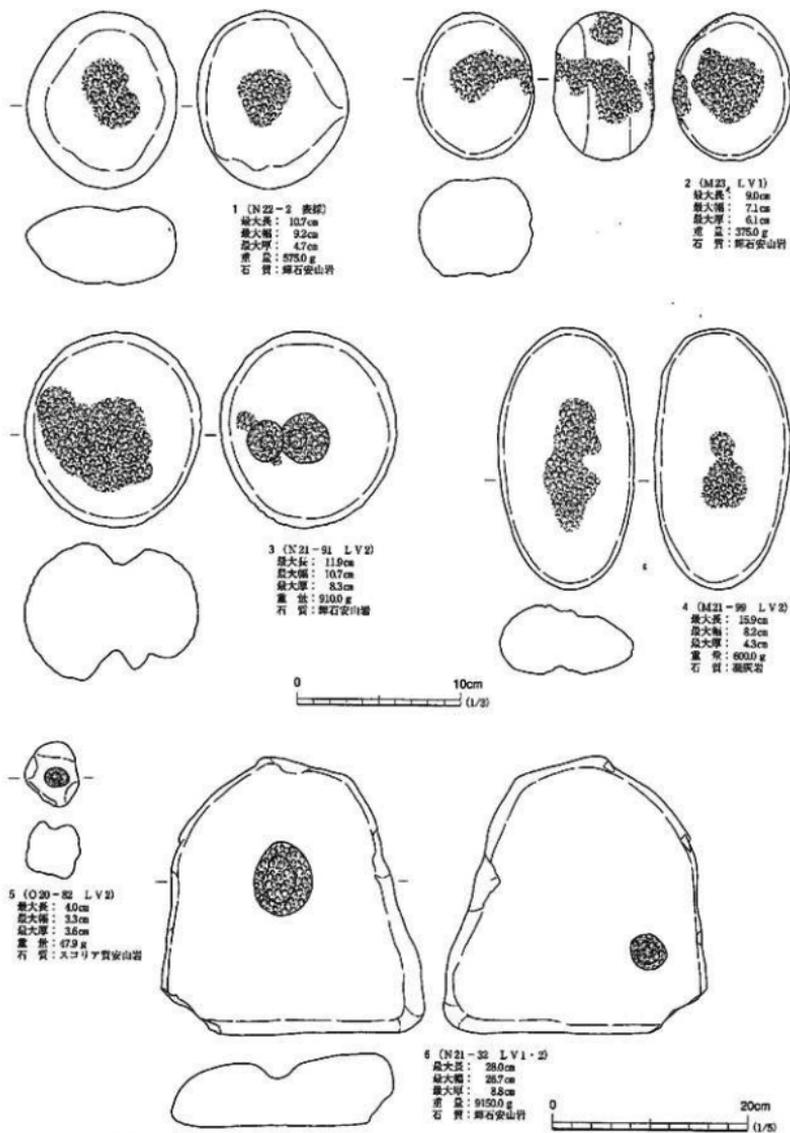


図575 遺構外出土遺物 (150)

は、主に敲打によって、素材礫の器体中央に形成されている。また、素材礫の周縁などには、弱い敲打痕や磨耗面が認められるものもある。石質は、輝石安山岩が多い。

図576-1は素材礫の片面、図575、図576-2~6、図577、図578-1・3は、素材礫の両面に凹部を有すものである。この内、図576-2~6、図577-1~5は、素材礫の周縁に敲打痕が認められる。図577-6、図578-1は周縁に敲打痕、素材礫の両面に磨耗面が認められる。また、図579-3は、大型礫の両面に多くの凹部を有す、いわゆる蜂巣石である。

磨石 (図578, 写真347)

図578-2は、磨石として分類したものである。磨耗面が、主な使用痕となるものを磨石とした。磨耗面は、平滑で光沢をおびている。また、素材礫の両端には敲打痕が認められる。

敲石 (図578・579, 写真347)

図578-4~8、図579-1は、敲石として分類したものである。素材礫の形状は、円形ないし楕円形を呈している。石材は、凹石と同様、輝石安山岩が最も多く使われている。図578-3・6、図579-1は素材礫の両面および側縁、図578-4は全面、図578-5は片面、図578-7・8は周縁に敲打痕が認められる。

石皿 (図579, 写真348)

図579-2・4~7は、石皿と分類したものである。欠損品が多いが、比較的大型で扁平な礫を素材としている。石質の多くは、輝石安山岩である。使用痕は、片面のほぼ中央に認められ、中央に向かい卵状に浅く窪んでいる。使用面は磨耗し平滑となるものが多く、光沢をおびているものも認められる。2の背面には凹部、5の背面は磨耗痕、7の背面には脚部が作り出されている。また、今回図示はしなかったが、大型の石皿も出土している。(写真348右上M22-30G)

砥石 (図580, 写真349)

図580-1・2・4・8は、砥石として分類したものである。1は楕円状、2は方形状、4・8は、棒状の礫を素材としている。いずれも、素材礫の全面に研磨痕が認められる。8には、敲打の痕跡も認められることから、砥石の他に敲石としても使用されたものと思われる。

石製品 (図580, 写真349)

図580-3・5~7・9~13は、石製品としたものである。石製品は、垂飾具や石棒、石冠など9点が出土している。

3・6・9は、岩偶あるいは三角形岩版であろうか、3には盲孔と沈線、6は盲孔、9には円筒状の高まりが作り出されている。9の円筒状の高まりは、乳房を表現したものと思われる。

5・7・10・11は、垂飾具と分類した。7・11は、垂飾具と分類しているが、石質がスコリヤであることから浮子の可能性もある。10は、球状耳飾りの欠損品である。5の円孔は、自然の産物とも思われるが、表面に擦痕などが認められたため石製品として取扱った。

12は、石冠である。方形状の基底部に斧状の頭部が付く。13は、石棒の欠損品である。頭部は、球頭状に作り出され、断面形は円形を呈している。

(大河原)

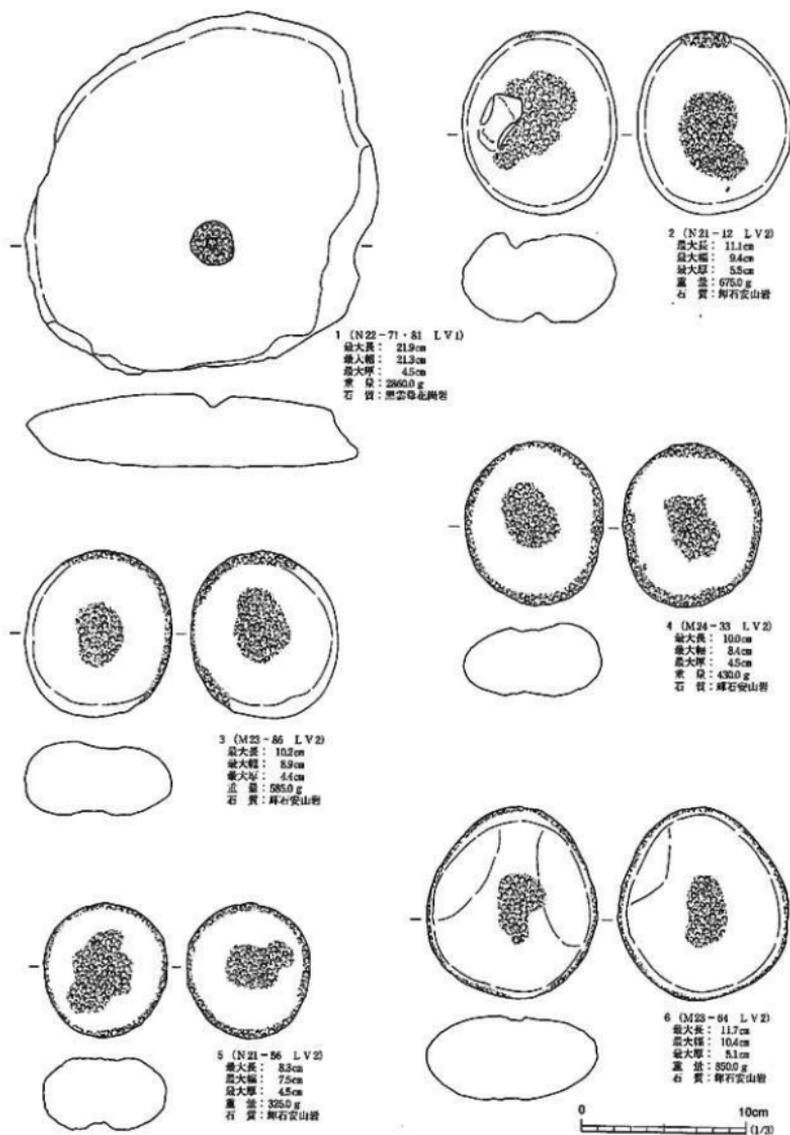


図576 遺構外出土遺物 (151)

第1編 高木遺跡

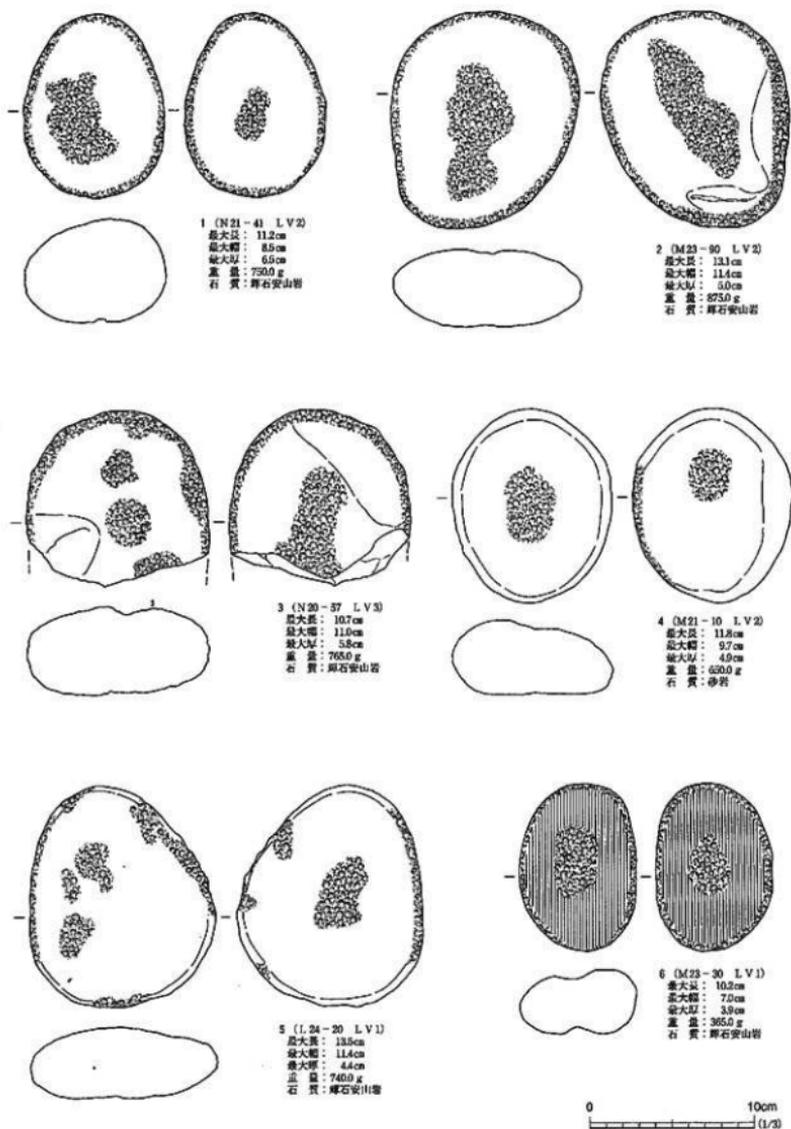


図577 遺構外出土遺物 (152)

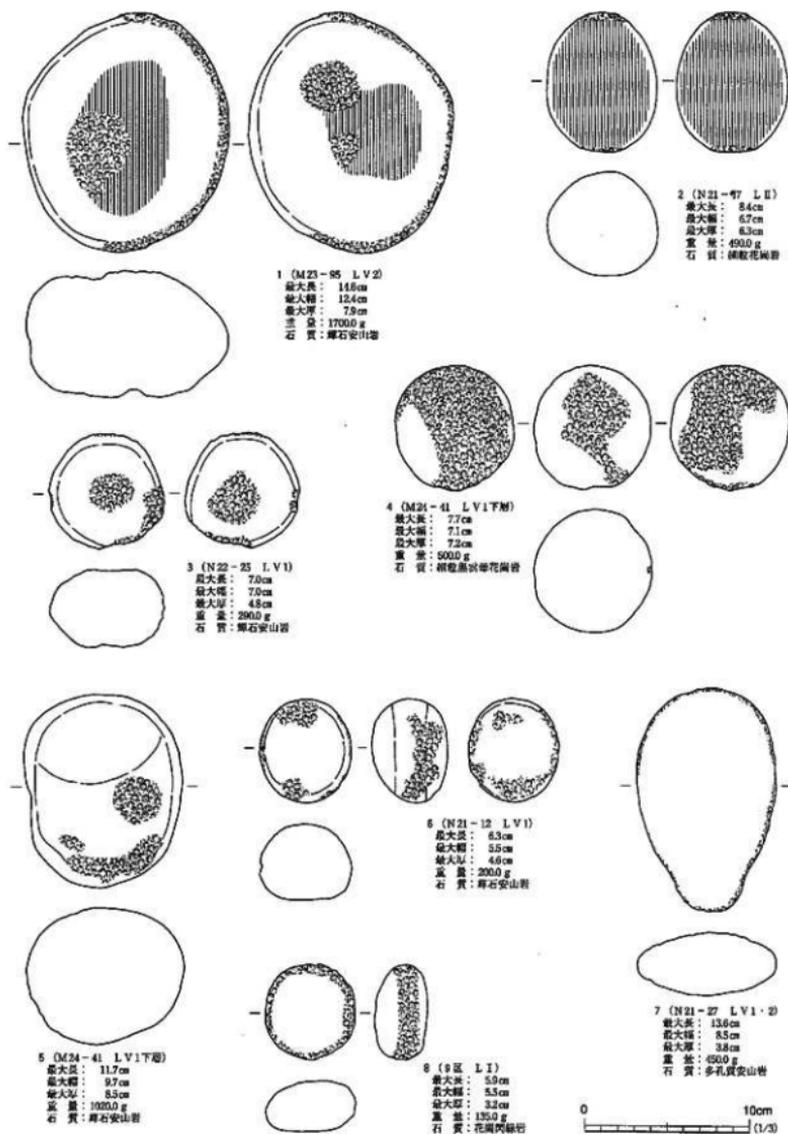


図578 遺構外出土遺物 (153)

第1編 高木遺跡

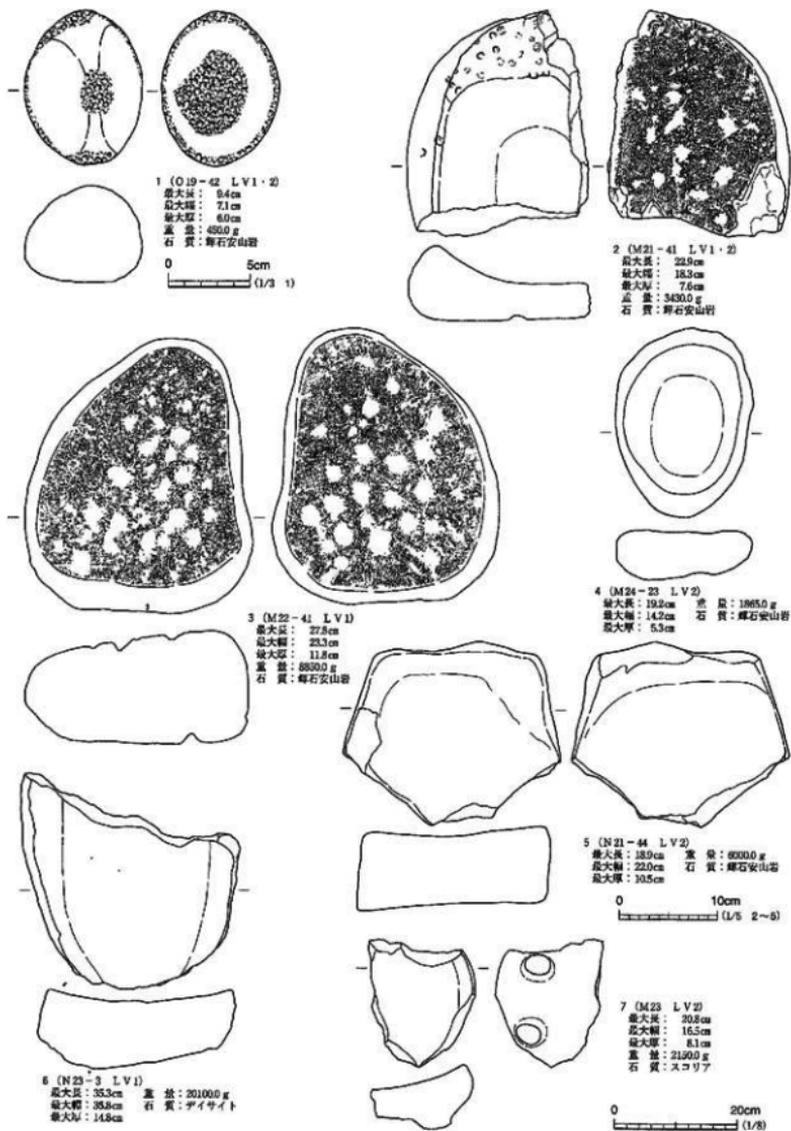


図579 遺構外出土遺物 (154)

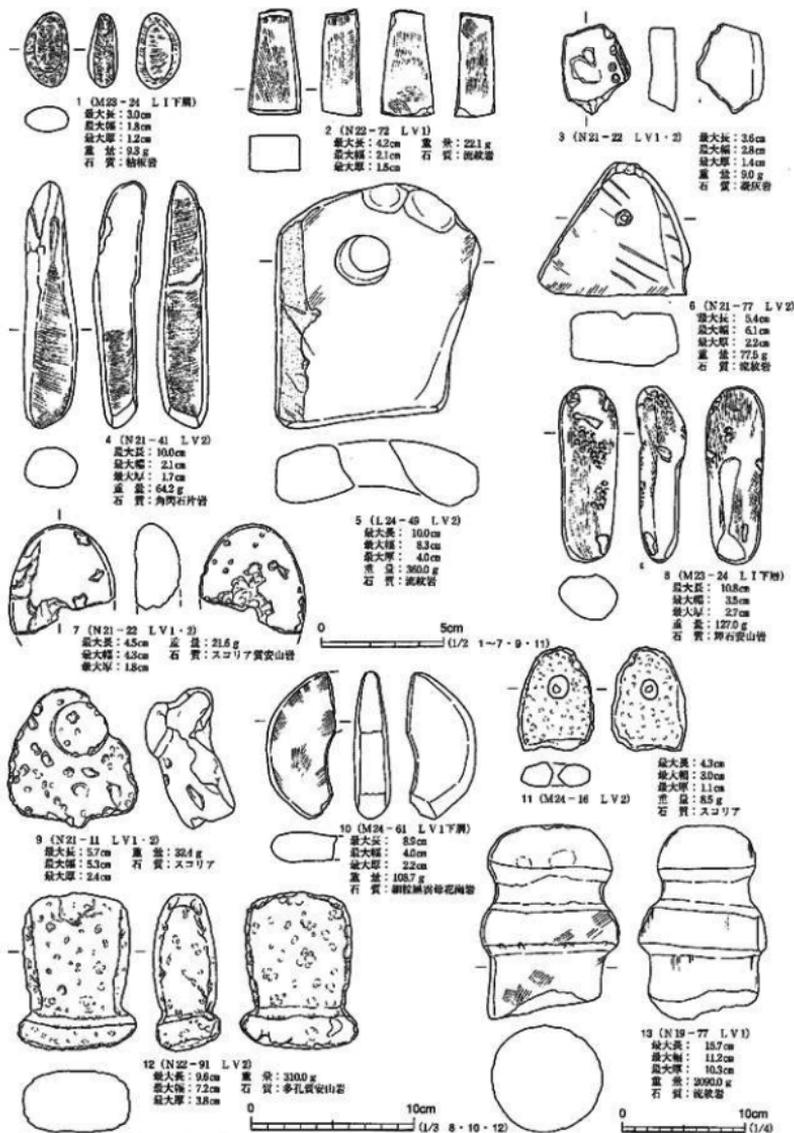


図580 遺構外出土遺物 (15)

第2編 北ノ脇遺跡

遺跡記号 MM-KW

所在地 安達郡本宮町高木字北ノ脇

調査期間 平成12年1月11日～1月31日

調査員 松本 茂・安田 稔・高久田富裕
佐藤あかり・成田有策・菅原祥夫
小暮伸之・大河原 勉・堀川雄二
大波紀子

第1章 調査経過

第1節 調査経過

今回発掘調査対象となった調査区は、これまでに本宮町教育委員会で実施された発掘調査の経過から、北ノ脇遺跡4区と呼称し、他の区と区分して調査を行った。北ノ脇遺跡4区については、平成11年度に調査を行い、縄文時代の遺構としては土坑1基、遺物包含層などを検出している。以下、調査経過について報告する。

北ノ脇遺跡4区の調査は、高木遺跡9区の進捗状況に伴い9月下旬から、重機による表土剥ぎを開始した。10月上旬には、表土剥ぎが終了したため、高木遺跡9区から調査員と作業員を適宜移動し、古墳時代、奈良・平安時代の遺物包含層の掘り込みと遺構検出作業を行った。10月中旬には、遺構検出作業も進み、ほぼ調査区全域で堅穴住居跡を中心とした遺構が検出され、本調査区も高木遺跡9区と同様、遺構の密度が高いことが判明した。10月後半からは、検出遺構の精査に着手した。

11月には、天候にも恵まれたこともあり、古墳時代、奈良・平安時代の遺構の精査は大きく進展した。

また、11月下旬に開かれた「阿武隈川右岸築堤連絡調整会」で、当事業が緊急性を踏まえた河川改修であることから、特例として1～3月の冬期間の発掘調査を実施することとなり、基本的には、北ノ脇遺跡4区の縄文時代の遺構調査を終了させることとなった。

12月上旬には、古墳時代、奈良・平安時代の遺構精査がほぼ終了したため、調査区的全景写真や地形測量を行った。また、最終的には調査区全体をLⅣ上面まで掘り下げ、古墳時代、奈良・平安時代の遺構の有無を再確認した。北ノ脇遺跡4区古墳時代、奈良・平安時代の調査は、12月15日に終了し、同日から縄文時代の調査に着手した。調査にあたっては、縄文時代の遺物包含層の上に砂層が3mほど堆積していた。この砂層は、基本的に無遺物層であったため、層ごとに重機で慎重に除去し、適宜作業員を投入し、遺構・遺物の有無を確認した。また、この際保存対象となる築堤部と縄文時代の調査区の高低差が5mを超えるため、安全対策（掘削安全帯）として勾配を付け掘り下げた。年内の縄文時代の調査は12月23日まで行い、年明けに遺物包含層の掘り込みと遺構検出に着手することとした。

年明けの調査は、1月11日から開始した。調査にあたっては、国土交通省の配慮により、調査区に防風フェンスを設置し、冬期間の調査に備えた。1月中旬は遺物包含層の掘り込みと遺構検出作業に専念した。調査は、降雪が少なく効率よく作業が進められた。1月後半には、遺構や遺物包含層の密度が少なかったこともあり、1月中にはほぼ調査が終了する見通しがついてきた。1月末には、遺跡全景写真と地形測量を実施し、全ての調査を終了することができた。また、2月3日に調査区の引渡しを行っている。

(大河原)

第2節 調査方法

北ノ脇遺跡4区の調査にあたっては、これまでに本宮町教育委員会で行なわれた阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査の原則と基本的な面で一致させて調査を行った。また、遺構の精査と記録方法については、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査課で行ってきた調査方法を踏襲した。

まず、調査区全体に遺構・遺物の位置を表示するための方眼を設定し、これをグリッドと呼んだ。設定にあたっては、本宮町教育委員会の調査で設定したグリッドをそのまま踏襲し、方眼の名称や大きさを合わせた。

グリッドは、遺跡範囲全体を包括する1辺が40m四方の方眼を設定して大グリッドとした。この大グリッドを、さらに4m四方の方眼で100区画に分割、これを小グリッドとした。大グリッドの番号は、東西方向にアルファベット大文字（西から東へA・B・C）、南北方向に算用数字（北から南へ1・2・3）を付けて組み合わせ、例えば「O18グリッド」と呼称した。小グリッドの番号は、大グリッドの北西隅から南東隅に向かって1～100までの番号とした。（図1）

調査にあたっては、この大グリッドと小グリッドを組み合わせ、「O18-1」のように、「大グリッド-小グリッド」の順番で表記している。また、隣接する高木遺跡との境界設定にあたっては、一部小グリッドが重複する部分があり、遺構や遺物の出土地点が両遺跡にまたがってしまうため、遺跡範囲を基にグリッドに沿って便宜上の境界を設定した。（図1）

調査に際しては、無遺物層で堆積層が厚いLⅣについては、一部、重機を用い除去しているが、それ以下の層位については、堆積層ごとに人力によって掘り込みを行った。遺物包含層の掘り込みにあたっては、各小グリッドの層位ごとに行い、併せて遺物の取り上げと記録を行った。遺構の精査にあたっては、遺構検出面と掘り込まれている最終面までが、調査区内の基本土層とどのような関係にあるかを留意して調査を行った。

遺構番号については、これまで本宮町教育委員会で調査した遺構に付された番号には連続させず、本調査区独自に番号を付した。

また、古墳、奈良・平安時代に関係なく、同種の遺構には、連続した番号を付けている。

遺構の記録については、小グリッドを1mあるいは50cm四方の方眼に細分し、その交点を測点として用い、平面図・断面図を作成した。この測点は、遺跡内における遺構の位置をより把握し易くするために、国土座標Ⅹ系の座標値をそのまま使用した。例えば、X168,100, Y51,000である。なお、Xは経線、Yは緯線を表す。

本調査区で用いた遺構の縮尺は、土坑が1/40、地形図については1/200の縮尺で作成した。遺構や出土遺物の写真撮影には、35mm判のモノクロームとリバーサルフィルムを使用し、両者同一カットで撮影を行った。

（大河原）

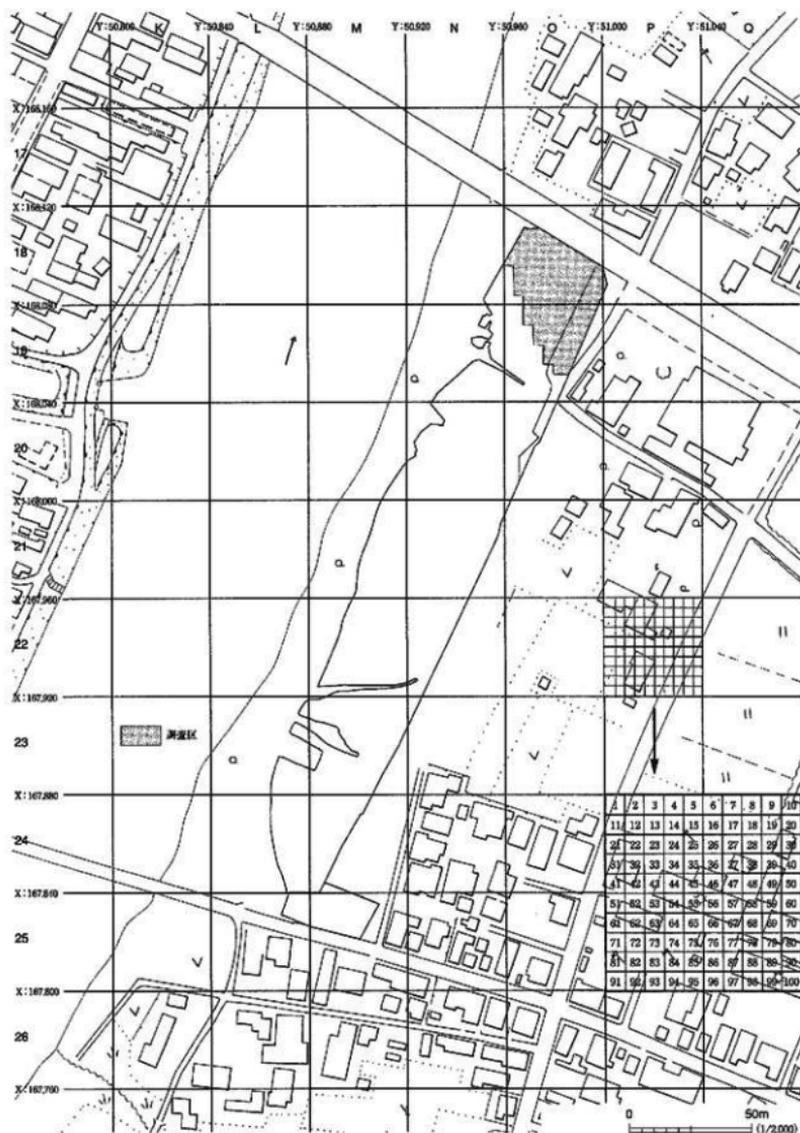


図1 北ノ脇遺跡4区グリッド配置図

第3節 概 要

今回の調査対象となった調査4区は、北ノ脇遺跡の南端に位置し、南側に接して高木遺跡9区が、昭代橋を挟んだ北側に北ノ脇遺跡5区が所在する。地形的には、自然堤防の後背湿地部と後背湿地に落ち込む緩斜面部にあたる。古墳時代、奈良・平安時代の調査区が自然堤防の平坦部だったのに比べ、縄文時代の地形は大きく変容している。後背湿地は砂が溝状に入り組んだ砂質土が厚く堆積し、古墳時代の自然堤防平坦部を形成していた。この砂質土は、ほとんど遺物を含まず、砂粒が細かな溝状の帯を成すことから、水性堆積により形成されたものと考えられ、阿武隈川の洪水に起因する堆積層と思われる。古墳時代と縄文時代の調査区の比高差は、後背湿地部で約3mを測る。

今回検出された遺構は、土坑1基と遺物包含層である。遺構の密度は極めて稀薄である。土坑は後背湿地に落ち込む西側の緩斜面部に位置する。土坑の所属時期については、出土遺物がないため特定できないが、検出状況から縄文時代中期後葉～後期初頭に所属するものと考えている。

遺物は、縄文土器・土製品約700点、弥生土器3点、石器類6点が出土した。これらの遺物は、ほぼ調査区の全体から出土しているが、特に調査区西側から中央にかけて比較的多まった出土状況にある。遺物包含層と層位の関係については、第2章第2節で述べる。

第4節 基本土層

本調査区の基本土層設定にあたっては、高木・北ノ脇遺跡が同じ自然堤防上に立地し、一連の遺跡である可能性が高いことから、先行して調査が行われた高木遺跡9区の基本土層に対応させ、両遺跡共通の層序を設定することとした。北ノ脇遺跡については、特に土層観察用のベルトは設定せずに、グリッド杭を柱層状に残し土層観察を行った。このため、北ノ脇遺跡4区の土層図は、高木・北ノ脇遺跡基本土層概念図(図2)で示した。

高木・北ノ脇遺跡の基本的な層序は、19層に細分できた。このうちLⅠ～LⅡにかけては、主に古墳時代あるいはそれ以降に形成された層であり、『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告2』にその詳細が述べられていることから、本節では色調などの表記に留めることとした。またLV1、LV2については、さらにa、bに基本土層を細分して報告したが、これらの層が確認できなかった地点もあったことなどから、遺物の報告にあたっては、LV1、LV2として出土層位を表記した。以下、各土層ごとに説明を行う。

LⅠは暗褐色土で、調査区全域に分布する現表土である。

LⅡ1は、明黄褐色砂質土を含む、黒褐色砂質土である。

LⅡ2は、a、bに細分でき、LⅡ2aはにぶい黄褐色砂質土、LⅡ2bはにぶい黄褐色土である。

LⅡ3は、にぶい黄褐色土である。基本的にこの層が古墳時代の遺物包含層をなす。

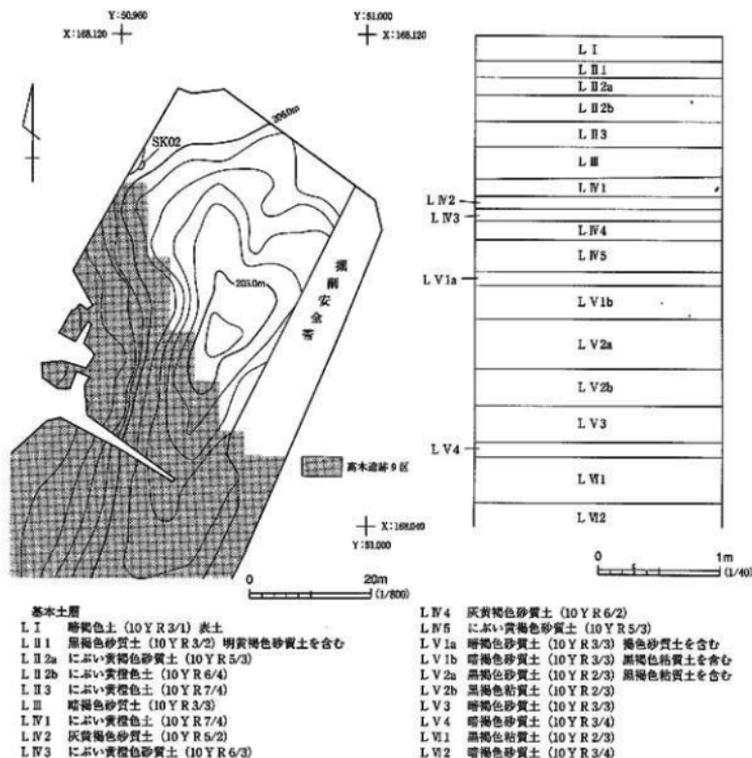


図2 北ノ脇遺跡4区遺構配置図・基本土層概念図

L IIIは、褐色砂質土である。古墳時代の遺構の多くがL III上面で検出されている。また、出土数は少ないものの、縄文時代後期末葉～弥生時代の遺物はL IIIから上位の層で確認されている。

L Nは、両遺跡の調査区全体に分布する。特に沢地形をなす、北ノ脇遺跡4区と高木遺跡9区南北の端に厚く堆積している。L Nについては、断面観察から以下の5層に分層したが、地形的要因で堆積状況が異なり、欠落する層位も認められた。また、基本的に遺物を含んでいなかったため、調査時には分層せず、これらの層をL Nとして取扱った。以下、L N 1～5について説明を行う。

L N 1は、におい黄褐色土、L N 2は灰黄褐色砂質土、L N 3はにおい黄褐色土砂質土、L N 4は灰黄褐色砂質土、L N 5はにおい黄褐色砂質土である。L Nについては、ほとんどの層に遺物が認められず、砂粒が層中に縞状の帯をなし堆積していることから、水性堆積により形成された堆積層と考えられ、阿武隈川の洪水に起因するものと思われる。

また、LVの形成時期については、北ノ脇遺跡5区で縄文時代晩期の住居跡が本層上面で確認されていることなどから、縄文時代晩期には既に形成されていたものと思われる。

LVについては、遺構検出面や遺物の包含状況から、4層に大別できた。LV1、LV2については、更にa、bに細分できたが、これらの層位が確認できない地点もあったため、調査時には分層せず、それぞれLV1、LV2として取扱った。このため、遺構・遺物の報告にあたっては、検出層位、出土層位についてLV1、LV2として表記した。以下、LV1～3について説明を行う。

LV1aは褐色砂質土を含む暗褐色砂質土で、主に高木遺跡の調査区に部分的に分布する土層である。層厚は、5～15cmを測る。

LV1bは黒褐色粘砂質土を含む暗褐色砂質土で、高木・北ノ脇遺跡の調査区内に幅広く分布する土層である。層厚は、20～60cmを測る。

LV1には、縄文時代前期末葉～後期前葉の遺物が含まれていた。中でもLV1bに相当する層から、遺物が出土する傾向にあり、後期初頭～前葉の遺物が主体をなしている。

形成時期については、高木遺跡9区で縄文時代後期初頭の遺構が、本層で構築されていることが確認されていることから、層中に縄文時代後期初頭の遺物を含むものの、既に縄文時代後期初頭には堆積が始まっていたものと思われる。

LV2aは黒褐色粘砂質土を含む黒褐色砂質土で、高木・北ノ脇遺跡の調査区内全体に幅広く分布する土層である。層厚は5～40cmを測る。

LV2bは黒褐色粘砂質土である。高木遺跡に部分的に分布する土層で、層厚は、30cmを測る。

LV2には、縄文時代前期末葉～後期初頭の遺物を含む。このうち、LV2aに相当する層が遺物包含層にあたり、LV2bにあたる層では、ほとんど遺物は認められなかった。本層では、縄文時代中期末葉を主体とした遺物が出土している。

次に、本層の形成時期について概観して見る。LV2aについては、高木遺跡9区の土層観察用のベルトで、縄文時代中期末葉の住居跡を覆うように本層が堆積していることが確認されている。また、同遺跡9区で、中期末葉～後期初頭の遺構もLV2a～bで検出されていることから、本層は、少なくとも中期末葉には堆積が開始された層と考えられる。

LV3は、暗褐色砂質土である。調査区全体に分布する土層で、層厚は10～40cmを測る。縄文時代前期末葉～中期末葉の遺物を含むが、出土量は少ない。

高木遺跡9区の土層観察用のベルトで、縄文時代中期末葉の住居跡が、本層位上面を掘り込んで構築されているのが確認された。これらのことから、本層位は縄文時代中期末葉には、既に形成されていたものと思われる。

LV4は、暗褐色砂質土である。高木遺跡9区に部分的に分布する土層で、層厚は10cmを測る。

LVは、高木遺跡9区・北ノ脇遺跡4区の基盤層である。本層は、LV1とLV2に分層可能であった。LV1は黒褐色粘質土、LV2は暗褐色砂質土である。いずれも無遺物層である。

(大河原)

第2章 遺構と遺物

第1節 土 坑

今回の調査によって、調査4区から検出された土坑は1基である。遺構の密度は、古墳時代に比べ稀薄である。これは、古墳時代の調査4区が自然堤防の平坦部だったのに比べ、縄文時代は自然堤防の後背湿地部にあたり、地形が大きく変化したことに起因すると思われる。

土坑の所属時期は、出土遺物がないため特定できないが、検出状況などから、縄文時代中期後葉～後期初頭の所産と思われる。以下、2号土坑について報告する。

2号土坑 SK02 (図3, 写真2)

本土坑は、調査区西側のO18-51に位置する。地形的には、自然堤防東側に形成された後背湿地へと続く緩斜面地に立地する。遺構は、LV3上面で暗褐色土の広がりとして検出した。重複する遺構はないが、土坑の西半分は攪乱を受け欠失している。土坑の堆積土は、炭化物粒を含んだ暗褐色砂質土1層で、堆積過程については判断できない。

土坑の平面形は、遺存状況から南北に長い不整楕円形を呈していたと思われる。規模は、遺存長で南北1.6m、東西0.7mを測る。遺存する壁は、比較的緩やかな角度で立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦に作られているが、細かな凹凸が認められ、西側に向かい緩やかに傾斜している。検出面から底面までの深さは15cmを測る。

本土坑から、遺物は出土しなかった。

本土坑の所属時期については、出土遺物がないため特定できないが、検出層位などから判断して、縄文時代中期後葉～後期初頭の所産と考えている。

(大河原)

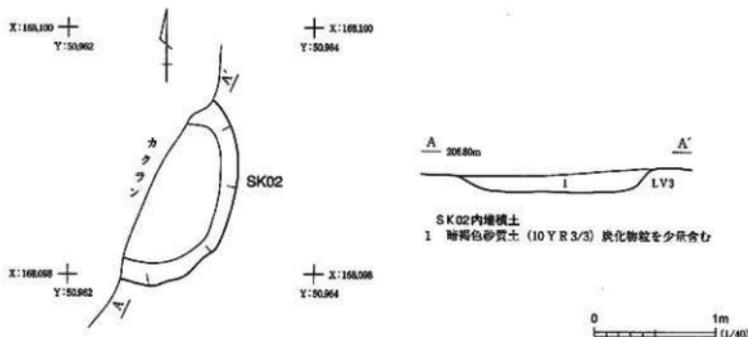


図3 2号土坑

第2節 遺構外出土遺物

北ノ脇遺跡4区の遺物包含層は基本的にLⅢ・LV1・LV2の3層である。出土遺物は、土器・土製品、石器・石製品などで、縄文時代中期後葉～後期前葉，晩期，弥生時代と各時期にわたって出土しているが，特に縄文時代中期末葉～後期前葉の遺物が主体を占める。

層序と分布(図4)

遺物包含層と基本層序の関係は、「第1章 第4節」で述べたとおりである。本調査区内では、LⅢ・LV1・LV2が遺物包含層に該当する。遺物の取り上げにあたっては、極力基本層位ごとに行ったが、地形的要因や洪水に起因する層位の乱れに対応できない地点もあったため、必ずしも遺物を層位的に取り上げることができなかった。

包含された遺物の分布状況を平面的に見ると、調査区北西側のO18-63・64・73・74・76・86・96・97グリッドから、比較的多く遺物が出土している。地形的には、後背湿地地帯に向けて落ち込む緩斜面部と後背湿地部にあたる。

本調査区の時期ごとの包含密度について見てみると、縄文時代後期初頭～前葉にかけて最も高く、次に縄文時代中期後葉～末葉となる。また、縄文時代晩期，弥生時代の遺物の包含密度は極めて低く、出土した遺物は数点程度である。

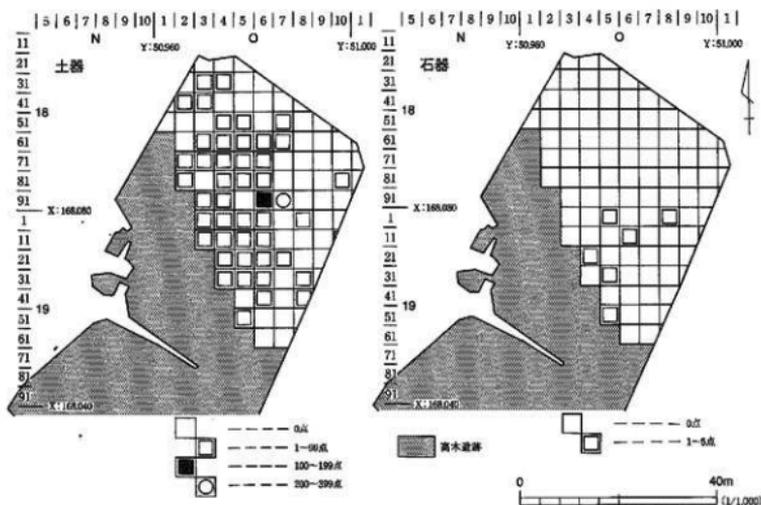


図4 グリッド別遺物出土点数

土 器 (図5～9, 写真3～6)

遺物包含層中から出土した土器は、縄文土器片約700点、弥生土器3点である。時期的には、縄文時代中期末葉～後期前葉の土器がほとんどを占める。記載にあたっては、第1編「序章 第5節」に示した分類に従って出土土器の特徴について、記述していく。

Ⅱ群土器 (図5, 写真3)

図5-1・4～10は、2類土器としたものである。1は口縁部、4～10は胴部の破片資料である。全体の器形や文様構成を知ることはできないが、4・7・8のような胴部に括れを持ち、やや太目の凹線で楕円区画文を施す深鉢形土器が多い。

図5-2・3・11～16は、3類土器としたものである。これらの土器の多くは、幅太の凹線で縁取られた縄文帯で文様を構成するものである。14には、「S」字状の単位文が施される。

図5-17は4類土器としたもので、底部付近の資料である。拓影では見にくいですが、器体には原体不明の斜行縄文が施文されている。Ⅱ群土器の色調は、黄褐色～褐色を呈したものが多く、焼成はいずれも良好で、胎土には砂粒や雲母が含まれる。

Ⅲ群土器 (図6～8, 写真4～6)

図6・7, 図8-1～15は、1類土器としたものである。図6-1～12・14～17は、いずれも口縁部と胴部を隆線や隆帯で区画するものである。全体の器形を知ることはできないが、その多くは口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、緩やかな波状口縁を呈した深鉢形土器である。また、隆帯上に刺突を加えるものや、隆帯を沈線で縁取るものも認められる。

図6-1～3は、隆線が口縁部に向かい「ノ」の字状に迫り上がっている。胴部には、地文の縄文のみが施される。図6-6～11・14～16は口縁下端に施された隆帯に対し、ほぼ垂直に「I」字状隆帯が施される。「I」字状隆帯は、両端に盲孔を持ち、中央に沈溝が施されるものが多い。胴部には縄文や条線文が施文され、これらの地文上に蛇行沈線や蕨手文などが施されるものも認められる。図6-18, 図7-13は、口縁部と胴部を沈線で区画するものである。図6-18の器形は、口縁部が緩やかに内折する深鉢形土器で、胴部には地文の縄文の他に、結節回転文が施されている。図7-13は、口縁部が「く」の字状に外反する深鉢形土器である。

図7-4・5は、筒状の突起が付された土器である。器形は、口縁部がやや内傾気味に立ち上がる深鉢形土器となる。4は、突起の頂部中央が浅く窪み、5は漏斗状を呈している。また、5の突起外面には、2本の隆線が施される。

図7-6～12は、口縁部が「く」の字状に内折する土器である。破片資料のため全体の器形を知ることはできないが、6のような緩やかに外傾しながら口縁部が立ち上がるものと、10のように胴部中央が大きく括れ、口縁部に向かい外傾しながら立ち上がるものが認められる。これらの資料は、いずれも波状口縁を呈し、波頂部に突起を有し、突起から胴部にかけて隆帯を垂下させるものが多い。口縁部突起の加飾には、6のように両端に盲孔を有し、中央に沈溝を持つ隆帯を括弧状に施す

ものや、8・9の「C」字に縁取った沈溝の中央が穿孔されるもの、10の突起頂部に「8」の字状の加飾を施すものが認められる。また、肥大した口縁端部に沈線と盲孔を施し、文様帯を作り出すものも認められる。

図6-13・19、図7-1~3・14、図8-1~4は先述した土器群に伴う胴部資料である。文様には地文の縄文上に沈線で文様を描くものと、文様帯内を磨消すものが認められる。

これらの土器の色調は、黄橙色~褐色を呈しているものが多い。焼成は、いずれも良好で堅緻である。胎土には砂粒や雲母が含まれる。

図8-5~10は、刺突文で主文様を構成する土器である。器形を見ると、5~7の浅鉢形土器、8・10の深鉢形土器、9の蓋などが認められる。浅鉢形土器の多くは、口縁部と体部の括れにキャタピラ状の連続刺突が施される。また、体部には、6・7の浅めの集合沈線を地文にするものと、5のように縄文を施文するものが認められる。

深鉢形土器は10のように、口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部が膨らむ器形となる。口縁部と胴部の境には、刺突が施された隆帯が施される。胴部は、キャタピラ状と列点状の刺突文に縁取られた区画内に刺突文を充填している。また、コブ状の隆帯を部分的に貼り付けている。

図8-11は注口土器で、注口上部に隆帯で括弧状の加飾、下部には刺突が施される。図8-12~15は把手の破片資料である。これらは、14のように、口縁部下端の相対した部分に橋状に付されていたと思われ、器形的には両耳壺になる。また、14のように把手を囲むように隆帯を施すものや、12のように円形刺突文とキザミが施された把手も認められる。これらの土器の胎土には、砂粒や雲母が含まれる。色調は、にぶい黄橙色~黒褐色を呈し、焼成は堅いものが多いが、12の色調は灰白色を呈し、焼成はやや軟質で他のものと比べ異質である。

図8-16~20は、4類土器としたものである。同図17・18には斜行縄文、同図16・19には櫛歯状工具による条線文が施される。同図20は、やや上げ底気味の底部資料である。これらの土器の色調は、褐色~にぶい黄橙色を呈している。焼成は良好で堅く、胎土には砂粒や雲母が含まれる。

Ⅳ群土器(図9、写真6)

図9-1~4は、Ⅳ群土器としたものである。同図1・4は、口縁部がやや内湾して立ち上がる深鉢形土器である。1には網目状燃糸文、4には燃糸文が施される。同図2・3は、鉢形あるいは浅鉢形土器になるものと思われる。2は平行沈線間に列点文、3は三叉文が施される。土器の色調は褐色系統のものが多く、焼成は良好で、いずれも堅緻である。胎土には、砂粒や雲母が少量含まれる。

Ⅴ群土器(図9、写真6)

図9-5~7は、Ⅴ群土器としたものである。破片資料であるため、全体の器形や文様を知ることができないが、器形的には壺形の土器になると思われる。

いずれも、沈線で渦巻状の文様が施される。文様の特徴などから、弥生時代中期に属す資料と思われる。

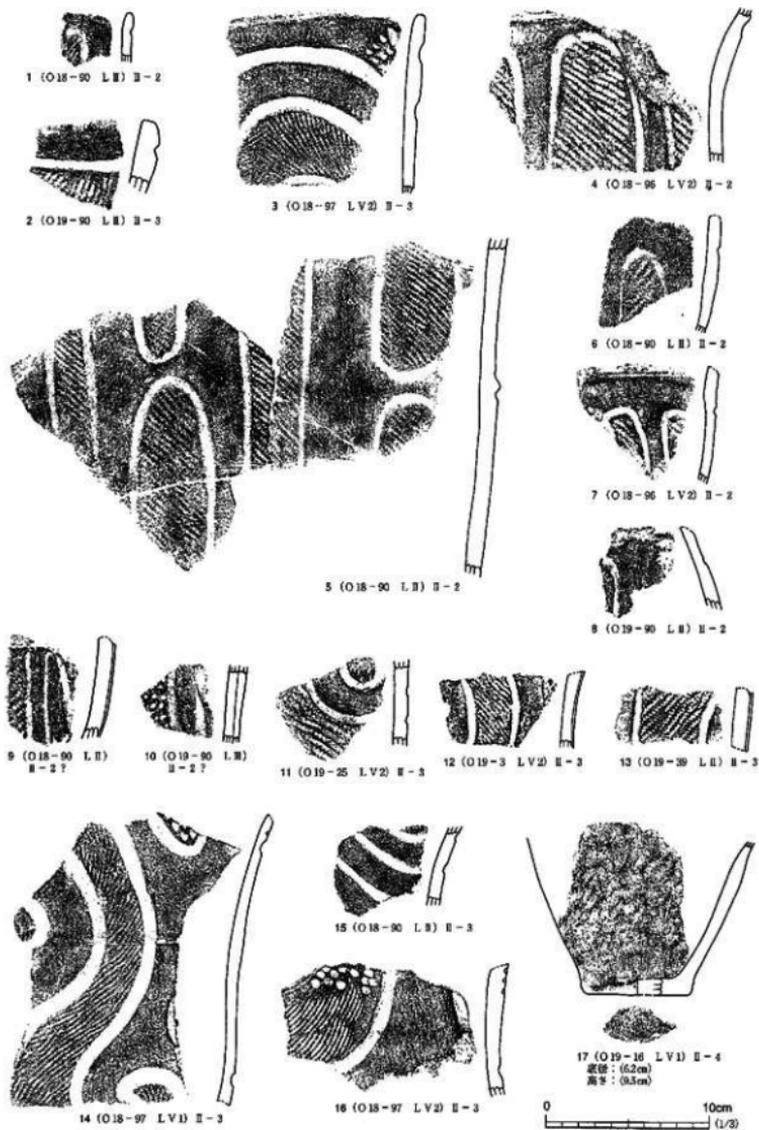


図5 遺構外出土遺物 (1)

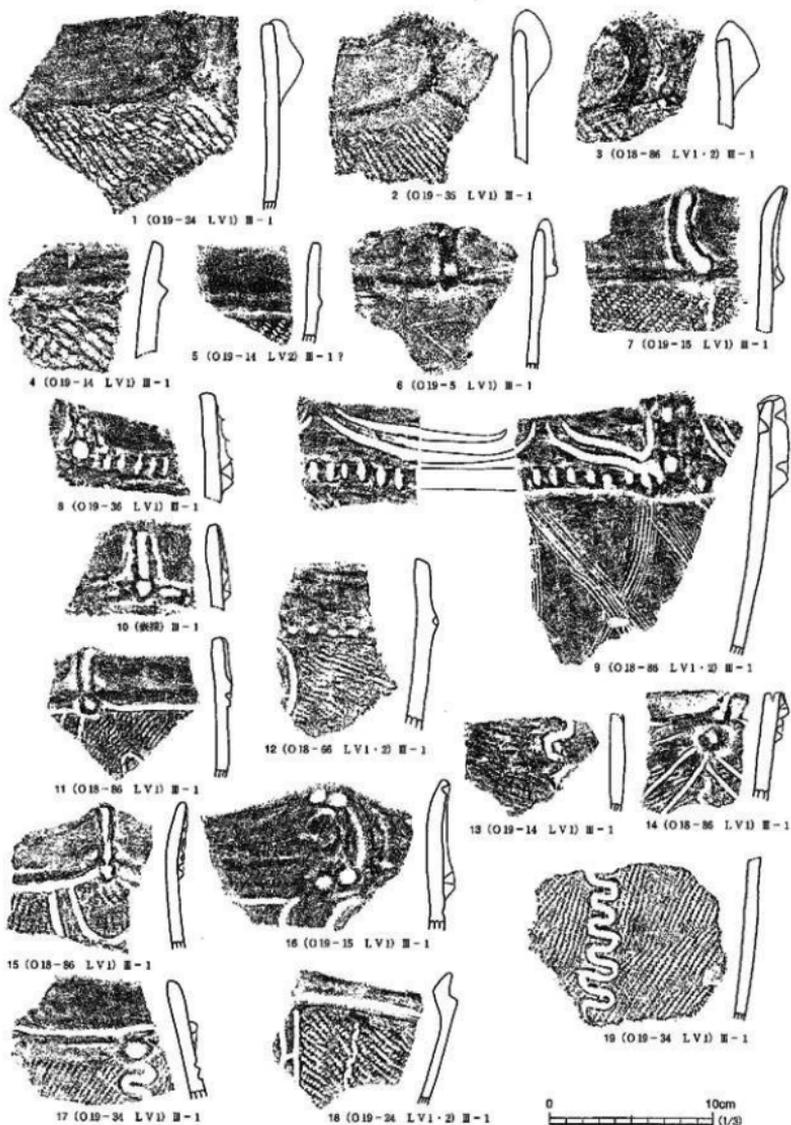


図6 遺構外出土遺物(2)

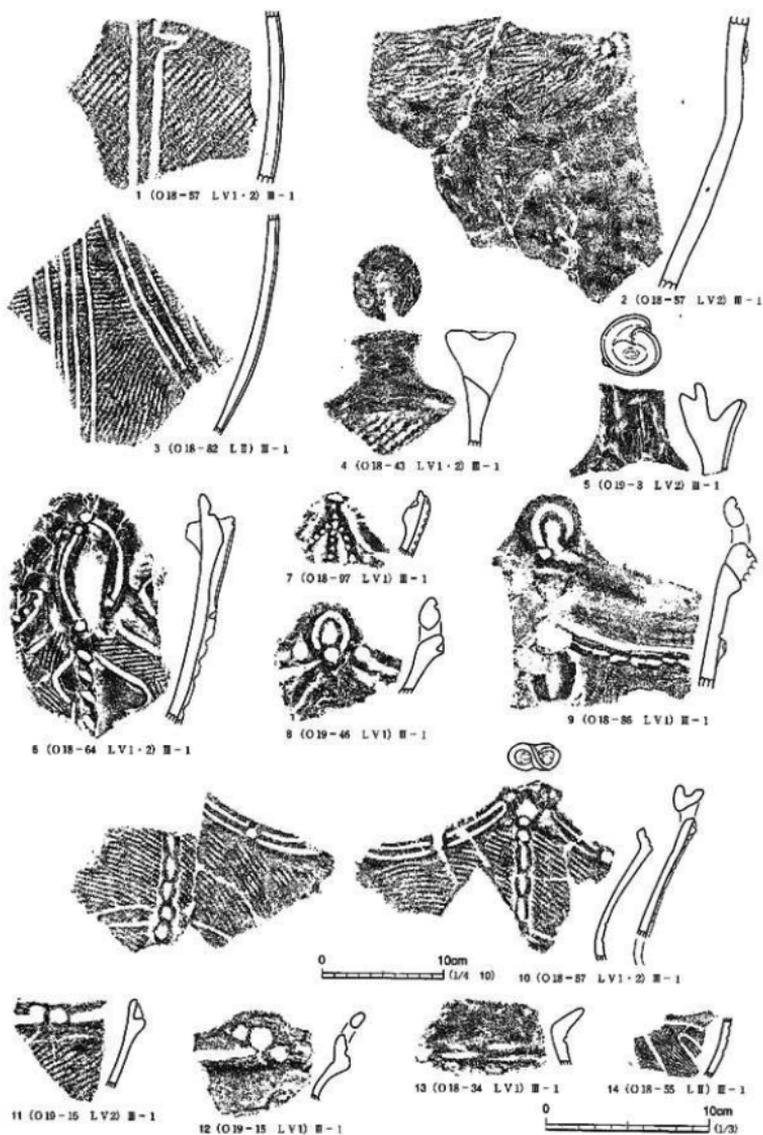


図7 遺構外出土遺物 (3)

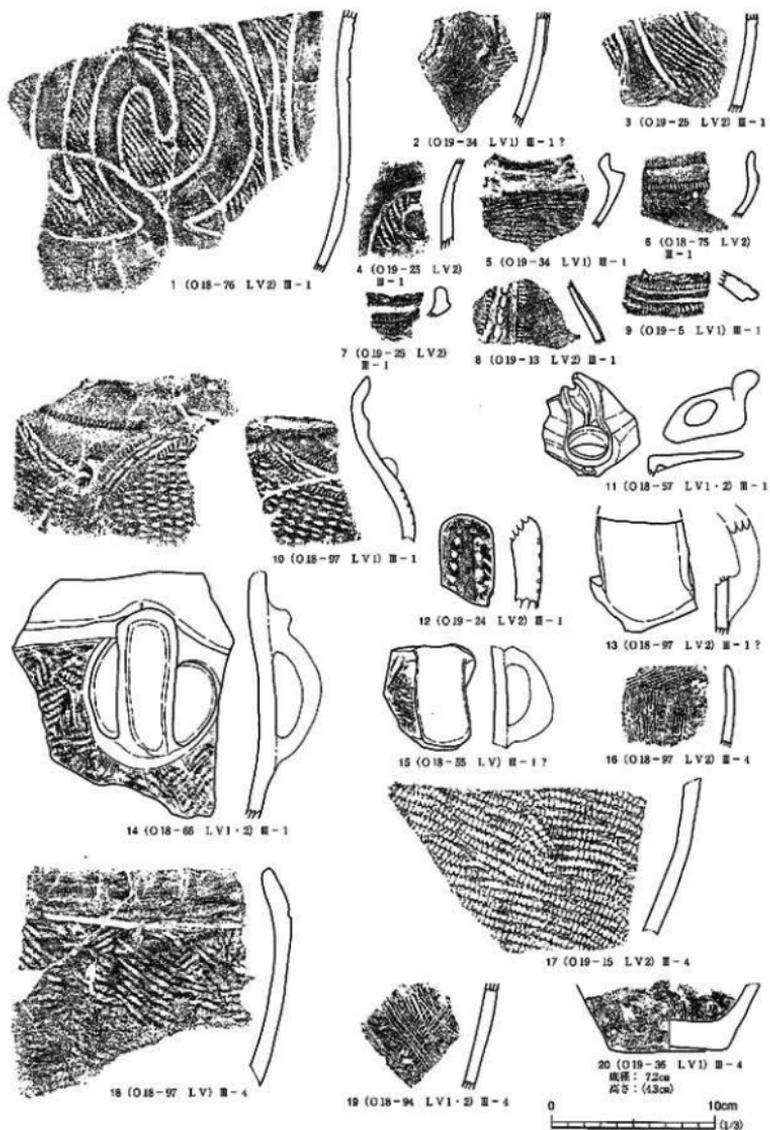


図8 遺構外出土遺物(4)

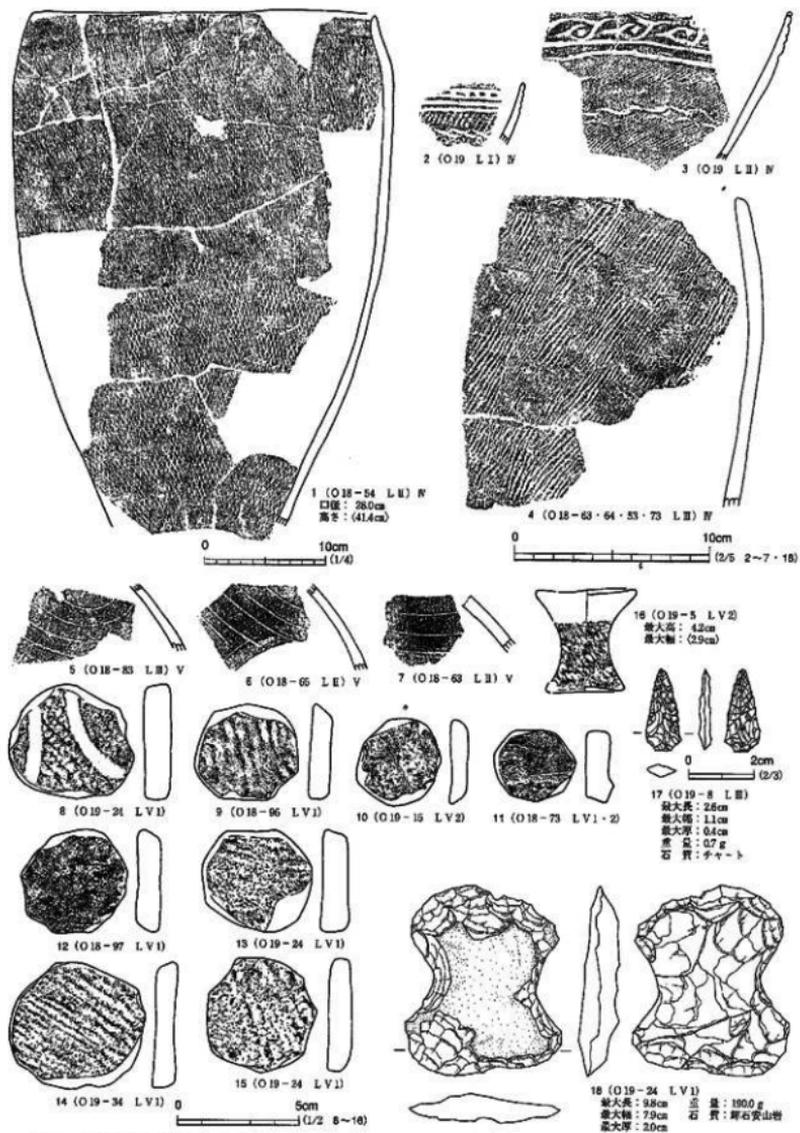


図9 遺構外出土遺物(5)

土製品 (図9, 写真7)

図9-8~16は土製品としたものである。同図8~15は円盤形土製品である。土器片の縁片を打ち欠き、円盤形に整えている。整形後、縁辺部には研磨などによる仕上げは施されていない。同図16は耳栓である。器体には斜行縄文が施される。

石器・石製品 (図9・10, 写真8)

遺物包含層から出土した石器類は、6点である。内訳は石鏃1点、打製石斧1点、凹石3点、石棒1点である。

石鏃 (図9)

図9-17は、石鏃と分類したもので、二等辺三角形を呈した有茎鏃である。両面から細かい連続した剥離調整を加え、比較的丁寧に作っている。

打製石斧 (図9)

図9-18は、打製石斧と分類したもので、形状は分銅形を呈している。形状を整えるための剥離調整は比較的粗く、器体中央に自然面を大きく残している。

凹石 (図10, 写真8)

図10-1~3は、凹石と分類したものである。いずれも素材稜の中央に、敲打による凹部が形成される。また、周縁に敲打痕が認められる。

石棒 (図10, 写真8)

図10-4は、石棒として分類したものである。頭部は、三角形状に作り出されている。また、頭部の背面には敲打痕が認められる。

(大河原)

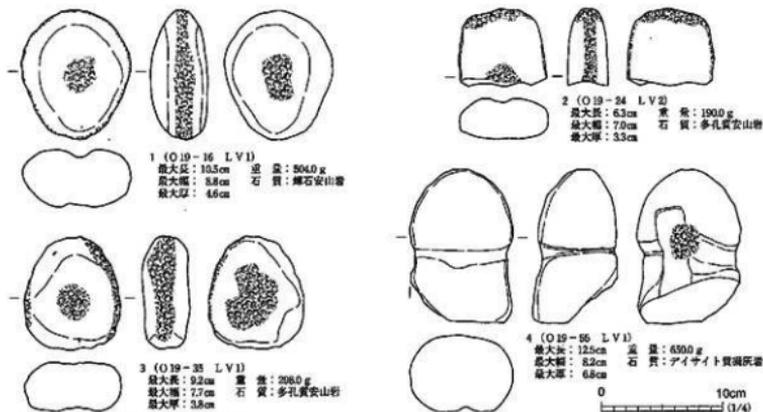


図10 遺構外出土遺物 (6)

第3編 ま と め

第1章 縄文時代の遺物について

第1節 土器

高木遺跡9区からは、縄文時代前期末葉～弥生時代後期の土器が出土しているが、特に縄文時代中期後葉～後期前葉の土器が主体を占めている。これらの土器は、当該期の遺構に伴うものも多く、当地域における縄文時代中期後葉～後期前葉の土器を考える上で貴重な資料と言える。

本節では、高木遺跡9区の主体を占める縄文時代中期後葉～後期前葉の土器について、遺構の重複関係や出土状況（出土層位）をもとに、遺構内出土土器を中心に土器の推移について考えてみたい。なお、図1～6には、本遺跡出土の縄文時代中期後葉～後期前葉土器の主な資料を、また、図7～10には、類例として周辺地域の土器を併せて集成した。

Ⅱ群2類土器（図1）

縄文時代中期後葉大木9式期に比定される土器である。遺構の重複関係や出土状況、施文される文様の特徴などから（1）・（2）に区分した。

本遺跡におけるⅡ群2・3類の区分、編年観については、細分方法に相違はあるものの、榎鈴鹿良一氏（鈴鹿1984）に従ったものである。

Ⅱ群2類土器（1）（図1-1～12）

本段階に認められる基本的な器種は、深鉢形土器と浅鉢形土器である。深鉢形土器の器形には、キャリパー状を呈したものが多く、浅鉢形土器の器形には、9のような口縁部が内湾するものが認められる。また、口縁部には、紐掛け用の突起が付される。

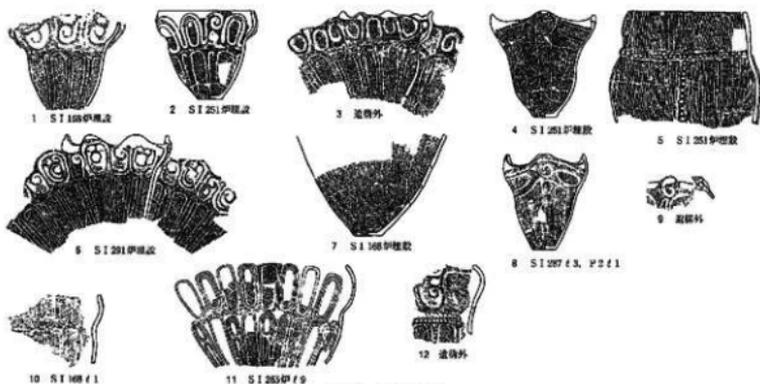
次に、本段階に抽出した土器の層位について確認する。2・4・5は、251号住居跡複式炉埋設土器である。炉の作り替えが行われている事から、炉埋設土器にも、新旧があると想定できるが、住居跡が機能していた時期に作り替えが行われていることから、炉に新旧はあるものの、土器自体は、当地域において、ほぼ同一式内に位置付くものと考えている。

埋設された土器を概観すると、2は大木9式期の土器、4は関東的な曾利EⅢ式、5は曾利系の土器である。これらの土器が、複式炉の埋設土器とはいえ、ほぼ同一時期に当地域で共存している事は興味深い。

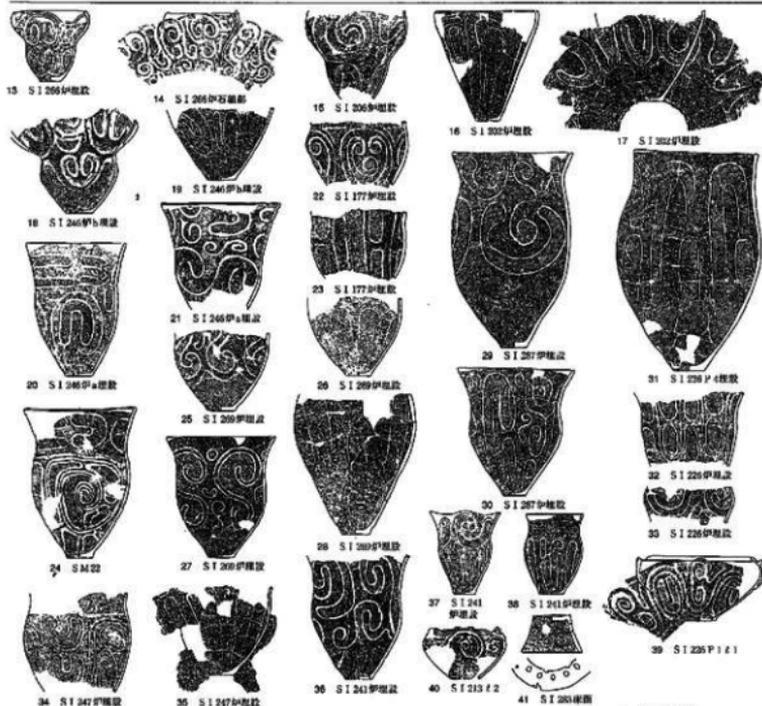
5に類似する曾利系の土器は、玉川村堂平B遺跡や、未報告ではあるが当事業団で調査を行った楢葉町馬場前遺跡、富岡町前山A遺跡などから出土しており、浜通りおよび中通り南部から出土する傾向にある。また、栃木県西那須野町槻沢遺跡からは、本遺跡Ⅱ群2類（2）に比定される土器と共存している。（海老原1980・後藤1996）

1・7は、168号住居跡複式炉埋設土器で、炉の堆積土中から10が出土している。10と類似する11は、265号住居跡複式炉石組部底面から出土している。265号住居跡は、243・266号住居跡に切ら

第3編 まとめ



Ⅱ群 2類 (1)



Ⅱ群 2類 (2)

集 波 = 伊集波
伊集波 = 伊集波十器 S = 1/15

図1 土器集成 (1)

れている。6は、291号住居跡複式炉埋設土器で、247・287号住居跡に切られている。8は、287号住居跡のピット上層から出土している。

本段階の土器は、1～3・6・12のように、口縁部の主文様に幅の広い凹線状の沈線や隆線で浮刻的な渦巻文と楕円文を描き、胴部文様に縦長の「 \cap 」形の区画文と獣手状の沈線を施すものが多い。1については、2・3・6が幅の広い凹線状の沈線で口縁部の文様を描出しているのに対し、隆線の手法で描出している点で異なる。

また、本段階には、10・11のように、口縁部に楕円文、胴部文様に楕円文や縦長の「 \cap 」形の区画文を描き、これらの文様を交互に楕円文で区画している土器も認められる。これらの土器は、168号住居跡の層位の事例においては、炉埋設土器と炉堆積土出土といった時間幅を持つが、文様手法を見ると、1～3・6に近い凹線状の沈線で描出されている。10・11とⅡ群2類土器(2)とは、265号住居跡と266・243号住居跡の重複関係や重複する遺物の文様手法の相違などから、時間差を持つものと考えられ、10・11を本段階に含めた。

8は、4と同じ加曾利EⅢ式と思われるが、出土状況や文様のモチーフに4とは異なる点が認められ、4と8の間に時間差がある可能性も考えられる。また、168号住居跡の複式炉埋設土器の共伴事例から、7のような土器もこの段階に認められる。

Ⅱ群2類土器(1)の時期については、器形や文様の特長などから、大木9式期の中でも比較的古い様相を示す土器群と考えている。

Ⅱ群2類土器(2) (図1-13~41)

本段階の器種には、深鉢形土器や浅鉢形土器、器台などの他、図中には示さなかったが、注口土器や有孔罎付土器なども認められる。深鉢形土器の器形には、キャリパー状を呈すもの、胴部中央～上半で括れ、口縁部に向かい緩やかに外傾するもの、底部から口縁部まで直線的に立ち上がるもの、胴部下半から中央にかけて最大径を持つもの、胴部が球体状を呈し、緩やかに外反しながら口縁部が立ち上がるものが認められる。浅鉢形土器では、口縁部が内湾するものが多く、前段階に認められた紐掛け用の突起が口縁部に付くものもある。

次に、本段階における土器の出土状況について概観する。13は、266号住居跡複式炉埋設土器、14は、同住居跡の複式炉石組部に倒立状態で置かれていた。出土状況から、14は住居廃絶時に石組部に置かれたものと考えられ、住居機能時に用いられたものと思われる。15は、206号住居跡複式炉埋設土器に用いられていた。206号住居跡(15)と177号住居跡(22・23)は重複関係にあり、新旧関係では206号住居跡が古い。16・17は202号住居跡、29・30は287号住居跡、34・35は247号住居跡、36～38は241号住居跡の複式炉埋設土器として共伴している。18～21は、246号住居跡の複式炉埋設土器である。炉跡は作り替えが行なわれ、旧炉には18・19、新炉には20・21が埋設されていた。炉跡は、中軸線を変えて作り直されているが、住居跡が機能していた時期に作り替えが行われていることから、炉に埋設された時間差はあるものの、18～21については、ほぼ同一形式内に位置付くものと考えている。

25～28は、269号住居跡の複式炉埋設土器である。269号住居跡複式炉は、使用していた炉埋設土器が古くなったためか、新たに土器を入れ子状に設置していた。(図17参照)当初埋設土器として使用されていたのは、26・28である。その後、26内に25が、28内に27が入れ子状に埋設されている。31～33・39は、266号住居跡出土土器である。31は住居内埋設土器、32・33は複式炉埋設土器、39はP1出土土器である。これらの事例についても、炉に埋設された時間差や炉埋設土器とピット出土土器といった時間差はあるものの、住居跡が機能していた時期の所産と考えられることから、ほぼ同一型式内に位置付くものと考えられる。

本段階に抽出した土器の出土状況を見ると、246・269号住居跡のように1つの住居跡において時間差を持つもの、206号住居跡や177号住居跡のような遺構同士が重複関係にあるものが認められる。これらの土器は、器形や文様のモチーフに相違はあるものの、文様を描出する手法は凹線状の沈線や稜沈線で行なわれており、違いは認められない。これらのことから、本段階に抽出した土器が出土した遺構の重複関係については、ほぼ同一型式内における重複と考えられ、これらの土器はほぼ同一型式内の時間幅で位置付けられるものと考えている。

本段階の文様や手法を見ると、上下に個別の文様を配すもの、口縁部から胴部にかけて文様を描出するものが多い。器形がキャリパー状を呈し、口縁部に双頭渦巻文や渦巻文を配し、胴部に個別の文様を施す13～15・18などは、前段階(1～3・6)の系譜上にあるものと考えられる。これらの土器を前段階と比較すると、14・18に施された双頭渦巻文などは、稜沈線に近い手法で描かれており、前段階の幅の広い凹線や隆線で浮刻的に文様を描出している点とは異なる。本段階で多用される双頭渦巻文は、郡山市北向遺跡90号土坑出土の浅鉢形土器のように、大木10式古段階まで継統して用いられる。

さて、本段階に抽出した土器の中には、226号住居跡(31～33・39)、246号住居跡(18～21)、269号住居跡(25～28)のように、大木9式期と大木10式期の土器が共存する事例が認められる。大木10式期の土器とは、18・25・33・39のような、胴部中に区画線を有する土器(丹羽1981)である。このような事例は、天栄村深沢A遺跡3号住居跡(図7)においても認められる。深沢A遺跡3号住居跡の事例では、旧炉に大木10式古段階、新炉に大木9式新段階の土器が埋設されているが、同一住居跡の炉の作り替えによるものであることから、時間差はあまりなく、本遺跡同様に、ほぼ同一型式内に収まるものと考えられる。

また、層的事例としては、宮城県七ヶ宿町大梁川遺跡第Ⅲa～b層の例がある。大梁川遺跡第Ⅲa～b層は、大木9式期後半段階の包含層で、本層から胴部下半に区画線を有する土器が少量出土している。この土器は、大木10式期前半の包含層第Ⅱc～d層からa～b層に向かい増加する傾向にあると報告されている。本遺跡においても、胴部下半に区画線を有する土器は、大木10式期に多用され、実際本群に後続するⅡ群3類土器の主体を占めている。

本段階に抽出したこれらの土器と、Ⅱ群3類土器としたものを手法的に見てみると、いずれも再調整された凹線状の沈線や稜沈線で文様を描出しており、手法に顕著な差異は認められない。しか

し、21のように単位文が閉じずに開放してしまい、縄文施文部と無文部との区画が、Ⅱ群3類土器(1)と比べて、明瞭ではないものも認められる。また、20のように、楕円文で単位文を区画するものや、32・39のように文様間を縫うように、凹線が巡らされる土器などと共存する傾向にある。楕円文で文様を区画する手法は前段階にも認められることから、比較的古い要素と思われる。(凹線が文様間を縫うように巡らされる土器については、大木10式古段階にも認められ、この手法が古い要素になるとはいい難い。)胴部中位ないし下半と胴部上半部の文様を区画するといった手法は、22・27・31に見られる胴部下半の縄文施文部の上半を磨消すといった手法を、より明瞭化したものと思われる。これらの手法については、前段階の7などを見ると、底部付近まで縄文が施文されていることから、後出的な手法と考えられよう。

ここで再度、本遺跡における、胴部中位ないし下半に区画線を有する土器の出土状況を整理してみる。出土状況には、226・246・269号住居跡のように、複式炉埋設土器として本段階の土器と共存するもの、Ⅱ群3類土器(1)で後述するが、179・241号住居跡のように本段階の土器を複式炉埋設土器に持ち、床面から出土するもの、本段階の土器を複式炉埋設土器に持ち、堆積土内から出土するもの、複式炉に単独で埋設土器として用いられるもの、本段階の遺構と重複関係にあるものが認められ、本段階の土器よりも上位で出土する傾向が強い。また、本段階で抽出した土器よりも、個々の単位文が明確に描出され、縄文施文部と無文部との区画が明瞭である。本段階の胴部中位に区画線を有する土器については、39のような古い要素を含むものや、21のように単位文の縄文施文部と無文部との区画が明瞭ではないものを主に抽出している。25・33については、層的な事例から本段階に含めた。

本遺跡のこのような事例は、相原淳一氏が指摘されるように「大木10式成立の1つのメルクマークとされる胴中位区画線は、時期区分の重要な指標となっても、単にその有無をもって時期区分を行なうことはできない」ことを物語っている。

本遺跡におけるⅡ群2類土器(2)の時的的な位置付けについては、大木9式期新段階～大木10式期古段階の過渡期の土器(柳澤清一氏は、この段階を「上原式」と提唱されている。柳澤1980)も含むものの、概ね大木9式期新段階の土器として捉えておきたい。24に示した22号土器埋設遺構の埋設土器などもこの時期における顕著な所産であろう。(二本松市塩沢上原遺跡第Ⅰ区第15号住居跡複式炉埋設土器も本段階に相当すると考えられるが、隆線手法を見ると24より後出的と思われる。)

Ⅱ群3類土器(図2・3)

Ⅱ群3類土器は、縄文時代中期末葉大木10式期に比定される土器である。遺構の重複関係や出土状況などから(1)～(3)に区分した。

Ⅱ群3類土器(1)(図2-42～72)

本段階の器種構成や器形は、前段階と基本的には変わりはないが、注口土器を見ると、67・68の瓢箪形を呈した深鉢形土器と70のような浅鉢形土器の2つの器形とがある。66の有孔鏝付土器なども、瓢箪形の深鉢形土器である。器台は、前段階では体部に5個小窓状の孔を有していたのに対し、

本段階の器台の孔は2個である。

次に、本段階に抽出した土器の層的事例を確認する。42は、179号住居跡の床面から出土している。複式炉には、前段階の土器が埋設されている。43・44・70は、241号住居跡出土土器である。43はピット内堆積土、44は堆積土下層、70は堆積土中層Ⅱ3から出土している。複式炉埋設土器は、前段階の土器として抽出した36～38である。ピット内から出土した43と堆積土下層から出土した44は、胴部上半のモチーフこそ違ふものの、器形や文様を描出する手法などに変化は認められない。

52は、17号土器埋設遺構の埋設土器である。前段階の土器を複式炉埋設土器に持つ208号住居跡



図2 土器集成(2)

Ⅱ群3類(1)

Ⅱ群 Ⅱ-Ⅱ上層
伊能段・伊能段土器 S=1/15

を切って構築されている。このような、重複事例は、この他に54・62が認められる。58は、前段階の土器を複式炉埋設土器に持つ283号住居跡の堆積土から出土している。59・60は254号住居跡、63・64は245号住居跡の床面から出土している。61は、279号住居跡複式炉埋設土器である。床面からは、Ⅱ群3類(2)に分類した75・77が床面から出土している。

本段階に抽出した土器の特徴については、先述したように、胴部中位ないし下半に区画線を有するものである。これらの土器は、区画線を境に胴部下半に縄文部、胴部上半に大型の単位文(アルファベット文)を配すものが多い。中には45のように、胴部下半に区画線を配し、口縁部と胴部に個別の単位文を配すものも認められる。文様を描出する手法は、再調整が施される凹線状の沈線で描くものと隆線で描くものがある。本段階に認められる土器は、沈線、隆線といった文様を描出する手法の相違はあるものの、いずれもこれらの手法により区画された縄文帯で文様を描出するものであり、同一型式内に位置付くものと思われる。

58は、口縁部と胴部に2本隆線で個別の文様を描く。このような土器は、加曾利EⅢ～EⅣ式期に認められる土器(石崎・藤巻・桜岡1988)である。口縁部には、大型の高巻文が施される。隆線の両側には、幅広のナゾリが施され、浅い沈線状を呈している。前段階に抽出した、24も2本隆線で文様を描くが、高巻文が本段階の58に比べ明瞭で、隆線の両側に施されるナゾリも比較的凹線状に近い沈線を呈している。58に施された文様の手法は、前段階の手法を簡略化したものであり、後出的なものと言える。県内では、図7に示した深沢A遺跡1号住居跡(床面出土の土器は、本段階よりも前段階に近いように思われる。)や、北向遺跡22号住居跡に類例が認められる。

59はキャリパー状の器形を呈し、口縁部と胴部に個別の文様を持つ。器形や口縁部のモチーフなどは、8にみられる踏踏を求めることができよう。64・69は福島雅儀氏(福島1986)によって提唱された、「牛蛭式」(連接長楕円文土器)に比定される。牛蛭式については、福島氏を始め本間宏氏(本間1990)、志賀敏行氏(志賀1992)により、その成立や位置付けについての論説がなされている。本間氏は、牛蛭式の口縁部に描出される連接長楕円文の発生に、59の口縁部に施された文様帯(所謂「びわ首沢式」)が影響を与えたと考えられている。

牛蛭式成立の時間的な位置付けについては、今のところ、大木10式古段階に遡る考えと、それ以降に位置付く考えとに分かれている。本遺跡では、同一住居跡の床面から出土している63と64、胴部に再調整が施された凹線で区画された縄文帯で単位文が施される69の事例から、64・69を本段階に抽出した。しかし、63・64が出土した245号住居跡の複式炉の特徴から、これらは、本段階でも比較的新しい時期にあたるものと考えている。また、大木10式期における牛蛭式土器の主な共伴事例としては、会津高田町十五壇遺跡第4調査区4号住居跡や天栄村桑名邸遺跡4号住居跡(図7)、船引町堂平遺跡4号住居跡、北向遺跡17号住居跡(図7)などが認められる。

61は、279号住居跡複式炉埋設土器である。口縁部から胴部下半に大型の「S」字状の単位文を配す。文様は、再調整が施された沈線で区画された縄文帯によって、文様を描出するものであり、本段階に抽出した土器と同じである。しかし、床面からは、Ⅱ群3類(2)に分類した75・77が出土

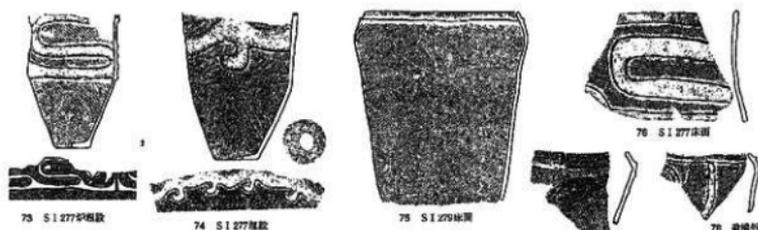
している。本段階に抽出した土器の多くが、凹線や隆線で縁取られた縄文帯で文様が描出されているのに対し、77は隆線で縁取りされた無文帯で、文様が表現されている。

本段階に抽出した63とⅡ群3類(2)とした76を比較すると、これらの土器は同じように、口縁部に「Y」字状の文様を横位に描くが、本段階63が縄文帯を意識して描かれているのに対し、76は縄文部の幅よりもむしろ無文部の幅を意識して描出され、縄文部から無文部へ文様の置換が認められる。279号住居跡複式炉埋設土器(61)と床面出土(75・77)の層位的事例は、縄文帯→無文帯へ文様描出の置換が認められる点などから、時間差を持つものと考えたい。

Ⅱ群3類土器(1)については、文様の特長などから、大木10式期の中でも古い様相を示すものと思われる。また、42～57の土器と61・62の土器については、共伴する土器や複式炉の形態の相違などから、同じ形式の中でも時間差を持つものと考えている。

Ⅱ群3類土器(2) (図3-73～78)

本段階の器種は、資料数が少ないため深鉢形土器のみの抽出となってしまったが、基本的には、浅鉢形土器や注口土器などが伴うものと考えている。器形は、前段階で認められた器形の他に、75



Ⅱ群3類(2)



Ⅱ群3類(3)

注 設一層位土器
炉埋設一炉埋設土器 S=1/12

図3 土器集成(3)

のような胴部下半から胴部上半にかけて、やや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部が内傾する大型の深鉢形土器も認められる。本段階に抽出した土器は、隆線区画による無文帯によって、文様が描出している。

Ⅱ群3類土器(3) (図3-79~95)

資料数が少ないため、本段階に抽出した土器は、深鉢形土器と浅鉢形土器である。基本的には、これらに、注口土器などが加わるものと思われる。また、北向遺跡などを見ると両耳壺などもこの時期の器種組成に含まれそうである。

深鉢形土器の器形には、従来の器形の他に、88のような胴部下半が大きく膨らむものなどが認められる。また、浅鉢形土器では、口縁部が緩やかに外傾する器形も認められ、口縁部に捻転状の中空突起が付される。

本遺跡において、本段階の土器の良好な層位的事例は認められないが、北向遺跡17号住居跡の複式炉埋設土器と堆積土出土遺物の事例(図7)などから、本遺跡Ⅱ群3類土器(1)よりも新しく位置付けられる。また、船引町後田遺跡18号住居跡(図8)の複式炉埋設土器のように、隆線と沈線の違いはあるものの、沈線区画による無文帯同士の切り合いを持つ土器と、同遺跡19号竪穴住居跡(図7)との重複関係も北向遺跡と同様の層位的事例を示している。この他、本段階の良好な資料として、図8に示した大玉村台田遺跡6号住居跡、飯館村上ノ台A遺跡24・69号住居跡、福島市愛宕原1号住居跡などがあげられる。

本段階の文様を見ると、前段階と同じ隆線区画による無文帯によって文様を描くが、本段階に抽出した土器は無文帯同士に切り合いが認められる。また、85・93のように隆線に沿って沈線が施されるものもある。本段階には、82~84のような、胴部に三角文や楕円文を配す土器も抽出した。これらの土器は、加曾利EⅢ式に比定される土器と思われる。前段階に抽出した78もその可能性がある。本遺跡では、層位的に良好な共件事例は認められなかったが、北向遺跡17号住居跡、後田遺跡15・18号住居跡の事例などから、本段階に相当するものと考えている。

この他、94・95(同一個体)の土器も本段階に含めた。この土器は、85・93の隆線に沿って施される無調整の細沈線で方形の文様を描くものである。図8に示した上ノ台A遺跡24号住居跡の複式炉2号埋設土器のような胴部文様帯(無調整の沈線で文様を描出)の系譜上にあると思われる。本遺跡においては、94・95のような資料は出土数が最も少なく、良好な共件事例も認められないことから、本段階に含むべきか判断し難い。

Ⅱ群3類土器(2)・(3)の位置付けについては、文様の描出手法や周辺の遺跡の層位的事例などから、Ⅱ群3類土器(1)よりも新しい所産と判断でき、大木10式期の中でも新しい様相を示す資料と考えている。

Ⅲ群1類土器(図4~6)

縄文時代後期初頭~前葉に比定される土器である。遺構の重複関係や出土状況、施文される文様の特徴などから(1)~(4)に区分した。本群に抽出した土器の大半は、石罌炉を持つ竪穴住居跡お

よび敷石住居跡から出土したものである。これらは、Ⅱ群2・3類土器が出土する複式炉を持つ竈穴住居跡の堆積土上ないし堆積土を掘り込んで構築しており、本段階の土器として抽出した特徴を持つ土器は、Ⅱ群土器よりも新しく位置付けられる。また、Ⅲ群1類土器(1)と(2)については、Ⅲ群1類土器(2)と抽出した172号住居内埋設土器に持つ152号住居跡の下から、Ⅲ群1類土器(1)の土器が床面から出土した260号住居跡(図13参照)が検出されており、Ⅲ群1類土器(1)がⅢ群1類土器(2)に先行するものと考えられる。これらの層的事例は、本遺跡とほぼ同様な集落変遷が認められる三春町越田和遺跡においても確認されており、時間的にはⅢ群1類土器(1)→Ⅲ群1類土器(2)への推移が迎えられる。

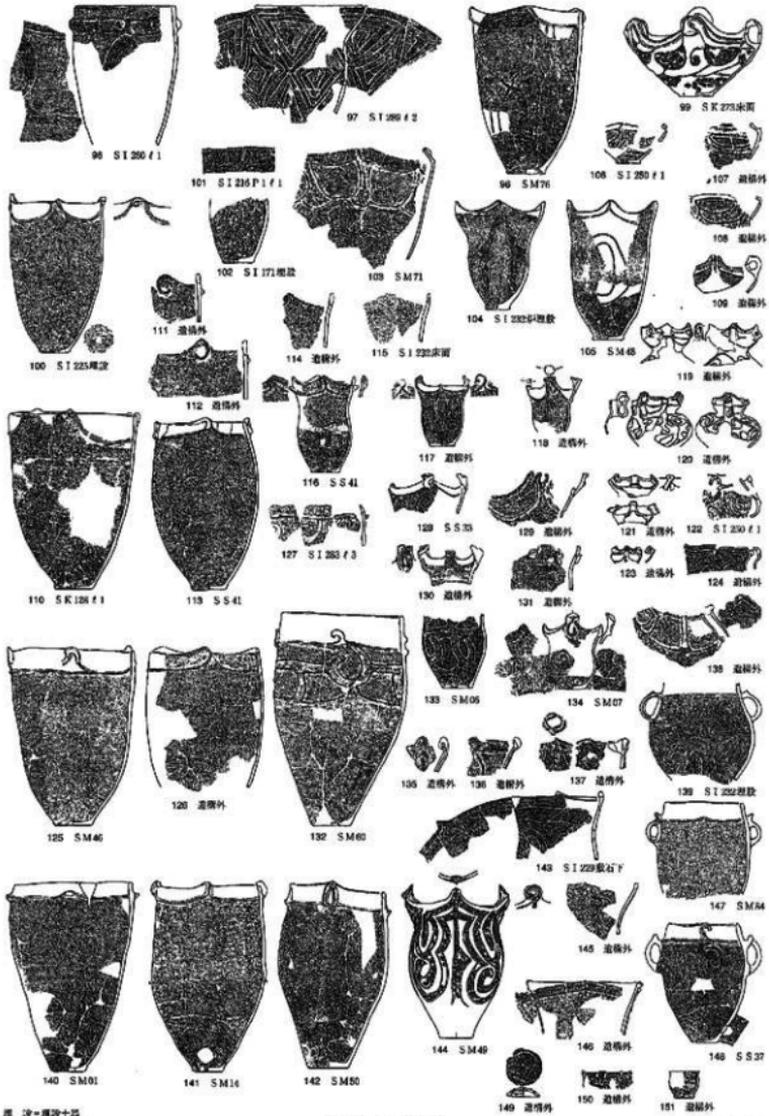
Ⅲ群1類土器(1)(図4-96~151)

本段階に抽出した土器は、深鉢形土器と浅鉢形土器の他に、注口土器や両耳壺、蓋などが認められる。深鉢形土器の器形には、64・69(牛甕式)の系譜上にある96・100・113や、4・8(加曾利EⅢ式)の系譜上にある104・117・118などが認められる。また、注口土器では、68の系譜上にある瓢箪形のもの、99の浅鉢形土器を呈したものがある。

深鉢形土器の器形は、先述したように大きく2つに分けられる。1つは、96・100に代表されるものである。もう1つは、104・117・144に代表される。前者の器形を持つ土器の多くは、口縁部下端に隆線を巡らし、口縁部の無文部と胴部の地文部を区画するものが多く、加飾などはほとんど認められない。後者は、104の土器に見られるような沈線手法で、三角文や楕円文を配し、それ以外の縄文施文部を磨消して、「H」字状の無文部(117・128・130のように口縁部に突起を有するものもある。)を作るものと、144のような沈線区画による縄文帯で文様を描くものとが認められる。三角文と楕円文を配し、「H」字状の無文部を構成する土器は、前段階にも認められたが、本段階に抽出したものの多くは、「H」字状の末端が横位に連繫し閉じてしまう傾向が認められる。また、沈線区画による縄文帯で文様を描くものでは、口縁部から胴部にかけてキザミが付された隆帯が垂下するものが多い。

本段階に抽出した土器については、文様の加飾性から見ると、既に志賀敏行氏(志賀1990)が指摘されているように、前者が粗製、後者が精製の要素を持つ。このような深鉢形土器に見られる共存関係は、Ⅲ群1類(3)まで、顕著に認められる。

さて、前者の土器は、馬目順一氏が提唱された綱取Ⅰ式土器(馬目1970・1975・1977・1982)の成立段階に関わる土器として綱取Ⅰ式古段階に位置付けられる場合が多い。しかしながら、前述した越田和遺跡のような層位的に良好な資料も報告され、綱取Ⅰ式期とは切り離して、これらの土器群を論ぜられる動向(福島1996)も認められる。本遺跡において、綱取Ⅰ式として抽出した土器は、馬目氏の下片寄貝塚の検討(綱取Ⅰ・Ⅱ式の区分もこれに従う。馬目1970)に示された認識に準ずるものであり、後述するⅢ群1類(2)の152・155・171・172などがそれに当たるものと考えている。本段階に示した土器は、一部綱取Ⅰ式と共存すると考えられるが、近年の資料の増加や越田和遺跡の層的事例などから、「綱取Ⅰ式」と位置付けられている土器とは様相を異にする部分が多い。



凡 注=埴塗土器
字樣註=埴輪土器

図4 土器集成(4)

皿群1類(1)

S-1/25

(本段階に示した資料の中にも、馬目氏が網取I式に設定した土器が含まれており、今後の課題を残す。)

では、後述する網取I式土器と本段階との相違について述べてみる。本段階に抽出した土器は、口縁部を区画する隆線が、100・110・126のように、口縁波頂部を巻き込み、「ハ」・「人」字状に垂下する。隆線で区画された口縁部は、三日月状ないし、楕円状に無文部を形成する。(牛埜式土器の連接槽間文に関係するものだろうか) また、125のように隆線が口縁部に迫り、「Q」字状隆帯に繋がるものや、141のように口縁部に迫り上がった隆線が「I」字状を呈すもの、「O」字状隆帯が口縁無文部に施されるもの、140の隆線上の小突起が舌状に張り出すもの(140の土器については、志賀敏行氏が加曾利E N式の影響を受けて成立したと指摘されている。志賀1990)なども認められる。

これに対し、網取I式と比定して抽出した土器の多くは、口縁部と胴部を区画する隆線ないし隆帯が口縁部に迫りならず、口縁部に付される隆帯は、隆線ないし隆帯にはぼ直行するように付される場合が多い。口縁部に付された隆帯には、刺突・沈溝、円形浮文で加飾され、胴部にも文様が挿入される傾向にある。これらの視点で見ると、本段階に抽出した125・132・140～142などは、後出的な要素を持ち、本段階に含むべきか判断し難い。

また、本段階には、図9に示した郡山市中山太田遺跡や三春町西方前遺跡14号住居跡、越田和遺跡15・23・33・34号住居跡の事例から、98・104・117・118などに示した加曾利E V式(石井1992)や、143・144などの称名寺式土器(吉田1960・今村1977)が共存する傾向にある。本段階の土器と共存する称名寺式土器の多くは、鈴木徳雄氏(鈴木1990)、石井寛氏(石井1992)の7細分案の4・5段階に比定されるものと考えている。しかし、県内における称名寺式土器の共存事例は少なく、出土状況を見ると4・5段階から資料が増加する傾向にあり、1～3段階に相当する土器の出土は皆無に等しい。(越田和遺跡5号埋設土器、本遺跡6号土器埋設遺構などは、「J」字文下の横位連繫帯が認められることから、7細分の3段階に相当する資料と考えられる。しかし、本遺跡6号土器埋設遺構の埋設土器133は、横位連繫帯が部分的に磨消され、横位連繫帯が明瞭ではなくなっていることなどから、3～4段階の資料と考えている。)

その他、本段階に抽出した土器を概観してみる。97は、大型の三角文を基本的なモチーフにしていることや、口縁端部の特徴などから加曾利E V式系の土器と考えられる。103のような土器については、従来、大木10式期の最新段階に抽出される事が多かった。類例としては、愛宕原遺跡20号焼土遺構(図8)や、飯館村上ノ台遺跡D遺跡1号住居跡(図9)などがある。愛宕原遺跡20号焼土遺構では、層位的に前段階(隆線区画による無文帯の切り合い)に比定できる土器より新しく、本段階に比定される土器と共存している。上ノ台D遺跡1号住居跡では、石囲炉内で称名寺式中段階の土器と共存している。

また、称名寺式中段階の土器については、中山太田遺跡の石囲炉内で、本段階に比定される土器と共存関係にある。これらの層位的事例は、103が本段階に位置付くことを示している。99の双口注口土器なども、103と同様の文様手法が見られることから、本段階に相当するものと考えている。

このような双口注口土器の類例は、滝根町大平塚ガノ遺跡や宮城県白石市菅生田遺跡に認められる。

119～124の瓢箪形の注口土器は、良好な層位の事例は確認されなかったが、図9の越田遺跡33号住居跡などを見ると、本段階に抽出した土器と共存するようである。文様は隆線で「J」字状に描き出されており、称名寺式土器に多用される「J」字文に通じている。隆線で文様が描き出される149の蓋なども本段階の所産と思われる。両耳壺は、139のように胴部下半が球体状を呈するものと、深鉢形土器の器形を呈したものが認められる。

また、本段階には、150・151の三十稲場式土器も抽出した。これらの土器は、主にコブ状の突起が付され、刺突文は顕著ではない。本遺跡においては、92号土坑の堆積土内で126・140のような土器と一緒に出土しているが、一部新しい土器も一緒に出土していることから、本段階に含むべきか、判断し難い資料である。本段階に抽出した三十稲場式土器については、今後良好な層位の事例を待って検討していきたい。

Ⅲ群1類土器(1)については、時期区分の相違はあるものの、概ね越田遺跡2群土器に平行する資料と言える。本遺跡では、103に示した土器の共存関係(他の遺跡の類例)などから、本段階が後期初頭に位置付くものと考えている。

Ⅲ群1類土器(2)(図5-152～234)

本段階に抽出した土器の、器種・器形については、前段階と大きく変わることはないが、本段階には176・180のような口縁部が「く」の字状に屈曲する壺形土器なども認められる。本段階の深鉢形土器の器形には、218のような朝顔形深鉢も認められる。この土器は、宮城県などで良く認められる下部隆帯を有している。このような下部隆帯を持つ土器は、この他に、称名寺式土器の文様意匠を胴部に有す、樽状の器形を呈した165にも認められる。壺形土器は、口縁部に橋状把手を有しているが、175の捻転状のものと、180の「8」の字状を呈するものが認められる。また、注口土器も、注口を「8」の字状の下部に見立て、「8」の字状突起を形成するものが多い。両耳壺は、174・179・187のように円形浮文が多用され、体部の文様を横位に展開するものが認められる。

では、本段階に抽出した土器の層位について概観する。158・160は、176号住居跡内埋設土器である。住居内堆積土からは、Ⅲ群1類土器(3)に抽出した243が出土している。154は、217号住居跡埋設土器である。床面からは、213・214が出土している。172は、152号住居跡内埋設土器である。217および239は床面から出土している。155・199が床面から出土した259号住居跡は、152号住居跡と重複し、新旧関係では259号住居跡が古い。171は、175号住居跡内埋設土器である。159は、282号住居跡床面から出土している。282号住居跡は175号住居跡と重複し、新旧関係では、282号住居跡が古い。

次に、層位事例からⅢ群1類土器(2)と(3)の関係について述べてみる。先述した層位の事例は、主に綱取Ⅰ式と綱取Ⅱ式に比定されるものである。綱取Ⅰ式とⅡ式の区分基準としては、口縁部下端の隆線ないし隆帯が沈線化する傾向が指摘されている。(馬目1970・阿部1987・渡賀1990)本遺跡の層位の事例においても、152号住居跡や218号土坑の事例のように一部これらの土器が共存するもの

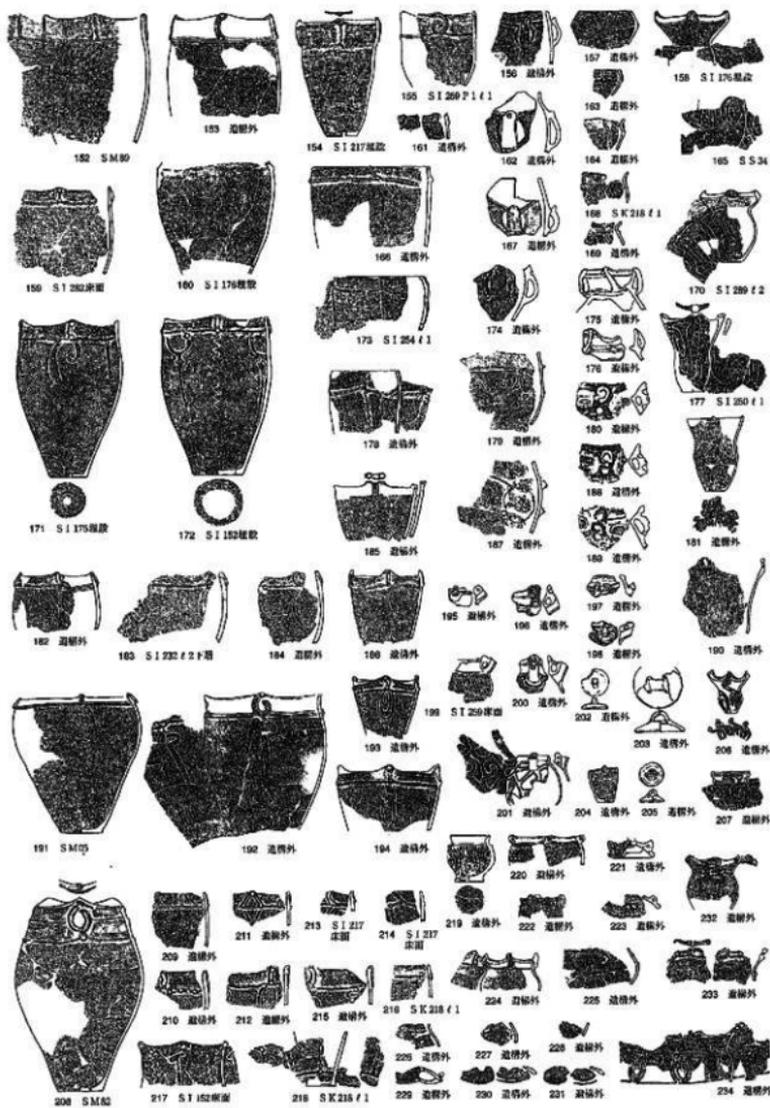


図5 土器集成(5)

目群1類(2)

註 取=既取上巻 S=1/15 S=1/10 (21・22)

の、隆帯→沈線化の傾向が認められる。

また、網取Ⅰ式に比定される土器の中には、191・192のような隆帯に沿って沈線が施される土器も認められる。これらの土器を見ると、口縁部文様帯に施される「I」・「J」状隆帯は、沈線が施されていない152・153に比べ扁平なものが多く、前段階からの手法の変化が読み取れる。これらの土器については、網取Ⅰ式から網取Ⅱ式の過渡期の土器（本間1990）として捉えることもできるが、本遺跡では、217号住居跡内埋設土器（154）と床面出土土器（213・214）にその関係が窺えるだけで、多くの層位的事例は、このような土器を介さないで、網取Ⅱ式へと移行している。これらのことから、本遺跡においては網取Ⅰ式についてあえて細分しなかった。

次に、層位的事例などから、称名寺式土器との関係について述べてみたい。158・160は、176号住居跡内埋設土器である。158は、称名寺式新段階（6段階）に比定される土器と思われ、埋設土器ではあるが、160の網取Ⅰ式に伴うものと思われる。170・177も称名寺式新段階（6段階）に比定できる資料である。177に認められる縦位の刺突文は、前段階に多く認められる垂下隆帯を簡略化したものと思われる。これらは、層位的に良好な事例ではないが、前段階の土器と出土しており、称名寺式新段階（6段階）については、Ⅲ群1類土器（2）から共存する可能性もある。

190・206は、称名寺式新段階（7段階）の土器である。本遺跡では、網取Ⅰ式との層位的事例は認められないが、上ノ台A遺跡4号土坑内堆積土2層上面で、網取Ⅰ式（隆帯に沈線を伴うものも認められる）と一緒に出土している。232～234については、口縁部に描出される文様帯および胴部に施される文様（鈴木1991・石井1993）などから、称名寺式終末～堀之内Ⅰ式古段階の資料と思われる。Ⅲ群1類土器（3）に抽出した241・248も堀之内Ⅰ式古段階の資料に位置付けられるが、本段階に抽出した232～234は、口縁部突起周囲に沈線が施されているのに対し、241・248は、口縁部の突起を繋ぐように、沈線が口縁部を全周している。241・248のような文様帯の在り方は、主に網取Ⅱ式に認められ、後田遺跡2号住居跡（図10）や大越町馬場平B遺跡、西方前遺跡などに、このような文様帯を持つ土器が認められる。241・248については、口縁部文様帯の在り方などからⅢ群1類土器（3）の中で捉えて置きたい。

網取Ⅰ・Ⅱ式と称名寺新段階～堀之内Ⅰ式古段階の共存関係については、地域的要因も大きいが、栃木県藤岡神社遺跡S1414、千葉県山崎口雷土遺跡土器群、阿鼻木戸作貝塚出土土器群などの事例もあり、必ずしも今回提示した共存関係を示すとは言い難い。網取Ⅰ式に対して、器形・文様の変化が速い称名寺式土器を対応させるには、今後より詳細な検討を要すると思われる。

また、事例は少ないものの、Ⅲ群1類土器（1）の段階には、称名寺式古段階末期（3～4段階）～中段階（4・5段階）の土器を認めることができ、本県では出土事例がないため、推測の域を脱するものではないが、少なくとも称名寺式古段階（1・2段階）については、大木10式期に平行するものと考えている。

では、その他の土器について概観してみる。219～231は、三十稻場式土器に比定される土器である。深鉢形土器の器形は、口縁部が「く」の字状に外反し、胴部が球体状を呈すものが多い。これ

らの土器は、文様の特徴から、刺突文の脇にコブ状の突起が付されるもの(219~223)と、キャタピラ状の刺突文で区画した文様帯内に刺突文ないし、多条沈線を配すもの(224・225)とに大別できる。225は224に比べ、区画内が多条沈線化している点や円形浮文が扁平で盲孔に近いことから、後出的な土器と思われる。Ⅲ群1類土器(2)に抽出した266・267の体部に施される文様は、いずれも多条沈線によって抽出され、円形浮文に代わって盲孔が施されるなど、より後出的である。また、224に認められる「8」の字状の口縁部突起も、267では退化傾向にある。円形浮文から盲孔へと手法の変化が読み取れる点(芳賀1985)においては、網取Ⅰ式~Ⅱ式の推移に通ずるものがある。本段階に抽出した三十稻場式土器については、会津高田町道上遺跡2号住居跡の層位的事例や文様手法の変化などから、Ⅲ群1類土器(2)に位置付くものと考えている。

Ⅲ群1類土器(3)(図6-235~277)

本段階に抽出した土器の器種は、深鉢形土器や浅鉢形土器、注口土器、蓋などが認められるが、壺形土器や両耳壺類については抽出できなかった。深鉢形土器の器形は、前段階と大きく変わることはないが、底部から口縁部にかけて、緩やかに外傾しながら立ちあがるもの(237・244)や、胴部上半に膨らみを持ち、口縁部が「く」の字状に屈曲するもの(239・255・263・272)が前段階に比べ比較的多く認められる。浅鉢形土器は、口縁部が「く」の字状に屈曲するものと、緩やかに内湾気味に立ち上がるものが認められる。後者の浅鉢形土器には、多条沈線が施されるものが多い。本段階の層位的事例を見ると、218号土坑出土の168・216・252のように、一部前段階に抽出した土器が出土する例もあるが、前述したように多くの層位的事例は、従来、網取Ⅱ式の区分基準とされる口縁部文様帯を区画する隆帯が沈線化する傾向を示している。口縁部文様帯の表現についても、馬目順一氏が指摘される手法の変化(馬目1982)が認められる。「I」字状隆帯の沈線化と「I」字状隆帯両端に施される円形浮文の盲孔化)これらは、沈線や盲孔の周囲が盛上った状態を呈しているものが多く、前段階の「I」字状隆帯ないし、円形浮文を意識しながら施文手法を変化させていることが窺える。

胴部の文様帯を見てみると、253に見られる胴部文様などは、172・193の胴部文様の系譜上にあると思われる。前段階では、「U」・「J」字状の文様と下端に施される剣先状の文様に明瞭な括れを有していたが、本段階の253などは、上下の文様が一体化してしまい、前段階の文様が簡略化されている。243・260などの列点状の刺突文で胴部を分割する手法についても、称名寺式の垂下隆帯ないし、門前式の鎖状隆帯の影響を受け、それらの文様表現が簡略化したものと思われる。

また、本段階に抽出した、口縁部が「く」の字状に屈曲する深鉢形土器の胴部文様帯は、横に文様を展開する傾向が認められる。

次に、その他の土器について観察してみる。241・248は、器形・口縁端部の文様帯などから、234の系譜上に位置する土器として捉えられる。口縁端部に文様帯を有する土器の多くは、口縁部~頸部に無文帯を有し、胴部に文様帯が施されるものが多いが、241・248については、無文帯は作られず、縄文が施文されたままである。

266・267・274～277は、三十稻場式土器である。これらの土器は、幅広く浅めの多条沈線で文様が描かれている。前段階に抽出した、225の区画文内には、刺突文の代わりに多条沈線が施され、刺突文から多条沈線に文様手法が推移する傾向が窺える。また、既にⅢ群1類(3)で述べたが、口縁部突起、円形浮文も退化傾向にあり、前段階に抽出した三十稻場式土器より後出的なものと考えられ、本遺跡では共伴事例は確認されなかったが、概ね綱取Ⅱ式に平行するものと考えている。

Ⅲ群1類土器(4) (図6-278～292)

本段階の土器は資料が少なく、深鉢形土器のみの抽出である。施文される文様は、いずれも多条沈線で描出されている。278～284については、綱取Ⅱ式に比定される土器であるが、前段階に抽出した土器に比べ、胴部文様帯の様相が異なることから、Ⅲ群1類土器(3)とは区分した。

本遺跡では、層位的事例は認められないが、図10に示した西方前1号柄鏡形住居跡の敷石下埋設

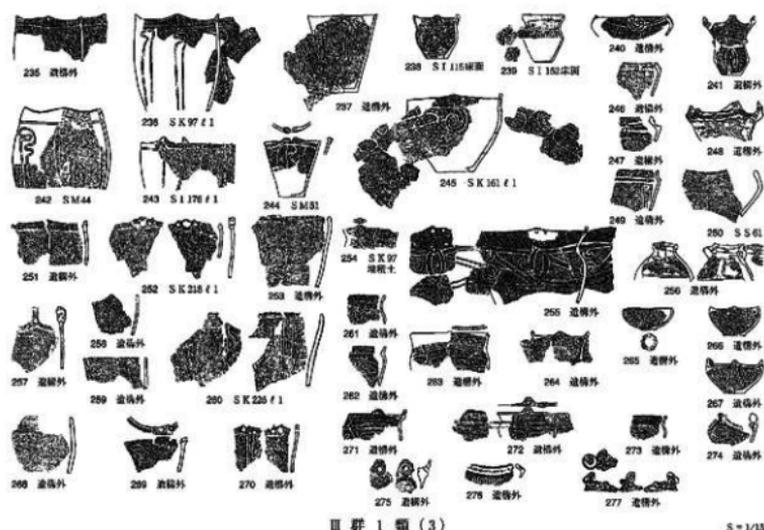


図6 土器集成(6)

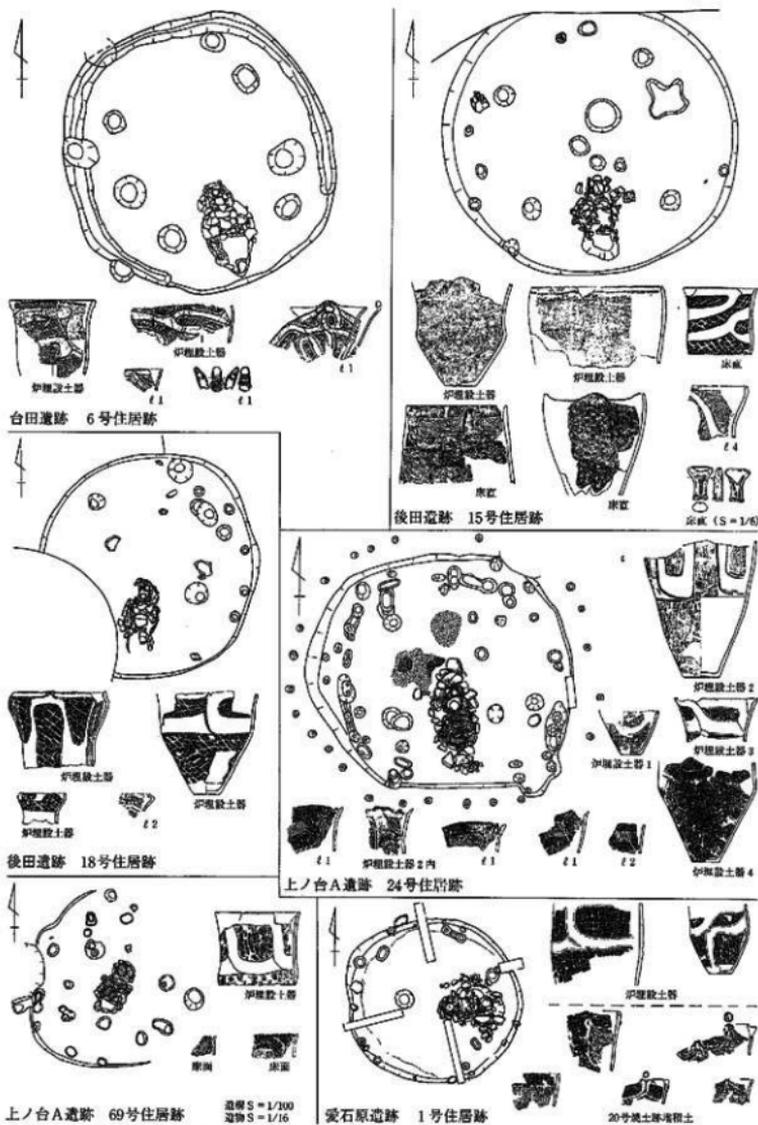


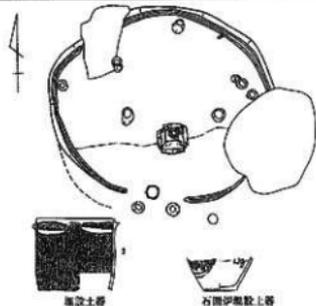
図8 周辺地域の土器(2)



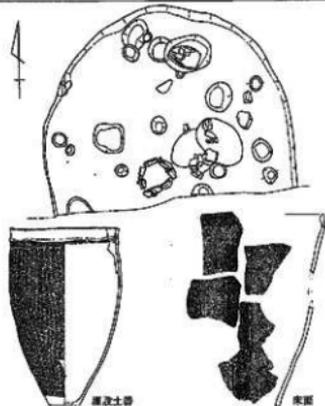
上ノ台D遺跡 1号住居跡



中山太田遺跡 石組炉

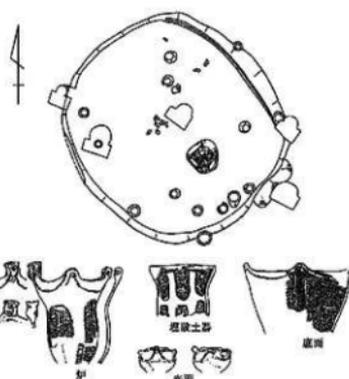


越田和遺跡 34号竪穴住居跡

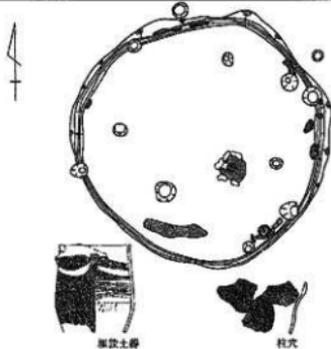


西方前遺跡 14号住居跡

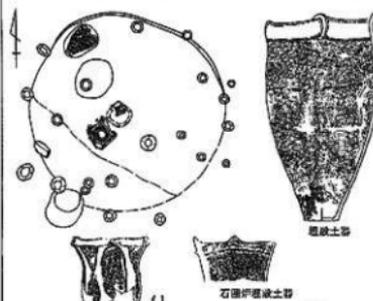
図9 周辺地域の土器 (3)



越田和遺跡 33号竪穴住居跡

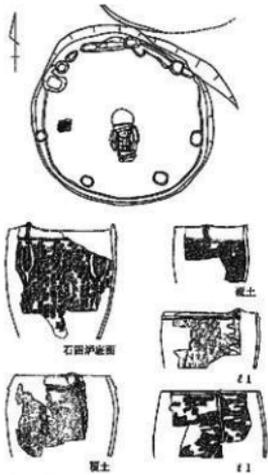


越田和遺跡 15号竪穴住居跡

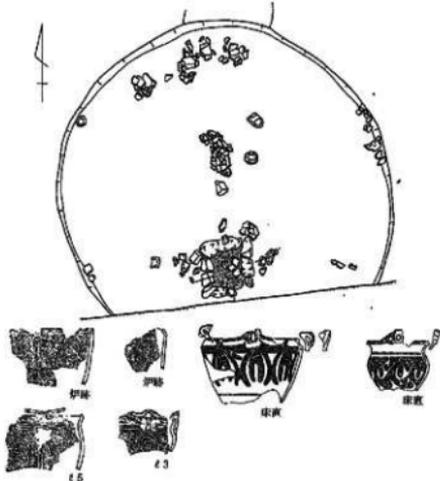


越田和遺跡 23号竪穴住居跡

遺跡 S = 1/100
遺物 S = 1/16



越田和濃跡 29号竪穴住居跡

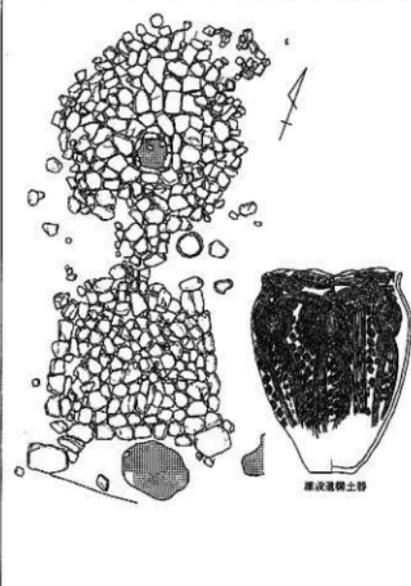


後川遺跡 2号住居跡



西方前遺跡 第1号柄鏡形敷石住居跡

図10 周辺地域の土器(4)



栄原A遺跡 2号敷石住居跡

透網S=1/100
遺物S=1/16

土器（住居跡に伴うかは不明）と敷石面出土土器の関係や後田遺跡2号住居跡の炉内および床面出土土器と堆積土出土土器、柴原A遺跡の包含層の事例などから、Ⅲ群1類土器(3)に後続するものと考えられる。また、本段階に抽出した土器に描出される、重瓜状の多条沈線は、後続する類之内2式古段階にも認められることから、Ⅲ群1類土器(3)に比べ、後出的なものと言えよう。

285～292については、南三十稲場式土器に比定される土器と思われる。破片資料が多く、全体の器形を知ることはできないが、口縁部には、285・286のように緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がるものと、287～289の口縁端部が「く」の字状に内折するものが認められる。文様は、細い多条沈線で幾何学的文様を描く。これらの土器は、前段階に抽出した三十稲場式土器に後続するものと考えられるが、これらが本遺跡において、278～284の網取Ⅱ式と共存関係にあるといった層位的事例は確認されなかった。南三十稲場式土器については、今後良好な層位的事例の増加を待って、検討を行いたい。

Ⅲ群1類土器(2)～(4)については、Ⅲ群1類土器(2)が網取Ⅰ式、Ⅲ群1類土器(3)が網取Ⅱ式古相、Ⅲ群1類土器(4)は網取Ⅱ式新相に比定され、時期的位置付けは、Ⅲ群1類土器(1)との関係から、後期前葉に位置付くものと考えている。(大河原)

第2節 土製品

調査9区から出土した土製品は、土偶・耳飾り・有孔球状土製品・土錘・円盤形土製品などがある。土製品の中では、円盤形土製品の出土数が最も多い。これらの土製品については、中期後葉～後期前葉の所産と考えている。本節では、土製品の中でも、特に土偶について概観してみる。

調査9区出土の土偶については、形状や文様などから、以下のA～C類に大別した。

A類 主に板状を呈した中実・中空土偶で、文様が施文されているものである。(図11-1～10)

A類に分類したものの中には、1・2のような、胴部の形状が奴鼠状(相原1988)を呈し、脚部に台座が付くものと、10のような筒形を呈したものが認められる。7については、本類に分類したが、胴部の形状などから、C類に含まれるものと考えられる。

施文される文様は、1・2ともに凹線(調整有り)で描出され、モチーフを見ると共通する部分が多い。1の体部正面、2の体部背面には、それぞれ腕部から胴部にかけて垂下する放射線状の凹線、胸部上半には1・2ともに凹線で区画され、刺突文が充填されている。また、背面の文様構成にも多少の相違は認められるものの、胴部上半に凹線を横位に施し、下半には凹線を縦位に配すといった文様構成をとる。1の背面上半は、凹線の他に何らかのモチーフが描出されているが不明である。2は、胴部上半に渦巻文を配し、胴部中央に施文された凹線間に円形の文様を施す。台座の部分には、1が刺突文、2には縄文が施文される。

1・2に認められる文様構成は、A類に抽出した4～6・8・9の土偶にも認められる。8の背面胴部下半は、凹線ではなく、隆帯によって区画されている。台座は、1・2に比べ扁平で低い。

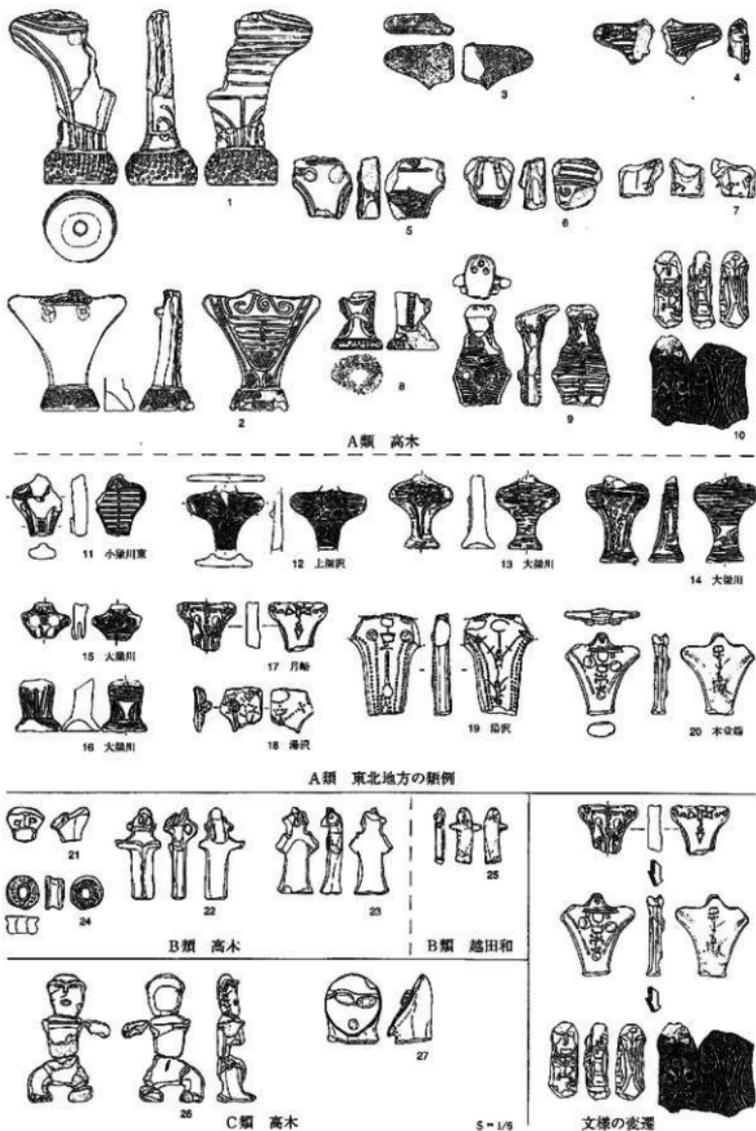


図11 土偶集成

9の背面などは、2の背面文様モチーフの系譜上にあるものと考えられる。2が凹線で文様を描出しているのに対し、9は沈線で描出され、文様も2に比べ簡略的に表現されていることから、後出的なものと言える。また、A類には10のように、これらの文様モチーフとは系譜を別にする土偶も認められる。10の文様モチーフの系譜などについては、後述するとして、1～9の年代について考えてみたい。

1～3・5・6・8は、凹線で文様を描出され、文様構成も類似する点が多い。4・7・9については、沈線手法で文様を描出される。特に4・9については、1・2の文様モチーフを沈線手法で簡略的に表現しており、後出的なものと考えられる。1～3・5・6・8の凹線による文様の描出は、本遺跡においては、大木9式期新相～大木10式期古相の土器に認められる表現方法である。また、この時期に多用される渦巻文なども、1～3・5・6・8には認められる。このような文様手法の在り方などから、これらの土偶については、概ね大木9式期新相～10式期古相に位置付くものと考えている。また、4については、形状や文様モチーフから1・2の土偶に後続するものと思われ、大木10式期の所産と考えている。

このような形状を持つ土偶は、宮城県七ヶ宿町小梁川東遺跡(図11-11)、同町大梁川遺跡(図11-13-16)、同県大衡村上深沢遺跡(図11-12)に認められる。12～16の資料については、1・2に認められる文様を沈線手法で簡略的に表現している点などから、1・2より後出的なものと考えている。しかし、これらの資料は、1・2と同様、大木9式期新相～10式期古相に位置付く資料であり、地域によって文様および描出方法の時期に相違が見られる。また、7については、胴部の形状や共存する土器などから本類の時期より、C類に属すものと考えている。

次に、10の文様について述べてみたい。10は、両面に人体風な文様を描出されている。このような文様モチーフを持つ土偶は、調査9区では認められないが、中期末葉に位置付く岩手県盛岡市湯沢遺跡(図11-18-19)、秋田県比内町本端遺跡(図11-20)などの文様モチーフが、祖形をなすものと考えられる。これらの文様には、18のように刺突文で描出するものと、19・20の沈線手法で描出されるものが認められる。

文様モチーフは、沈線で紫いた円形の文様を正面に配し、その下位に両端が鈎針状を呈した横位沈線が施される。20などは「T」字状を呈し、胴体を彷彿させる。背面には、円形とその下端に矢印状の沈線が施される。19などは、「大」の字状に両手を広げた様相を示し、10の背面構成に類似している。20に見られる胸部上半を区画する文様構成や、腕部から胴部にかけて刺突文や沈線を放射状に配す文様構成は、1・2にも認められ、当該期の土偶に共通的な要素と思われる。こういった文様構成が温床となり、10の人体文風のモチーフを作り出したものと考えられる。

18～20の文様構成については、中期中葉の所産と思われる福島市月崎遺跡の土偶(図11-17)に描出された「同心円」、「5字状文」、「三角文」(伊藤・八巻1969)に祖形を見出だすことができる。17の文様は、中央に配された同心円文を中心に左右対称に文様を描出されている。この様な文様構成は、18～20および10にも認められる。19・20の背面文様を見ると、同心円文、5字状文、三角文

などが、簡略化され一体化したような文様構成を呈し、17からの文様の推移が窺える。10の人体文の文様については、17のモチーフが祖形となり、19・20の段階で17のモチーフが簡略化される一方で、10の人体文のモチーフの温床になっていったものと考えている。10の時期については、文様モチーフなどから18～20に後続するものと考えられる。また、後期初頭に位置付くB類には、文様が描出されないことから、10については、中期末葉後半の所産と考えている。

B類 板状を呈した中実土偶で、文様が施文されていないもの。(図11-21～23)

B類の土偶の形状は、22のように両腕を伸ばしたものと、23のように腕を下げたものが認められる。22などは、A類に抽出した1・2の形状の系譜上にあるものと思われるが、A類で見られた文様は、B類には一切認められず、A類とは大きく様相が異なる。また、顔は21・23のように鳥顔を呈したものと22のような仮面を被ったようなものが認められる。22・23については、いずれも配石遺構から出土している。22は24の耳飾りと一緒に60号配石遺構から出土しており、22の耳に耳飾りが表現されている点で興味深い。また、23は47号配石遺構の上に俯せて置かれていた。これらの土偶については、出土状況などから、配石遺構に関連して使用されたものと考えられる。B類の土偶の時期については、出土遺物の検討から、後期初頭の所産と考えている。B類に類似する越田和遺跡(図11-25)の土偶も同時期の所産と思われる。

C類 中実土偶で、顔の表現が写実的なもの。文様は施文されない。(図11-26・27)

C類の形状には、26のように両足が表現されたものが認められる。顔の描出は、26・27いずれも隆帯により眉や鼻が描出され、目と口は窪みで表されている。26・27は共に、連繋した眉と短い鼻が特徴的である。また、26の胸部上半には、隆帯が施されている。27は、頭部のみの資料であるが、遺存する頭部から推定すると、かなり大型の土偶であったと考えられる。顔は円形を呈し、上向きに作られ「ハート形土偶」に近い形状である。C類の時期については、形状などから判断して、後期前葉の所産と考えている。

以上、調査9区における土偶について、形状や文様などを中心に概観してみた。この内、A類は中期後葉～末葉の所産で、1・2や10のような文様が描出される。このような文様のモチーフは、当該期の東北地方に認められるものである。A類が用いられた時期の集落を見ると、複式炉を持つ住居跡で構成され、使用される土器も大木式土器が多く、在地色が強い集落であったと思われる。しかし、後期初頭に位置付くB類の土偶には、文様などは描出されず、A類の土偶とは様相が大きく変わっている。

この時期の集落を見ると、土器は、異系統の土器が増加する傾向が認められ、住居跡では、炉跡が複式炉から石囲炉に推移し、敷石住居跡なども構築されるようになる。このような集落の画期的時期に、土偶も大きく様変わりしている点は大変興味深い。(土偶の文様の消長については、上野修一氏が東北地方における中期後葉～後期前葉の土偶を総合的にとらえ、施文された文様を系列化して論ぜられている。また、ハート形土偶の出現の背景に、伝統的系列の断絶と東北地方北部系列の関与を指摘されている。上野1997)

(大河原)

第2章 縄文時代の遺構

第1節 住居跡

高木遺跡9区からは、117軒の住居跡が検出された。これらの住居跡は、炉の形態や出土遺物などから、中期後葉～後期前葉に位置付けられる。出土遺物も、中期後葉～後期前葉の土器が主体をなすが、中期末葉後半の土器の出土数は少ない。このことについては、中期末葉の住居内堆積土に洪水砂に起因すると思われる土層が認められることなどから、中期末葉後半～後期初頭頃に集落が冠水するほどの洪水が発生し、集落が一時的に途絶えたことに因るものと考えている。

本遺跡の住居跡については、中期後葉の時期をⅠ期、中期末葉の時期をⅡ期、後期初頭の時期をⅢ期、後期前葉の時期をⅣ期とした。また、重複関係や炉跡の軸線方向などから、Ⅰ・Ⅱ期をa～e、Ⅳ期をa～dに分けた。Ⅲ期については、小期を設けなかったが、基本的に二時期あるものと考えている。では、出土遺物や炉跡の特徴などから、ある程度時期が限定できた住居跡について、分佈・平面形・炉跡などを中心に概観してみる。

分 布 (図12～14)

Ⅰ期 a 67・168・237・248・251・265・289・291・293号住居跡で構成される。炉跡の軸線方向から、Ⅰ期 a はさらに、67・251号住居跡と168・265・289・291・293号住居跡に分けられる。前者は調査区の南側に、後者は調査区中央に比較的まとまって分佈する。地形的には、自然堤防の微高地平坦部に立地する傾向にある。

Ⅰ期 b 201・206・208・242・266・287号住居跡で構成される。調査区中央から北側にかけて分佈し、Ⅰ期 a と同様に自然堤防の微高地平坦部に立地する。

Ⅰ期 c 177・202・212・213・236・268・281・283・292号住居跡で構成される。調査区の南側と調査区中央から北側にかけて分佈する。地形的には、自然堤防の微高地平坦部に立地する。

Ⅰ期 d 189・226・243・246・247・269号住居跡で構成される。調査区南側と調査区中央に分佈するが、住居跡は調査区中央に近接して構築されている。地形的には、自然堤防の微高地平坦部にあたる。

Ⅰ期 e 183・209・211号住居跡で構成される。調査区北側の細尾根状に残った自然堤防の微高地平坦部にまとまって立地する。

Ⅰ期の住居跡の分佈状況を見ると、調査区中央から北側にかけて構築される傾向にある。Ⅰ期 a・c・dの時期では、調査区の南側に1～2軒分佈する傾向が認められる。Ⅰ期における集落は、a～eの分佈状況などから、一時期に住居跡4～6軒程と考えている。また、226・283・289号住居跡は、遺物の出土状況などから、捨て場として用いられていたようである。なお、283・289号住居跡については、Ⅲ期の遺物も比較的まとまって出土していることから、捨て場の他に、堆積土中の

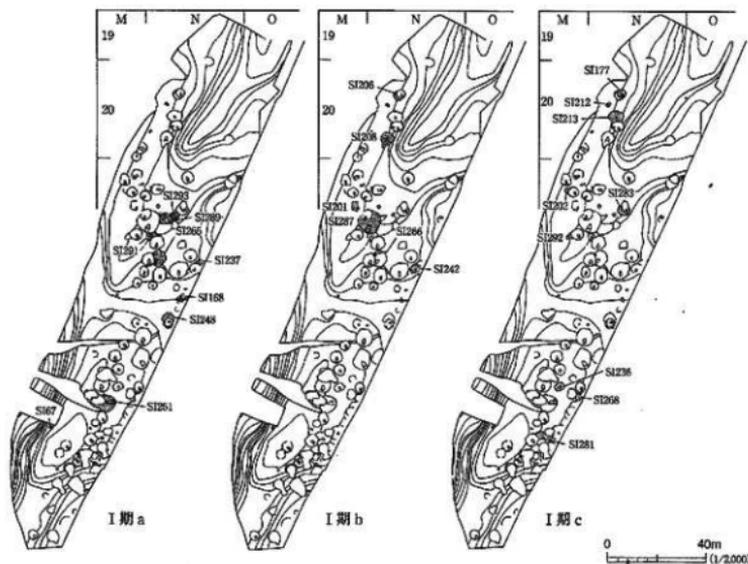


図12 住居跡分布図(1)

遺構の重複関係なども視野に入れておきたい。

I期に属する他の遺構の分布状況を見てみると、土坑については調査区南側と中央、土器埋設遺構は調査区南側から北側にかけて分布する傾向にある。これらの遺構は、ほぼ住居跡の分布状況に類似し、住居跡に近接して構築される傾向にある。

II期 a 132・172・179・186・190・210・215・233・238・241・274・280・286・290号住居跡で構成される。炉跡の軸線方向から、II期 a はさらに、186・190・215・233号住居跡と132・172・179・210・238・241・274・280・286・290号住居跡に分けられる。前者は調査区のほぼ中央に、後者は調査区南端から北側にかけて分布している。地形的には、I期と変わらず自然堤防の微高地平坦部に立地している。

II期 b 203・224・249・267・278・284号住居跡で構成される。調査区南側の自然堤防の微高地平坦部に、まとまって分布するが、調査区中央北側に1軒(203号住居跡)構築されている。

II期 c 197・245・254・279号住居跡で構成される。調査区中央から北側の自然堤防の微高地平坦部に分布するが、調査区中央南側に1軒(254号住居跡)構築されており、II期 b とは分布状況が対称的となる。

II期 d 244・277・288号住居跡で構成される。調査区中央に分布している。

II期 e 182・184・198・207・234・264・270号住居跡で構成される。炉跡の軸線方向から、II

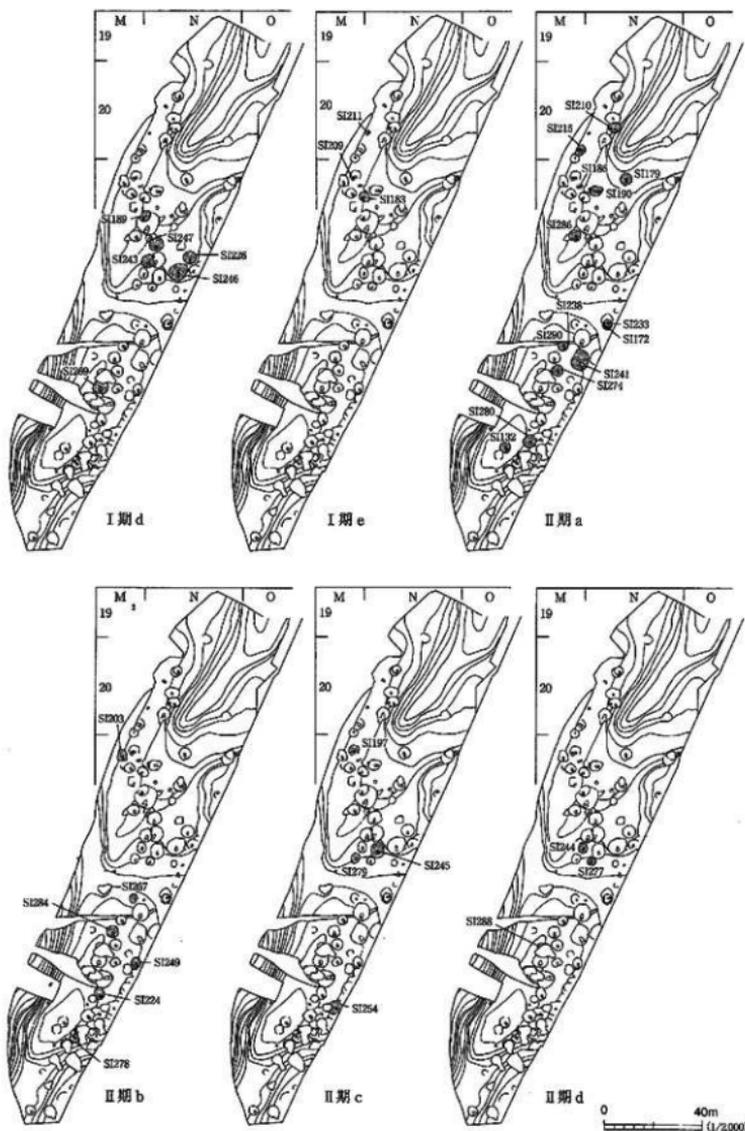


図13 住居跡分布図 (2)

期eはさらに、182・198・270号住居跡と184・207・234号住居跡に分けられる。前者は調査区中央から南端、後者は調査区中央から北側の自然堤防微高地平坦部に分布している。

Ⅱ期の住居跡の分布状況を見ると、Ⅰ期では調査区中央から北側にかけて住居跡が分布しているのに対し、Ⅱ期では調査区中央ないし南側に分布する傾向にある。Ⅱ期における集落については、Ⅰ期とはほぼ同数の住居跡で構成されていたものと思われるが、Ⅱ期c～eにかけては、a・bの時期に比べ減少傾向にある。Ⅱ期に属す他の遺構の分布状況を見ると、土坑は、調査区南端から北側にかけて分布する傾向にある。土器埋設遺構は、調査区中央から北側にまとまって分布している。土器埋設遺構の大半は、Ⅱ期a～cに属するものである。この時期の住居跡と土器埋設遺構の分布状況を見ると、比較的住居跡に近接した場所に土器埋設遺構が構築されているようである。

Ⅲ期 171・204・216・219・225・228・229・232・252・260・262・263・271・294号住居跡で構成される。Ⅲ期については、遺構の重複などから、少なくとも二次期に分かれると考えている。住居跡の分布状況は、調査区南端から北端にかけてほぼ全域に分布している。地形的には、自然堤防の微高地平坦部から後背湿地に続く東側の緩斜面地に構築されている。分布や立地場所などは、Ⅰ・Ⅱ期とはやや異なっている。なお、Ⅲ期では、北側の沢地形が砂で厚く覆われて、自然堤防の微高地平坦部となっている。

Ⅲ期の住居跡では、Ⅰ・Ⅱ期で認められた複式炉は認められず、石田戸を有する竪穴住居跡や小型の敷石住居跡なども構築されるようになる。また、171号住居跡のような石田戸の脇に埋設土器を持つ、複式炉が退化したような炉跡も認められる。Ⅲ期における集落は、重複関係や出土遺物の検討などから、住居跡は一時期に6軒程度と考えている。また、住居跡として登録した240・250号住居跡については、炉跡が検出されなかったことや形状などから、大型土坑の可能性も考えられる。これらの遺構は、Ⅲ期の遺物を堆積土中に多量に含んでおり、出土状況などから、廃棄されたものと考えられ、当該期の捨て場として用いられたものと考えられる。

Ⅲ期に属す他の遺構の分布状況を見てみる。土坑と土器埋設遺構は、調査区南端から北側にかけて分布する傾向にあり、ほぼ住居跡の分布状況と一致する。特に土器埋設遺構は、調査区南側の自然堤防微高地に比較的まとまって分布している。この場所は、住居跡に隣接するものの、ほとんど住居跡は構築されていない。

配石遺構は、調査区中央から南側にかけて分布する傾向にあるが、特に調査区南端の自然堤防の平坦部にまとまって構築されている。Ⅲ～Ⅳ期の住居跡は、配石遺構に近接して分布するものの、この地域にはほとんど構築されていない。また、調査区中央から南側にかけての自然堤防微高地平坦部から後背湿地に続く地域には、広場状の空間が認められる。この場所には、下部に埋設土器を持つ、配石遺構が分布する傾向にある。配石遺構については、住居跡の分布状況などから、住居跡とは空間を別にして構築されていたものと考えられる。

Ⅳ期a 205・220・230・235・255・259・275号住居跡で構成される。調査区南側と調査区中央から北側に分布するが、いずれも調査区東よりに構築されている。地形的には、自然堤防微高地平

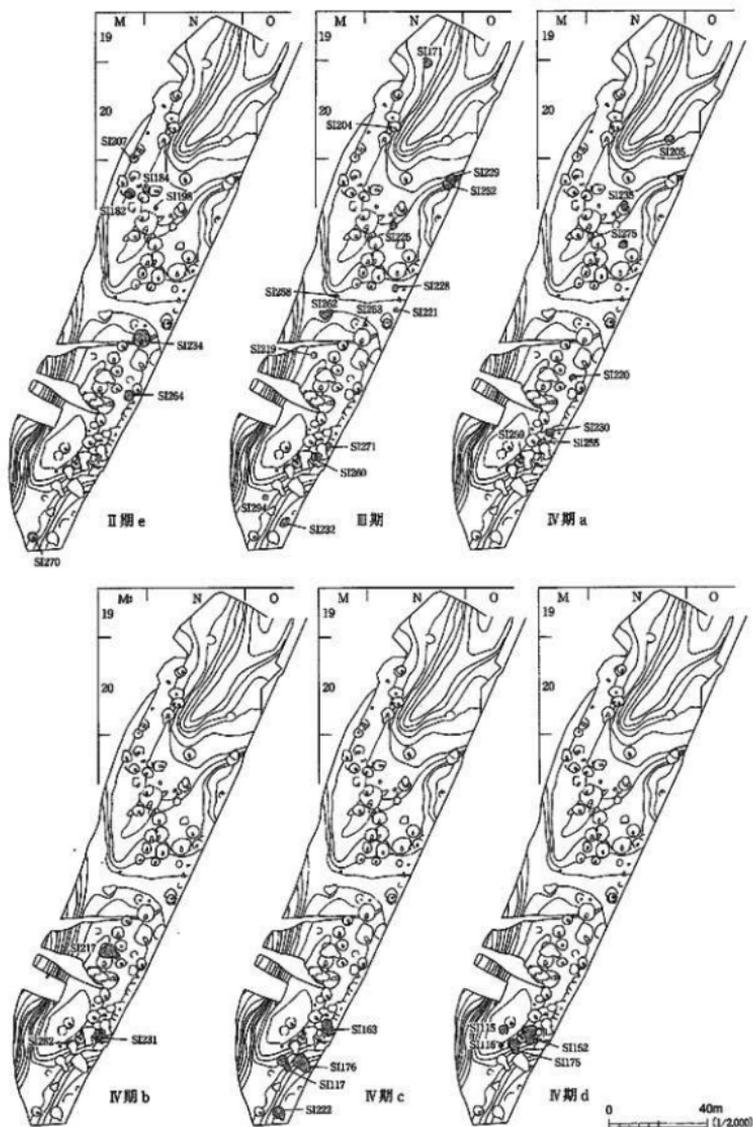


図14 住居跡分布図(3)

垣部から東側の後背湿地に続く緩斜面地に立地する。

N期b 217・231・282号住居跡で構成される。調査区南側の自然堤防の微高地平坦部と後背湿地に続く緩斜面地に立地する。

N期c 117・163・176・222号住居跡で構成される。調査区の南側に分布し、後背湿地に続く緩斜面地に立地する。

N期d 115・116・152・175号住居跡で構成される。調査区の南側にまとまって分布し、地形的には自然堤防の微高地平坦部と後背湿地に続く緩斜面地に立地している。

N期の住居跡の分布状況を見ると、N期aはⅢ期とほぼ同様に調査区全体に住居跡が分布する傾向にあるのに対し、N期b～dでは調査区の南側の極めて限られた地域に分布する傾向にあり、分布域を大きく変更している。住居跡について見ると、N期aが石囲炉を有した竪穴住居跡を中心に構築されていたのに対し、N期b～dでは大型の柄鏡形を呈した敷石住居跡で集落が構成されるようになり、分布域と同様に、住居跡も大きく様相を変えている。N期aにおいては、住居跡として遺構番号を付して調査した遺構の中に、柄鏡形を呈した敷石住居跡は認められなかった。しかし、配石遺構として調査した25・26号配石遺構は、形状から小型の敷石住居跡と考えられ、N期aの集落内にもⅢ期に継続して、柄鏡形の敷石住居跡が構築されている。Ⅲ・N期aに構築された小型の柄鏡形住居跡が、N期b～dに認められる張出部が発達した大型の柄鏡形住居跡に推移して行くものと考えられる。また、N期b～dの集落は、117号住居跡のような主体部が円形を呈した柄鏡形の敷石住居跡と、152号住居跡のように主体部が方形を呈した柄鏡形の敷石住居跡がセットで営まれているようである。敷石住居跡については、第3節「集落の変遷」で述べることにする。N期における集落は、N期aではⅢ期とほぼ同数の住居跡で構成されていたものと考えているが、N期b～dにかけては3～4軒で推移し、N期aに比べ集落の規模は減少傾向にある。

N期に属す他の遺構の分布状況を見てみる。土坑は、調査区南端から北側にかけて分布するが、特に調査区南側にまとまって分布する傾向にある。土器埋設遺構は、調査区全体に点在して分布している。いずれの遺構についても、住居跡と地域を分けるような分布状態は認められず、住居跡に近接して構築されている。

以上、分布状況から住居跡について概観した。本遺跡では、I～N期の各時期で、多少分布状況が異なる。特にN期b～dでは、調査区南側の限られた地域にまとまって分布する傾向にある。このような分布域の相違については、集落が営まれたI～N期の間にも、阿武隈川の洪水を受けた痕跡が確認されており、阿武隈川の氾濫などが、住居跡の分布に少なからず影響していたものと考えられる。また、集落における他の遺構と住居跡との関連性も考えられる。今回は、住居跡と他の遺構との関係について、I～N期で概観したが、各時期の小期で検討して行けば、より住居跡と他の遺構との分布状況がつかめ、各時期の集落構造が明らかになるものと思われる。

住居跡 (図15・16)

ここでは、特に残りの良かった住居跡を中心に、平面形や規模、内部施設について概観してみる。

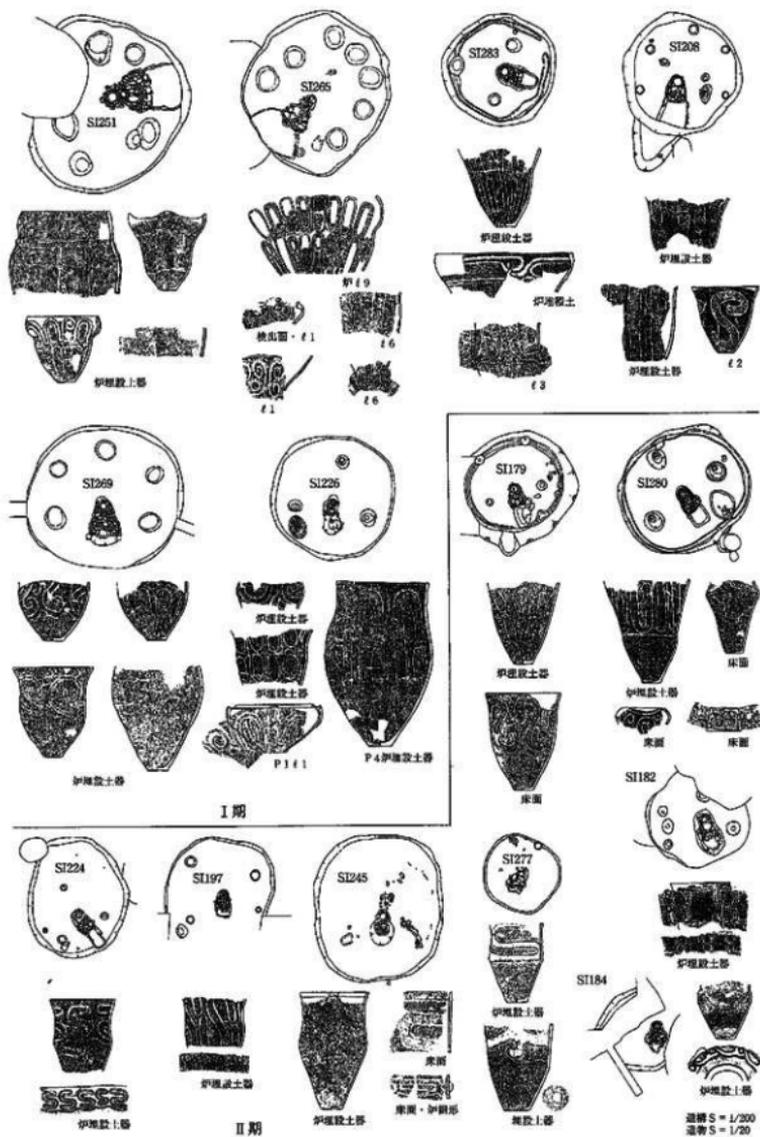


図15 住居跡集成(1)

I期 住居跡の平面形は、台形状、方形状、円形状を呈したものが認められる。規模は、径が5m以上のものが多く、比較的規模は大きい。炉跡は、いずれも複式炉で、前庭部が住居跡の壁に取り付くものが多い。複式炉の土器埋設部は、住居跡のほぼ中央に位置している。柱穴は検出された状況から、3本ないし5本の支柱穴が配されているようである。支柱穴は、基本的には、複式炉の中軸線の延長線上と複式炉両側に配されている。複式炉の両側に配されている支柱穴は、中軸線からはほぼ等間隔に配されている。

この他の内部施設を見ると、壁溝を持つもの、埋設土器を持つものなどが認められる。I期に認められる住居内の埋設土器は、横位に設置されている。また、208号住居跡のように、磨石や石皿などを収納するような施設を持つものも認められる。208号住居跡については、舌状の張出部が付属している。これについては、スロープ状に住居内に向かっていことから、出入口に関連した施設と考えている。

II期 住居跡の平面形は、I期とほぼ同様の平面形を呈し、変化は認められない。規模は、径が5mを超える大型の住居跡も認められるが、3～5m程度の規模のものが多く。住居跡の中には、241号住居跡のような深さが1.5mもある住居跡も認められる。柱穴は、検出状況から、3本ないし4本の支柱穴が配されているが、柱穴が検出されなかった住居跡も認められる。4本柱の支柱穴については、複式炉の中軸線を挟んだ両側に配されている。

この他の内部施設を見ると、I期と同様に壁溝を持つものや、埋設土器を持つものなどが認められる。壁溝を持つものでは、245号住居跡のように、壁溝内に壁材の痕跡が認められるものもある。このため、245号住居跡の壁溝は壁板を施す際の掘形と考えられる。住居内の埋設土器は、いずれも正位の状態で設置されており、I期とは埋設状況が異なっている。特に、279号住居跡の埋設土器は、複式炉の中軸線の延長線上の壁際に埋設されていた。また、190号住居跡のように、剥片を収納した施設を持つもの、179・280号住居跡のように出入口状の施設を持つものも認められた。

III期 住居跡には、石囲炉を持つ竪穴住居跡と石囲炉を持つ敷石住居跡が認められる。石囲炉を持つ竪穴住居跡の平面形は、遺存状態が悪く、全体の平面形が分かるものは少ないが、260号住居跡などを見ると楕円形を呈しているものも認められる。規模は、長径が3～5mのものが多く。炉跡は、住居跡のほぼ中央に作られ、形状は、方形状を呈したものと台形状を呈したものとが認められる。炉跡には、232・260号住居跡のような土器埋設石囲炉、171号住居跡の炉跡の複式炉が退化したような形状を呈したものも認められる。柱穴については、検出されたものは少なく、柱穴がどの様に配置されていたかは不明な点が多いが、171号住居跡のように3本柱のものも認められる。内部施設については、232・260号住居跡のように埋設土器を持つものが認められるが、I・II期で認められた壁溝は確認されなかった。

石囲炉を持つ敷石住居跡については、遺存状況の良い225・229号住居跡で概観してみる。平面形は、方形を基調とするが、南側の一部がやや張り出しており、張出部を意識して作られている。規模は、長径が4mを呈し、N期に認められる敷石住居跡に比べ小型である。225号住居跡は、掘形

内に敷設していることから、竪穴式の敷石住居跡である。伊跡は、住居跡の中央から南側にかけて作られている。形状には、方形のものと台形状のものが認められる。柱穴は、確認できなかった。内部施設には、埋設土器が認められ、斜位～横位に埋設されている。

Ⅳ期 住居跡には、Ⅲ期と同様に石囲炉を持つ竪穴住居跡と石囲炉を持つ敷石住居跡が認められるが、Ⅳ期b～dは大型の敷石住居跡で構成される。石囲炉を持つ竪穴住居跡の平面形は、遺存状況などから、円形ないし楕円形を呈していたものと思われる。規模は、長径が3m程度のものが多い。伊跡は、住居跡のほぼ中央に位置するものと、220号住居跡のように壁寄りで作られるものがある。伊跡の形状は、方形ないし円形を呈したものが認められる。柱穴については、検出できな

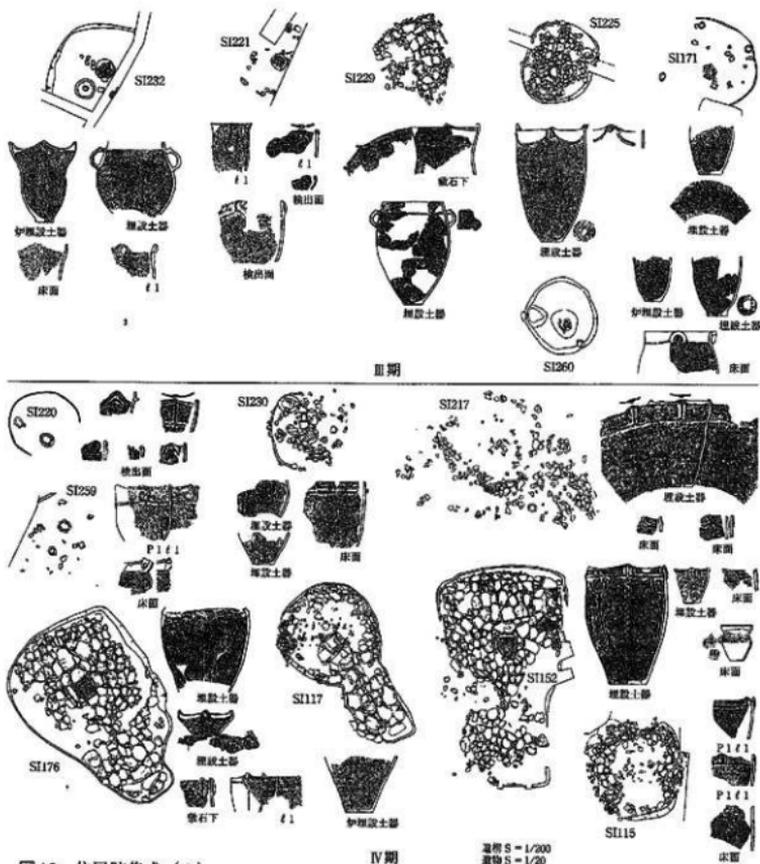


図16 住居跡集成(2)

い住居跡が多く、Ⅲ期と同様に柱穴については不明な点が多い。

石囲炉を持つ敷石住居跡には、115・230号住居跡のように平面形が、方形状を呈しているものと、117・152・176・217号住居跡のような主体部と張出部を持つ、柄鏡形を呈したものが認められる。敷石住居の多くは、窪穴状の掘形内に石を敷設していることから、窪穴式の敷石住居跡と考えている。平面形が方形を呈する敷石住居跡の規模は、3～4mを測る。炉跡は、住居跡のほぼ中央に作られ、形状は方形を呈している。床に敷かれる石は、後述する柄鏡形の敷石住居跡に比べ、比較的小さい。内部施設は、床下ピットや埋設土器などが確認されているが、柱穴については、検出できなかった。

次に、平面形が柄鏡形を呈した敷石住居跡について概観する。柄鏡形を呈した敷石住居跡には、116・117号住居跡のような主体部が円形を呈すものと、152・176のように方形を呈したものが認められる。また、217号住居跡のように、住居跡周縁に縁石を巡らすものも認められる。住居跡の規模は、主体部が円形を呈す敷石住居跡で6～7m、主体部が方形を呈す敷石住居跡で8mを測る。

炉跡は、主体部の中央に作られ、形状は方形を呈している。117号住居跡の炉跡は、土器埋設石囲炉である。敷設される石は、比較的大型の石が多く、炉跡周辺や張出部に特に大型の石が用いられ、丁寧に構築される傾向にある。主体部と張出部の連結部は、152号住居跡のように幅の狭い通路状を呈したのも認められる。また、張出部には、出入口を意識しているのか、117号住居跡のように壁が外側に膨らみ、石壁を呈したものもある。

内部施設を見ると、埋設土器を持つ住居跡が多い。埋設場所は、主体部の壁隅、張出部、連結部に埋設され、住居跡によって様々である。土器の多くは、正位に埋設され、底面中央を穿孔したもののや底部が欠損している土器が多い。また、117のように主体部に円形の配石遺構を持つものも認められる。柱穴については、検出することはできなかった。

炉 跡 (図17・18)

ここでは、Ⅰ～Ⅳ期の住居跡に作られた炉跡について述べてみたい。本遺跡から検出された炉跡は、複式炉62基、石囲炉29基、その他・不明36基である。炉跡については、形状や炉の特徴などから、A～Dに分類した。分類にあたっては、形状がある程度把握できる炉跡を中心とした。

A類 土器埋設部・石組部・前庭部から構成される複式炉で、平面形が三角形を呈するものである。本類に属す複式炉を持つ住居跡は10軒である。この内、代表的なものを図17に示した。

規模は、いずれも全長3m程で比較的大きい。土器埋設部から前庭部にかけては、小型の礫で整えられ、丁寧に作られるものが多い。土器埋設部は、複数の土器が埋設される傾向にある。石組部は、比較的小さな礫で構築されているが、土器埋設部に接する部分には、大型の礫を配している。石組部の断面形は、「V」字状を呈している。前庭部は「ハ」の字状を呈し、住居跡の壁に取り付くものが多い。また、前庭部の側壁に礫を配しているものもある。

A類に分類したものの中には、265号住居跡の炉跡のように、土器埋設部を持たず、石組部を2つ連結させているものも認められる。また、251号住居跡の炉跡は、旧炉の土器埋設部上方に方形

の石組部を新たに構築しており、他の炉跡とは様相が異なる。

B類 平面形が、長方形を呈す複式炉である。本類に属す複式炉を持つ住居跡は26軒で、代表的なものを図17に示した。

規模は、全長2m程度のものが多い。土器埋設部から前庭部にかけては、比較的小型の礫で形状を整えているが、A類に比べ作りは粗雑である。土器埋設部は、複数の土器を埋設しているものも認められるが、基本的には土器1個を埋設する傾向にある。土器埋設部と石組部の連結部には、278号住居跡のように括れを持つものも認められる。石組部は、大型の礫で構築されることが多く、A類と同様に土器埋設部に接する部分には、特に大型の礫を配している。石組部の断面形は、A類と同様に「V」字状を呈している。前庭部は方形状を呈し、住居跡の壁に取り付くものが多く、側壁に礫を配しているものも認められる。

C類 平面形が、長方形を呈す複式炉で、前庭部が小型のもの。本類に属す複式炉を持つ住居跡は7軒で、代表的なものを図18に示した。

規模は、全長1~2m程度のもが多く、複式炉の中では小型である。土器埋設部は、土器1個

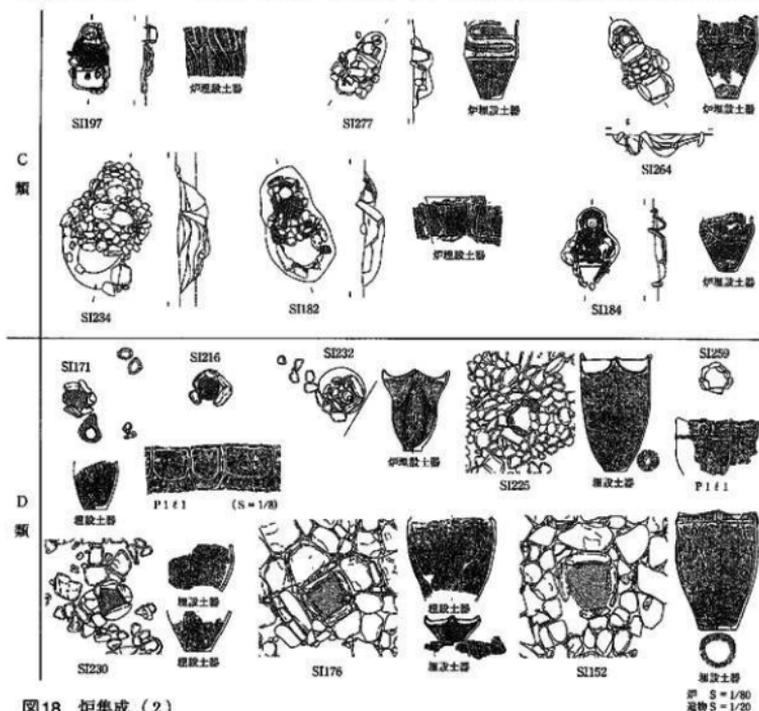


図18 炉集成(2)

を埋設している。土器埋設部と石組部の連結部は、括れを有するものが多い。石組部は、大型の礫で構築され、断面形が箱状を呈し、A・B類とは形状が異なっている。前庭部は方形状を呈しているが、184号住居跡のように三角形状を呈するものも認められる。

D類 石囲炉を本類とした。石囲炉を持つ住居跡は29軒で、代表的なものを図18に示した。石囲炉については、平面形から、方形・台形・円形状のものが認められる。

規模は、縁石の外側で計測した長径で、50～90cmを測る。規模の大きい石囲炉は、主に大型の柄鏡形敷石住居跡に認められる。石囲炉の中には、232号住居跡のように炉内に埋設土器を持つものや、171号住居跡のように石囲炉脇に埋設土器を持つものもある。

次に、A～D類の炉跡の時期について述べてみたい。A類は主に本遺跡のⅠ期に、B・C類はⅡ期に認められる傾向にある。時期的な炉跡の変化を見てみると、Ⅰ期とⅡ期とでは、平面形や土器埋設部の土器の個体数、前庭部の形状に違いが認められる。また、B・C類が属すⅡ期においては、前庭部の規模や石組部の断面形に違いが認められる。

Ⅱ期における複式炉を時間的に見てみると、B類は前半期、C類は後半期に認められる傾向にあり、前庭部の小形化や石組部断面形の箱形化は、複式炉の中でも、新しい様相を持ったものと言えよう。しかし、本遺跡においてはⅠ・Ⅱ期間で、A・B類が混在して認められることから、必ずしも複式炉が時期的な推移を示すとは言い難い。

D類は、本遺跡Ⅲ・Ⅳ期に認められる炉跡である。時期的な炉跡の変化を見ると、Ⅲ期では平面形が方形ないし台形状を呈した小規模な石囲炉を用いている。Ⅳ期前半の炉跡は、規模的にはⅢ期と変わらないが、平面形が円形状を呈したものが多い。Ⅳ期後半の炉跡の多くは、規模的に大きく、平面形が方形を呈している。これらは、前述したように大型の柄鏡形敷石住居跡に認められる。

第2節 その他の遺構

高木遺跡調査9区からは、住居跡の他に、土坑、屋外焼土遺構、配石遺構、土器埋設遺構、ピット群、石罨集中地点などが検出されている。本節では、これらの遺構の中で、土坑、配石遺構、土器埋設遺構について概観してみたい。また、記述にあたっては、各遺構の中で特徴的なものを中心に取り扱った。

土坑 土坑は、235基検出された。時期は、出土遺物や検出層位の検討などから、中期後葉～後期前葉、晩期に属するものと考えている。分布状況は、各時期の住居跡の分布状況に類似している。土坑の用途は不明なものが多いが、落とし穴（10号土坑）、炉跡と考えられるもの（134・190号土坑）、土器埋設を目的としたもの（109・110・112・188・232号土坑）、剥片の埋納を目的としたもの（248・258号土坑）などが認められる。

土器埋設を目的とした土坑については、調査の際に土坑として遺構番号を登録してしまったもので、本来は土器埋設遺構と考えている。232号土坑は、埋設土器の他に多量の剥片が出土している

が、剥片のみを埋納した248・258号土坑とは、埋納行為の意味合い（供献と収納・取蔵）が違うものと考えている。この他、イノシシの焼骨を多量に含む土坑（124号土坑）も認められる。

配石遺構 配石遺構は、6基検出されている。時期は、中期後葉～後期前葉に属するものと考えているが、特に後期初頭～前葉にかけて、比較的多く構築されている。配石遺構として調査したものの中には、伊跡や敷石住居跡の残欠も含まれている。これらを除いた配石遺構を見ると、扁平礫を方形状に並べ、下部に埋設土器を持つもの（23・29・37号配石遺構）、下部に土坑状の施設を有するもの（9・12・34・38号配石遺構）、広範囲に小規模な配石遺構を集めたもの（45～51・60・65号配石遺構）などが認められる。配石遺構の分布状況を見ると、住居跡に近接して構築されるものの、集落内の一定の場所に作られる傾向にある。

次に、配石遺構の用途について考えてみる。土坑や埋設土器などの下部施設を持つものについては、その性格を裏付ける資料は確認されなかったが、越田和遺跡1～3号配石遺構や西方前遺跡第4群A配石遺構などの事例から、墓的施設とも考えられる。しかし、本遺跡の下部施設（土坑）については、墓坑としてはいずれも規模が小さく、墓とは判断し難い。また、広範囲に小規模な配石遺構を集めたものについては、石棒や土偶といった祭祀的要素を持つ遺物が出土していることから、集落内における祭祀に係わる施設と考えている。これらの配石遺構は、概ね本遺跡Ⅲ～Ⅳ期aに属するものと考えているが、下部施設を持つ配石遺構は集落内の広場に、祭祀に係わる配石遺構は集落の外縁部に構築される傾向にある。

土器埋設遺構 土器埋設遺構は、91基検出された。時期は、中期後葉～後期前葉に属するものと考えている。分布状況を見ると、調査区のはほぼ全域に分布している。時期別に分布状況を見ると、中期後葉～末葉にかけては調査区中央から北側に、後期初頭～前葉にかけては調査区中央から南側にまとまって分布する傾向にあり、各時期で分布域が異なる。また、後期初頭の土器埋設遺構を見ると調査区南側の自然堤防微高地上にまとまって分布する傾向にある。

埋設状況を見ると、正位・倒立・斜位・横位のものが認められるが、これらの埋設状況については各時期で認められ、特に時期ごとの埋設状況の相違は認められない。しかし、住居内の埋設状況を見ると、中期後葉では横位、中期末葉で正位、後期初頭～前葉では斜位～正位の状態での埋設する傾向にある。埋設土器の多くは、底面や胴部下半に穿孔が施されるものや、胴部下半が欠損したものが認められる。また、口縁部に人頭大の礫を据えているものや、口縁部を塞いだ礫が、土器内に沈み込んだものも認められた。

本遺跡における土器埋設遺構については、その用途を示すような資料は検出されなかったが、本遺跡上流5kmに位置する郡山市町B遺跡からは、後期前葉の埋設土器内から子供の歯が出土しており、土器内に子供が埋葬されていた事を窺わせる。調査9区で検出された全ての土器埋設遺構が、このような埋設施設とは判断し難いが、町B遺跡の事例から後期前葉ころの阿武隈川流域で、このような風習があったことは推測できよう。また、調査9区から検出した土器の大きさを見ると、容量によっては、幼児や子供に限られた埋葬施設ではないものと考えられる。

第3節 集落の変遷

高木遺跡調査9区の集落の形成時期は、検出された住居跡の出土遺物の検討などから、中期後葉頃と考えている。この時期の集落は、複式炉を持つ住居跡で構成され、出土遺物も大木9・10式土器を中心に出土しており、大木式土器文化を受容した集団の集落と考えられる。しかし、集落の形成時期に、複式炉内に異系統の土器が埋設されている住居跡も認められ、この時期に他地域の影響が集落内にあったことが窺える。他地域の土器を複式炉内に埋設する行為は、中期末葉には県内で認められるようになるが、中期後葉に異系統の土器を埋設するといった事例は少ない。

本遺跡における中期後葉～末葉にかけての集落は、住居跡の分布状況や出土遺物の内容から、継続して営まれ、比較的安定した時期を迎えたものと思われる。本遺跡において、形成期に認められた異系統の土器を複式炉内に埋設するといった行為は、中期末葉では認められず、出土遺物を見ても、異系統の土器は極少量である。集落形成時期に認められた他地域の影響は、集落の安定期（大木式土器の盛行）とともに、淘汰ないし排他されていったのかも知れない。中期後葉～末葉にかけて安定して作られた集落は、中期末葉後半に至り衰退傾向にある。これらの現象は、大木式土器および複式炉の終焉と重なる。

後期初頭の集落は、石田炉を持つ堅穴住居跡、敷石住居跡で構成される。出土する土器も、在地的な土器の他に、異系統の土器も認められる。敷石住居跡は、石田炉を持つ堅穴住居跡に部分的に敷設されるものと、小型の柄鏡形を呈したものが認められる。敷石住居跡については、従来祭祀に関係した住居跡および施設に位置付けるものと、一般的な住居跡に位置付ける2つの考え方があられる。本集落における敷石住居跡については、後期初頭の時期に異系統の土器が増加すること、後続する後期前葉の集落が敷石住居跡のみで構成されることなどから、従来の大木式土器文化圏にあった集落が、積極的に他地域の文化を受容した産物と思われ、集落を構成する一般的な住居跡と考えている。（本県においては、敷石が施された複式炉を持つ堅穴住居跡も認められ、既に中期末葉の時期に敷石文化が大木式文化圏に影響があったことが窺える。鈴鹿1986）また、後期初頭においては、異系統の土器を住居内や炉内に埋設する行為も再び認められる。

この様な他地域の文化を受容した影響は、住居跡や土器だけに認められるものではない。中期後葉～末葉に構築された土器埋設遺構に用いられる土器は、その大半が大木式土器であるのに対し、後期初頭では約半数の土器埋設遺構が、異系統の土器を埋設している。また、土偶にもその変化が認められる。大木土器圏内で一般的に施されてきた文様が、後期初頭において断絶されることや、配石遺構に関連した祭祀に土偶が用いられることである。この様に、後期初頭における高木遺跡調査9区の集落は、大木式土器文化の終焉に伴い、積極的に他地域の文化を受容していった時期と考えられ、集落の変遷において大きな画期と言えよう。

後期前葉は、石田炉を持った堅穴住居跡と敷石住居跡で構成される集落と、大型の柄鏡形敷石住

居跡で構成される集落とに大別できる。大型の柄鏡形敷石住居跡については、小規模な張出部を持つ柄鏡形住居跡から発展したものと考えられるが、これらの住居跡の変遷過程については、不明な点が多く、周辺地域の事例を含め、今後別の機会に検討してみたい。

本遺跡における最終的な集落構造は、石田炉を持つ堅穴住居跡との共存ではなく、敷石住居跡のみで構成されている。この様な背景には、後期初頭～前葉にかけて積極的に敷石文化を受容した結果、従来の集落到構築されていた石田炉を持つ堅穴住居跡が排他され、敷石住居跡が選択されたことに因るものと考えている。この事は、後期初頭～前葉にかけて多大な労力を払い、本遺跡に構築された配石遺構や敷石住居跡が物語っている。(山本暉久氏は、敷石風習が大木式土器文化圏内にもたらされた結果、複式炉に付随した堅穴式敷石住居跡が出現したものと考えられ、大木式土器文化圏の集団が柄鏡形態・構造の受容を拒否しながらも、排他的に敷石風習のみを受容して行った可能性を指摘している。山本2000)

高木遺跡調査9区に中期末葉～後期前葉に築かれた集落は、阿武隈川の洪水により、大型の柄鏡形を呈した敷石住居跡を最後に集落の終焉を迎えることとなる。

以上、簡略的に本遺跡の集落変遷について概観した。近年、本遺跡と同じような集落の変遷を迎える遺跡が数多く調査・報告(柴原A・越田和・西方前・倉屋敷・向田A・町B遺跡など)され始めている。これらは、本遺跡が立地する阿武隈川流域および支流域に分布する傾向が認められ、集落の形成時期に多少の時期差はあるものの、ほぼ同時期に集落が営まれていた可能性が高い。また、距離的に、集落間で交流があった遺跡もあるものと考えられる。これらの遺跡の相互関係を基に、各遺跡の遺構・遺物を検討していくことで、当地域における河川で繋がれた集落の在り方が明らかになって行くものと思われる。

(大西原)

引用・参考文献

- 相原淳一 1988 『大栗川遺跡・小栗川遺跡』 宮城県教育委員会
 阿部昭典 2000 『縄文時代中期末葉～後期前葉の変遷』 『物質文化』 69
 阿部芳朗 1987 『縄文後期前葉土器の構造と動態』 『磐台史学』 71
 石井 寛 1998 『柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察』 『縄文時代』 9
 1992 『赤名寺式土器の分類と変遷』 『調査研究集』 第9冊 (財)横浜市ふるさと歴史財団
 1993 『牛ヶ谷遺跡 華嚴台南遺跡』 (財)横浜市ふるさと歴史財団
 石本 弘 1989 『十五塚遺跡発掘調査報告書』 会津高田町教育委員会
 池谷信之 1990 『綱取・堀之内型注口土器』 『縄文時代』 1
 石塚 茂彦 1968 『加曾利式土器に関する一考察』 『群馬県の考古学』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 遠見克己 2000 『後田遺跡』 船引町教育委員会
 伊藤文三 1969 『福島市月時遺跡発掘調査』 『福島市の文化財』 福島市教育委員会
 櫻村光晴 1988 『福島県出土の縄文時代後期初頭の土器群』 (補遺) 『村上徹君追悼論文集』
 1990 『加曾利式土器の調査研究集』 第7冊 前橋市埋蔵文化財センター
 今村善晴 1977 『赤名寺式土器の研究』 上・下 『考古学雑誌』 63-1, 63-2
 上野真由美 1997 『東北地方南部における縄文時代中期後葉から後期初頭の土偶について』 『土偶研究の地平』
 2000 『若北V遺跡』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 柳宮 茂 1974 『複式炉文化論』 『福島考古』 15
 江原 英 2001 『縄文後期初頭から前葉における壘形土器発掘』 『研究紀要』 9 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
 海老原郁雄 1980 『槻沢遺跡』 栃木県教育委員会
 大竹憲治 1990 『船引・堂平遺跡』 船引町教育委員会
 1992 『矢大臣(新田)遺跡』 小野町教育委員会
 大野康男 1987 『山口宮土遺跡』 千葉県埋蔵文化財センター
 大平好一 1990 『築名部遺跡(第2次)』 『矢次地区遺跡発掘調査報告』 6 福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
 押山雄三 1987 『倉屋敷遺跡』 『郡山東部』 7 郡山市教育委員会
 1990 『福島県の複式炉』 『郡山市文化財研究紀要』 5 郡山市教育委員会
 1996 『向田A遺跡』 『郡山東部』 14 郡山市教育委員会
 2000 『町B遺跡』 『第6回市内遺跡発掘調査成果集』 調査報告会資料 郡山市教育委員会

- 2002 『東北地方南部における縄文後期前葉の土器』『第15回縄文セミナー 後期前半の再検討』
- 柿沼修平 1981 『称名寺式土器』『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 加藤道男 1984 『最新遺跡』『東北自動車道遺跡発掘調査報告書』K 宮城県教育委員会
- 金子章行 1987 『戸部遺跡』(財)福島県文化財調査事業団
- 金崎佳生 1987 『中山太田遺跡』 郡山市教育委員会
- 日下部善己 1978 『夏庭遺跡』 鶴岡市教育委員会
- 國島 聡 1990 『後期前期・前葉の土器群』『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』
- 國生 尚 1983 『湯沢遺跡発掘調査報告書(遺物編)』『若手県埋蔵文化財センター調査報告書』66
- 郷田 貞 1979 『千葉東部部ニュータウン7-1木戸作遺跡(第2次)』 千葉県文化財センター
- 後藤勝彦 1978 『上深沢遺跡』『東北自動車道遺跡発掘調査報告書』I 宮城県教育委員会
- 後藤信祐 1996 『根沢遺跡Ⅲ』 栃木県教育委員会
- 斎木 勝 1977 『千葉市中野御堂遺跡』 千葉県文化財センター
- 匠森健一 1976 『志久遺跡』『埼玉県遺跡調査報告書』31
- 1977 『前畑・鳥之上・出口・芝山』『埼玉県遺跡発掘調査報告書』12
- 1990 『鋼取Ⅰ式土器論序説』『史跡』15
- 志賀敏行 1992 『東北地方南部における縄文時代中期末葉の土器様相』『史跡』17
- 1986 『飯式野と敷石佐間跡』『福島の研究』(地質考古編) 講文堂
- 鈴木良一 1984 『上ノ台A遺跡(第1次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書』V 福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 1990 『上ノ台D遺跡』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書』XV 福島県教育委員会 (財)福島県文化センター
- 鈴木 源 1994 『鋼取Ⅰ式土器再編』『史跡』20
- 1995 『大木10式土器器Ⅱ』『史跡』21
- 1997 『鋼取Ⅱ式土器器Ⅱ』『史跡』23
- 鈴木健雄 1990 『称名寺・堀之内Ⅰ式研究の諸問題』『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』
- 1991 『称名寺式の変化と文様帯の系統』『土曜考古』16
- 先崎忠彦 1984 『鶴首山遺跡』 鹿嶋町教育委員会
- 1985 『大平塚古墳遺跡』『鹿嶋町遺跡分布調査報告』3 鹿嶋町教育委員会
- 武田耕平 1989 『愛宕原遺跡』 福島市教育委員会 (財)福島市振興公社
- 1986 『本道端遺跡』『山内町埋蔵文化財調査報告書』七南町教育委員会
- 田村 栄 1999 『矢野時代における鋼取Ⅰ式土器』『鋼取Ⅰ式土器調査委員会(財)栃木県文化振興事業団』
- 塚塚伸弥 1999 『台田遺跡発掘調査報告書』 大玉村教育委員会
- 戸田茂司 1989 『西方前遺跡Ⅲ(図解編)』 三春町教育委員会
- 1982 『西方前遺跡Ⅲ(本文編)』 三春町教育委員会
- 丹羽 茂 1971 『東北地方における中期縄文時代中葉・後葉土器群研究の現段階』『福島考古』12
- 1981 『大木土器』『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 1982 『菅生田遺跡』『東北自動車道遺跡発掘調査報告書』VI
- 1989 『中類大木式様式』『縄文大観』1 小学館
- 芳賀英一 1985 『道ノ上遺跡』『国営会津農水利事業関連遺跡発掘調査報告書』III 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 1986 『釜山・武ノ内遺跡発掘調査報告書』 釜山町教育委員会
- 原 允広 1985 『小田川D遺跡』『母畑地区遺跡発掘調査報告書』18 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 福島雅哉 1987 『岡波原土坑塚における縄文時代中期後半の土器』『同志社大学考古学シリーズ』Ⅲ
- 1989 『築原A遺跡』『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書』2 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 1996 『越田和遺跡』『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書』8 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 藤谷 誠 1989 『深沢A遺跡』『矢吹地区遺跡発掘調査報告書』4 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 木間 宏 1990 『東北地方南部における縄文後期前葉土器群の宮庭遺物』『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』
- 1990 『北向遺跡』『東北横断自動車道遺跡調査報告』7 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 1993 『馬場平B遺跡』『東北横断自動車道遺跡調査報告』20 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 1994 『大木10式土器の考え方』『しのぶ考古』10
- 松本 茂 1985 『堂平B遺跡』『玉川村文化財調査報告書』2
- 1968 『鋼取貝塚第四地点発見の堀之内Ⅰ式期土器の考察』『小名浜』
- 1970 『いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文式土器について』『考古』16号
- 1975 『大畑貝塚調査報告』
- 1977 『いわゆる鋼取貝塚C地区の土器について』『考古』19号
- 1982 『南東北』『シンボシウム堀之内式土器資料集』
- 1999 『第一編 考古編』『本宮町史』4
- 真山 哲 1985 『小栗川遺跡』『ヒマダダム関連遺跡発掘調査報告書』I 宮城県教育委員会
- 1996 『納鋸形住居址出現研究をめぐる一試論』『考古学論究』第4号
- 日村吉明 1975 『飯沢上原A遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書』 福島県教育委員会
- 森 真喜彦 1974 『縄文時代における敷石遺構について』『福島考古』第15号
- 1985 『84飯沢上原遺跡発掘調査報告書』 福島県教育委員会
- 山内幹夫 1990 『上ノ台A遺跡(第2次)』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告書』XV
- 山岸英夫 1990 『法正沢遺跡』『東北横断自動車道遺跡調査報告書』11 福島県教育委員会(財)福島県文化センター
- 山本孝司 1992 『加曾利3-4式と曾利V式について』『古代』94
- 山本順久 1982 『敷石住居跡』『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 1995 『納鋸形(敷石)住居跡成立期の再検討』『古代探案』Ⅳ
- 2000 『外縁部の納鋸形(敷石)住居』『縄文時代』11
- 柳澤清一 1980 『大木10式土器論』『古代探案』
- 1988 『大木10式土器論』『紀勢』『北奥古代文化』19
- 吉田幸一 1987 『馬場中野遺跡』『郡山東部』Ⅲ 郡山市教育委員会
- 吉田 祐 1960 『横内市称名寺貝塚発掘調査報告』『東京都武蔵野郷土館調査報告書』I
- 渡辺 紀 1995 『六反田遺跡』 仙台市教育委員会

写 真 図 版

第1編 たかぎ高木遺跡



1 高木遺跡調査区遠景（北西より）



2 高木遺跡調査区近景（北西より）



3 遺物包含層検出状況（東より）



4 調査区北側遺構群（南より）



5 調査区中央遺構群（東より）



6 調査区南側遺構群（西より）



7 基本土層N 20- 84- 86グリッド (南より)



8 基本土層N 22- 24グリッド (北より)



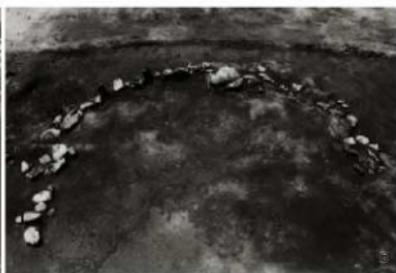
9 67号住居跡(東より)



10 116号住居跡(南より)



11 115号住居跡(南より)



12 115号住居跡細部

- a 東西土層(南より) b 緑石全景(南より)
 c 遺物出土状況(南西より) d 遺物出土状況(北より)



13 117号住居跡（南東より）



14 117号住居跡細部

a 東西土層（南より）
b 炉断面（南西より）
c 石垣施設検出状況（西より）
d 石垣施設全景（南西より）



15 132号住居跡(東より)



16 133号住居跡(西より)



17 150号住居跡(西より)



18 163号住居跡(南東より)



19 152号住居跡 (南より)



20 152号住居跡細部

a 東西土層 (南より) b 炉全景 (南より)
 c 敷石細部 (東より) d 埋設土器断面 (西より)



21 168号住居跡(南より)



22 172号住居跡(西より)



23 171号住居跡(西より)



24 171号住居跡細部

a 全景(西より) b 炉全景(西より)
c 炉新耐(南より) d 埋設土器新耐(南より)



25 175号住居跡(南東より)



26 175号住居跡細部

a 南北土層(南東より) b 埋設土器検出状況(南より)
c 埋設土器新割(東より) d 敷石新割(南より)



27 176号住居跡 (南東より)



28 176号住居跡細部

a 炉全層 (東より) b 敷石細部 (東より)
c 敷石細部 (東より) d 埋設土器断面 (南東より)



29 177号住居跡(南より)



30 177号住居跡細部

a 南北土層(東より) b 炉検出状況(東より)
c 炉土層(東より) d 炉断面(東より)



31 179号住居跡(南より)

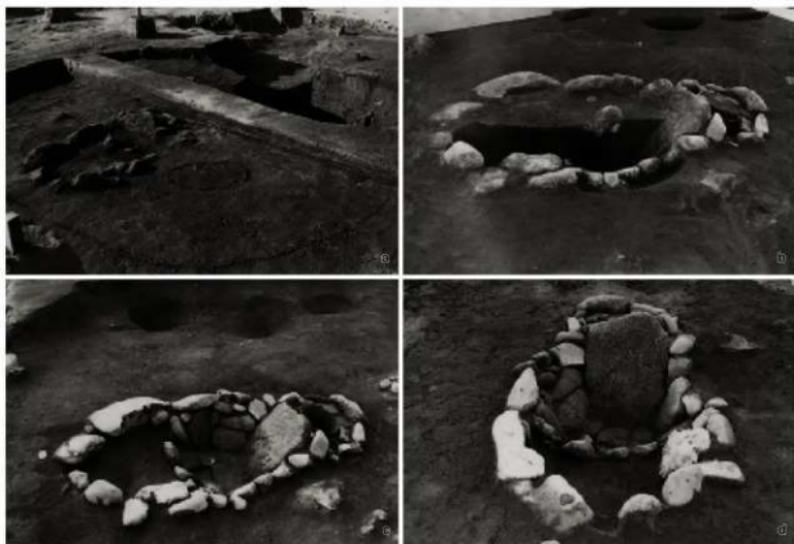


32 179号住居跡細部

a 南北土層(西より) b 炉土層(西より)
c 炉全景(西より) d 炉断面(西より)



33 182号住居跡（南より）



34 182号住居跡細部

a 南北土層（南東より）
b 炉土層（東より）
c 炉全景（東より）
d 炉全景（南より）



35 183号住居跡 (南西より)



a



b



c



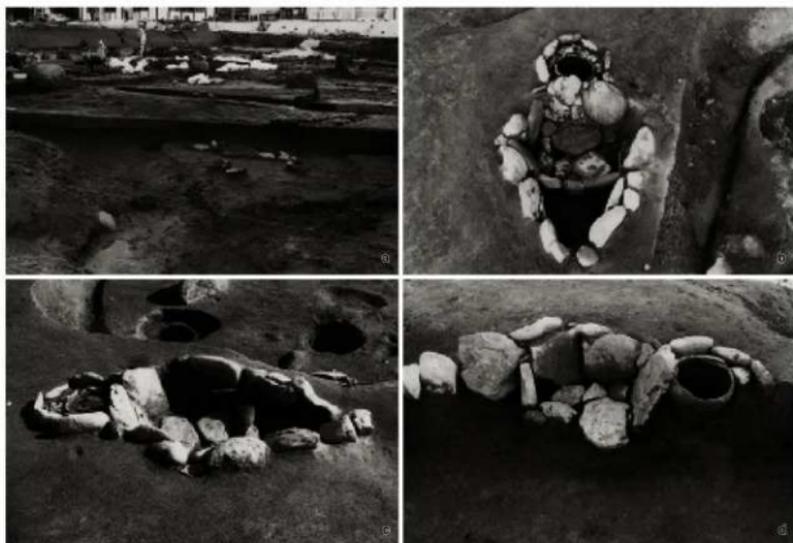
d

36 183号住居跡細部

a 南北土層 (北西より) b 炉土層 (南東より)
c 炉全景 (西より) d 炉全景 (北より)



37 184号住居跡(南より)

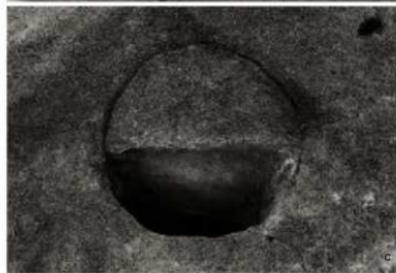


38 184号住居跡細部

a 南北土層(西より) b 炉全景(南より)
c 炉全景(西より) d 炉断面(東より)



39 186号住居跡(西より)



40 186号住居跡細部

a 炉土層(北より) b 炉全層(北より)
c P1土層(東より) d P2土層(北より)



41 189号住居跡(西より)



42 189号住居跡細部

a 南北土層(西より) b 炉土層(南西より)
c 炉全景(南より) d 炉全景(東より)



43 190号住居跡(東より)



44 190号住居跡細部

a 南北土層(東より) b 炉跡出状況(東より)
c 炉全景(東より) d 炉断面(南より)



45 197号住居跡(南西より)



46 197号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 炉全景(西より)
c 炉断面(東より) d P5遺物出土状況(南より)



47 198号住居跡(南より)



48 198号住居跡細部

a 炉建設土器土層(西より) b 炉全景(南より)
c 炉全景(東より) d 炉断面(西より)



49 201号住居跡(南東より)



50 201号住居跡細部

a 南北土層(西より) b 炉全景(南より)
c 炉全景(西より) d 炉断面(東より)



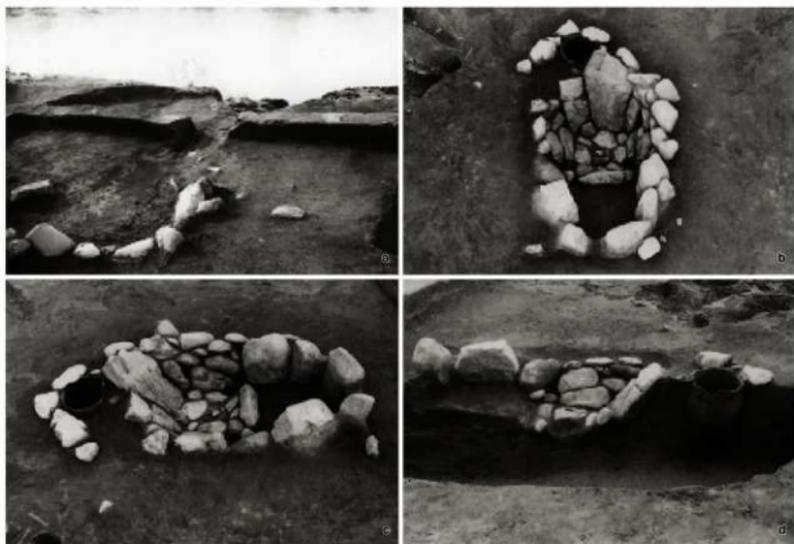
51 202号住居跡(東より)



52 204号住居跡(南より)



53 203号住居跡(南より)



54 203号住居跡細部

a 南北土層(東より) b 炉全景(南より)
c 炉全景(西より) d 炉断面(東より)



55 205号住居跡(南より)



56 206号住居跡(南西より)



57 207号住居跡(南より)



58 209号住居跡(南西より)



59 208号住居跡(南より)



60 208号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 全景(南より)
c 炉全景(南より) d P7全景(東より)



61 210号住居跡(南より)



62 210号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 遺物出土状況(西より)
c 炉検出状況(西より) d 炉全景(東より)



63 211号住居跡(南より)



64 212号住居跡(南西より)



65 213号住居跡(南より)



66 213号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 全景(北より)
c 炉全景(南より) d 炉全景(東より)



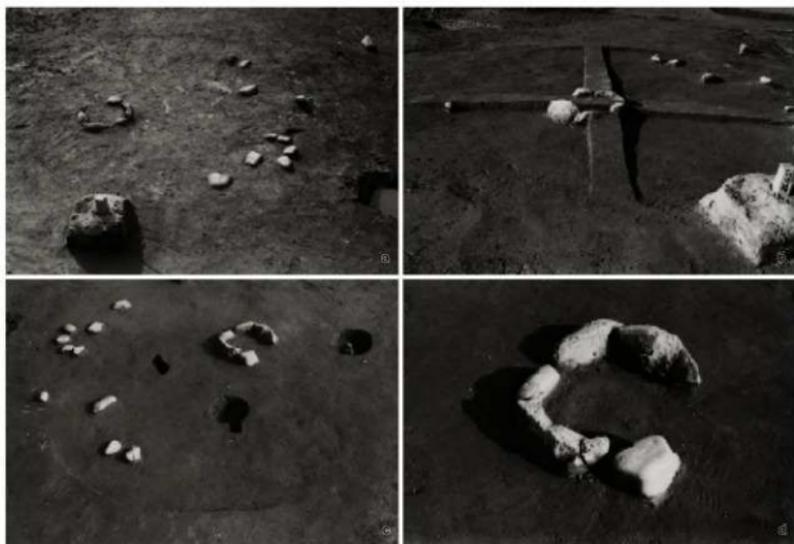
67 215号住居跡（東より）



68 218号住居跡（東より）



69 216号住居跡(南西より)



70 216号住居跡細部

a 検出状況(北より) b 南北土層(東より)
c 全景(南より) d 円全景(南西より)



71 217号住居跡(南東より)



72 217号住居跡細部

a 全景(南東より) b 敷石細部(南より)
c 敷石細部(南東より) d 埋設土器断面(東より)



73 219号住居跡(南より)



74 220号住居跡(南より)



75 221号住居跡(西より)



76 222号住居跡(南東より)



77 223号住居跡(南より)



78 227号住居跡(東より)



79 224号住居跡（南東より）

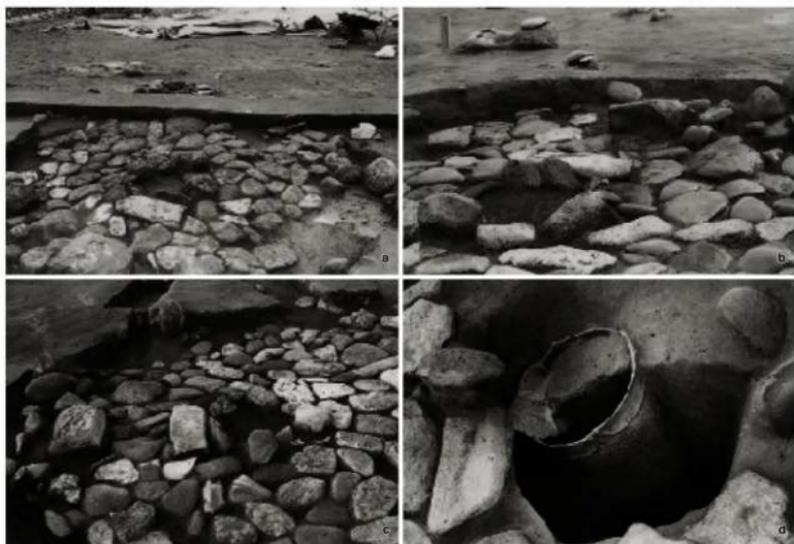


80 224号住居跡細部

a 東西土層（南より） b 炉土層（南より）
c 炉土層（北西より） d 伊新割（南より）



81 225号住居跡(南より)



82 225号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 炉全容(南より)
c 敷石細部(西より) d 埋設土器断面(南東より)



83 226号住居跡(北東より)



a



b



c



d

84 226号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 遺物出土状況(南より)
c 遺物出土状況(南西より) d 弥生土(西より)



85 228号住居跡(南より)



86 228号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 炉土層(北より)
c 炉金層(北より) d 炉新割(北より)



87 229号住居跡(北東より)



88 231号住居跡(南東より)



89 230号住居跡(北東より)



90 230号住居跡細部

a 東西土層(北より) b 埋設土器検出状況(南より)
c 埋設土器新窟(北東より) d 穿新窟(東より)



91 232号住居跡(北西より)

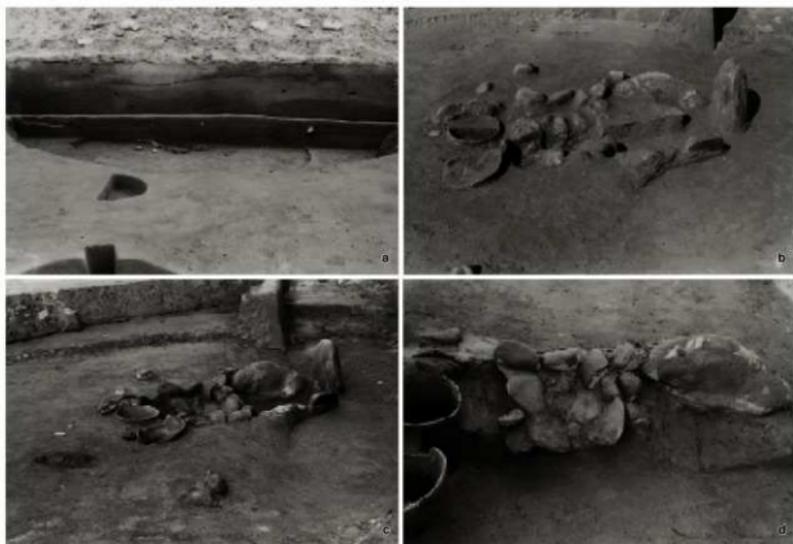


92 232号住居跡細部

a 南北土層(東より) b 炉土層(北東より)
c 炉全景(北西より) d 炉断面(南西より)



93 233号住居跡(東より)



94 233号住居跡細部

a 南北土層(西より) b 炉土層(南より)
c 炉金兼(南西より) d 炉新割(南より)



95 234号住居跡(南より)



96 234号住居跡細部

a 南北土層(東より) b 炉土層(東より)
c 炉全景(南より) d 壁板痕跡(東より)



97 235号住居跡(南より)



98 237号住居跡(南より)



99 236号住居跡(南より)



a



b



c



d

100 236号住居跡細部

a 炉全層(西より) b 炉全層(南より)
c 炉断面(西より) d P1遺物出土状況(南より)



101 238号住居跡(南より)



102 239号住居跡(西より)



103 240号住居跡(南より)



104 242号住居跡(南より)



105 241a号住居跡(東より)



106 241a号住居跡細部

a 東西土層(北より) b 全景(北より)
c 炉全景(南東より) d 炉細部(西より)



107 241b号住居跡(北より)



108 241b号住居跡細部

a 炉検出状況(南より) b 炉土層(南西より)
c 炉金網(南より) d 壁溝土層(西より)



109 243号住居跡（南西より）



110 243号住居跡細部

a 東西土層（南より）
b 炉検出状況（南より）
c 炉全景（南より）
d 炉断面（西より）



111 244号住居跡(南より)

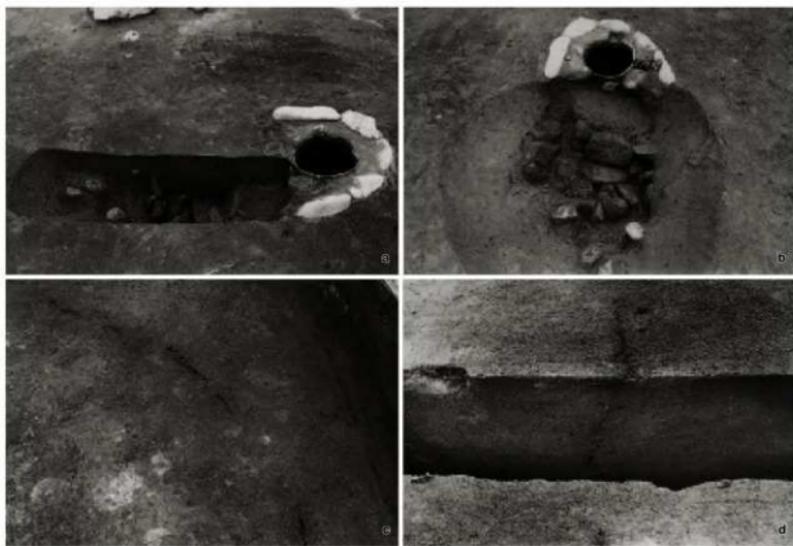


112 244号住居跡細部

a 検出状況(東より) b 東西土層(南より)
c 炉土層(東より) d 炉全景(南東より)



113 245号住居跡(西より)



114 245号住居跡細部

a 炉土層(東より) b 炉全象(南より)
c 壁板痕検出状況(南より) d 壁板痕断面(南より)



115 246号住居跡(南より)



116 246号住居跡細部

a 東西土層(南西より) b 炉 a・b 全景(東より)
c 炉細部(北東より) d 炉 b 全景(南より)



117 247号住居跡（北より）



118 247号住居跡細部

a 炉検出状況（南より） b 炉土層（東より）
c 炉全景（南より） d 炉断面（東より）



119 248号住居跡(西より)



120 250号住居跡(東より)



121 249号住居跡(南西より)



122 249号住居跡細部

a 東西土層(南西より) b 炉土層(西より)
c 炉全景(南より) d 炉断面(西より)



123 251号住居跡(北東より)



124 251号住居跡細部

a 東西土壁(北東より) b 炉全景(東より)
c 炉細部(南東より) d 炉断面(南より)



125 252号住居跡(西より)



126 253号住居跡(東より)



127 254号住居跡(北より)



128 254号住居跡細部

a 南北土層(西より) b 炉全景(北より)
c 遺物出土状況(西より) d 遺物出土状況(南より)



129 255号住居跡(北より)



130 256・257・263号住居跡(西より)



131 258号住居跡(南西より)



132 259号住居跡(南東より)



133 260号住居跡(東より)



134 260号住居跡細部

a 東西土層(北東より) b 遺物出土状況(北西より)
c 炉全景(北西より) d 炉断面(西より)



135 261号住居跡(南より)



136 262号住居跡(南より)



137 264号住居跡(南より)



138 268号住居跡(西より)



139 265号住居跡 (南より)



140 265号住居跡細部

a 検出状況 (北より) b 東西土層 (南より)
c 炉全景 (南より) d 炉断面 (西より)



141 266号住居跡(南より)



142 266号住居跡細部

a 検出状況(北より) b 炉土層(西より)
c 炉金庫(南より) d 炉新割(東より)



143 267号住居跡(南より)



144 271号住居跡(南西より)



145 269号住居跡(南東より)



146 269号住居跡細部

a 東西土層(北より) b 遺物出土状況(南より)
c 炉全景(南より) d 炉断面(西より)



147 270号住居跡(南西より)



148 270号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 炉全景(南西より)
c 炉断面(南西より) d 遺物出土状況(南東より)



149 272号住居跡(東より)



150 273号住居跡(南西より)



151 274号住居跡(南より)



a



b



c



d

152 274号住居跡細部

a 検出状況(南より) b 炉土層(西より)
c 炉全景(西より) d 炉断面(西より)



153 275号住居跡(南より)



154 276号住居跡(東より)



155 277号住居跡(南より)



156 277号住居跡細部

a 南北土層(南東より) b 炉土層(西より)
c 炉全景(北西より) d 埋設土器断面(南より)



157 278号住居跡(東より)



158 278号住居跡細部

a 炉土層(南より) b 炉全景(南より)
c 炉全景(西より) d 炉断面(南より)



159 279号住居跡(南より)



160 279号住居跡細部

a 東西土壁(南より) b 炉全景(南より)
c 炉断面(東より) d 遺物出土状況(南より)



161 280号住居跡(南より)



162 280号住居跡細部

a 南北土層(西より) b 炭化材出土状況(南東より)
c 炉全貌(南西より) d 骨片出土状況(南より)



163 281号住居跡 (南東より)



164 281号住居跡細部

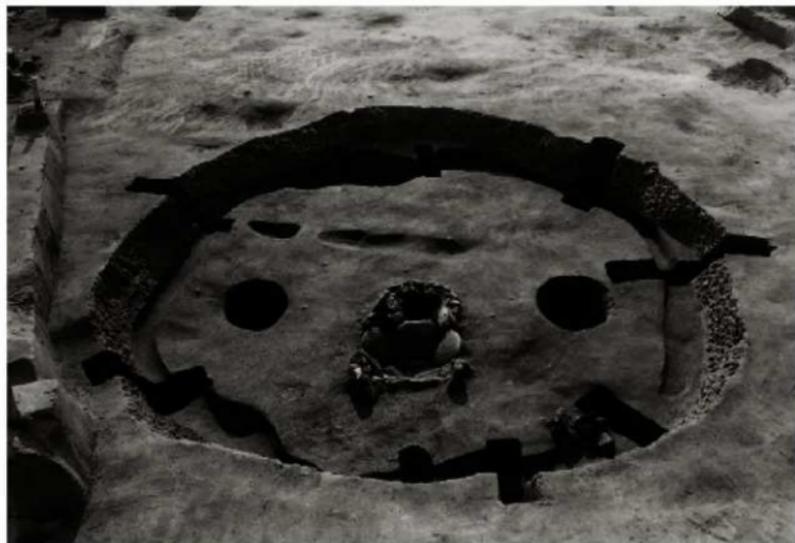
a 南北土層 (南西より) b 炉全景 (南東より)
c 炉全景 (西より) d 炉断面 (南より)



165 282号住居跡(南より)



166 285号住居跡(西より)



167 283号住居跡(東より)



a



b



c



d

168 283号住居跡細部

a 遺物出土状況(東より) b 炉残出状況(南西より)
c 炉全景(東より) d 炉全景(南より)



169 284号住居跡(南より)



170 284号住居跡細部

a 東西土層(南より) b 炉土層(東より)
c 炉埋設土器土層(東より) d 炉全景(南より)



171 286号住居跡(南より)

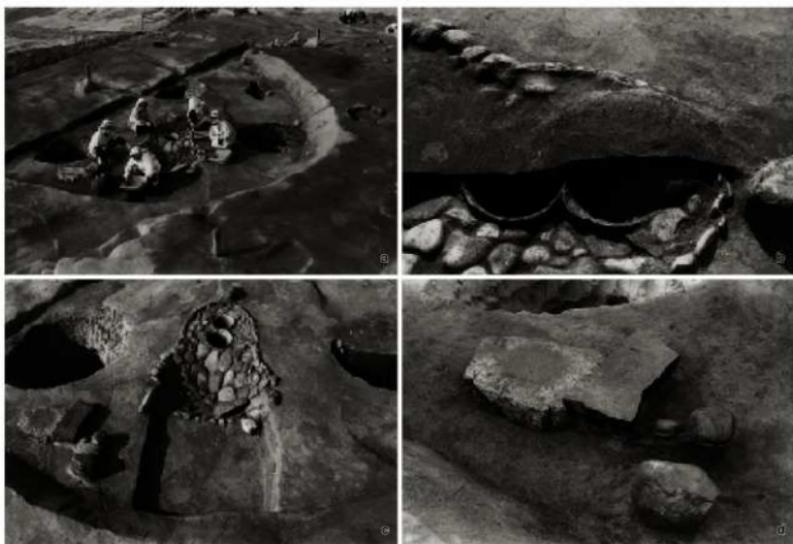


172 286号住居跡細部

a 検出状況(南西より) b 炉全景(南より)
c 炉全景(南西より) d 炉断面(西より)



173 287号住居跡(南より)



174 287号住居跡細部

a 全景(南より) b 炉埋設土器土層(東より)
c 炉全景(南より) d 遺物出土状況(南より)



175 288号住居跡(北東より)



a



b



c



d

176 288号住居跡細部

a 検出状況(東より) b 南北土層(東より)
c 炉全景(南東より) d 炉全景(北東より)



177 289号住居跡(南西より)



178 289号住居跡細部

a 南北土層(東より) b 遺物出土状況(北より)
c 炉様出土状況(南西より) d 炉全景(南西より)



179 290号住居跡(東より)



a



b



c



d

180 290号住居跡細部

a 南北土層(東より) b 炉埋設土器土層(西より)
c 炉全景(南より) d 炉断面(西より)



181 291号住居跡(南西より)



182 291号住居跡細部

a 炉検出状況(南西より) b 炉全景(南西より)
c 炉細部(東より) d 炉断面(東より)



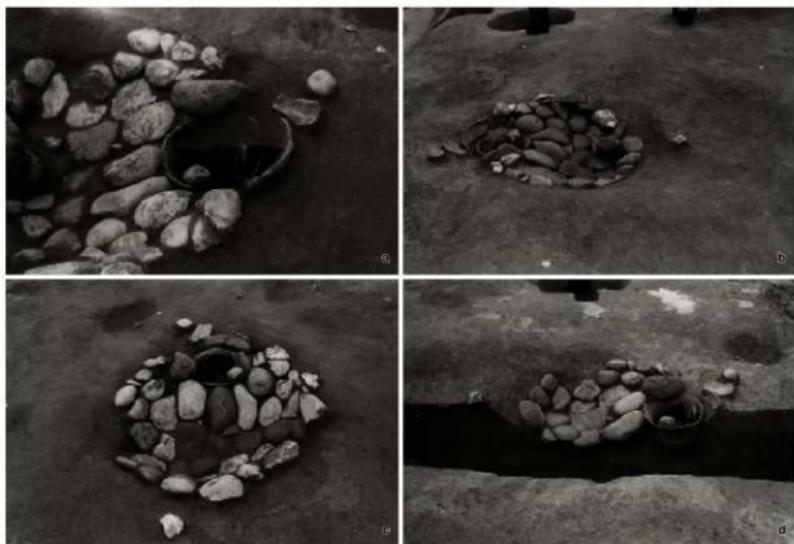
183 292号住居跡(北より)



184 294号住居跡(西より)

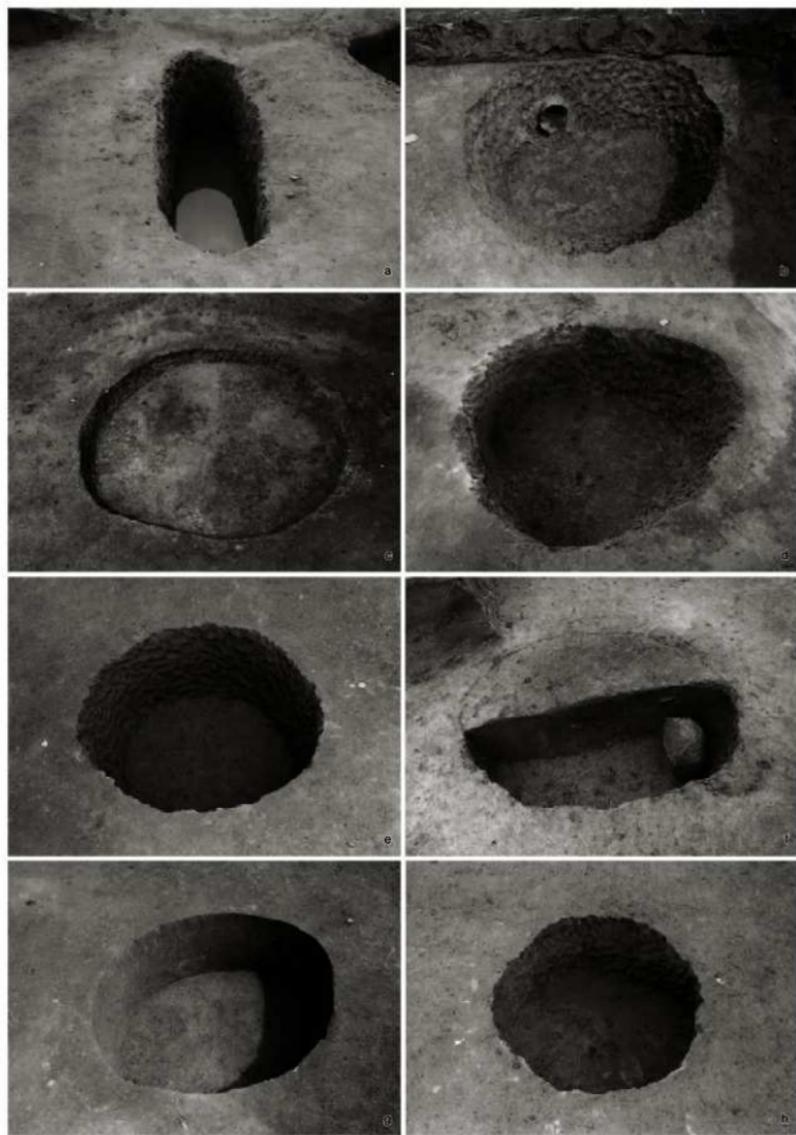


185 293号住居跡(南西より)



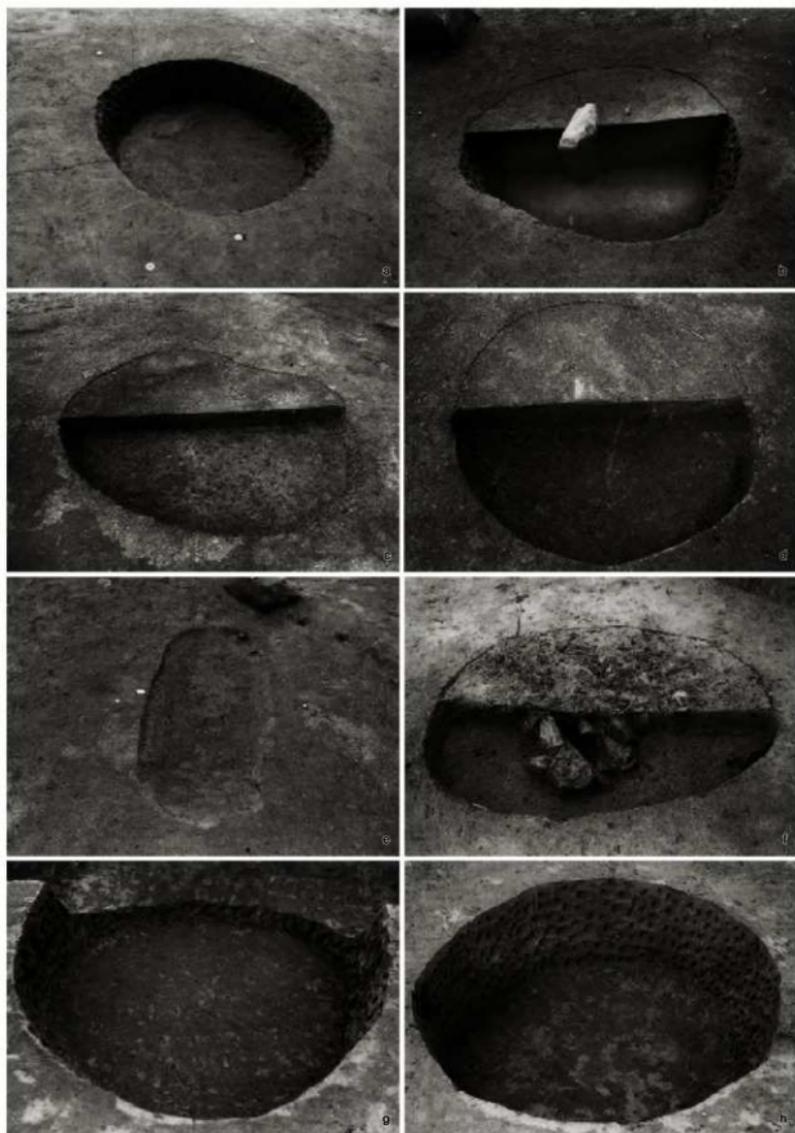
186 293号住居跡細部

a 埋設土器土層(南東より) b 炉金釜(北西より)
c 炉金釜(南西より) d 炉断削(南東より)



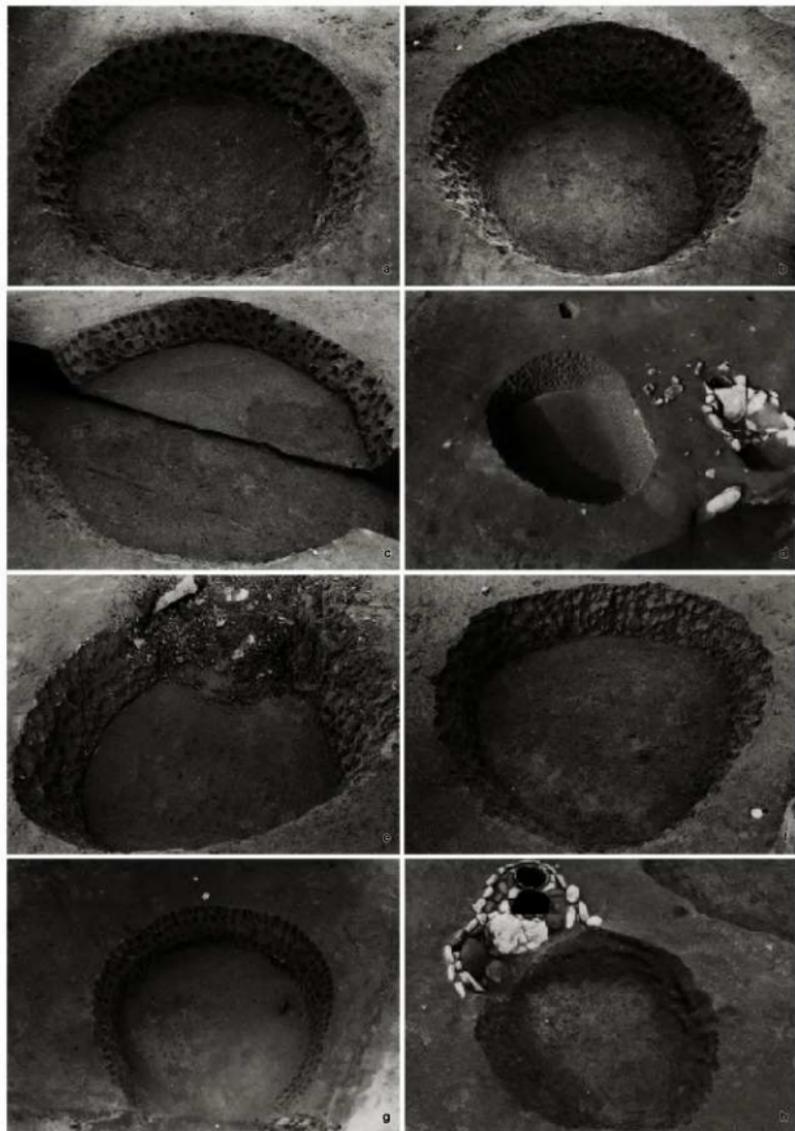
187 10・11・20・25・27・28・33・36号土坑

- | | |
|----------------|------------------|
| a 10号土坑 (南より) | b 11号土坑 (南より) |
| c 20号土坑 (南より) | d 25号土坑 (北より) |
| e 27号土坑 (南より) | f 28号土坑土層 (南西より) |
| g 33号土坑 (南西より) | h 36号土坑 (南より) |



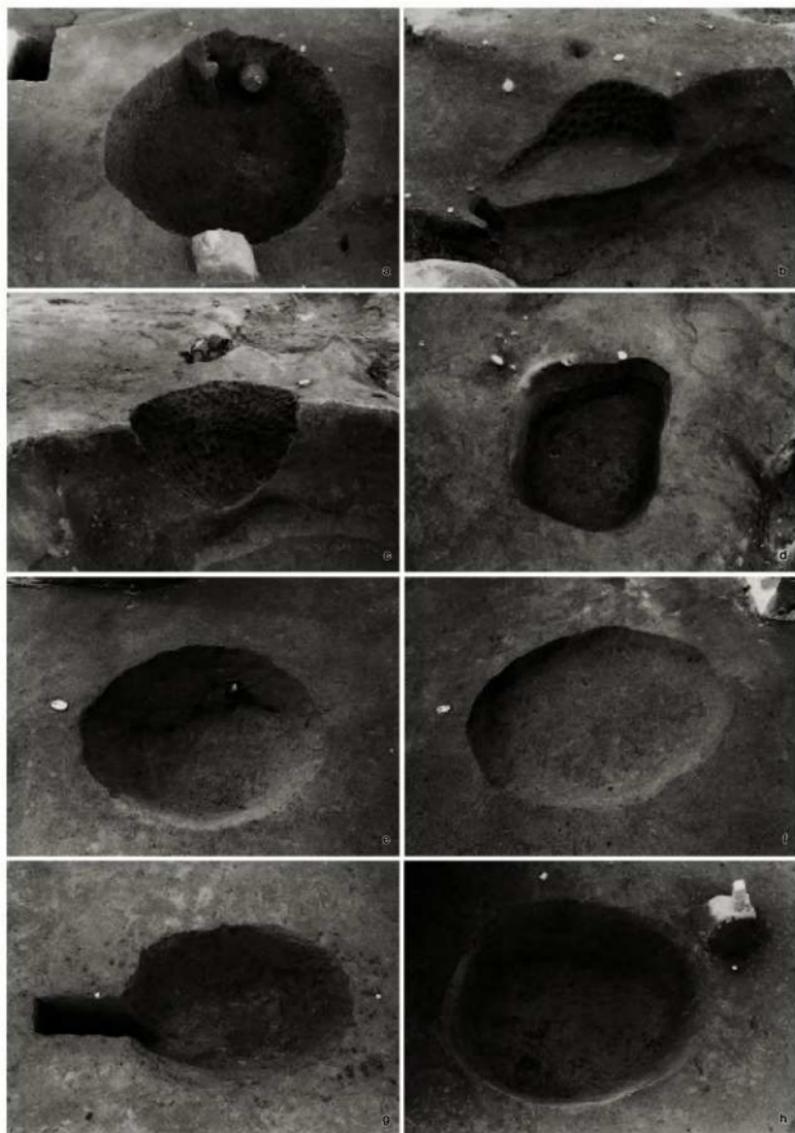
188 37～40・42・44～46号土坑

- | | |
|----------------|-----------------|
| a 37号土坑（南より） | b 38号土坑土層（東より） |
| c 39号土坑土層（南より） | d 40号土坑土層（南より） |
| e 42号土坑（南より） | f 44号土坑土層（南東より） |
| g 45号土坑（東より） | h 46号土坑（東より） |



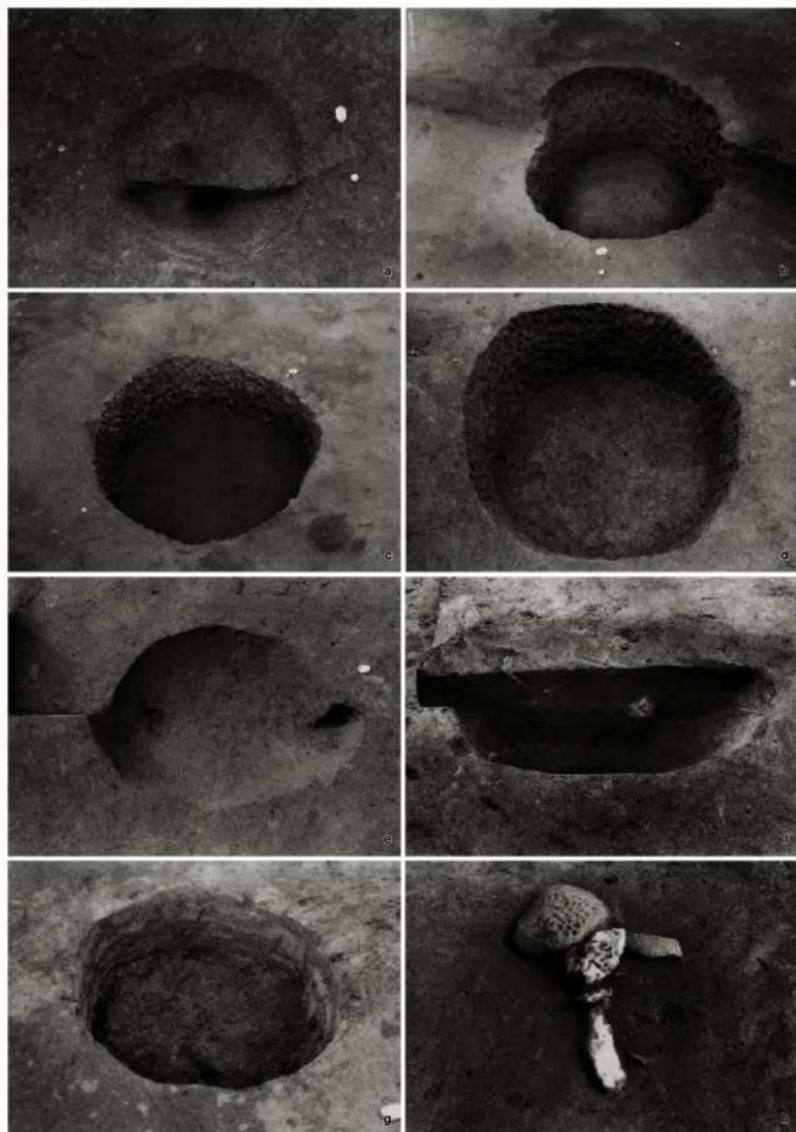
189 47 - 53・59号土坑

- | | |
|----------------|---------------|
| a 47号土坑 (東より) | b 48号土坑 (東より) |
| c 49号土坑 (東より) | d 50号土坑 (西より) |
| e 51号土坑 (南より) | f 52号土坑 (南より) |
| g 53号土坑 (北東より) | h 59号土坑 (南より) |



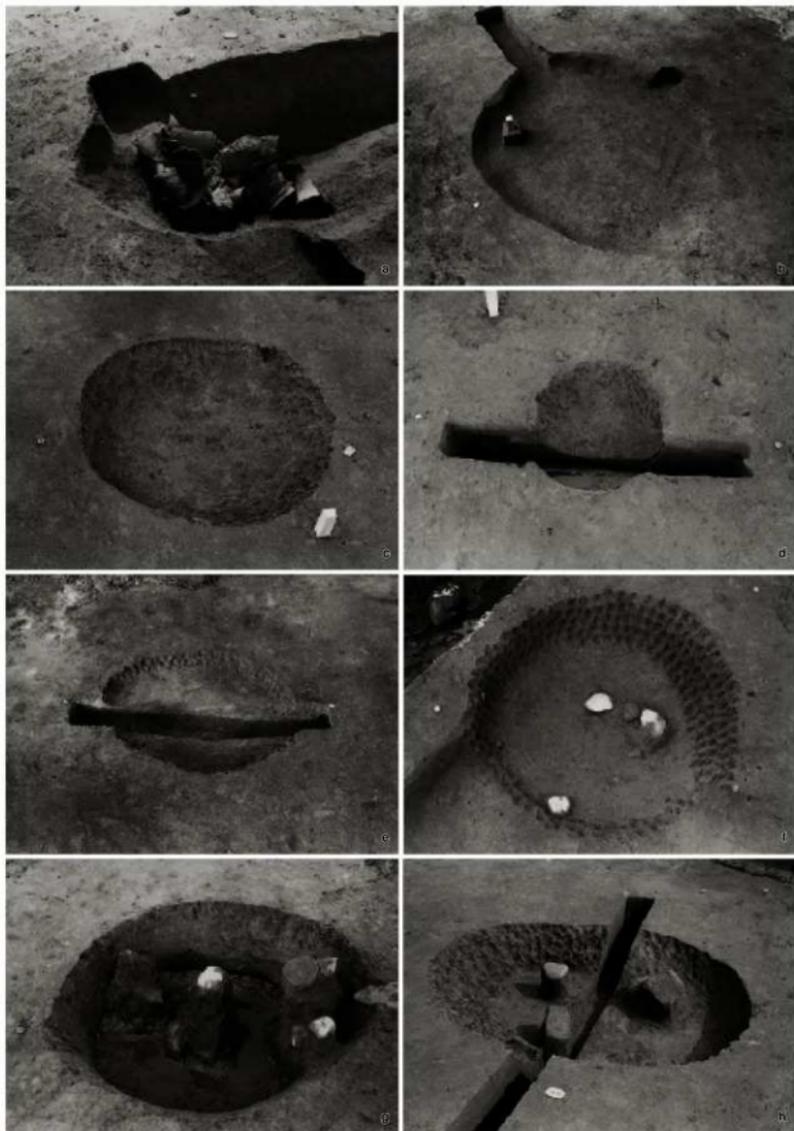
190 60～67号土坑

- | | |
|--------------|---------------|
| a 60号土坑(西より) | b 61号土坑(北より) |
| c 62号土坑(南より) | d 63号土坑(南西より) |
| e 64号土坑(東より) | f 65号土坑(東より) |
| g 66号土坑(東より) | h 67号土坑(東より) |



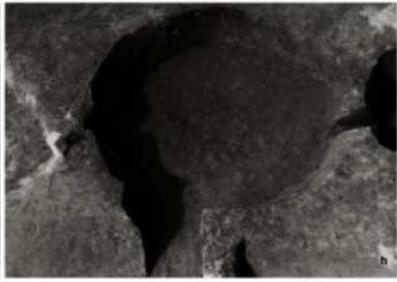
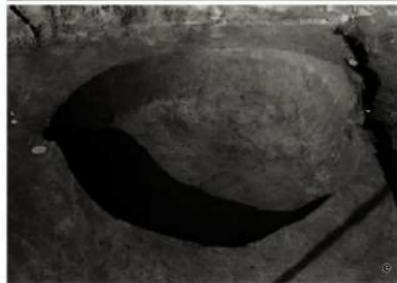
191 68 - 75号土坑

- | | |
|--------------|-----------------|
| a 68号土坑（東より） | b 69号土坑（南より） |
| c 70号土坑（東より） | d 71号土坑（西より） |
| e 72号土坑（東より） | f 73号土坑土層（北東より） |
| g 74号土坑（南より） | h 75号土坑検出（西より） |



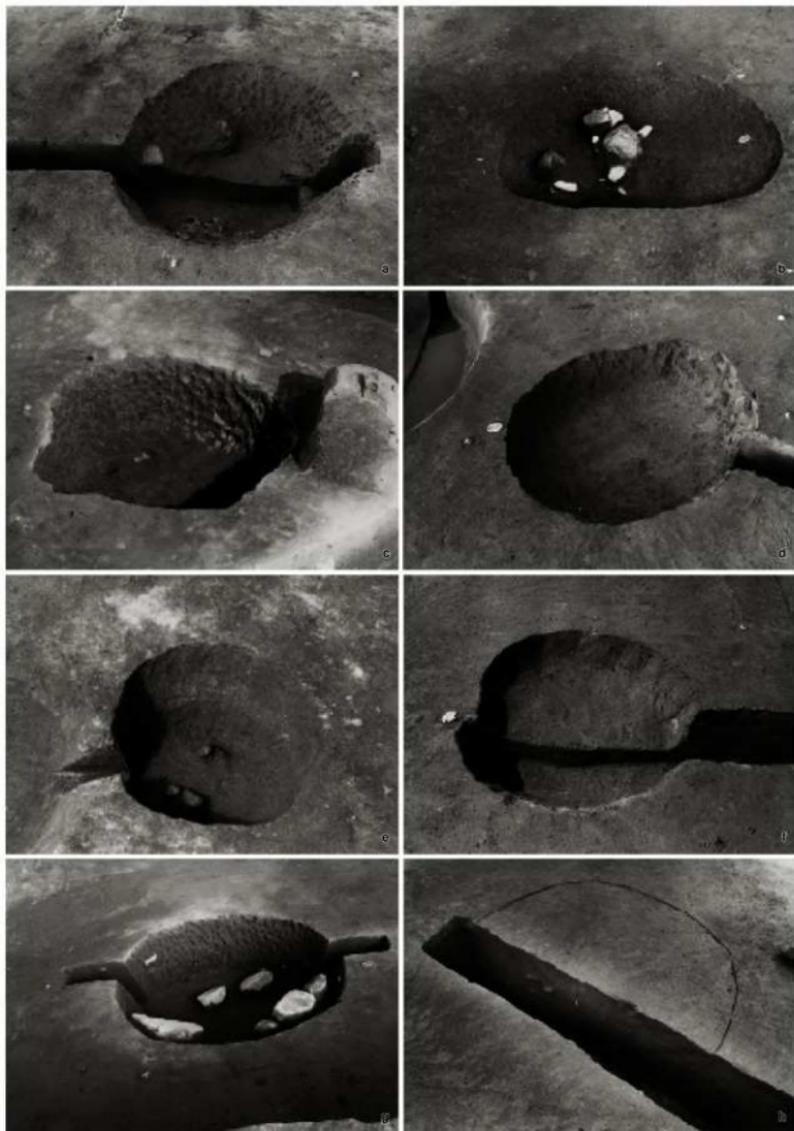
192 76・77・79・81～85号土坑

- a 76号土坑(東より) b 77号土坑(南より)
 c 79号土坑(南より) d 81号土坑(南より)
 e 82号土坑(南西より) f 83号土坑(東より)
 g 84号土坑(東より) h 85号土坑(西より)



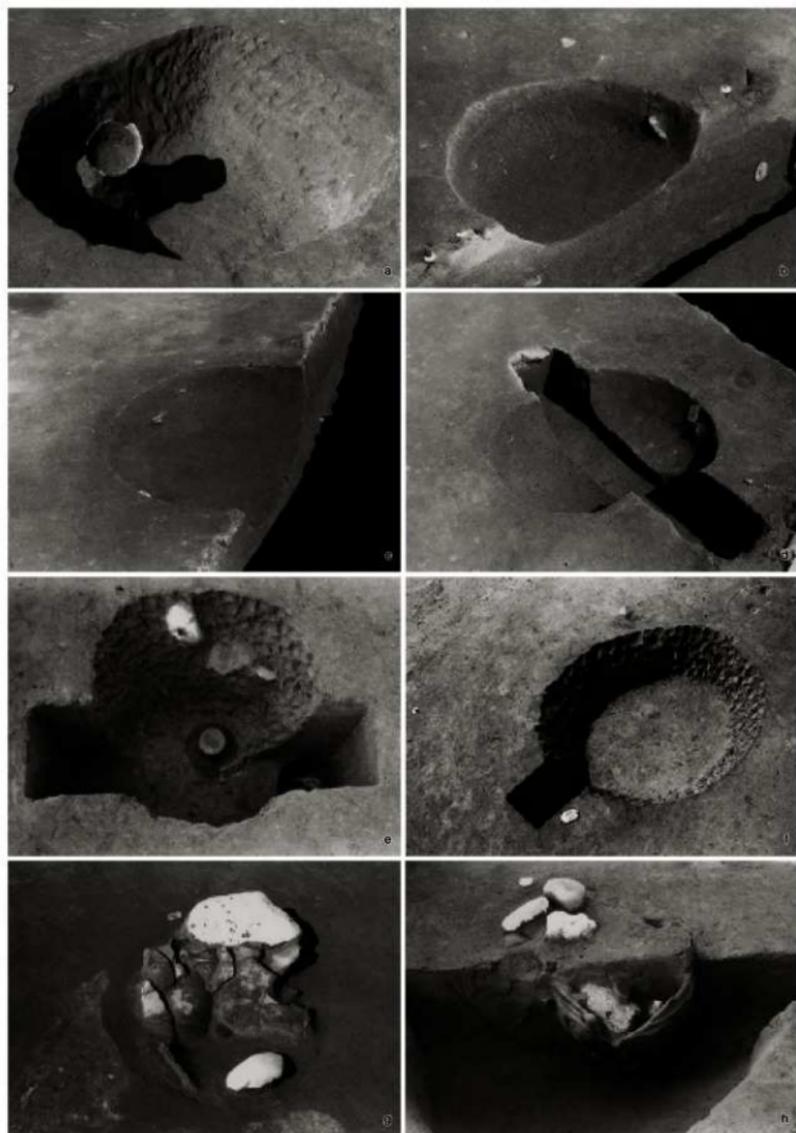
193 86 - 93号土坑

- | | |
|----------------|----------------|
| a 86号土坑 (西より) | b 87号土坑 (北より) |
| c 88号土坑 (東より) | d 89号土坑 (北東より) |
| e 90号土坑 (南より) | f 91号土坑 (南東より) |
| g 92号土坑 (北東より) | h 93号土坑 (東より) |



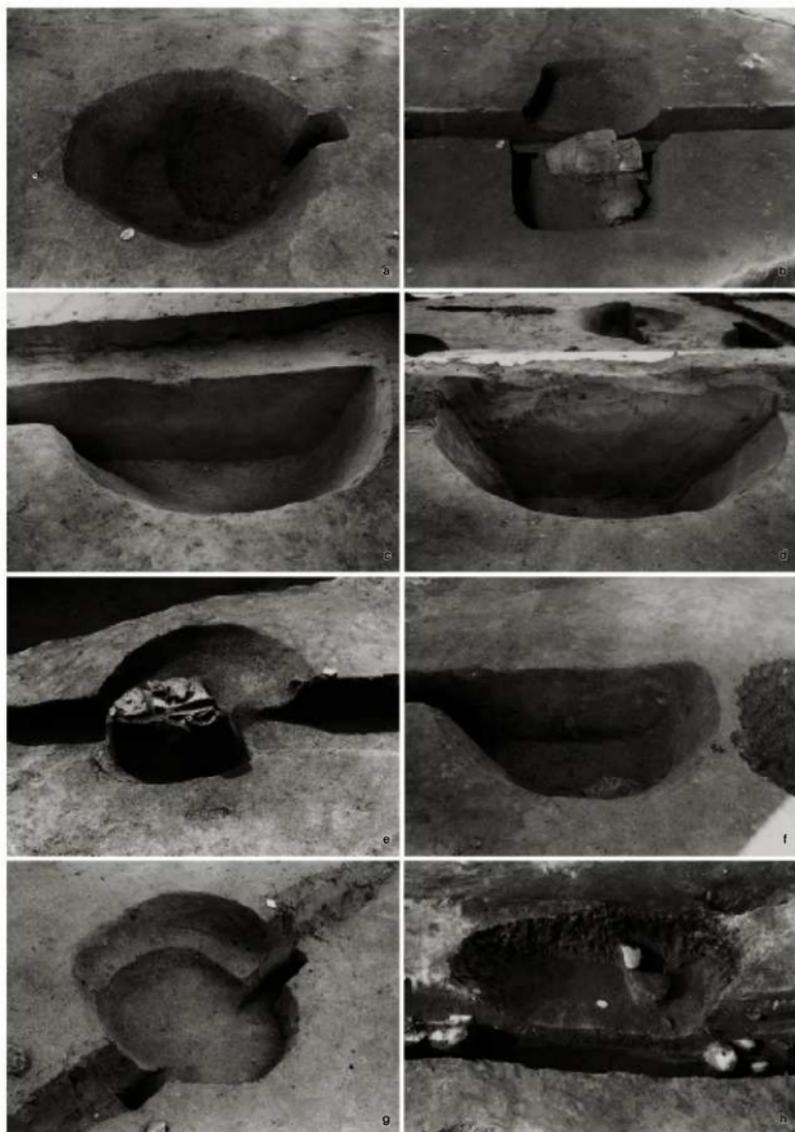
194 94・96～102号土坑

- | | |
|----------------|------------------|
| a 94号土坑 (南より) | b 96号土坑 (南西より) |
| c 97号土坑 (南西より) | d 98号土坑 (南東より) |
| e 99号土坑 (東より) | f 100号土坑 (東より) |
| g 101号土坑 (西より) | h 102号土坑土層 (東より) |



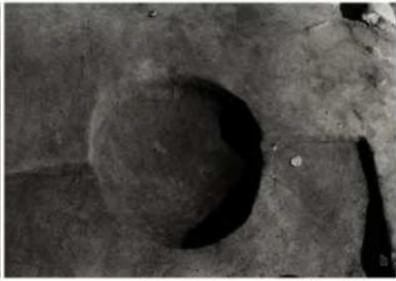
195 103～110号土坑

- a 103号土坑（東より） b 104号土坑（南より）
 c 105号土坑（南より） d 106号土坑（南東より）
 e 107号土坑（南より） f 108号土坑（南より）
 g 109号土坑（南より） h 110号土坑土窟（東より）



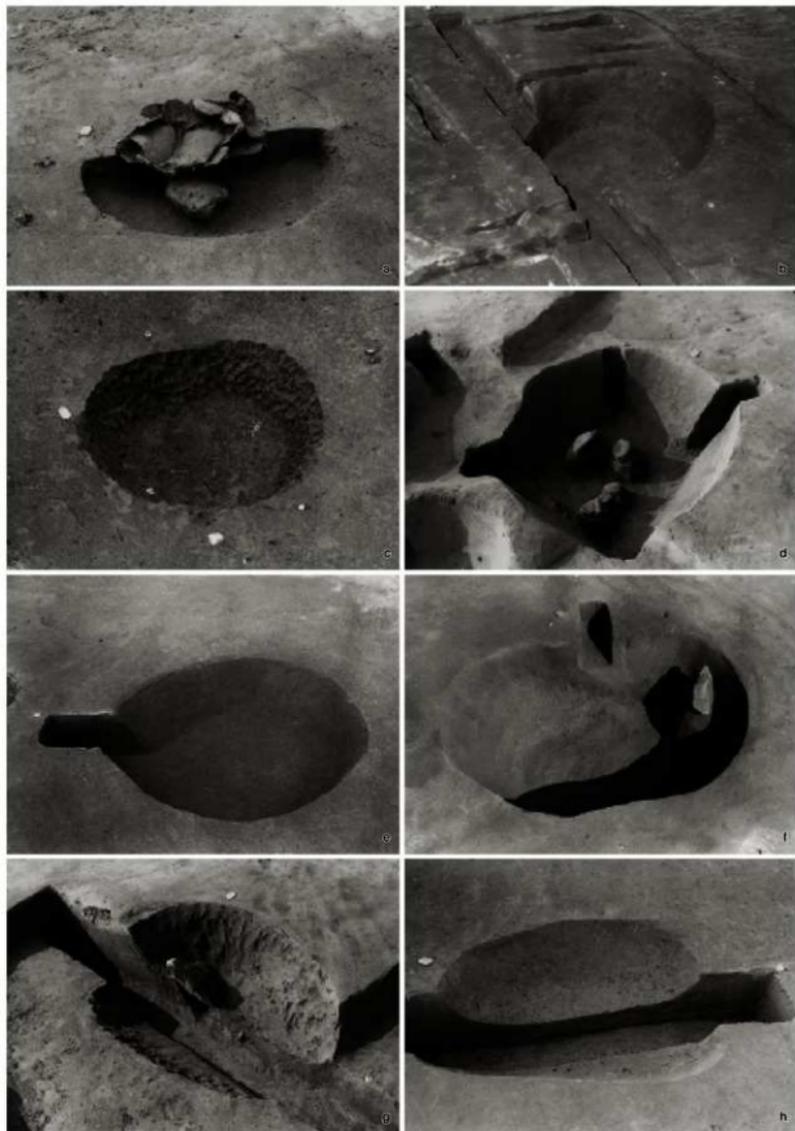
196 111～118号土坑

- | | |
|------------------|------------------|
| a 111号土坑 (南東より) | b 112号土坑 (南東より) |
| c 113号土坑土層 (南より) | d 114号土坑土層 (南より) |
| e 115号土坑 (北より) | f 116号土坑土層 (南より) |
| g 117号土坑 (南より) | h 118号土坑 (南より) |



197 119～121・123～127号土坑

- a 119号土坑（西より） b 120号土坑（南より）
c 121号土坑（南より） d 123号土坑（北東より）
e 124号土坑（西より） f 125号土坑（南より）
g 126号土坑（南より） h 127号土坑（南より）



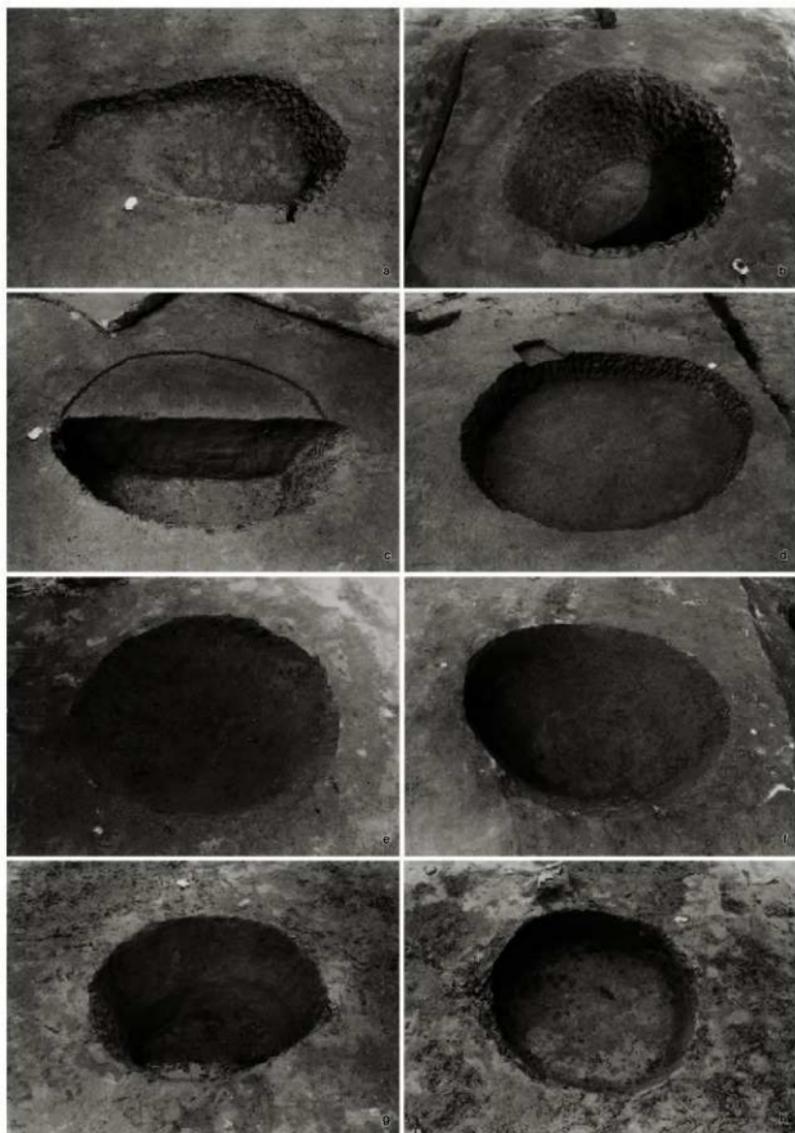
198 128 - 133・135・136号土坑

a 128号土坑土層(東より) b 129号土坑(東より)
 c 130号土坑(南より) d 131号土坑(南より)
 e 132号土坑(南より) f 133号土坑(西より)
 g 135号土坑(南より) h 136号土坑(東より)



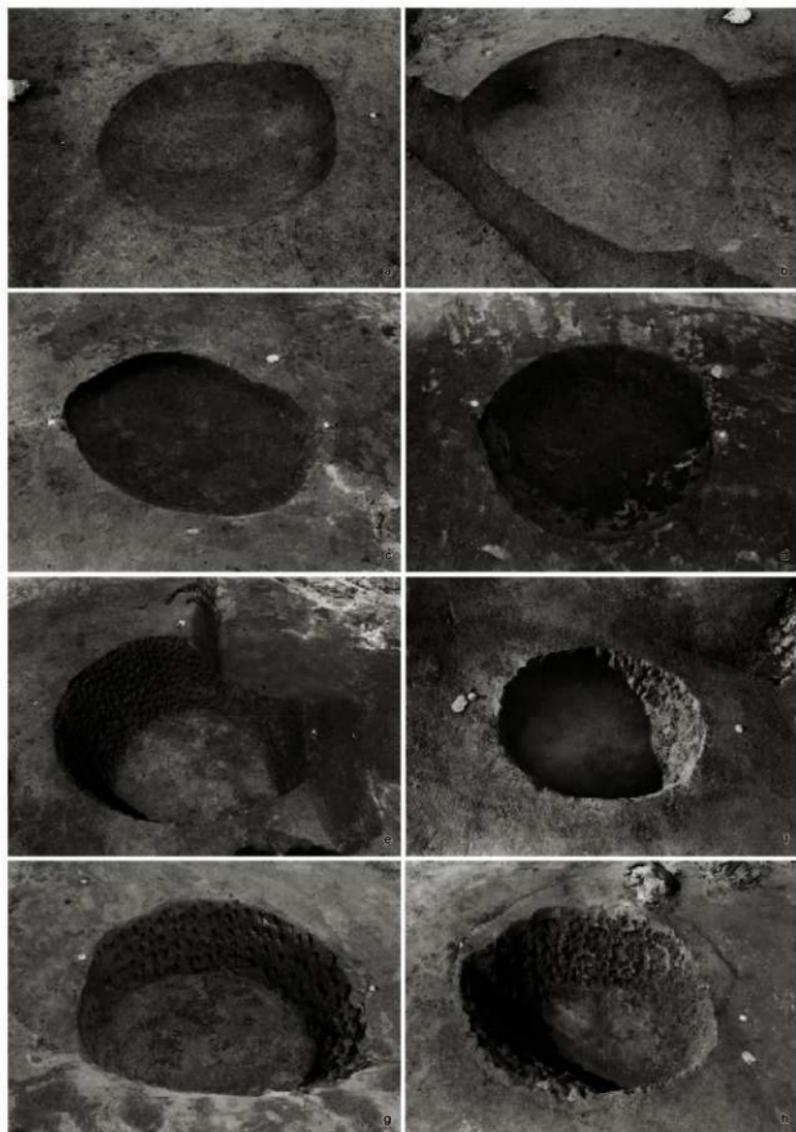
199 134・138・139号土坑

a 134号土坑土層(南より) b 134号土坑断面(南より)
 c 134号土坑(南より) d 138号土坑(南より)
 e 139号土坑(北より)



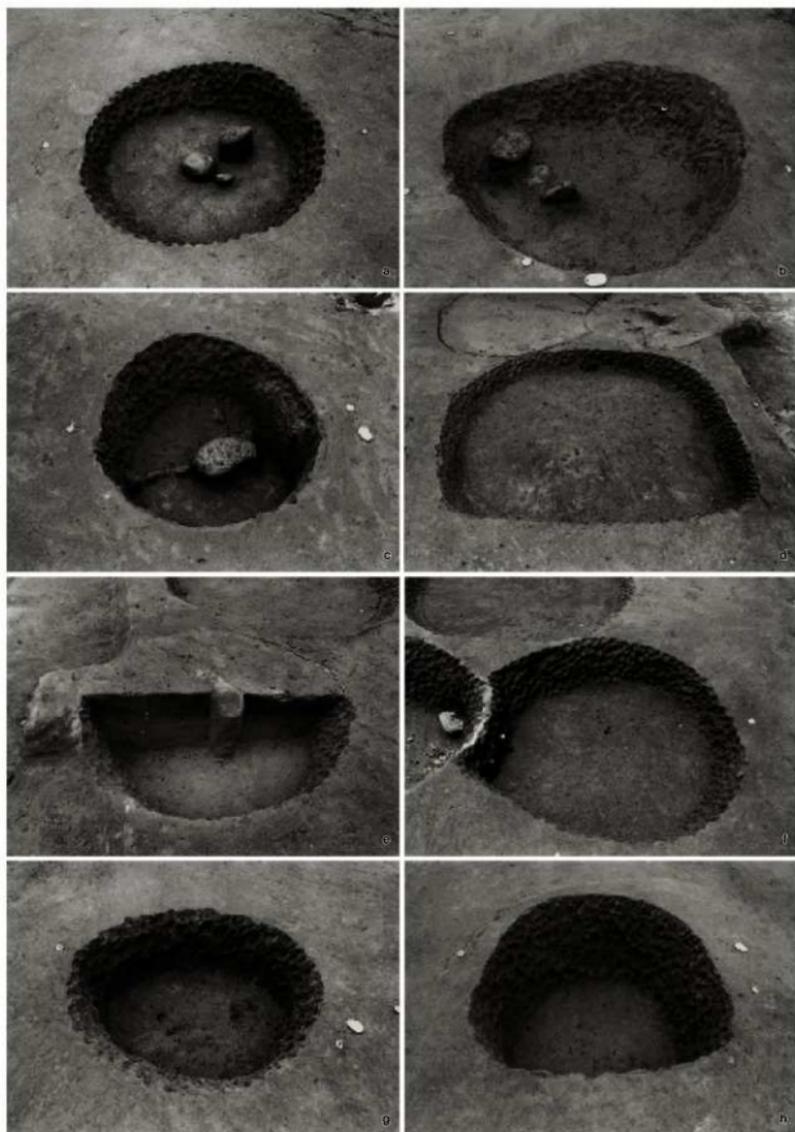
200 140・142～144・147～150号土坑

- | | |
|-----------------|---------------|
| a 140号土坑(南より) | b 142号土坑(西より) |
| c 143号土坑土層(南より) | d 144号土坑(南より) |
| e 147号土坑(南より) | f 148号土坑(南より) |
| g 149号土坑(東より) | h 150号土坑(南より) |



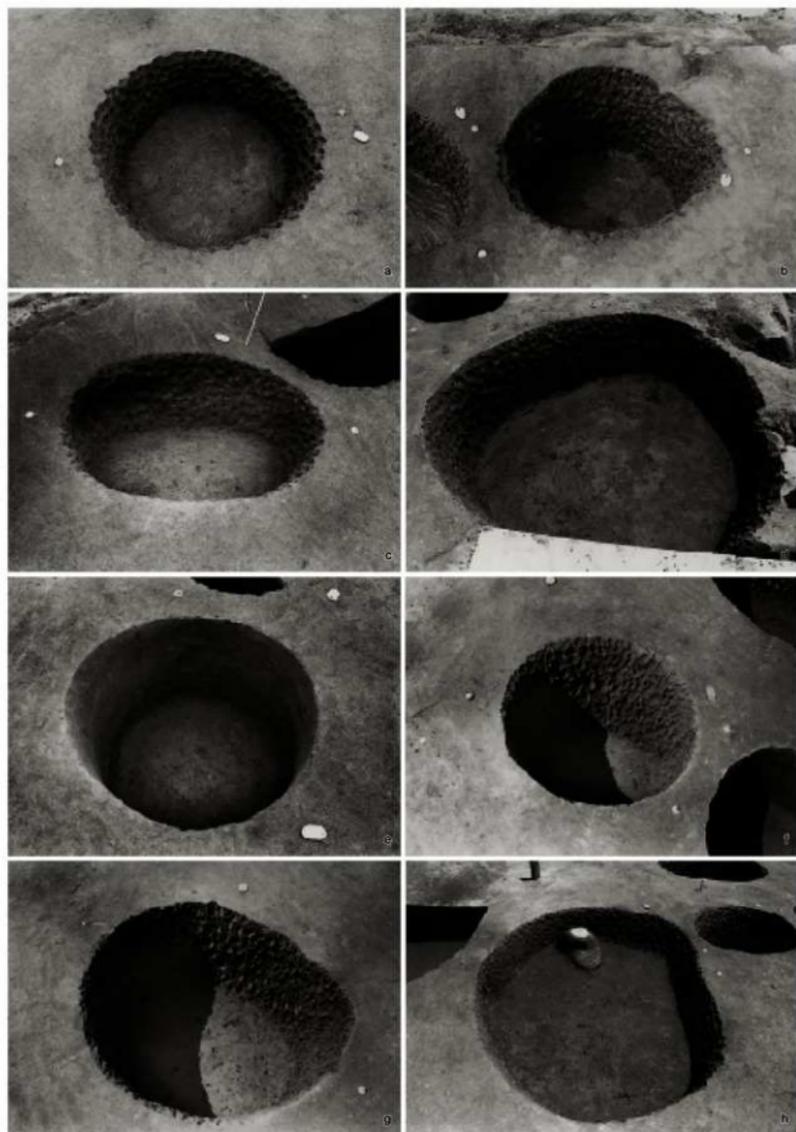
201 151～158号土坑

- a 151号土坑（西より） b 152号土坑（東より）
 c 153号土坑（南より） d 154号土坑（東より）
 e 155号土坑（南より） f 156号土坑（南より）
 g 157号土坑（南より） h 158号土坑（東より）



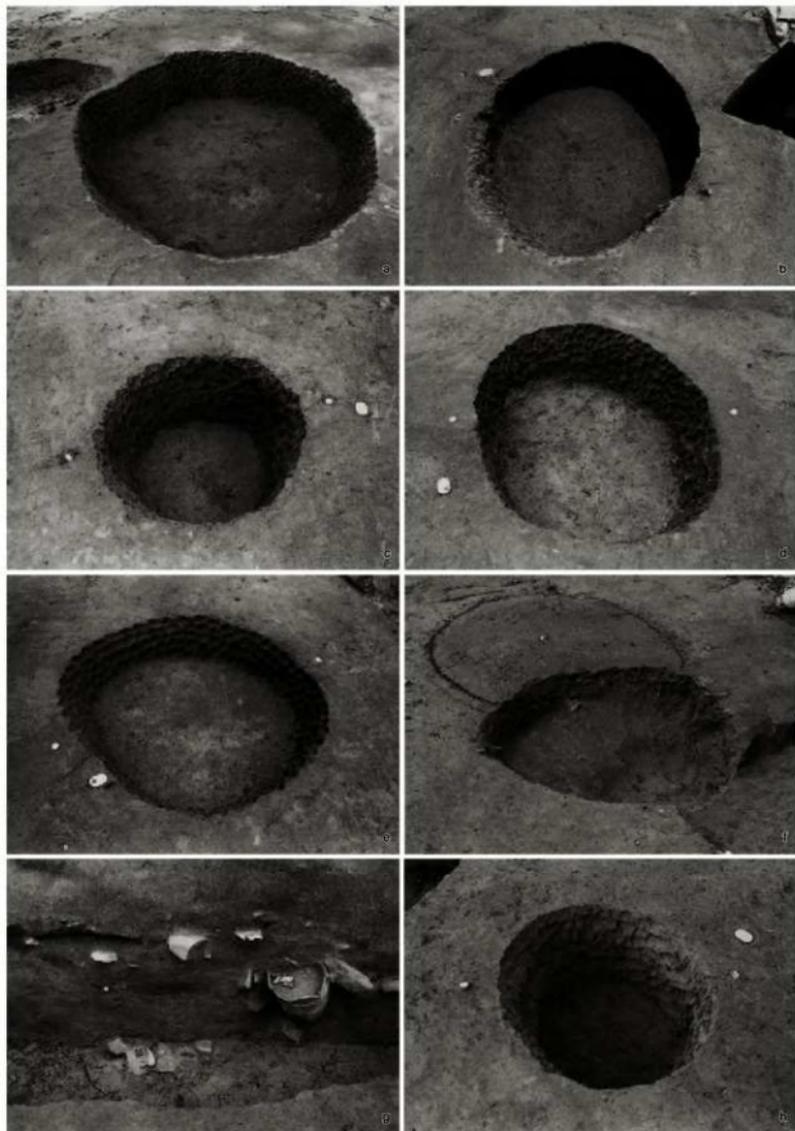
202 159～161・164～168号土坑

- | | |
|-----------------|----------------|
| a 159号土坑(北より) | b 160号土坑(南東より) |
| c 161号土坑(南より) | d 164号土坑(西より) |
| e 165号土坑土層(東より) | f 166号土坑(東より) |
| g 167号土坑(南より) | h 168号土坑(南より) |



203 169～176号土坑

- a 169号土坑（南より） b 170号土坑（南より）
 c 171号土坑（南より） d 172号土坑（南より）
 e 173号土坑（南より） f 174号土坑（南より）
 g 175号土坑（南より） h 176号土坑（南より）



204 177～184号土坑

- | | |
|-----------------|---------------|
| a 177号土坑（南より） | b 178号土坑（西より） |
| c 179号土坑（南より） | d 180号土坑（北より） |
| e 181号土坑（南より） | f 182号土坑（東より） |
| g 183号土坑土層（西より） | h 184号土坑（南より） |



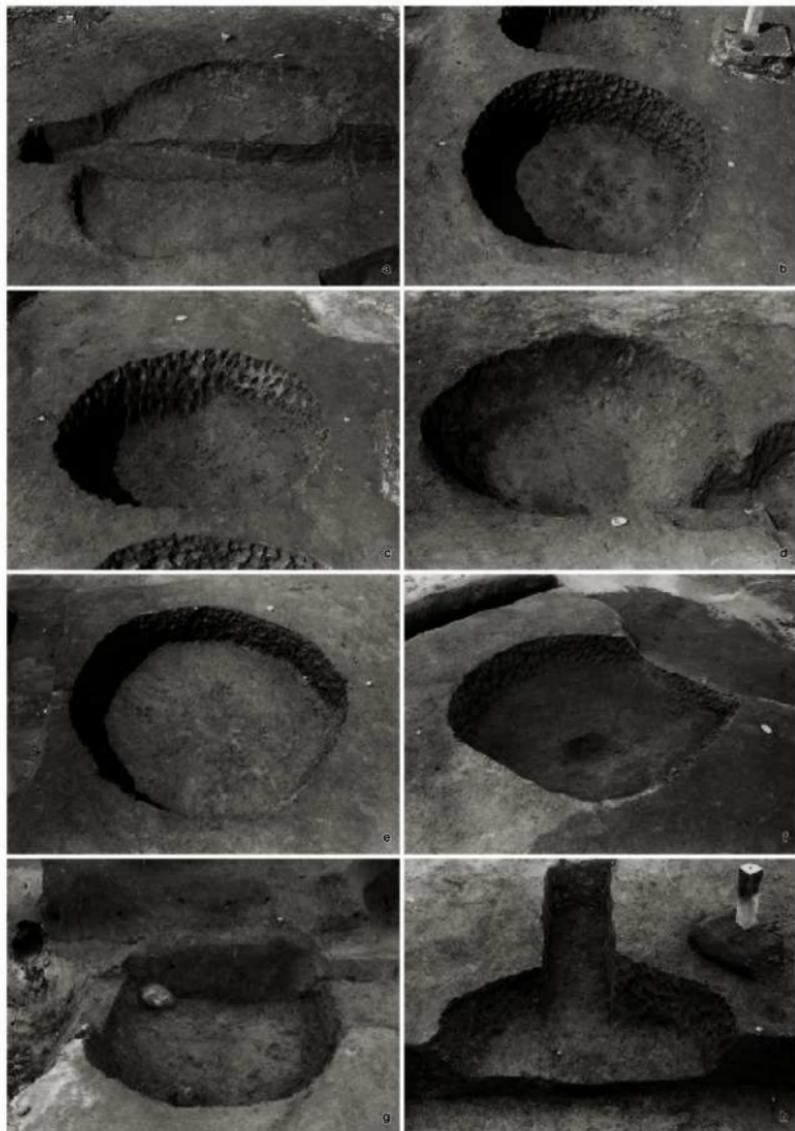
205 185・187・189・191・193・195号土坑

a 185号土坑（南より） b 187号土坑（南より）
 c 188号土坑（東より） d 189号土坑（北西より）
 e 191号土坑（南西より） f 192号土坑（西より）
 g 193号土坑（北より） h 195号土坑（北より）



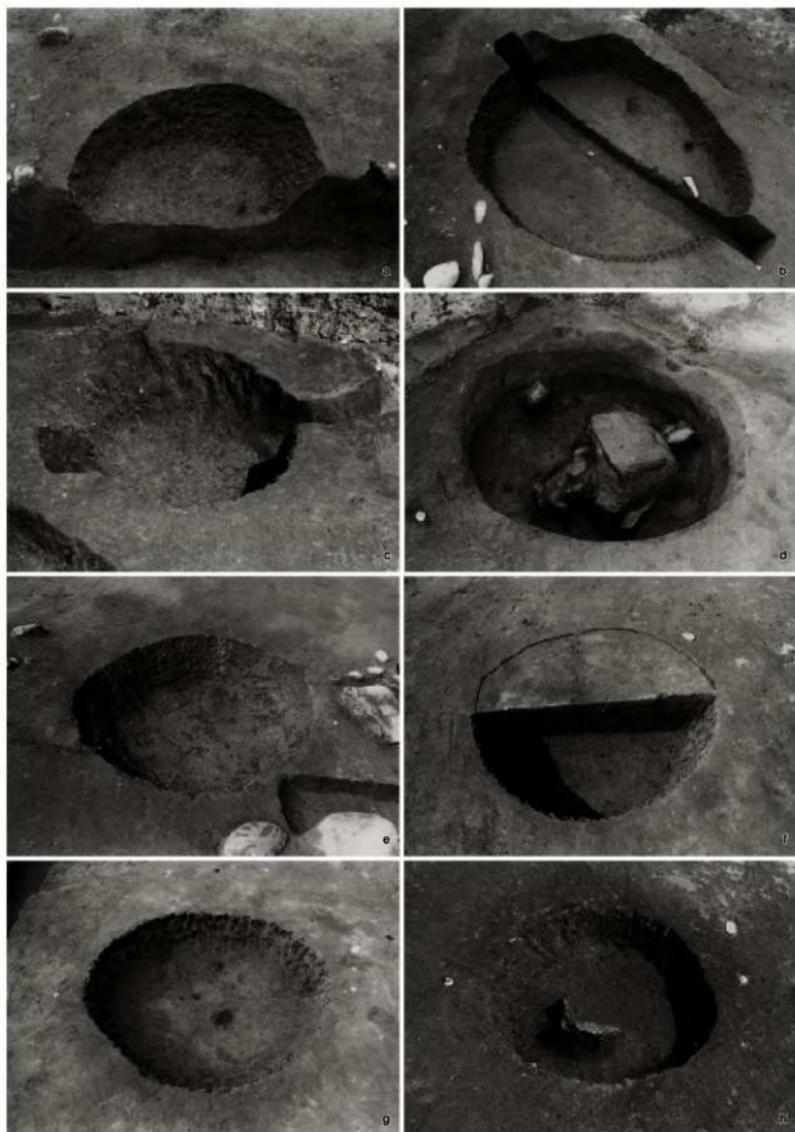
206 190・196・197号土坑

a 190号土坑断面(西より) b 190号土坑内部(西より)
 c 190号土坑(西より) d 196号土坑(南より)
 e 197号土坑(南より)



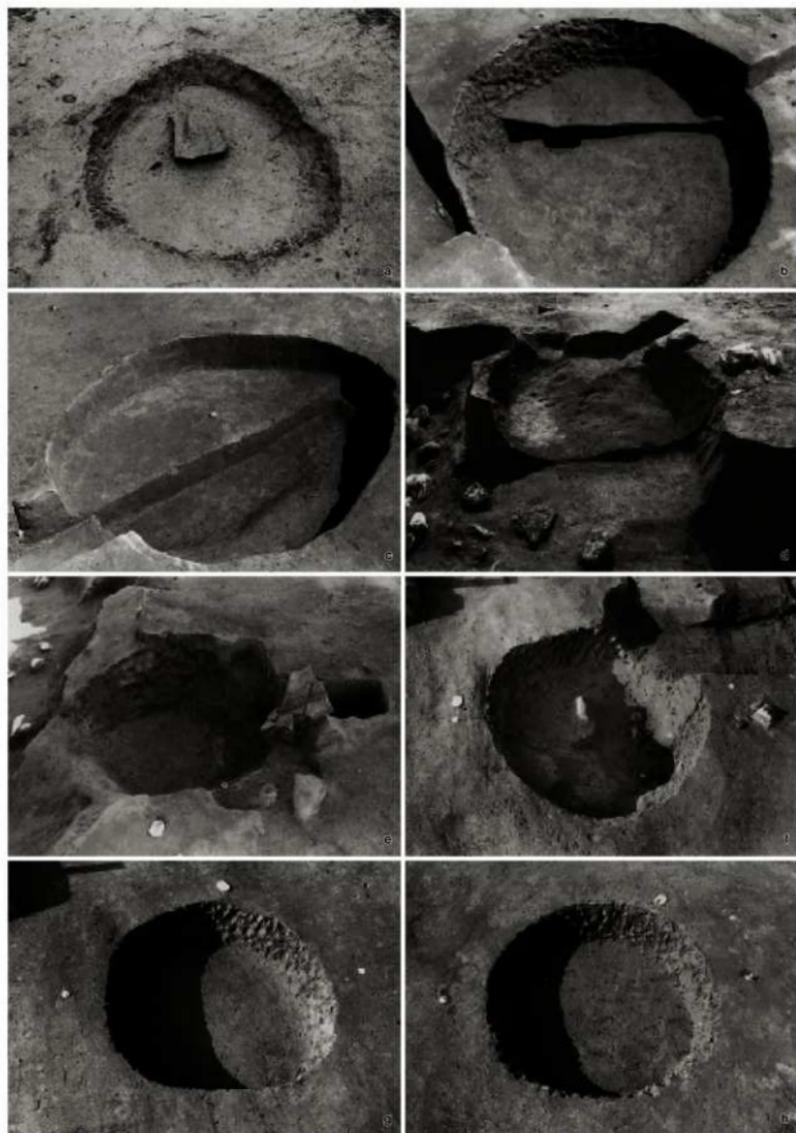
207 199～206号土坑

- a 199号土坑(南より) b 200号土坑(南より)
 c 201号土坑(南より) d 202号土坑(南より)
 e 203号土坑(南より) f 204号土坑(南より)
 g 205号土坑(西より) h 206号土坑(東より)



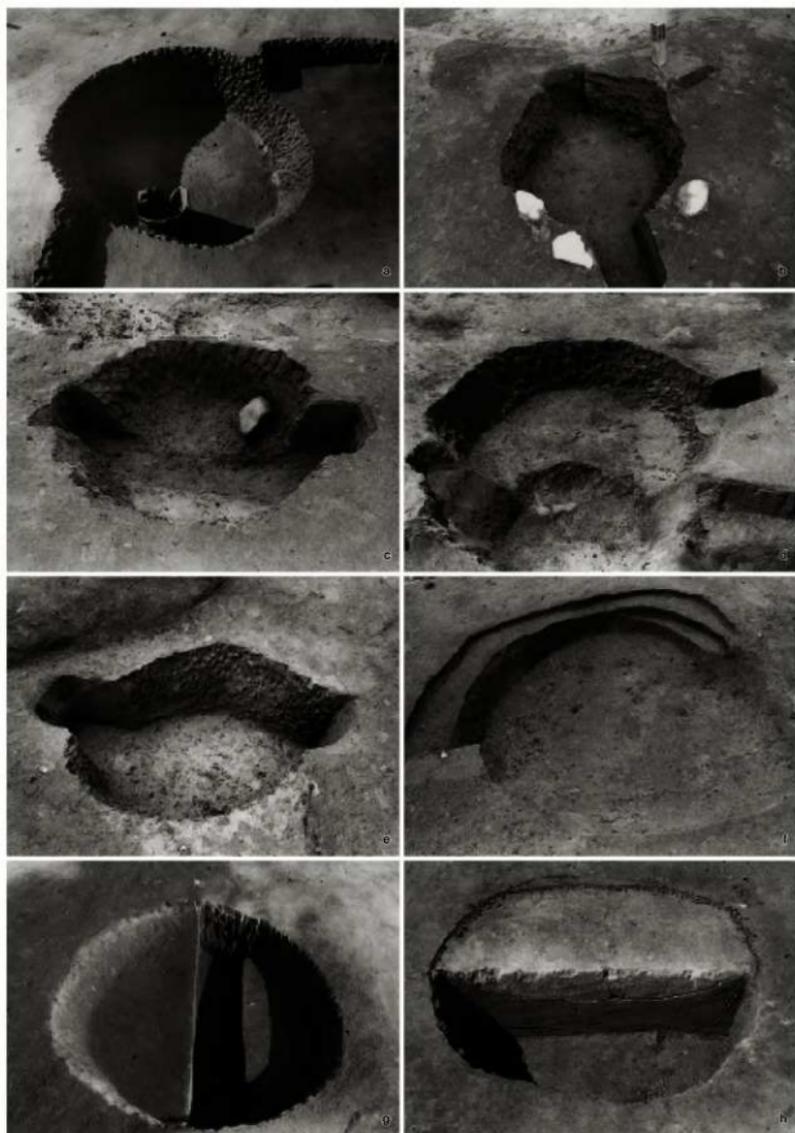
208 207～214号土坑

- a 207号土坑（東より） b 208号土坑（南東より）
 c 209号土坑（西より） d 210号土坑（南西より）
 e 211号土坑（南より） f 212号土坑土層（南より）
 g 213号土坑（南より） h 214号土坑（南より）



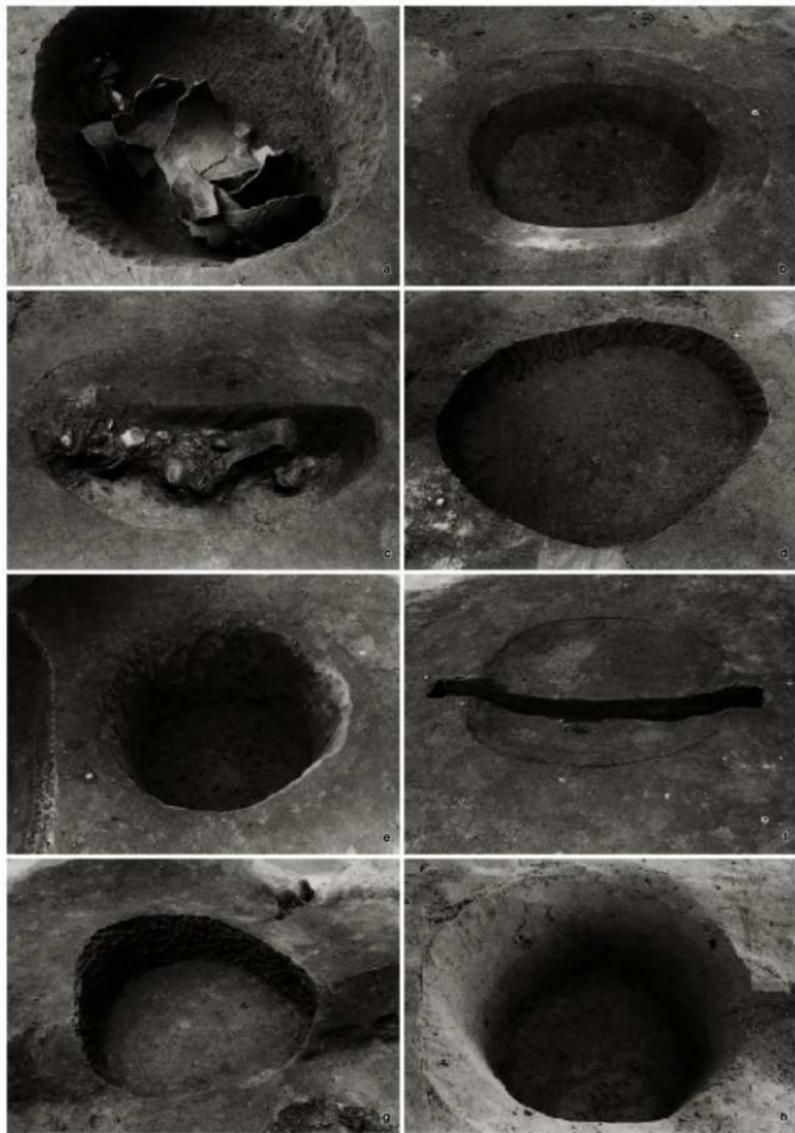
209 215～222号土坑

a 215号土坑(南西より) b 216号土坑(南より)
 c 217号土坑(北西より) d 218号土坑(東より)
 e 219号土坑(北東より) f 220号土坑(南より)
 g 221号土坑(南より) h 222号土坑(南より)



210 223～227・229～231号土坑

- | | |
|-----------------|------------------|
| a 223号土坑 (南より) | b 224号土坑 (南より) |
| c 225号土坑 (北より) | d 226号土坑 (南東より) |
| e 227号土坑 (南東より) | f 229号土坑 (北より) |
| g 230号土坑 (北西より) | h 231号土坑土層 (南より) |



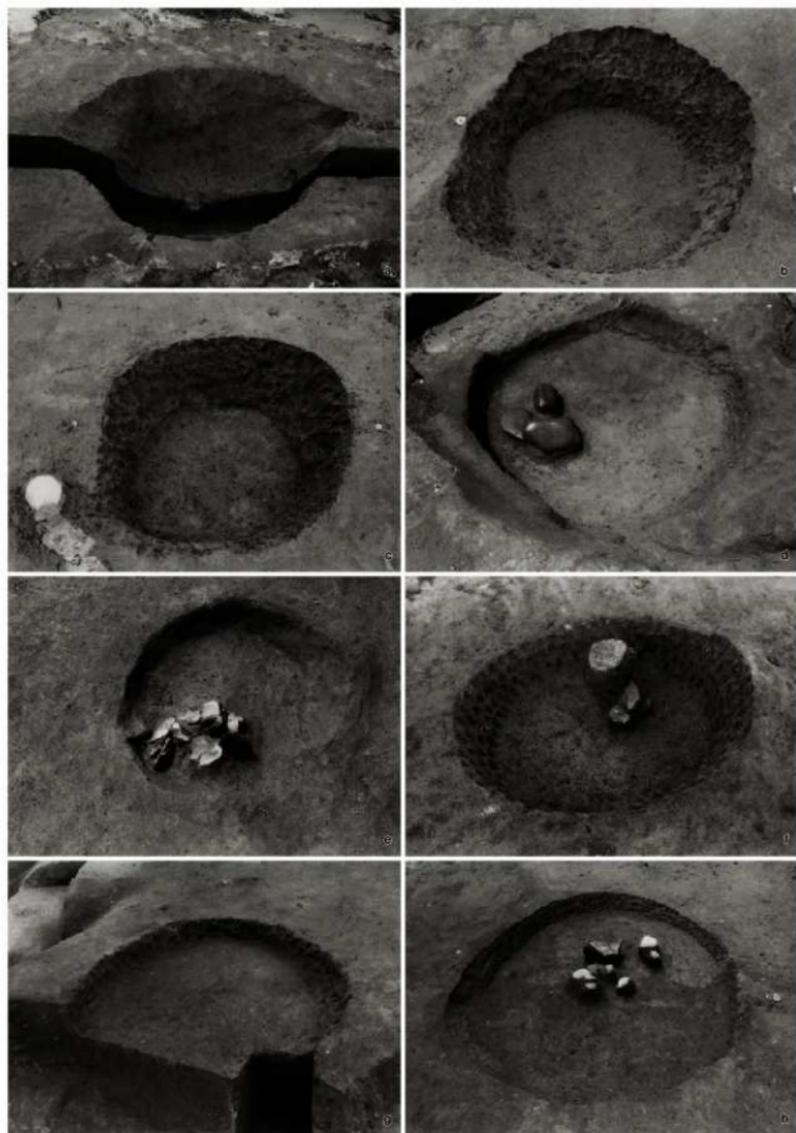
211 232～234・237・239～242号土坑

- | | |
|-----------------|----------------|
| a 232号土坑(南より) | b 233号土坑(北より) |
| c 234号土坑土層(南より) | d 237号土坑(西より) |
| e 239号土坑(南より) | f 240号土坑(南より) |
| g 241号土坑(北より) | h 242号土坑(北東より) |



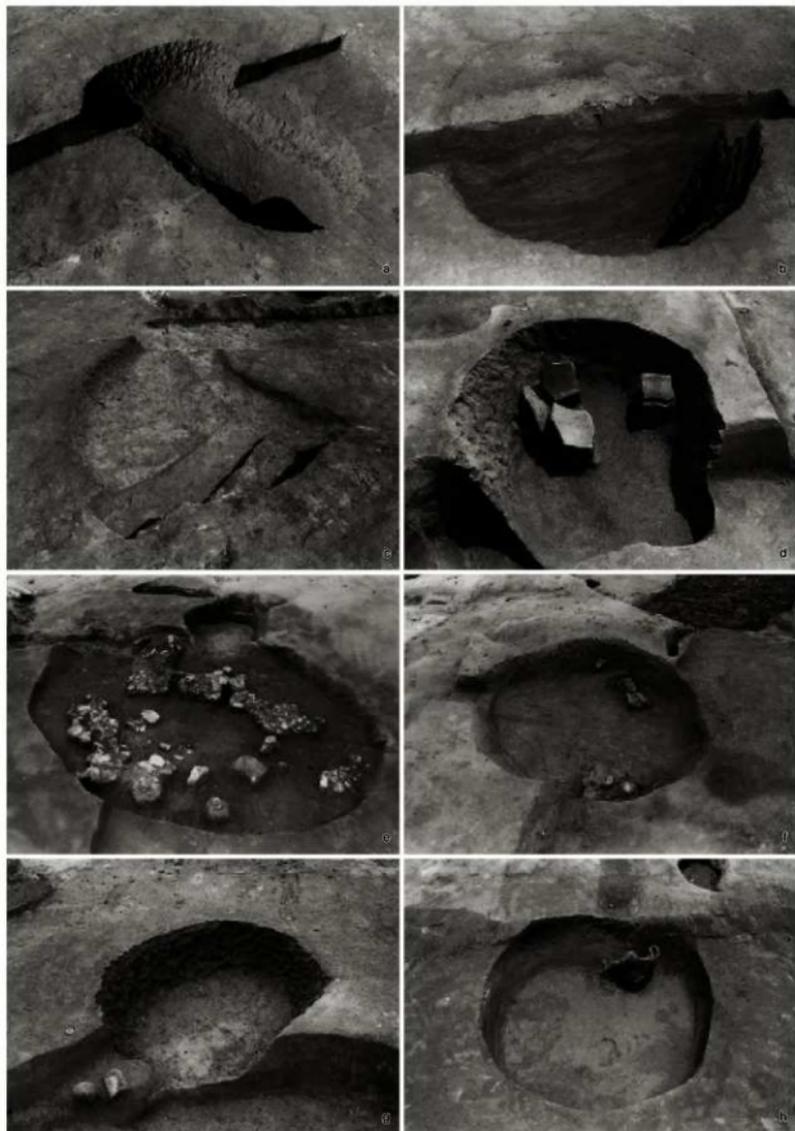
212 243～246・248・250～252号土坑

- a 243号土坑（西より） b 244号土坑（南より）
 c 245号土坑（南より） d 246号土坑土層（南東より）
 e 248号土坑（南より） f 250号土坑（南より）
 g 251号土坑（南より） h 252号土坑（南より）



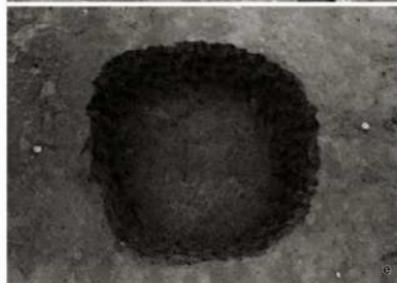
213 254～261号土坑

a 254号土坑(南より) b 255号土坑(南より)
 c 256号土坑(南より) d 257号土坑(東より)
 e 258号土坑(東より) f 259号土坑(西より)
 g 260号土坑(西より) h 261号土坑(北より)



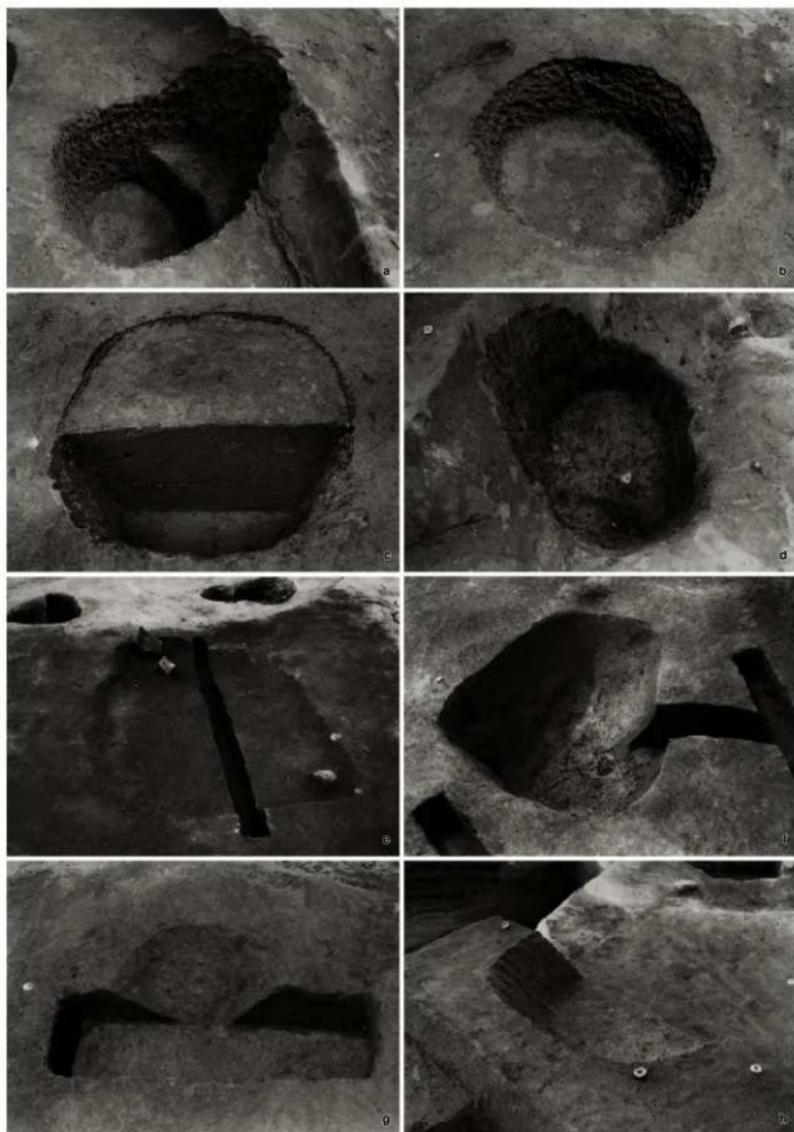
214 262・263・265・267～269・272・273号土坑

- | | |
|----------------|-----------------|
| a 262号土坑(南より) | b 263号土坑土層(東より) |
| c 265号土坑(北東より) | d 267号土坑(北より) |
| e 268号土坑(南より) | f 269号土坑(南より) |
| g 272号土坑(南より) | h 273号土坑(南西より) |



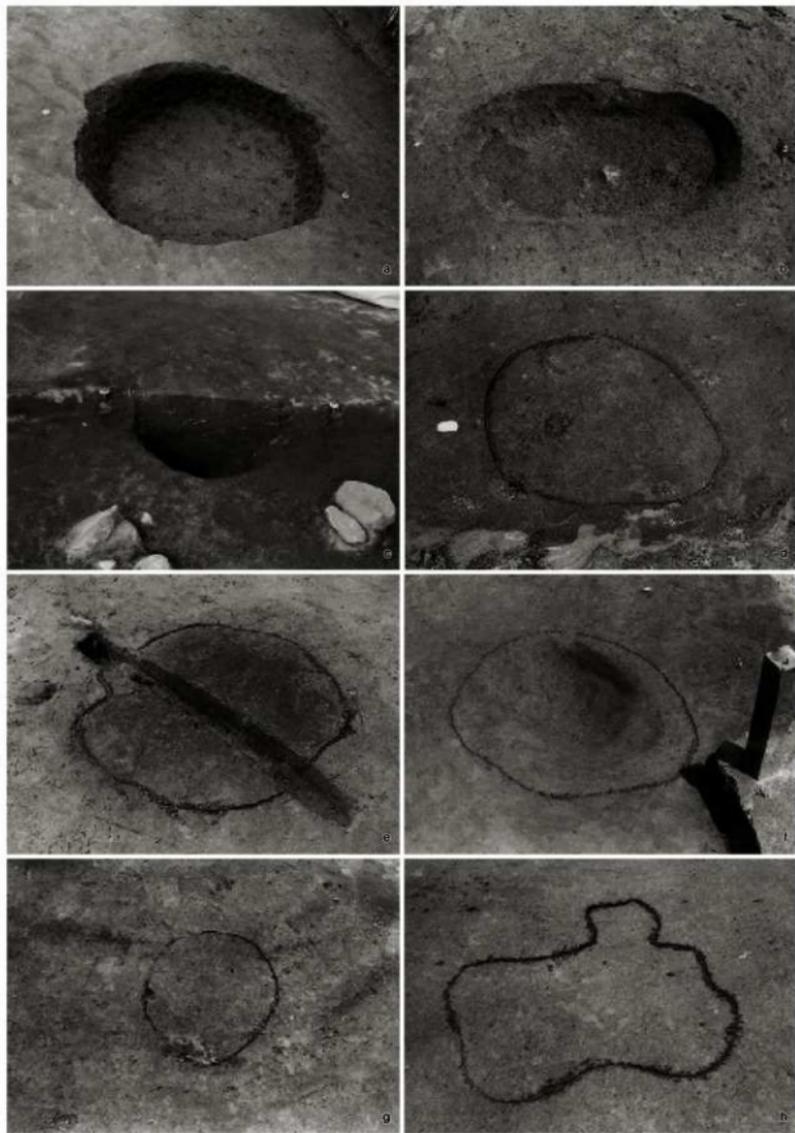
215 274~281号土坑

- a 274号土坑(南より) b 275号土坑(南より)
c 276号土坑(南より) d 277号土坑(南より)
e 278号土坑(南より) f 279号土坑(北より)
g 280号土坑(南より) h 281号土坑(南東より)



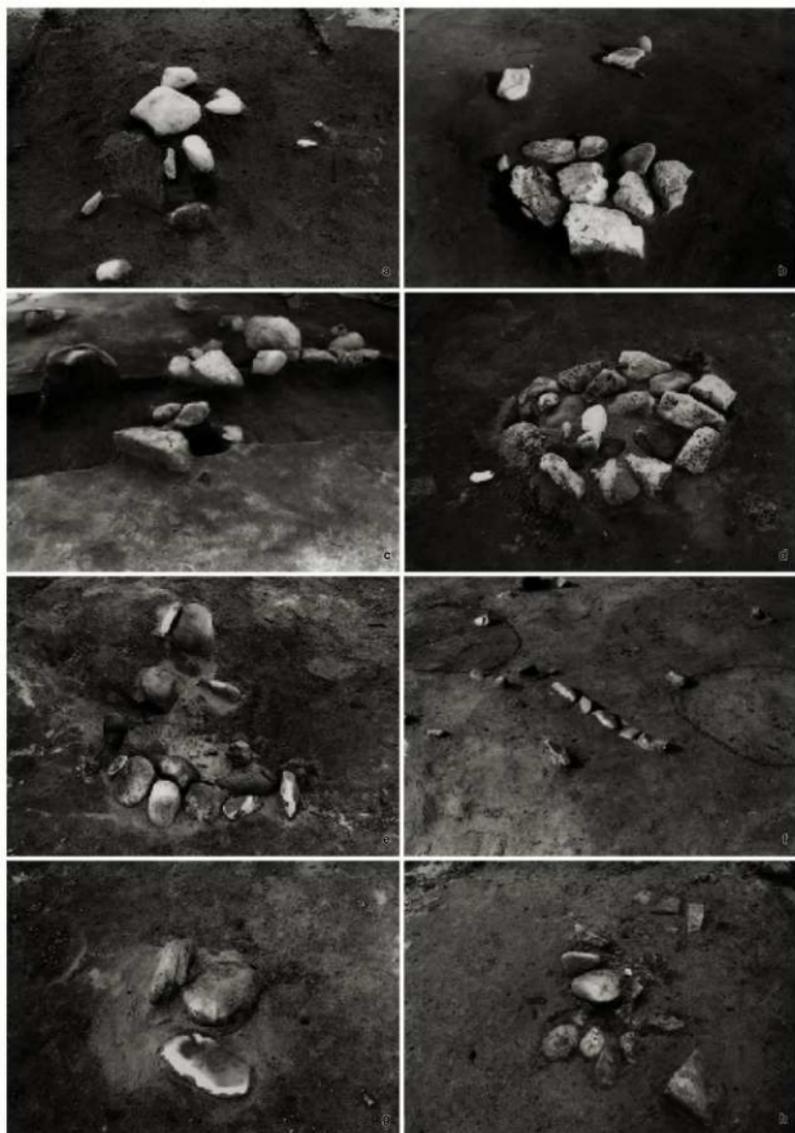
216 282～289号土坑

- | | |
|-----------------|---------------|
| a 282号土坑（北東より） | b 283号土坑（西より） |
| c 284号土坑土層（南より） | d 285号土坑（東より） |
| e 286号土坑（南より） | f 287号土坑（東より） |
| g 288号土坑（南東より） | h 289号土坑（南より） |



217 290・293号土坑，屋外焼土遺構

- | | |
|-------------------|------------------|
| a 290号土坑（南より） | b 293号土坑（南西より） |
| c 4号屋外焼土遺構断面（南より） | d 6号屋外焼土遺構（南より） |
| e 8号屋外焼土遺構（南より） | f 9号屋外焼土遺構（南より） |
| g 10号屋外焼土遺構（東より） | h 11号屋外焼土遺構（東より） |



218 1～8号配石遺構

- a 1号配石遺構（東より）
 b 2号配石遺構（北より）
 c 3号配石遺構断面（北西より）
 d 4号配石遺構（東より）
 e 5号配石遺構（南より）
 f 6号配石遺構（南西より）
 g 7号配石遺構（南西より）
 h 8号配石遺構（東より）



219 9～11号配石遺構

- a 9号配石遺構（西より）
- b 11号配石遺構（南より）
- c 10号配石遺構（南より）
- d 10号配石遺構細部（南より）
- e 10号配石遺構細部（西より）



220 12・14～20号配石遺構

- | | |
|------------------|-------------------|
| a 12号配石遺構 (西より) | b 14号配石遺構 (南より) |
| c 15号配石遺構 (南より) | d 16号配石遺構跡跡 (東より) |
| e 17号配石遺構 (南西より) | f 18号配石遺構 (北東より) |
| g 19号配石遺構 (南より) | h 20号配石遺構 (東より) |



221 21～23号配石遺構

- a 21号配石遺構（東より） b 22号配石遺構（南より）
 c 23号配石遺構（東より） d 23号配石遺構断面（東より）
 e 23号配石遺構細部（東より）



222 24～26号配石遺構

- a 24号配石遺構（南より）
 b 24号配石遺構（北より）
 c 25・26号配石遺構（北より）
 d 25・26号配石遺構（東より）
 e 25・26号配石遺構断面（西より）



223 27～29号配石遺構

- a 28号配石遺構（西より） b 27号配石遺構（北より）
 c 29号配石遺構（西より） d 29号配石遺構（南東より）
 e 29号配石遺構（北より）



224 30～34号配石遺構

- a 30号配石遺構（東より）
 b 34号配石遺構（南より）
 c 31～33号配石遺構（西より）
 d 31・32号配石遺構（北より）
 e 33号配石遺構（北より）



225 35 - 42号配石遺構

- a 35号配石遺構 (西より) b 36号配石遺構 (西より)
 c 37号配石遺構 (東より) d 38号配石遺構 (北より)
 e 39号配石遺構 (南より) f 40号配石遺構 (南より)
 g 41号配石遺構 (東より) h 42号配石遺構 (南より)



226 43～51号配石遺構

- a 43号配石遺構（東より） b 44号配石遺構（南より）
 c 45～51号配石遺構（南より） d 45号配石遺構（西より）
 e 46号配石遺構（南より）



227 47～56号配石遺構

- a 47・48号配石遺構(西より) b 49・50号配石遺構(北より)
 c 51号配石遺構新削(南より) d 52号配石遺構新削(東より)
 e 53号配石遺構(北より) f 54号配石遺構新削(西より)
 g 55号配石遺構(西より) h 56号配石遺構新削(南西より)



228 57・59・61・63・64・66・67号配石遺構

- | | |
|------------------|------------------|
| a 57号配石遺構（北より） | b 58号配石遺構（南より） |
| c 59号配石遺構（南東より） | d 61号配石遺構断面（西より） |
| e 63号配石遺構断面（南より） | f 64号配石遺構（南西より） |
| g 66号配石遺構（東より） | h 67号配石遺構（南より） |



229 60号配石遺構（西より）



230 60号配石遺構細部

a 遺物出土状況（東より）
 b 60号配石遺構細部（南より）
 c 60号配石遺構細部（北西より）
 d 60号配石遺構細部（東より）



231 65号配石遺構(東より)



232 65号配石遺構細部

a 65c・d号配石遺構全景(南より) b 遺物出土状況(南より)
c 遺物出土状況(北より) d 65b号配石遺構断面(北東より)



233 68号配石遺構（南より）



234 68号配石遺構細部

a 68a号配石遺構（南東より） b 68b号配石遺構（北より）
c 68a号配石遺構断層（南より） d 68b号配石遺構断層（西より）



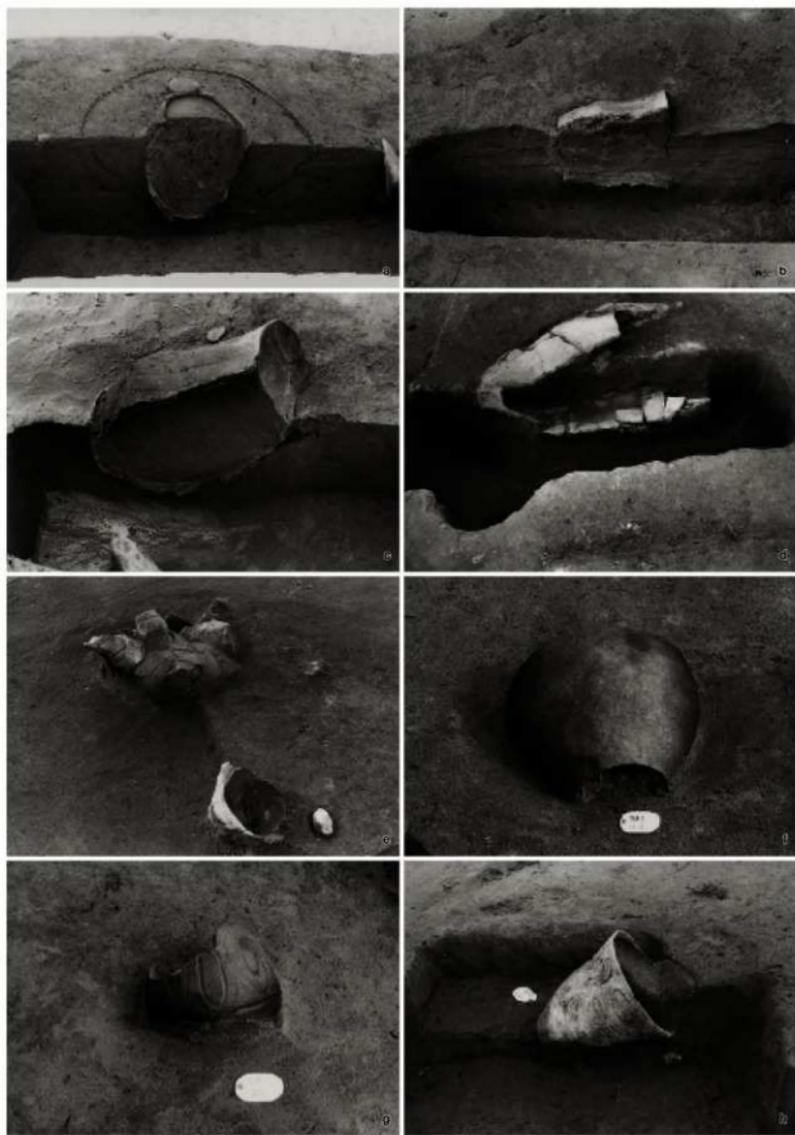
235 1-9号土器埋設遺構

- a 1号土器埋設遺構(南より) b 2号土器埋設遺構断削(南より)
 c 3号土器埋設遺構(東より) d 4号土器埋設遺構(東より)
 e 5号土器埋設遺構(西より) f 6・7号土器埋設遺構断削(東より)
 g 8号土器埋設遺構(南より) h 9号土器埋設遺構断削(西より)



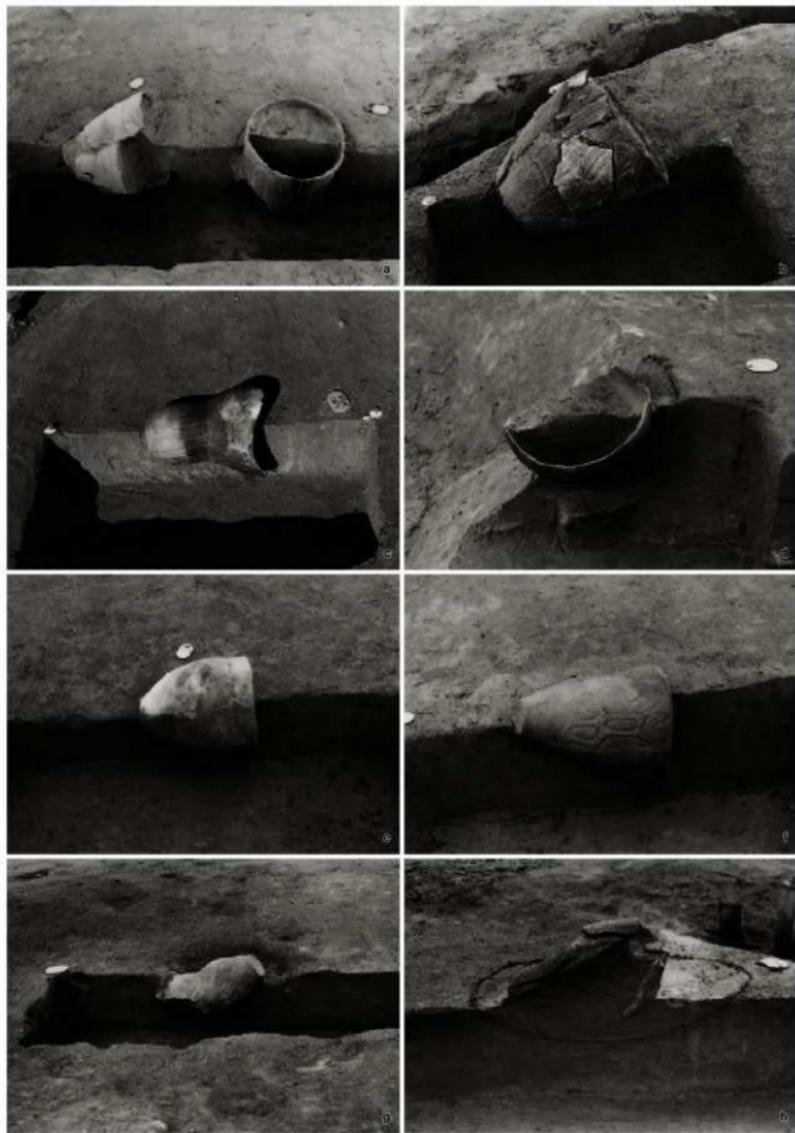
236 10-17号土器埋設遺構

- a 10号土器埋設遺構断面(東より) b 11号土器埋設遺構断面(南より)
 c 12号土器埋設遺構(北より) d 13号土器埋設遺構断面(南より)
 e 14号土器埋設遺構断面(西より) f 15号土器埋設遺構(北より)
 g 16号土器埋設遺構(西より) h 17号土器埋設遺構断面(南より)



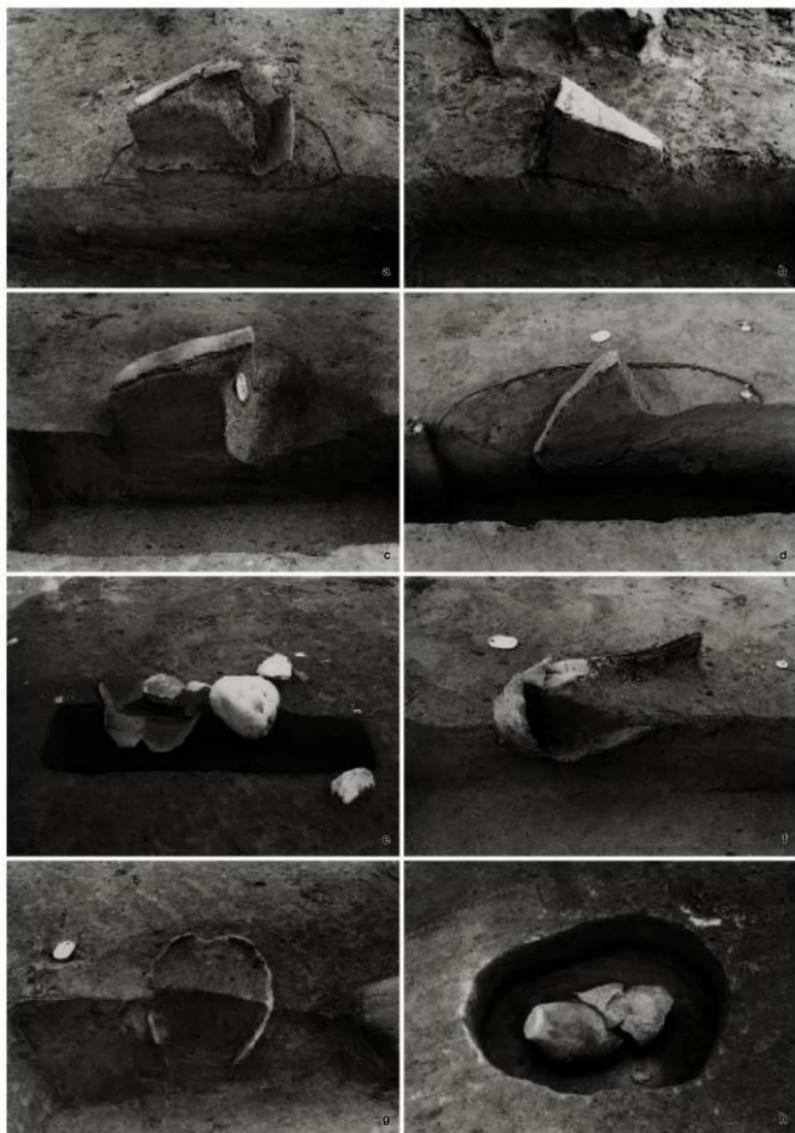
237 18～25号土器埋設遺構

- | | |
|---------------------|--------------------|
| a 18号土器埋設遺構断面(北西より) | b 19号土器埋設遺構断面(東より) |
| c 20号土器埋設遺構断面(北東より) | d 21号土器埋設遺構断面(南より) |
| e 22号土器埋設遺構(東より) | f 23号土器埋設遺構(西より) |
| g 24号土器埋設遺構(西より) | h 25号土器埋設遺構断面(南より) |



238 26 - 34号土器埋設遺構

- a 26・27号土器埋設遺構断削(東より) b 28号土器埋設遺構断削(南より)
 c 29号土器埋設遺構断削(南より) d 30号土器埋設遺構断削(南より)
 e 31号土器埋設遺構断削(東より) f 32号土器埋設遺構断削(南より)
 g 33号土器埋設遺構断削(南より) h 34号土器埋設遺構断削(北より)



239 35～42号土器埋設遺構

- a 35号土器埋設遺構断割(南より) b 36号土器埋設遺構断割(西より)
 c 37号土器埋設遺構断割(西より) d 38号土器埋設遺構断割(東より)
 e 39号土器埋設遺構断割(南西より) f 40号土器埋設遺構断割(東より)
 g 41号土器埋設遺構断割(南東より) h 42号土器埋設遺構(北より)



240 43 - 49号土器埋設遺構

- | | |
|---------------------|---------------------|
| a 43号土器埋設遺構断削(南東より) | b 44号土器埋設遺構断削(東より) |
| c 45号土器埋設遺構断削(西より) | d 46号土器埋設遺構断削(西より) |
| e 47号土器埋設遺構断削(南より) | f 48号土器埋設遺構断削(南東より) |
| g 48号土器埋設遺構(南より) | h 49号土器埋設遺構断削(南より) |



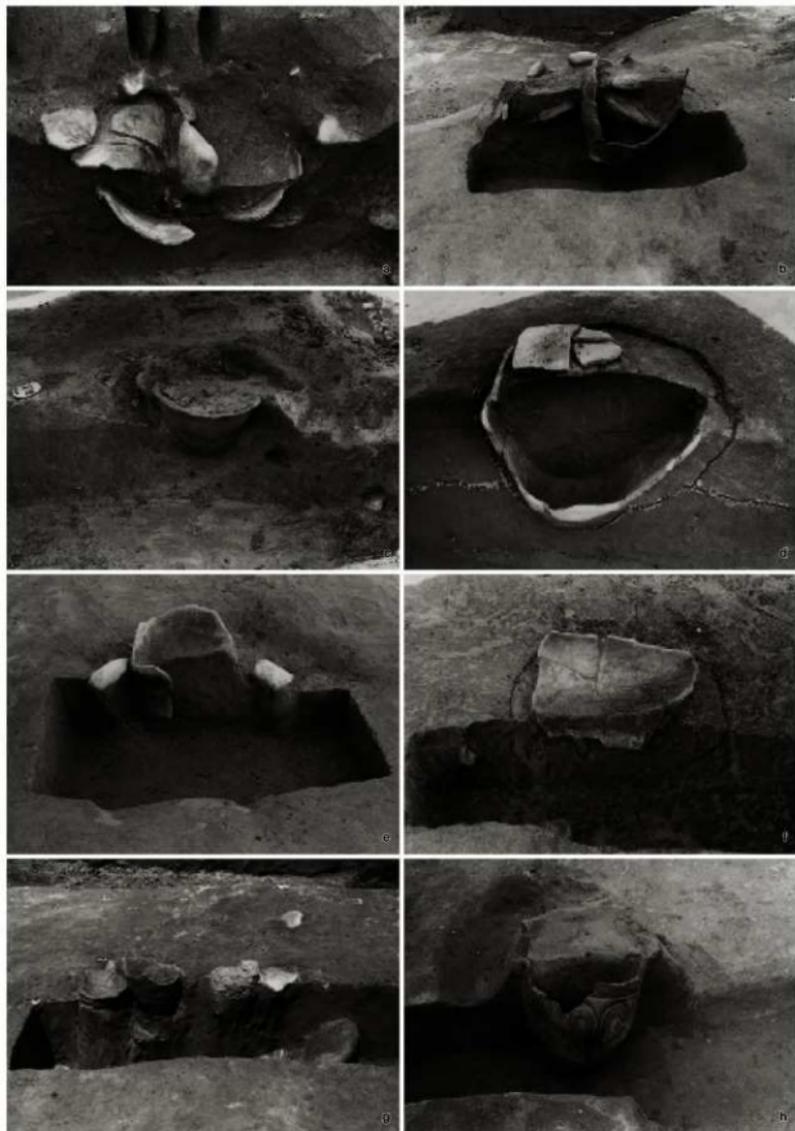
241 50～57号土器埋設遺構

- | | |
|---------------------|---------------------|
| a 50号土器埋設遺構断面(西より) | b 51号土器埋設遺構断面(東より) |
| c 52号土器埋設遺構断面(南東より) | d 53号土器埋設遺構断面(南東より) |
| e 54号土器埋設遺構(南より) | f 55号土器埋設遺構断面(東より) |
| g 56号土器埋設遺構断面(西より) | h 57号土器埋設遺構断面(東より) |



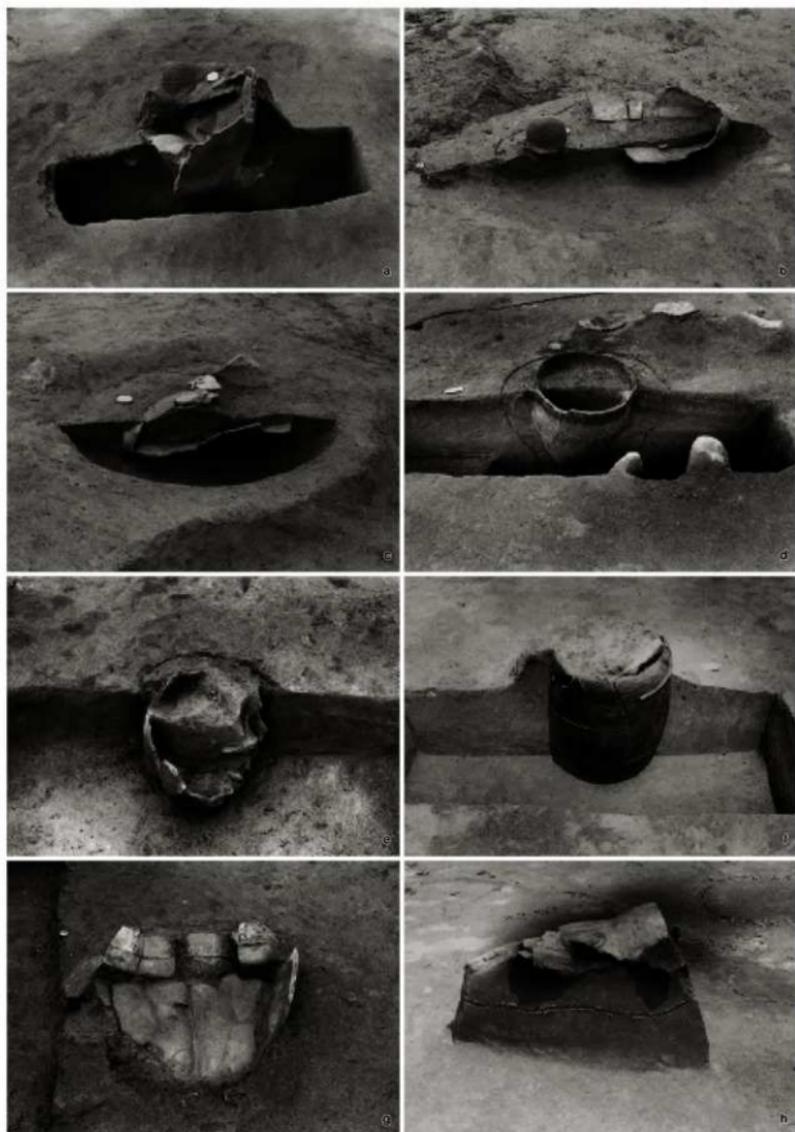
242 58 - 65号土器埋設遺構

- | | |
|---------------------|--------------------|
| a 58号土器埋設遺構断削(南より) | b 59号土器埋設遺構断削(南より) |
| c 60号土器埋設遺構断削(南より) | d 61号土器埋設遺構断削(南より) |
| e 62号土器埋設遺構(北より) | f 63号土器埋設遺構断削(南より) |
| g 64号土器埋設遺構断削(北東より) | h 65号土器埋設遺構(東より) |



243 66～73号土器埋設遺構

- a 66号土器埋設遺構断面(西より) b 67号土器埋設遺構断面(東より)
 c 68号土器埋設遺構断面(東より) d 69号土器埋設遺構断面(南より)
 e 70号土器埋設遺構断面(北より) f 71号土器埋設遺構断面(北より)
 g 72号土器埋設遺構断面(東より) h 73号土器埋設遺構断面(南より)



244 74-81号土器埋設遺構

- | | |
|---------------------|---------------------|
| a 74号土器埋設遺構(東より) | b 75号土器埋設遺構断削(西より) |
| c 76号土器埋設遺構断削(南東より) | d 77号土器埋設遺構断削(南より) |
| e 78号土器埋設遺構断削(南より) | f 79号土器埋設遺構断削(南より) |
| g 80号土器埋設遺構(南より) | h 81号土器埋設遺構断削(南東より) |



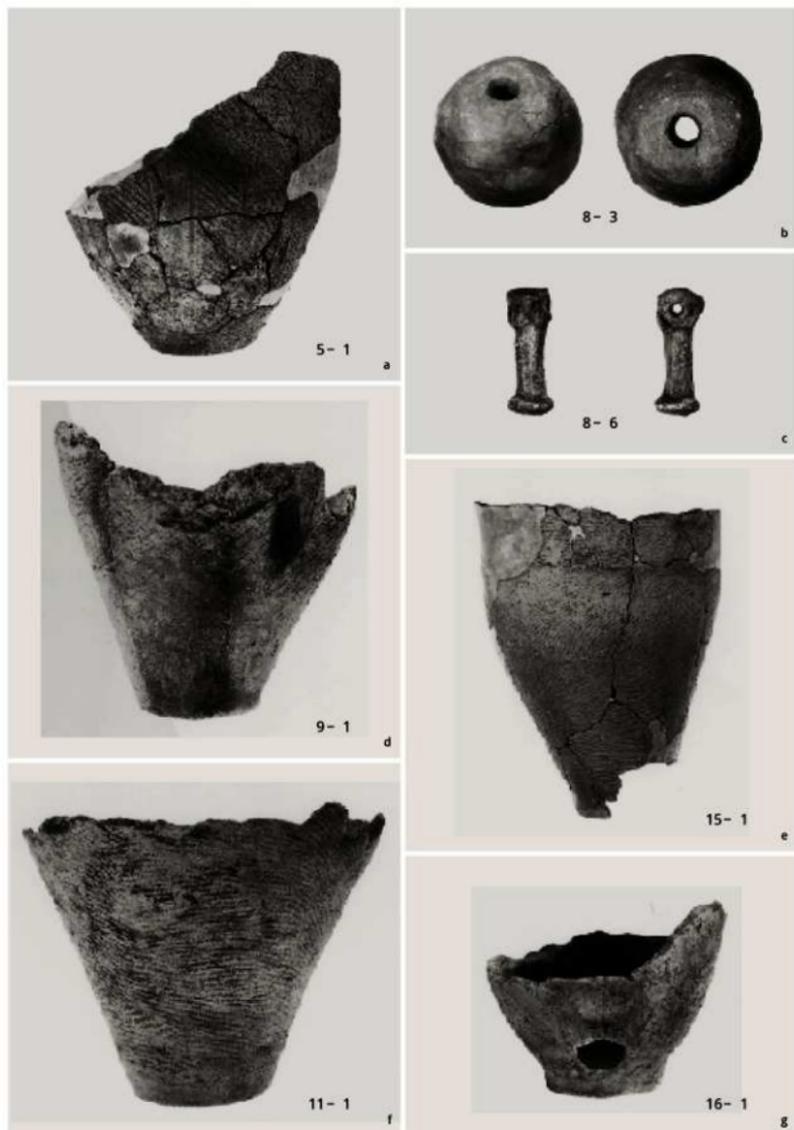
245 82～89号土器埋設遺構

- a 82号土器埋設遺構断面(南より) b 83号土器埋設遺構断面(南より)
 c 84号土器埋設遺構断面(南より) d 85号土器埋設遺構断面(北より)
 e 86号土器埋設遺構断面(西より) f 87号土器埋設遺構(南より)
 g 88号土器埋設遺構(南より) h 89号土器埋設遺構断面(東より)



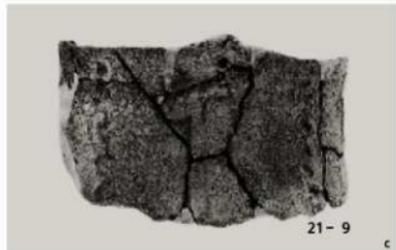
246 90・91号土器埋設遺構，その他

- a 90号土器埋設遺構断製(北より) b 91号土器埋設遺構断製(南より)
 c M22-29G 出土石器埋納土器(南より) d M24-24G 出土石器検出状況(南より)
 e 作業風景(東より) f 作業風景(東より)
 g 作業風景(南より) h 遺跡説明(北東より)



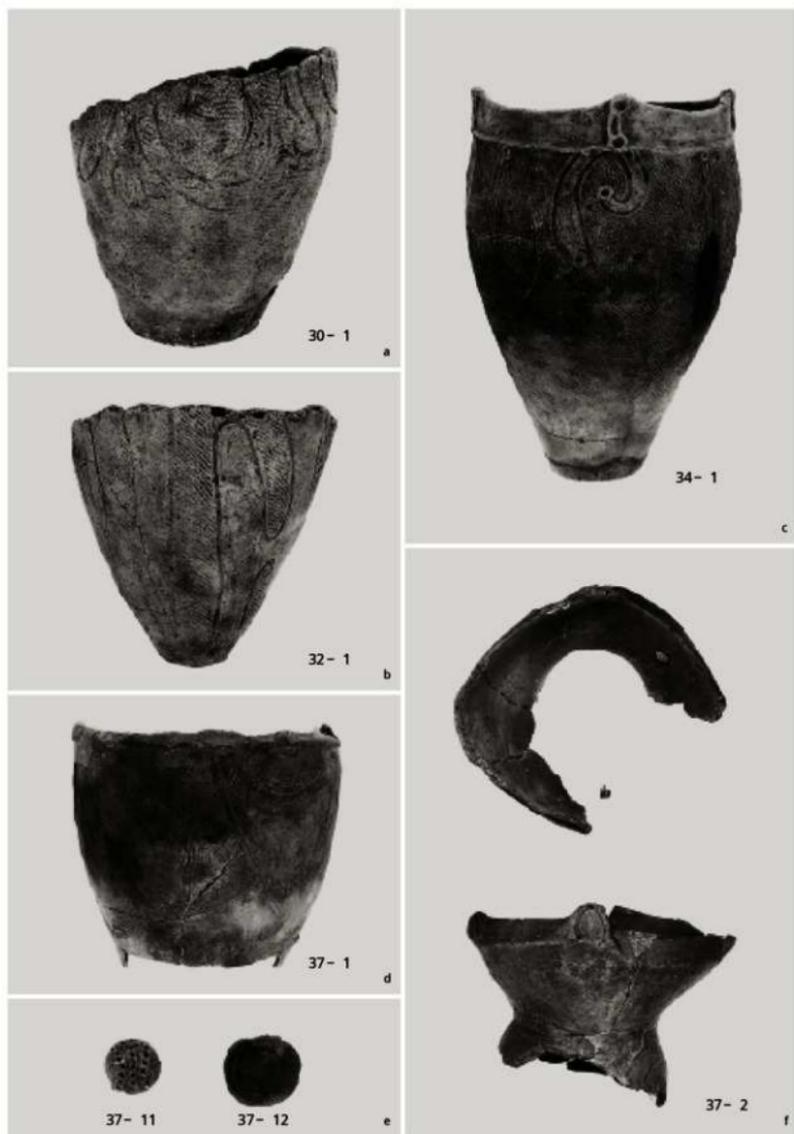
247 住居跡出土遺物

a 67号住居跡 b・c 115号住居跡
 d 116号住居跡 e 132号住居跡
 f 117号住居跡 g 133号住居跡



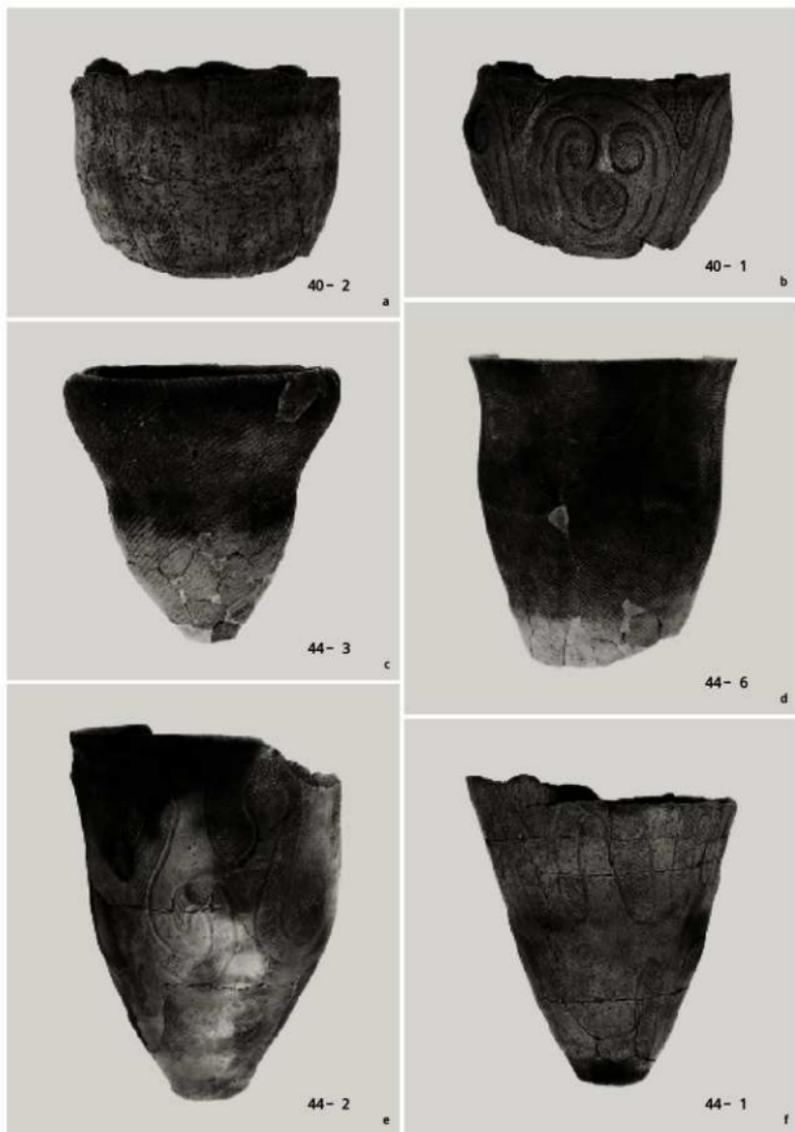
248 住居跡出土土器

a - d 152号住居跡
e - f 168号住居跡



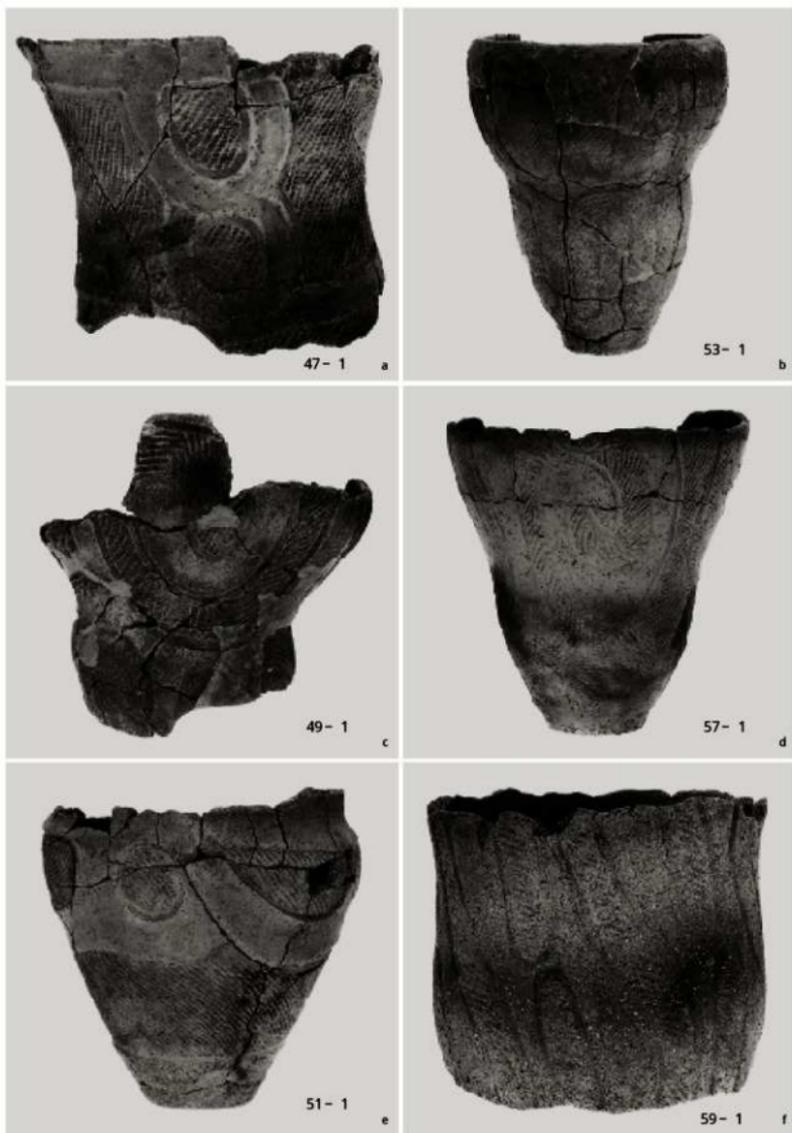
249 住居跡出土遺物

a 171号住居跡 b 172号住居跡
c 175号住居跡 d-f 176号住居跡



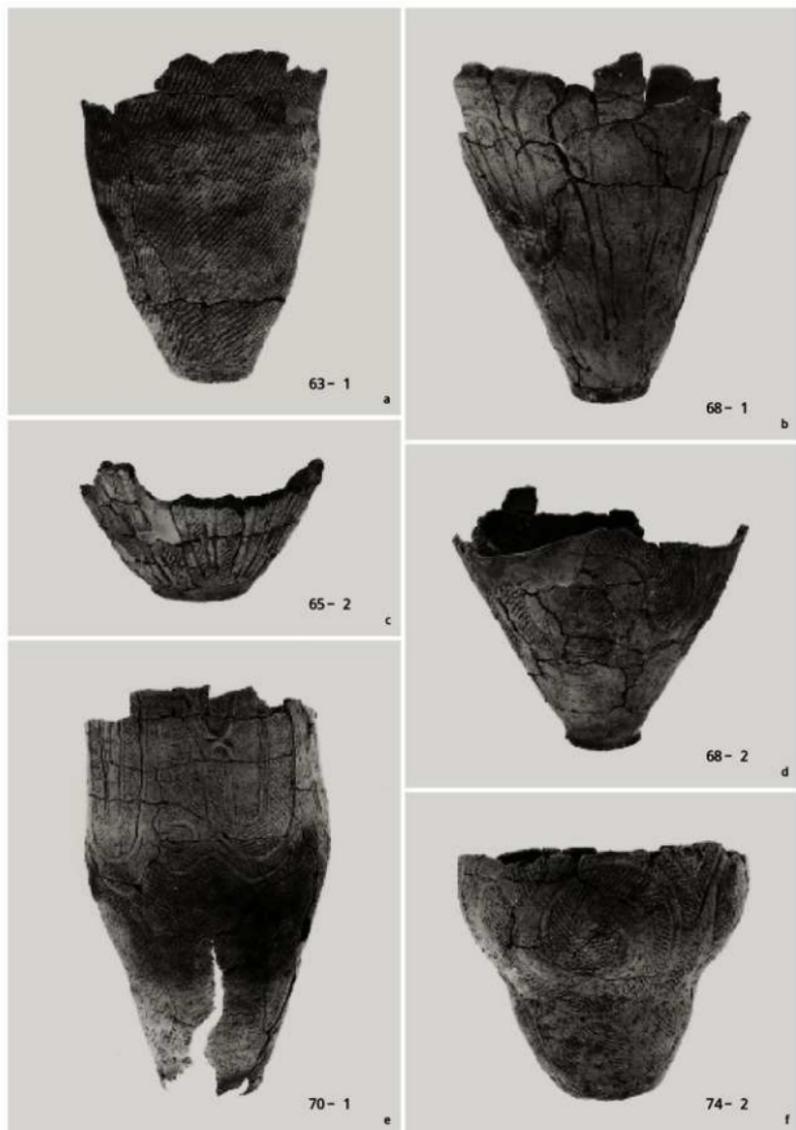
250 住居跡出土土器

a · b 177号住居跡
c - f 179号住居跡



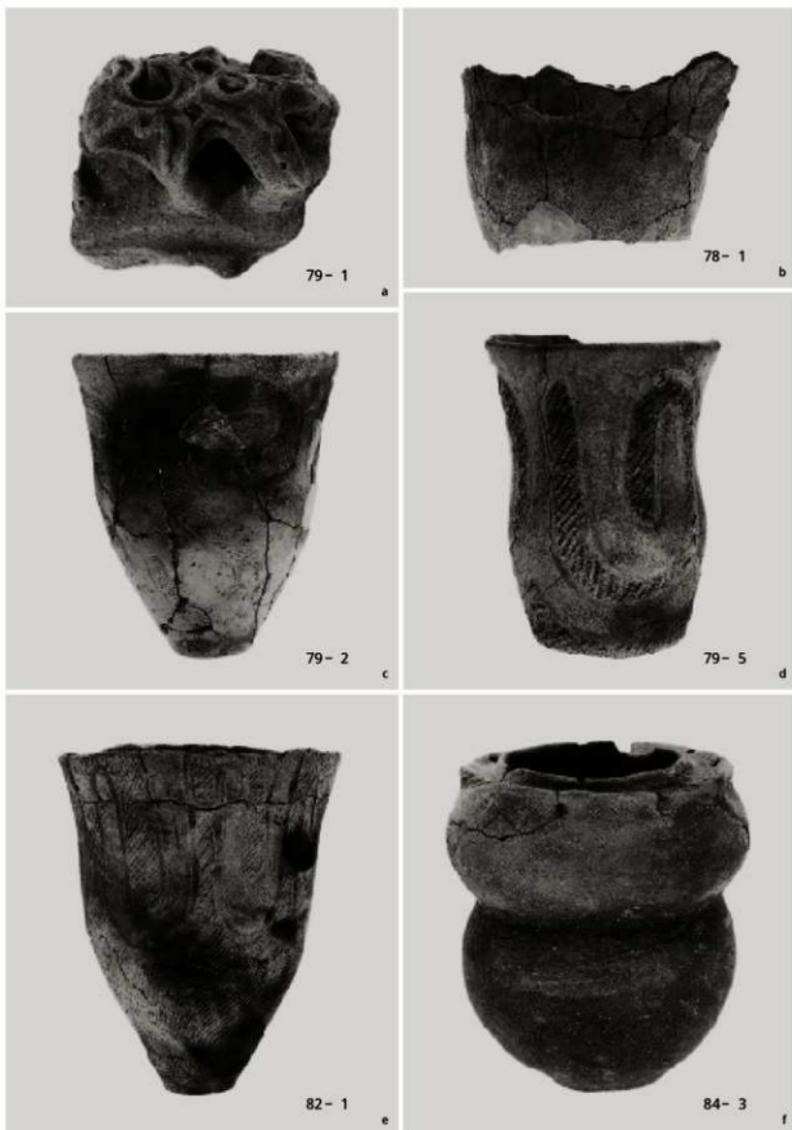
251 住居跡出土土器

a 182号住居跡 b 186号住居跡
 c 183号住居跡 d 190号住居跡
 e 184号住居跡 f 197号住居跡



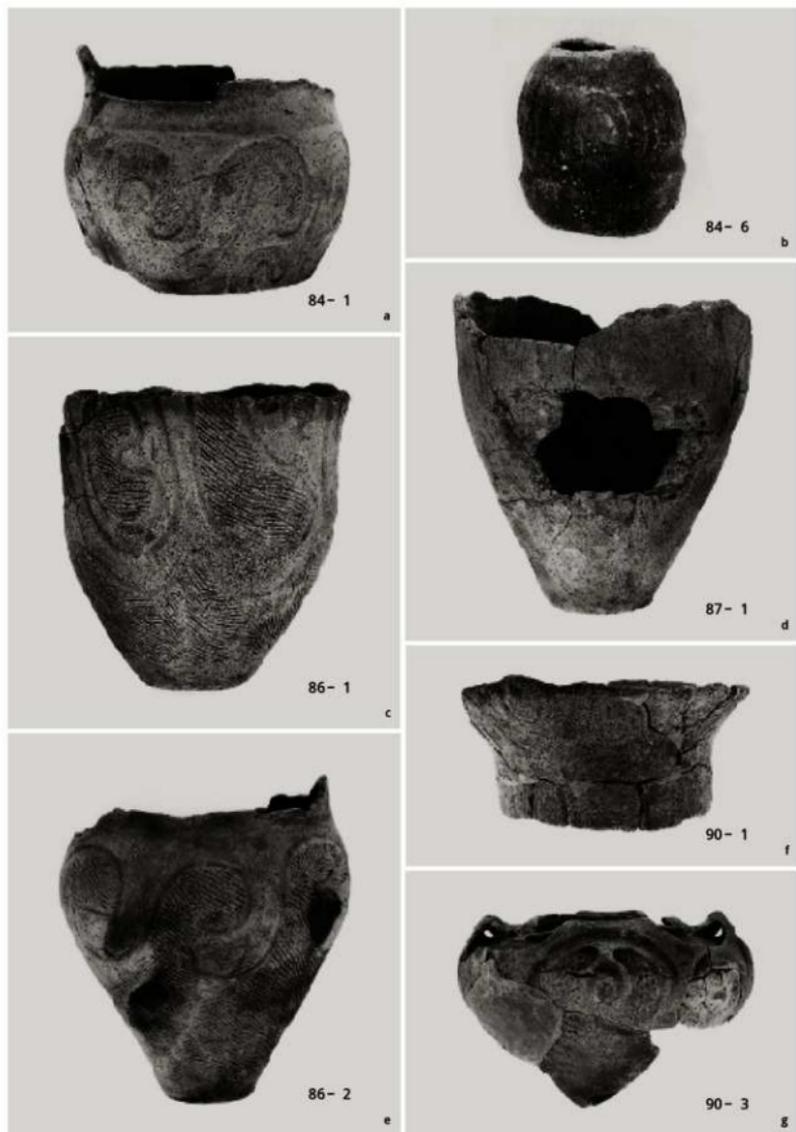
252 住居跡出土土器

a 198号住居跡 b・d 202号住居跡
 c 201号住居跡 e 203号住居跡
 f 206号住居跡



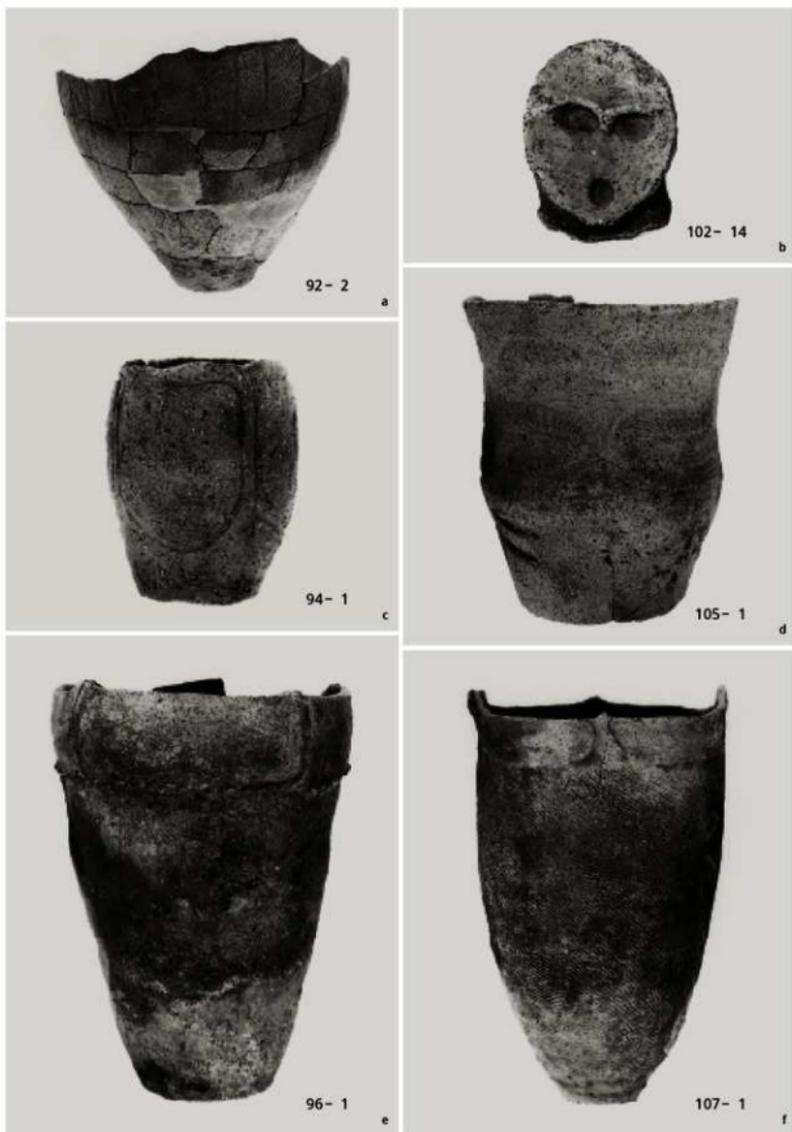
253 住居跡出土土器

a - d 208号住居跡 e 209号住居跡
f 210号住居跡



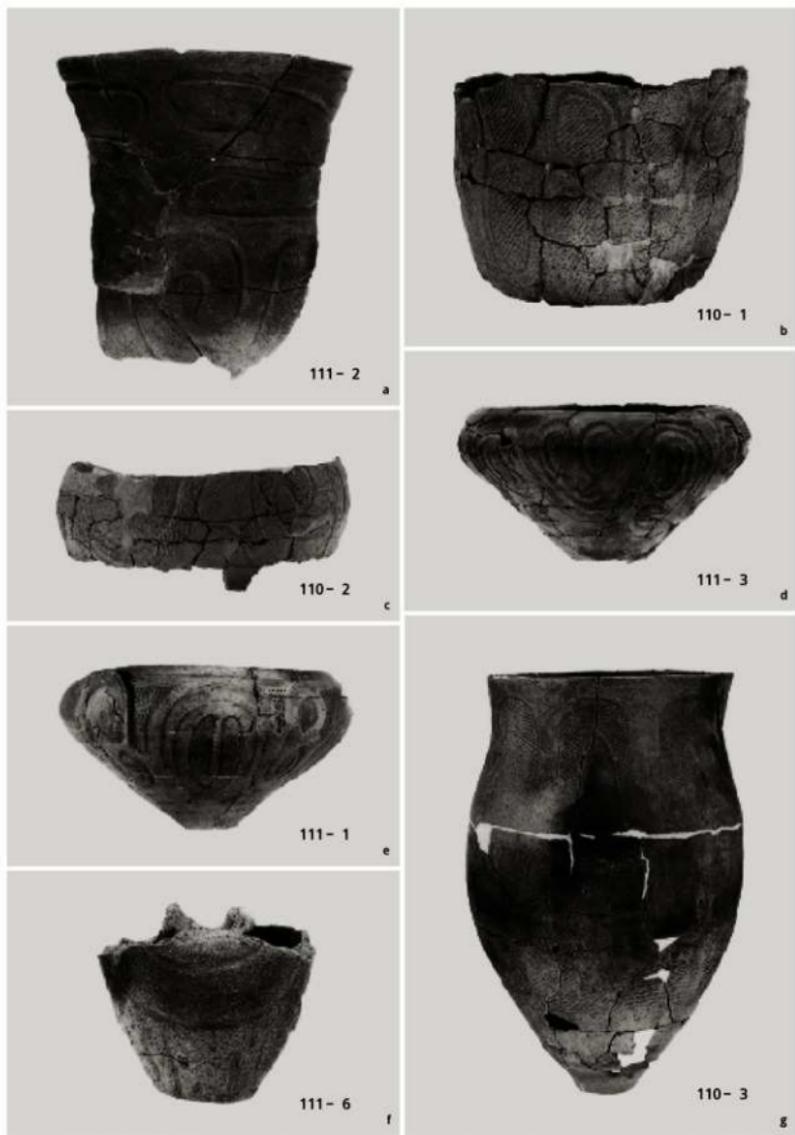
254 住居跡出土土器

a · b 210号住居跡 d 212号住居跡
c · e 211号住居跡 f · g 213号住居跡



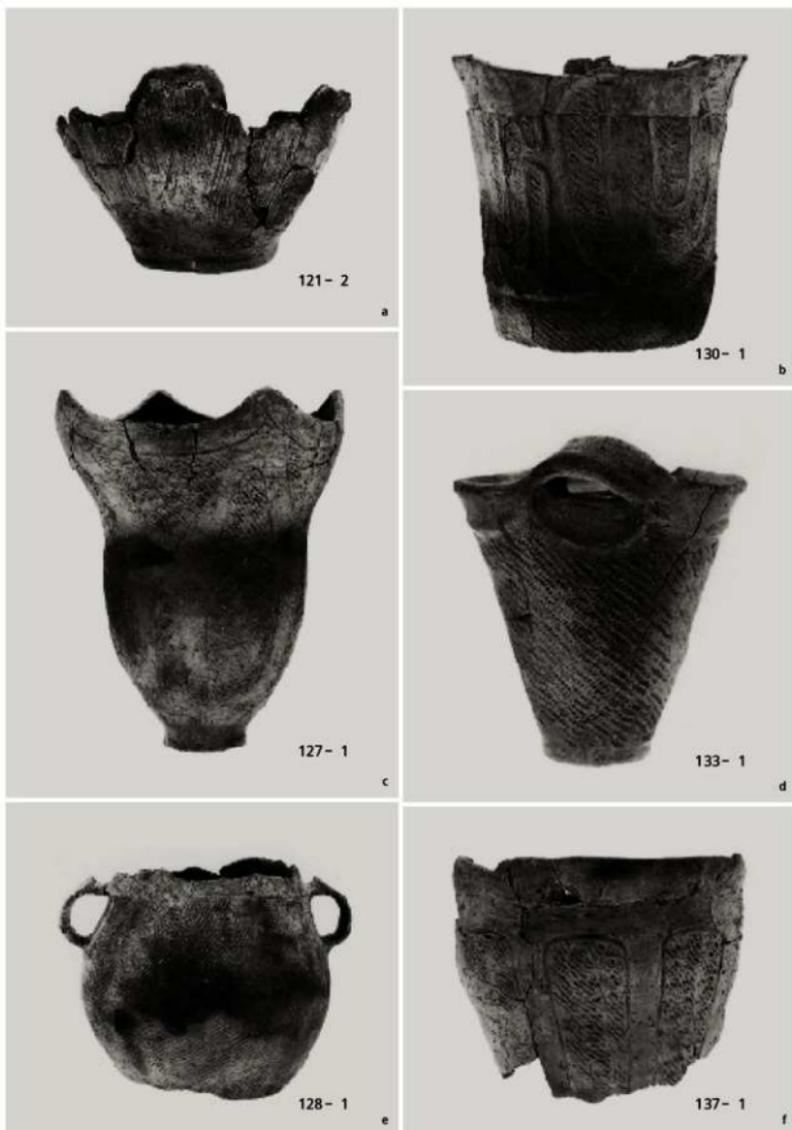
255 住居跡出土遺物

a 215号住居跡 b 222号住居跡
 c 216号住居跡 d 224号住居跡
 e 217号住居跡 f 225号住居跡



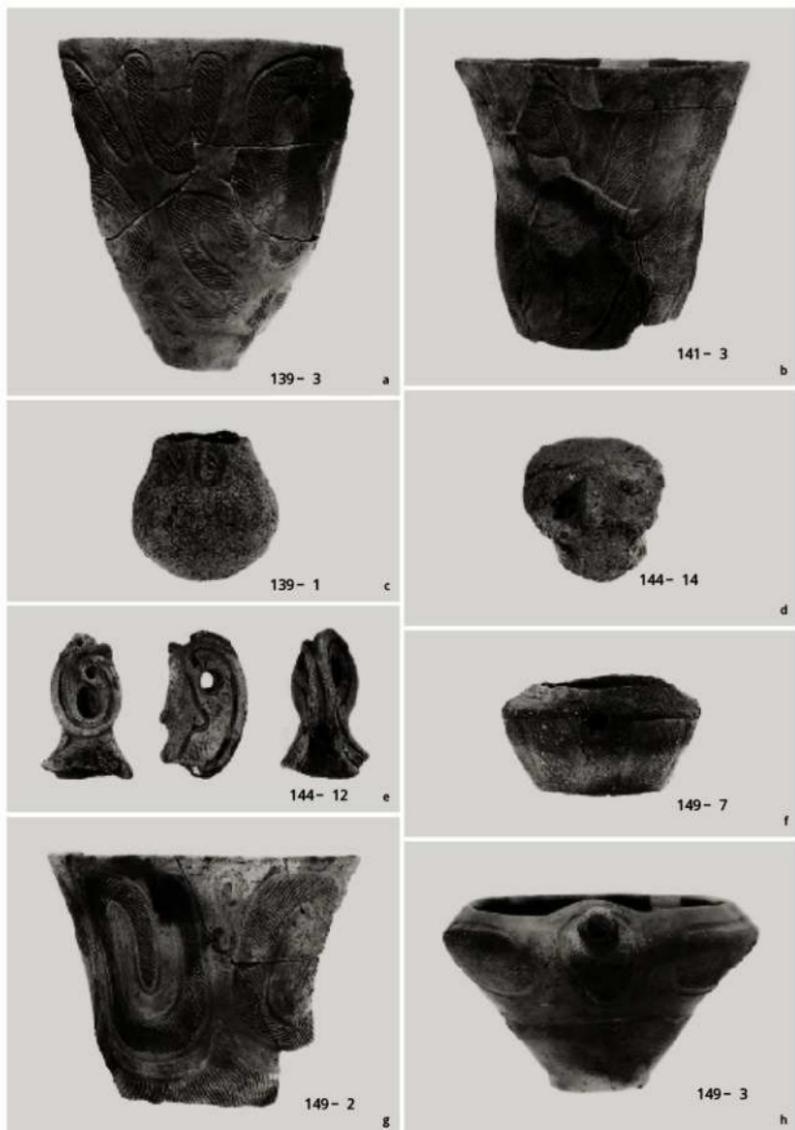
256 住居跡出土土器

a - g 226号住居跡



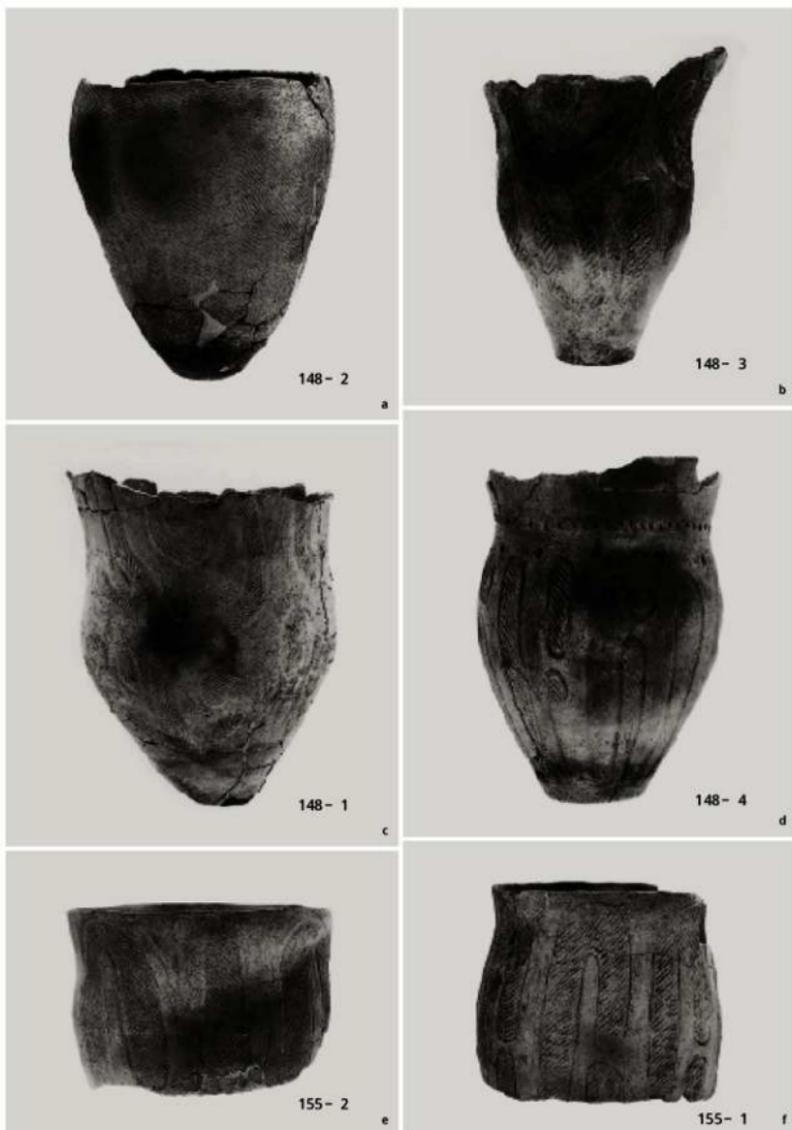
257 住居跡出土土器

a 230号住居跡 b 233号住居跡
 c・e 232号住居跡 d 234号住居跡
 f 236号住居跡



258 住居跡出土遺物

a・c 237号住居跡 b 238号住居跡
 d・e 240号住居跡 f-h 241a号住居跡



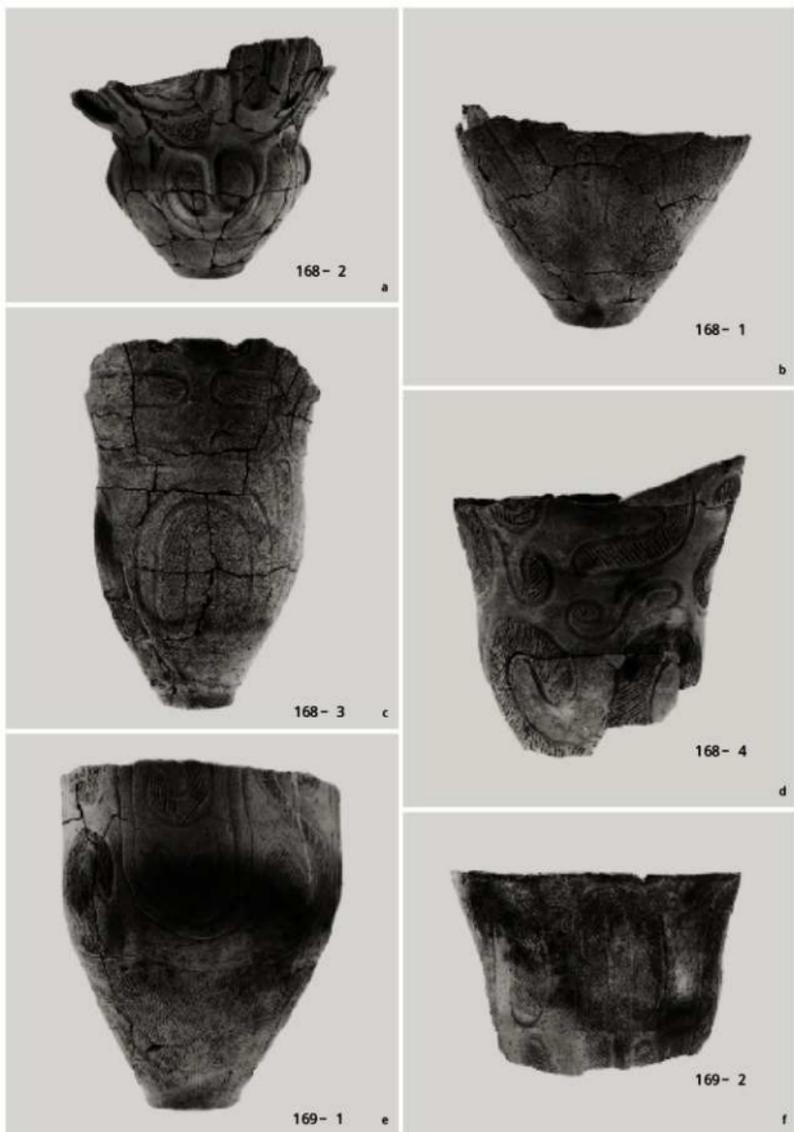
259 住居跡出土土器

a - d 241a号住居跡
e・f 242号住居跡



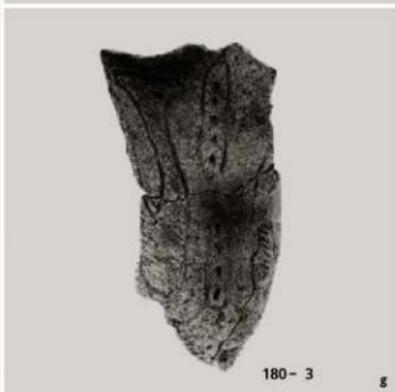
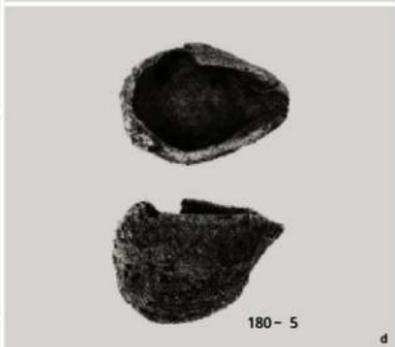
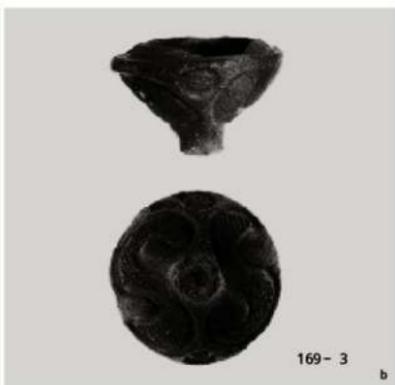
260 住居跡出土土器

a・b 243号住居跡 c・d 247号住居跡
e 245号住居跡 f 249号住居跡



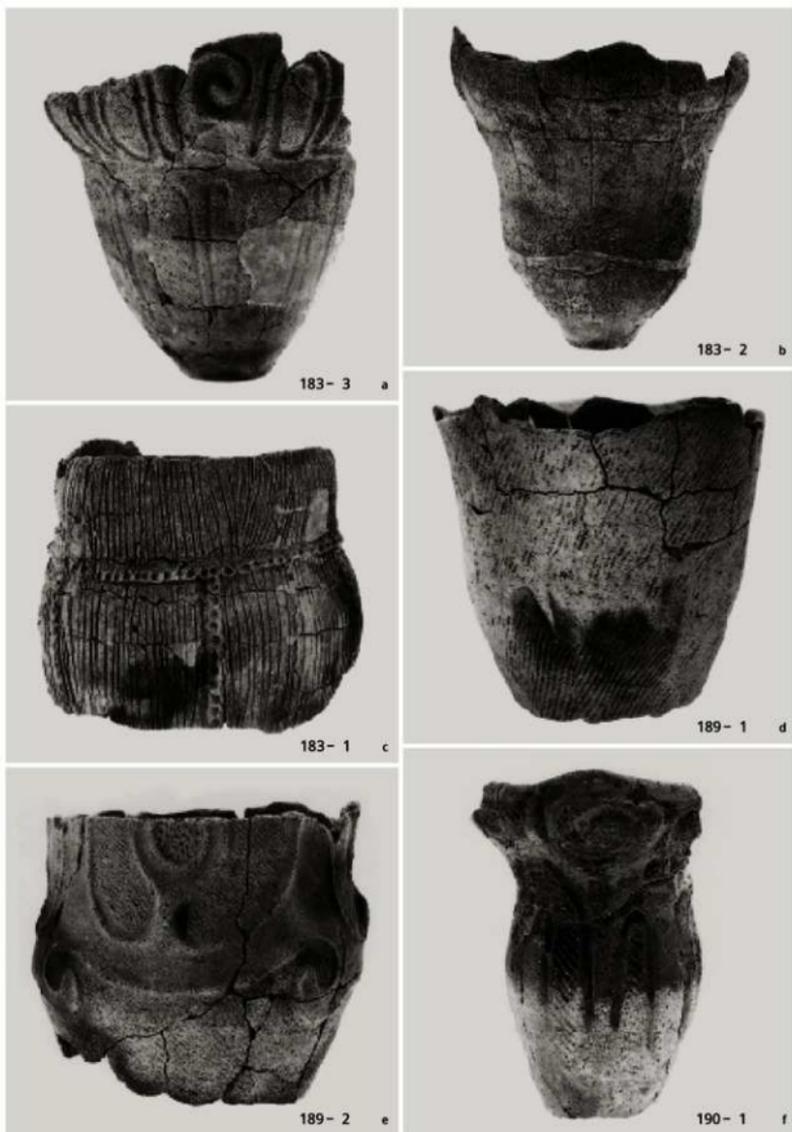
261 住居跡出土土器

a - f 246号住居跡



262 住居跡出土土器

a・b 246号住居跡
c-g 250号住居跡



263 住居跡出土土器

a - c 251号住居跡
d - f 254号住居跡



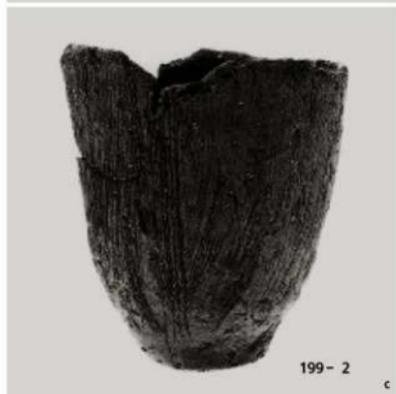
196-1

a



196-2

b



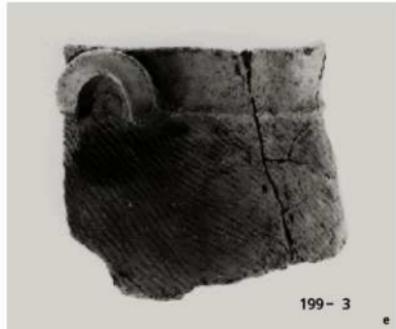
199-2

c



199-4

d



199-3

e

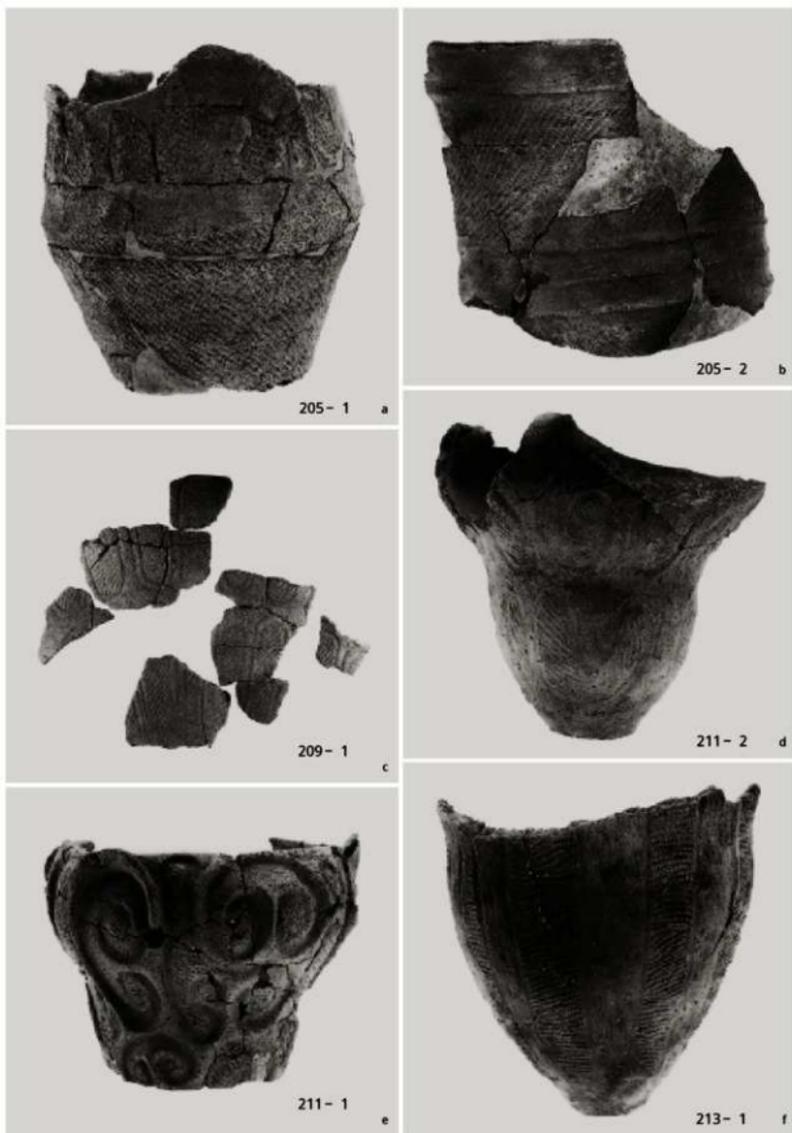


201-1

f

264 住居跡出土土器

a - b 259号住居跡 c - e 260号住居跡
f 261号住居跡



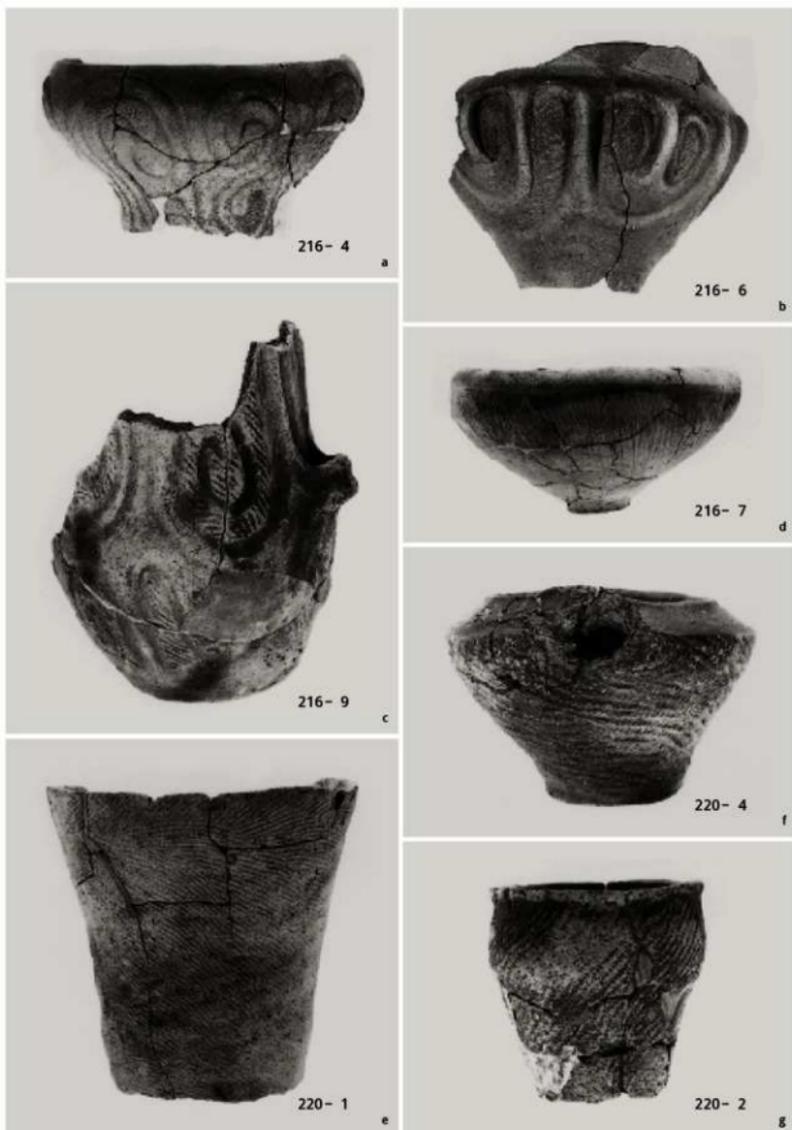
265 住居跡出土土器

a・b 264号住居跡 c 265号住居跡
d・e 266号住居跡 f 268号住居跡



266 住居跡出土土器

a · b 267号住居跡
c - f 269号住居跡



267 住居跡出土土器

a - d 269号住居跡
e - g 270号住居跡



221-1 a



225-1 b



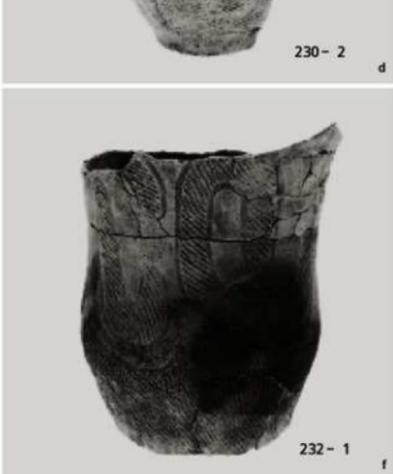
228-1 c



230-2 d



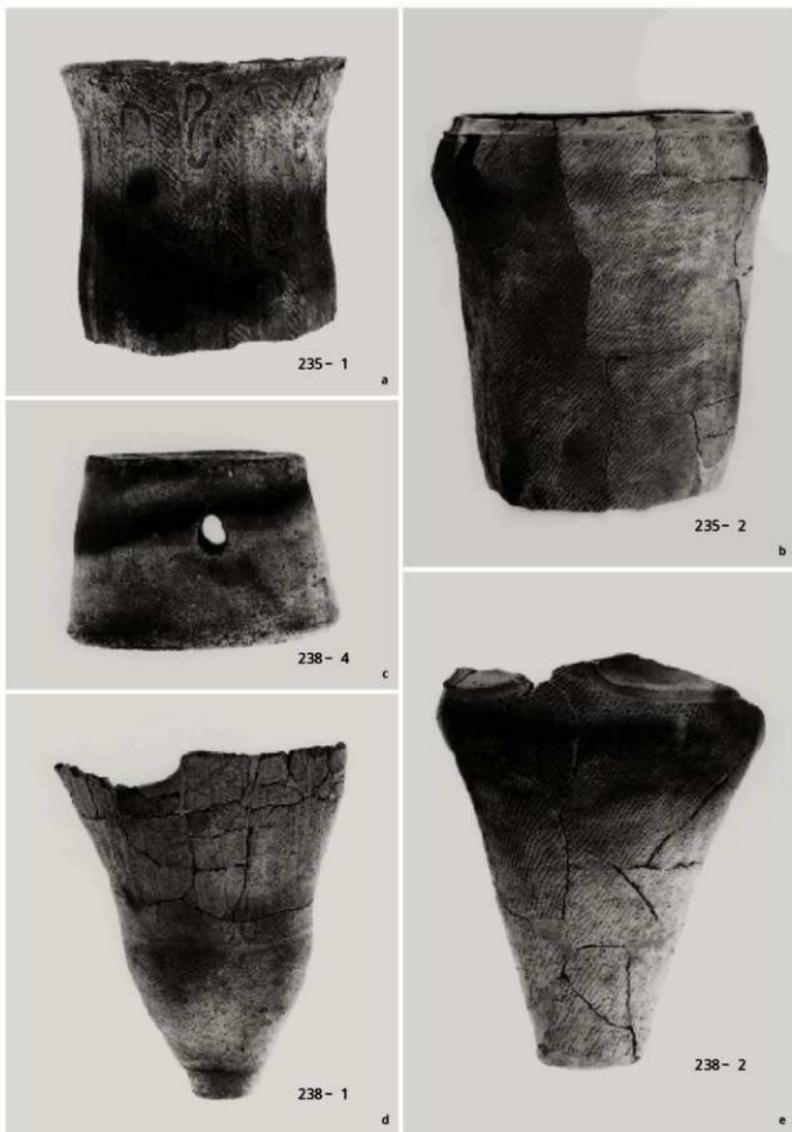
230-1 e



232-1 f

268 住居跡出土土器

a 271号住居跡
b 274号住居跡
c 276号住居跡
d・e 277号住居跡
f 278号住居跡



269 住居跡出土土器

a・b 279号住居跡
c-e 280号住居跡



241- 2 a



242- 6 b



243- 1 d



241- 1 c



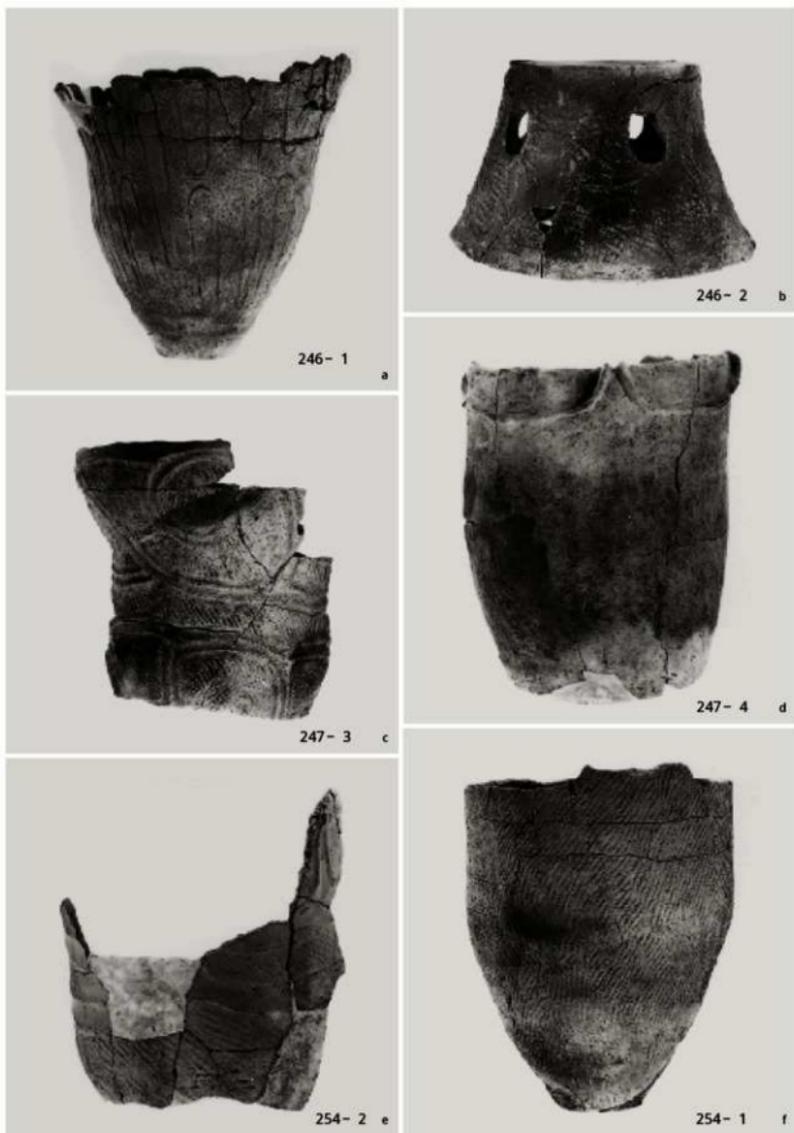
251- 1 e



250- 1 f

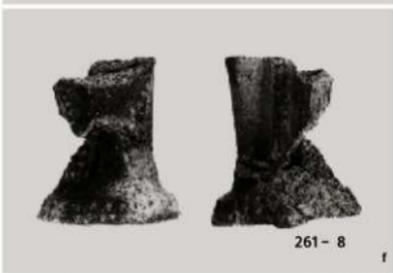
270 住居跡出土土器

a - c 281号住居跡 d 282号住居跡
e - f 284号住居跡



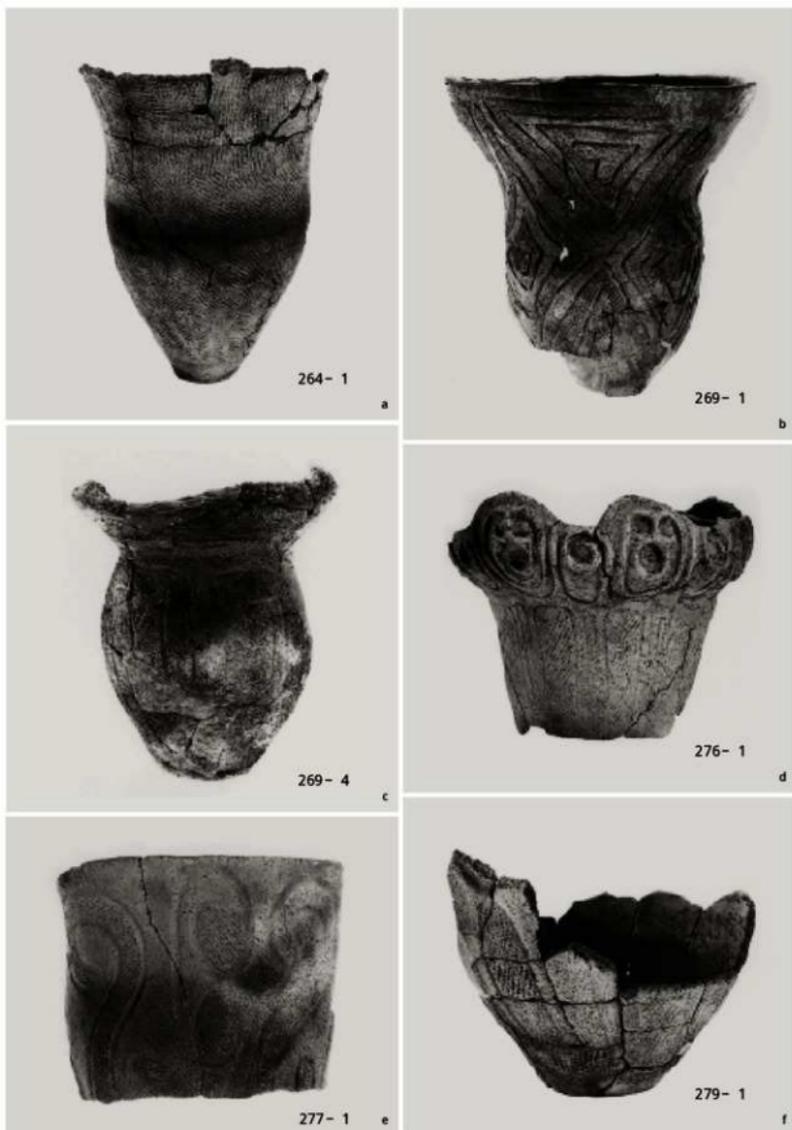
271 住居跡出土土器

a - d 283号住居跡
e - f 286号住居跡



272 住居跡出土遺物

a - f 287号住居跡



273 住居跡出土土器

a 288号住居跡 b・c 289号住居跡
 d 291号住居跡 e 292号住居跡
 f 293号住居跡



274- 1

a

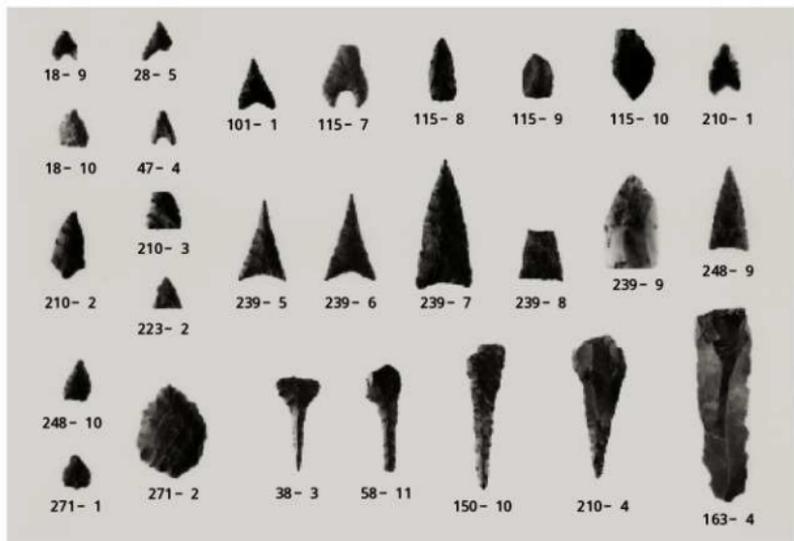


274- 2

b

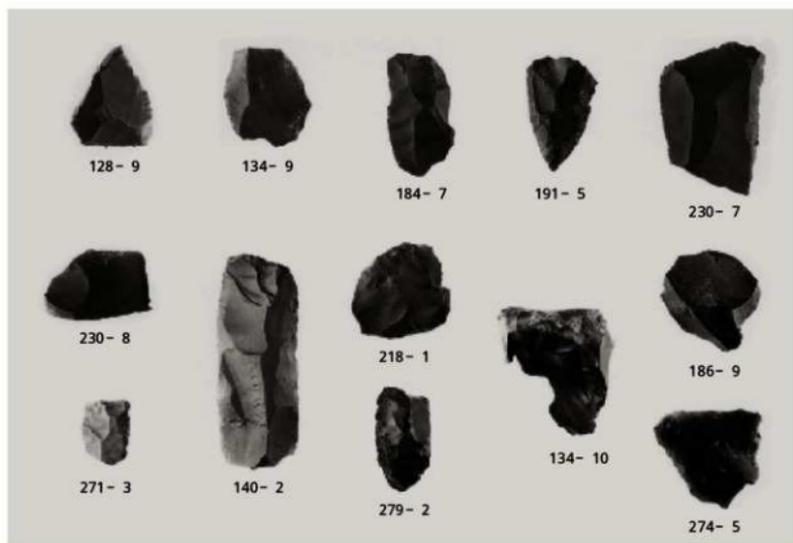
274 住居跡出土土器

a · b 290号住居跡



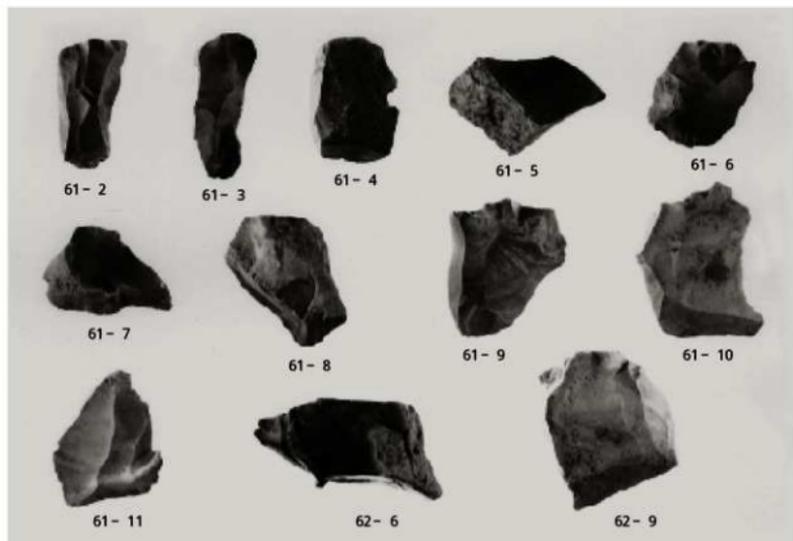
275 住居跡出土石器(1)

150 · 168 · 176 · 182 · 190 · 222 · 226号住居跡
241a · 245 · 265 · 273 · 280 · 283 · 289号住居跡



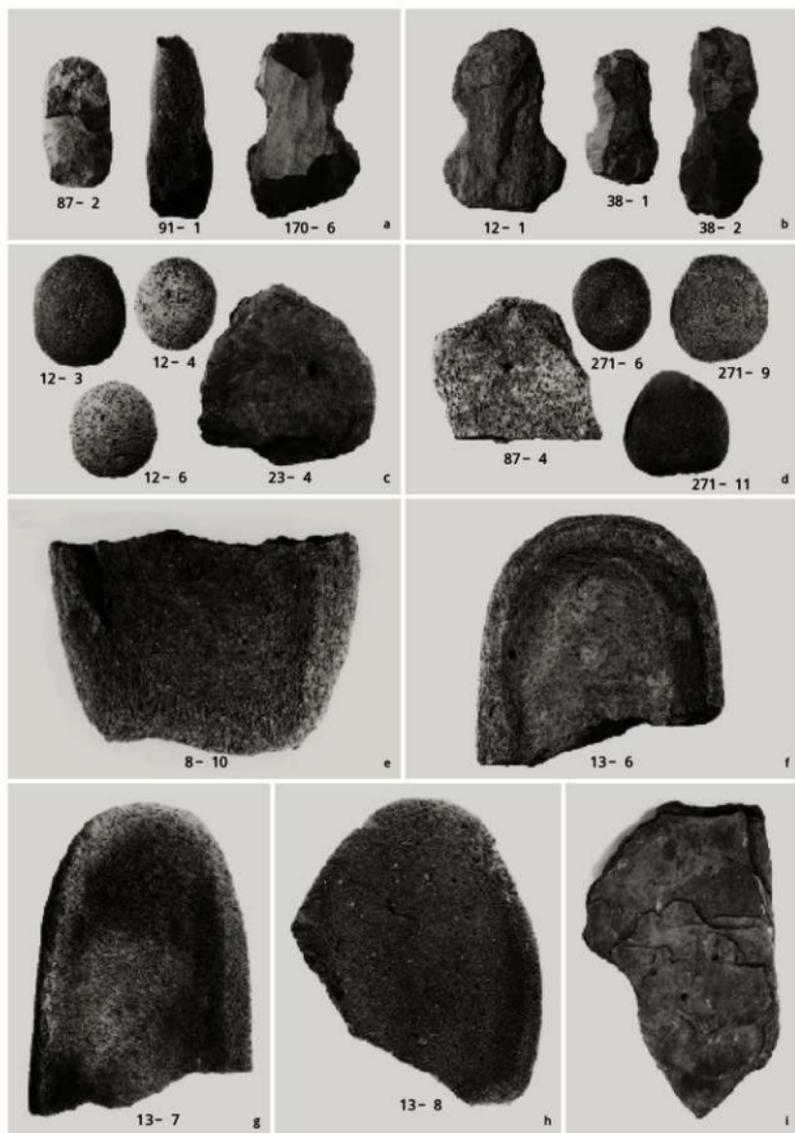
276 住居跡出土石器(2)

232・234・237・251・252・254号住居跡
269・277・289・290・293号住居跡



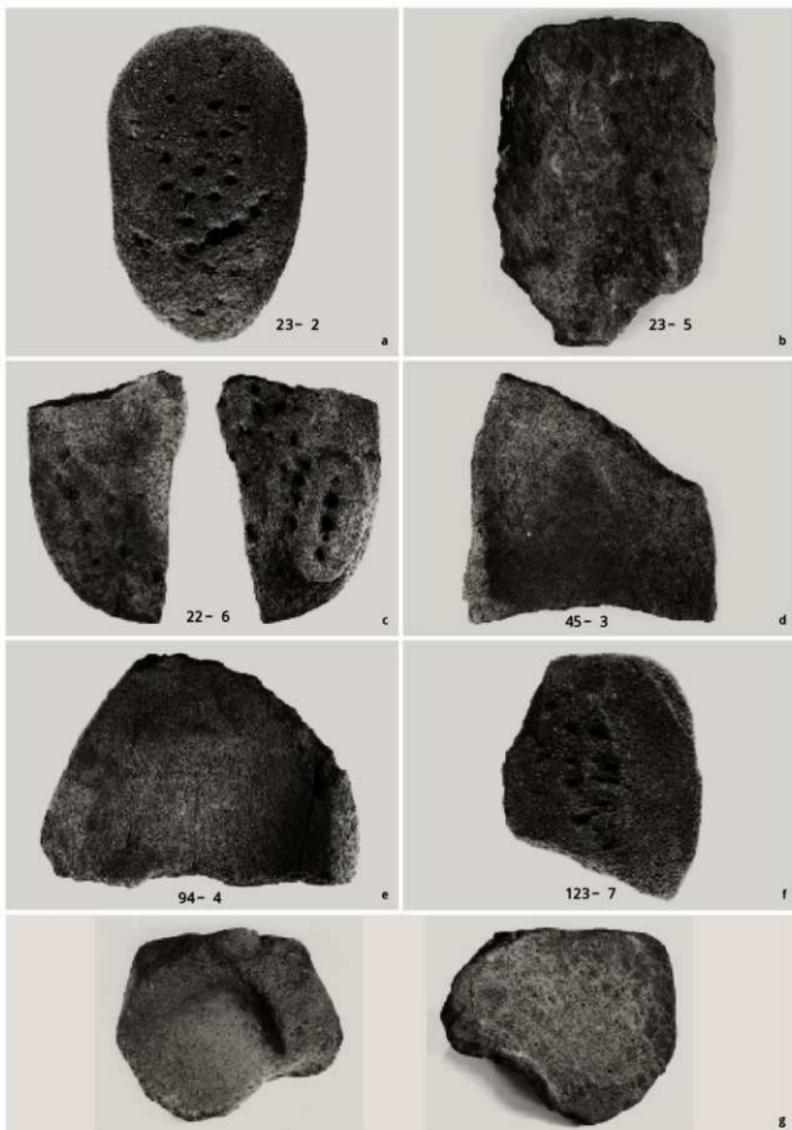
277 住居跡出土石器(3)

197号住居跡



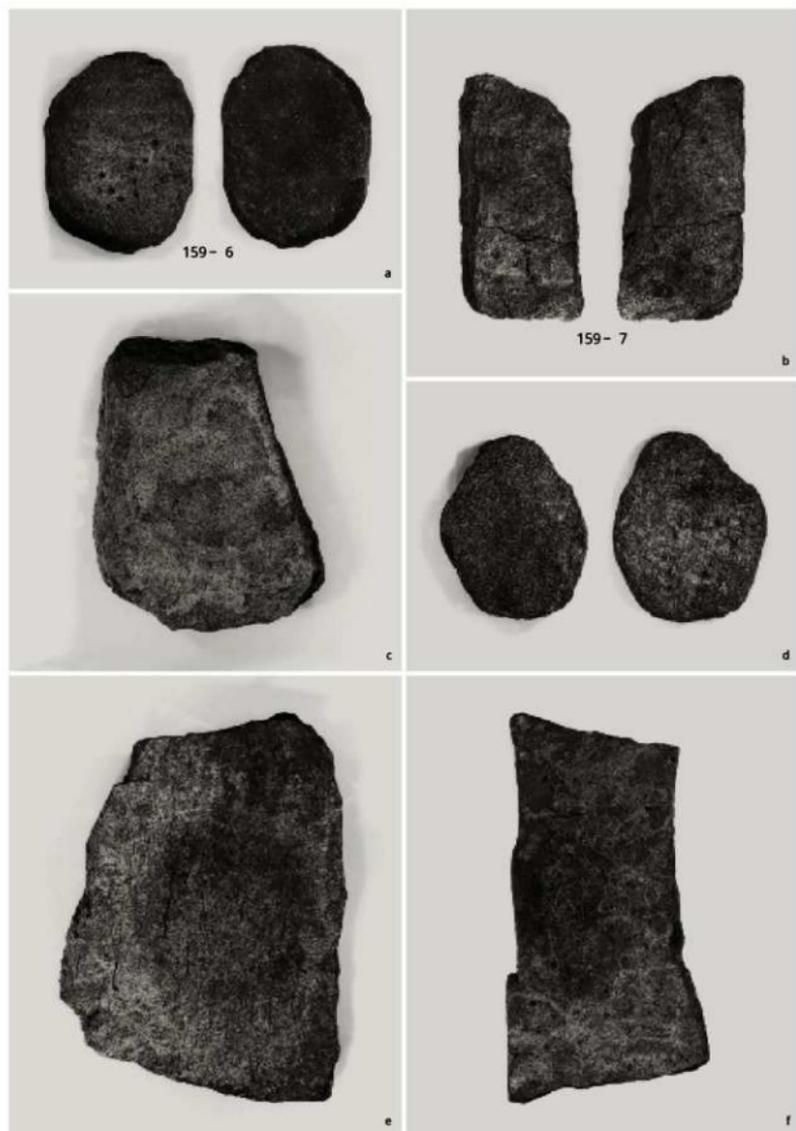
278 住居跡出土石器(4)

a 212・213・246号住居跡
 b 117・176号住居跡
 c 117・152号住居跡
 d 212・289号住居跡
 e 115号住居跡
 f - 1 117号住居跡



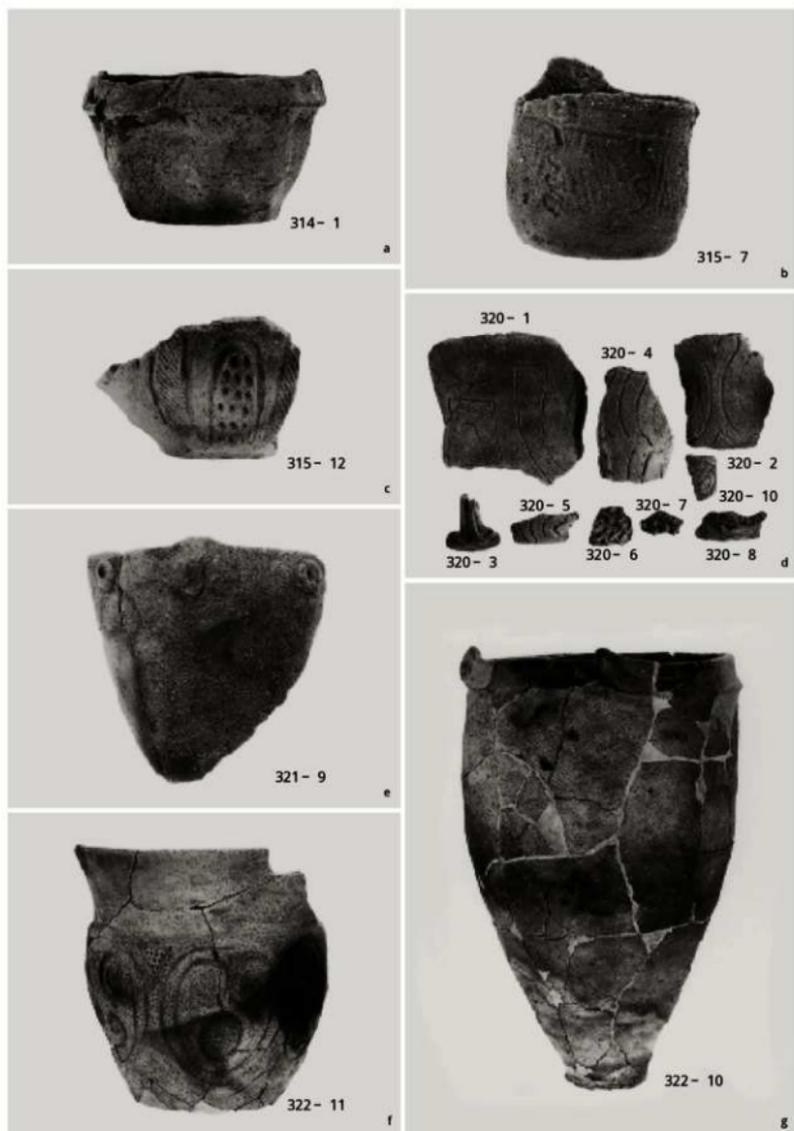
279 住居跡出土石器 (5)

a - c 152号住居跡 d 179号住居跡
 e 216号住居跡 f 230号住居跡
 g 252号住居跡



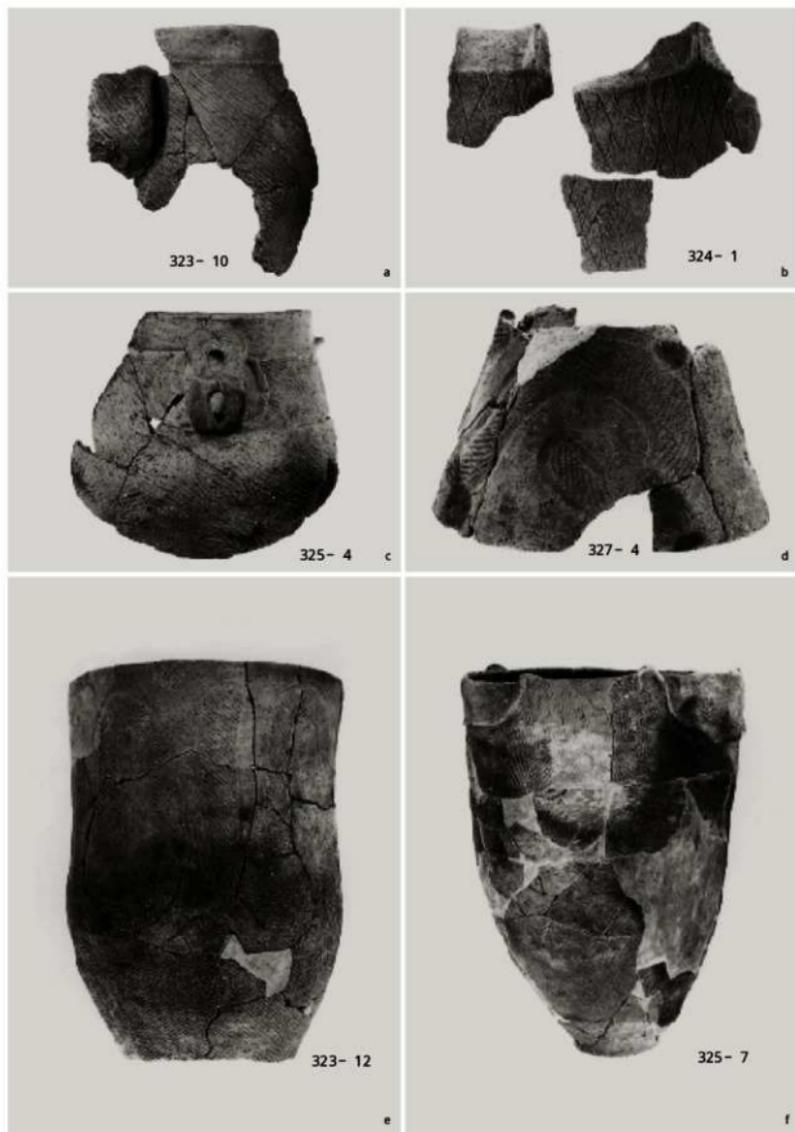
280 住居跡出土石器(6)

a・b 243号住居跡 c 265号住居跡
 d 284号住居跡 e・f 287号住居跡



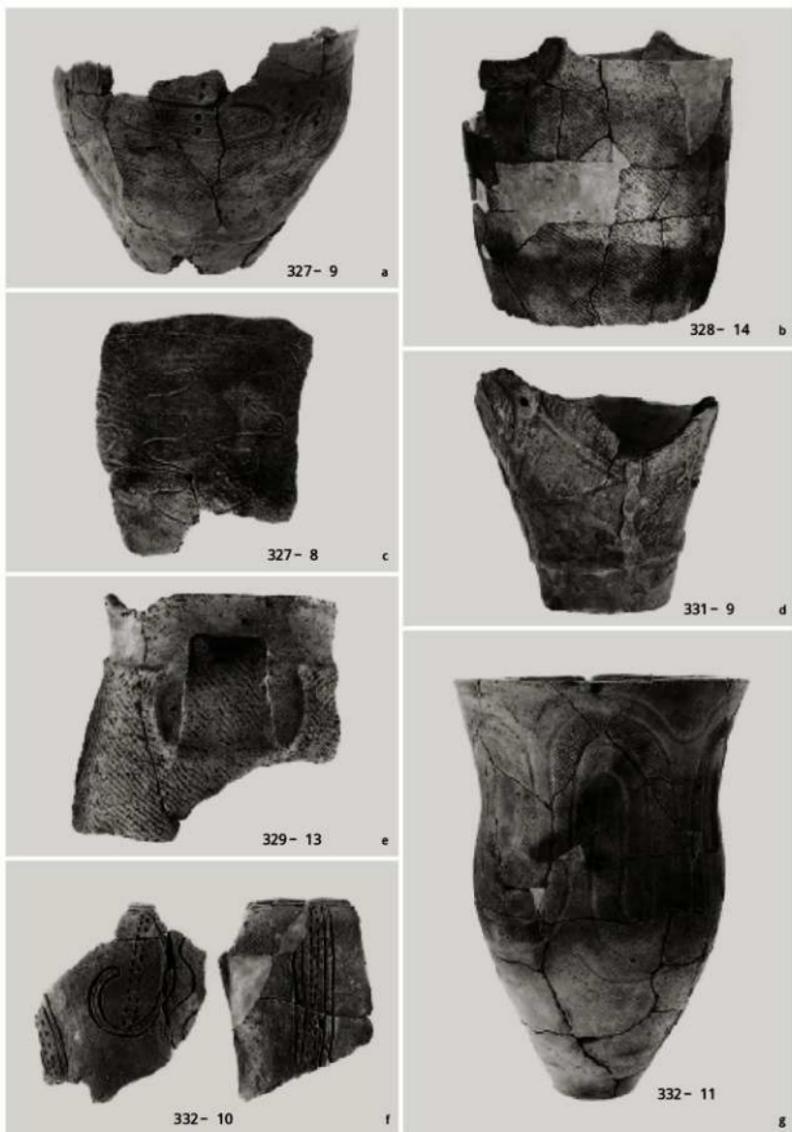
281 土坑出土土器(1)

a 11号土坑 b 37号土坑
 c 44号土坑 d 92号土坑
 e 98号土坑 f 110号土坑
 g 109号土坑



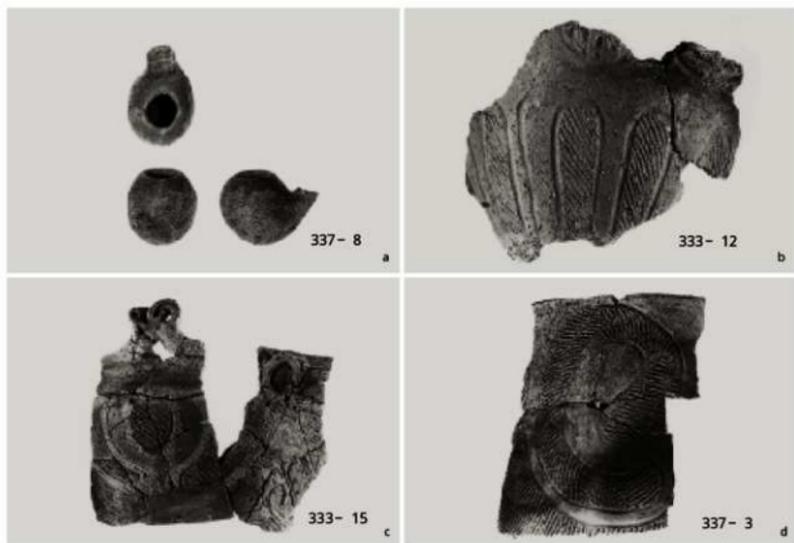
282 土坑出土土器(2)

a 115号土坑 b 119号土坑
 c 125号土坑 d 160号土坑
 e 112号土坑 f 128号土坑



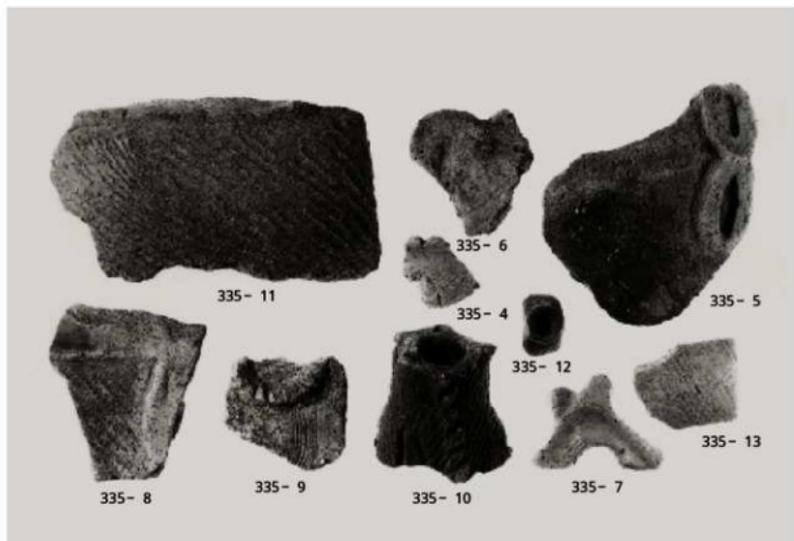
283 土坑出土土器(3)

a・c 161号土坑 b 188号土坑
 d 218号土坑 e 193号土坑
 f 226号土坑 g 232号土坑



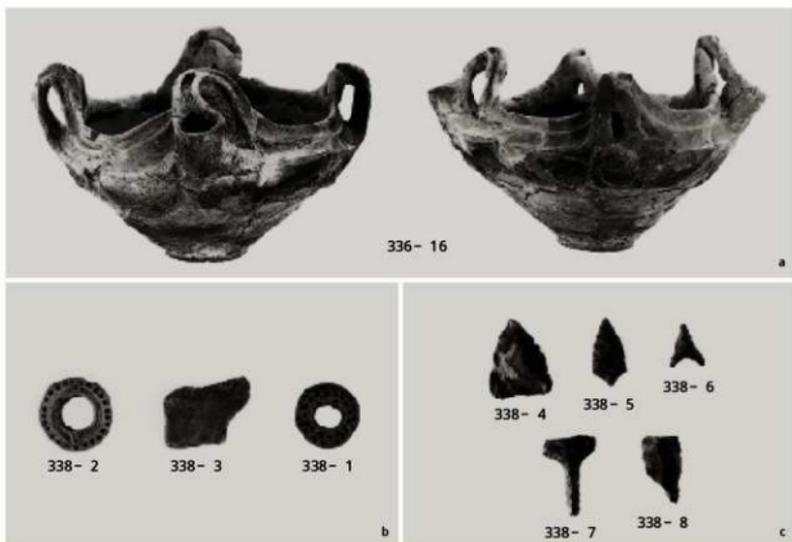
284 土坑出土土器(4)

a 241号土坑 b 245号土坑
c 246号土坑 d 286号土坑



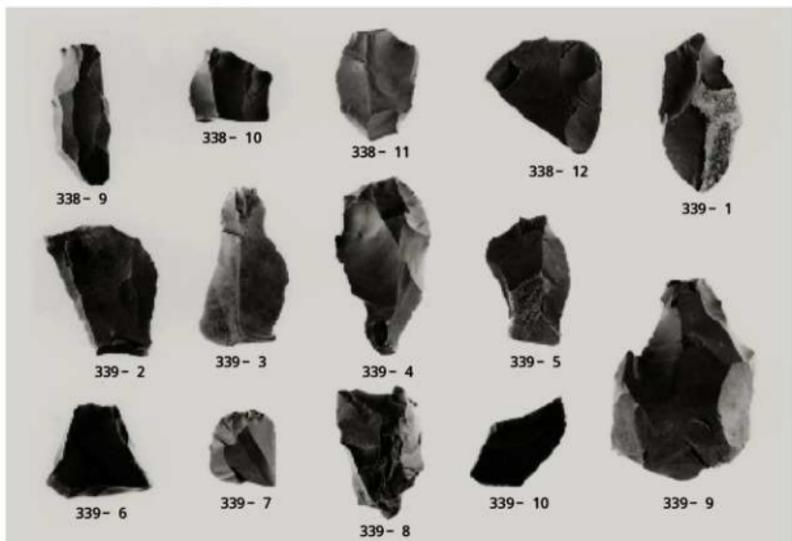
285 土坑出土土器(5)

268号土坑



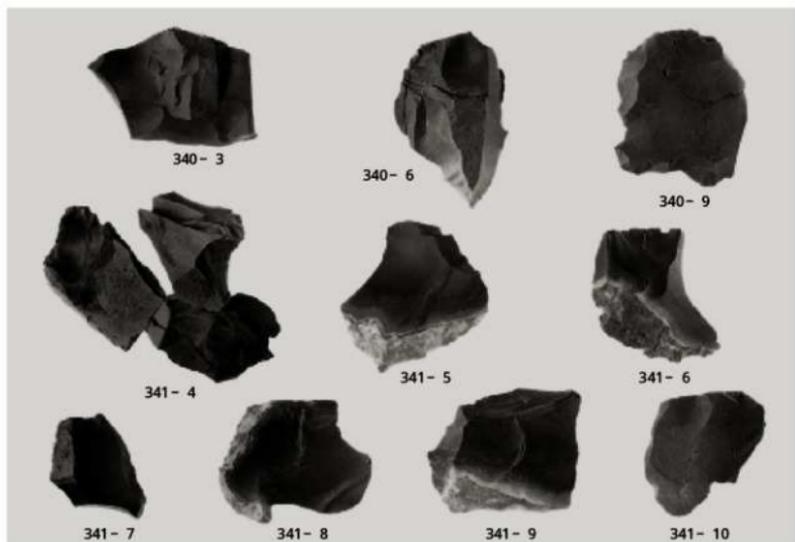
286 土坑出土遺物

a 273号土坑 b 103・161・261号土坑
c 44・94・202・206・268号土坑



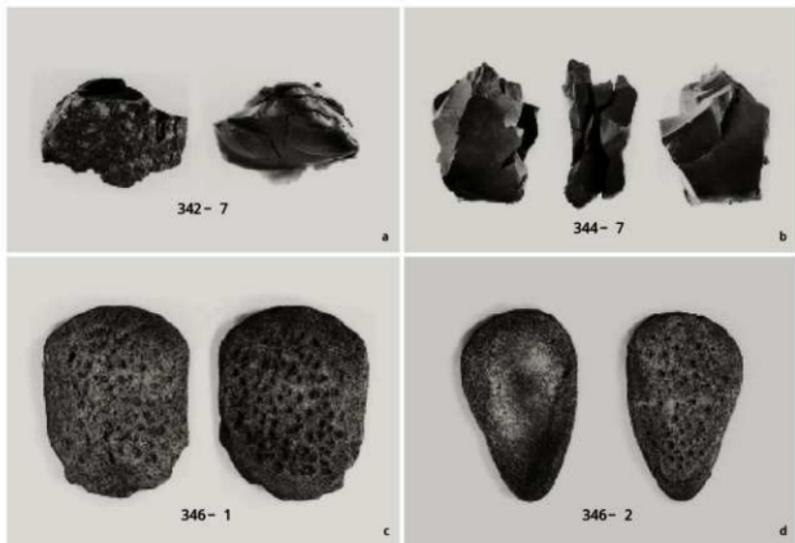
287 土坑出土石器

232・248号土坑



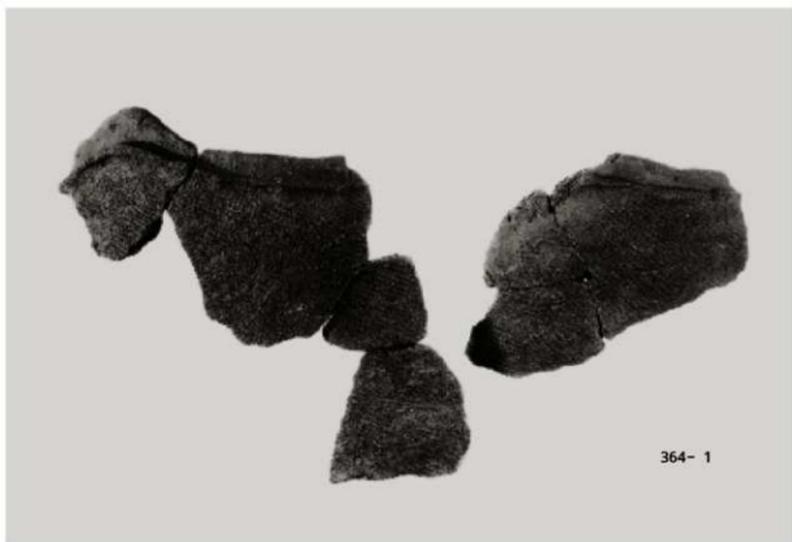
288 土坑出土石器

248·258号土坑



289 土坑出土石器

a·b 258号土坑 c 75号土坑
d 242号土坑



290 配石遺構出土土器(1)

3号配石遺構



291 配石遺構出土土器(2)

a 23号配石遺構
b 27号配石遺構
c 46号配石遺構



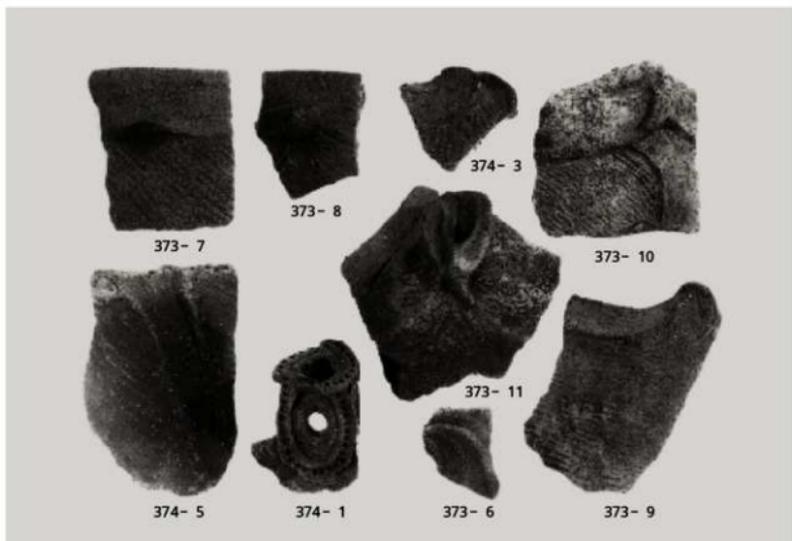
292 配石遺構出土土器 (3)

a · b 33号配石遺構 c - e 34号配石遺構
f 37号配石遺構



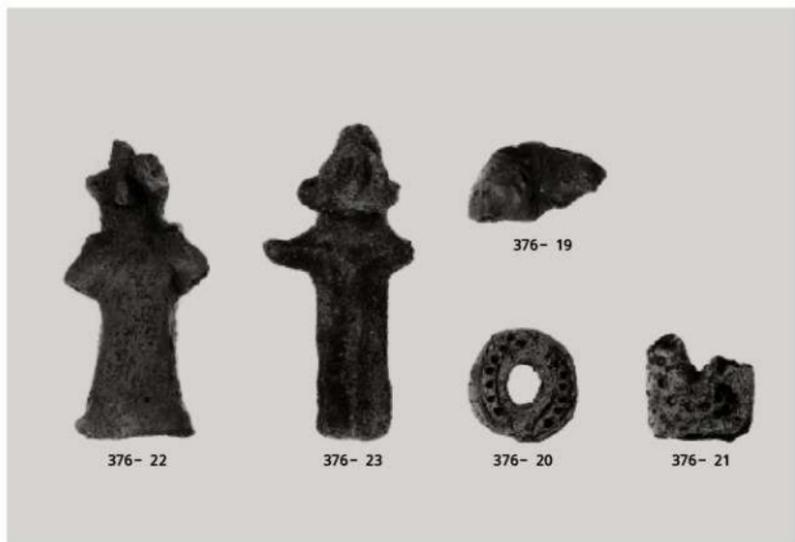
293 配石遺構出土土器(4)

a・b 41号配石遺構



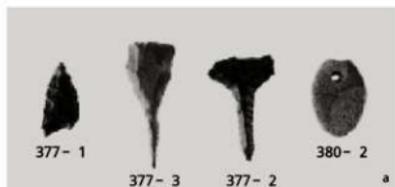
294 配石遺構出土土器(5)

65c号配石遺構



295 配石遺構出土遺物

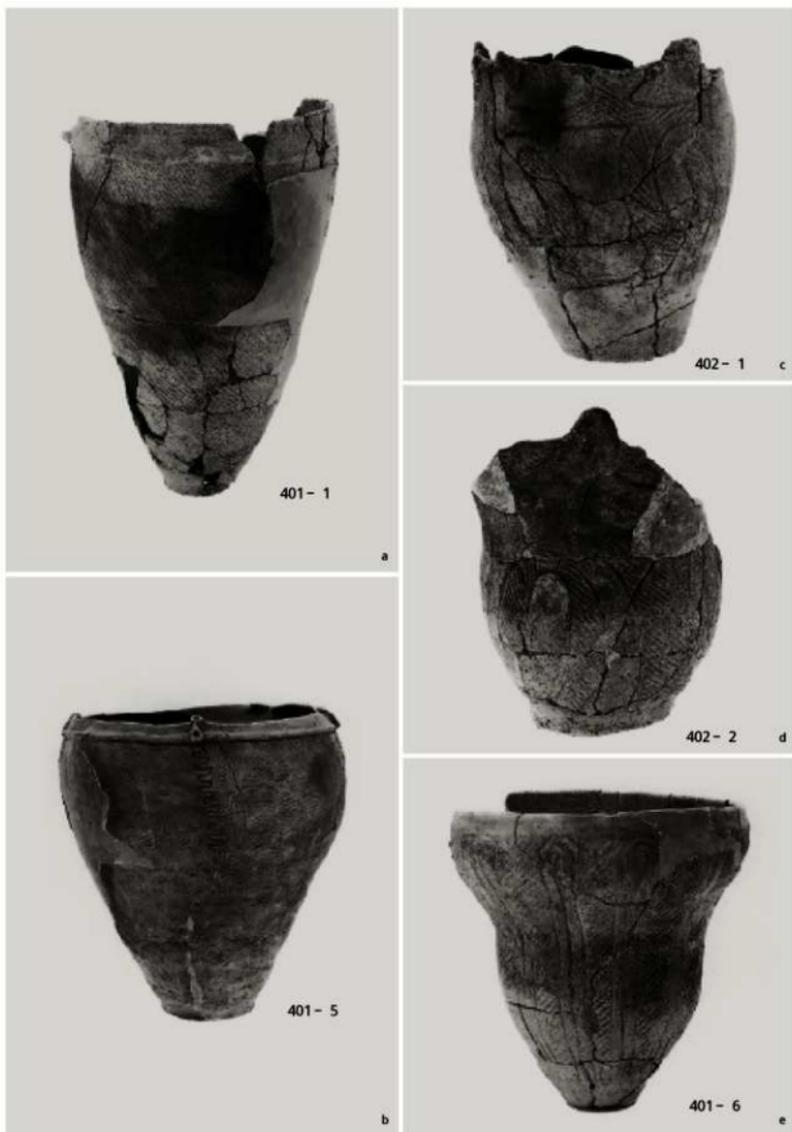
25・45・60・65b号配石遺構



296 配石遺構出土石器

a 8・41・57・59号配石遺構
 c 35号配石遺構

b 46・60・65b号配石遺構
 d 65c号配石遺構



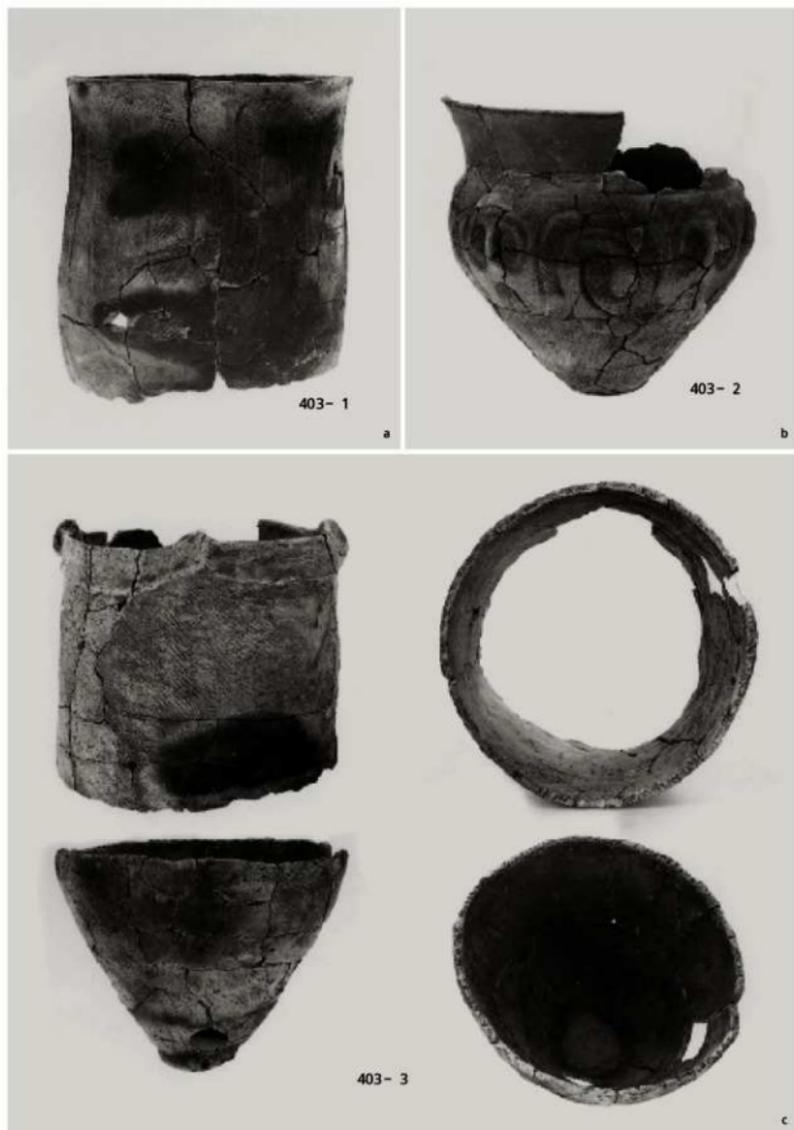
297 埋設土器(1)

a 1号土器埋設遺構 b 5号土器埋設遺構
c 6号土器埋設遺構 d 7号土器埋設遺構
e 8号土器埋設遺構



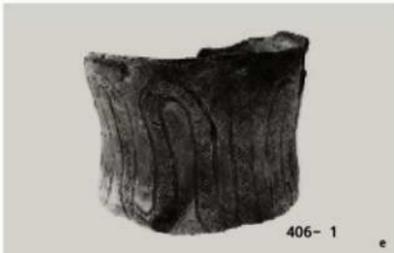
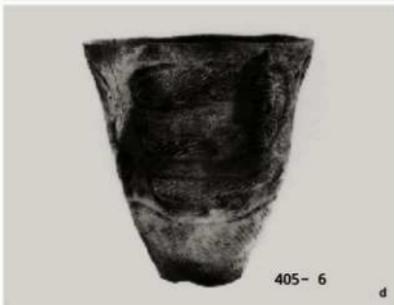
298 埋設土器 (2)

- a 11号土器埋設遺構
- b 17号土器埋設遺構
- c 15号土器埋設遺構
- d 16号土器埋設遺構
- e 19号土器埋設遺構



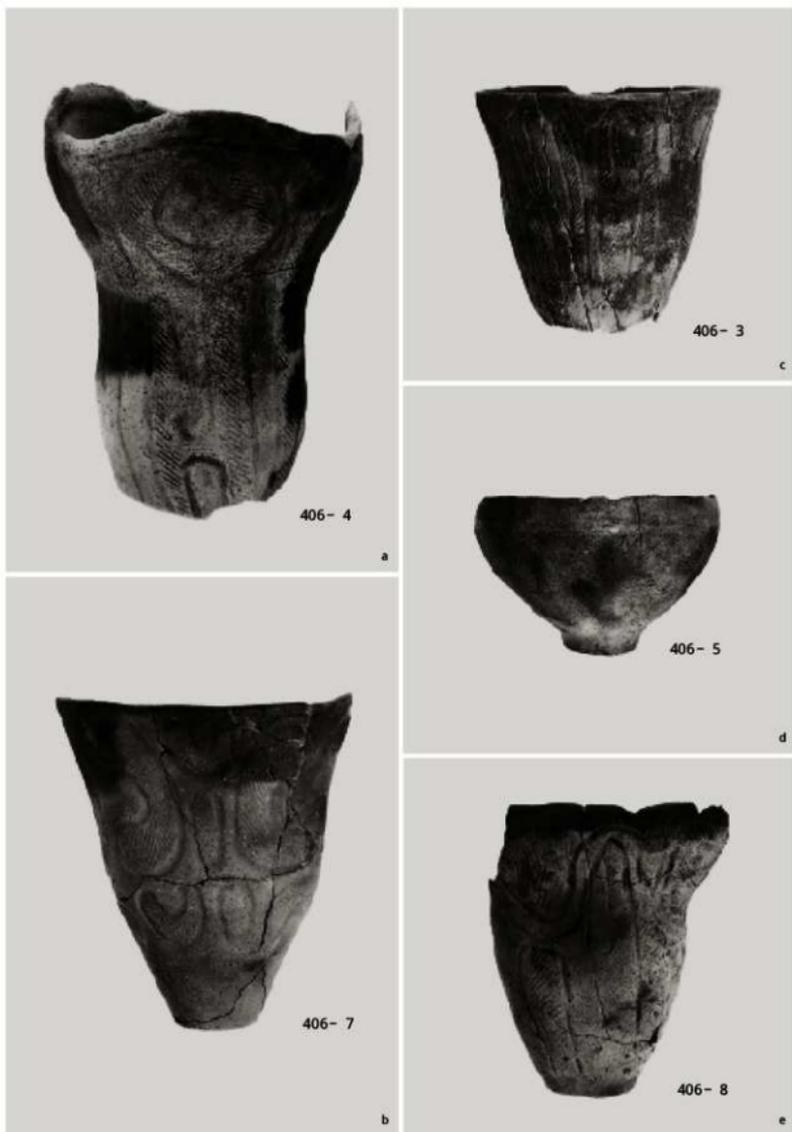
299 埋設土器(3)

a 12号土器埋設遺構 b 13号土器埋設遺構
c 14号土器埋設遺構



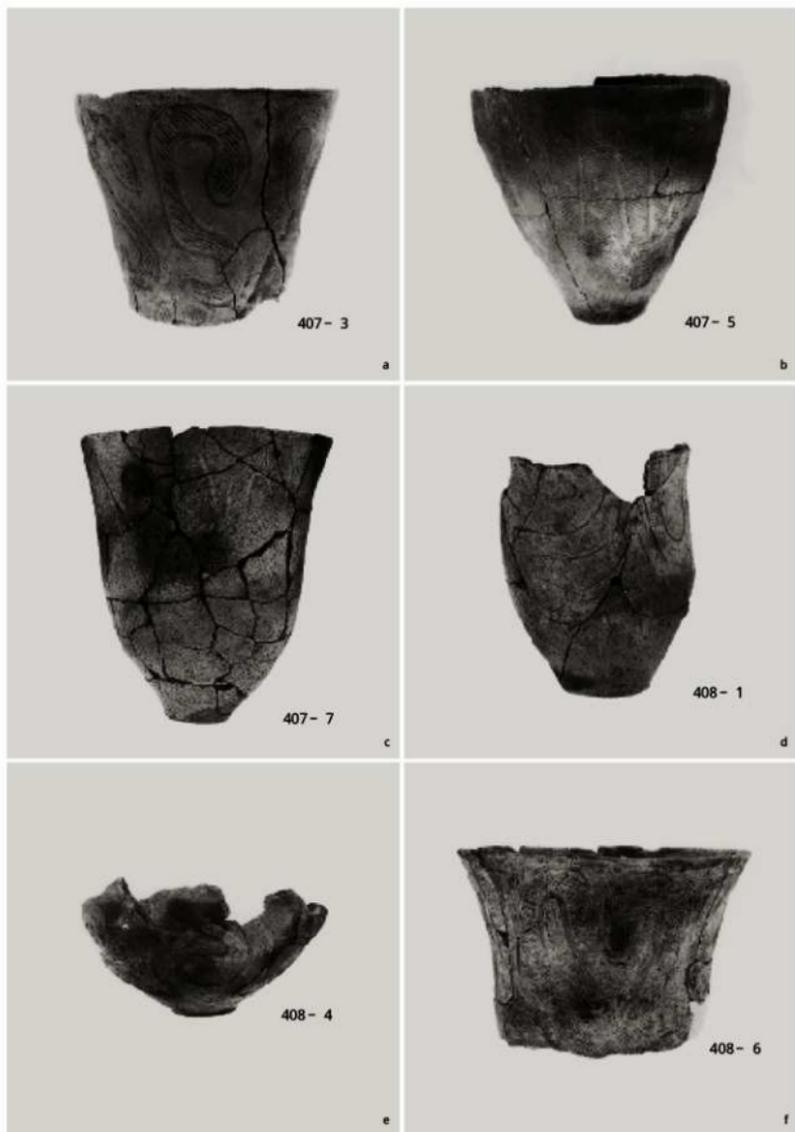
300 埋設土器 (4)

- a 20号土器埋設遺構
- b 21号土器埋設遺構
- c 22号土器埋設遺構
- d 25号土器埋設遺構
- e 26号土器埋設遺構



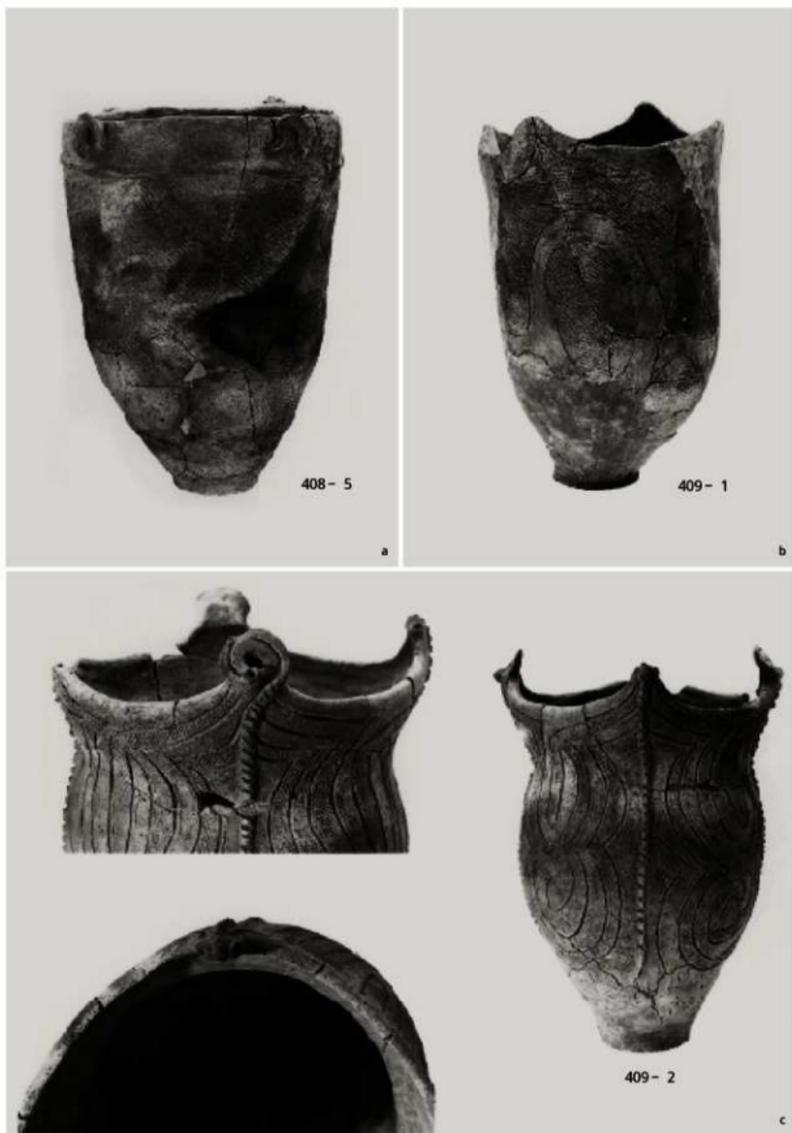
301 埋設土器（5）

a 29号土器埋設遺構 b 32号土器埋設遺構
c 28号土器埋設遺構 d 30号土器埋設遺構
e 33号土器埋設遺構



302 埋設土器 (6)

a 36号土器埋設遺構 b 38号土器埋設遺構
 c 40号土器埋設遺構 d 42号土器埋設遺構
 e 45号土器埋設遺構 f 47号土器埋設遺構



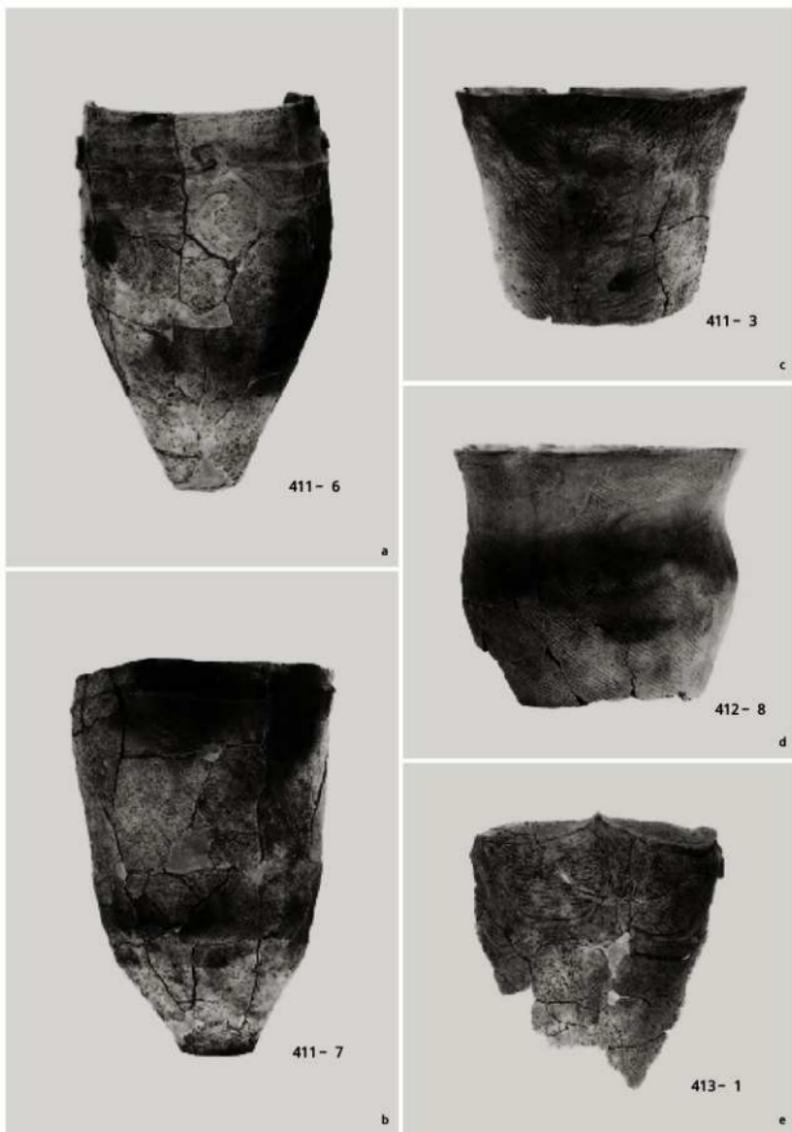
303 埋設土器(7)

a 46号土器埋設遺構 b 48号土器埋設遺構
c 49号土器埋設遺構



304 埋設土器 (8)

a 50号土器埋設遺構 b 52号土器埋設遺構
 c 54号土器埋設遺構 d 55号土器埋設遺構
 e 56号土器埋設遺構



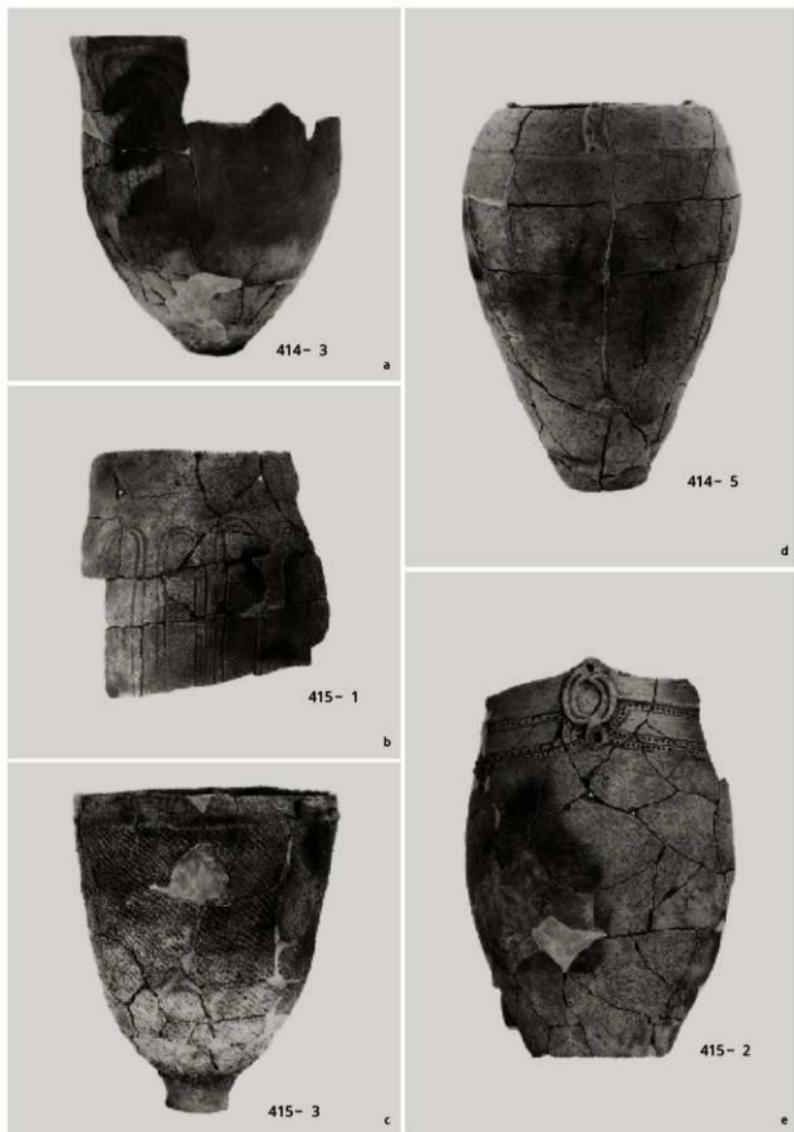
305 埋設土器(9)

a 60号土器埋設遺構 b 64号土器埋設遺構
c 61号土器埋設遺構 d 70号土器埋設遺構
e 71号土器埋設遺構



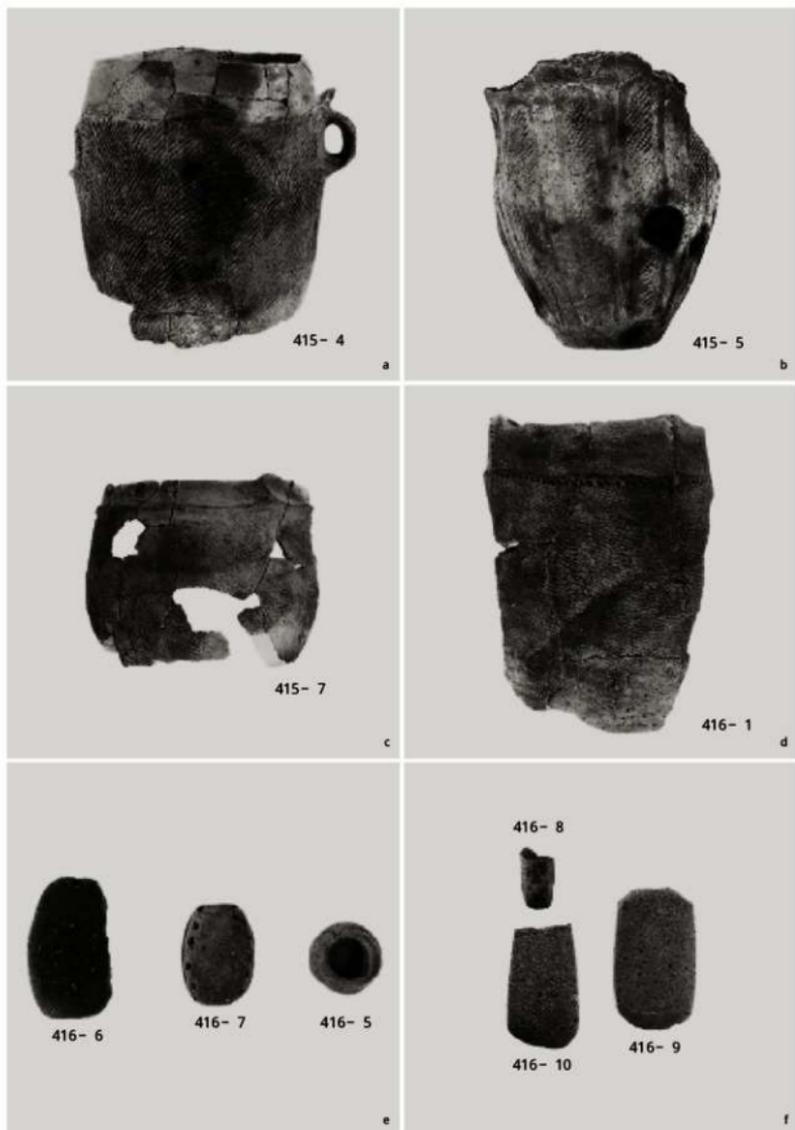
306 埋設土器 (10)

a 66号土器埋設遺構 b 73号土器埋設遺構
c 74号土器埋設遺構 d 76号土器埋設遺構



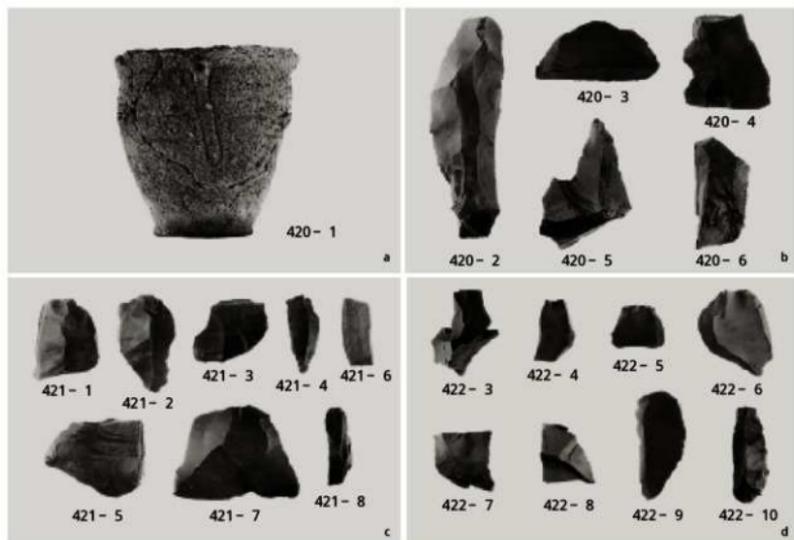
307 埋設土器 (11)

a 78号土器埋設遺構 b 81号土器埋設遺構
 c 83号土器埋設遺構 d 80号土器埋設遺構
 e 82号土器埋設遺構



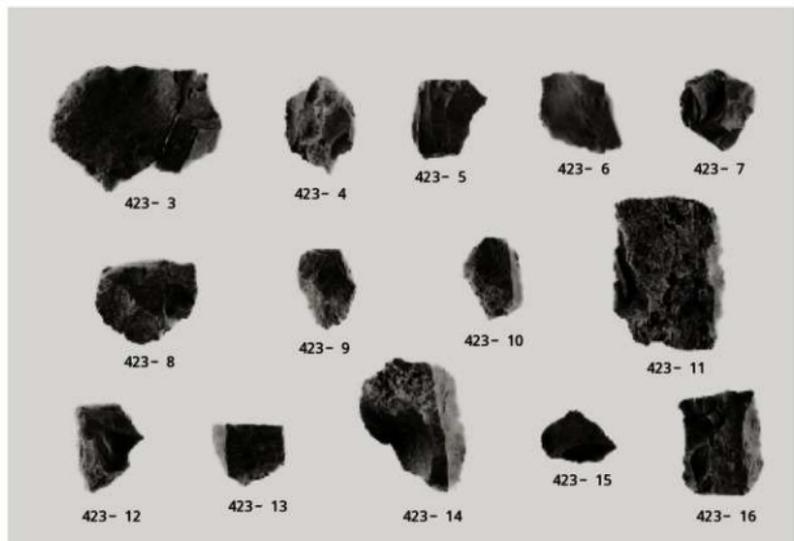
308 埋設土器(12)・出土遺物

a 84号土器埋設遺構
 b 85号土器埋設遺構
 c 87・88号土器埋設遺構
 d・e 89号土器埋設遺構
 f 11・78・89号土器埋設遺構出土石器

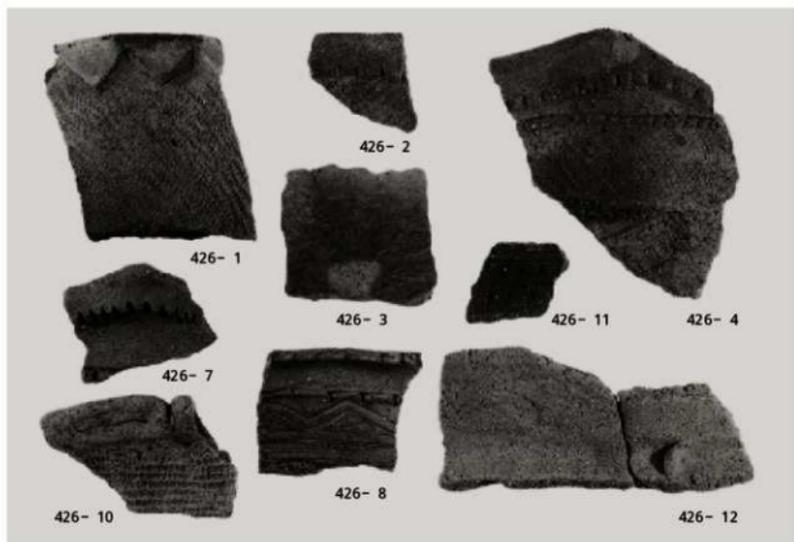


309 石器集中出土地点出土遺物

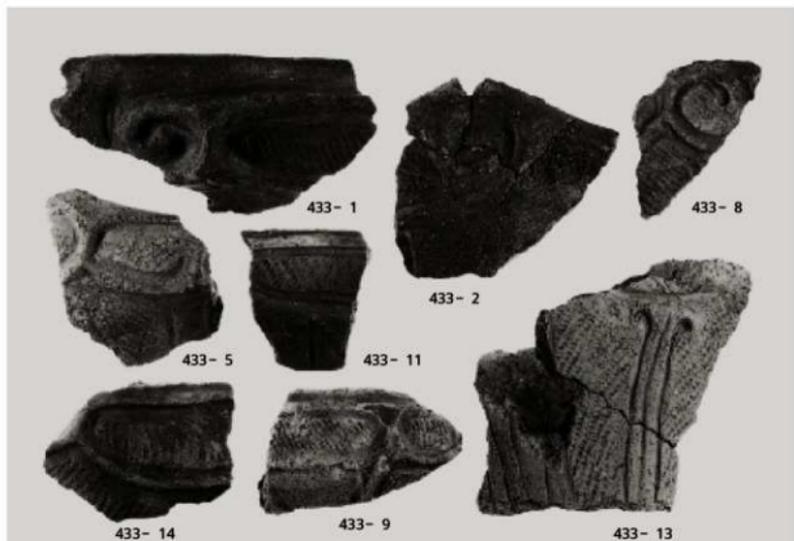
a 石器集中出土地点出土石器
b - d 石器集中出土地点出土石器



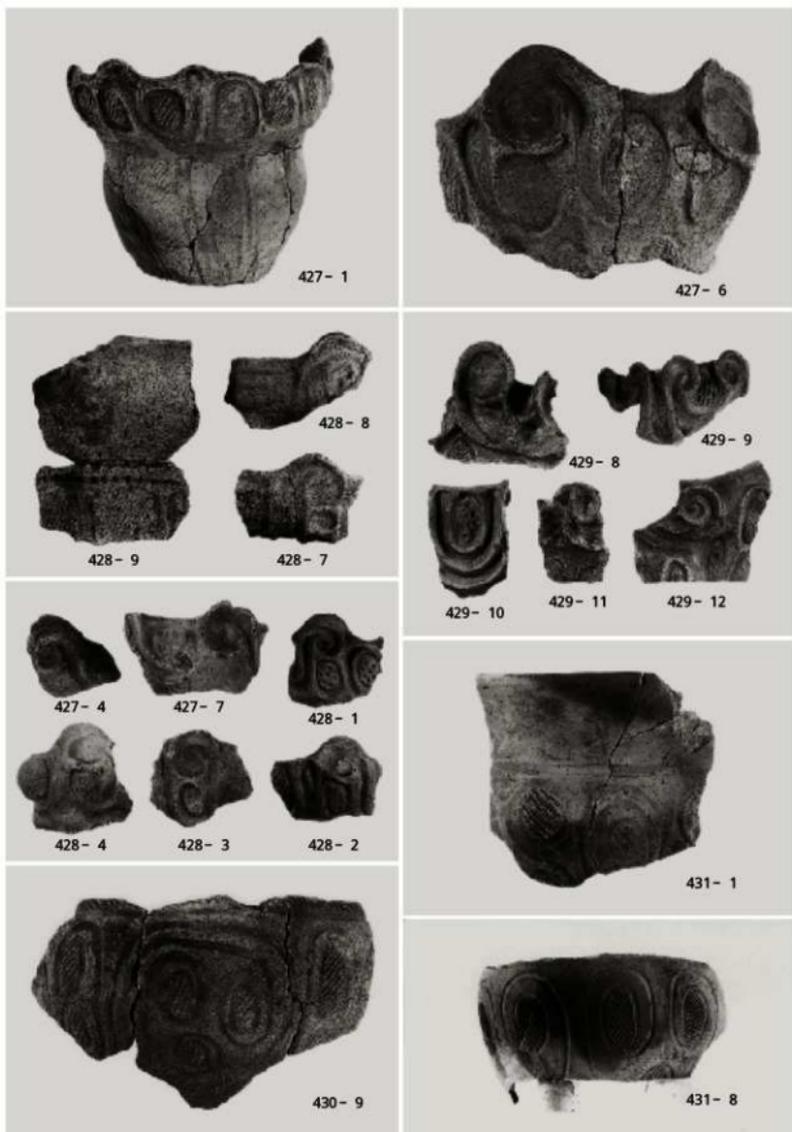
310 石器集中出土地点出土石器



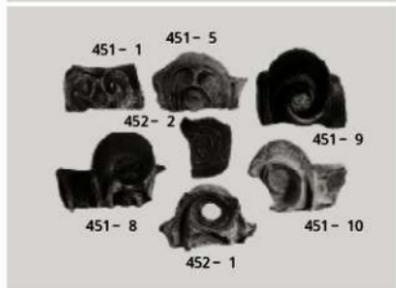
311 遺構外出土土器 (1)



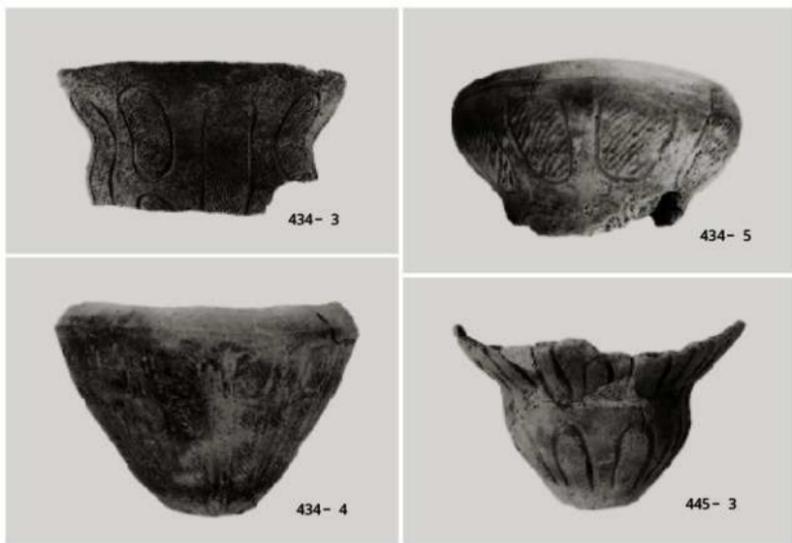
312 遺構外出土土器 (2)



313 遺構外出土土器(3)



314 遺構外出土土器(4)



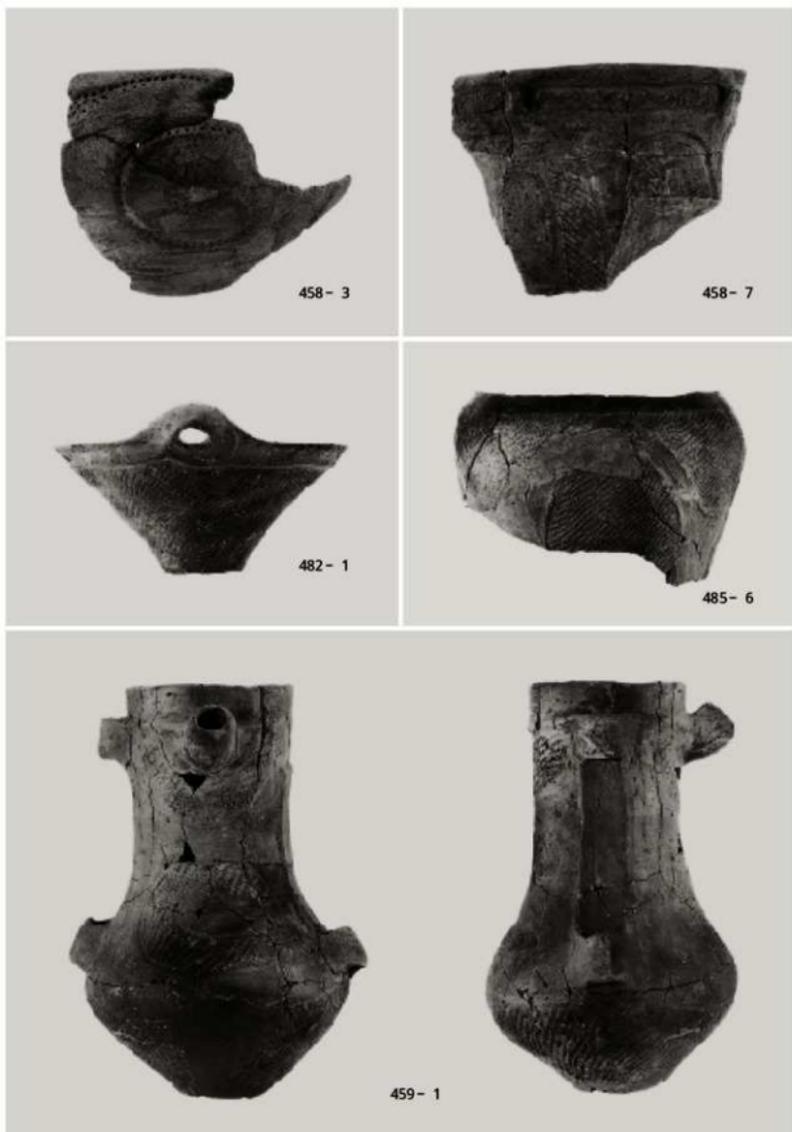
315 遺構外出土土器(5)



316 遺構外出土土器(6)



317 遺構外出土土器(7)



318 遺構外出土土器(8)



319 遺構外出土土器(9)



320 遺構外出土土器(10)



321 遺構外出土土器 (11)



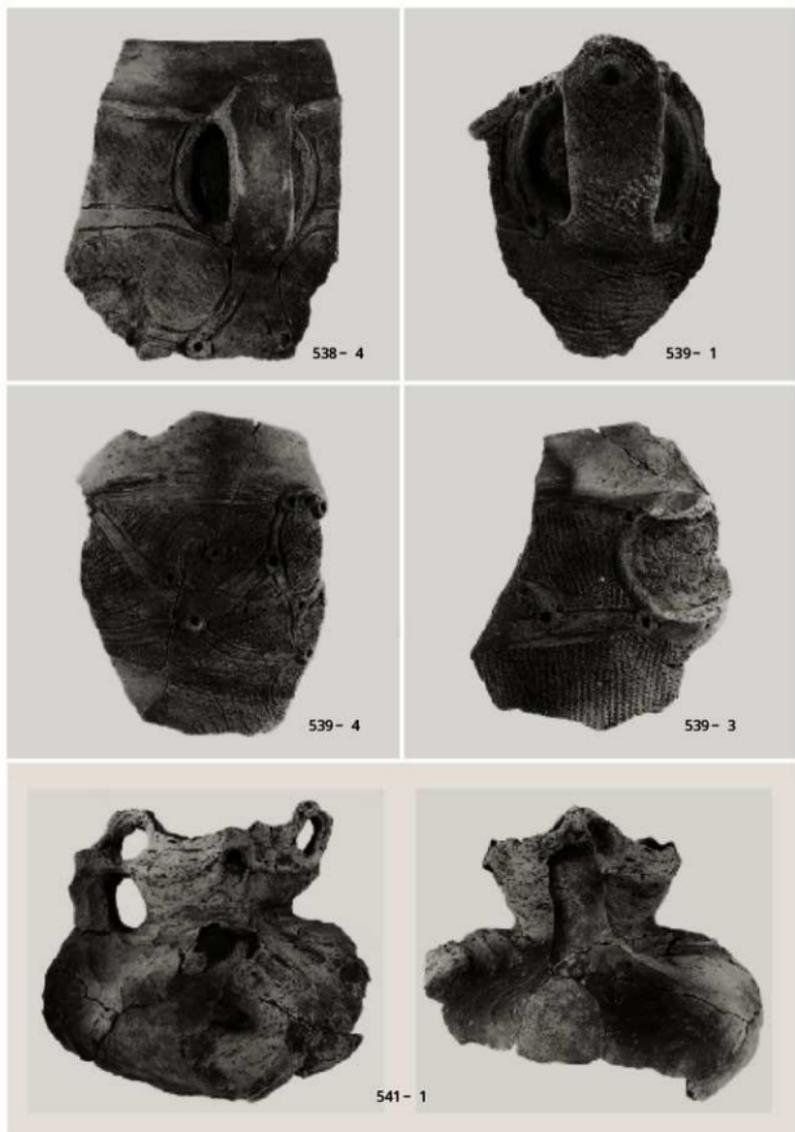
322 遺構外出土土器(12)



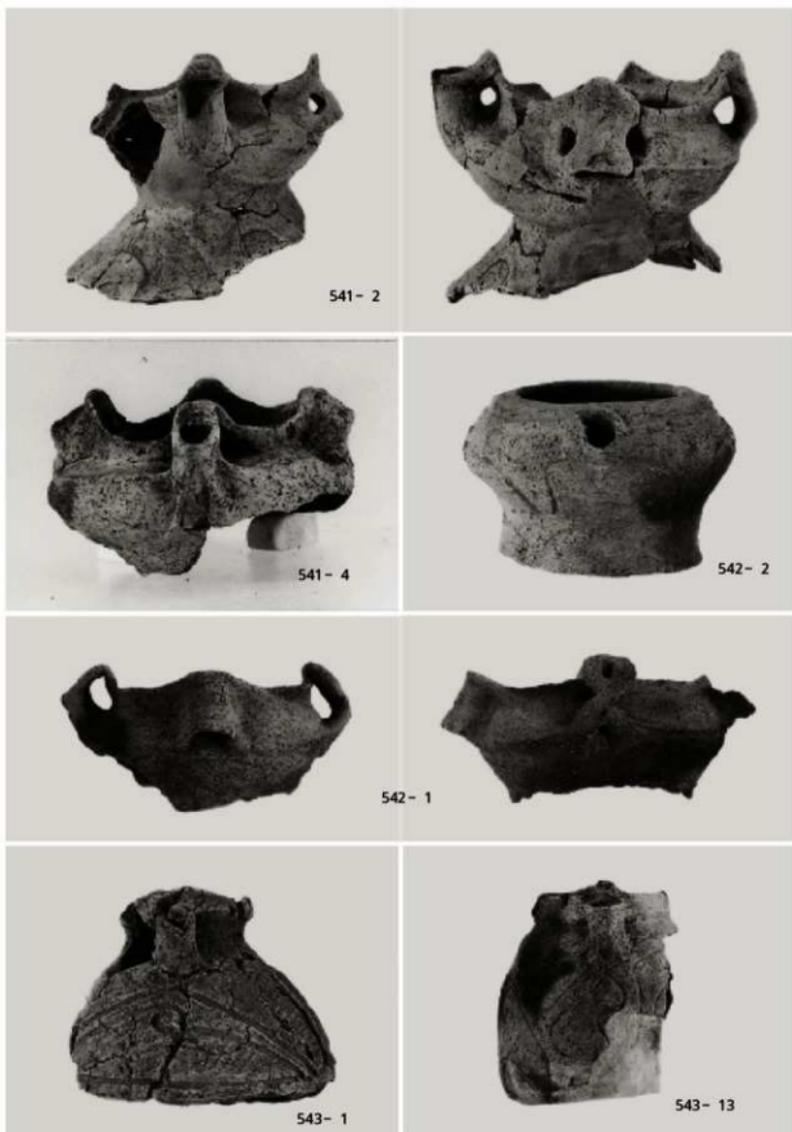
323 遺構外出土土器 (13)



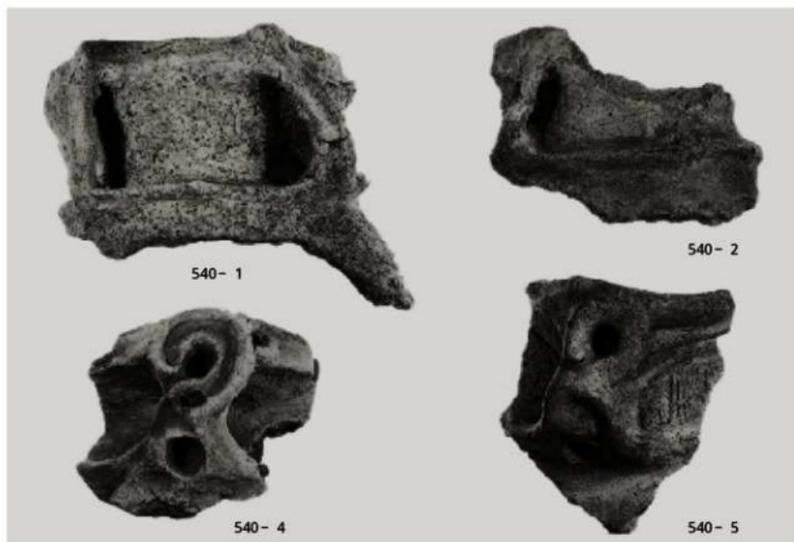
324 遺構外出土土器 (14)



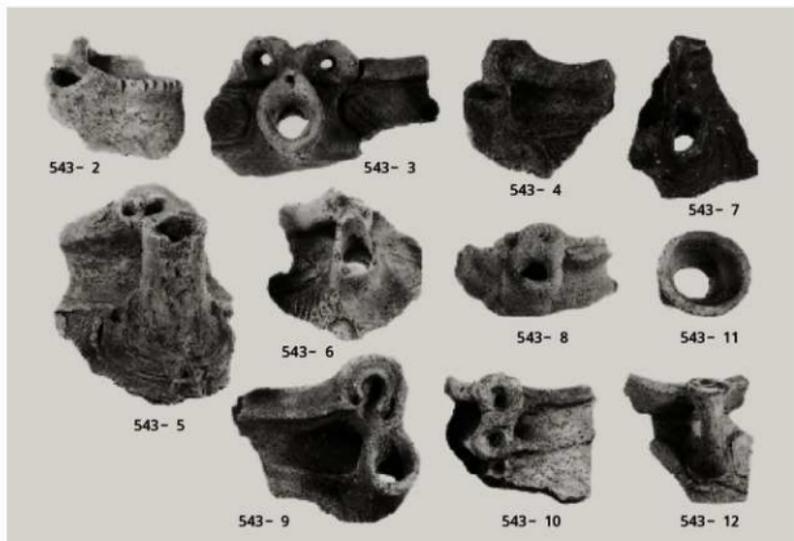
325 遺構外出土土器 (15)



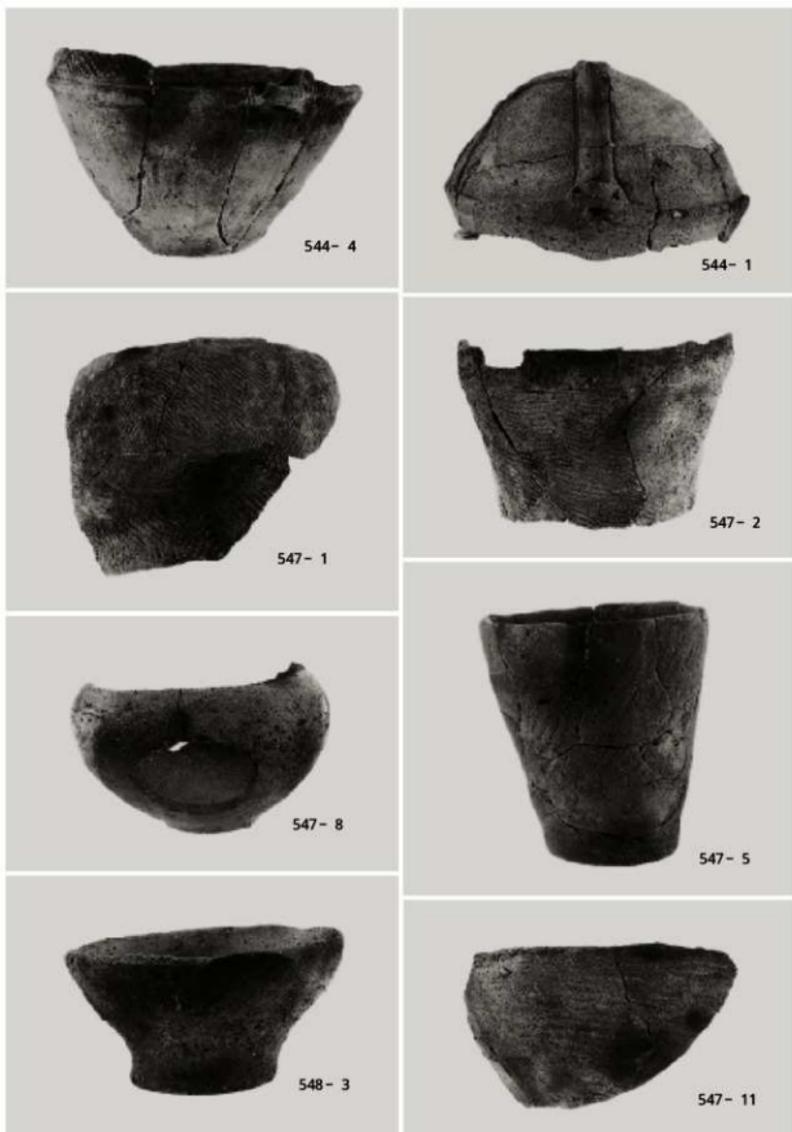
326 遺構外出土土器 (16)



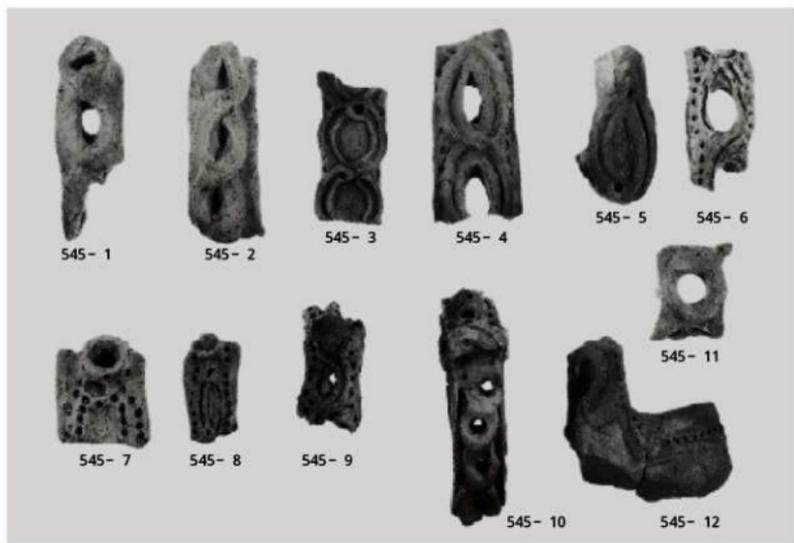
327 遺構外出土土器 (17)



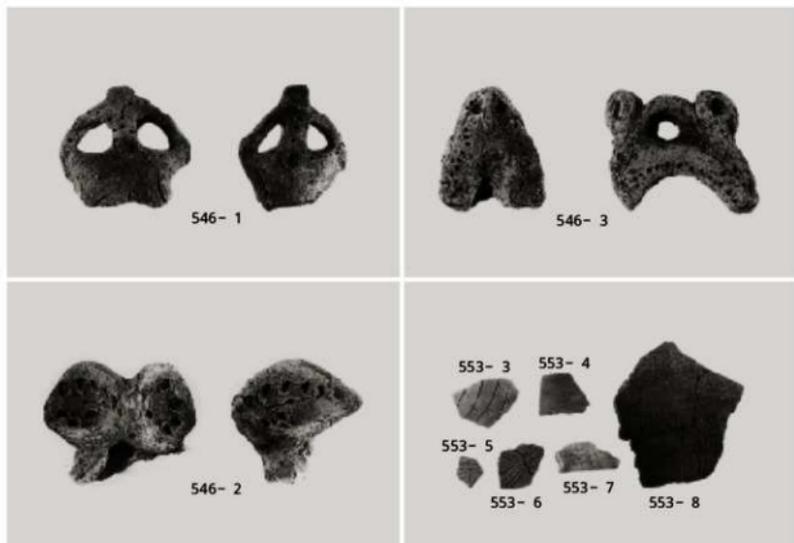
328 遺構外出土土器 (18)



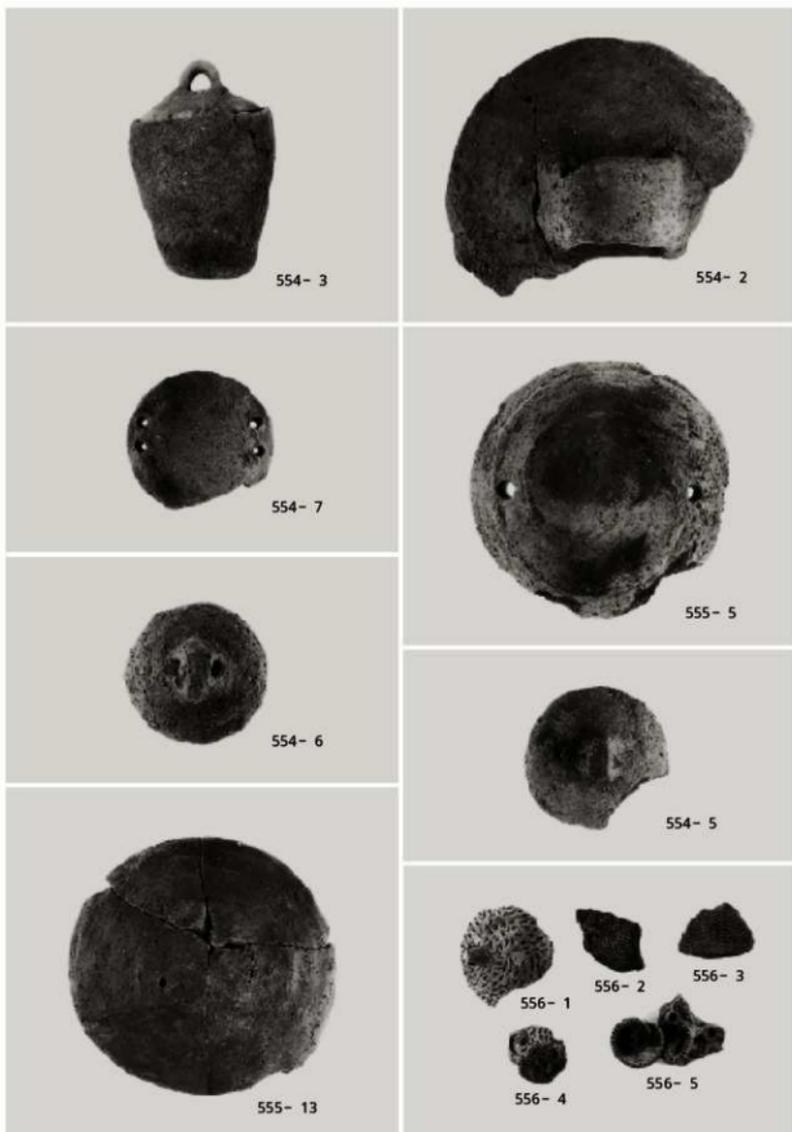
329 遺構外出土土器 (19)



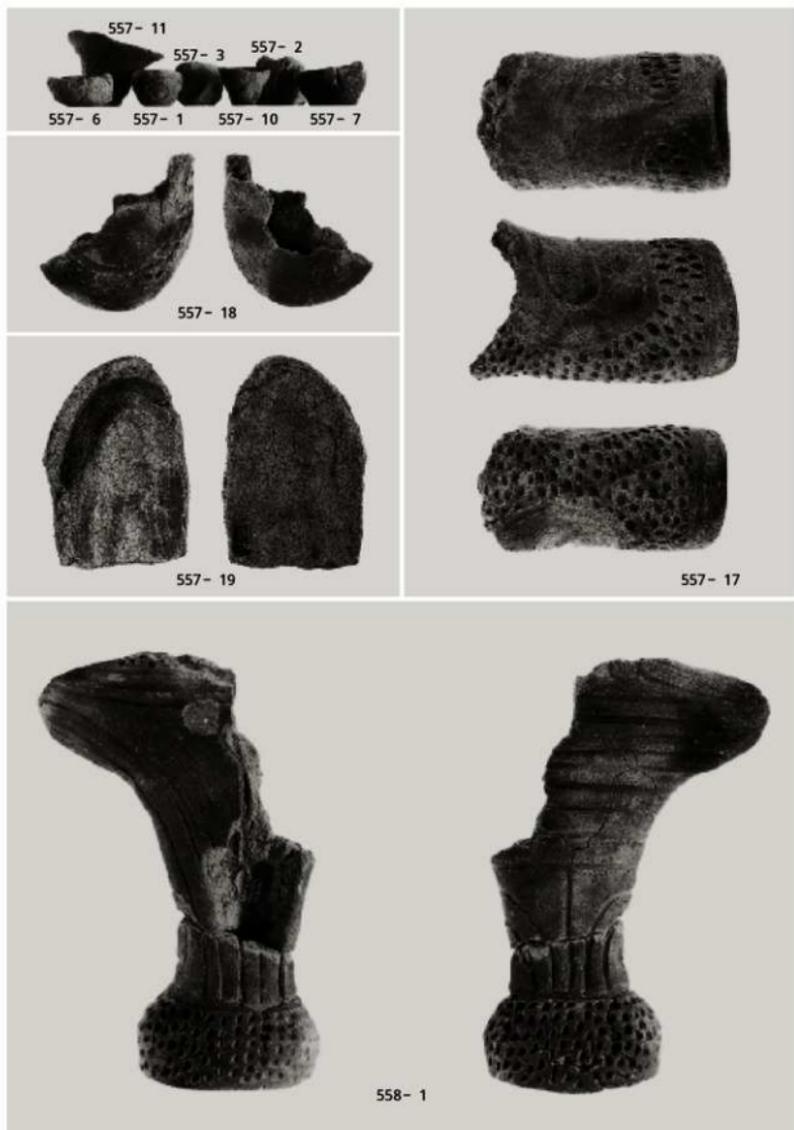
330 遺構外出土土器 (20)



331 遺構外出土土器 (21)



332 遺構外出土土製品(1)



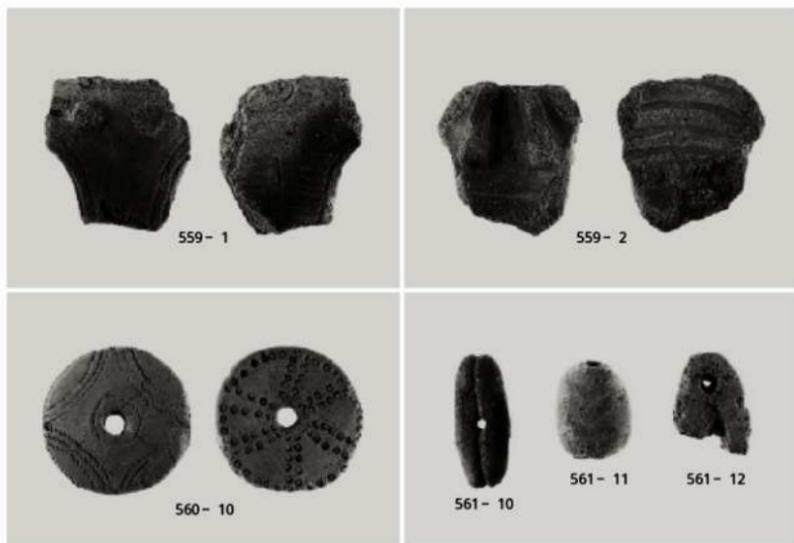
333 遺構外出土土製品 (2)



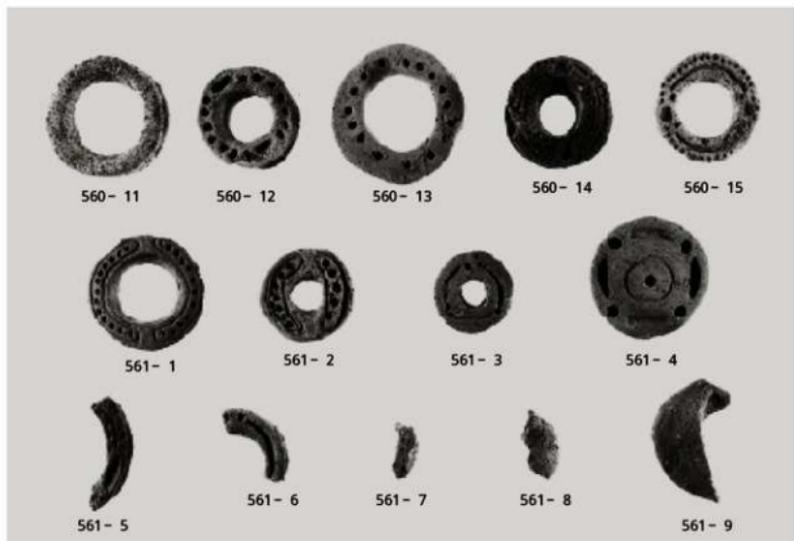
334 遺構外出土土製品(3)



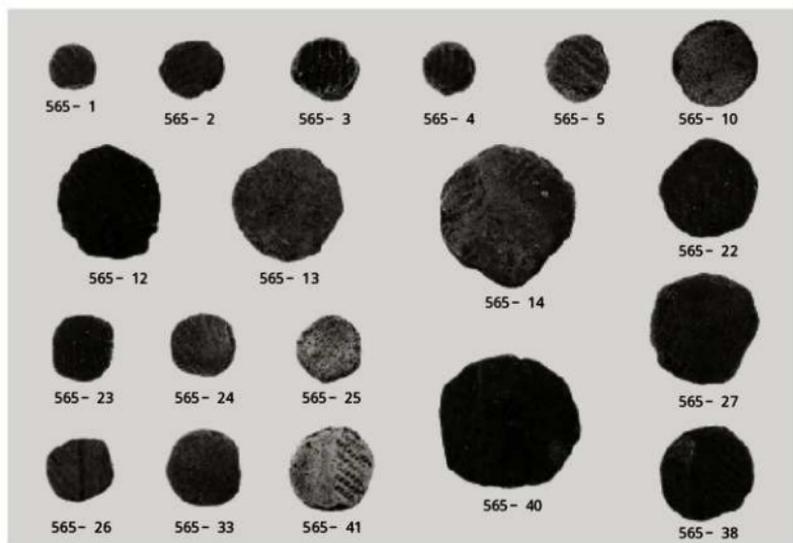
335 遺構外出土土製品(4)



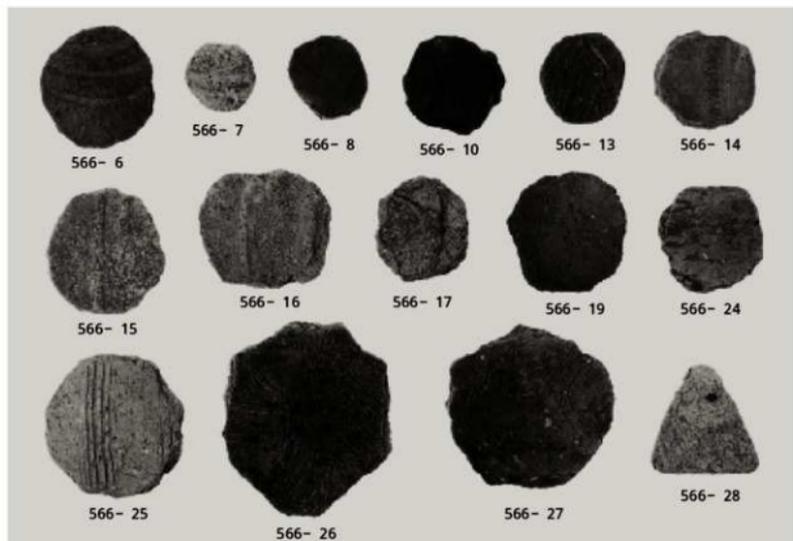
336 遺構外出土土製品 (5)



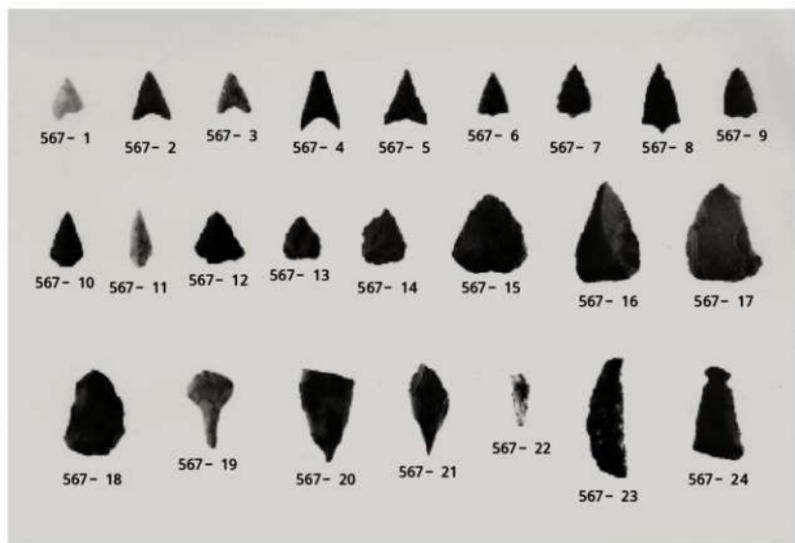
337 遺構外出土土製品 (6)



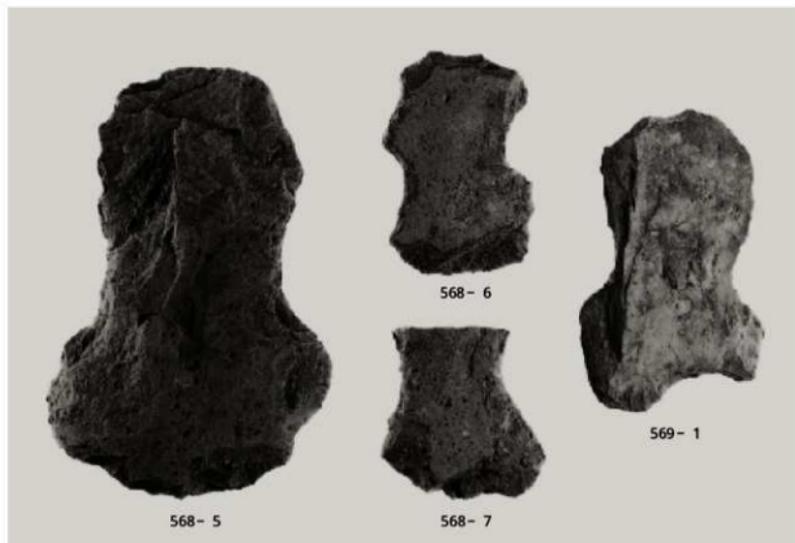
338 遺構外出土土製品 (7)



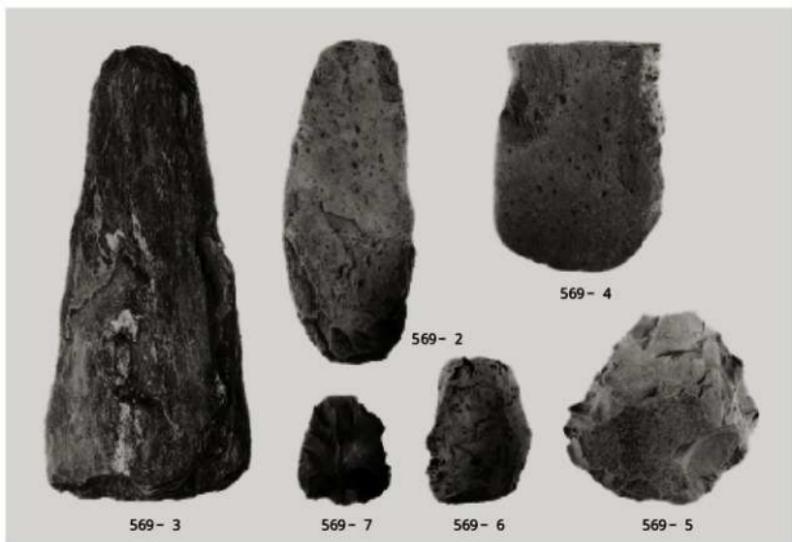
339 遺構外出土土製品 (8)



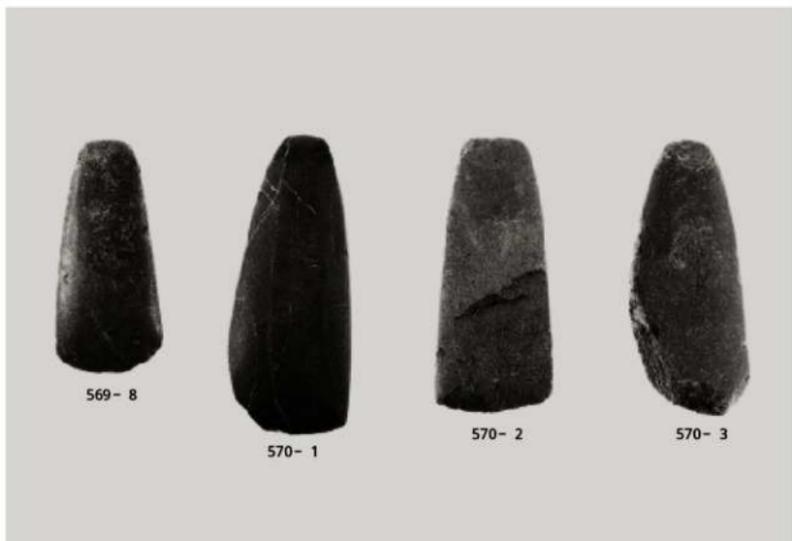
340 遺構外出土石器(1)



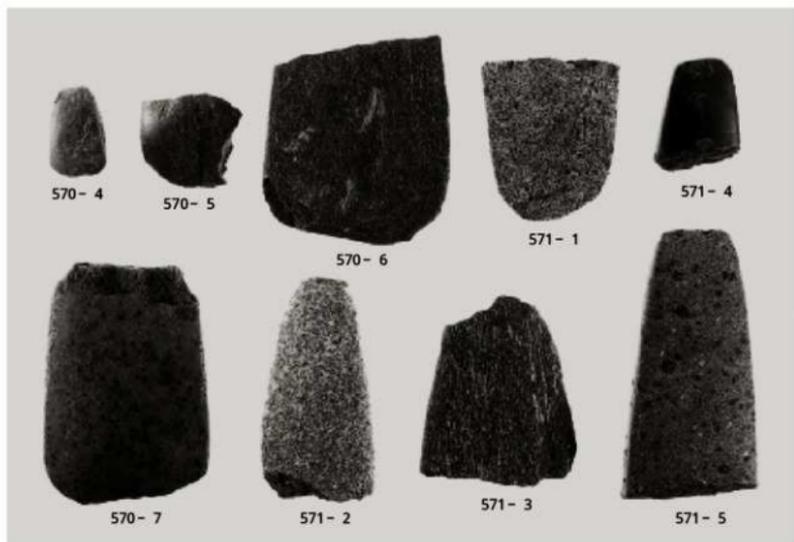
341 遺構外出土石器(2)



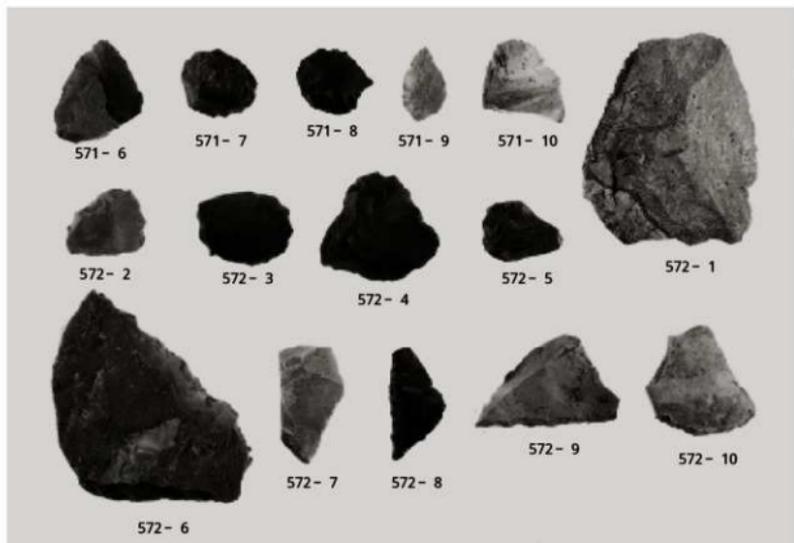
342 遺構外出土石器(3)



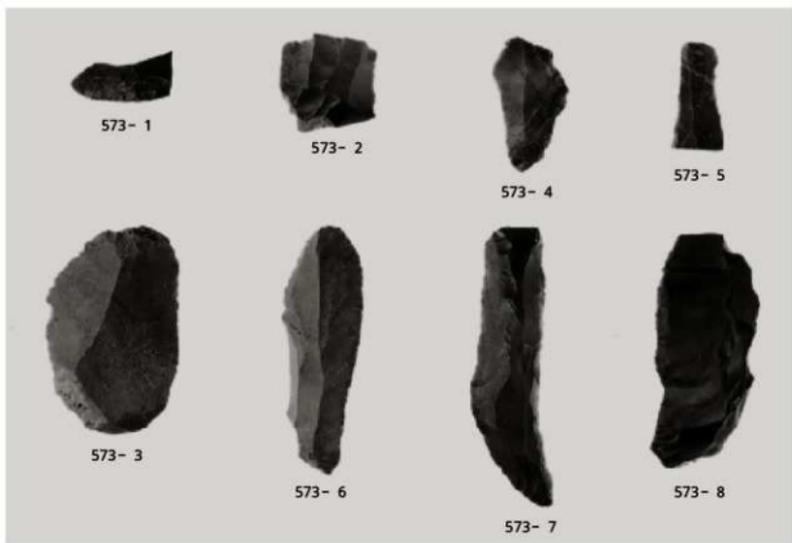
343 遺構外出土石器(4)



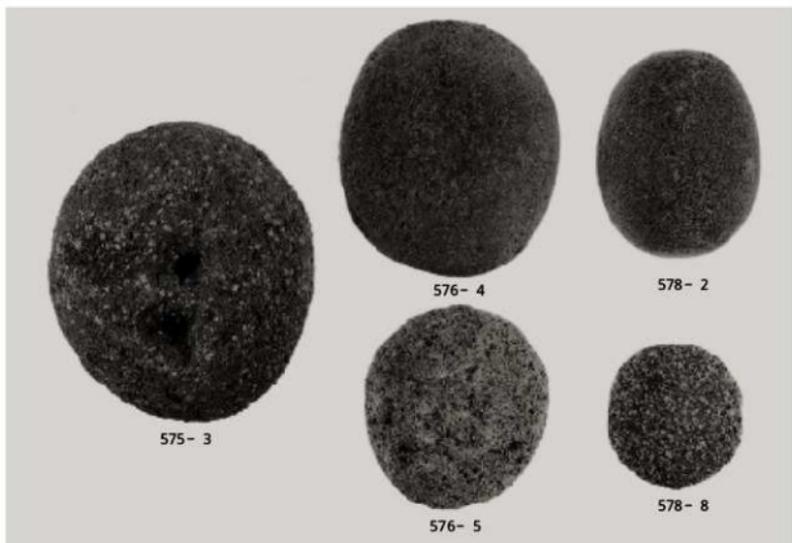
344 遺構外出土石器 (5)



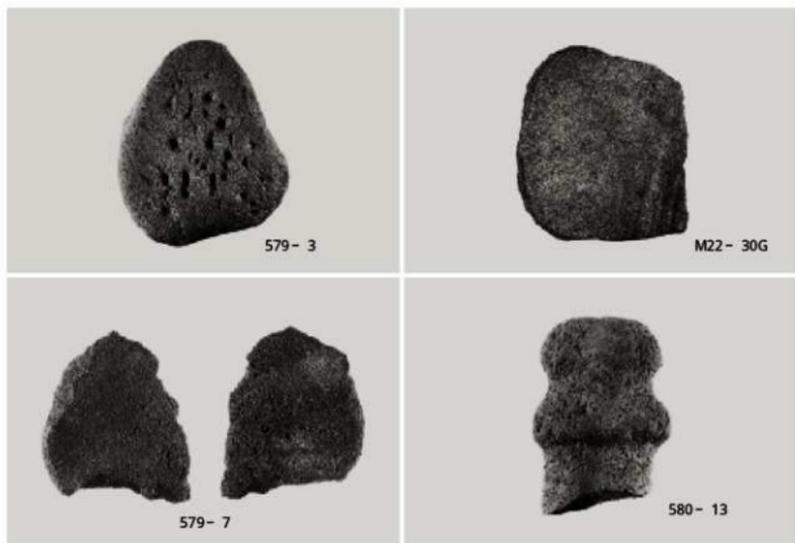
345 遺構外出土石器 (6)



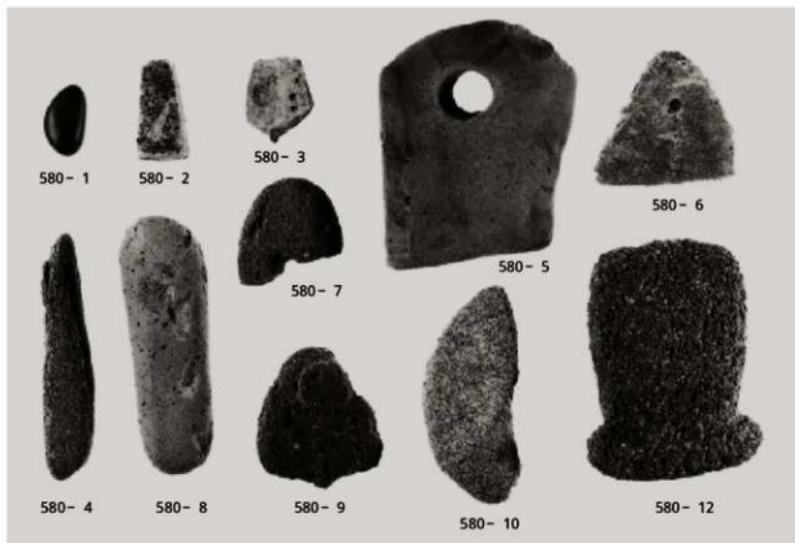
346 遺構外出土石器 (7)



347 遺構外出土石器 (8)



348 遺構外出土石器 (9)



349 遺構外出土石器 (10)

写 真 図 版

第2編 きたのわき 北ノ脇遺跡

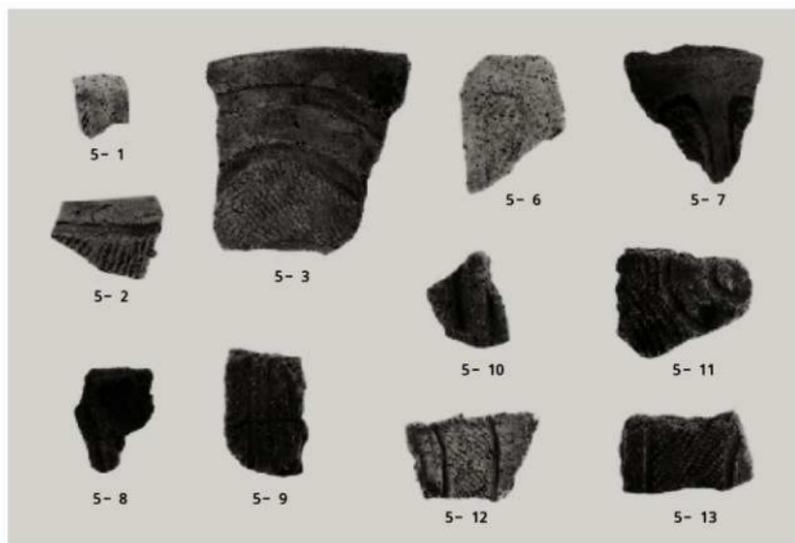


1 北ノ船遺跡全景（西より）

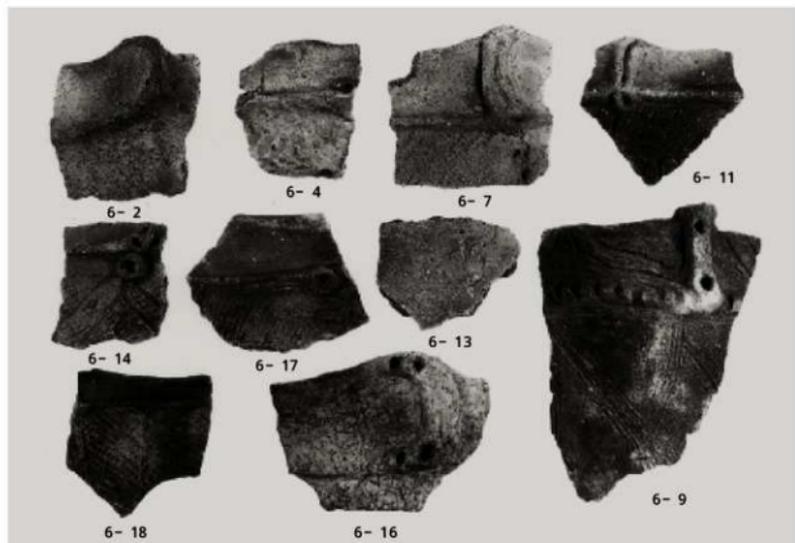


2 調査区全景，2号土坑

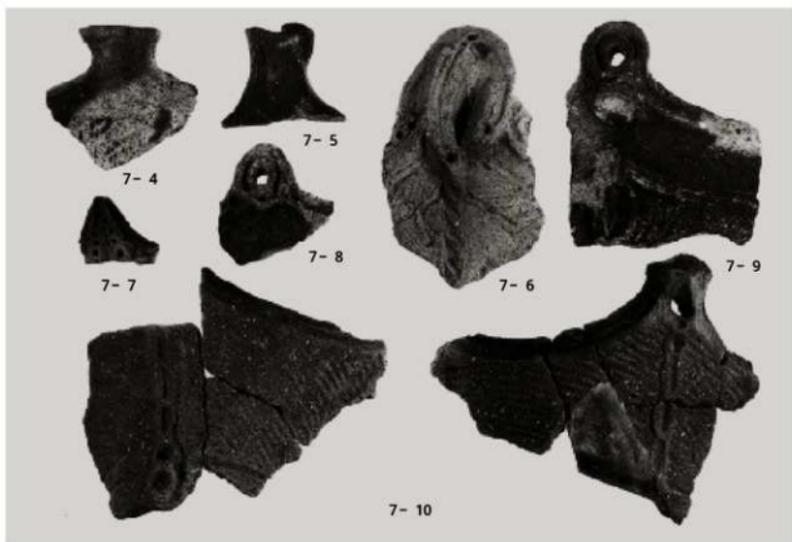
a 調査前近景（北より）
b 調査後近景（北より）
c 2号土坑土層（西より）
d 2号土坑全景（北より）



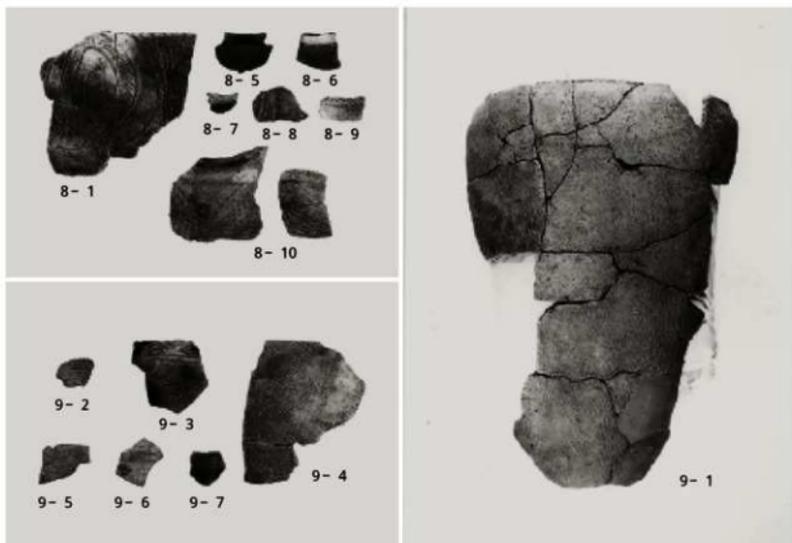
3 遺構外出土土器(1)



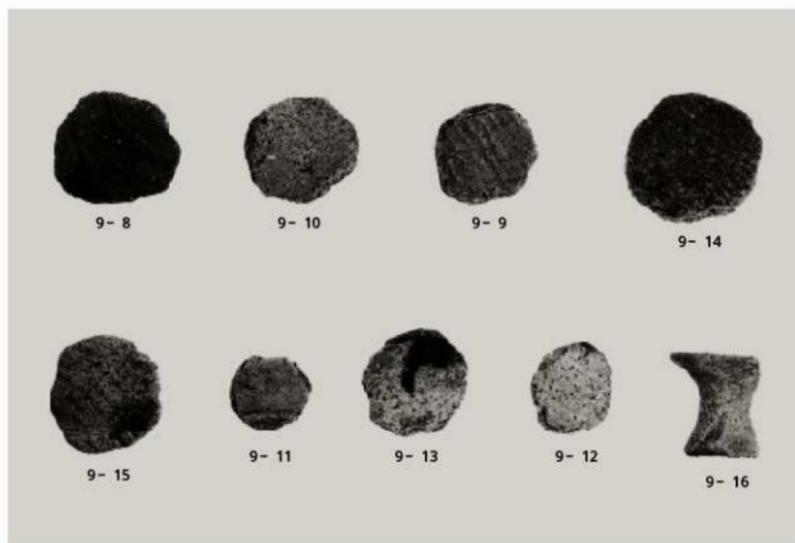
4 遺構外出土土器(2)



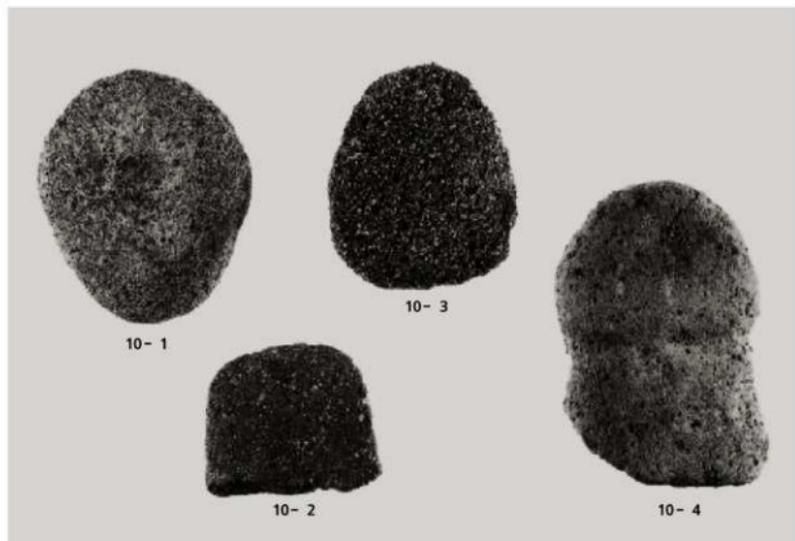
5 遺構外出土土器(3)



6 遺構外出土土器(4)



7 遺構外出土土製品



8 遺構外出土石器

付 編

—自然科學分析—

付編 高木遺跡出土炭化材・動物遺存体・炭化種子樹種の同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高木遺跡は、阿武隈川右岸の自然堤防上に立地する縄文時代中期後葉～後期前葉の遺跡である。遺構は堅穴住居跡、土坑、配石遺構、土器埋設遺構などが検出されている。堅穴住居跡は、117軒検出されているが、この中には敷石住居跡、複式炉を有する住居跡、石囲炉を有する住居跡、地床炉を有する住居跡等が含まれている。これらの住居跡や土坑からは、住居跡構築材や燃料の一部と考えられる炭化材、食物残渣の一部と考えられる種実遺体・動物遺存体などが出土している。

本報告では、住居跡等から出土した炭化材、種実遺体、動物遺存体の同定を行い、用材選択や動植物食糧に関する資料を得る。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、縄文時代中期後葉～末葉の住居跡SI 237, SI 280, 後期初頭～前葉のSI 117, SI 225, SI 230から検出された8点である。試料の詳細は結果とともに表1に示す。

(2) 方法

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を複製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、3種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ヤマグワ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に示す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。炭化・収縮により、木繊維などが潰れている。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poirlet) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1～5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部に向かって管径を漸減させ、

のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁はらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばし結晶を含む。

表1 樹種同定結果

番 号	遺 構 名	出土層位	時 期	樹 種
FB.U01・001	SI117 (柄鏡式敷石住居跡)	石組施設 Ⅱ2	縄文時代後期前葉	クリ
FB.U01・002	SI225 (柄鏡式敷石住居跡)	Ⅱ1	縄文時代後期初葉	コナラ属コナラ亜属コナラ類
FB.U01・003	SI230 (敷石住居跡)	埋設土器内	縄文時代後期前葉	クリ
FB.U01・004	SI237 (住居跡)	堆積土	縄文時代中期後葉	クリ
FB.U01・005	SI280 (住居跡)	Ⅱ5	縄文時代中期末葉	ヤマグワ
FB.U01・006	SI280 (住居跡)	床面	縄文時代中期末葉	クリ
FB.U01・007	SI280 (住居跡)	床面	縄文時代中期末葉	クリ
FB.U01・008	SI280 (住居跡)	P2 Ⅱ1	縄文時代中期末葉	クリ

(4) 考察

炭化材は、住居跡の床面、堆積土、埋設土器内等から出土している。床面や堆積土中から出土した炭化材については、住居構築材の一部が炭化・残存したものと考えられている。また、埋設土器内から出土した炭化材については、用途の詳細は不明である。これらの炭化材の樹種は、コナラ節とヤマグワが各1点で、他の6点は全てクリであった。出土位置等による種類の違いは認められない。この結果から、住居構築材等には、クリを主とした用材選択が行われていたことが推定される。

縄文時代の住居構築材や燃料材と考えられる炭化材にクリが多く見られることは、これまで各地で行った調査でも確認されている。本地域周辺でも、荒小路遺跡や福島空港公園遺跡などでクリの多い結果が報告されており（嶋倉1985a, パリノサーヴェイ株式会社1999）、今回の結果とも一致する。また、同様の事例は、福島県の浜通り地区の遺跡でも報告されている（嶋倉1985b, 佐藤他1992）。これらの結果から、福島県内の広い範囲で、縄文時代にクリが多数利用されていたことが推定される。これらの縄文時代のクリ利用に関する資料の中には、いわき市大堀A遺跡の縄文時代早期・前期の炭化材も含まれており、古くから利用されていたことがうかがえる。

クリは食物食糧としても重要な種類である。青森森三内丸山遺跡では、花粉分析などからクリの栽培を示唆する結果が得られている（辻1997）。現在栽培されているクリでは、9年生～10年生以降から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以降は、年毎に収量が減少する（志村1984）。このことから、若木を果実確保のために保護・管理し、老木を伐採して用材としたとの指摘もある（千野1983）。本地域におけるクリ利用の背景についても、同様の可能性が指摘できる。コナラ節とヤマグワについては、人里周辺に普通に見られる種類であることから、集落周辺に育成していた樹木を利用したことが推定される。

今後、さらに多くの資料を蓄積すると共に、古植生に関する資料も蓄積し、それによってクリ栽培の有無や時期とクリ利用の関係をなどを明らかにしたい。

2. 種実遺体の種類

(1) 試料

試料は、縄文時代中期後葉ものと思われる種実3点である。試料の詳細と結果は表2に示す。

(2) 方法

双眼立体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種類を同定する。

(3) 結果

結果を表2に示す。SK124はオニグルミの破片、SI246は不明堅果類（クリの可能性あり）、S S25は土の塊であった。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

クルミ科クルミ属

炭化した核の破片が検出された。大きさは1cm程度。木質で堅い。表面は深く荒いしわ状となり、縦方向に溝が走る。内側には子葉が入るくぼみがある。

・不明堅果類

炭化した破片で大きなものでも数mm程度である。表面が荒いしわ状になっている点、曲面的な破片や平面的な破片がある点から、クリの可能性もあるが、破片が微細なため断定することは難しい。

表2 種実遺体同定結果

番号	遺構名	出土層位	時期	種類名	備考
FBU01・019	SK124	E1	縄文時代中期後葉	オニグルミ(破片)	炭化している
FBU01・020	SI246	P1土器内	縄文時代中期後葉	不明堅果類(破片)	炭化している
FBU01・021	SS25	検出面	縄文時代後期前葉	土の塊	

(4) 考察

検出された種実は、オニグルミとクリの可能性のある不明堅果類であった。オニグルミとクリは、あく抜きが不要で生食できること、貯蔵に耐えること、収量が多いことなどから、植物質食糧として、古くから利用されてきた。東北地方でも縄文時代の遺跡から多くの出土例があり（渡辺1975など）、本遺跡でも炭化材にクリが多数認められている。

オニグルミは、河道沿いなどに育成することから、遺跡周辺の谷に育成していたものを利用した可能性がある。一方、クリについては、前述のように住居構築材にも多数認められており、栽培されていた可能性も指摘されている。

3. 遺物遺存体の種類

(1) 試料

試料は、縄文時代中期後葉～末葉・後期前葉の土坑、および縄文時代中期後葉～末葉の住居跡から検出された動物遺存体である。遺構・層位別に遺物番号が付けられ、袋分けされている。

(2) 方法

試料に付着した土壌を筆により除去する。一部の試料は水洗する。水溶性接着剤で接合・復元し、骨格図譜(加藤1983など)や現生標本との比較により同定する。それと並行して、肉眼により被熱などの痕跡を観察する。なお、動物の和名および種名は阿部ほか(1994)に、骨の和名や用語は基本的に加藤(1983)に従う。

(3) 結果

同定・観察の結果を表3に示す。試料はいずれも灰白色を呈する焼骨である。現状を留める骨は全て細片である。種が同定されたのはイノシシ(*Sus scrofa*)1種であり、SK124でイノシシの頭蓋骨や四肢骨の破片が同定された。大腿骨の骨頭は骨体との癒合が未了であり、Schimid(1972)のまとめた骨端癒合年齢に照合すれば、3.5歳以下の弱獣と判断される。

その他の骨も全て獣類(哺乳類)と考えられ、その大きさや厚さからヒトからイノシシ、ニホンジカ程度の中型獣の可能性が高い。

表3 動物遺存体

遺物 No	遺構名	層位	時 期	分類群	部 位	部 分	被熱数	重量	備 考
FB.U01-009	SK94	地積上	縄文中期末葉	獣類	四肢骨	破片	有	1.2g	
FB.U01-010	SK124	£1	縄文中期後葉	獣類	四肢骨	骨端	有 1	4.7g	未化骨, 中型獣?
				獣類	不明	破片	有	2.5g	
				イノシシ	頭蓋骨	左後頭顆	有 1	2.1g	
				イノシシ	大腿骨	骨頭	有 1	2.6g	未化骨, 3.5才以下
				イノシシ	下顎骨	臼歯	有	3.9g	右下顎大3大白歯
				イノシシ?	下顎骨	関節突起片	有 1	0.9g	
				イノシシ?	頭蓋骨	破片	有	5.9g	
FB.U01-011	SK124	£2	縄文中期後葉	中型獣	大腿骨?	大腿骨骨端片?	有 1	1.8g	
				中型獣	四肢骨	骨体端部	有 1	3.5g	未化骨
				獣類	四肢骨	破片	有	23.3g	
				獣類	手骨/足骨	破片	有 1	1.8g	
				獣類	不明	破片	有	56.6g	
FB.U01-012	SK232	£3	縄文中期末葉	獣類	四肢骨	破片	有	3.7g	
FB.U01-013	SI179	£4	縄文中期末葉	獣類	不明	破片	有	7.8g	
FB.U01-014	SI237	塚積土	縄文中期後葉	獣類	不明	破片	有	2.0g	
FB.U01-015	SI251	卵型形内	縄文中期後葉	獣類	不明	破片	有	1.2g	
FB.U01-016		£4	縄文中期末葉	獣類	四肢骨	破片	有	4.6g	
				獣類	不明	破片	有	2.4g	
FB.U01-017		£5	縄文中期末葉	獣類	四肢骨	骨体端部	有 1	10.9g	若齢
	SI280			獣類	不明	破片	有	6.9g	
				獣類	頭蓋骨	破片	有 1	0.9g	
FB.U01-018		床面	縄文中期末葉	獣類	四肢骨	破片	有	6.1g	
				獣類	不明	破片	有	6.9g	
FB.U01-022	SI226	£4	縄文中期後葉	獣類	不明	骨端?	有	1.1g	
				獣類	不明	破片	有	0.9g	
FB.U01-023	SK98	£2	縄文後期前葉	獣類	不明	破片	有	0.8g	

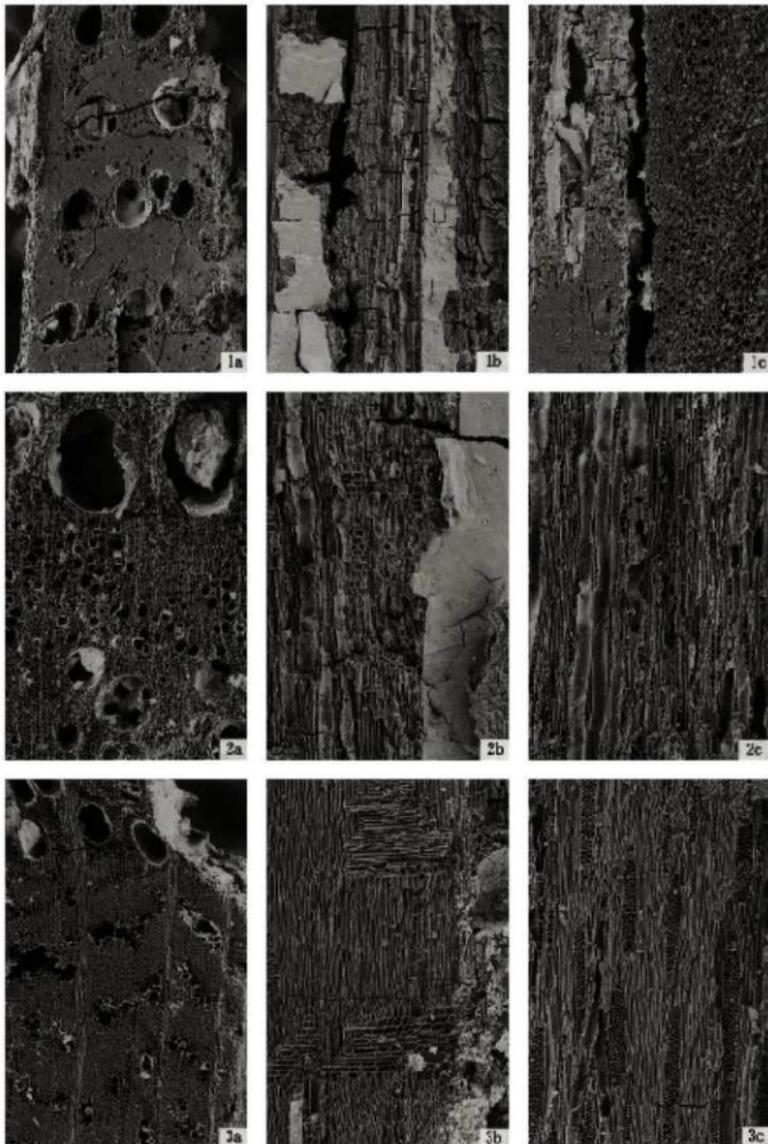
(4) 考察

今回検出されたイノシシは、阿部ほか(1994)によれば、常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、里山の二次林、低山帯と接する農耕地や平野に広く分布する。四肢が短いため雪に弱く、現在は東北地方や北陸地方には分布しないとされる(阿部1994)。しかし、東北地方の縄文時代の遺跡では普通にイノシシの遺存体が出土しており(山崎^註1998)、当時は東北地方にも分布していたことがうかがえる。本遺跡周辺の森林にも、イノシシが棲息していたと考えられる。

イノシシとニホンジカが縄文時代における主要な狩猟対象獣であったことは広く知られている。西本(1991)によれば、東北地方の縄文時代の遺跡ではニホンジカに対してイノシシの割合が低い傾向にある。このため、種不明とした中にはニホンジカが含まれる可能性がある。今回調査した試料がイノシシやニホンジカ等の中型獣であるとすれば、狩猟により捕獲し、食肉として利用したと推測される。SK124・SK232からは大型の土器が出土したため、墓跡の可能性が想定されていたが、検出された骨はヒトと確認できなかった。仮にヒトであったとしても、これらは焼骨の破片であり、量的にも全身骨格のごく一部であるため、墓跡とは考えにくい。共伴する土器の量も少ないため、日常的な廃棄土坑の可能性は低い。SK124からはオニグルミが検出され、土器や種実、獣骨を廃棄あるいは埋納した土坑と考えられる。もし、短期間で人為的に埋め戻されたことが明らかになれば、これらの土器と種実・獣骨は何らかの行為に使用した物の単位である可能性が生じる。

山崎ほか(1988)の集成によれば、福島県では縄文時代遺跡の動物遺存体の調査報告が36例登録され、そのうちの16(15遺跡)で焼骨が出土している。これらは本県中部～西部に所在する遺跡が多く、時期は縄文時代前期から晩期に渡る。したがって、本県の内陸部の縄文時代の遺跡では焼骨が出土する例が比較的多いことが考えられる。

本遺跡のような内陸部の遺跡において、焼獣骨が出土する事例は、他地域でも知られている。例えば、長野県円光房遺跡では、縄文時代前期後葉・中期末葉～後期初頭の土坑や住居跡から、多量の焼獣骨が出土している(金子1990)。これについて金子(1990)は、炉の整備の際に特定場所に焼骨を集積したものと考え、特にイノシシが多く出土した土坑では、何らかの祭祀的な行為が行われたと推察している。丹羽(1994)は、内陸部の縄文時代の遺跡から出土する焼骨について、同時期の貝塚遺跡における獣骨の出土状況との比較から、焼骨自体特殊な意味をもち、偶然的に焼骨となり残存したとは言い切れないという考えを述べている。これは、人々が意図的に獣骨を焼いたことを示唆していると捉えられる。これらのことから、本遺跡でも意図的に獣骨を焼く行為があった可能性がある。その場合、意図的にイノシシの骨が選択され焼かれたとすれば、先述の円光房遺跡において金子(1990)が指摘しているように、イノシシへの特別な配慮があった可能性もある。しかし、1遺跡からの出土量が少ないこと、焼失家屋に伴う廃棄物の可能性も否定できず、現段階ではこれらの焼骨の意味を特定することはできない。



図版1 炭化材

1. コナラ属コナラ垂属コナラ節 (FB.U01-002)

2. クリ (FB.U01-007)

3. ヤマグワ (FB.U01-005) a: 木口, b: 芯目, c: 板目

200 μ m; a

200 μ m; b, c



図版2 種実遺体

1. オニグルミ(破片)(FB.U01・019)
2. 不明堅果類(破片)(FB.U01・020)

1cm

引用文献

- 阿部水・石井信夫・金子之史・前田喜四郎・三浦慎吾・米田政明 1994 『日本の哺乳類』 P195 東海大学出版会
- 千野裕道 1983 『縄文時代のクリと集落周辺植生—南関東地方を中心に—』『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ』
- 金子浩昌 1990 「円光房遺跡における猿猴骨の調査」『円光房遺跡 長野県埴科郡戸倉更級地区県営ほ場整備事業に伴う頼田遺跡群円光房遺跡緊急発掘調査報告書』 P189~204 戸倉町教育委員会
- 加藤嘉太郎 1983 『家畜比較解剖図説上巻』 P290 養賢堂
- 西本豊弘 1991 『縄文時代のシカ・イノシシ狩猟』『古代』91 P114~132
- 丹羽百合子 1994 『解体・分配・調理』『縄文文化の研究2 生業(第2版)』 P103~121 雄山閣
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1999 『関川C・K・L・O遺跡出土炭化材・種実の樹種同定』『福島県文化財調査報告書第372集 福島空港公園遺跡発掘調査報告Ⅱ』 P239~248 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・福島県土木部
- 佐藤勝比古・鈴木隆康・中山雅弘・パリノ・サーヴェイ株式会社 1982 「大堀A遺跡出土の植物遺体」『いわき市教育文化事業団研究紀要』4 P1~20 (財)いわき市教育文化事業団
- Schmid, Elisabeth 1972 『Atlas Of Animal Bones』 P159 Elsevier Publishing Company.
- 橋倉巳三郎 1985 a 「荒小路遺跡出土の炭化木」『福島県文化財調査報告書第148集 同宮総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告19』 P242 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 橋倉巳三郎 1985 b 「岩下A・B・C遺跡から出土した炭化木」『福島県文化財調査報告書第150集 真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』 P291~295 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 志村勲 1984 「クリの生育特性」『農業技術体系 果実編5 クリ基礎編』 P11~16 社団法人山形県文化協会
- 辻 誠一郎 1997 「三内丸山を支えた生態系」岡田康博-NHK青森放送局編『縄文都市を掘る三内丸山から 原日本が見える』 P174~188 NHK出版
- 山崎京美・平口哲夫・高橋理・久保和士・富岡直人 1998 『遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究—平成7年度~9年度科学研究費補助金(基礎研究C2)研究成果報告書』 P290
- 渡辺誠 1975 『縄文時代の植物食』 P187 雄山閣

報告書抄録

ふりがな	あぶくまがわがんちくでいいせきはくつちょうきほうこく							
書名	阿武隈川右岸集落遺跡発掘調査報告							
副書名	高木・北ノ脇遺跡							
巻次	3							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第402集							
編著者名	安田 稔・大竹正浩・佐藤あかり・宮原禎夫・成田有策・大河原 勉・伊藤典子・大波紀子							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 〒960-8116 福島県福島市泰日町5-54 TEL. 024-534-9191							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8065 福島県福島市紗妻町2-16 TEL. 024-321-1111							
発行年月日	平成15年3月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	道庁番号					
高木	福島県安達郡 本宮町高木字 高木	07323	0087	36度 0分 1秒	139度 50分 6秒	19990412 ~20000726	11,150㎡	阿武隈川右岸 集落に伴う事 前調査
北ノ脇	福島県安達郡 本宮町高木字 北ノ脇	07323	0087	36度 0分 1秒	139度 50分 6秒	20000111 ~20000131	1,300㎡	同 上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高木	集落跡	縄文	竪穴住居跡 117軒 土坑 235基 屋外焼土遺構 8基 配石遺構 66基 土器埋設遺構 91基 照外ピット 16個 石器集中出土地点 遺物包含層	縄文土器 土製品 石器 石製品	阿武隈川の自然堤防に営まれた縄文時代中期後葉~後期前葉の集落跡。縄文時代後期前葉の集落は、竪穴住居跡を中心とした集落構成となる。 遺物も、縄文時代中期後葉~後期前葉を中心に出土しており、豊富な縄文土器の他に、土製品・石器・石製品なども認められる。			
北ノ脇	集落跡	縄文	上坑 遺物包含層	縄文土器 土製品 石器 石製品	遺跡名は違うものの、高木遺跡と同じ自然堤防に立地することから、北ノ脇遺跡は高木遺跡から続く、一連の集落跡と思われる。 遺構の密度は極めて低く、検出された遺構は上坑1基である。			

福島県文化財調査報告第402集

阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告 3

高木・北ノ脇遺跡
〔第2分冊〕

平成15年3月28日発行

編 集	財団法人 福島県文化振興事業団 (遺跡調査部)
発 行	福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉妻町 2-16
	財団法人 福島県文化振興事業団 (〒960-8116) 福島市春日町 5-54
	TEL 024-534-2733 FAX 024-536-3781
印 刷	国土交通省東北地方整備局福島工事事務所 (〒960-8584) 福島市黒岩塚平36
	㈸平電子印刷所 (〒970-8024) いわき市平北白土字西ノ内13

本報告書は中性紙を使用しています。

本文 書籍用紙 80kg

写真 アート紙 110kg